

ホロ学園の「俺」君物 語

零円

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホロ学園……。

そこは多くの特殊能力者がしのぎを削り、血で血を洗う異能力バトルを繰り広げる魔の学園……というわけではない普通のマンモス校。

この物語は、そこに通う誰かと、ホロメンとの交流が綴られる物語。

*pixivの方にも同タイトルで投稿しています。

*この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。

目次

解説

本編では語られないホロ学設定解説：

世界編 | 1

本編では語られないホロ学設定解説：

学園編 | 6

本編では語られないホロ学設定解説：

魔法編 | 9

番外編

生きた災禍と誰かは言った | 13

九割を当てた魔法使い | 23

またいつか | 34

エピソード・オブ・かなた e p. 01

退部

エピソード・オブ・かなた e p. 02

生徒会室 | 56

エピソード・オブ・かなた e p. 03

掃除風景 | 68

エピソード・オブ・かなた e p. 04

分岐点 | 80

エピソード・オブ・すこん部 e p. 1

再会 | 94

エピソード・オブ・すこん部 e p. 2

隠者 | 106

エピソード・オブ・すこん部 e p. 3

入部 | 118

死霊術	275
閑話のような時間	260
大異小同	249
世界が変わる	238
未知との遭遇	226
すべてが変わる前	213
第1節	
浜辺（の近くの歩道）の女神	175
浜辺（の海の家）の女神	187
浜辺（に来る前と後）の女神	203
やらかし	163
エピソード・オブ・るしあ e p . 1	
騎士団長との一日	129

夜を往く	286
悪戯猫のいる店	298
クラブ名はすこん部	313
持っている人	332
幽世	349
生徒会と桐生会	368
閑話のような1日	385
異世界との遭遇（4度目）	405
幻想談義	417
羝羊触藩	441
観光と遁走	451
大男と戦う	477
潜伏先にて	487

帰宅

503

おかえり

515

第2節（更新停止中）

REPLACE

527

魔法を語る

540

何事もなかった

551

洗礼

563

昨日の夜、今日の夜

575

閑話のような放課後

588

閑話のような埋め合わせ

601

閑話のような逢魔時

612

e x. 後輩の少年

625

依頼

638

依頼2

651

依頼3

663

依頼4

675

見落とし

684

確認

702

さくら神社

713

合間

724

e x. 魔法使いの日々

735

由来

747

由来2

761

襲撃

773

屋上

790

秘密

803

それぞれの放課後

817

第3節

少年は知らない

829

居候と幼馴染

843

朝の風景

855

置いてけぼり

865

夕方、駅前にて

878

SとS

893

3S

904

カバー保育園のやべーやつ

916

カバー保育園のやべーやつ2

928

転校初日、朝

941

転校初日、生徒会

954

転校初日、午前

973

転校初日、指導室

987

指導室、らうんどわん

998

指導室、らうんどつー

1008

指導室、らうんどすりー

1018

転校初日、保健室

1030

転校初日、シオン

1042

転校初日、すいせい

1055

転校初日、道中

1070

転校初日、???

1082

転校初日、異世界

1096

始まりの夜

1101

転校初日、午後

1123

解説

本編では語られないホロ学設定解説：世界編

前提として、本編にてノエフレの世界を異世界と語っていて紛らわしいので、俺君の住んでいる世界を世界A。そこ以外の世界を総じて『他世界』と称して説明します。尚、作中は俺君の一人称なので、異世界という単語がここでの他世界と同義として使われたり、ノエフレの世界の名前として使われたりするので気を付けてください。

・世界A

基本的に人間の世界で俺君の出身世界。科学は発達しているがその分超常能力とは無縁で、フィクションの産物と考えられている。そのため他世界から色々と流入しているのだが、気が付いていない。

・魔界

魔界という名前だがおどろおどろしい事は特になく、『魔物の世界』ではなく『魔法の世界』を略して魔界。魔法文化の発達の過程で、同一種族が複数の種族に分かれたり、あ

る魔法を極めた結果、別の種になったといった事が短いスペインでは数年、長いスペインでも数百年に一度起こっていたりするため、多種多様な種族が共存している。そのため、世界観に統一性が無く、石造りの街並みもあれば、深い森の中にツリーハウスを作って住んでいたりと、様々。

世界Aとは同一の財布に入っている別の小銭の様な関係。基本交わることは無いのだが、きちんとした技術があれば行き来は出来る。とはいえ世界Aにはその技術は無いので、基本的には魔界の民が勝手に来て、好き勝手にやって、勝手に帰っている。その勝手は魔界から渡れるようになった数百年前が最も酷く、悪魔祓いや魔女狩りなどが流行ったのが正にその時期。

その後、単純に世界Aが好きだったたり、好き勝手はしたいけど、やり過ぎるのは良くないよねという魔界の民が集まった組織により、事態は沈静化。現在に至っている。本編ではちよこ先がこの組織に在籍している設定であり、俺君の世話を焼くのは、この組織に在籍しているからというのも理由の一端。

・幽世

日の昇らない夜の世界であるそこは、魑魅魍魎百鬼夜行の跋扈する世界ではあるが、白上家を始めたとした十家の元で、基本問題なく生活している。

生活水準のレベルは江戸末期から明治の初めにかけてあたりだが、これは科学の流入を可能な限り遮断する為高い生活水準を求めていないのと、自分達が表側でもまだ馴染めていた頃への懐古の情からくるもの。

白上家の令嬢が科学の恩恵を受けてバリバリのゲーマーな事は、民草へは知られていない。

世界Aとは小銭の表と裏の関係。基本交わる事は無いがふとした拍子に行き来できる程度には近く、神隠しに会った際の行き先は大体此処。ちなみに、神隠しから戻ってくる確率は3割程。大半は死に、運が良ければ助けられる。救われたのち、そのまま定住する者もいるので、帰還率3割。

・異世界

最近流行の異世界転生などとほぼ同義で使われる意味での、異世界。剣と魔法のファンタジーワールド。

魔法と言っているが魔界の魔法とは別技術。世界A視点では区別がつかないのだが、一応同音異義語である。魔法についての詳しい説明は、第二回本編で語られない設定集にて。あるかは不明。

魔界同様に種族は多いのだが、森に隠れ住んだりしていない限りは、村ならあぜ道に

木製の家。首都など大きな街は欧米の建築様式近い石造りの町と、統一感はある。

大きな街ならインフラや下水道技術などは世界Aから持ち帰られた考え方を取り入れていて生活水準は低くないものの、皇族や貴族のような特権階級、あるいは選民思想的な考え方があるため、生活格差は大きい。

世界Aとは最も関係が遠く、別の財布に入っている小銭同士という関係。本来であればお互いに一切感じあう事は無く、触れ合うことも無かった。にもかかわらず、某ドラゴンが本気を出した結果、両方の財布に穴が開き、繋がったのである。どういふことなの。

最後に、『なんで魔界や幽世には名前があるのに、異世界には無いの？』がありそうなので解説。

結論から言うと、異世界に関しては『表現する言葉がそれ以外存在しない為』である。魔界については、かつて悪魔祓いや魔女狩りが流行った折、『このような者達が集う世界があるに違いない』という考えから『魔界』という名前が、世界Aにて付けられた。

幽世についても、神隠しから帰還した者などが、魑魅魍魎の世界を見たという発言があり、『そのような者達の集う世界があるのだらう』という考えの元、『幽世』という名前が同じく世界Aにて付けられた。

しかし、異世界については、世界A視点ではその存在があくまで想像上に過ぎず、現状でそう言った世界を実際に見たという者が居ないため、名付けられることが無かった。

更に、異世界。他世界を観測出来るようになったとはいえ、世界Aの探索プロジェクトは複数国家の合同プロジェクト。自分達の住む世界の名前より自国の名前の方が大事なので、そもそも世界の名前を考えようという発想は無かった。

本編では語られないホロ学設定解説：学園編

・ホロ学園

幼稚園、初等部、中等部、高等部、大学まで内部進学可能な私立学校。このうち、初等部、中等部、高等部の校舎は同一敷地内にあり、幼稚園、大学も敷地は違うが、そこまで離れていない。

生徒数は、ホロ学園全体では2000人近く。高等部だけでも見ても400人弱居るマンモス校。兎に角人が多い為、魔界や幽世出身者に隠れ蓑として使われてもいる為、人外率が実は高く、作中で

「こうしてみると、以外と人間って少ないことが分かる。いや、もしかしたらエルフ（仮）の方は人間である可能性はあるが。それでも、人間とそうでないもの半々位だ。ついこの間までの当たり前が、覆る」

という描写があつたが、実は他の場所ではそんな事ない。あくまでホロ学園近郊だから、である。

ちなみに、ホロ学園が正式名称である。ホロライブ学園の略称ではない。

・高等部

本編の舞台はこちらの高等部であり、学園在学中の主人公並びにホロメンは、全員高等部である。以下登場済みキャラの学年設定。

1年：赤井はあと、潤羽るしあ

2年：主人公、大空スバル、百鬼あやめ

3年：白上フブキ、大神ミオ、夏色まつり、天音かなた、桐生ココ

未登場ながら、他のホロメンも在学していたり、編入する予定。

学年のバランスが悪いのはそのせいであり、断じて作者が考え無しだったという訳では無いのであしからず。

・生徒会システム

生徒会長は、原則2年生が務める事になっている。理由として、生徒主体の自由な校風を謳うホロ学園においては生徒会の権限は大きく、その長である生徒会長はその分多忙。

そのため、受験などの控えている3年生にやらせるには酷なのではという話になり、生徒会長は2年生が務め、内部進学希望の3年生はそのまま生徒会に残り、生徒会長のサポートを行う、というのが通例である。

ただ、主人公がホロ学に入学した年は、2年生だった天音かなたが生徒会長に収まった方がいいものの、3年生全員外部進学希望だったため誰も残らなかった。今年の生徒会長は百鬼あやめ。天音かなたは内部進学希望の為、生徒会に籍を残している。

・簡単な時間軸

1年生の4月：エピソード・オブ・るしあ

1年生の6月：退部後、生徒会の手伝いを始める。天音かなた、百鬼あやめと出会う。すこん部に入部。白上フブキ、大神ミオと出会う。

(エピソード・オブ・かなた〜エピソード・オブ・すこん部)

2年生の4月：シオンと出会う(本編2話前半)

2年生の9月：大空スバルと出会う。(第1節開始)

魔界、幽世、異世界について知る。学外での交友関係が広がる。

2年生の10月：第2節〜第3節開始

本編では語られないホロ学設定解説：魔法編

前提として。

語り部の主人公自身が区別出来ない為、魔界での術と異世界での術のどちらも、魔法と称していますが、実際は違う技術体系。

その根底は術使用に当たって利用するものの差。主人公が使っているのは、当然というか、魔界側の魔法。

魔界ver

体内魔力を運用して行う術。

魔力というのは体内にて生成されるエネルギー。細胞内に魔力を発生させる器官と保存する器官が存在し、魔法使用時は、魔力が細胞外に排出され、それを操作している。保存器官内の魔力が減ると、それを補うために魔力を作ろうとエネルギーを使うので、魔力を使いすぎると疲れる。

使用に関しては魔界出身者なら等しく可能。周辺環境関係なしに魔法は使えるが、望んだ魔法を使えるかは術者の素養次第。

主人公について補足すると、本来、魔力を持たない主人公は魔法を使えないが、魔法による状態確認の際に、魔力を発生させることが出来ない異常が確認されたため、細胞単位で改造された。それだけ聞くと劇薬のようだが、魔界出身者に魔力生成の機能が無い事＝人体に血液が存在しないレベルの話の為、この作用は魔界では知られていなかった。

点眼直後の高熱はその解決手段を探索、実行しようとしている魔法に対しての体からのかすかな抵抗。ちよこ先と会った後三日間眠り続けたのは、治した目を完全に定着させる為に暫く魔法を維持する必要がある、その維持に必要な魔力を体から発生させる様にする為の改造期間である。

作中で語られた魔力の質（本編『夜を往く』参照）については、筋肉の質や体のばねと呼ばれる部分。

ちよこの言葉も間違えてはいないが、天性によるもの所もあり、潤羽家のような先祖代々特定の魔法が特に強いという家は、それなりに存在している。ただ訓練により、他の魔法等も習得自体は可能。実際作中で多く語られていないが、シオンは転送以外にも割と色々できる。（盤外：『九割を当てた魔法使い』で見せた飛行や攻撃などは本編でも出来る）

異世界 ver

異世界の外気に存在している魔素というものを操る術。

魔素のある場所では無限に使えるが、そうでない処では一切使えない。その為、主人公の居る世界では、基本的には異世界版の魔法は使えない。

例外は二つ。

一つは魔界 ver と同じく、体内に取り込んだ魔素を利用するやり方。異世界では基本不要の術だが、世界 A の探索にあたり、魔素が無い事に気が付いた異世界で、開発された技術一つ。これに合わせる形で、魔素を結晶化した薬剤も作られており、探索隊の一部はそれが支給されている。

もう一つはきんつばのような精霊。人間と違い、精霊には魔素を生み出す能力があるため、いかようにも魔法の利用が可能。きんつばが好き勝手に魔法を使えるのはその為。

因みに世界 A にて念話の魔法が滅茶苦茶大変なことについては、魔素が存在していないことが原因。

本来の念話は大気中の魔素を使ってやり取りするもののだが、それが無い為本来は通話出来ない所を、精霊サイドが自身の魔素でもって相手を発見、コンタクトを繋ぐこ

とで通話を実現している。その為、通話始めるにも時間がかかるし、通話音質もあまり良くない。要は態々電話線を持って相手方の家を探し、見つけたらそこに電話線を付けて元の場所に戻り、通話している、みたいな感じ。スマホの方が楽。

実は魔素があればだれでも使えるため、世界Aの人間が異世界にわたっても、教えて貰えれば使える。

番外編

生きた災禍と誰かは言つた

広場の中心に、たたずむ人影。

腕を組み、仁王立ちして。周囲を軽く見渡している。

夜も更け、明かりも少ない空間にもかかわらず、人影の主である桐生ココは、周囲の藪や木の陰に潜む者達の気配を、しっかりと捉えていた。

——全く。人間というのは。

放っておけば何もしないし起きないのに。なぜ態々藪をつつくのか、ココには理解できない。

まして、つついて出るのが蛇なら兎も角、今回出てくるのは竜であり、その事を理解している筈だから、尚更だ。

強者として生まれ、今日までそうあり続けたココではあるが、恐怖という感情は知っている。自分に対して大多数の者が向ける物。そして今、周囲に潜む者達が発している物が、まさにそれだ。

しかもこの者達は、恐怖はあれど、自分へ怒りや憎しみの様な感情を、向けていない。

なら、この者達は何故武器を取り、戦うのか。

脳裏を過るのはかつて、利己の為にココにとって許されざる者へと手を出し、怒りに触れた国。

よもや、それをまた繰り返そうとしているのか。

ざわりと、ココの雰囲気が変わる。

他者を圧倒する、存在感。闇夜にもかかわらず、我先にと、小動物達は地を駆け、空を飛ぶ。悲鳴のような動物達の鳴き声が、周囲に響く。

それが、ココにとっての正しい反応。動物とは、恐れを抱けば、逃げ出すもの。

だが、強者であるココは、故に恐怖を知っていても、正確に恐怖を抱くという事を知らない。

恐怖を抱いた生物は、当然本能として逃げ出す者が多いが、逆にその恐怖を認め無い者、恐怖の種を除いてしまおうと考える者も少なく。そういった者達の行いは――。

「テェー！」

等しく、攻撃という形で、世に出る。

誰かの合図を元に、複数の方向から、同時に矢が飛んできた。

ココは危なげなく、1本目を躲し、2本目を掴み。人間なら当たっていたであろう3本目を、人間は持たない尻尾を使い落とした。そのまま、掴んでいた矢を、3本目の発

射地点を目掛けて投げつける。投げた矢は藪へ消えたが、悲鳴は聞こえない。

面倒なのが居るかもしれないと、ココは考えたが、その程度。気に留め過ぎる事は無く、意識を空へと移した。

降りかかってくるのは、矢の雨。当たっても大した事は無いだろうが、当たってやる理由も無い。それに、今着ている服は、この世界で買ったお気に入りの服であるから、破かれるのも癪だった。

故に、翼を広げる。調整された服には穴があげられていて、そこから翼を出せるようにしてあった。

抵抗なく広がった翼に満足しながら、思い切り羽ばたく。その風圧だけで、矢の雨は薙ぎ払われる。

「この程度なら、楽なんですけどねー」

意識は地上へ。藪の方から、武器を携え、出てくる者達の姿。アーマーによって守られる場所や、纏っている着衣に多少の差異はあったが、共通してココが滅ぼした国の、隣国の国章が付いている。

ココの読み通り、暫く前に舎弟から、来ていると聞いていた者達だった。態々異世界まで追いかけてきたのかと、辟易するココに対し、周りの人間達は動く。

いの一歩にかけてきたのは、一番軽装の男。手持ちの武器はショートダガー。こんな

細い刃で何が出来たのかと思う、ココの鼻を突く異臭。毒の匂い。匂いの元は、男の持つショートダガーからだ。突き刺さんと振り下ろされたダガーを持つ手を弾く。それだけで、男の腕は、凡そ曲がりえない場所から、くの字に曲がる。

男が悲鳴を上げるより早く、腹部を殴りつけた。腕だけでなく全身でくの字を作り、飛んでいく。

次いで2人、背後から奇襲。合わせるように、正面から矢が飛んでくる。顔を逸らし、矢を躲しながら、後ろの2人は尻尾の一薙ぎによって、蹴散らす。

4人目の女が横合いから切りかかってきた。腕で受け止めようと動き、服の存在を思い出して辞め、下がり躲す。

ココとその女の目が合う。その目から感じる感情を読み解けば、やはり宿っているのは恐怖で間違いない。

やはりどういふつもりなのか、分からない。頭部を思い切り掴んで振り回し、タイムングよく来ていた5人目に当てる纏めて処理する。

6人、7人、8人と、続けざまに来る者達も、躲し、掴み、投げる。四方からくる者達を、来た順に処理していき。9人目に8人目を投げつけながら、10人目に意識を向ける。

10人目の男が最も厄介そうだった。纏う鎧や服装こそ普通だが、その手に持つ剣に

独特の存在感がある。魔剣、聖剣等と称される、突然変異の特殊な武器。ココにも覚えがあった。近づかれるにつれ、その存在感に僅かに気を取られる。

だからこそ、8人目を躲した9人目の攻撃に、反応が遅れた。

「はあー！」

気が付いた瞬間、真後ろからの強襲。

攻撃が来るより早く反撃するのは、最早手遅れ。躲すのにも、10人目の攻撃を前に、体勢を崩すのは、聊か危険が伴う。

仕方なく、攻撃を尻尾で受け止めながら、10人目に対応しようと考えた——その直後。

「ッ」

尻尾に衝撃を受け、叩き落される。

尻尾が地面に叩きつけられようと痛みは無いが、意図せぬ尻尾の動きに、体勢が崩れ、それ以上に思考が止まった。

何をされたのかが分からない。よもや、竜である自分が、人間の姿を取っているとはいえ、人間に力負けしたとでもいうのか。理解出来ぬまま、しかし体を動かす。

翼を広げ、羽ばたき後退。前方から迫る10人目から距離を取る。

9人目と思しき誰かが背中に当たるのを感じ、その反動を利用して上空へ逃げ出そう

とした矢先、僅かに上昇したところで、翼に痛みを覚え、止まってしまふ。見れば、翼に等間隔で矢が刺さっていた。羽ばたきに合わせた、的確な射撃。

だが、驚きは此処で終わらない。尻尾に感触。ココが見下ろせば、尻尾を掴んでいるのは女騎士——白銀ノエル。

「えーいー！」

戦場とは聊か不釣り合いな、独特な、少々間延びした声とともに、ノエルはココを引きずり落とす。

背中に衝撃。肺から空気が吐き出される。

「もう一回！」

「いの」

引き上げられようとするより早く、尻尾に力を籠め、ノエルの拘束から抜ける。

視線を動かせば、迫る10人目。素早く息を吸い——放ったそれは、と呼ばれる、竜種特有のエネルギー波。それを受けそうになった10人目とノエルは、その場を退く。

2人が離れたのを見てから、ココは立ち上がった。放った竜の息吹の余波を受け、纏っていた服はボロボロだ。

苛立ちを覚えながら、翼に刺さった矢を抜く。観察すれば、3本とも人間の使う矢とは違い、金属製の鏃がではなく、骨を削って作られた鏃が付けられていた。

思い出すのはエルフと呼ばれる、耳長の狩猟民族。狩りの道具として弓矢を好んで使う彼らは、その鎌を狩った獲物の骨より作っていた。

羽ばたく翼にピンポイントに同時に放ったのであろう3本の矢を命中させるその力量も合わせて考えれば、凡そその考えで間違えてはいないだろう。

——少し、面倒ですね。

溜息をつきながら、翼を閉じつつ、動く。振り下ろされた、メイスを躲す。

メイスが風を切る音が凄まじい。人間に此処までの力があるのかと、感心するレベル。

回避した先目掛け、振り上げられるメイスを、更に下がって躲す。

下がった先に、10人目による剣の一撃。分かつていた以上、ココのが早く、振り下ろされるよりも先に、ココの尻尾が、10人目を薙ぎ払った。

それを見たノエルが動く。ノエルの顔の傍らを抜け、矢も飛来した。

届くより早く、ため込んだ力をもって翼を広げる。

暴風が、吹き荒れた。

ノエルの足が止まる。エルフの技術をもってしても、対象を射抜けぬ程の驚異的な風。

竜の息吹でもない。ココが少し本気で動いたその一動作は、瞬時に空間を掌握し。

その間に、ココは高く、高く、矢も届かぬ空中へと飛び上がった。

このまま立ち去る事も出来るが、それは竜としての誇りが許さない。立ち去るにしても、圧倒的力を見せ、二度と反抗しようと思わぬよう、心を叩き折るために。

ココは、人間に化ける術を解いた。

徐々に体が巨大化する。纏っていた服は破れ、その体を鱗が覆う。顔は爬虫類それへ。両手足には鋭い爪が。生えていた翼や尻尾、角も、巨大化に合わせて相応に伸びていき。やがて、その姿を完全に竜へと変えた。

地上からこちらを見上げる姿が見える。

一本だけ、矢も飛んできた。驚くべきことに、その矢はココの体に届き、しかし鱗に弾かれる。

僅かに、ココの口が開く。隙間から、光の片鱗が見えた。

そこから深く深く、息を吸い。

放たれた物は、先程使った竜の息吹と同一とは思えないほどの、光の奔流。その光が、ココのいた広場を中心に、周囲へ広がる。

離れていても、分かる衝撃。抑えたつもりだが、やり過ぎただろうかと思いいながら、ココは徐々に光を治める。

やがてその光が無くなった後の光景を見て、思わず感嘆の声を上げた。

「……ほー」

直撃した広場は当然の事、その周囲も灰燼に帰され、クレーターと化していた。

その中央部には、それでも動く者が居る。

ノエルと、庇う様にノエルを抱くエルフ——不知火フレア。そして、その二人の前で、ココに向かつて小さな体を広げていたのは、精霊——きんつば。

成程、精霊が居たのかと、ココは納得する。感じていた射手の数に対し、最初の矢の雨は明らかに多かつたし、自分のいる高さまで矢を届かせるのも無理だったはずだが、精霊が魔法によるサポートをしていたのなら、理解出来る。

だが、それもここまで。

竜の息吹を魔法によって防いだようだが、それによりきんつばは満身創痍。きんつばに守られた筈のノエルとフレアも、それは同じ。防御越しの余波を受けただけで、2人の域は絶え絶えであった。

決着はついた。他の騎士達も、息こそあるようだが、戦える状態ではない。それでも、手を出そうとは思わないだろう。

戦いは終わったと、少し気を抜いた。

だからこそ、ココは自分の顔の横に現れた、見慣れぬ物への反応が遅れた。

幾何学模様によって構成された何か。紫色に発行するそれが、果たして何なのか。

考えが及ぶよりも先に、何か飛び出して来る。

矢よりも早く飛来したそれは、稲妻の様な光を伴って、ココの顔へと突き刺さり、蹴り飛ばした。

飛ばたき、姿勢を整える。

ココが見れば、それは人間の少女であった。

傾いたらしい三角帽子を直すと、腕を組み、あろうことかココと同じ高さに滞空したまま、トパーズの様な不思議な色の瞳を輝かせ、言う。

「煩い。近所迷惑」

九割を当てた魔法使い

「シオン。飯出来たぞー」

夕飯時。食事を作り終えた家主の少年が、縁側に座る紫咲シオンを呼ぶ。

呼ばれたシオンは、しかし反応を見せない。どうしたのかと、少年が近づくと、

「どうした、シオン。飯だぞ?」

「……風が騒がしいわね」

「本当にどうした」

熱でもあるのかもと考え、シオンの額に触れようとする少年。

しかし、それより早く、シオンは立ち上がった。少年の脇を抜け、家の中に入ると、少年を手招きする。

訳の分からぬまま、少年はそれに従う。家に入り、シオンの元へ向かうと、ソファへと座らされる。

「シオン。本当にどうした?」

「ちよつと出かけてくる」

「え? 飯は?」

「帰ってきてから食べる」

有無言わせぬ口調に、こくこくと、少年は首を縦に振る。

それを確認してから、シオンはこの世界での保護者代わりでもある癒月ちよこへと一報入れると、

「全く。どこの誰だか知んないけど、近所迷惑だつての」

そう言いながら、リビングの戸を開けた。指を鳴らすと、玄関口に展開される幾何学模様によつて構成された魔法陣。

シオンは両手足首を解すと、勢いよく床を蹴った。

直後、玄関に置かれていた靴が飛んだ。ポールハンガーにかけられた帽子も、靴に負けるかとはかりに飛ぶ。

飛んだそれらは、廊下を疾走するシオンへと自ら集まり、それぞれの定位置へ納まる。

数秒で出掛ける支度を整えたシオンは、玄関の縁へと足をかけ、そこを勢い良く蹴り、魔法陣へと入っていった。

「煩い。近所迷惑」

シオンの言葉に反応するように、ココが動く。

一撃与えんと尻尾を振るうが、シオンはそれを上昇して回避。ココもそれを追つて、

上昇する。

上昇しながら、下を確認。追いかけてくるココを見て、シオンは自身の魔力を練った。練り上げた魔力を放出し、空中で成形。瞬く間に行われたそれにより、作り出されたのはバスケットボール大の、魔力の球が計5つ。

動きを止め、下を向く。迫る此処へ、銃のような形にした、右手を向ける。

「びん」

声とともに、5つの魔力球が放たれた。

弾丸程の速度で、ココへと向かう魔力球。それを前に、ココは先に降りかかった矢の雨同様、羽ばたきによる風圧での迎撃を実行するが、その軌道は逸らせない。

忌々しそうに歯噛みするココは、迎撃を諦め、回避に移行する。

試しに1つ、この身に魔力球を受けてみる事も考えたが、それを実行するには、シオンの存在は異質であった。一撃で落とされるとは勿論思っていないが、試してみるには、聊かりスクが大きい。

竜種の巨大な体を支える強靱な筋力と、魔法による身体能力向上を伴った羽ばたきをもつてすれば、その慣性をもつて、羽ばたかずとも暫しの上昇は可能であることを利用して。一際強く羽ばたいたココは、翼を閉じ、体を小さくして、魔力球の間を縫って進む。

進行上のシオンが、その光景に僅かに驚きの表情を見せる中。

魔力球を抜けたココは、翼を広げて体を固定。力を籠め、竜の息吹を放った。先程使った時より、幾何か威力は落ちるが、それでも個人に使うには過剰な高火力。

迫る光。力の奔流。シオンは、静かにそれを見て、見極める。

防げるか。逸らせるか。自身の使える魔法を思い起こし、想像し、辞める。

魔力を練り、放出。魔法陣を形成し、その中へと消える。

直後、息吹を吹くココの鼻の上へと降り立つ。そこを足場に、加速。ココの眉間へと、拳を叩きつけた。

「硬っ」

驚きの声を上げたのは、シオンだった。魔法で保護したにもかかわらず、痛みの走った手を、パタパタ扇ぎながら、八つ当たりとばかりにココを蹴りつける。

2つの衝撃に息吹が止まるのを感じつつ、追撃を防ぐ為に、ココは体を回転させ、シオンを弾く。

「おっと」

弾かれたシオンは、暫く飛ばされた後、空中で制動。浮遊し止まる。帽子の感触が無い事に気が付き、周囲を見渡して、落下してくる帽子を見つけた。すかさず魔法陣を展開して、そこに手をつ込み、帽子を掴み、引き寄せる。

帽子の埃を落とし、かぶり直すシオンを見ながら、ココは相変わらず理解しきれぬ魔法使いを分析する。

息吹に対する手段や今の光景を見るに、転送魔法を個人単位で自由に使えることは分かる。しかも、転送場所に吐き出されている息吹の直上を選んだ当たり、かなりの自信も伺えた。

あの速度で転送魔法を発動し、自在に飛び回れるのなら、足を止めて、広範囲を焼き尽くす息吹は相性が悪い。威力は下がるが、移動しながら撃て、連射と加速に優れた必要があった。

先程シオンが魔力を練って、空中で球を形成したように。息吹を放たず、固め。

「んっ。」

放つ。

「ちよつとっ！」

慌ててシオンが動いた。直後、寸前までシオンのいた場所を、球形になった息吹が飛んでいく。

余波を受け、シオンの姿勢が崩れる。

シオンの視線の先では、ココが2発、3発と放つ追撃の球形の息吹。

組んでいた転送魔法を発動させる。

ただ、魔法発動直前に指定する転送先の座標は、緊急発動の為、細かく指定することが叶なかった。

仕方なくログに残っていた、先程の帽子を拾った際に掴んだ座標への魔法陣を作成。そのまま魔法陣を抜ける。

出た先で、一度態勢を整える——つもりでいたが。

ココの顔は既にシオンの方へと向いていて、既に息吹は放たれていた。

「なんっ」

で、と、言葉は最後まで出ず。

腕を十字に構え、防御魔法を出しうる限りの力を使って張るシオン。

衝撃。防いだ息吹は、シオンの目の前で輝きを増す。

「いやいやいや」

防御魔法越しに感じたエネルギーを前に、シオンは慌てて周囲を見渡し、見つける。

直後、爆発した。周囲を、閃光が包む。

地上から、その光景を眺めていたフレアとノエルは、その光量に、目が眩んだ。

思わず目を閉じる。それ故、正面からの衝撃に、反応が遅れた。

ドンと、何かがぶつかり、2人はその場に倒れる。

背中をぶつけながら、何事かと確認するべく、薄めを開ければ、フレアの目に、自分

達の上で倒れているシオンが見えた。

そして、周辺を紫色に発光する壁が覆っている。その壁が、光量と、爆発の衝撃を抑えている事が分かった。

視線を下げれば、シオンが体を起こしているところだった。

パツパツつと、体に着いた埃を落とすシオン。

多少傷を負っているようだったが、その目に揺らぎは無い。

一通り、埃を落としてから、シオンは魔法陣を再度展開。手を突っ込み、引き抜くと、その手には厚手の本が一冊、握られている。

「さすがにこれしか持ってきてないんだけど」

言うや否や、本が勝手に開いた。それに合わせ、シオンの雰囲気が変わる。

ぞくりと、フレアの肝が冷える。

気づけば、周囲を覆っていた、壁が消えていた。

空の爆発も治まっていて、ココがゆっくりと降りてきている所。

ズシンと、音を立て、ココが地面へと降り立つ。

歯を剥き威嚇するココ。その口からは、息吹と同色の光が漏れ。

わずかに足を動かし、腰を落とすシオン。その手に持つ本は、バチバチと音を立て、雷のように明滅する光をまとう。

一触即発の空気が、周囲を覆う。

♪

「……………」

不釣り合いな軽快な音楽が2つ。あたりに響いた。

フレアとノエルが、目を合わせ、それぞれの音源へと目を向ける。

音源の1つであるシオンが、本を閉じた。スカートのポケットをあさりだし、取り出したるはスマートフォン。

タップと操作して、耳に当てる。

「何？ いい所なんだけど？ ……え？ 帰る時間？ えつと……あんまり遅くならな

いと思うけど。買い物？ 面倒くさい」

そのまま話し始めた。

一方。もう1つの音源であったのは、ココであった。

光に包まれ、人間の姿に戻る。先程、竜の姿に戻った際に破けた服は、元通りになっ
ていて。

ココはシオンと同じくポケットを漁ると、やはりスマートフォンを取り出し、操作し
て、耳に当てた。

「もしもし？ あー、かなたん？ 今忙し……あ、いえ。何でも無いです。今から帰ろう

と思つてた所だつて。ほんとほんと」

通話を辞めたのは、ほぼ同時。

それぞれのスマートフォンを、ポケットにしまうのもほぼ同時。

「……あー、このくらいで見逃してあげるわ」

「き、奇遇ですね。私もそうしてあげようと、思っていたところなんですよ」

「……言つとくけど、今度またこの辺で暴れようものなら、容赦しないからね」

「今度、戦う時は決着つけて、あげますね」

そう言つとココは翼を広げ、飛び去る。

その背を見送り、シオンの視線はフレアとノエルの方へ向いた。

「あんた達も。この辺……いや。この街で騒がしくないですよ」

「あ、はい」

「分かりました」

こくこくと、首を縦に振る2人を見て、シオンは振り返ると、足元に魔法陣を形成。

そこに飛び込み、同じく姿を消す。

「……私達も行くのか」

「そうだね」

「そういえば、街の近くに、おっきいクレーターが出来たよね」

「そうですね。朝からヘリが凄く飛んでましたし、ニュースもその話題ばかり」

放課後の生徒会室。

少年と天音かなた、そして生徒会長である百鬼あやめが、作業をこなしながら談笑していた。

「宇宙説とか核実験説とか、色々出てたよね」

「なんかドラゴンを見たとか、女の子を見たとか、そんな目撃情報もあるっぽいんですけど」

「……」

竜や、それと戦える女の子と言われ、心当たりしかない2人は、この話題辞めどころかなと、話題を変えようとする。

しかし、それより早く、「あれは」とあやめが口を開いた。

「なんかこう、凄いのが戦った跡だな。余、詳しいんだ」

「……ソウナンデスカー」

「ビツクリダナー」

「……なんか片言だな？」

「ソナナコトナイデス」

どや顔をしていたあやめは、不思議そうに首を傾げながらも、まあいいかと、話を続ける。

「まあ、余には劣るけどね」

「そうなんですか？」

「これでもバリバリの武闘派だったからな」

「……」

想像出来ず、かなたと少年は同時に首を傾げる。

その姿に、おいおいとあやめ。

「しようがない。これは極秘なんだけど、話してやろう。余の超かっこいい戦いの歴史を」

「……楽しみだなー（ココに遅くなるって連絡しとかなきや）」

「……わくわく（シオンに遅くなるって連絡しないと）」

またいつか

久しぶりに寝過ごした。

いつも起きる時間より、1時間もずれていた。

当然1時限目は間に合わず、それでもまあ、学校には行った方がいいかなと思ひ、俺はしつかりと朝食をとってから、家を出た。

2時限目には間に合うから、まあそれに合わせればいいかとそんなことを思いながら、学校への道を歩く。

普段は生徒に溢れる通学路も、時間がずれば人もいない。

寝坊の負い目を感じながらも、誰も居ない通学路へは特別感を覚える。

柄にもなくポケットへ手を入れて、スキップまではいかずとも少し跳ねるように歩いていると。

「あ」

「お」

桐生先輩と、鉢合わせた。

今日は学校のはずなのだが、桐生先輩の服装は制服ではなく私服。

どう見ても、学校に向かうようには見えない。

「おはようございませす、桐生先輩」

「おつす、舎弟。なんだ、遅刻かー?」

「そういう桐生先輩は……なんで私服何ですか?」

「ん? あー、ちよつと用事があつて、今日は休みなんだよ」

「用事で」

学生の身の上で通学以上に優先される用事つて何だろう。

尋ねようかと、思つた矢先。

「ちようどいいからお前も付き合え」

「え?」

がつしり襟首を掴まれた。そのまま引きずられ、学校とは別方向へと向かいだす。

「ち、ちよつと。桐生先輩! 俺、学校に行くところなんですけど」

「いいからいいから。1日くらい休んだつて罰は当たらないつて」

「罰は当たらないつても皆勤賞逃すじゃないですかー!」

ジタバタもがくが、どこ吹く風。

ドラゴンの力は遺憾なく発揮され、俺の体はどんどん学校から離れていく。

「あ、あー」

「そんな声出してても無駄だぞー」

情けない声で同情を引く作戦も無に帰し、桐生先輩はずんずんと進んでいく。

そこまで来ると、流石に諦めもついて、「桐生先輩」と俺は声をかけた。

「自分で歩くので、話して貰えないでしょうか」

「……逃げんなよおめー」

「逃げませんて」

事態は正直把握できていないが。

それでも、今日は桐生先輩に一日付き合おうと決めた。

手が離され、軽く制服を整えようとして。

流石にこの格好だと補導される可能性を考え、俺は上着を脱ぎ、シャツの襟だけ整える。

「それで、先輩。何処に行くんですか？」

「決まってない。適当に歩く。ついてこい、舎弟」

「はーい」

歩き出す桐生先輩に追いつき、その隣をついて歩きだした。

暫く歩いていると、桐生先輩の言葉に嘘は無い事が分かった。本当に目的は無いよう
だ。

適当に店を冷やかしながら、ぶらぶらと、街の中を歩く。

遠出するつもりは無いようで、駅の近くまではいったものの、電車に乗ることは無く。途中、昼食をとるのにファミレスへ入った時以外は、歩きっぱなし。

ああ、まるで。

「なんか、懐かしいですね」

「懐かしい？」

「いえ、初めて会った時もこんな感じでしたから」

「おい、お前。そこのお前だ。無視してんじゃねーよ」

「……………」

言葉につられ、振り返れば。

その人と目が合った。

オレンジの髪、赤い瞳の先輩。自分よりもたっぱがあるのが羨ましいなど、そんな事を思う。

「俺ですか？」

「そーだよ。お前以外、誰がいるってんだよ」

「……………まあ、確かに」

周囲を見渡しても、俺以外には誰も居ない。

俺と、名も知らぬ先輩だけが、授業中であるはずのホロ学園の廊下に居た。そう、授業中である。

「えつと、先輩。なんで授業中に廊下に居るんですか？」

「そんなもん……遅刻したからに決まってんだろうがよ」

「……奇遇ですね」

俺も丁度寝坊して、1限目も20分程経った今、学校に着いた所であった。

「じゃあ、自分は教室に行くのでこれで」

「まあ待て」

立ち去ろうとした俺の襟首を、先輩にがしりと捕まれる。

無視して進もうとしたが、掴まれた体はびくともしない。

怪力と名高い天音先輩並みの力があるのではないだろうか。

「あの、離して貰えないでしょうか？」

「嫌ですねー」

断られた。

「いいから付き合え、後輩。舎弟にしてやつから」

「遠慮しておきます」

「よし行くぞー」

「あー」

掴まれたまま引きずられるようにして、俺は先輩と移動を開始した。てつきり学校から抜け出すのかと思ったが、そんなことは無く。

暫し移動し体育倉庫についた。

解放される。制服を整えていると、「よし」と桐生先輩。

「電源探せ、電源」

「電源？」

「コンセントだよ」

そう言って、先輩は何やら物をどけたりして、壁際を探し出す。

何だろう急にも思いつながら、しかし逃げたときのリスクを考えた俺は、大人しく先輩に従いコンセントを探した。

暫し搜索。やがて、コンセントを発見すると、先輩は次の場所への移動を開始した。素直についていく。完全に舎弟だった。

それからも先輩は人目につかなそうな場所を、順繰りに回り、コンセントの場所を確認していく。

「おい、お前らー！」

「あ、やべ。逃げるぞ舎弟ー」

「押忍」

たまに見つかった教師から逃げながら、共に搜索。

登校したのに授業は全部さぼり、1日かけて、学校中をくまなく点検した。

結果的に室内だと割とコンセンとはあったのだが、やはり室外だと中々見つからない。

「これはコードリールも必要ですかねー」

「コードリールなら、使っていないのが家にありますけど」

「お。じゃあ、それ私的な」

「えー」

何がどういう理屈でそうなるのか。まあ、使っていないからいいけど。

それじゃあ、後はーと、何かを指折り数えだす先輩を見ながら。

楽しかったから、またこの人と遊べたらいいなと思った。

「あの、先輩」

「ん？」

「……舎弟として、仁義を切らせてもらって宜しいでしょうか？」

「お。いいだろう」

「……では」

昨日見た時代劇の身よ見まねで構えを取る。

「失礼ですが、お控えなすつて——」

「あー。懐かしいですねー。あのぎこちない挨拶」

「やめてください」

若気の至りだ。

「でもまあまあ様になってたぞ、舎弟」

「……どーも」

そう言ってもらえるなら、やった甲斐は、多分あった。

「ていうか、聞こうと思ってたんですけど、なんであの時、俺に声をかけたんですか？」

「ん？ 暇そうだったから」

「いや。授業に行こうとしてましたけど」

「それにかなたんから、お前の事、聞いてたからなー」

「天音先輩から？」

「困つてるときに頼めば役に立つって」

「言い方」

便利屋扱いだ。

ジト目を向けた俺に、桐生先輩はけらけらと笑う。

「楽しかったんだからいいだろ」

「……まあ、そうですね。あの後、先生に俺だけ怒られたのは、まだ納得してないですからね」

「……」

「目をそらすな」

あの後、仁義を切った直後に先生に見つかり、俺だけ捕縛されたのだ。

一緒に逃げていたのはだれか聞かれたのだが、流石に仁義を切った直後だったから、黙っていたのである。

まあ、先生も誰かは分かっていた様子ではあったが。ここは俺の熱意に免じて貰って、お叱りを受けるのは俺一人で済ませた。

そこで終われば、ギリギリ美談かもしれないのだが、翌日。

桐生先輩が俺に向けたひと言が「ご苦労」だったので、売ればよかったと思ってしまった。

「いやー、ご苦労でしたね、舎弟」

「変わらないっすね」

「当たり前でしょうがー。舎弟の分際で、この桐生ココを変えられると、思うな」
「すみません」

流石にこうも断言されると、負けを認めてしまう。

桐生先輩はずつとこんな感じなんだろうなあと思うと、ちよつと嬉しくなった。
桐生先輩がこのままなら、いつまでも一緒に遊んで楽しいはまだ。

学校をさぼるのはあれだが、それでもこの人と一緒なら、たまにはいいかと思う。
「それで、次はどこに行くんですか？ 付き合いますよ」

「……あー、そうっすねー」

びたりと、桐生先輩が足を止めた。

つられて、足を止める。

T字路。右と左に、道が分かれる。

「舎弟。お前はここまでだ」

「はい？」

「解散だつて言つたんだよ。私、こつち行くから、ついてくるなよ」

そう言つて、桐生先輩が右へ曲がる。

ついていこうとした矢先、鼻先へ尻尾が突き付けられた。

思わず足を止める。その間にも、桐生先輩はずんずんと道を進んでいた。

「……先輩！」

「なんだ、舎弟」

声をかければ。桐生先輩は足を止めた。

振り向いてはくれない。その背中へ、声をかける。

「明日、久しぶりに放送しませんか？ 付き合いますよ」

「あー……それもいいな」

「じゃあ、約束ですからね！」

「……」

俺の言葉に答えは無く。

それでも振り返った桐生先輩は、にやりと笑い。

俺に向かって暫し手に振ってから、踵を返し、歩き出した。

その背中を、見えなくなるまで見送る。

別れの言葉は、かけなかった。

エピソード・オブ・かなた e p. 01 退部

これは、ホロ学園入学から、2ヶ月程経った頃の話。

放課後の生徒指導室で、俺は難しい顔をする担任の先生と向き合っていた。

とはいえ、難しい顔をしているのは先生だけ。俺といえば、何故呼び出しを受けたのか分からず、疑問符を浮かべていた。

少なくともこの2ヶ月、怒られるような事をした記憶はない。

無遅刻無欠席、授業態度も普通で、加入が推奨されている部活動も、入り忘れたという事は無く、寧ろ精力的に活動しているつもりである。

「えっと、何で呼び出されたのでしょうか？」

俺が呼び出され、生徒指導室に来てから5分程。

無言を貫く先生に見かね、尋ねる。今日も、この後部活があるから、話があるなら早くしてほしい。

「……………」の後、部活？」

「え？…はい、そうですけど」

妙な事を聞く先生に、頷き返す。

「今日は、何部?」

「今日はサッカー部と囲碁将棋部とサバゲ部とボクシング部と図書部ですね」

図書部とは名ばかりで、百人一首かるたばかりしているから実質百人一首部である。

「……多過ぎない? 各部1時間ずつ振ったとしても5時間。完全下校時刻過ぎるけど」

「なので囲碁将棋部と図書部は同時にこなしていますね。部室は隣同士ですから」

「私は詳しくないけど、その2つって同時並行で出来る物なの?」

「いえ。専ら使っていない石や駒を磨いたり、詰将棋やら詰碁したり、呼ばれたらかるたの読み手をしているくらいです」

入学して3ヶ月経つが、未だに真面目な対局をしたり、札を取ったりした記憶はない。

囲碁や将棋は駒の動かし方とか石を置くルールくらいは覚えているが定石は知らないし、囲碁に関しては勝敗の決め方も良く分からない。かるたについては百人一首をとりあえず覚えたが、具体的な札を取る技術とかは知らない。

本当はやってみたいけど、対局の最中に他の部に急に呼ばれて戻れないなどが多々あって、気付けば遠のいていた。囲碁将棋は磨く専門、図書部も急に居なくなるなら取り手より読み手の方がマシという事で、読み手専任になった。

ぶつちやけ、他の部も似たような感じ。道具の手入れが殆ど。ボクシングだけ筋トレ

もしている。

「……君、毎日部活梯子しているでしょ」

「ええ、まあ」

平均で4つ程度の部活に、毎日参加している。

流石生徒数が兎に角多いホロ学だけあって、部活も多い。

「そのことで、少し抗議があつたの」

「抗議ですか？ 週1で文句も言わずに延々備品整備をする透明人間の存在に？」

「人は自分が思っているより周りの視線を集めていて、思っているより悪く思われている事を自覚しておきなさい」

そんな事を言いながら、先生はばさりとA4用紙の束を置いた。

何だろうかと思ひ、手を伸ばす。特に止められることなく、俺はその紙面を手に取りれた。

1枚ずつ、目を通す。内容は、嘆願書と題されてはいるが、内容は確かに抗議文だった。入部している殆どの部活から。今日行く予定だったサッカー部もある。

色々と言葉を変えて書かれてはいるが、1つの言葉に纏めると、やる気が無いなら邪魔だから辞めてほしいとの事。

「成程」

「どうするっ？」

「……」

答えに窮する。言われてみれば、確かにふらりときて掃除だけして帰るといのは、やる気が無いように見えても仕方がないとは、思う。

「部活動には入部してればいいってものじゃない。修練の為とか郊外活動の為とか、理屈は色々あるかもしれないけど、一番重要なのは、貴方がそれをやりたいかどうか」

「……」

「君が今、入部している部活の中に、君のやりたい事はある？」

その言葉に、入部していた部活全ての、23枚の退部届で俺が答えたのは、数時間程前。

時刻は22時。あの後直ぐに帰宅して、夕飯食べて、筋トレして、風呂に入って。

「あー」

寝支度を終え、自宅のソファーに仰向けで横たわる。

一人きりの家であるから、どれだけだれても文句は言われないのを良い事に、俺は肘掛けを枕代わりに、風呂上りのアイスを食べていた。

「失敗したなあ」

大量の兼部は、今まで何もやらなかったから好きな事もやりたい事も無いから、色々

とやってみて、遣りたい事を探す為だった。

しかし、その結果、何もやれていなかったのは本末転倒だと、我ながら思う。

それに、抗議文だって、出す側としては気持ちいい物では無かった筈だ。部活に迷惑をかけてしまった事は反省しなければならぬ。

ただ、今更ながら、全退部はやりすぎだっただろうかと、若干後悔。1個か2個くらい、残せば良かったかもしれない。やっていればもしかしたら、やりたい事になったかもしれないし、小中高大一貫校のホロ学に置いて、中途で入った自分が知人友人を増やそうと思ったら、部活動が一番分かりやすいから、と言うのも兼部の理由であったわけで。その目的が果たせたのかと言えると、それも怪しい。

……とはいえ、入り直したいと思える部活は無い。残念ながら、大量兼部の末、どの部活も基本的に清掃と手入れしかしてこなかった俺にとって、どの部活も大差無い。

「どうしようかなあ」

元々部活は推奨されているだけで、自由参加だ。要は入らなくても問題無い。

とはいえ、折角だから、何かやりたいという気持ちもある。

「……まあいいか」

明日考えよう。

立ち上がり、リビングのゴミ箱へ食べきったアイスの棒を捨てて、電気を消すと、俺

はそのままソファ―に横になった。

翌日は比較的いつも通りだったのだが、翌々日に違和感を覚え、1週間もすれば確信に変わった。どうも学校で浮き気味になっていた。

内緒話を盗み聞くに、俺宛に大量の抗議文が届いた事と、俺が所属していた部活を全て退部した事が噂になっていくらしい。

事情が部分的に露見しているらしく、詰まる話、俺の部活態度が悪く、退部させられたという形で広まっているらしい。あながち間違えても居ないのだけど。首切りか、自主退部だったかの違いしかない。

クラスで浮く事自体は度重なる転校のおかげで慣れていくから構わないのだが、新しい部活を探そうかなと思っただけに、入部しづらくなるのは辛い。

「どうしたもんかな」

授業終わりの放課後、教室の掃除を1人でこなした後、帰路に着くべく、校内を歩いていた。

すれ違う人の反応は様々。知らないのか興味ないのか、そのままスルーする者。俺を見て連れ歩く者と何やらひそひそと話す者、露骨に嫌そうな顔をする者も居れば、ばつもの悪そうな顔をする者も居る。

いっそ、完全に無視してくれる方が気も楽なのだが。とりあえず、暫く大人しくしていた方がいいだろうと思ひ、それらを見無視する。人の噂も七十五日というし、そのうち飽きるだろう。

問題はその間、何をしているか。何もしないには2ヶ月半は流石に長い。既に2ヶ月近くを棒に振る結果になっているので、何もしない選択肢は無い。

ただ、何も思いつかない。元々は学校が終わって、家に帰って……。宿題やって、ランニングしたり筋トレしたり。

「変わっていないな」

昔と違うのは、ここ最近少し料理をするようになった。作れるようになって損は無いらし、何より放課後が丸々開いてしまつて暇になつたから。

料理自体は存外性に合つていて、洗い物も苦では無いのだが、如何せんレパートリーが少なく、飽きが早い。それに、自分で食べるだけなら正直買つてくるのと変わらないと思へてしまう。

「レシピ本でも買つてみるかなあ」

毎日頭から作るようにしていけば、日にちも潰せるだろうし、料理の腕も上がるかもしれない。

どうせ暇だし、本屋にでも寄つてみようかと、この後の予定を決めた俺の視界に、作

業中の銀髪の女生徒の姿が入ってきた。身長は俺より頭一つ分低く、正直後輩かと思っただけ、腕のラインの色から先輩と分かり。腕章から生徒会の役員だと分かった。

そんな先輩は、大きなポスターを一人で貼ろうとしている。頑張っているようだが、如何せん身長が足りていない。

「手伝いますか？」

先輩へ声を掛ける。ポスターを抑え、プルプルとしている先輩は、「お、お願い！」と声を上げた。

画鋏を一つ手に取り、先輩の脇に立って、ポスターを広げる。右上を止め、中央を止め、最後に左上を。

下の方は既に止めていたようで、それでポスター張りは終了した。

「ふー、ありがとう。お陰で助かったよ」

「いえ。何よりです」

笑顔で振り返る先輩と目が合った。

暫しの間。それから、「あっ」と、先輩から声上がる。

そのまま気まずそうな顔をして、だらだらと冷や汗。

「じゃあ、自分はこれで」

その反応を、恐らくは自分の悪名のせいだろうと考えて、俺は先輩へ一礼すると、そ

の場を立ち去ろうとした。

「ねえ」

呼び止められる。

今度は俺が振り返ると、先輩はその手にポスターを抱えて持っていた。

「もう少し、付き合って貰えない?」

「……いいですけど」

「良かった。困っていたんだよ。一人で出来ると思っていたんだけど、思ったよりポスターが大きくて」

てれてれと、困った様子で笑う先輩に、尋ねる。

「でも、良いんですか? 自分、部活の態度が悪くて首になった男ですけど」

「確かに、部活の数はもう少し絞った方が良かったね。幾ら積極的に掃除整備していても、やる気が無いって思われても仕方がないよ。……まあ、生徒会としては先にこう助言してあげられたら良かったんだけど」

「……」

なにやら意外な反応に、首を傾げる。事情に詳しそうな反応であった。

「生徒会って、何でも知っているんですか?」

「あの嘆願書は元々生徒会宛に来た物だから。本当ならまずは生徒会長が検討と却下で

大雑把に仕分けして、その後で検討になった方の事実確認と必要性を調査。それをもって最終決定って感じなんだけど。調査中に役員の子が君についての嘆願書を先生にしちやっただの」

「成程」

そう言われると、あの嘆願書のフォーマットは生徒会室前に置かれた目安箱用の紙だったと思う。

いきなり先生に持っていくあたり、本気で怒っているのかと思っていたが、裏事情があつたらしい。

「……ごめんね？」

「いえ、気にしないで下さい」

生徒会の人に責任は無い。そもそも俺が種を蒔かなければ、こんな事になっていない。

「それより、ポスター。貼らなくていいんですか？」

「そうだね。幾つか掲示板回るから、一緒に来てくれるかな？」

「分かりました……えっと」

名前を呼ぼうとして、まだ聞いていなかった事に気が付く。

同じくその事に気が付いたのか、先輩が「忘れてた」と、笑う。

「僕は天音かなた。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

エピソード・オブ・かなた e p. 02 生徒会室

天音先輩と共に、ポスターを貼っていく。その傍ら、無断で掲示板を使用していたり、提示可能期間を過ぎてきているようなら、それらも剥がす作業を行っていく。

そうやって、全ての掲示板を回ってから、俺は剥がしたポスターを手に生徒会室の前に居た。

「どうぞ。入って」

天音先輩が、生徒会室の扉を開ける。「失礼します」と挨拶しながら、戸をくぐった。飛び込んできたのは、片付けもままならない様子の、室内。

「……ええ」

少し引く。「いや」と天音先輩。

「忙しいから、仕方が無いんだよ」

「……そうですか」

「うん」

自信満々に頷かれてしまい、自分が間違えているのだろうかと思いつながら、再度室内。段ボール、書類、ファイル……やっぱり散らかっている。やりっぱなしなのか、今か

らやる所なのかの、判別もつかない。

「あ。とりあえず、ポスターはその辺に置いて」

指を差されたのは何個かある段ボールの山の一個。

「何かに使おうんですか？」

「後で捨てるから、とりあえず」

「……」

じゃあ、直ぐに捨てればいいんじゃないや無かろうか。

「この辺の段ボールの山は、ごみですか？」

「分別してないけど、一先ず要らない物の筈」

「……掃除手伝いますよ」

「でも悪いし」

「気になるのでやらせてください」

有無言わせぬために、制服の袖を捲り、段ボールの山に向かった。

一先ず検分。先程のポスターを除けば、何に使っていたのか分からないパーティーグッズ的な物や書類など、段ボールの中身は多岐にわたる。

「ゴミ袋はありますか？」

「そこらへん？」

「……」

「ごめんなさい」

何故か天音先輩に謝罪される。理由は分からなかったが、とりあえず指の差された当たりに近づき、搜索。

日用品箱みたいな具合に、使いそうな物をごちやごちやと仕舞っている感じだ。ゴミ袋を見つけ、えいやと引き抜く。

「パーティーグッズは全部捨てます」

「いや何かに使えるかもしれないし」

「最後に使ったのは？」

「……」

「その何かが来た時にまた買って下さい」

「はい」

ぼいぼいとゴミ袋に投げ込み、開いた段ボールを潰す。

そんな事を続けながら、ふと気になった事を聞いてみる事にした。

「今日、他の生徒会のメンバーは？」

「誰も来ないよ。今日は生徒会の活動日じゃないから」

なら何故、この人は生徒会の活動をしているのか。

「……回ってないんですか？」

「正直、引継ぎしたてでバタバタはしてる」

言われてみれば、生徒会選挙が行われたのは今月の頭だ。もうすぐ1ヶ月経つかどうかといった頃合いである。

時期的に、確かに引継ぎの時期かもしれない。

「ただ、去年の生徒会メンバー、生徒会長と僕以外は全員最高学年だったから、年度初めの生徒会が実質機能してなくて」

「ふむふむ」

「生徒会長は任期満了に伴い引退。生徒会経験者は僕1人」

「成程」

「そしてこの度、めでたく生徒会長に就任」

「おめでとうございます」

生徒会長だったのか、天音先輩。正直部活が忙しくて全然覚えていない。

選挙演説はとうとうとしている間に終わったから、投票した記憶も無い。

「ただ、生徒会長から引き継がれたから、各業務を覚えてはいるけど、忙殺されて他の役員メンバーに引き継げてはいないよね」

「ダメじゃないですか」

そもそも生徒会長なら、ポスター張りなんて雑務、後日他の人に任せられた方が良かったのではないだろうか。

それこそ、庶務って役職があるらしいし。

「結果的に私一人で回っていてこの状況です」

「だから室内の掃除もままならないんですね」

「……そうだよ」

今の間で色々察して、口を噤む。

しかし、成程。そういう事なら、多分俺の抗議文を先生に提出した生徒会役員は、忙しそうな生徒会長を気遣っての事だったのだろう。

泣ける話だ。いろんな意味で。

「とはいえ、生徒会室がこのザマじゃ、引継ぎもままならないですね」

「このザマ!!」

「明日は生徒会の活動ありますか?」

「ねえ、今このザマって言わなかった!!」

でも、それ以上の感想が思いつかなかったし。

「どうなんですか?」

「……その予定だけど」

「なら明後日は？」

「明後日は休みだよ。まあ、僕は生徒会室にはいると思うけど」

「じゃあ、明後日来ます。俺は掃除するので、天音先輩は生徒会長の仕事をしてください」

俺の言葉に、天音先輩はぽかんとして、それからいやいやと首を振る。

「流石にそこまでして貰うのは。生徒会の子達……僕が掃除するから」

「引継ぎも出来て居なくて、仕事、溜まってるんじゃないですか？」

「……」

視線が逸らされた。決まりである。

「乗りがかった船ですから。最後までお付き合いさせて下さい」

「……ありがとうね」

「どういたしまして」

結局この日は、1時間程掃除をしてから、天音先輩と帰路に就いた。

一日挟んだ翌々日。

スマホを手に、生徒会室を検分する。

「この山はゴミ、この山は日用品類多め。この束は年次資料で……」

現状の写真を撮ったり、メモを取ったりしながら、片付けのスケジュールを組み立てる。

写真については、後で必要になった道具がどの辺にあつたかを思い出す為、メモはどんなものがあるのかや片付けの優先順位を決める為だ。如何せん、量が多いし、明らかに生徒会室の収納に対して荷物がが多い。もしかしたらここ数年、ずっとこんな感じだったのかもしれない。

流石に勝手に捨てる訳にもいかないのです、書類の束の分別を頼もうと、俺はタップタップとスマホを操作しながら、天音先輩の方へ振り返った。

紙面に走らせるべきシャーペンをくるくると手の上で回される慰み物に変えていた天音先輩は、俺が振り返ったのを見て、その手を止めた。

「さぼってないよ?」

「思っていないですけど」

寧ろ、本来活動日で無いのだから、どう過ごしていようと構わないし。

ただ、勝手に分の悪さを感じたらしく、「あー」と天音先輩は何かを考え。

「手際良いね」

とそんな無難な言葉を口にした。

気にしていないアピールも兼ねて、その話に乗る。

「両親が転勤族だったんですけど、仕事大好きで引越し当日まで仕事しているような人だったんで、荷造りとか家の事は俺の仕事だったんです」

「……え？ 引越し当日に仕事していたの？ 引越し作業は？」

「流石には居たので手続き等は父ないし母でしたけど、基本対応は俺でしたね」

「……大変だったね」

まあ、そのおかげで友人付き合いをしなくても、人と問題無くやり取りできる程度のコミュ力は身についた。

「引越し先の片付けも1人？」

「はい。しかも荷物置場程度にしか考えて無いのか、ろくに内見もしないで部屋を決めていたのか知りませんが、部屋のサイズが同じでも収納量が低いとか、部屋の形がおかしいとかあって、毎回ドキドキでしたね」

「ドキドキの対象、そこなんだ!! 本当に変だったね！」

「いえ。そんな両親だから、家にある荷物なんて数える程度でしたし、大して苦ではなかったですよ。なんなら、この生徒会室の方が荷物多いんじゃないかな」

「嘘でしょ」

大袈裟かもしれないが。大差は無いと思う。実際、今住んでいる家にも、絶賛転勤中の両親の私物は殆ど無い。

因みに、今の家は流石に俺が内見した。一番使うの俺だろうし。一軒家と言うのもあっただろうが割と大変だった。二度とやりたくない。

「とりあえず、明日急に引越してなっても問題ない程度には片付けます」

「うん。生徒会室の引越しは多分無いけど、意気込みは伝わったよ」

伝わったらしい。良かった。

「伝わった所で、天音先輩。お手透きですか？」

「いや、仕事あるから暇では無いけど。何？」

「書類の分別をお願いしたいんですけど」

「書類は生徒会の印鑑がある奴は基本捨てないって認識でいいよ」

「印鑑……」

書類を一枚、手に取ってみる。

書面左下に、仰々しい判子があつた。両親が使っていた実印のような四角形の大きい物。

「これですか？」

「そうそう。それで、書類の日付が直近で5年以内の書類なら生徒会室の戸棚、それ以前の奴は生徒会の物置……いや。物置なんて無かつた。いいね？」

「良くないですけど。何処ですか？」

「……右隣の部屋」

見た所、生徒会室内に隣室へと繋がる扉は無い。

一旦廊下に出て、言われた通り右側に行けば、生徒会倉庫と銘打たれたプレートに着いた部屋が、確かにある。

ドアノブに手をかけ、下げようとするが、開かない。

「そこはね。生徒会七不思議の1つ。呪われた秘密の開かずの扉なんだよ」
横合いから声。

視線を向ければ、当然ながら天音先輩の姿がある。

「属性盛りすぎでしょ」

「でも開けたら最後、身の毛もよだつ恐怖に襲われるという、恐ろしい扉って言い伝えは実際にあるんだよ」

「いいから鍵貸してください」

「無いよ」

「……はい?」

聞き返せば、天音先輩が胸を張る。

「言っただでしょ? 開かずの扉って」

「いや。鍵穴があるのに鍵が無いなんてこと……」

言葉の途中で、ある可能性が頭を過った。

いや、そんなまさかかなと思いつながら天音先輩を見る。

すると、俺の視線から自分を守るように、天音先輩は俺に両の掌を向け、自分の顔を隠した。

「そ、そんな胡乱な目で見ないで」

「……何年前からですか？」

「……分かりません。少なくとも一昨年の時点ではもう無かつたらしいです」

「因みに、生徒会室の惨状は？」

「……それも、少なくとも一昨年の時点では。そこから、悪化はしています」

「職員室に予備は？」

「確認したけど無かつた」

成程、つまり。

「せめて、生徒会室にはありますよね？」

「……神のみぞ知るかな」

運否天賦らしい。

「……とりあえず、掃除を、します」

「お願いします」

とりあえず、ゴミと必要な物の分別から始めて、物を減らそう。

エピソード・オブ・かなた e p. 03 掃除風景

生徒会室の清掃を始めて、2週間弱が経った。

生徒会の活動は、基本的には隔日で月水金らしい。なので、俺の清掃はその間を取って、火土。

本当は全休の日曜日に纏めて出来れば良いのだが、流石に俺一人で生徒会室に入るわけにもいかないから、俺が掃除をすると自動的に天音先輩に居て貰う必要がある。

ただでさえ、週6日で働いているのに、唯一の休みまで学校に呼び出すわけにもいかないから、放課後に済ませるしかない。とはいえ、進行速度は余り宜しくない。

「俺、実は部屋の掃除が下手だったんでしようか」

「いや、そんな事は無いんじゃないかな」

思わず呟いた言葉に、作業中の天音先輩が答える。

「正直、僕、この部屋、こんなに広がったんだって思っているもん」

「でも、まだ終わらないですし」

「いうて、数年分だからね？ 寧ろ一人でよくやってくれているよ。それに、君の掃除が終わらないのは他にもやっているからでしょ」

天音先輩の視線の先に、かつてパーティーグッズなどの入っていた段ボールの山は既に消えていて。開けたスペースに、未整理の荷物を移動して別の場所にスペースを作り、そのスペースには今年度に使う物入れという事で、安っぽい段ボールと、何故かあつたカーテンを組み合わせて簡易棚を作っておいた。

流石にカーテンを開けてまで使っているのかを確認はしていないが、天音先輩曰く、使ってくれている人もいるらしい。

「君、感謝されていたよ」

「なら良かったです。次に出勤した時、取り壊されているのではと思ってました」

「生徒会の事を何だと思っているの」

流石に冗談だが。

それでも、遠回しに要らないと言われて、取り壊す可能性は考えていた。

「それに、その書類整理だって、議事録の纏めも兼ねて、今度庶務の子にやって貰うから
ごめん。」

「整理は掃除の一環です。というか、年度が混ざっていて、使う物と使わない物の判別からですし、これで一日終わりますよ」

俺が立ち向かっているのは、生徒会の議事録の束であつた。

数年分の束はそれだけでも辟易する量なのだが、恐ろしい事にそれらの議事録が整理

されていない。

別の会議の書類が混ざって居たり、時系列が前後していて、何故か年度の違う議事録がごちゃごちゃに纏まっている。

「というか、こういうのって、せめて年度で纏める物では」

「あー……書類の山が崩れた時に、適当に纏める事って、あるよね」

「ありませんけど」

「トーンがガチじゃん」

物は可能な限り減らす事が習慣になっているせいで、使わない物はさっさと捨ててしまふから、こういう紙の束は新鮮まである。

「後で見て困る状態で置いてある時点で、使わないでしょうからシユレット掛けて捨てちゃいません？」

「その言葉への説得力のある返しが思いつかないから、生徒会長権限を行使します。保存しなさい」

「了解です」

仕分けていく。言葉通り、今日はこれで終わりそうだ。

翌々日。

「ん？」

別の段ボールの山に取り掛かっていたところ、山の中にピンク色の布が見えた。何だろうかと思ひ、山を崩さないように気をつけながら、布を引き抜く。

「制服？」

「ん？——あ、それ」

顔のすぐ横から、声。

視線を動かせば、移動してきた天音先輩が、俺の肩越しに手元を覗き込んでいた。

「去年の学園祭で着た奴だよ」

「それから着ました？」

「着てないけど」

「つまり要らないって事ですな」

「思い出全否定するじゃん」

「そもそも思ひ出語るなら、山の中で適当に置いておかないでしょう」

「ぐうの音も出ない」

ただ、捨てようとするのは阻止されて、俺の手から制服が奪い取られる。

「君つて、去年の学園祭には来てないの？」

一体何だろうかと思ひながら、俺は頷き返す。

「そうなんだ。僕、これ着てステージで踊って歌ったんだよ」

「へー」

「もうちよつと興味を持つとう？」

「そう言われても。歌なんて、今は音楽の授業以外ではご無沙汰であり、興味が無い。

「しようがない。ちよつと着てあげようじゃないか」

「別にいいです」

「いいからいいから」

立ち上がらされて、そのまま背中を押されて、生徒会室から退室させられる。

「こんなことをしていいのかと思いつながら、生徒会室の前に立って待っている」と。

「あの」と、横合いから声。

視線を向ければ、白と黒の知らぬ先輩が2人。声をかけてきたのは、黒い先輩だった。

「今、生徒会室つて入れますか？」

「え？」

急に尋ねられ、少し戸惑い。

「あー……生徒会長は居ますけど、多分着替え中です」

「そう答えた。着てあげると言っていたから、多分間違いないはずだ。」

「そうですか……どうしよつか、フブキ。出直す？」

「んー、でも、面倒じゃない？ 待ってようよ。書類出すだけだし」

「そう？ まあ、フブキがそう言うならいいけど」

「……俺の事は気にしなくていいですよ」

2人のやり取りを聞いて、そんな言葉を口にする。

「え」と、そんな言葉を口にしたのは、ふぶきと呼ばれていた白い先輩だった。

「でも、待っているよね？」

「着替えるからって追い出されただけなので、並んでないですから」

「あ、生徒会の人だったの？」

「いえ。そういう訳でもないですけど」

「？」

ふぶき先輩とみおと呼ばれた先輩の頭に、疑問符が見えた気がした。

「掃除夫とでも思っておいて頂けると」

「掃除夫？」

疑問符が増える。生徒会に関係の無い一般生徒には、生徒会室の惨状が広まっているな

いらしい。

中々の情報統制。検閲とかされているんだろうか。

『入っいいいよー』

ふと、生徒会室から、天音先輩の声が聞こえてきた。
着替えが終わったらしい。

「どうぞで」

「あ、うん」

2人を促す。

「失礼します」

ドアを開けた、2人が固まる。

肩越しに中を覗けば、多少片付いた程度の生徒会室をバックに、入り口で何やらポーズをとっている天音先輩。

「キャッチコピーは握力50kg ぎゅ♡ぎゅ♡ 握りつぶしちゃうぞ☆ 生徒会役員の天音かな……」

謎の口上と握力アピールをしながら満面の笑顔だった天音先輩が、徐々に顔を赤くしていく。

完璧に近いポージングのまま、体がプルプルと震え始めているのが分かった。

「……えつと」

ふぶき先輩が俺の方へと振り返る。

「出直した方が、いいかな？」

「……そうしてあげてください」
「う、うん」

がらがらと、扉が締められる。

何とも言えない空気の中、ふぶき先輩。

「じゃあ、行こっか、ミオ」

「……そうだね」

そうして2人が歩き出す。

その背中を前に、言っておいた方が良さそうな事を思い出し、「あの」と声をかけ、呼び止めた。

「何？」

「えっと……生徒会の業務って、基本的に月水金なので、そのあたりで来た方がいいかも
しれません」

「あ、そうなんだ。分かったよ、ありがとう」

「後、その」

口止めをすべきかどうか悩む俺に、「大丈夫」と、ふぶき先輩。

「安心していいよ。誰にも言わないから」

「掃除、頑張ってね」

またねーと、ふぶき先輩。みお先輩にも激励をもらおう。

2人に頭を下げて見送り、生徒会室の扉へ対峙する。

こんこんと、ノック。

『……………どうぞで』

扉を開ける。ピンクの制服姿のまま、普段座っている上座の席で、天音先輩は肘をつき鼻のあたりに指を組んだ手をやっていた。前髪で目元、手で口元が隠れているせいで表情が伺えないからか、その雰囲気は物々しい。

何か言わねばと思い、悩んだ後。

「似合っていますよ」

「——追い打ち辞めて」

間違えたらしい。

それから3日。日月挟んで火曜日。

「昨日、あの2人来たよ」と、天音先輩。

「あの2人？」

「白上さんと大神さん」

「……………どなたでしょう?」

聞き覚えのない名前だった。

「この前来た2人だよ」

「……ああ、あの白い先輩と黒い先輩ですか」

言った通り稼働日に来たらしい。

「大丈夫でした？」

「提出書類に不備は無かったよ」

「……そうですか」

聞きたいのはそこでは無かったけれど。

言外に聞くなと言われた気がしたから、大人しく引き下がる。

「何の書類だったんですか？」

「同好会の活動申請。まあ、却下しちゃったんだけど」

「却下？」

「人数足らなかつたし」

天音先輩曰く、同好会の申請に必要な人数は3人らしいのだが、白上先輩と大神先輩の名前しか無かつたらしい。

それは確かに、却下されてもおかしくない。

「3人目見つけてくるって。あの2人の作る同好会なら、ペーパー同好会の心配はなさ

「そうだし安心だよ」

「ペーパー同好会……ペーパーカンパニーみたいなものですか？ それって意味ありますか？」

「同好会活動は、部費は基本的に出ないけど、活動用の部室が貰えるから」
「成程」

「悪い言い方をするなら、校内において、監視の目が少ない好き勝手出来る場所が、手に入るらしい。」

「そういう意味なら、多少面倒でも、作って損は無さそうだな。頭数3人揃えばいいだけだし。」

「意外と多そうですね。ペーパー同好会」

「だと思えば。流石に活動の監視はしてないから、事実確認は出来ていないけど」

「監視無しなんですか？」

「よほど目につかない限りはね。極端な話、お金を出している訳じゃないから、同好会にあれやれこれやれって指示した所でやってくれないし。校則で学園祭の参加だけは強制しているから、それすらしてなければ直ぐに廃部に出来るけど……」

「出来ないんですか？」

「休憩所っていう手があるからね」

「ああ」

椅子と机並べて終わり。

「空き教室を占領されているだけと言えばそうんだけど、本気で活動したがっている同好会が、部室を見つけられなくて活動出来ないって事例も少なくて無いから、どうかはしたいんだよね。一度先生方に相談して、一斉摘発しようかな」

そう言いながら、天音先輩は顎に手を当て何事か考え始める。

生徒会長の顔、とでもいうのだろうか。仕事をする顔つきになった天音先輩。

話が終わったことを悟り、俺は生徒会室を見渡す。

床の見える面積も増え、掃除だけなら、もう1週間もすれば終わりそうだった。

とはいえ未だに、生徒会室隣の物置の鍵は出てこない。

そろそろ捨てないものを一旦別の部屋に置かないと、棚の整理もしづらいし、折角広げた床に、結局段ボールが積み重なる事になる。

それでも大分マシにはなっていると思うが、せつかく掃除しているのだからきつちりと済ませたい。

後で相談するかと思いつながら、残りの作業算段をして、俺は掃除に戻った。

エピソード・オブ・かなた e p. 04分岐点

終わりが見えた。分別は佳境。目の前の段ボールの中身を仕分ければ、ゴミを出すだけ。

残った荷物等については、天音先輩経由で先生に相談して、空き教室を一室、借りられる事になった。

なので、仕分けが終わり次第、空き教室へと持っていける。

とはいえ、早めに動かすようには言われたので、開かずの物置の鍵を探すことが急務だ。

しかし。

「見つからなかったな」

どこかの荷物に紛れているだろうと思っていたのだが、残念ながらそんなことは無かった。

こうなると、棚とか引き出しの中、もしくはその裏等の可能性がある。

しかし、流石にそこまで俺が探すのは生徒会の機密的に良くは無さそうだし、棚の裏を見るには独力だと厳しい。

仕方なく、掃除が終わったら引き継ぎ、後を任せる事に決めつつ、俺は段ボールの中身を取り出しては、不要と必要に分けていく。

普段なら、こうして作業していると、大体天音先輩から声を掛けられ雑談するのだが、今は天音先輩が不在だ。

最初は居たのだが、先生に呼ばれて行ってしまった。

先生としては生徒会室で話をするつもりだったらしく、俺は席を外そうとしたのだが、2人揃って仕事の手を止める必要は無いと、天音先輩が先生と共に場所を移した。

それはそれで、生徒会室に部外者1人を残すのはどうなのかとも思ったのだが、言うより早く天音先輩は出て行ってしまったので、仕方なく留守番である。

中身を1つ、取り出した。細長い、黄色の鳥。おもちゃだろうか。それとも小物入れ？ とりあえず必要無さそう。捨てても問題なさそうだ。

不要品の箱に入れ、続けてほしいと、選別していく。必要そうな物、不要そうな物の判断はすっかり出来るようになっていて、正直手を止める必要が無ければ、あつという間に終わるだろう。

いる、いない、いる、いる、いない、いない、いない。

ほしいと段ボールの中身を取捨選択していると。

がらり。

「あ」

扉の開く音。この状況で聞こえる扉の開閉音等、1つしかなく。

俺は生徒会室の入り口の方へと目をやった。

「おかえりなさい、天音先輩」

声をかけたが、違うようだった。

流れる銀髪と灼眼。制服を見れば、どうやら同級生のよう。ただ、俺と違って右腕に、

生徒会の腕章があった。

「違うぞ？ 余は、百鬼あやめだ」

答える同級生こと百鬼。

百鬼からすれば、生徒会無関係の俺が、何故か生徒会室で作業しているという不審な状況ではあったが、特に俺を警戒している様子は無い。

「天音先輩の言っていた、掃除してくれている人だね。お疲れー」

「……お疲れ」

百鬼に言葉を返す。満足そうに頷いた百鬼は、そのまま生徒会室の中に入った。

生徒会室の中を横断し、俺製の段ボール棚の前につくと、目隠し用のカーテンを開け、その中からいくつかの荷物を取り出した。

それを手に、俺の対面の席まで移動して、腰を下ろす。定位置なのだろうか、迷った

様子は無い。

「食べる？」

そう言つて、飴玉を差し出された。

逡巡し、1つ貰う。封を切つて口に入れれば、レモンのような甘つたるい味が口内に広がった。

「これで共犯ね」

そう言つて笑う百鬼は、別の味らしい緑色の飴玉を取り出すと、封を切り口に入れる。それを見ながら、ふと気になった事を口にする。

「今日、生徒会活動は休みでは？」

「なんかスバルが急に用事が出来たとかで、折角だから待つている間に整理を進めておこうかなつて」

「成程」

すばるつて誰だろうと思ひながら、俺は百鬼の手元を見る。

飴玉以外に段ボール棚から取り出された荷物は、自分が先日分けた議事録だった。年度別、月別で分けるところまではしたが、流石にしっかりと中を読む訳にはいかず、最終チェックとファイリングは生徒会の誰かに任せただけである。

ちゃんと振り分け作業引き継がれているのかと、少し安心しながら、俺は選別作業に

戻る。

「ところでなあ、この古い議事録って要らなくないか？」

「……」

「なあ？」

「え？ あ、俺に言っていたのか？」

「他に居ないだろ」

何を言っているんだという表情をする百鬼。

独り言の可能性を考慮しないのであれば、確かにその通りだった。

「その古い議事録は、生徒会長権限で有無言わずに残す事になったから、俺からは何と
も」

「それを言われたら、余も何も言えないが」

それでも面倒なものは面倒なのだろう。渋々といった様子で、百鬼は作業に戻る。

まあ、気持ちは分かる。正直俺も、やりたいかと言われれば否だ。

「お前様はもうすぐ終わりそうなのか？」

「お前様？」

「お前様はお前様だろう」

「やっぱ、俺の事なのか」

一人称と言い、どうも古風でイマイチ聞きなれない。

「俺はこの箱が終われば、自分の作業は終わりだけだ」

百鬼とやり取りしながらも仕分け続けている箱の中身は、もう半分も切った。

これが終われば、他にやる事を天音先輩経由で生徒会に引き継いで仕舞いだ。

そんな俺の言葉に、「そうか」と百鬼。

「掃除が終わったら、もう来ないのか?」

「多分。用事が無ければ、生徒会室なんて一般生徒が来る場所でもないだろ」

「……また散らかせばいいって事だな」

「やめてくれ」

数年分の掃除をしたのに。

何でそんな恐ろしい事を言うのかと思う俺の前で、百鬼は少し寂しそうな顔をする。

何故そんな顔をするのか。幾ら思い返しても、俺に百鬼との接点は無く、分からない。

「なら、たまに遊びに来るといいと思うぞ」

「いや、そういう場所でも無いだろ」

「それはそうだけど。いいじゃん、たまには」

「なんで、そんなに? 別に、俺が来ても良い事無いだろ?」

さっぱり分からない。どういふつもりなのだろうか。

「いや。天音先輩が寂しがると思ってたな」

「天音先輩の事が？」

離席中の先輩の姿が脳裏をよぎる。あの人が寂しがると……？　ちよつと想像がつかない。

関係値としては普通の、至極一般的な先輩後輩、もしくは雇用主と従業員みたいな関係だったと思うが。

「まあ、生徒会で天音先輩と普通に話せるのって、お前様くらいのものだし」

それは……。

「なんでまた？　あの人、そこまで格式ばって無いだろうし。最低限の線引きは必要だろうけど、そんなに気をつけなくて良いと思うけど」

「あー……今は普通に教えて貰って、仕事も振られているけど、当初は仕事の鬼だったかな。余がやらねば誰がやる、余の邪魔をするなって。鬼はお前だろ、って感じなんだけど」

何故か、自分が鬼みたいなボケをされて少し戸惑う事にはなったが、仕事量に忙殺されそうになっていた事は知っているの、少し納得する。

複数人で仕事がつづらいい環境に、なまじワンオペ出来る能力があったせいで、余計にその傾向はあった。

「せめて部屋の掃除くらいはすれば良かったのに」

「勝手に触るのもどうかと思って。余も、自分の出来そうな仕事はしていたんだけど」

「そうなの？」

「嘆願書を先生に持って行ったりとか。後で、精査前だつて言われて、注意されたけど」

「……」

なんか聞き覚えのある話だ。

ただ、百鬼は気づいていない、もしくは聞かされていないのか、普通に話を続けている。

「それに、教えて貰えているとはいえ、仕事以外の話とかは殆ど無いし」

「まあ、それは生徒会の活動中だし」

俺が居る時と違い、きちんと生徒会長として活動しなければいけない時間なのだから、流石に肩肘も張るだろうし、仕事以外の話も減ると思う。

仲良くなりたい、という事なら、多分俺のように活動外の時間とかで何かするのがいいのではないだろうか。

「親睦会でも企画してみたらどうだ？ 皆でなんか、レジャーでも。まあ、もう行ったと

かだと効果薄いかもしれないが」

「親睦会………そういえば、行って無いな。でも、時期を逃した感じ無いかな？」

「寧ろ、漸く正規稼働始まったと言っても過言では無いんだし、別におかしくは無いだろう」

未だやるべきことは多そうではあるが、比較的落ち着いているようにも見えた。生徒会室も凡そ片付き心機一転出来る良い機会でもある。

百鬼としても思い当たる節はあるらしく、顎に手を当て「悪くないな」と呟っていた。「迷惑じゃないかな？」

「だったら断られるだけだし」

「……断られた時のダメージを想像したら辛い」

「その時は責任取ってやるよ」

断らないとは思ってから、安請け合いしておく。

「もし断られたら、世にも恐ろしい目に合わせるからな」

「責任の代償が重い」

秒で後悔した。

「でも、行くなら何がいいかな？」

「何でも良さそうだけど……。正直良く分からん」

「そうなのか？」

「自慢じゃないが、レジャーとは無縁の生活をしてきた」

「本当に自慢じゃないんだが。それでよく、親睦会なんて発想が出てきたな」
「行つたからな」

かつて俺が所属していた23の部活の内、確か3つくらいで親睦会はあり、一応全て参加はしている。

なので、提案する程度のサンプルはある。その3つだけだが。

「生徒会役員全員共通の趣味とかあるなら、その趣味の奴とか。オーソドックスなところで、ボーリングとかカラオケとか」

「カラオケ！ 余、歌うの好きだぞ」

「天音先輩も、去年学園祭で歌って踊つたって言っていたな」

上手いかどうかは知らないけど。

「まあ、折角だし明日にでも、他の役員と話して決めたらいいじゃないか。この後、天音先輩も戻ってくるから、先に話を通しておいてもいいと思うし」

「そうだな」

「——なに？」

頷いた百鬼が、何故か俺をまっすぐ見る。

「……あー、もうすぐ片付けも終わるし、分別終わったら、席を外すから気にしなくていいぞ」

「違う」

「……じゃあなに？」

「お前様から提案してくれ」

「意味無いだろ。その懇親会に俺は行かないんだから」

何事かを言い出す百鬼の言葉を、直ぐに否定する。

こういうのは、仲良くしたいアピールも兼ねているから、自分で言わなければ意味が無いと思う。

だが、俺の言葉に、百鬼はきよとんとした顔をする。

「なんだ、来ないのか？ 提案者なのに」

「生徒会の懇親会だって話だっただろ」

「あー」

納得した様子に、ここまでの話を聞いていなかったのかと不安になる俺に、百鬼はフツツと、鼻で笑った。

「お前様も、生徒会の、一員だろ」

「そういうの良いで」

「……余が読んだ本だと、感動する場面だったと思うんだけど」

おかしいなーと、百鬼が首を傾げる。

正直今日会ったばかりの百鬼に言われても感が凄い。

「天音先輩は断らないだろうし、自分で提案しな」

ぽいと、最後の1つを必要箱へと入れて、最後の仕分けが完了する。

底面のガムテープを剥がし、段ボールを畳む。

「おお。お疲れ」

「ありがとう。後は散らかさないように使ってくれ」

必要品を纏め、直ぐには必要にならなそうな物を詰めた段ボールに封をする。

それを手に、立ち上がろうとして。

それより早く、天音先輩が戻って来た。

「おかえりなさい、天音先輩」

「ただいま」

「お疲れ様です、天音先輩」

「百鬼さん？ お疲れ様。どうしたの？」

「ちよつと作業しようかと思いました」

「そうなんだ。休みだから、あんまり無理しなくていいよ」

「はーい」

お前が言うなど、少しだけ思っていると。天音先輩の視線が、俺へと向く。

「君もお疲れ様。ごめんね、結局任せきりにしちゃって」

「いえ。やるって言ったの自分なので」

俺は、改めて段ボールを手に、立ち上がる。

「それじゃあ、これ、空き教室に持って行きますね」

「あ……。じゃあ、お願いしちゃっていい？」

「大丈夫です」

少々重いが、その程度。一人で持てるサイズだ。

「それじゃあ、後で」

「うん」

頷く天音先輩に、一礼し。

その後、ちらりと百鬼に目配せ。こくりと、頷きが返ってくる。

「天音先輩。ちよつといいですか？」

「ん？ 何、百鬼さん？」

「えつと」

戸を閉める。崩れそうになった荷物を抱えなおし、歩き出す。

天音先輩が借りた部屋は、やや遠い。生徒会室の近所にすれば良かったのと思いな

がら、廊下を進む。

階段を下り、渡り廊下を渡つて。

「えつと……ここか」

扉の前につくと、中から話し声。

空き教室と聞いていたが、誰かいるのだろうか。

一応ノックすると。

『どーぞー』

中から声。聞き覚えがある気のある声だ。

何処で聞いたんだろうかと思ひながら、扉を開けて。

「あれ？ えつと、生徒会室の前にいた人？」

「……確か、白上先輩と大神先輩、でしたっけ？」

意外な2人が、其処にいた。

エピソード・オブ・すこん部 e p. 1 再会

生徒会室の荷物を一時的に保管するために向かった空き教室。

そこに、以前生徒会室前で出会った、白上先輩と大神先輩の2人が、何故かいた。

キョトンとした表情を浮かべる2人。多分俺も、同じような顔をしている。

「とりあえず、入っていいよ。扉を開けたままだと、見栄えが良くないし」

「あ、はい」

口火を切ったのは、白上先輩だった。

見栄えが良くない、という言葉の意味は良く分からなかったが、荷物を置きに来たのは事実なので、素直に部屋に入る。

そのまま、一度荷物を床に置いて。振り返り、扉を閉める。

「良かったら座って」

「いえ。片付けだけして生徒会室に戻ります」

「片付け？」

「はい」

「……そういえば、生徒会室凄かったよね」

二度、生徒会室に足を踏み入れている白上先輩の言葉に、「ですね」と返す。「でも、この荷物をこの教室に仕舞えば、片付け終了なんで」

「……とりあえず、座ろうか？」

「え？ いや」

俺の話を聞いていただろうか。

とりあえず、もう一度同じ事を言おうとするが、遮るように鍵のかかる音。

扉の方へ視線をやるより早く、グツツと肩を掴まれる。

見れば、大神先輩がいつの間にかそこに立っていた。

肩を掴まれ無理矢理に、俺は椅子に座らされる。

椅子に座った俺の前に、お茶が置かれた。脇を見れば、水筒を持った白上先輩。

また気が付かなかった。いつの間に水筒を出したのだろう。

「……えっと」

「まずは一服ね」

「……………はい」

俺の対面に腰を下ろした白上先輩から、声がかかる。有無を言わせぬ様子。謎の圧。

まあ、もう掃除も終わりだしいいかと、自分を納得させながら、一口飲む。

正直味は分からないのだが、人肌程度に温いそれが喉を通る感覚に、無意識に一息つ

いた。

自然と少しばかり緊張が解れ、周囲を見る余裕が生まれ、部屋の中を観察出来た。

部屋の中には棚が置かれ、並んでいるのは漫画やカラフルな背表紙の小説、ゲーム機らしい電子機器や、ともすれば奇形だなんだと騒がれそうな体形の、プラスチック製の美しい女の子の人形などが置かれている。

漫画研究会の部屋が、確かこんな感じだった。

「なんか、凄い部屋ですね」

感心してしまう。書籍類が整頓されているのは当然だが、ゲーム機や人形にも塵一つ見えない。

生徒会室と違って、きちんと清掃され、手入れされているようだった。

「そうでしょ。何か興味ある?」

感心していた俺は、うきうきした様子の白上先輩に尋ねられる。

「いえ。漫画は読みませんし、ゲームはやらないので」

「そうなの? アニメとかも見ない?」

「全然見ないですね」

テレビは朝食を食べながら、天気予報を確認したり、暇つぶしにバラエティやドラマを見る程度。それも、数日に一度、あるかどうか。

漫画やゲームも買って貰った事は無く、食費として与えられているお金を使い、自ら買った事も無い。

小さい頃は、図書室にある歴史や偉人の漫画を読んだり、家ではアニメを見ていたよ
うな気もするが。気づけばそれもしなくなつた。

漫画を読まなくなつたのは、中学の図書室には置かれていなかったからが理由だが、
アニメに関しては、確か空しさを覚えたから、見なくなつた記憶がある。

俺の言葉に、白上先輩が首を傾げる。

「全然？」

「は？」

「……本当に？」

「本当です」

ちらりと、白上先輩の視線が大神先輩の方に向いた。つられて視線を向ければ、大神
先輩もやや困惑した様子を見せながら、白上先輩へ頷き返していた。

謎のアイコンタクトに疑問を覚えていると、「所で」と白上先輩が口を開いた。

「気になっている物とかない？」この中にある漫画とかゲームで、タイトル知っている
やつとか」

「……」

先程嗜まないと言ったばかりなのだが。そう言われた俺は、改めて棚の方へと目をやり、左上から順繰りに確認していく。

一通り、目を通してから。

「じゃあ、あの。聞きたいんですけど」

「うん！ 何でも聞いてね！」

「ここは、漫画研究会が使っているんですか？」

「……そこ？」

やっぱり覚えのあるタイトルが無かったから許してほしい。

気になったことを、尋ねたのである。

「沢山あるので」

「えっと……、違うよ。空き教室」

「え？」

大量に置かれている物を前に、てっきりそうだと思ったのだが。

白上先輩の言葉は、いたって普通。特に嘘や誤魔化しを言っている様子は無く、事実だけを言っている様子。

「……なら、棚に置いてある物は一体」

「私物」

「……」

改めて棚を見上げる。

壁一面を覆う棚。恐らく、俺の私物を全てそこにに入れても、まだ余るであろうその棚全てが、きつちりと埋まっている。しかも、それら全て、生活をする上では必要の無い趣味の品。

幾つか入り混じった、複雑な感情を胸中に秘めながら、一先ず俺は、此処に来た要件を口にする。

「その、暫くこの部屋は生徒会名義で使う事になっていました。とりあえず、荷物を此処に仕舞う為に来たんですけど」

「そうなの？ 困るんだけど」

「そう言われましても……」

とはいえ、確かにいきなり生徒会で使うから此処の荷物を全て片付けろと言われたら、困る事は明らかだ。

とりあえず、天音先輩に相談してみるかと思ひ、俺はスマホを取り出す。

そのまま電話を掛けようとするが、大神先輩が手を伸ばしてきて、不意を突かれた俺は、そのままスマホを奪われた。

大神先輩に奪われた俺のスマホは、そのまま白上先輩の手に渡る。

「ちよつと待とう？ いきなり通報は良くないと思う」

「通報のつもりはないですけど」

俺じゃどうしようもないから、相談しようとしただけだ。

兎に角、スマホを返して貰おうとして、ある事を思い出す。

「あれ？ そういえば、部活の申請が通らなかつたって聞きましたけど」

そう言うのと、白上先輩の視線が逸れた。

視線を右側に向ければ、そこに立っていた大神先輩の視線も逸れる。どうやら記憶違

いは無かつたらしい。

「……でも、申請書に書いたし」

苦し紛れに、白上先輩がそんな事を言ってきた。

その言葉は、酷く弱弱しい。

「でも申請が通っていないなら、此処は空き教室ですよね？」

そう言うのと、白上先輩から溢れるように流れだす冷や汗。

空き教室の私物化なども含め、どちらが不利なのか、自覚はあるようだった。

「……天音先輩に相談するんで、スマホを返してください」

「……………スマホを返してほしければ、これにサインして貰えるかな？」

白上先輩から、何やら紙が差し出される。

A4サイズの用紙。一番上には、創部届と書かれていた。

その下に、部名や部室、顧問を記入する欄が続き、それらは全て埋まっている。

唯一埋まっていないところは、所属する部員の一番下。3人目の名前。

「お断りします」

「スマホが帰ってこなくてもいいの？ 困るんじゃない？」

「……いえ、特に」

連絡取る相手も居ないし。

「ええ!! ソシヤゲのデイリーこなせなかったら困るでしょ!!」

「ソシヤゲ？」

「SNSに届く推しの情報も見れないし！」

「えすえぬえす？」

「電子決算も使えないし！」

「でんしけっさん？」

「どうやって、生きて来たんだお前！」

「そこまで言います？」

百歩譲って、何でスマホ持っているのか尋ねるべきでは無いだろうか。

首を傾げる俺に、ヒートアップしている白上先輩。

ふと、その指が俺のスマホの電源ボタンにかかった。感觸の違いに気づいたらしい白上先輩の視線が、俺のスマホの方へ向く。

その画面を見て、唾然とした様子を見せる白上先輩。

「画面ロツクが掛かってない！」

「がめんろつく？」

「電源押したら、直ぐについちやうでしょ！ 落として知らない人が拾ったらどうするの！」

「……どうとは？」

生徒会室の惨状の写真と、メモが幾つか見られる程度しか思いつかなかった。

正直大して困らない自信はある。

「——ほら、これ！」

俺の言葉に、少しの間絶句する白上先輩。それから、スマホが少し操作される。

そうして見せられたら画面。そこに映っていたのは電話番号。覚えのない番号だ。

「これ、君の携帯番号だからね！」

「……へー」

「知らなかったの？！」

知らなかった。スマホというか、携帯電話と呼ばれる物自体を持ったのが、ホロ学入

学の前日位に、ふらりと戻って来た親から、はいこれと渡された時だ。

その時少しだけ触って、電話のかけ方と、元々入っていたカメラとメモ帳の使い方を覚えたきり。

唯一連絡先を交換した天音先輩は、天音先輩から先に電話番号を教わって、それに掛ける事で覚えた。

「それに……まあ、電話帳の登録は無いけど、発着信の履歴……も2つしかないけど、ここにだって他の人の番号あるんだから！」

「確かに」

見れば、通話履歴の所に、天音先輩の携帯番号と、渡された時にテストで掛けた母親の番号がある。

「通話履歴ってそこから見られるんですね」

「……天音さんに電話かけるつもりだったみたいだけど、どうやってかけるつもりだった？」

「普通に手打ちで。番号は覚えていますから」

「……」

白上先輩の目が、信じられない物を見る物へと変わる。よく使う機能だけ使えれば十分だと思っただけ。

強いて言えばカメラとかメモの場所位は動かしたいかなと思う時はあるけれど、だからと言って動かさなくても問題は無いから、結局そのまま。

「設定画面見てもいい?」

「どうぞ」

「……アカウント設定してない」

あかうんとせつていつてなんだ。

「今さらだけど、ホーム画面も、これ買った時のままでしょ」

「良く分かりましたね」

「同じスマホ使っているからね」

ほらこれと、白上先輩のスマホを見せられる。

「なんか、形が違いますか?」

「え? そんなことないよ」

白上先輩が、自身のスマホについたカバーを外して見せてくる。

「ほら。一緒でしょ?」

「……そのカバー、外せるんですね」

「え? うん。外付けのケースだからね」

「じゃあ、俺のスマホについているのもそうなんですか?」

「……そうだね」

そう言いながら、白上先輩は俺のスマホについていたカバーも外して見せた。

比べてみれば、一目瞭然。色こそ違うが、確かに同じ機種。

「てつきり一体な物だとばかり」

「いや、ケースも色々あるから、結構選び放題だけど。でも君のスマホにフィルムがついていいるのに、ケースは知らなかったの？」

「フィルム？　今スマホについているやつなら、全部親に渡された時から付いていましたよ」

「……因みにこのスマホに君の意思が反映されている物は？」

「メモ帳と何枚か取った写真位ですかね？」

俺の言葉に、白上先輩が絶句した。

エピソード・オブ・すこん部 e p. 2 隠者

1日と少し前。フブキ宅。

食後。満腹感を覚えるとともに、寝るにもいい時間。

普段なら気だるい雰囲気の中、のんびりとゲームをしたり、漫画を読んだりと趣味に費やしている時間だったが、空気としては、やや緊迫していた。

腕組み難しい表情のフブキ。その対面で、ミオがタロットカードにより占いをしていた。

「…………どう？？」

「ちよつと待ってねー」

フブキとは裏腹に、至極落ち着いた様子の、いつも通りのミオが、タロットカードの束をシャツフルする。

占いの内容は、部活の件。

火曜日に創部届を提出したのはいい物の、部員が足らずに突き返されてしまった。

正直、部活だけなら、真面目な部活動をするつもりはなく、フブキの置けなくなってきたグッズ類などを置き場所として使いたいというだけの、ペーパー部だから、名前だ

け借りる事が出来れば問題は無い。

しかし、申請した以上は、週に最低1度は何かしらの活動をせねばならず、名前を借りた相手もそこに来るかもしれない。その際、何かの拍子に自分やミオの正体がばれる恐れもある。そう考えると、やはり人員はある程度選別しなければならぬ。

ならないのだが、既に部屋として使うつもりだった空き教室を私物化し始めている以上、早めに人員は決めなければならぬ。

申請から暫く。二進も三進も行かなくなってきたフブキは、遂にミオの占いに頼る事に決め、頼み込み始めたのは30分ほど前。元々私的理由に勝手に学校設備を使う事に反対していたミオに占って貰う事に難儀したが、そこは何とか宥めすかし、占わせた。

そして現在。フブキの眼下。テーブルの上に、タロットカードが置かれていく。

占い自体は何度か見ているが、未だにタロットカードの良し悪しは分からず。そもそも、タロット占い自体、カードこそ同じだが、カードの切り方や置き方に決まりはなく、どのように置いて、どう見て、どう解釈するのは占い師次第であるから、フブキには現状がいい結果なのかどうかも分からずモヤモヤが続く。

「……………」

「……………」

今度のフブキの呼びかけにはミオは何も返さない。集中しているようだ。

最終的に枚数にして、4枚。カードは置かれる。それぞれが何で、どのような意味を持つのか。それらをどう解釈するのか。

「まずは」

結論づいたらしく、ミオが口を開く。

「これがこれから。未来を示すカード。戦車の逆位置。意味は混乱、暴走。単純に思い通りにはいかなくて思っているよ。今のままだと、新しい子は見つからず、部室は没収だね」

「……まあ、そんな感じではあるよね」

だからこそ、ミオに頼った。

「この未来を回避出来るのかどうか。これについては、このカード。正義の正位置。今回の意味なら合理とか客観的が近いかな。自分の事しか考えずに突き進むんじゃないで、色々な意見を取り入れて、バランスを取った方がいい」

「今、ミオに相談しているみたいに？」

「うん。勿論、私だけじゃない方がいいけど」

相談できる対象が少ない事は分かっているのだろう。ミオの言葉の後半は、尻すぼみになっていった。

「最後のカードは、どういう子が狙い目なのか。出たのは死神の正位置と魔術師の正位

置

「……魔術師は分からないけど、死神はあまりいいカードじゃなさそう」

「それでもないんじゃない？　死神のカードは、色々な事の終わりを示すカード。その先が無いカードとも言える。その人にとって、それが望むべきものか望んでいないものかはさておき、やる事が無いなら、フブキのわがままも聞いてくれるかもよ？」

「……やっぱりいい感じはしないんだけど」

それでは、まるで弱みに付け込むようではないか。

自らの益の為に利用しようとしていることは否定出来ない。だからこそ、通せる仁義は通しておきたい。

そう思うフブキの考えを、ミオもきちんと理解しているようで、「まあね」と肯定しながら、しかし「でも」と言葉を続ける。

「魔術師のカードの正位置は創造とか自信って意味だから、何かを始めようとしているともとれる。死神と合わせて解釈すれば、何かが終わるから、何かを始めようとしている子かもしれない。勿論、その子が始めようとしている事が、フブキの望む物かは知らないけれど、少なくとも弱みに付け込むとは少し違うんじゃない？」

「……まあ、確かに？」

「因みに、魔術師には男性を意味する場合もあるから、男子のがいいかもね」

「……うーん」

友人に男子はいるが、余り積極的に絡んだことは無い。部の声かけも、そういうえば女子ばかりだった。

とはいえ、部員を引き入れなければ、部室を明け渡さなければならぬのも事実。知り合いに居たかなと、一応目算立てながら、フブキは立ち上がる。

「ありがとう、ミオ。ちよつと考えてみるよ。じゃあ、お休み」

「うん。お休み、フブキ」

そのまま、フブキが寝室へと消える。

それを見たミオは、自分も寝るかと思い、カードを片付けようとして。気まぐれにもう一つ、追加で3人目について占ってみる事にした。

今の所、何かが終わり、始めようとしている男子。

そして出たカードは、隠者の逆位置。

正逆問わず、意味は孤立。しかし正位置が知識や思慮をもって、心の充足を持った孤高を示すなら、逆位置は心の壁をもって、周囲を近づけない孤独を示す。

「そもそも入部させるどころか、話すのも大変そうだね」

他人事のようにそう言いながら、ミオはカードを片付けた。

現在。

絶句する白上先輩を前に、俺はスマホを取り戻すことを試みる。

しかし、手が届く前にスマホは持ち上げられ、取り戻すことは叶わなかった。

「……あの、そろそろ返して貰えませんか？」

声をかけるが、俺のスマホはテーブルの対岸。白上先輩の側に置かれてしまい、手を伸ばしても届かなくなった。

「これみて、どう思う？」

代わりとばかりに、自分のスマホを取り出す白上先輩。何やら操作をしたのち、言葉とともに、画面を俺の方へと見せてくる。

背景の画像は白上先輩と大神先輩のツーショット写真で、並んでいるアプリのアイコンは自分の倍以上。気持ち、アイコンは人の顔がアップになっている物が多い。

どうと言われても……、思いつかない。急にスマホの画面を見せられて、気の利いた言葉など出て来よう筈もない。

「……えっと、カラフルですね」

やがて、口をついたのは、そんな言葉であった。それ以上の感想が思い浮かばなかったともいえる。

「カラフル度で言えば、君のスマホの画面の方がカラフルだけだね」

「……確かに」

黄色を基調にしながら、様々な色のコントラストで成り立つその画面は、デフォルトの壁紙ながら確かにきれいだし、カラフルだ。

「えつと……じゃあ、そんなにアプリ、使いますか？」

次に目に留まったのは、大量のアプリ。

良く見れば、画面下部にアプリと関係ない丸が5つ並んでいて、そのうちの1つが他の物よりも一回り大きくなっていた。その丸の意味が、画面の数という事は流石に知っている。

つまり、あの大量にアプリが並んでいる画面が、最大で後3つか4つあるらしい。元々入っているアプリが画面的に1枚と半分程度だから、最低でも倍以上の数のアプリを後から入れているという事だ。信じられない。何に使うんだ。俺なんて、元々入っている物すら多すぎるといふのに。

アプリの用途について、白上先輩に尋ねる。すると、

「ゲームのアプリが殆どだから、使うっていうよりはやるっていう方が正しいかな」と、返ってきた。再度、耳を疑う。

「……え？ 全部やっているんですか？」

パツッと勘ぐっただけでも、両手足の指で数えきれないくらいアプリがあると思う

が。

「ものによつては、デイリーをこなすだけで、がつつりアクティブに動いていないやつもあるけど。全部最低1回は毎日起動するし、ストーリーは読んで、イベントもこなしているよ」

「……良く分からないですけど、凄いですね」

「どれくらいの間をにかけているのだろうか。俺が家で何もしていない時間はずっととか？ それで足りうるのか甚だ疑問ではあるが、それ以外に思いつかない。」

「後は無料の漫画アプリなんかも入っているかな」

「……漫画ならそちらに沢山並んでいますけど」

「紙の媒体だと何時でも読めるわけじゃないし、アプリ限定の作品とかもあるから」

「でも、ゲームをしているのでは」

「そうだよ？ 漫画も読むし、ゲームもやっているし」

「……」

だが、それだと。

「時間、足りるんですか？ さつき一瞬見ただけでも、ゲームっぽいアプリ、たくさんありますけど」

「あるよっ！」

「……ゲームやっていたら、漫画読めなくないませんか？」

「漫画読みながらも出来るゲームあるし」

「それじゃあもう、漫画を読んでいるのか、それともゲームをしているのか、分からないんじゃない？」

「漫画も読んでいるし、ゲームもしているよ？ あと、アニメも見ているし、絵を描いた

りとかも」

「……はあ」

なんかもう、そんな生返事しか出来ない。

この感情が、感心なのか。それとも呆れなのか。いまいち判断のつかぬまま、思ったことが口から出る。

「なんか、凄いですね」

「そう？ 特別なことをしているつもりは無いけど」

「でも、色々していますし」

「それはそうだけど」

うーん、と白上先輩は首を傾げる。言う通り、特別なことをしている自覚は無いのだろう。

「私は……楽しいし、好きだからやっているだけだからな」

「強制されているわけじゃないと?」

聞き返した俺の言葉に、白上先輩はきよんとする。

「それはそうだよ。やりたくない事は言わずもがな。やりたい事だって、気乗りしない時にやれって言われたら、嫌でしょ?」

「確かに。たまにテレビに見入っている時に、洗濯機が洗濯終了のブザーを鳴らしてくるのは嫌ですよね」

「昼下がりの主婦みたいな感想言うじゃん」

「あー、確かにー」

「私のほうが少数派だと?!」

大神先輩からの賛同を得ると、白上先輩が酷く驚いて見せた。正直、俺も驚いた。

「大神先輩って、自分で洗濯しているんですか?」

「そうだよー。私とフブキの分。そういう君も?」

「両親が出張というか転勤しているから、自分一人暮らしなんです。なので、自分の分だけですけど」

「そうなんだ。……じゃあ、あんまりフブキの話は参考にならないかもしれないね」

「……そうみたいです」

「待つて。今のやり取りのどこに納得される要素があったの?」

「フブキ、何か言った？」

「……いえ、何でもありません」

しゅんと、小さくなる白上先輩。落ち込むさまには、自分に非は無いとはいえ、少し申し訳なさを感じる。

何とか持ち上げねばと思い、俺は話を戻す。実際、白上先輩のバイタリテイは凄まじい。今の俺が、白上先輩と同じだけの時間を手に入れたところで、何もしない時間が増えるだけだ。

白上先輩の自分の好きな事、やりたい事をやるその姿は、俺が大量兼部の末に求めた姿に近い。

……もしかして天音先輩は、これを見越して、白上先輩達が部室にしたいと言っていた部屋に、荷物を運ばせたのだろうか、そんな事を思いながら、俺は白上先輩に尋ねてみる。

「白上先輩」

「何？」

「どうしたら、そんなに色々と、好きになれるんでしょうか？」

「うえ？」

予想外の質問だったのか、変な声を出した白上先輩。

それからジツつと俺を見て、茶化しているわけではないと悟ったのか、んー、と僅かに唸る。

「……別に好きにならなきゃーって思ったことは無いかな。今までだって、プレイをやめたゲームとか、見るのを辞めたアニメに漫画、いっぱいあるから」

此処まで言つて、白上先輩は何か思いついたように、表情を明るくした。

そして見せるのは、したり顔。

「好きっていうのはね、なるんじゃなくて、なっている物なんだよ」
意味が分からなかった。

エピソード・オブ・すこん部 e p. 3 入部

首を傾げる俺をよそに、したり顔の白上先輩の言葉は続く。

「恋とか沼とかと同じだよ」

「何で恋と沼が同列で語られたのか分からないですけど、好きにはなるものでは？」

「なろうとしてなるものじゃない、って事かな」

「……」

禅問答の類だろうか。個人的には、好きにはなる物で、そのための何かしらは必要だ
と思う。

一方、沼は良く分からないが、恋は落ちる物だと聞いた。どういう感覚なのかは知ら
ないが、少なくともなるのとは違うとは思う。

分からない。疑問が増した。自分は、一生この調子じゃなからうか。

そんな事を思う俺に助け舟を出したのは、大神先輩だった。

「難しく考えなくていいと思うよ。フブキもそうだろうし」

「そうそう……うん？　ねえ、ミオ。それだと、普段から私が何も考えていないみたい
じゃない？」

「そうでしょ？」

「……確かに」

「ええ」

認めるのか。

「フブキもそうだし、私もそうだけど。やってみて、それが続いたんだったら、それは好きになったってことだと思っかな」

「……でも、それは」

自分がこの数ヶ月で失敗した道だ。

ならやはり自分には無理なのかと、気落ちする。

「思い出したんだけど、君って確か、色んな部活を冷かして、退部させられた子じゃない？」

その言葉に、思わず肩が跳ねた。

続き、白上先輩が「あ」と声を上げる。

「聞いたことある。確か今は、生徒会室で罰清掃させられているって。君の事だったの？」

「……ええ、まあ」

否定せず、素直に頷く。話が少し変わっているが、身から出た錆。受け止めるしかない。

続く言葉は、叱責か、拒絶か。静かに待つ。

やがて、白上先輩は静かに口を開いた。

「……なんで？」

「はい？」

「いや、なんで色々な部活を冷かしていたのかなって。話していた感じ、そんな事をしように無いというか。無駄な事、しないでしょ？ スマホは必要最低限使えて充分みたいだし、オタク文化も興味が無いっていうのはあるだろうけど、幾ら何でも知らなさすぎだし。あの漫画とか、この間興行収入が凄くてニュースにもなったし、あっちの漫画は実写映画が大ヒットしていたんだけど」

そう言われ改めて確認するが、やはり覚えはない。

「知らない？」

「知りません」

「そうだと思った」

白上先輩は、そう言って笑顔を見せる。

「それに、人に気を使ってあげる事も出来る人だったし」

「そんな機会、ありました？」

「生徒会室前で都合のいい日教えてくれたじゃない。それに、誰にも話してないよ」

「……ありがとうございます」

「いえ」

一先ず生徒会長の握力が校内に知れ渡っている事は無いらしい。

あの後、握力50kgつてどの程度何だろうと思つて調べたが、成人男性の平均握力のピークを越えているようだった。あの生徒会長、日夜握力を鍛えているか、実は女性ではなく男性なのかもしれない。

「そんな感じだから、君がわざわざ冷やかす為だけに入部したとは考えづらいかなつて。例えば誰かに頼まれたとか。部員の水増しの為に」

「告白ですか？」

「……なんでもかなつて考えたら、それが真つ先に浮かんだの！」

「否定してください」

水増しは画策しているらしい。俺に創部届を出してきた辺り、あまり進捗は良くなさそうだ。

んん、と誤魔化す様に咳ばらいをする白上先輩。改めてといった様子で、口を開いた。

「それでどうなの？」

「違います。自分の意志で入部して、辞めました」

当たり前だろうと言わんばかりの顔をする白上先輩。

残念ながら違うので否定すると、白上先輩は驚きの表情を浮かべた。

「…………え？ 本当に冷やかして入ったの？」

「そんなつもりは無かったんですけど、結果的にそうになりました」

「…………ふーん」

じゃあ、と、白上先輩。

「何で、色々な部活に入ったの？」

そしてこの話に戻ってきた。

言えば言い訳になりそうで、その事に抵抗を覚えながらも、まっすぐとこちらを見る白上先輩を前に？や誤魔化しをいうことは憚られ、素直に話す。

「自分、こんな感じですから。入ったら、興味を持つかなと」

俺の言葉に、白上先輩がきよんとした。

暫しの間。

そして、「…………あー」と白上先輩。

「成程ね？」

「分かっていますか？」

「いや、うん。分かるよ？　びっくりはしたけど。……なんていうか、随分行動力があるね？　普通、最低限興味があるから入部すると思うけど」

「そうですか？　テレビで見たなんかのプロの人が、始めた時は興味無くてー、みたいな事を言っていたんで、そういうものなのかと」

「それはもう特別なパターンで、初心者で参考にするものではないと思うかな。大体は、何かの拍子に見たり聞いたりして、興味を持って、調べたり体験したりするのが普通だと思うよ」

「成程」

まるで啓示を受けたような感覚。思わず両手を合わせ、目を閉じ、拝む。

「重っ!!　辞めて！　私の感覚語っただけだからね!!」

白上先輩の声。辞めてというので、合掌を辞め、目を開けた。

拝むのを辞めた俺に、白上先輩が安堵した様子を見せる。

そんな白上先輩へ、言葉をかける。

「人生の大先輩として仰がせてください」

「だから重い!」

「ちなみに、今この紙のここの部分にサインすると、今後もこのセミナー受けられるよ」

「書きます」

「ミオ!!」

さつと、横から紙が差し出された。

大神先輩に言われるがまま、その紙に自分の名前を書く。

「どうぞで」

「ありがと」

紙はそのまま、再び大神先輩の手の中へ。

「これで3人揃ったね」

「いや、なんか嫌だよ!! この流れで入られるの、なんか洗脳したみたいじゃん!!」

「あながち否定出来ないよ?」

「これはほら! 卵から孵ったひな鳥が、最初に見たものを親だと思ってしまうんだよ
!」

「刷り込みは洗脳に近いかと」

「君が言うの!!」

「っい。」

「ほら、早く創部届、出しに行こう? 確か創部メンバー全員でいかないといけないんだ

よね?」

「はい。名前だけ貸している可能性もあるので。念の為らしいです」

「凄く乗り気だ！　いいよ、分かった！　こうなったら、君もありとあらゆる沼に落とすからね！」

「……あの、殺したいほど嫌なら、辞めますけど」

「ごめん、物理的な話じゃなくて」

物理的じゃない沼に落とすってどういう意味なのだろうか。

「行くよー」

大神先輩から声がかかり、俺は首を傾げながら立ち上がる。

白上先輩も立ち上がりながら、「えっとね」と前置きをして、歩きながら沼という言葉の説明を始めた。

初めて聞く意味に、色々あるんだなと感心しながら、大神先輩に次いで、部室を出る。最後に白上先輩が廊下に出て、扉を閉めるのを確認してから、3人揃い、生徒会室へ向けて歩き出した。

がたりという物音が響き、驚いて起き上がる。

周囲を見れば、やってしまったという表情のフブキ先輩と、目が合った。

「あー……ごめんね、起こしちゃって」

「……いえ。俺の方こそ、部室で寝てすみません」

背筋を伸ばし、体を解して。

フブキ先輩の近くを見れば、テーブルの上には積まれた漫画が置かれていた。

そのタイトルは、そういえば始めてこの部室に来た時に、教わったものである。

「確か、去年映画化したんでしたっけ？ それ」

「そうそう。なんか久しぶりに読みたくなっちゃって」

「……終わったら貸してください」

「あれ？ 読んだことなかったっけ？」

「ありますけど、久しぶりに読みたくなりました」

「じゃあ、先に読む？」

「いえ。ゲームでもして待っていますから。ごゆっくり」

返しつつ、スマホを取り出す。

指紋でロックを外し、最低限整理されたアプリの中から、ゲームを起動した。

タップと操作していると視線を感じる。顔を上げれば、フブキ先輩の目が漫画ではなく俺を向いていた。

「何でしょうか？」

「ううん。すっかりオタクに寄って来たなと思って」

「……おかげさまで沼に落とされました」

「え？ いやいや。まだ、足裏を水面につけたり離したりして、ちやぶちやぶ遊んでる程度だよ？」

「業が深すぎる」

我ながらかなり染まってきたかと思っていたのだが。

オタク怖い。これ以上は恐ろしすぎるので、これからもその程度で居たい。

「約束したから、ありとあらゆる沼に沈ませるつもりだよ。覚悟していてね」

「……殺人予告はちよつと」

「ちーがーいーまーすー」

言い終わると、どちらからともなく、噴き出した。

笑いあつてっていると、がらりと戸が開き、ミオ先輩が部室に現れる。

「お疲れー。どうしたの？ 扉の外まで、笑い声が聞こえていたけど」

「お疲れ様です。何でもないですよ、ミオ先輩」

「お疲れミオ。そうそう、何でもないの。ちよつと思ひ出し笑い」

「えー。なにそれ、気になるじゃん」

教えてよーと言うミオ先輩が、部室の戸を閉め、今日も活動が始まる。

とはいえ、特にやることは無い。基本的にはフブキ先輩のオタ活を見守るだけのペーパー同好会でしかなく、今日は多分漫画を読んで、飽きたらゲームをする程度だろう。そういえば、そろそろ、学園祭の内容、決めないとなーと思いつながら、俺はスマホをタツプした。

騎士団長との一日

「もう酷いよね——だって——私のさ——誕生日——」

「食べ終わってからでいいですよ」

がつつと、丼物でも食べているのかという勢いで、ノエルさんはパフェを食べていた。

只のパフェではない。俺とスバルと一緒に頼み、インチキして食べ切った巨大パフェである。

胸焼しそうってこういう事なんだなと思いつながら、俺はカフェオレをすすり、舌先に感じたミルクの甘さに、俺は眉をひそめた。

いや、カフェオレなのだから甘くて当然だし、頼んだのは俺なのだけだ。スバルが旨そうにしていたから、試してみようかと思っただが、失敗だった。

まさか、ノエルさんに注文を頼んで、お手洗いに立っている隙に、巨大パフェを頼まれ、挙句一人で食べ始めるとは、流石に思わなかったのだ。

——この人、さつき滅茶苦茶牛丼食べて無かったつけ。

衰えぬ食事速度を前に、うーんと、俺は少し前の事を思い返した。

起きて、窓の外を見たら、天気が良かった。それだけで、出かける用事は無かったが、外に出かけたくなかった。

用事無いかなど思いながら一先ず午前中は家の事。その後昼食の準備をしたら冷蔵庫の中身が心許なくなつて、これ幸いと、出掛けることに決めた。補充のための買い物から、ぼんやり散歩して、本屋に寄つて新しい小説でも買つて、その後は適当な喫茶店で珈琲でも飲もうかな小説でも読もうかなと、そんな事を思い、街へ出た。

暫く歩き、いつもの駅前。大体揃うから、つい此処に来てしまう。

駅前広場の一角では、わためが何時ものように歌っている。こちらに気が付き、嬉しそうにした彼女に手を振つてからは、少し離れた場所で、この後の計画を練る。

さて、どこに行こうか。その辺をぶらぶらするか、やや遠いがホールの方に行つて森林浴でもしようか。わための歌を聴いていると、いつそ、わためが歌を終えるまで、此処にいてもいい気はしてきた。

思いつかなければそれでもいいかなと、ぼんやり空を仰いでいると、ざわざわと喧騒。またわためが怒られたのかと思つたが、声の方が逆だ。何だろうとそちらに視線をやると、人ばかり。

何かの撮影でもしているのか。それにしても、撮影車両のような物は見当たらない。

普段なら遠巻きに見て終わるのだが、折角だし見てみようかと、俺は立ち上がり、その人だかりに近づいた。

人だかりは、どうも牛丼チェーンを囲んでいるらしい。何度か跳ねて中を見ると、覚えのある銀髪が見え、少々強引に人垣を割って、扉の前へ。

ガラスの向こう。警察に話を聞かれているのは、ノエルさん。必死に弁明している様子だが、こちらも見覚えのある、警察官の様子がおかしい。顔をしかめ、困った様子。覚えのある展開に、俺は開閉ボタンを押して扉の中へ入った。視線がこつちに向く。

「あー！ お願い、助けてー！」

わーんと、こちらに手を伸ばすノエルさん。

その態度に、知り合いだと思われたのだろう。警察官が、こつちに来る。俺の事を覚えてはいるらしく、またこいつかと言わんばかりの顔をされた。

「……知り合い？」

「……ええ、まあ。あの、何か？」

「この人が牛丼ドカ食いしたのに、お金払わないって店から通報があつてね。話も出来ないし、どうしようかって、言っていた所」

「……」

ちらりと、ノエルさんに視線を移す。

「お財布忘れちゃっただけなの！ でも言葉が通じないから出るにすられなくて！」

「……あー、お財布忘れたみたいで。とりあえず立て替えるので、それで勘弁して貰えませんか？」

「——だ、そうですけど。どうしますか？」

「払ってくれるならいいよ」

「すみません」

頭を下げる。はいこれと、店員さんから差し出される伝票。何故か、合計金額の所に5桁の数字。牛丼チエーンの、お一人様の料金とは思えない。

「……何かの間違い？」

「間違えじゃないよ」

「……」

視線をノエルさんに向ければ、逸らされる。間違いないらしい。

牛丼チエーンでこれだけ豪遊して、いつまでも居座っていれば、そりや不審がられそうだなと、そんな事を思いながら、財布を取り出す。

入ってきて良かったかと思いつつ、お札を取り出す。

「これで」

「……確かに。次は気を付けるように言ってね」

「はい」

レシートと釣銭をもらい、財布に入れる。

「それでは。自分はこれで」

「ご苦勞様でした」

「ご苦勞様です」

警察が帰っていくと、店の前の人だかりも徐々に消え、数名は店内に入ってきた。

「……もう大丈夫?」

「大丈夫です」

答えると、ホツつと、安心したように胸を撫で下ろすノエルさん。

席から立ち上がったのを見て、俺はノエルさんと共に、歩き出す。

人だかりはすっかり消えていた。まだちらちらとこちらに視線を向ける者は居たが、

その程度だ。

「本当にありがとう。お金はちゃんと返すからね」

「お願いします」

「うん……あれ?」

「……」
「ここで、ノエルさんが不思議そうに首を傾げる。

「何で君の言葉が分かるの?」

「……………」

何故その事に疑問を抱くのだろうと思ったが。そういえば、言葉が通じなくて警察を呼ばれていたことを思い出す。

「ノエルさん、翻訳魔法はどうしたんですか？」

「あー…………ちよつとね。今、掛かってなくて」

「掛かってない？」

まあ、それなら確かに、周りの言葉が分からなくて当然と言った所だが。

…………それならなぜ。

「俺の言葉が分かるんですか？」

「いや、私が知りたいんだけど」

俺に掛かっている翻訳魔法はシオンが掛けてくれた物だから、それが影響しているのだろうか。

うーんと、首を傾げる俺に、「まあいいや」と言ったノエルさんは、俺の腕を掴む。

「ちよつと付き合って」

「へ？」

一体どこにと思う俺を他所に、ノエルさんはぐんぐんと歩き始める。

余りの力に、逆らえない。大人しく引きずられ——冒頭に至る。

——足りはする。いざとなれば卸そう。

テーブルの下で、財布の中身を確認する。

先程牛丼屋で払ったお金は、財布に入れていた額の約半分。今、ノエルさんがドカ食いしていた巨大パフェも、パフェとしてはお高い金額だが、その他注文も合わせ、財布の中身で事足りた。

安心しながら、俺は財布をポケットに戻しながら、ノエルさんの方へ視線を向けた。

パフェをすっかり食べ切り、コーヒーを飲んでいるノエルさん。食事中から此処まで、ちよつと怒った様子はそのままだ。

というか。

「ノエルさん、誕生日だったんですね」

「そうなの！　なのに、フレアもきんつぼも、私の事置いて出かけちゃうし、書き置きが無いから、どこに行つたのかも分からないし！」

「成程……」

誕生日を祝われた事が無い俺には未知の感覚だ。1つ歳を重ねるだけの認識なのだ。けど。

まあ、フブキ先輩とかるしあとか、祝ったら喜ばれたから、祝われたら嬉しいんだろ

うなという事は何となく分かる。

「でも、誤解じゃないんですか？ フレアさん、そういう所はそつなくこなしそうなイメージありますけど」

「いや。あれは絶対忘れてるよ。間違いないね」

「……はあ」

オタク知識だと、こういう時は、間違いないと言っている側が間違えている印象があるので、とりあえずさらに聞く。

「因みにお誕生日の日にちは？」

「11月24日！」

確かに今日だ。

「去年はどうしたんですか？」

「ちゃんと祝ってもらった！」

「……なら、忘れてるってことは無いんじゃないや？」

「……元の世界での話し合いとかで、ちよつとごたごたしてるから」

「なら、仕方ないのでは」

「私はちゃんとフレアの誕生日を覚えていたし、祝ったもん」

「……」

何だろう、カップルの痴話喧嘩に巻き込まれている感覚がしてきた。

とりあえず落ち着かせて、フレアさんと話し合わせる方向にしようと思い、口を開こうとして。

『もしもし』

「!!」

ビクツつと、肩が跳ねた。

「どうしたの?」

「……あ、いえ。虫がいて吃驚しました」

「どい!!」

きよろきよろするノエルさんへ、「……どこか行きました」と返す俺の脳内に、

『驚かせてゴメンね』

声が響く。落ち着いてみれば、渦中のフレアさんであった。

『今、念話で話しかけているの。君も喋ってくれたら伝わるから、ちよつとノエルの前から移動してくれる?』

「……ノエルさん。ちよつとお手洗いに行つてきますね」

「うん、分かった。……何か頼んでもいい?」

「立て替えておきますけど、さっきのは勘弁してください」

「流石に無理だよー」

本当だろうかと思ひながら、俺は席を立ち、トイレへと入った。

「もしもし」と言えば、『聞こえているよ』とフレアさんの声が返ってくる。

『なんかゴメンね。話は一応聞いたよ』

どうやって聞いたんだろう。きんつばの魔法だろうか。

俺の声も聞こえているみたいだし、そんな感じの魔法があるのかもしれない。

「フレアさん、ノエルさんの誕生日、忘れていたんですか?」

『いや。忘れていたわけじゃないんだけど……すれ違いが』

「すれ違い?」

『いや。実は、正確には今日はノエルの誕生日じゃないの』

「はい?」

どういう意味か。

『私達の世界とこつちの世界の暦って少しずれているから、ノエルの誕生日って、こつちの暦で言うると本当はもう何日か先なんだよ』

「あー」

時差みたいなものか。

『こつちに来て数年経つけど、いつもこの時期は向こうに戻っていたから、こつちでノエ

ルの誕生日を祝うのは初めてなんだ。それで私は、向こうの曆に合わせて祝えばいいかなと思っていて、今日の事を気にしてなかったんだよね」

「成程」

『家に帰ったらノエちゃんいないし、探しに出たら君とお茶しているし、ノエちゃんは怒っているしって感じです。本当にごめんなさい』

確かにすれ違っていたらしい。

それなら謝って終わるかと思つたが、ノエルさんが素直に話を聞いてくれるか。

「……フレアさん。物は相談なんですけど——」

「すいません。戻りました」

「おかえり。大丈夫？」

「はい」

ちよつと長くなつてしまい、席に戻るとノエルさんに心配された。

返事をしながら確認すると、パフェの容器が一つ増えていた。言つた通り、巨大パフェにはしなかつたようだが、それでも結構な量がある。

さつき見たメニュー表の金額を思い出しながら、席につくと、俺はノエルさんに切り出した。

「ノエルさん。折角だからこの後、付き合って貰えませんか？」

「付き合う？」

「お誕生日なんですよね？ 折角ですから、何かプレゼントさせて下さい」

「え？ 悪いよ。ただでさえ迷惑かけているのに」

申し訳なさそうにするノエルさんに、問う。

「家に帰って、フレアさんと顔合わせるの、気まずいのでは？」

「うぐ」

「それに、外で暇を潰そうにも、俺が居ないと碌に動けないのでは？」

「うぐぐ」

効果があるようなので、畳みかける。

「立て替えている分はきちんといただくので、そこは気にしないで下さい。私の気が晴れるまで付き合え位、言って貰って大丈夫ですよ。誕生日なんですから」

「……じゃあ、お願いします」

「はい」

少し難しい顔をしながらも、そう言ってきたノエルさんへ、俺は頷き返し。お会計を済ませ、俺達は外へ出た。

正直、あまり遊ぶ施設には詳しくなく、ノエルさんに普段どんな事をしているのか聞

いてみる。

「ドラゴン探しと調査位。正直報告送れば他は休みみたいな感じではあるけど、お金はあんまり無いから、あんまり遊んだりはしないかな」

「なら気になる事とか」

「気になる事かー」

歩きながら、うーん、とあちこちきよろきよろと見渡す。

こちらに来て数年経っているし、やった事が無い事は、あまり無いのではないだろうかと思いつながら、ノエルさんの返事を待っていると。

「あそことか」

ノエルさんが指さす。視線を向ければ、そこはレジャー施設であつた。階によって、スポーツが出来たり、カラオケが出来たりする、総合施設である。

俺も詳しくないが、一応すこん部でカラオケに行く時は大体あそこだから、出来る事くらいは知っている。

「いいですね。じゃあ、あそこに行きましょうか」

ノエルさんと共に入り、受付を済ませると、フロア案内を眺める。

屋上にはフットサルのコート。5階にはテニスのコートやバツティングコーナーなどのスペースを使う運動コーナー。

4階にローラーブレードやセグウェイ、卓球など小スペースの運動コーナー。3階はボーリングやダーツ、ビリヤードが続き、2階にカラオケや漫画などの読める休憩スペースと続いていた。

改めてこうして見ると、色々出来るなど感心する。とりあえずフリータイムで受付したので、全フロアで遊べるが。

「どうしますか？」

「うーん……とりあえず、上から色々やってみたいかな」

「え？ 大丈夫ですか？」

「何が？」

「いえ。靴はレンタルありますけど、スカートだから」

いつもの癖で、カラオケだけのつもりだった。

運動系だと、見えてしまうのではと思ったのだが、「大丈夫」とノエルさん。

「この下にちゃんとスパッツ穿いているから」

「あ、そうなんですネ」

それならと、受付で靴を借り、ロッカーへ荷物を預け、俺とノエルさんは5階へ向かう。

一通り見て回る。そんな中で、カップルだろうか。テニスをやっている男女が目

入った。キャツキヤとラリーをしていた2人は、やがて女性の方が疲れたーと言ったのをきつかけに、コートを後にし、テニスコートが開いた。

丁度いいので、そのままテニスコートに入る。

「えつと、これでボールを打てばいいの？」

ラケットを手に取りながら尋ねてくるノエルさんに、「そうです」と返す。

ノエルさんは、ボールを手に取り具合を確かめると、よーしと意気込んだ。

その間に俺は対面のコートへ移動し、そちら側にあつたラケットを手取る。一応、ホロ学入学時にテニス部にも入り、少しは教わつたから、まあ軽いラリー位なら出来るかと思ひながらノエルさんの方を向く。

「打つていいですよ」

「分かつたー」

そう言つたノエルさんが、ボールを真上に投げた。ラケットは引かれ、重心が下がる。あれ、と疑問に思う俺を他所に、ボールが空中で止まり、落ちるか否やという頃合い。ノエルさんの身体が跳ねた。ラケットが振られ、ボールを捉える。

「えーい！」

可愛らしい声と共に、堂に入った姿勢でサーブが放たれた。

俺の眼でもつて、ぎりぎり軌道を捉える速度。数歩移動。部活中にこなしていた素振

りの仕方を思い出しながら、右足を引いて、フォアハンドでラケットを振る。

ヘッドにボールが当たる。直後、ラケットを弾き飛ばされそうになり、思わず魔力で体を強化してしまい、ボールを返した。

真つ直ぐ返つたボールが、ノエルさんのコートで跳ねる。その先に、フォアハンドにラケットを振るノエルさん。

ボールとヘッドがぶつかり、難なくノエルさんはラケットを振り切る。

クロスボール。走り追い付き、バックハンド。またもラケットが弾かれそうになり、強化。振る。

同じくクロス。ノエルさんのいる方へ、ボールが返り、ノエルさんは危なげなく、それを俺のコートへと返してきた。

幸い俺の傍。直ぐに追いつき、ボールを返す。想像通り、素のパワーではどうにも出来なさそうだったので、体は強化したままだ。

——思っていたのと違う！

さっきのカップルではないが、もうちよつとこう、和気藹々とした物を想像していたのだが。

ノエルさんの球威は尋常でなく、息つく暇もない。しかも、やはり初心者なのかスライスやロブが無く、フラットストロークの全力スイングのみ。そのせいでスピんがかか

ることは殆ど無く、素直に跳ねるから、此処に来るだろうと思つた場所にちやんと来る為、魔力で強化していれば一応返せてしまう。

勿論、態と失敗する、態と場外へ飛ばすといったことをすれば、このラリーも終幕を迎えるのだが。

ホストとして、楽しそうにテニスをするノエルさんを裏切るわけにはいかない。

「おっしや、ノーいー！」

意気込むと同時に、ノエルさんがラケットを振る。ボールとヘッドが当たり、返つてきた。それを返す。

遊び無しのラリーが続く。必要な魔力の量を把握し、テニスの才能あつたんだなど、そんなどうでもいいことを考える余裕すら出てきた矢先。

ノエルさんが、やつちやつたという顔をしたのが見えた。何事かと思ひながらも追いつき、ラケットを振り、ボールを捉える。圧された。球威が上がっている。片手持ちを両手に変える。まだ重い、が。

「らあー！」

何とか振る。ボールがノエルさんのコートへ。

ノエルさんの顔に驚きが現れ、そして笑う。にこにことした笑顔ではない、悪戯をする時のような笑い。

やらかしたと悟る。対面のコートでノエルさんがラケットを構える。片手ではなく、両手持ち。

「てーいー！」

野球もかくやとばかりの全力スイング。

俺と違い、一切の抵抗が無かったのだろう。ブンと、ラケットは振られた。

ボールが向きを変え、俺の方へと飛んでくる。ネット上を抜け、俺のコートに落ちることなく、真つ直ぐ。

——……いや無理！

打ち返す選択肢は無く、流石に屈んで避ける。ボールはそのまま頭上を抜けていった。

「うおっ!!」

背後から声。屈んだ状態で振り返ると、周囲とテニスコートを区切るネットに、ボールが突き刺さっていた。

声の主は、どうやら俺達を観察していた男性の物だったらしい。男性は尻もちをついていた。ボールは男性が立っていたら顔のあったであろう位置にあるから、多分、そういう事。

「すいません、大丈夫ですか!!」

「あ、ああ。こっちもじろじろ見ていて済まない」

ネットからボールを外しつつ、男性に問う。あははとから笑いを浮かべた男性は、そのまま逃げるように何処かへ去っていった。

何だろうかと思いつつも、何事も無かったようので、安心する。ボールをバウンドさせながら、コートへ戻った。

「大丈夫そうでしたけど、もう少し抑えてください」

「分かったー」

ぶんぶんとラケットを振るノエルさん。これで大丈夫だろうと思いつつ、サーブを放った。

暫くして。

肩で息をする俺と、少し息を乱れた程度のノエルさんが、テニスコートを後にした。

そのまま自販機に向かい、スポーツドリンクを買って、呷る。

「大丈夫？」

「……………余裕つすよ。ただ、ちよつと運動系から離れませんか」

「そうだね」

俺の限界ぶりが分かったのか、自販機の前のベンチから動かない俺の隣に座ったノエ

ルさん。

「私も貰っていい?」

「あ、すみません。新しいの買ってきます」

「それでいいよ」

「そうですか?」

それならと、三分の二程飲み干したスポーツドリンクのペットボトルをノエルさんに渡す。

ノエルさんが、そのまま残ったドリンクを全て飲み干した。ふうと、息を吐きながら、ノエルさんが濡れた唇を拭いながら、立ち上がった。空のボトルをゴミ箱へ捨てながら、その近くのフロア案内を見始める。

「このセグウェイって何?」

「えっと……良く分からないです」

セグウェイって何だろう。

「じゃあ、それにしましょうか」

体力も幾ばくか回復したので、俺は立ち上がり、ノエルさんと一緒に階段を下る。

フロアの隅にセグウェイ用のコートはあったが、行っている者はいない。

「とりあえず借りてみましょうか」

「うん」

4階の受付で、セグウェイとサポーターを借り、コートへ向かう。セグウェイは、タイヤのついた機械の板だった。重心移動で、動くらしい。

コート脇のベンチで、サポーターを付け、コートに入り、セグウェイに足を掛ける。「君はやったことある?」

「いえ。初めてですね」

どんなものなんだろうと思いつつながら、セグウェイに両足を載せた。

直後、セグウェイがぐるぐると動いた。バランスを取ろうにも、それ以上に回転するせいで、バランスが取れず、そのままこける。

「大丈夫?」

「……こんな感じですよ」

「気を付けるね」

言いながら、ノエルさんが立ち上がった。

同じようになると回って、俺と違いセグウェイを降りる。

「ちよつと難しいかも」

言いながら、ノエルさんは壁の手すりのある所までセグウェイを持っていき、そこに乗る。暫く動くが、勝手がつかめたのか、セグウェイが大人しくなった。

手すりを放し、暫くして、ノエルさんが滑り出した。最初は両手を広げてバランスを取っていたが、直ぐに安定し、すいすいと危なげなく滑っている。

「おー」

「君も滑りなよ。楽しいよ?」

「……」

そう言われ、再度乗ってみる。くるくるでん。

「どうしたら」

「ちよつと待って」

スイーツつと、ノエルさんが俺の前に来た。

「はい」

両手を差し出される。一瞬意味が分からなかったが、理解し、俺はその手を取りながら、セグウェイに乗った。

くるくると回りだす。そんな俺を、セグウェイに乗ったままのノエルさんが旨く支えて見せる。

「重心意識して。難しいなら、前のめりになるイメージでいいよ」

言われた通り、前のめりになる。すると、回転は止まったものの、前方へ進み始めた。

そのままノエルさんにぶつかりそうになる。しかし、それより早く、ノエルさんが後

ろに下がり始めた。

「上手上手」

「……」

ちよつと残念とか思つてない。

暫くそのまま、ノエルさんに手を引かれながら、セグウェイを練習する。

慣れてくると案外簡単で、返却時間になるころには、方向転換やバック走も出来るようにはなつた。

この技術が果たして今後活かされることは在るのだろうかと思ひながら、時間いっばいセグウェイを乗りこなし、返却。

そのころには、テニスの疲れはすっかり取れていた。

「次は何やります?」

「それじゃあ——」

ノエルさんに言われるまま、卓球やボウリング等、色々なスポーツをこなし。

一通り終えて、外に出た時には、既に日も暮れかけていた。

「もうすぐ夜だね」

「そうですね」

未だに連絡は来ない。終わつたら、呼ぶと言つていたのだが。

ちらりとノエルさんを見ると、ググツつと背伸びをしていた。その顔は満足そうで、気も晴れた様子。

帰ると言いかねない表情だ。これはまずい。

「じゃあ、次は何します?」

「うーん……いい時間だし、帰るよ」

「……」

ですよね、と言いつうになり、飲み込む。

「でも、まだノエルさんのプレゼント、買ってないですし」

「いいよ。充分楽しかったし。気も晴れたからさ」

「いやでも」

「ありがとうね」

「……」

もう、準備中と関係なしに連れ帰ろうかと思っていると、スマホが鳴った。

「あ、ちよつとごめんなさい」

スマホを取り出す。着信画面に、シオンの文字。

「もしもし? シオン、どうした?」

『私』

届いたのは、シオンではなくフレアさんの声だった。

『お待たせ、準備出来たよ』

「了解。直ぐ帰るよ」

一応、シオンやわためからを装い、敬語ではなくため口で返し。

そのまま、電話を切つて、ノエルさんを見る。

「ノエルさん、良かったら家でご飯食べませんか？」

「いや、悪いし。フレアも準備していると思うから」

「そのフレアさん、今、俺の家にいるみたいです。わためと駅前で会つて、お呼びされたつて」

「え？ そんな事」

不自然に、ノエルさんの言葉が途切れる。

「もしもし、フレア？」

そのまま虚空としゃべり始める。多分、念話だろう。大人しく待つ。

「——大丈夫なの？ ——うん、分かった。大丈夫、一緒にいるから。 ——分かった、

後でね、フレア」

ノエルさんの眼が、俺の方を向いた。

「じゃあ、ご相伴に預かります」

「はい。こつちですよ」

一緒に歩きだす。

施設を出た時は、すっきりした顔をしていたのだが、また怒りがぶり返したのか、ちよつとぷりぷりしていた。

「もう、何で勝手に決めるかな。わためちゃんがいいって言つたつて、君が家主なのにね」

「まあ、俺は基本的に来るもの拒まずなので」

「それでもだよ。大体、私の誕生日忘れて、わためちゃんと一緒なんて」

怒りの比重はそこが大きそうだった。

「そうですね」

「そもそもさー」

帰路を、悶々としているものを全て吐き出してやると言わんばかりのノエルさんの言葉を、程々に同意しながら進み。30分程で、家の前へ着いた。

鍵を開け、「ただいま」と少し大きめの声を出して合図を送つてから、ノエルさんを招き入れた。

「どうぞで」

「ありがとね」

靴を脱いだノエルさん。フレアさんの靴を見つけ、僅かにムツつとするのが見える。その気が晴れる事を願いながら、俺は玄関脇の階段へ足を掛ける。

「廊下の奥がリビングなんで、先に行っていて下さい。俺、部屋に荷物置いてきます」
「あ、うん。分かった」

ノエルさんが素直にリビングへ向かって歩き出す。俺は2階へ上がらず、こっそりノエルさんの様子を伺う。

リビングまでは直ぐに着いた。ノエルさんが、ドアノブに手をかけ、扉を開ける。直後、派手なクラッカーの音が響いた。

『お誕生日おめでとー!』

そんな言葉が、リビングから届いて来たのは、それから間もなくの事であった。

「サブライズって事にしませんか?」

『サブライズ?』

喫茶店での会話で、俺はフレアさんにそんな提案をした。

「誕生日を覚えていて、こっそり準備していたって事にしちゃうんです」

『成程……でも、それだとノエちゃん騙すみたいじゃない?』

「そうは言っても、このままだと、本来の誕生日の日にノエルさんを祝っても、微妙な感

じになりませんか？」

『それは……まあ、確かに』

ノエルさんが今日を誕生日だと思っっている以上、祝われると思っっていた日に祝われず、別の日に祝われるとなると、忘れていたくせにという思いがどうしても残り、ノエルさんも素直に喜べないだろうと思っただのだ。

「一旦、今日祝ってあげましょう。その後どうするのかは、フレアさんにお任せします」
『……うん、そうするよ。手伝って貰える？』

「勿論」

「——とまあ、こんな感じでした」

「もー！」

『本日の主役』と書かれたタスキを下げたノエルさんに、話せる範囲のネタばらしをする
と、やっぱりぶんすかど怒る。

ただその怒りは嬉しさの滲んだ、照れ隠し的な怒りだった。

「ごめんね、ノエちゃん」

「……いいけど、今度からはちゃんと書き置きしてから出かけてよね」

「それは、本当にごめん。ちよつとのつもりだった」

「お料理、持ってきたよー」

短時間で飾りつけしたとは思えぬくらい、しっかりと飾り付けされたリビングに、わためやシオンが料理を運んでくる。シオンと目が合えば、ジト目を向けられたので、苦笑しながらアイコンタクトで謝罪する。しっかりと手伝わってくれたらいいので、後でお礼をしなければならない。

「ケーキもあるからね！ シオンちゃんに聞いたの。こつちだと、誕生日と言えばケーキだって」

「ナイス、シオン。ろうそく立てます？」

「あ、ケーキ屋さんでも聞かれて一応貰って来たけど。なんでろうそく？」

「こつちだと、歳の数だけろうそくを立てて、吹き消す儀式があるんです」

「……ろうそく立てるの大変じゃない？」

「まあ、そんなしつかりしたものでもないですし、適当に5本とかでもいいと思いますよ」
そんな滅茶苦茶大きいケーキでもない。ノエルさんなら1人で食べきれそうなサイズだ。

長めのろうそく5本をケーキに立て、火をつけようとして。

「誕生日の歌とかあるんですか？」

ふとした疑問を抱き尋ねる。俺の言葉に、フレアさんは少し悩み。

「折角だしそれもこっちの世界風にしたいな。ノエちゃんは？」

「私もいいよ」

「じゃあ教えて貰える？」

そんな事を言ってきた。ちらりとわためを見れば、きらきらとした目でこちらを見ている。知らないらしい。

シオンへ視線を戻せば。こちらにはやにやと。このクソガキ、楽しんでやがる。

「……歌います」

恥ずかしさをこらえながら、誕生日の歌を一人歌う。

「……覚えました？」

「大丈夫そう。ありがとうね」

「いえ。ノエルさんは、歌が終わったら、ろうそくを吹き消してくださいね」

「分かった」

改めて、ろうそくに火をつけ。

「電気消しますねー」

ぱちんと、電気のボタンを押し、消灯。

俺が座ると、「いくよー。さん、はい」と手拍子と共に、わためが言う。

Happy birthday to you

Happy birthday to you
Happy birthday, dear Noel
Happy birthday to you

歌い終わり、ノエルさんが一息に、ろうそくを吹き消した。

数日後。

「はいこれ」

「……ありがとうございます」

ノエルさんと改めて会った俺は、先日立て替えたお金を受け取った。

特に中身を確認せず、鞆へしまう。少ない事は無いだろうし、多い分には後で何かで還元するか、わため経由で返せばいい。

「ありがとう。君の案だったんだって？ あのパティー」

「……聞いたんですか？」

「うん。ごめんねって謝られたよ」

言ったらしい。素直な人だと、そんな事を思う。

「余計でしたかね？」

「そんな事ないよ。思い切り体を動かしたけど、少しもやもやしていたし」

「そう言つて貰えると、嬉しいですよ」

あの後、余計な事をしたのではと、俺ももやもやしていたから、正直救われる。

「そういえば、本来の誕生日って何時なんですか？」

「昨日。改めて祝つて貰つちやつた」

2つ年取つた気分と、ノエルさんが笑う。

「それなら、丁度良かったです」

「何が？」

鞆から、包みを一つ。明日会えるかと、昨日念話でノエルさんに聞かれた後に、準備したものを取り出す。

「1日遅れですが、誕生日おめでとうございます、ノエルさん」

「え？ いいの？」

「勿論。気に入つて貰えると嬉しいですよ」

中身は髪留めだった。無難にバレッタと呼ばれるものである。

銀髪に合う色が良く分ならず、店員さんに質問しながらも、無難な物にした。

中身を見たノエルさんが、くすりと笑うと、それを取り出し、右耳の上あたりにつける。

「似合う？」

「……良く分かりません」

「よほど変じゃないなら、そこは似合うって言うっておけばいいの」

「似合います」

「よろしい」

くすくすと、ノエルさんは笑う。

「ありがとう。大事にするね」

「はい」

ノエルさんの言葉に頷いて返す。

俺の要件は終わったので、ノエルさんのアクションを待つ。

ノエルさんは、唇に指をあて、何か考え始めた。どうしたのだろうかと待っていると、目が合う。

暫しの間を開け、唇から手を離れたノエルさんが俺を手招き。

何事だろうかと、近づくと、ノエルさんの背が、急に伸びた。

背伸びしたのだと、気付くより早く、頬に柔らかい感触を覚え。

何事かと思うより早く、ノエルさんが俺から離れる。

「じゃあね。また遊ぼうね」

ひらひらと手を振って、ノエルさんが走り去る。

「……」

機械的に、ひらひらと手を振り返しながら、状況を把握しようとして頭を回すが、

「……何？」

理解出来なかった。何があつたのだろうか。

エピソード・オブ・るしあ e p. 1 やらかし

潤羽るしあが初めてその声を聴いたのは、去年の始め頃である。

当てるしあは、学年が1つ上がり、それに合わせ学び舎も変わった頃。

その日も、るしあは1人で中庭に居た。

——疲れたのです。

ベンチへ座り、背もたれに背を預け、橙に染まる、夕暮れ模様の空を仰ぐ。

今日も長い1日が終わった。

「……フフツ」

ふと、るしあが噴出した。

それを皮切りに、るしあは背もたれから体を上げると、体をくの字に曲げて、口元を抑え、肩を震わせる。

暫くして、勢い良くなるしあは顔を上げた。周囲を見渡し、誰も居ない事を確認して、安堵の吐息を漏らす。

思い出したのは、今日の授業中の事。

通りすがりの浮遊霊が、何を思ったのか黒板から顔だけ出した状態で止まったのだ。

1 限目から6 限目までずっと。

当然、只の人間である教員がそれに気が付くことは無いから、そのまま授業は続き、浮遊霊の顔なんてお構いなしに板書をする物だから、浮遊霊の顔の部分が丸で囲まれたり、集中線が引かれたり。

浮遊霊の表情が能面のようだった事も相まって、授業中は笑いを堪える事に必死だった。

いつそ、頭でも首でも掴み上げ、そのまま追い払ってしまえば良かったのだが、授業中でも休み時間でも、クラスメイトの視線が正面の黒板から外される事は無く、そんな中でいきなり黒板の前に立ち、何かを掴んで脅す動作をしようものなら、良くて不思議ちゃん、悪くて頭のおかしい子である。

折角2年間、頑張って普通の子を演じてきたのだ。今更油断して、悪目立ちしたくない。

深呼吸を1つして、気持ちを整える。また思い出しそうになった昼間の事を追い払い、家に帰ろうと思った所で。

『わんわんっ！』

子犬の鳴き声が響いた。

お怒り気味の、威嚇するような声色である。

何事かと再度周囲を見渡して、その元を見つけた。

段ボールを抱えた男子生徒が一人、中庭を横断していた。ネクタイの色から、先輩と分かる。

その先輩の肩の上に、声の主である子犬が居た。肩の上に立ち、先輩と同じ方を向いて、懸命に吠えている。

視線の先に、浮遊霊。るしあを苦しめたのと同じの個体だ。授業中と変わらず、能面のような顔のまま、フワフワと重さを感じさせぬ動きで、先輩を目指す。るしあからすれば、特に珍しくもない、光景であった。

浮遊霊は、存在を維持するために人に憑りつき、生気を奪う。特定の人間に強い恨みを持っているという事が無ければ、憑りつく対象は完全にランダムで、先輩もたまたま目を付けられたにすぎない。

少々珍しいのは、憑りつこうとしている先が守護霊のいる相手だという事。守護霊自体が珍しい存在である事に加え、ただ生気を消耗するだけの浮遊霊と、守護する相手から常に生気を供給されている守護霊では、守護霊の方が基本的には力が強く、それこそ、本来であれば片手間でも追い払えるレベルなのだが……。

——まあ、あの先輩、生気薄そうですし。

子犬自身の力不足もあるだろうが、守護霊の力を保つ為の生気供給元である先輩も、

猫背気味の姿勢にげんなりとした表情からは、生氣を感じにくい。

放課後だからといって、些か疲れすぎに見える。3時間続けて体育とかだったのだからか。

あの調子では、憑りつかれる事を回避することは出来ないだろう。まあ、死ぬ事は無い。長くて1週間位、酷い体調不良には悩まされるだろうが、その程度。

運が悪かったと、そう思つて貰うしか――。

『わんわん!』

「え?」

先輩の前に、るしあは躍り出た。

後ろから、戸惑う声。お構いなしに進んでくる浮遊霊の腕を掴み、引き下げ、胸倉を掴む。

「どっか行きなさい」

威圧。格を分からせる。

本来なら守護霊である子犬が出来たはずの事をるしあが代わりに行う。

間を置かず、浮遊霊がプルプルと震え始め、霧の様に消えた。

別に成仏をさせた訳でも、消滅させた訳でもない。庄に押され、一時的に姿を維持する事が出来なくなっただけだ。

知らぬ所で再構成されたとして、そのまま生気を失い消滅するか、それより前に誰かに憑りつけるか、存外成仏するか。るしあには興味無かった。それ所ではなかつた。

——……やっちやつた。

無視した場合の目覚めの悪さと、幼い守護霊の頑張りに後押しされてしまい、つい動いてしまった。

空中で何かを掴み、ドスを効かせた声を出す。完全に変な子である。

恐る恐る顔だけ微かに振り返ると、肩で嬉しそうにしている子犬とは対照的に、先輩はポカンとした顔をしていた。引いている様子は無い。

だがそれも、まだ理解が追いついていないだけだという事を、るしあは知っている。

「し、失礼するのです！」

引かれた顔を見る前にるしあはその場を走って逃げだした。

数日後。

賑やかな教室の中で、るしあは自分の腕を枕にして、机に突っ伏していた。

「ハア……」

今日、何度目かになる溜息。

そのたびに、また別の街に行かないといけないうらさうかと、そんな考えが脳裏によぎ

る。

ホロ学園入学前に居た学校の記憶。そこでもこの前と同じように、同級生に憑りつこうとした浮遊霊をいなした結果、るしあは同級生から不気味がられ、嫌われ、1人になった。

それが嫌で、知っている同級生が誰も居らず、癒月ちよこも居るという事で、ホロ学園に入学し、滅茶苦茶気を付けて生きてきたのに。

「……ううん。あの時よりいいよね」

かつての学校では衆人環視の元で浮遊霊を相手取ったが、今回は1人だけだし、相手は先輩だ。校舎も違うし、来年以降に会う可能性はあるが、その頃には相手も忘れていくかもしれない。

成るべく上級生の校舎に向かわないようにしつつ、死霊術を使って何が何でも鉢合わせないようにすれば、このまま音沙汰無く残りの日数を過ごせるに――

『わん！』

「!?!」

子犬の鳴き声に、るしあは体を起こした。視線の先。机の上に、尻尾を振り回し、舌を出しながら体で息をしている子犬が居た。

何故ここに。守護霊が、守護対象から離れすぎる事はありえないはずである。

「潤羽さん？」

「は、はい!？」

再度驚き、声の方を向く。

クラスメイトであった。るしあの反応に驚きの様子を見せながらも、彼女は指さした。

「お客さん」

指の刺された方へ、視線を向ける。

そちらに視線を向ければ、数日前に助けた先輩が其処に立っていた。

目が合うと、先輩が会釈。つられて、るしあも会釈を返した。

「誰? 彼氏?」

「……怨敵でしょうか」

「どういう事?」

首を傾げるクラスメイトを置いて、るしあは立ち上がった。

ピョンと机を蹴った子犬は、そのままるしあの肩に乗る。スリスリと擦り寄られ、こそばゆい。

数日前助けたことで、随分懐かれたようだ。それにまだまだ甘えたい盛りのもので、きちんと自分を見て触れてくれるという事が、嬉しいらしい。人目が無ければ幾らでも

構ってあげたい所だが、そういう訳にもいかない。

教室を横切り、るしあは先輩の前へと立った。

るしあの緊張と怒りが伝わったのか、先輩はやや引きつった笑いを見せる。

「えっと」

「場所を変えましょう」

それだけ言うと、余計な事を言われる前に、るしあは歩き出した。

後ろから、自分を追う気配。ついて来ているらしい。ついてこなければいいのにと、

そんな事を思う。

校舎の中を暫し歩き、適当な空き教室を見繕って、扉を開ける。

「先に入って下さい」

るしあがそう言うと、先輩は特に何の反応も見せることなく、教室の中へと入った。

続いてるしあが、周囲を確認してから中へと入り、扉を閉めた。

振り返ると、先輩は窓から景色を眺めていた。確か、此処から見えるのは校庭や街並

み程度で、そんな感心するような景色でも無かった筈なのに、無意識なのか、「おー」と

いう感嘆の声が聞こえてきた。

「先輩？」

「ああ。ごめんなさい。初めて見る景色だったので」

「初めて？ ホロ学出身ではないのですか？」

「外部入学で、引越してきたばかりなんです」

「そうなのですか」

少しだけ、るしあは親近感を覚え、同時に恐怖を覚える。

ホロ学の制服は、基本的にどの学年であろうと変わらない。男子ならネクタイ、女子ならリボンのデザインや色が、違う程度。

その為、あの日、顔しか振り返らなかつたるしあを探すのは、困難だったはずだ。

何せリボンの色が見えないから学年が分からず、外部入学してきたという事は学校内の地図に疎ければ、他の生徒の事も詳しくない筈で。

そんな状況で、態々学年も校舎も違う自分を探しだし、態々話をしに来たのである。

話としては間違いなくこの前の件だろうか。ただ、そこまでして何を話すというのか。

るしあの勘違いで無ければ、振り返った時にスマホなどを手に持っていた記憶は無い。それなら、少なくとも動画を取られたようなことは無いはずだ。

目の前の先輩がるしあが及びもつかないような名うてのインフルエンサーでもない限り、言った言わないの論争になれば、ホロ学歴の長いるしあの方に軍配が上がるだろう。

なら、態々この前の話を、自分を探し出してまで蒸し返す必要は——否。それこそが勘違いではないだろうか。

引つ越してきたと、この先輩は言った。つまり話の内容はこの前の事ではなく、もつと前。それこそ自分がホロ学に入学するよりも前の、引つ越しをして来る以前の話。

前に立つ先輩は、ネクタイの色から一学年上という事は分かる。つまり、自分と同じ時期に、前の学校に居て、自分の話を聞いたとしてもおかしくない。この前の事と、前の学校での事を関係づけて自分の事をまた——。

そう考えた途端、ザワリとるしあの心が震えた。自分を追いかけてきた過去を前に、恐怖を怒りが塗り替える。

そんなに見せて欲しいのなら、見せてやろうかと、るしあが魔力が活性化し、あふれ出す。

先輩の気づかぬ程の速さで、徐々に髪が伸びだした時。

先輩が深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

「……え？」

聞こえてきた言葉に、るしあが急成長が止まった。

変わらず魔力は活性化したままだが、幾らかの冷静さを取り戻す。

「この前の件、最初は良く分からなかったけど、もしかして俺の事を元気づけようとしてくれたのかと思って。それならちやんと、お礼を言わないといけないから」

「……と、とりあえず頭を上げて下さい」

頭を下げたまま先輩に、るしあは声をかけた。

言葉の通り、先輩が顔を上げる。その表情に嘲笑等無く、声同様に真剣そのもの。

——この先輩、滅茶苦茶ピュアか頭がおかしいかのどつちかなのです。

これが演技なら騙されても仕方がないと思える。それ程るしあは、相手から邪念を感じなかった。

「因みに」

「はい？」

だからだろう。先輩の言葉に対するるしあは、普段通りの声色であった。

「あれって一体、何していたんでしよう？」

「……えーと」

当然の疑問をぶつけられる。

貴方に憑りつこうとしていた浮遊霊を追っ払っていましたがとは、流石に言えない。

「ひ、秘密です」

「そうですね。残念です」

るしあの言葉に先輩はあっさり引いて、それからポケットからスマホを取り出した。何だろうかと思うるしあの前で、先輩はスマホの電源を一時点け、直ぐに消す。

「そろそろ戻りましょうか。いい時間ですし」

「え? ……あ、本当だ」

時計を確認すれば、ぼちぼち戻らなければ次の授業に遅れそうな時間だった。

先輩が歩き出し、扉の前へ。扉が開けられる。

「それじゃあ、潤羽さん。お時間頂きありがとうございました。今度何かあれば、自分が助けますね」

「あ、はい」

会釈して、先輩が立ち去る。

空き教室に1人残されたるしあは、暫くして、はたと首を傾げた。

「何で先輩、私の名前を知っていたんでしょ?」

浜辺（の近くの歩道）の女神

ある朝。インターホンの音にせかさされ、俺が扉を開けると。

いつもと違い、柄物の白シャツに黒のスカートを合わせ、足元をサンダルで彩る、大
き目の鞆を持ったフブキ先輩が、其処には立っていた。

「おはよー！」

「おはようございます。……とりあえず、鞆を持ちましょうか？」

「そう？　ありがとう！」

朝から元気なフブキ先輩への挨拶を返しながら、一先ず重そうな鞆を受け取る。

見掛け倒しということではなく、思っていたより重くは無いが、ズシリと来た。何が
入っているのだろう。

——何か約束あったっけ？

わざわざこんな大荷物を持って訪ねて来たのだから、何か約束をしたと思うが、しか
し、昨晚連絡を取っていた時も、特にそういった話は出なかった。

それともどこかに行く用事があり、その過程で寄ったのか。でも、それなら荷物を預
けるとは思えないし、そうする理由に心当たりはない。

何か忘れているだろうか、思い出そうとする俺に、フブキ先輩が口を開く。

「海行……」

「……」

思わず、フブキ先輩と自分の額に手を置いた。

狐の平熱は分からないが、人間の感覚で言えば、特別熱いという感じはない。

「熱は無さそうですね」

「私の事を何だと思ってるの？」

「ドルオタ。アニオタ。ゲーオタ」

「……」

ぐぬぬと悔しそうな表情を浮かべるフブキ先輩。そんな表情をされても事実だから、仕方がない。

フブキ先輩も、返す言葉が思いつかなかったようで、諦めた様子でポケットを漁り。取り出したのは、スマートフォン。

「ゲーオタの方の用事なんだけど」

そう言つて、スマホの画面を俺へと向ける。映っていたのはGPS連動のゲームアプリであつた。

ゲーム起動中に移動すると、モンスターが出てきて、それを捕まえて遊ぶというシン

ブルな物だ。

「フブキ先輩、これやっていたんですね」

外に出て歩き回らないといけないから、インドア派のフブキ先輩とは相性が悪く、未プレイだと思っていた。

「そんながつつりやっている訳じゃないけど。それでね？ 電車で少し行った所にある海水浴場で、モンスターが大量発生しているから、折角だし一緒にいけないかなって思っって誘いに来たんだ」

「成程」

イベントの為に海まで行く、というのは個人的にはガッツリ寄りな気もしたが。

まあ、フブキ先輩だしなと思う俺へ、「それに」とフブキ先輩。

「この時期の海に一人で行くのもね」

「……成程」

夏の花なんて、どんな人が多いのか、何となくの想像はつく。

それに、フブキ先輩が一人で居たら、声を掛けてくる人だって居るだろうし。

「分かりました。何か準備はありますか？」

「大丈夫。熱中症対策位でいいよ」

「分かりました。30分で準備するので、上がって待っていてください」

「はーい」

……はて。そういうえば、この辺りに海なんてあっただろうか？

数時間後。

「海だー!!」

「……ですね」

「どうしたー？ テンション低いよー？」

「……」

どうしたも何も。周りに人が居るし、滅茶苦茶暑いし、熱量についていけない。

電車を乗り換えここまで1時間強。あまり遠出しなない身としては既に大冒険で、暑さも込みで少し疲れた。

何故この人はこんなに澆刺としているのだろうかと思いつながら、俺は周囲を見渡した。

当たり前だが、砂浜と海が広がっている。穴場というわけではないらしく、海水浴場にはそれなりの人が居て、それ目当ての海の家もちらほら。

視線を海の方から陸の方へ移す。車道では海水浴客らしき車が、少しばかりの渋滞を作っていた。

海沿いの歩道には、海を見ずにスマホへ視線を落としている人達が何人か。

時折、画面下から上に向けてスライドさせる動作をしている辺り、フブキ先輩と同じ目的なのだろう。こんな暑い中で、すさまじい根性だなと感心してしまう。

「君はやらないの?」

声を掛けられ、視線をフブキ先輩へ戻す。スマホを手に、やる気満々といった様子のフブキ先輩。

やるのは構わないのだが、俺はこのゲームをダウンロードしていなかった。

今からゲームをダウンロードして、設定やチュートリアルを済ませて、と考えるとちよつとやる気は出ない。

「はい。フブキ先輩を見守っています」

「……それはそれで恥ずかしいんですけど」

むにやむにやと何事か訴えるフブキ先輩。

そんなフブキ先輩へ、えいやとキャップをかぶせる。隠れるかと思つた三角耳はキャップを貫通した。

一旦帽子を持ち上げるが、特に帽子に穴は開いていない。

不思議に思いながらも一度被せる。やはり貫通した。どういう原理なのだろう。

首を傾げる俺に、フブキ先輩は、不思議そうな顔をした。

「どうしたの?」

「いえ別に」

「このキャップは？」

「熱中症対策です」

「あ、そっか」

理解したらしいフブキ先輩が、キャップの位置を調整する。どこに調整しても、耳は貫通したままだから、そういうものなのかと納得しつつ、傍らで、俺もキャップを被る。フブキ先輩へ被せた物と同型のキャップ。色だけ異なり、フブキ先輩は黒で、俺が白である。

キャップを被った俺を、フブキ先輩が見上げる。ジツつと、何か観察する目。

「なんか」

「はい？」

「……んーん。何でも無い」

俺のキャップを見上げたフブキ先輩が、言葉を飲み込んだ。何か変だろうか。

キャップを外し確認するが、特におかしな所は無い。

首を傾げていると、フブキ先輩が俺の手からキャップを取り上げた。そのまま後ろに回ると、腰の辺りにキャップをつけられる。

「どうしたんですか？」

「いや、深い意味は無いよ」

「そうですか？」

訳が分からずにいると、満足したらしいフブキ先輩は、ひよいと跳んで、キャップを俺の頭へと乗せた。

戻されたキャップを整える。いい感じに収まったことを確認し、フブキ先輩へ視線を向けた。

「それじゃあ、行きます？」

「どこに？ 目的地はここだよ？」

「え？ でも、そのゲームって歩く必要ありますよね？」

「——ああ、大丈夫」

見せられた画面は、確かに見覚えのあるゲーム画面だったが、先程までと違い、花卉のようなエフェクトが舞っている。

「この状態だと、動かなくても時間経過でモンスターが沸くんだよ」

そうフブキ先輩が言う傍から、確かにモンスターが沸いていた。

「移動するゲームで移動しなくていいんですね」

「そうなの。さて、バシバシ捕まえるね」

「頑張ってください」

それから暫く、時折雑談を交えながらフブキ先輩はモンスターを捕まえ、そんなフブキ先輩を俺は見守っていた。

ゲーム自体はやり慣れているようで、基本動かすのは右手位。くるとモンスターを捕まえる為のアイテムを回し、タイミング良く投擲。投げられたアイテムはカーブしながらモンスターへと飛んでいき、ヒット、捕獲の流れ。捕獲前に判定があるので、アイテムが細動するのだが、その瞬間は流星に緊張するようで、フブキ先輩の耳がびくびくと動いている。

——かわいい。

摘まんでみたい衝動に駆られるが、何とか抑える。

正直少し暇ではあったが、一喜一憂しながらゲームする姿には飽きが来ない。

耳が動くのも表情が変わるのも。普段と違い、青空の下、大海原の傍というロケーションの効果なのか、一際輝いて見える。

——なんか変なテンションになっているな。

それともこれも、歩み始めたオタク道の成果なのだろうか。良く分からないが、変なテンションのままだと何か口走りかねないし、一度頭を冷やした方がいいかもしれない。炎天下で水分補給も無しに立ちっぱなしだし。

「フブキ先輩。飲み物を買に行つてきてもいいですか？」

「うん、いいよー。ついでに私の分もお願ひしてもいいかな？」

「勿論です。スポドリとかでいいですか？」

「大丈夫だよ」

スマホから顔を上げたフブキ先輩が、笑顔を向けてきた。

その笑顔にほんわかしながら笑い返し、俺はその場を離れる。

歩きながら、自販機を探す。ぎつと見渡した限りでは、自販機を確認出来ない。不便さを感じながら、散策がてらに歩く。

海の方から、わいわいとカップルや友人、家族連れの声が聞こえてくる。俺は何と無しにそちらを見た。

来た時と変わらず、砂浜にも海にも多くの人。引越しの際、海辺の町に移動するころとは何度かあったが、こうして海沿いを歩くのは大体オフシーズンの人が居ない時だから、賑やかな海というのはそれだけで新鮮な気持ちになる。

あの輪の中に入りたい、という気持ちは人が多過ぎて起きないが、こうも暑いと、海に入つて涼みたいという気持ちと、フブキ先輩と少し位は海で遊びたいという気持ちは芽生えてきた。

——戻ったら誘つてみるか。

水着にならずとも、波打ち際で少し水に触れる程度なら問題無いだろう。

そうと決めれば、序でにタオルか何かを買って戻ろうと思ひ、自販機ではなくコンビニを探すつもりで、俺は周囲を見渡した。すると、気持ちを新たにして視界が開けたのか、道を渡った先にコンビニを見つけた。

俺は海岸沿いの道を急ぎ、横断歩道を渡り、更に進んで、コンビニへと入る。

駐車場で察していたが、店内には少なくない人が居る。海水浴客だろうか、海パンにシャツを羽織っているだけの人も居た。混み合う店内を合間縫って進み、スポドリとタオルを手取る。軽く値段を確認するが、観光地価格らしく少し高い。とはいえ、フブキ先輩を待たせている以上、コンビニの梯子は出来ない。俺は、そそくさと目当ての物を買ひ、袋に詰めて貰ひ、外へ出た。

レジも混んでいたせいで、時間がかかってしまった。元来た道を、急ぎ戻る。横断歩道に差し掛かり、赤信号の為、少し待機。

横断歩道の対岸に、男が二人。さつき、フブキ先輩と同じくゲームに講じていたと思ひしき二人であつた。

移動してきたらしい。まあ、本来なら歩く必要のあるゲームだし、特に不思議は無い。待っているうちに、青になった。左右を確認し、小走りに渡り切る。

渡りきつた所で、声を聴いた。

「あの子、大丈夫かな？」

「大丈夫だろ……元々一人じゃなかったし」

「いやでも」

何かあったのだろうかと思ひ、足を止め、声の方へ視線を向ける。

視線に気づかぬまま、男達は話を続けていた。

「でも困っているみたいだったし」

「此処まで来てから言うなよ」

「それはそうなんだけどさ」

「——あの」

二人の話が移動してくる前らしく、俺は思わず話しかけた。男達の視線が俺へ向く。

「今の話なんですけど」

その内の一人が俺に見覚えがあったのだろう。「あつ」と声を上げた。

「そうだ、アンタ！」

「はい？」

「アンタと一緒に居た女の子！ さっき絡まれ「場所は？」へ？」

「何処で絡まれていた？」

「何処って、アンタ達がゲームしていたのと同じ場所「どうも」」

男の言葉を最後まで聞く事無く、俺は地面を蹴った。

一歩目でグンと速度が上がる。速度に乗ったまま、歩を進める。

時折すれ違う人を、ギリギリ、もしくははかすりながら躲し、道を急ぐ。

数分と経たず、その姿が見えてきた。

別れた時と同じ場所に、フブキ先輩。そして、先輩を囲むように、男が1人。

更に進むと、フブキ先輩の顔が見える。怒り顔。耳が立って、何かを叫んでいる様子。

しかし、男に何事かを言い返され、それに怯み。その隙にとばかりに、男に手首を掴まれた。

その瞬間、フブキ先輩の表情が、微かに歪む。

「おい」

フブキ先輩の手首を掴む男の手首を掴んだ。

思い切り握りしめると、男の手はフブキ先輩から離れ、その隙に捻り上げる。

「彼女に何か？」

浜辺（の海の家）の女神

時間は少し遡って。

「遅いなー」

フブキは、後輩が歩いて行った方へと視線を向けた。

着いていけば良かったかなと少し後悔しながら、後輩の姿が無い事を確認すると、フブキはスマホへ視線を戻す。

移動とゲームに時間をかけすぎた。時刻は午後1時を既に回り、2時になろうかという頃合い。

合流してご飯を食べてと動いたら、あつという間に帰る時間になってもおかしくない。

——どうしてこんな事に。

大体自業自得なのだが、フブキは心中で頭を抱える。このまま家に帰ったら、ミオに笑われるに違いない。それは嫌だ。何か負けた気がする。

「よし、帰ってきたら、ちゃんと誘おう」

ここ一番、頑張り処。むん、と意気込むフブキ。ただ、タイミングが悪かった。

「お？ 何、誘われちゃう感じ？」

フブキの独り言を、聞いていた者が一人。

海水浴客なのだろう。海パンを穿き、いかにも遊んでいるような風貌の男が、フブキへ近づく。

やってしまった、とフブキ。考え事をしていて、周りに目が行っていないかった。

にやにやと笑いながら近づいてくる男を睨みながら、フブキは返す。

「違います。人と一緒に来ているの」

「えー？ でも、一人みたいだけど」

「買い物に行ってくれているの。いいから、あつちに行つて下さい」

「誘わなきゃやって言っていたじゃない。それって、一緒に来ている奴はどうでもいいって事でしょ？ ならいいじゃない、俺と遊ぼうぜ？」

その言葉にフブキは齒噛みした。何も知らない癖にと、そう思いながら、しかし冷静に。

「違います。一緒に来ているのは彼氏。その彼氏を、ちゃんと海に誘おうって考えていたの」

強がり混じりにフブキが言い返す。こう言えば、諦めるだろうとも。

しかしその言葉に、男は怪訝な顔をした。

「はあ？ 何で今海に来ているのに、海に誘うんだよ」

「……」

全くである。

此処まで来ていて、海に誘うも何もと、言葉だけを見れば、フブキ自身もそう思う。我ながら荒唐無稽な事を言った事を自覚した。

とはいえ、何故こんな決意をしていたのか、見ず知らずの人間に晒すのは流石に恥ずかしい。

結果、口籠ったフブキを前に、調子づいたららしい男が、フブキの腕を掴んだ。強く握られ、痛みが走る。

その直後。

「彼女に何か？」

「あ!! なん——」

そんな言葉と共に、男の腕は掴まれた。

フブキが見ると、怒りに顔を染めた後輩の姿。掴まれた男も何か言おうとしていたが、その表情を見止めると、言葉に詰まっていた。その間に、フブキの腕から男の手は離れ、そのまま捻り上げられる。

「フブキ先輩、大丈夫ですか？」

「う、うん。ありがとう」

フブキの言葉に安堵の表情を浮かべた少年は、次の瞬間には男を睨みつける。

「で？ もう一度聞きますけど、彼女に何か用ですか？」

——おー。

その後輩の様子に、本当に自分を大切に想っている事が分かり、フブキの気分が晴れる。

一方の男は、それどころでは無かった。返答を間違えたら何かされるのではないかと思わせる鬼気迫る顔。変な事を言えば最後、血祭に上げられるのではと、そんな想像が頭を離れない。フブキへ声をかけてきた時の雰囲気は既に無く、何とか体裁は保てているが、言葉が出ない様子だ。

しかし、間の悪い事に、そんな男の様子に、頭に血が上っているらしい少年が気付く事は無く。

「……おい。だから俺のフブキ先輩に何か用かって聞いているんだよ」

更なる威圧をしていた。

一方のフブキ。正直後輩の様子が気持ち良く、気分が晴れると、流石に男が可哀想になつてきていた。

それに、男の顔色の悪さは、明らかに恐怖以外の要因からも発生している。

「よいしょっ」

フブキは手を伸ばし、後輩の目元を覆った。

「ぴくり」と肩が跳ねたが、フブキにやられた事に気がついたのか、特に振り払うような素振りは見せない。

「落ち着いて。深呼吸しようねー」

「……」

言われるがまま、深呼吸をする少年。緊張が緩んだのか、男の腕をねじり上げる力もぬけたようで、男の腕が滑り落ちる。

支えが無くなり、腰を抜かした男。こちらも緊張が抜けたのか、息を荒げていた。

「ねえ」

「ひい」

声をかけたフブキに対し、悲鳴のような引き攣った声を上げる男。

特に気にした様子無く、言葉が続ける。

「こういう事だからごめんね。後、早くしないと、解き放っちゃうよ」

すっきり猛獣扱いである。ただ、その効果は靦面で、男は一目散に逃げて行った。

逃げて行った背を見送り、見えなくなつた頃。フブキは後輩の目隠しを外し、顔を覗く。

落ち着いたのだろう。いつもの天然さ混じりの無表情。部室でよく見る表情だった。

「落ち着いたみたいだね」

「最初から落ち着いていますし」

「嘘だー。それであんな表情していたの？」

「あれは……死霊術流の威圧術ですから」

「私の知っている死霊術と大分違——いや、そんな事無いか？」

かつて一度見たヤンデレごっこは、あんな感じだった気がする。

心中で首を傾げながら、フブキはポケットからハンカチを取り出すと、滝のように流れる少年の汗を拭う。

「でも、こんな汗だくになる位、急いで帰ってきてくれたのは、本当だよ。ありがと」

「いーえ」

場所を移し、海の家にて。

フブキ先輩の対面に腰を下ろし、俺は頭を抱えていた。

向かいに座るフブキ先輩は焼きそばを啜っている。香ばしいソースの香りに、鼻腔をくすぐられた。

「冷めちゃうよっ？」

「……食べます」

割り箸を手に取り、焼きそばへ口をつける。

麺は水分が飛び過ぎてパサパサだし、野菜は焦げていたりするけど、こういう所で食べる焼きそばと違って妙に美味しい。

不思議だなと思いつつながら、食べ進めていると。

「俺のフブキ先輩」

噴き出さなかった事を、我ながら褒めてほしい。

口元を押さえ、何とか飲み込みながら、俺は声の主であるフブキ先輩へジト目を向ける。

頬杖を突き、にやにやと意地悪く笑うフブキ先輩と目が合う。

「あんな情熱的な事を言われるとは思わなかったなー」

「ふ、フブキ先輩は俺の先輩なんですから。何も間違えていないでしょう」

「それに彼女って」

「それは女性を示す二人称名詞であり、他意は無いです」

「うんうん」

「……」

俺のフブキ先輩に関しては完全に誤爆なのだが、彼女については本当にそれ以上の意

味は無かった筈なのに、フブキ先輩を見てるとそんな他意が在った様に思えてきてしまい、恥ずかしい。

ぐぬぬとフブキ先輩を睨むと、フブキ先輩のにやにやという笑いは収まり、代わりに微笑みが浮かんだ。

「ごめんごめん。急いで帰って来てくれたのが嬉しかったからさ。改めてありがとう、助けてくれて」

「……いえ、むしろ、すみませんでした。離れてしまつて」

「そんな事を気にしないで。私がいいよつて言つたんだし、何なら飲み物も買つて来てつて頼んだんだから。私がゲームばかりで暇させちゃつていたし」

「いや、そんな事は」

「嘘が下手だなー」

くすくすと笑うフブキ先輩へ、凶星を突かれた俺は言葉を返せず、唸りながら口を閉ざす。

「だから御相子つて事で。ね？ そうだ。それより、昨日のアニメの話しよ。ちゃんと見た？」

フブキ先輩の言葉を理解するのに数秒の間が開く。

「……あははー！」

「ちよっ！ 何で笑うのさ！」

そして、フブキ先輩らしい話題の逸らし方に、思わず笑ってしまった。

そんな俺に、今度はフブキ先輩が怒って見せた。ただ、ツボにはまってしまい、腹を抱える。

「もう、何なの！」とお怒りの声が届く中、暫く笑った俺は、目じりの涙をぬぐいながら、「ごめんなさい」と、まだ若干笑いに震える声で謝る。

「はい、観ましたよ。というか、同時視聴していたじゃないですか」

俺の言葉に、若干何か言いたげな様子を浮かべながらも、フブキ先輩は言葉を返してくる。

「……あの時は、ミオがもう寝ちゃっていたからチャットだったし、君も眠そうだったから、あまり話せなかったでしょ？」

「そうでしたね」

フブキ先輩程昼夜逆転していないし、昨日は草むしりをしてきたから疲れていたのだ。

「本当はもつと沢山話したかったのにさー」

「神回でしたもんね」

「うん！」

怒っていたはずだが、アニメの話となり気分を改めたらしい。笑顔で語るフブキ先輩に乗り、俺も昨晩見たアニメの話をする。

やがてその話もひと段落つきそうな頃合いに、俺は映像つながりで、先日おススメされたアイドルのライブ配信のアーカイブを見た事をフブキ先輩へ伝えると、そのアイドルの話へと、話題は移る。

潮騒が響き、潮が香る海の家にもかかわらず、いつもの部室のようになってきた。

……いや、ゲームして、アニメやアイドルの話をしている辺り、実は部活の合宿をして来たのかもしれない。

ちらりと、傍らに置いたビニール袋へ視線を向ける。

——まあいいか。先輩、楽しそうだし。

「どうかした?」

「いえ。それより、ゲームの成果はどうだったんですか?」

「あ、そう! 見てこれ!」

隣に移動してきたフブキ先輩に、画面を見せられる。同じモンスターばかり並んでいるようにしか見えないが、フブキ先輩の目はキラキラしていた。

「この子は色違いだね。この子は珍しい技を覚えていて、この子はステータスがいいんだ。この子は、今回のイベントとは関係ないけど、新しく捕まえた子だね」

「へー」

画面を操作しながら、次々に色々と見せられる。

それは、やがて最近撮った写真や、ネットで見かけた面白画像にまで発展していった。そうして、気が付けば。

「すみません」

「はい」

声を掛けられ、顔を上げる。白いシャツに短パン姿の女性。確か、ウエイトレスをしていたはずだ。

流石に長居し過ぎたかと、俺が思っていると。

「閉店なの、ごめんね」

そう告げられる。てつきり、人が増えてきたからとか、そんな理由かと思っただけだ。周囲を見れば、確かに日は暮れ始め、海水浴客も撤収を始めているように見える。

「……こちらこそすみませんでした」

「楽しそうに割り込めなかつただけだし、気にしないで。じゃあ、焼きそばとドリンクで

――」

お詫びも兼ねて少し多めに支払おうとしたが断られたので、言われた通りの額を支払い、フブキ先輩と共に店を出る。

やはり薄暗くなり始めている。俺も驚いたが、俺以上に驚き、震えている人が、隣に一名。

「フブキ先輩、大丈夫ですか？」

「だ、だい、だいじじじじ」

「フブキ先輩、壊れちゃった」

どうしよう、叩けば直るだろうか。でも、フブキ先輩を叩く訳にも……。

「……袋頂戴」

「へ？ あ、はい」

中身を取り出して、ビニール袋を渡す。すると、「あれ」とフブキ先輩が声を上げた。

「それ何？」

「あ。えっと、タオルです。少し位、海に入れればなど」

「……」

とはいえ、日も暮れ始め。危険だからという事で、監視員の人が遊泳禁止を放送しているから、それも叶いそうにない。

プルプルと震えだしたフブキ先輩が、がくりと膝をついた。それから、徐に周囲の砂を集めては、袋へ入れ始める。

「何をやっているんですか？」

「砂だけでも持って帰ろうかなって」

「甲子園じゃないんですから」

うつろな目で砂集めをするフブキ先輩の隣へ腰を下ろし、フブキ先輩の手を取る。

「帰りましょう。電車は……もう混んでいるとは思いますが、時間もかかりますから早めに電車に乗らないと」

「……帰らない。私の海はまだ終わっていないから」

そうは言うが、遊泳禁止だし花火等も無し。

それに砂集めを始めた時点で、もう終わりを悟っているのではと思いつつも、一旦その考えを飲み込む。

「もうすっかり堪能したでしょ?」

「……本当にそう思う?」

「……」

どうだろう。100人に聞いたら99人は違うと言いつつ。何なら、他の人から今日の俺のような過ごし方をしたと言われれば、俺も99人側に回るとは思う。

そんな事を考えてしまったら、つい言葉に詰まってしまい。そんな俺の前に、フブキ先輩は砂集めを再開した。

「ごめんなさい! 言えます! ばつちり海を堪能しました! だからすっかりして下

ささいー」

砂集めの手は止まらない。

「そうだ！ 今度また来ましょう！ ね！」

その言葉に、ぴたりとフブキ先輩は手を止めた。安堵する俺を、フブキ先輩が見つめる。

「本当？」

「はい。また来ましょう。そうだ、今度はミオ先輩とかシオンやわたためも連れて皆で――」

ざっざっざっ

「なんで砂集めを再開したんですか!!」

訳が分からずにいる俺の前で、フブキ先輩の砂集めが続く。

あの袋一杯に砂を集め終えたら満足するだろうかと一瞬思うも、多分そう言う事では無いだろうから、頭を捻る。

思いつく事は1つあるのだが、流石に違う気もする。

とはいえ、他に思いつく事も無し。

「じゃあ、また2人でも来ましょう」

その言葉に、再びフブキ先輩は動きを止めた。

「本当？」

視線は地面に落ちたまま、消え入りそうな声でフブキ先輩が尋ねてくる。

「はい。来ましょう」

掬っていた砂を、フブキ先輩は地面へ落とした。

顔が俺の方へ向く。

「約束ね」

笑顔を向けてくるフブキ先輩。そんな先輩へ笑い返ししながら、俺も頷く。

「はい。約束です」

「うん」

フブキ先輩も頷き、そして立ち上がった。袋に入っていた砂を捨て、ビニール袋は流石に捨てられないので、鞆の外ポケットへと押し込む。

「じゃあ、帰ろっか」

「帰りましょうか」

俺も立ち上がり、砂を落として、フブキ先輩に並ぶ。

「そうだ。今日の記念に、このキャップ、貰ってもいい？」

ふと、フブキ先輩が自分の被っているキャップを指差した。いいですよ、と俺は頷く。「最近被っていないですし。一時期キャップにハマった時期があつて、その時に買った

だけですから」

「ありがとう」

歩きながら、キャップを弄るフブキ先輩。気に入ったのなら良かったと思いいながら、俺はその隣を歩く。

「約束、忘れないでね？」

「いつにします？」

「え？ うーん……考えとく」

「はい」

浜辺（に来る前と後）の女神

2 週間前。

シヨップピングモールへ買い物に行った時の話。

「ミオ。ちよつと水着、見ていかない？」

「水着？ 別にいいけど」

フブキの鶴の一声に、フブキとミオはアパレルシヨップへと立ち寄った。

丁度シーズンというだけあり、人の出が多い。フブキとミオは賑やかな店内を、物色しながら進んでいく。

単純に言えば、ビキニかワンピース位なものだが、ビキニだけでもトップスとボトムスの種類やらパレオの有無などで幅広いし、細かい装飾や色等の違いも含めれば多種多様。

幽世には水着どころか海水浴という文化自体無く、川辺でちやぶちやぶと遊ぶくらいのものであったから、こちらに来た頃はかなり衝撃を受けたことを、ミオは覚えていた。

今となつてはすっかり馴染み、時折プールに行つたり海に行つたりしているし、こうして多くのデザインから水着を選ぶのにも、慣れてはいるが。

——去年の水着、まだ着れそうなんだよねえ。

白上家より2人が暮らすには充分過ぎる仕送りを貰っているとはいえ、流石に無駄遣いは気が引ける。

それに特別拘りも無いから、もし買うなら、去年の水着が着られるかどうか、確認してからにしたい所。

体感ではあるが、去年からあまりスタイルに変化は無い。去年購入した黒のワンピースタイプの水着は、恐らくまだ着られる筈だった。

——まあ、うちはいいかな。

何となく手に取った水着をラックに戻し、ミオはフブキの方へ視線をやった。

ミオとは打って変わり、フブキは真剣な様子で水着を見ていた。

本来インドア派で、家にばかりいるのに、何故そんな熱心に水着を選ぶのか。

その光景にミオは疑問を抱き。やがて、「あつ」つと声を上げる。

「もしかして、プールか海にでも誘われた？」

「へ？」

ミオの言葉に、フブキが首を傾げた。

その様が逆にミオを困惑させ、「えっ」つと同じく声を上げる。

「あの子に誘われたんじゃないの？」

「そんな事無いよ?」

「……え? じゃあ、なんでそんなに熱心なの? 海とかプール行く予定あったっけ?」

手帳を取り出し確認するが、少なくともミオの手帳には記載が無い。

護衛であり従者であるミオは、フブキの予定は基本的に把握している。仮にミオが誘われていなかったとしても、それは変わらない。

最後に予定を確認したのは昨日の晩。朝起きてからここまで、基本一緒に居たから、知らない間に予定が増えた、という事も無いはずだった。

首を傾げたミオを見て、疑問を悟ったらしく。フブキはフツつと、シニカルな笑みを浮かべた。

「ミオ。今年の私はひと味違うんだよ」

「とうとう?」

「今年は……私が誘う!」

「——えー!!」

「なんか思ったより本当に驚かれたんだけど」

解せぬという表情をしているフブキを尻目に、ミオは店内の他の人へ頭を下げる。

一通り謝つてから、視線をフブキへ。ドヤ顔を浮かべる彼女に、成長を感じる。

「フブキ、立派になったねえ」

そう言いながら、ミオは目頭を拭う。

「なんかおかしくない？ その反応」

「ちよつと褒められるだけで、直ぐ照れるのに。自分が誘ったなんて」

「いや、まだ誘ってないけど」

「……あれ？」

その言葉に、ミオは少し前の会話を思い出す。

『今年は……私が誘う！』

「……」

言われてみれば確かに、そうであった。

「フブキ。夏休みも後半なわけだけど」

「うん」

「まだ、水着も買っていないし、誘ってすらいらないの？」

「うん」

「こういうのって、夏休み前とかに、決めておくものじゃない？」

「……海に誘うって覚悟を決めるのに、1ヶ月かかったよね」

これは今年もダメかなと、呆れるミオ。その脇では、フブキは水着選びに戻っていた。余り拘りが無く、恥ずかしがり屋でもあるから、普段はミオと同じく露出の少ないシ

ンプルなワンピースタイプの水着と選んでいるフブキ。

しかし今は、着た時の想像をしているのか、少し顔を赤らめながらも、フリルなどのついた、可愛いタイプのビキニを中心にしている。

この子なりに頑張っているんだなど、親のような目線でそんな事を思うミオ。

「ミオも選ぶの手伝ってよ」

「はいはい」

フブキと並び、ミオは水着を見る。

「どんなのがいいかな？」

「フブキなら、淡い色の方がいいんじゃない？ 白とか水色みたいな」

「成程」

「それから、ちよつと派手なのにする？」

「そ、それはまだ早いかなあ」

あーでもないこーでもないと言いながら、1時間ほどかけて決めた水着は、フリルのついた白いビキニ。

勝負服を手に入れ、ホクホク顔のフブキを、ミオは健闘を祈りながら見守る。

まさかこの後、誘う勇気を手に入れるのにさらに2週間かかり、当日いきなり相手の家へ乗り込んでいくことになるとは、流石のミオも想像出来なかった。

2 週間後。

朝、意気込み出掛けて行ったフブキを、家事をしながら待っていたミオ。

何時もより遅い帰りに少し心配しながらも、いい雰囲気だったら申し訳ないという気持ち重なり、連絡を取れず。少しモヤモヤしていると。

「ただいまー」

「おかえりー」

玄関から聞こえてきたフブキの声に、ミオに立ち上がると、玄関へ向かった。

玄関では、キャップを被ったフブキが、いそいそとサンダルを脱いでいる所。そんなフブキへ、ミオは声をかける。

「遅かったねー。海、楽しかった？」

「うん。楽しかったよ。ゲームして、アニメとかアイドルの話をしていた」

「ふーん」

いやそれ、いつもと変わらないじゃんという突っ込みを、ミオは一度飲み込む。

まさか1日一緒に海に行っておいて、それだけという事もあるまい。

「他には？」

そう思ったから、ミオは続きを促した。

「ナンパされたのを助けて貰って、また一緒に海に行く約束したよ」
「お！ いいじゃんいいじゃん！」

正にひと夏の思い出。アバンチュールといった感じの内容に、ミオのテンションが上がる。

更なる恋バナに期待して、「他には他には？」とミオ。その為に、今日の用事を引き受け、フブキと後輩を2人きりにしたのだから、これ位は許される筈である。

「それから——」

そう言ったきり、フブキの口が重い。中々開かない。

恥ずかしがっているのかと思つてミオがフブキの顔を覗くと、顔は赤らんでおらず、むしろ青い。冷や汗も流れている。

何か変だなと思ひながら、ミオはフブキの持つて行つた鞆に手をかけた。洗い物を取り出そうと鞆を開け、中身を見る。

中身は、出る時に入れていつた物と変わつていなかった。

タオル、日焼け止め、ビニールシート、ドライヤー、帰り用の下着。

変わった荷物は特に無く、強いて言うなら、キャップが増えているくらい。

「……」

一応タオルを手取る。やはり特に濡れている様子はない。

フブキの服の裾を掴み、めくり上げた。

「ちよつ」

フブキが驚き固まる中、ミオはフブキの背中を確認。背中の紐が、水着のままであることを確認する。

一応触るが、こちら濡れていない。

「何しに行つたの？」

「……部活？」

合宿かなと思いつながら、続けてミオ。

「……因みに野暮かもしれないけどさ」

「うん」

「水着、見せられた？」

明らかに海に入っていないであろう状態で、果たしてそれを見せる事は出来、それを褒められたのだろうか。

一縷の望みにつけて、尋ねてみるミオ。そんなミオへ振り返つたフブキは、夢い笑みを浮かべた。

「何で人って……こんなに愚かなのかな？」

「……フブキは愚かじゃないよ。普通1日がかりの海に当日いきなり誘うのも、水着を

着て行ったのに見せる事も海に入る事もしないって在り得ないけど」

「ミオが冷たい」

「嘘泣きって分かってしているし、フブキがずっと、自分が誘うって言って何もしていなかったのも知っているからね。とりあえず着替えてきちやいな。後、手洗いうがいね」

「はい」

脱いだサンダルを整え、フブキが脱衣所に消える。

ミオは鞆を手にリビングへ。洗濯はしなくていいらしいから、後でダンスに戻して置こうと思っていると、スマホにメッセージが来ている事に気が付いた。

鞆を一旦ソファへ置いて、ミオはスマホを手取る。連絡の主は、フブキと一緒に海へ行った後輩だった。

『お疲れ様です。帰り際、フブキ先輩の様子がおかしかったですけど、今は大丈夫ですか？』

「心配されているし。大丈夫だよっと」

まあ海で遊ぶという目的を果たせず、ゲームだけして帰ってくることになったのであれば、おかしくもなるかと、ミオが思っている所へ、もう一通。

『今度はミオ先輩も一緒に行きましょう。シオンやわたためも誘って、大勢で遊びたいです』

「いや、2人きりじゃないんかい」

アバンチュールとは何だったのか。

『今度は一緒に行こうね』と、ミオはメッセージを返しながら、春は遠そうだなと、そんな事を思うのだった。

第1節

すべてが変わる前

学校は好きだ。

同級生とはそれなりの関係を築いているし、先輩はいい人で後輩は面倒だが気のいい人達。いつそ学校に住みたいくらい。……いや、流石にそれは無い。

とはいえ、帰宅に抵抗を覚えるのも事実。今日は部活が休みだったから、代わりに学校の図書室で宿題をしていたが、それも済んでしまい、不承不承帰路に着くべく立ち上がる。

夕暮れの廊下。外からは運動部の掛け声。

これぞ放課後と言わんばかりの見慣れた光景を尻目に、ぼんやりとしながら廊下を進んでいると、その姿を見つけた。

体操服に身を包む、ショートヘアの女学生。「うんしょ、うんしょ」と掛け声を漏らしながら大荷物を運んでいるのは、大空スバル。

陽キャオブ陽キャの、クラスの中心にいるようなタイプの彼女は、別のクラスである自分にも情報が入ってくる程の有名人で、だから複数の部活のマネージャーを兼任して

いる事は知っていた。

ならば今の時間は部活でもやっていそうなものだが、どうもそうは見えない。その手に持っているのは、社会科の授業で使いそうな代物だ。詳しくはないが、それらを使うような部活にマネージャーという立場は恐らく無い。彼女のクラス担任が、たしか社会科の教師だった筈なので、そちら関係の可能性の方が高そうだ。

「なあ」

「おわつ、たつとお！」

「よつと」

声をかけたら、過剰に驚かれ、大空がバランスを崩す。

慌てて荷物を支え溢れないようにして、流れるように大空の手から掬い上げた。

両手から荷物を失った大空は、そのまま体勢を整えると、俺の方を見上げる。驚いている様子はあれど、怒っているようではなく、ひと安心。

「ごめん。驚かせるつもりはなかったんだけど」

「大丈夫……確か隣のクラスの人ツスよね」

「ああ」

流石陽キャ。接点が無い相手の顔も知っているらしい。

「あ、荷物ごめん。変わるツス」

「いや。いいよ。何処に持っていけばいい?」

「え、いやいや、悪いし!」

「いいって。暇だし。大空は部活あるだろ。知らんけど」

「知らないんすか!?!」

「知らん。ただ兼部してることは知ってる」

「……まあ、確かに部活中ではあるけど。でも、頼まれたのスバルだし」

「最終的に運ばれるんなら、誰が運んだって変わらないだろ」

「うう」

気乗りしないのは、多分接点の問題だろう。

ほぼ初対面の相手に、自分の仕事を押し付ける抵抗感。俺が大空の立場だったとしても、やっぱり同じように食い下がるに違いない。

「それじゃ、貸し一って事にでもしといてくれ。そのうち頼み事があつたら言うから」

「……わかった!お願いするッス!」

よほど部活に行きたかったのだろう。直後、大空は走り出す。

暫し走り階段手前。足を止め、こちらを向く。

「持ってく先は社会科教員室!貸しは絶対返すッス!」

「おー」

大声でそれだけ行つて、階段に消えていく。

別に返さなくても良いけど、それを言うとは長そうなので、適当に流してしまった。
正直、滅茶苦茶後悔してる。きちんと返さなくていいと念押しするべきだった。

「頼み事、無いツスか？」

「無いツス」

視線が集まる。好奇に妬みと様々だ。正直辞めてほしい。

視線が向くということに慣れていない俺が居心地悪くしている一方、同じように視線に晒されている筈の大空は、一切気にした様子がない。そもそもこいつが原因だから、気にする筈もないのだろうが。

「もう一週間ツスよ。そろそろ頼み事の二つや二つ」

「俺は大空と違つて年中暇だから、やることはさっさと全部やるんだよ」

「じゃあ、私、借り返せないじゃん！」

「だから返さなくていいつてば。貸してない貸してない」

「貸しつて言つたツス！」

こんな感じのやり取りが、基本的に延々と続く。

放課後は大空には部活があるので無いのだが、休み時間は基本これ。そりゃ、目も引

くというもの。いつ何かしらを適当に頼んでしまえば良いのかもしれないが、本当に頼み事がない。大空に言つた事は全く嘘ではなく、暇人で趣味らしい趣味が無い俺は、やるべきことがあるべきと終わらせてしまふ。

だから手伝つてもらふとか、何かを頼むという感覚が無い。自分のことは自分でやって、他人のことはたまに手伝う。それを返してもらおうとは、特に思わない。

大空の時は、そう言わないと引かなそうだったから貸し一と言つただけで、別に後で頼み事をしようとか、返してもらおう何て考えてなかつた。実際、今まで手伝つた者達にも、貸し一という言葉を使つたことはあるが、だからといつてなにかを頼んだことはない。

だから正直、こんなに付きまとわれて、頼み事はないかと尋ねられ続けるのは、予想外である。数日で飽きると思いきや、返すまで諦めない腹積もりのようだ。

だつたらさつきとお願ひして帰つて貰いたいのだが、本当に思い付かない。

「なあ、大空」

「なんスか？あと、気持ち悪いから、その大空つて呼び方も辞めて、スバルつて呼んでほしいんだけど」

「……大空、人になにかお願いするつて、大変なことなんだな」

「これから名字で呼ぶ度に貸し一するツス」

「あ、じゃあそのルールを無くすって事で貸し借り無しって事にしよう」

「そんなに嫌ツスか!？」

「マジで何も思い付かないんだよ」

本当に、これっぽっちも。

やがて、授業開始を知らせる鐘が鳴る。

「良いツスか。お願い事、考えとくツスよ!」

「諦めて」

捨て台詞のような言葉に返しつつ、大空につられてヒラヒラ手を振る。

とまあ、こんな感じのやり取りを惰性のように繰り返した結果。

「そつちに逃げたぞ!」

「追え、逃がすな!」

今時ラノベでも描かれなさそうな、コテコテな鬼ごっこを繰り返される羽目になった。

逃走者は俺、追跡者は e s p o r t s 部や総合格闘技部の部員達。

教室でのんびりしていたところ、何やら凄惨な形相の部員達に呼び出され、反射的に逃げ出したら追いかけてきた。

廊下を走ってはいけない事を知らないのか、思いきり走っている。そのせいで、俺まで走る羽目になってしまった。俺は被害者なので何か言われたらあいつ等を盾に言い

逃れしようと思う。

角を曲がり、渡り廊下に入りながら、背後、追手の方をみれば、追跡者は変わらない。ただ、眼鏡をかけた痩身の者は減り、がたいのいい者が増えている。多分、e—s p o r t s 部が脱落し、総合格闘技部が増えたのだろう。

軟弱者めと、嘲笑する。俺なんて、今にも足がもつれて転びそうだというのに。

渡り廊下を渡りきり、部屋を確認して歩き出す。今のうちに少しでも体力を回復しなければならぬ。

深呼吸をして体内に酸素を巡らせつつ、近くの扉を開けて中に入った。

「いらっしやーい」

女性らしく、しかし何処か舌足らずな迎える声。それを発した金髪で白衣を纏い、青少年を惑わせてしょうがない豊満な胸をもったその人が、この主。保健教諭のちよこ先こと癒月ちよこ先生である。その胸で保健教諭は無理でしよと思うが、立派な保健室の主だ。

「あらあら、お疲れみたいね」

頬に手をあてそう言うちよこ先に、肩で息をしながら頭を下げて、向かいの窓に向かう。

扉の外でどたばたと足音が聞こえてきた。

「ちよこ先。すみませんけど、足止め頼みます」

「無理よ。私、力仕事出来ないもの」

「いやほら、パワー必要ないかもしれないじゃないですか」

「総合格闘技部でしょ？ 私じゃムリムリ」

なんでそれを知っているのだろうか、この人は。

「因みにオススメありますか？」

「女子更衣室」

「怒られるじゃすまないんですけど」

何て言ってる傍から、保健室の扉が開いた。顔を覗かせる総合格闘技部を前に、慌てて窓から外に逃げる。

逃げながら様子を伺えば、同じように窓から外に出て来る組と、廊下を走る組に別れたようで、追いかけてくる人数が減った。

とはいえ、たいした休憩も出来ていない。また何処かでお茶を濁すか、なんなら職員室に逃げ込むまでしないといけないかもしれない。

それまでに捕まらなければ、だが。

中庭に差し掛かり、先輩を見つけた。助けを求め、名を呼ぶ。

「フブキ部長！」

「ん？」

白髪の同部の先輩にして部長。白上フブキさん、その人である。

ソシヤゲ中だったのだろう。スマホを横向きに持っていたその人が、俺の方へと顔を向け、さらに背後へと目をやった。

「……」

スツツと視線を逸らされ、徐にイヤホンを付けられる。

「嘘だろアンタ！」

「さーて、ガチャでも引くかなー」

「爆死しろー！」

走り抜けながら呪いをかける。

直後、目の前の校舎から別の追手が出てきて、急ぎ方向転換。

視線の先、校舎の窓が開けられていて、そこに飛び込む。総合格闘技部も追ってその窓から入ろうとするが、その前に閉じられた。

息を整えながら顔をあげれば、髑髏のアクセサリーをつけた、緑髪の後輩と目が合う。

「……いんるしー」

「いんるしなのです。先輩」

潤羽るしあ。後輩である。それ以上でもそれ以下でもない。

同じ部活というわけでも、幼馴染みというわけでもなく、スバル同様に昔助けたことがあるという程度。

その程度の接点なのに、何故か話すようになった。たまに虚空と話している不思議ちゃんである。

「すまん、助かった」

「いえ。お役にたてたようなら、何よりなのです」

「まあ、まだ終わってないだろうけど」

遠くに足音が聞こえる。追いかけてここは終わらない。

あいつらも部活があるだろうに……あ。

「なあ、るしあ」

「はい?」

「今日って総合格闘技部か e s p o r t s 部の部活があるかって知ってる?」

「えーっと」

小首をかしげたるしあが虚空を見上げ。そこで幾つかのやり取りを重ね。

「総合格闘技部は今日、部活があるみたいですよ」

「怖い怖い怖い」

「なにがなのですか?」

どこかわざとらしく小首を傾げるるしあに心の距離を感じながらも、「なんでもないと首を横に振った。

「部室ってどこだっけ？」

「部室棟の一階なのです」

「おっけー。ありがとうな」

「いえいえ」

部室棟には中庭を突っ切るのが早いので、再び窓を開けて外に出る。

「あー」と野太い怒りの声が聞こえてきた気がしたが無視して逃走再開。

ベンチで燃え尽きているフブキ部長を無視しながら中庭を走り抜けて、部室棟に着いた。

総合格闘技部とプレートトの着いた扉の前。見れば紙がついていて、その内容を読んでから剥がしてポケットにしまう。

足音の方へ視線をやり、総合格闘技部と、復活したらしいe—sport s部が此方に走ってくるのが見えたので、最後に根性を見せるべく走り出す。

一直線の廊下。ちよいちよい休んでも流石に限界の脇腹に喝を入れて走るが、流石に追手の方が早い。

ドンと、背中を押される感覚に鑪を踏む。バランスを崩した所を捉えようという魂胆

か。だが、その衝撃で、扉に手が届いた。

捕まり、押し倒されそうになるなかで、扉を開けて。

「助けて、大空ー！」

修練場全部に響きそうな大声で叫んでやった。

自分が大空にふさわしいかを見極めるつもりだった、というのが部長二人の談である。

そのために、俺を呼び出して、自分達の得意分野で戦おうという魂胆であつたらしい。当初はプライド無いんかと思つたが、納得できる条件が自分達の得意分野で負ける事だったと聞いて、そんなもんかと思いなおしながら、俺は今回の顛末を大空から聞いていた。

「本当にごめんツス。きつく、二度とやらないように言つておいたから」

「ああ。まあ、結果的に怪我とかもなかったし、別にいいよ」

「そう言つて貰えると助かるよ」

溜め息を漏らす大空には、苦笑いしか浮かばない。

「大空も大変だな」

「余罪がありそうで冷や冷やしてる」

まあ、否定はしづらい。正直俺としても、こんなことあるんだなという感想だ。

「そうだ、連絡先交換しない？」

ふと、大空がそう言った。

「また、何かあつたら言つて。今回みたいに逃げ回らずに、さつさと召喚出来た方が楽でしょ」

「確かに」

もつともなので、サクツと大手メッセーシアアプリでフレンド登録を行う。

「しかし、これで貸し三、早く返さない」と

「三？今回の件なら、気にしなくていいぞ？」

なんなら助けられたから貸し借り無しだ。

「いやいや。流石に今回の件で返したとは言えないツス。それに」

そういういながら、大空はピツつと二本の指を立て。

「大空つて二回呼んだから、貸し二追加ツスよ」

いい笑顔で、そうのたまった。

未知との遭遇

数ヶ月程度前の話。大空と知り合うずっと前。

その頃の俺は一人暮らしたった。

訳あり——と、言うほどの事はなく、仕事の虫である両親が出張族で、方々への移動を続けており、幼少期は兎も角、流石にこの歳にもなつて環境が代わり続けるのは面倒という俺の言もあり、両親が出張の間は家を守る事が仕事になった、というだけである。その日の晩は、溶かしたチーズをポテトチップスに絡めて食べたくなったので、コンビニに向かっていた。チーズが無かったのである。

ついでに炭酸でも買おうかとワクワクしていると、前方の公園で、謎の発光が見えた。

「……」

気になってしまった。

街灯の点滅等では断じてない、紫色の発光。誰かが花火でもやっているのかと思つたが、それにしても発光が明滅しておらず一定で、しかも長い。

駆け足ぎみに公園に近づき、覗きこむ。発光元はやや奥まった場所であり、公園の入り口からは見えなかった。

迷いなく公園の中を進み、光源の方へ。斯くして見つけたその光源は、空中にあった。俺の身長からやや高い位置にあり、その形は円の中に幾何学的なマークの刻まれた、魔法陣と呼ぶに相応しいそれ。

トリツクラしきものは見当たらない。

見ていると、魔法陣の中心から足のようなものが覗きだす。

黒い靴、星の衣装。紫と白のストライプの靴下が見え始めたところで、慌てて視線をそらし、後ろを向いた。

一般的な良心と、思春期男児の知的好奇心との狭間を葛藤すること暫し。「よっ」っつという声とスタツつといった軽快な足音が、俺の耳に届いた。

もういいだろうか。多分大丈夫の筈。

そう信じて、振り返る。途端、不思議な色の瞳と目があった。

トパーズと呼ぶには、あまりに彩飾豊かなその瞳。この世ならざるその色に、飲まれる。

「あの」

「——わっ」

声がかげられた。

途端、集中が途切れ、自分が驚く程に近づいていた事に気がついた。

慌てて距離を取ろうとして、足がもつれる。なんとか体勢を取り戻そうとしても上手くいかず、そのまま尻餅。

「なにやってるんですか？」

「いや、あの」

瞳に見とれてました、何て言えようはずもなく。苦笑いしながら、差し出された手を取り立ち上がる。

立ち上がって、改めて少女を観察する。

瞳の色に気を取られていたが、良く良く見れば、少し生意気そうだが可愛らしい顔つきだ。

歳は俺より下だろうか。ちゃんと食べているのか心配な位、体が細く、露出度が高い。「なあ、寒くない？」

冬も終わろうかという頃合いで、まだまだ寒い。にもかかわらず、ふとももに胸元、腹部が露出している。

「コート着る？」

「え？ ああ、大丈夫ですよ。魔法で年中快適なんですから」

ドヤる少女。

後半部分は聞かなかった方がいいのだろうか。嫌でもあまりに堂々としているから、

別に問題ないのかもしれない。

葛藤している俺の前で、ドヤっていた少女が何かに気づき、首をかしげ、わなわなし始める。成る程ダメらしい。

「消さなきゃ」

「待って」

右手に何やら光が集まりだしたのを見て、慌てて止める。

「勝手にしゃべったのそっちじゃん」

「天才の私がそんな失敗をする筈ないでしょ」

「今したが？ やっべやっちったって表情になったの見たからな」

「尚更消さなきゃ」

「待って」

左手にも光が集まりだす。右手に集まっているのと比べ、禍々しさが尋常でない。

なんか、記憶だけ消そうとしてたのを、存在ごと消そうとするのに切り替えたようにしか見えない。

「落ち着いて。誰にも喋らないから。本当に」

「信じられない」

「そこは信じていただければなど。ほら、こんな夜更けに一人でいた辺りから察してく

れ」

「あっ」

何か察した様子を見せる彼女。とたん、憐憫の目を向けられる。いい感じに誤解してくれたらしい。

「ごめんなさい、酷いこと言ったわね」

「……いや」

なんだろう。謝られているのに、言葉の端々から揶揄されている気がしてならない。表情のせいだろうか。友達いないんだー、みたいに思われていそう。

「親も出張中だし、話す相手はいない。そもそも現代で魔法だなんだって言ったら、創作か頭おかしい人と思われるし」

「……それもそうね」

納得した様が見え、こっそり肩の荷を下ろす。

魔法を使っているところを俺に見られた、という事実は覆らないのだが、それについては忘れている様子。

後は、面倒ごとになる前に逃げるのみである。早く家に帰って布団に潜らなければ。

しかし、現実是非常である。「じゃあ」という言葉と共に、少女が俺の腕を掴んだ。

「暫く、お世話になりますね」

「なんでさー！」

現在。

「ただいま」

「おかえりー。ねえ、お腹すいたー」

あの日出会った魔女、紫咲シオンは完全に我が家に住み着いていた。

敬語を使われていたのは最初期だけで、最近はもっぱらタメ口。そしてクソガキ気味。

一周回って愛しさすら覚える。手のかかる子程かわいって言うし。

「今、作るから待って」

「今日の晩御飯、なに？」

「焼き魚と煮物」

「またー!？」

「文句があるなら、自分でつくってくださいーい」

ぎゃいぎゃい言うシオンを一蹴し、手洗いうがいに着替えを終えて、キッチンに入る。

カウンター越しに未だにぶつぶついつてるシオンを無視しながら、手早く調理を始めた。

とはいえ、凝らなければ煮物はザクザク切つて鍋に入れて煮込むだけだし、魚は捌いてあるのを焼くだけ。ご飯は炊いてあるから、煮込み時間こそかかれど圧力鍋様の力でそう手間はなく。

たまたま玉ねぎが余っていたことを思い出し。

折角だし煮物に入れるかと切り始め。

お腹すいたーとシオンに叩かれ。

その衝撃で乾いていたコンタクトが両方取れて、反射的に目を押さええ。

硫化アリルが眼球に直撃しなければ今ごろのんびりしていただろう。以上現実逃避
終わり。

「ぐおおおおお」

「ええええ」

目を押さええ悶える。

硫化アリル。ようは玉ねぎの目が痒くなる原因のそれ。

それがそのまま目に入ったのだから、目が痛いなの。ボロボロ涙がこぼれて止まらない。

このまま失明したらどうしようなんて考え出した所で。

「目薬！ 目薬使うから、上向いて！ 目、開けて！」

ぐいっと顎を持ち上げられ、上を向かされる。

ついで、目をこじ開けられる。本能的に嫌がる臉を俺の方からも開けて、涙でかすれる視界にシオンの姿をとらえた。その手には、紫色の小瓶。

こんな禍々しい色の小瓶、家にあっただろうか。そんな疑問を提唱するより早く、一滴目に垂らされた。

途端に目の痛みが嘘のように無くなる。感動し、警戒が薄れたところに、もう一滴。反対の目にも落とされ、そちらも痛みがなくなった。

「お……おおー。すごい。痛くなくなつた」

「それでしょ？ 魔界の目薬なんだから」

「魔界の？ 魔法の薬ってこと？」

「こつちではそう言うことになるのかな」

成る程。道理で見覚えのないはずである。シオンの私物のようだった。

「私に感謝して、明日の夕飯は豪勢に」

「因みにそれって」

「なに？」

「人間に使つても大丈夫なもの？」

聞くまでもなく、俺の体が答えを出し始めているのだが。

ソファーに横たわり、目を冷やす。

作りかけの食事は火を止めるだけだったので、シオンに仕上げてもらった。

玉ねぎを入れ損ねてしまった事だけが悔やまれる。

「大丈夫？」

「経験の無い痛みにも襲われてる」

「……ごめん」

「怒つてないよ。氷おかわり」

「持つてくるね」

とたたしシオンが走っていくのを聞きながら、溜め息をつく。

眼球が痛い。その奥の視神経とおぼしきところも痛いし、頭も痛い。

痛くて熱くて気持ち悪い。横になっているのにぐらぐらと揺れる感覚がある。やはり

りと言うか、飲んだ風邪薬が効く様子はない。

冷やしていれば多少マシだが、その程度。気絶できるのなら、早くしたい。だが、そ

うしたら、シオンに心配をかけてしまうだろうか。

我ながら、いつも通りの声色を装うのがうまいと自画自賛する。

ふざけた行為がここまで大事になってしまつて参っている様子のシオンに弱つた様子を見せられないから、丁度良かった。仕事大好きの両親を心配かけまいと、繕い続け

た幼少気の自分に感謝である。

「持ってきたよ」

「ありがとう」

目の上に乗せられた氷入りの袋を手で押さえる。ひんやりと心地よく、少しマシになつた。

「何か欲しいものとかある？」

「大丈夫だから、食事してきていいよ」

「食べれそう？」

「ちよつと無理そう。食欲無い。でも作っちゃったから、俺の分はラップしといて」

「……」

「看病してくれるなら、ちゃんと食事してシオンは元気でいてくれ」

「わかった」

とたたと走り去る音。まもなく、キッチンでござござと何かする気配。

少し間が空くだろうから、眠るならこの隙だ。

「私、そつちで食べるから、何かあったら、すぐに言つてね！」

ひん。

翌朝。

「治った」

結局シオンが入浴に行っている間に寝落ちすることに成功し、朝に目を覚ました。嘘のように痛みは引いていて、ぐらぐらと揺れる感覚もない。

「あれ？」

それどころか、視界がクリアだ。記憶が正しければ、コンタクトが外れたあと、つけ直した記憶はない。ためにしに眼球にさわってみても、やはりコンタクトの気配はない。

「すげー」

矯正器具とはおさらば出来るのだろうか。

感動しながらキョロキョロしていると、視界の隅がノイズを捉えた。反射的に目を向ける。

庭に繋がる窓があり、縁側にはコウモリが座っていた。ノイズはあの辺りからな気がしたが、発生源らしきものはない。

「てか、コウモリってぶら下がるもんじゃないのか」

まるで座っているようにも見えるコウモリは、やがてパタパタと飛んでいった。

飛び去り際に、再度ノイズ。コウモリの姿が一瞬女の子に見え、ただすぐにコウモリに戻る。

「……？」

ソファアを降りて窓際へ。コウモリが飛んでいった方を見るが、すでに居ない。

「寝ぼけてるのかな」

目を擦りながら部屋のなかを見渡す。

リビング、テレビ、ソファア、床で寝ているシオン、ダイニングテーブル、キッチン、

棚、時計。

「ちくしょうめ！」

いつもは七時半には家を出るのに、時計は八時を回っている。

今日から生徒会主催の遅刻取り締まり強化週間である。さっきのは気のせいと結論

付けて、準備をするべく、走り出した。

世界が変わる

痛みはない。辛くもないし苦しくもない。

調子が良いままである。

そのはずなのだが。

「む」

走っている最中に視界へノイズが走り、暫し世界が変わる。

とはいえ、空が赤く染まるだとか、荒廃した世界が見えるだとか、そういうわけではなく。

ただ、町行く人に異質なものが現れる。

頭には犬や猫のような獣耳だったり、まつすぐだったり曲がりたりしている角が。後ろにはふさふさだったりによりりとしている尻尾や羽が。

今朝見たコウモリが女の子に見えるという極端な変化こそ無いが、そのレベルならそれなりに居る。割合としては、変化が無いのが六割、変化があるのが四割程度か。

足を止めたら遅刻確定なので足は止めぬまま、眉間をもむ。

十中八九、魔界産目薬が原因だろう。目自体は悪くなく、遠くも近くも良く見えるの

だが、その分変なものが見えるようになってしまった。

「困る……」

頭が変になりそうだと。見えているものは夢か現か。夢なら夢で、幻覚が見えているということだから不味いし、現実なら耳やら角やら生えている人はなんなのかという話になる。

ザザザとノイズが走り、視界が元に戻る。戻ったことに安堵しながら、角を曲がる。学校が見えた。時間は始業チャイムの十分前。

見えた人影に安堵していると、向こうもこちらに気がついて、声をあげた。

「急げー」

速度を緩めずそのまま走り、校門を抜ける。

膝に手をつき、息を整えていると、「大丈夫？」と声をかけられた。

青の混じる銀髪。黄昏時のような瞳。

「おはようございませす、天音先輩」

「おはよ。珍しくギリギリだね？」

天音かなた。生徒会役員で先輩である。今日の見張り役だったらしく、クリップボードを手にしていた。

「寝坊しちゃって。間に合って良かった」

「夜更かしでもしたの？ 寝癖も直しきれないし」

大きめのブレザーの先から覗く華奢な指先が、俺の髪をちよいちよいと弄る。触れれば折れてしまいそうな程なのだが、それでも俺よりパワーがあるのだから、人は見かけによらない。

「これでちよつとはマシかな」

「ありがとうございます」

膝についていた手を離し、天音先輩に一礼。顔を上げたところで、再びノイズ。

「っ」

「大丈夫？」

ふらついた俺を天音先輩が支える。頭を振り、息を整えて、覗きこむ天音先輩を見て。

「手裏剣？」

「へ？」

頭に先ほどまではなかった手裏剣が現れたのを見た。

耳や角ならともかく、手裏剣が載っているのは正直驚きである。

幻覚にしてはリアリティがあるが、幻覚にしか見えない。

「痛っ」

触ろうかと動き出す前に、ひどい頭痛に襲われる。

今までは無かったその痛みに思わず顔をしかめると、天音先輩が焦った顔になった。「ちよつと、本当に大丈夫？ 保健室に連れてこようか？」

「……大丈夫です、一人で行けます」

俺は天音先輩から離れて校舎に向け歩き出す。

ずきずき痛む。ふらつく足に力をいれて、すれ違う知り合いと軽い挨拶。

全力で誤魔化しながら、最後に会ったクラスメイトへ保健室に行く旨を伝え、一人保健室を目指す。

痛む頭を抑える。痛みが増してきた。昨日と違う純粋な痛み。不快感ならいざ知らず、痛みだけなら昨日以上だ。

走ればあつという間な校舎内を、ゆつくりとした歩みで進む。

チャイムが響く。痛みが増し、耳を塞ぐ。チャイムの音が脳内で反響している気がする。

「きし」

二日酔いってこんな感じなのかなと、意識して別のことを考えながら、歩を進めた。ゆつくりと、一步、二歩。

普段の数倍の時間をかけ、保健室へと着いた。

戸を開ける。机の上に広げたお菓子をつまもうとしているちよこ先が、俺の姿に気が

ついた。

「ちやんと、ノックと挨拶くらい——ちよつと、大丈夫？」

よほど酷い顔色だったのだろう。驚いた様子のちよこ先が立ち上がり、俺に近づいてくる。

近づいてくるその姿に驚き、一瞬意識が覚醒するも、反動のように力が抜けた。

受け止められ、柔らかな感触が頬に当たる。

「……ちよこせんせー」

「なあに？」

「なんか、いつもより大胆な格好してますね。胸元開いてるし、角生えてるし。何かのコース」

プレと言いつつ切る前に、フルネームを呼ばれた。

顔をあげると、煌々と目を輝かせるちよこ先生と目が合う。

「眠りなさい」

ぱちくりと、自宅のベッドで目が覚めた。

スツキリとした目覚め。寝たら無いとだらだらとベッドの上で悶えることもない、必要な分しっかりと休め、体の調子がいい、一日がいい気分になりそうな目覚めである。

勢いよく上体を起こし、背筋を伸ばす。ベッドから降り、軽く柔軟。

驚くほどに調子がいい。気を失う前までの頭痛が嘘のようだ。
「つて、あれ？」

気持ちのいい目覚めに意識が向いていたが、そういえば学校にいたはずである。

学校について、天音先輩と話しているときに頭が痛くなって、保健室に向かい、ちよこ先に受け止められた筈である。

「夢？ それにしては、ちよこ先の胸の感触は未体験だったけど」

柔らかく、しつとりと吸い付くような触り心地。

未だ清い体の自分には、おおよそ形容する言葉が思い付かないあの感覚は、夢以上に夢見心地だったが、それだけに夢とは思えない。

「ていうか、出てないよな」

一応、問題ないことを確認。大丈夫だった。

一安心しながら、机の上に置かれたスマホを手取る。

時計を確認。ふむ、成程。

三日経っていた。未読メッセージが溜まっている。

一通り目を通して放置。何があったのか同居人に聞くべく、部屋を出て階段を下つた。

リビングには電気がついていた。居る事に安心しながら、リビングに通じる戸を開け

る。

「あら、起きたのね。体は平気？」

「ちよこ先？」

思っていたのと違う人物がいた。

「ちよつこーん」

「……ちよつこーん」

良く分からない。寝ぼけているかまだ夢の可能性を検討しながら、ちよこ先特有の挨拶を返す。

「とりあえず……夢ですか？」

「安心して。現実よ」

「成程……。お昼御飯、作りますけど食べますか？」

「じゃあ、頂こうかしら」

リビングを抜け、キッチンに入る。

冷蔵庫の中を検分し、処理しなければならぬ物を選び、それを元に献立を決めた。

とととと包丁を振り、調理していく。「へえ」とカウンター越しに声。

「手際がいいのね」

「自炊した方が、食べたい物が食べたい時に食べたいだけ食べれるので」

「ちよこ、お菓子が食べたーい」

「ご飯の前は我慢する約束でしょ。お昼御飯、食べられなくなっちゃうわよ」

「えー、ちよつとだけだからー」

「……もう、しょうがないわねえ。戸棚にお煎餅があるわよ」

「渋い」

「急須もあるから、お茶が飲みたかったら自分で煎れなさい」

「しかも結構許される」

飲むらしく、ケトルでお湯を沸かし始めた。

こぼこぼとお湯の沸く音と包丁を動かす音のみが暫しキッチンを支配する。

「それで？ 聞きたいことはないの？」

口火を切ったのは、ちよこ先であった。その言葉に、少し悩む。

「……今はお腹が空いて頭が回りませんが、一先ずこれだけ。シオンはどこに？」

「真つ先にそれを聞くのね」

そういうと、ちよこ先生は嬉しそうに笑う。

「魔界に帰ってるわ。安心しなさい」

「そうですか」

家にいるなら夕飯を作らなくてはと思ったが、必要ないらしい。

「元気そうですね？ 俺が寝てる間、ちゃんと食べてましたかね？」

「一応、作れる時は私が作ってたわ。後で材料費渡すわね。今更かもしれないけど、消化に優しいものにしなさい。それと食べ過ぎないように」

「えー」

「保健の先生のいうことを聞きなさい」

「はーい」

鶏肉を削ぎ切りにして、片栗粉まぶして、冷凍していたご飯を暖めている間に、削ぎ切りした鶏肉をゆで。終わったら取りだし、ご飯をそのまま鍋にどん。程々に煮て、鶏肉を戻し、味を整えてからとろみ付けの水溶き片栗粉と溶き卵をいれて。

「とりあえずご飯にしましょう」

「もう出来たの？ お煎餅、まだ食べてないんだけど」

「ご飯にしますよー。食器を持ってきてくださーい」

「はーい」

お煎餅を戸棚に戻し、代わりに食器を二つ。

俺は鍋を手にダイニングテーブルに着き、対面にちよこ先生が座った。

「彩りが足りないわね」

「万能ネギ、切らしてました」

お玉を使い中身をよそる。それを二人分こなし、「いただきます」の挨拶の後は無言。俺は食べながら喋るのが苦手で、ちよこ先生は俺に氣遣つてくれているのかもしれない。

多目につつた食事は十分と経たずに胃に収まり、洗い物まできつちり終わらせてから後のお茶の準備までして、再び椅子に座る。

「落ち着きすぎじゃない?」

「不味い状況なら、ちよこ先がもつと慌ててると思うので」

「信じすぎじゃないかしら?」

「積み重ねてきたものがあるので」

学園人気トップクラスは伊達ではない。保健医だけでなく、カウンセラーとしても、素晴らしい先生だ。多くの生徒がこの人のお世話になっていることを知っている。俺もその一人。

その人が、冗談をいい、こんなに落ち着いているのだから、一先ず俺は大丈夫。……大丈夫。

「大丈夫ですよね?」

「この数秒で何故私の評価は下がったの?」

「たまたま幼女だから、おながが空いて我慢できなかったのかなって」

「流石にそこまでじゃないから」

ちよつと不安。

「兎に角。大事な話をするから。ちゃんと聞いてね」

「はい」

居住まいをただす。羽や尻尾、角が生えたままのちよこ先は、まっすぐ俺を見据えていた。

「単刀直入に言うわね」

「はい」

頷き返す。

俺よりも緊張しているように見えるちよこ先は、一息いれて、それを語った。
「貴方、人間ではなくなるかもしれないわ」

大異小同

人間ではなくなるといふ言葉を、頭の中で咀嚼する。

本当に聞いた通りの意味なのか。同音異義語は存在しないのか。

考えてみて、思い付かず、言葉を飲み込んだ。

「続けてください」

「大丈夫なの？」

「はい。お願いします」

「なら続けるわね。まあ、大体察しているとは思うけど。

そもそもあの娘が別の世界から来たってことは知ってるわよね？」

「魔界とやらから来たことなら」

なのでこちらの世界の住み処やお金は一切無いので、お世話になりますとは、出会って数分後に言われた。

「あの娘が貴方に使った目薬は、その魔界で作られた……魔法薬って言って伝わるかしら？」

「特別なお薬的な」

「いまいちピントこない。」

「私も説明苦手なんだけど……魔法になるお薬って思ってたじゃない」

「魔法が入ってるのではなく？」

「さらにピンと来なくなった。」

「普通のお薬って口からとか注射とかで直接体にいいものを接種するでしょ」

「そうですね」

俺としても、薬の認識はその程度だ。

「魔法薬は薬そのものじゃなくて、魔法で治す物なの。薬品部分はあるまで媒体。」

今回を例にとるなら、貴方に目薬が差されたのを切欠に、貴方の目を治す魔法が発動したって事」

「うーんと……俺は魔法がかけられた？」

「その程度の認識で充分。問題は、点眼時点での貴方の異常が二つ合ったこと」

「二つ？ 玉ねぎのせいで凄く目が痛い以外の異常は無かったはずですけど」

「それは問題ですらないわね。一つは目が悪かったこと。先天的な問題でもなければ、魔界の子の視力は基本的に一、二程度は維持してるわ。目の酷使による視力低下は、魔法で治して当然ってこと」

「だから眼鏡とかコンタクトつけなくて良くなったんですね」

滅茶苦茶痛かったが。それでも見えるようになったのはありがたい。

「問題は二つ目。貴方が倒れたり、色々見えるようになったのは、こっちのせいね」というと

「前提の話をすると、魔界の子と人って体の作りが違うの」

「……まあ、でしょうね。角とか羽は、少なくとも俺には生えてないですし」

「外見的な違いもそうだけど。それだけじゃないわ」

「外見じゃなければ……内面？」

「というより、構造ね」

それを聞き、少し悩み、昔聞いた、意味が分かると怖い話を思い出した。

その話の中で病気の男は、悪魔と契約し、薬を貰った。

悪魔は、その薬で体が正常に戻ると言った。

契約をした以上、悪魔は嘘をつく途端に死んでしまう事を知っていた男は、安心してその薬を飲み、結果、人間ではない怪物になってしまいましたとさと、そんなお話。

この話の肝は、視点であった。悪魔の語った正常が、果たして誰の視点での正常であったのか。

「俺の目は、魔界的には欠陥品だったんですか」

「ええ。魔界とここでは接種する物が違うから、それを受け入れる為の体の作りが違う。

魔法の有無という違いがあるから、生物として魔法に対しての抵抗力が違う。ほかにも色々、世界的な違いがあるから、外見は似てても、作りが違う」

そこまで言われれば、流石に俺に身に何が起きたかは分かる。

「魔法薬で発動した魔法が、俺の目の機能が足らないことに気がついて、改造した」
「そうね。貴方が今見ている世界は、私やシオンが見ている世界。最初目にノイズが走っていたのは、恐らく目が捉えた景色を脳が処理しきれなかったからでしょう。でも、それもこの数日の眠りの間に完了した。」

貴方の目は魔界のそれになった。その影響が今後肉体にどう出てくるかは、正直分からないわ」

「元に戻らないですか?」

「分らない」

世界から外れた目。どんな影響が出るのかは未知数。元に戻るかも不明。よもや、話の男のように怪物になるかもしれない。

「出来れば、角とか生える程度の少しの変化か、怪獣みたいに滅茶苦茶大きくなるような極端な変化がいいです」

「いや、それも分からないけど。納得したの?」

「理解しました。ちよこ先に色々と生えたままなのは、それが理由ってことですね」

「う、うん。まあ、そうなんだけど……」

目尻の涙を拭うちよこ先から、信じられないものを見る目を向けられる。そんな目で見られても、困ってしまふ。

「ぐだぐだ言っても仕方がないですし、外見の変化が無ければとりあえず困らなそうなので」

「……んー」

そうなんだけど、そうじゃないと言いたげなちよこ先の顔。

もつとこう、あるじゃないと言いたげでもある。

そんな不満そうな顔をされても困る。

泣かれてしまったら、おちやらけ、飲み込むしかない。

「慣れるのに時間はかかるかもですけど、慣れたら毎日ハロウィンみたいで楽しそうです」

「……楽しいばかりじゃないわ」

俺の言葉にちよこ先が答える。

「見られることに抵抗が無い子もいるけど、見られたくない子もいるし、見た者は殺すつて子もいるんだから」

「最後の子については引きこもってていただかないと自分が死ぬ説ありますけど」

「例よ」

「お願いだから目を見て」

「ここままで基本的にまつすぐこちらを見ていたはずのちよこ先が、露骨に視線を外す。

「兎に角、基本的には見えない振りをしていなさい」

「はい」

一先ず頷く。正直できる自信はない。嘘は苦手で、直ぐ顔に出てしまうタイプという自覚はある。見てしまったものを見なかつた振りするのは、些か厳しい。

逃げ足を鍛えた方がいいかもしれない。それが目をつぶつても歩けるように心眼を鍛えるべきか。

「心眼の方がかつこいいから心眼にしよう」

「さては事の重要度の認識が甘いわね？」

今度はこちらが目をそらす。

「本当に気を付けなさいよ。極端な例とはいえ、全くない訳じゃないからね。まあ、学校に通っている子達にそこまで気性の荒い子はいない筈だけど。とりあえず、伝えられる子には私から伝えておくわ。それでも何かあつたら、保健室に来なさい」

「ありがとうございます」

頭を下げる。明らかに業務外だろう。礼を言うしか出来ない自分が情けない。

「何か手伝えることがあれば、言ってください。何でもやるので」
「ん？ 今、何でもって言った？」

「文字通りの意味です」

「……重いわ。気にしすぎないで」

でも、と漏らしたちよこ先が、静かに目を閉じ、そして頭を下げた。

「それなら、お願い。シオンを怒らないうであげて。あの娘、本気で貴方を心配して目薬を使ったの。その結果は、貴方の望んだ事では無いけど、あの娘の優しさを責めないであげて」

「……」

むしろ、そちらこそが本題だったような、静かな熱量。

基本的に軽い人間だから、こういうのは苦手で。

ただ、流していい事ではない事は分かるから、受け止め、返す。

「安心してください。そもそも怒っていませんし、責めるつもりもありません。一緒に暮らして、シオンの人柄は分かっていますから。寧ろ、心配をかけたことが申し訳ないくらいです」

頷いて返せば、再びちよこ先が渋い顔になる。

「私が言っておいてなんだけど、多少怒っても怒らないわよ？」

「いえ、全然怒ってないですけど」

「そう……。もうちよつと自分を大切にしてくね」

「……？ はい」

何が言いたいのか謎であつたが、とりあえず頷く。

「凄く心配なんだけど……。とりあえず、話はこれくらいね。質問はある？」

「シオンはいつ帰ってくるんですか？」

「二月位は、向こうで調べものをすると思うけど。どうして？」

「食材の買う量とか決めないと行けないので」

「食材ね。そういうえば、あの娘、家にお金を入れてた？」

「なんならお小遣いを渡してましたけど」

三食屋根付きとはいへ、文無しで過ごすのは辛いだらうと、三千円ほど渡していた。それ以上は流石に生活に障るので、我慢してもらっていたのだが。

俺の言葉に、ちよこ先が頭を抱える。

「一応確認だけど、確かご両親は出張中よね？」

「はい」

「仕送りは？ シオンの事はきちんと話してある？」

「……」

「視線を逸らさない」

話していない。というより、話しようがない。同居人が出来ましたと、言えようはずもない。

黙っているのだから、仕送りに変化はない。

俺の反応で察したのか、ちよこ先は溜め息を漏らした。

「まあ、好きでやっていますし」

「そういう問題じゃないでしょ。一人分の食費で二人分の食事を用意して、お小遣いまで渡すなんて。ちゃんと食べてる？」

「一応」

それよりも、女の子を家に住まわせている事を怒るべき気がするが。魔界的にセーフなのだろうか。

「もしシオンがこれからもここで暮らすなら、きちんと生活費をいれるように言っておくわね」

「別にいいんですけど」

「そうはいかないわ。そもそもあの娘のわがままに貴方がお金を出す必要なんてないんだから」

「わがまま？」

「……それはともかく」

ともかく。

「はじめは必要よ。あの娘がここで暮らす以上は、しっかりと生活費は入れさせるわ」
「分かりました」

「正直助かる。余裕があるに越したことはないの、貰えるのなら貰いたい。」

「他に聞きたいことはある？」

「明日から学校に通えますか」

「調子が悪くなければ、構わないわよ。皆勤賞については誤魔化しておいたから、まだ目指せるわ」

「やったー！」

「今日のテンション見せないで」

立ち上がって両手をあげる俺に、ちよこ先の言葉。

そんなことを言われても、嬉しいから仕方がない。

「まあその調子なら、大丈夫そうね。くれぐれも気を付けること。いいわね」
「はい」

数時間後。

放課後の、社会科準備室。

「ひええ」

目を煌々と輝かせ、触れてもいないのに髪が逆立つるしあが、扉の前に立ちほだかっていた。

るしあの足元から骸骨が現れた。一体、二体と続々沸き上がる。

「信じてたのに」

るしあの声が届く。弁解しようとするが、遮るように骸骨がカタカタと噛っているように震えだした。猛烈な誤解をされている事は分かるのに、こちらの声は届かない。

「やっちゃって」

それなのに、るしあの声だけはやけにクリアに俺の耳に届き。

直後、骸骨たちは俺をめがけて襲いかかってきた。

閑話のような時間

朝から世界は賑やかだ。

この前はノイズ混じりであつたが今は鮮明に、獣耳や角や尻尾や羽が見える。

Halloween Nightも真つ青なお化け率である。いや、お化けではないけれど。

とはいえ、原則見て見ぬ振りをしなければならぬ。仕方がないので、俯きがちに道を行く。ちよつと落ち着かない。

「おはよ」

ドンと、背中から衝撃。

振り替えると、笑顔を浮かべる大空がいた。

「どうしたの？ 俯いてるなんて、らしくないよ？ まだ体調悪い？」

「……おはよオ！」

「何そのテンション!？」

「ちよつとふざけた。おはよう、大空」

「ええ……」

やべえよこいつと目で語る大空に、今度はこちらが笑顔を返す。

通学路で会うのは地味に初めてだ。こちらには駅やバス停もないから、たぶん家がこつち方面なのだろう。寧ろ、良く今まで鉢合わせ無かったなと思う。

「今日は朝練無いのか？」

「休養日で部活は休みなんだ。だからいつもより家出るの遅くて」

「だから今まで会わなかったのか。……じゃ、ここで」

「なんで!? 一緒に学校行こうよ!？」

「いや、自分みたいなのが大空さんと一緒に登校とか役不足ツスよ」

「その役不足って正しい意味で使ってる？」

「……スウー」

「お前エエ！」

掴まれてガツクンガツクン揺らされる。

酔いそう。それ以上に目立ってしまう。回りの視線が、痛い。

「その二人ー。登校中の不純異性交遊は校則違反だよー」

「誰が不純異性交遊なんか……」

振り向いた、スバルが固まる。

「天音先輩おはようございます」

「おはよう。最近休んでたみたいだけど、大丈夫？」

「はい。ありがとうございます」

生徒会役員に食って掛かった事実がにつき、わなつく大空を他所に、俺は天音先輩と話す。

あの日見たまま、頭には手裏剣。あの時気づかなかったが、背中にあるらしい羽が、横に覗く。

羽の感じが魔界っぽくなく、鳥類と仮定するなら何とも頼りないし、頭の手裏剣が謎だ。

「……やっぱり忍者」

「天使だからね」

俺の呟きに反応するように、天音先輩が言う。

キョトンとしていた大空を他所に、天音先輩はクスリと笑い、流し目を使いながら、自分の口許に人差し指をやった。

「困ったことがあったら言っただけ。目の事とか」

「先輩……」

そのまま歩き去ろうとするものだから。

「クールキャラ、出来たんですね」

思わずそんなことを言うと、天音先輩がつんのめった。転びそうになるのを、羽をばたつかせて耐えると、振りかえり、詰め寄ってくる。

「なんでそんなこと言うかなあ！ 折角格好良く決まってたのに！」

「ぼく無かったというか」

「そんな理由!?!」

そんな理由である。

「でも、ありがとうございます。何かあったら言いますね」

「……うん。じゃあ、ボクは生徒会があるから」

不承不承というか、納得いかない様子を表情に見せながらも、またねと手を振った天音先輩が、先に行く。羽の根本にある星の意匠が見え、成程確かに天使のようだなと思いながら、俺は胸ぐらを掴んだままの大空の手を叩いた。

「そろそろ離してもろて」

「ん、ああ。ごめんごめん」

手が離れる。ネクタイや襟元を直すに俺に、そういえばと大空。

「目の色、違うね。カラコン入ってるの？」

「ん？ ああ」

俺も今朝鏡を見て気が付いた。

両目とも黒かった筈の瞳が、深い紫になっていた。意図せずシオンカラーである。

正直自分でも気づかない程度の変化なら誰も気づかないかなと思っていたが、きちんと気づくあたり、流石陽キャか。

「ちよつと目が良くなりすぎる体質になったもんで、目を悪くするためのコンタクトいれてるから、そのせい」

「何その病気!?!」

「病気じゃないよ」

体質が変わっただけである。

「それより、早く行こう。折角余裕あったのに、余裕が少なくなってきたし」

「あ、ちよつと」

先んじて、会話を区切るべく歩き出す。そもそもなんで天音先輩はあのタイミングで言ったのか。大空に聞かれたら不味そうなものなのに。……まあクールキャラ行けるじゃん程度にしか考えていないだけだと思うが。

追い付いた大空が並ぶ。ポケットからスマホを取りだし、何やらタップと操作しだした。

誉められたものではないが、先の話題が再熟しても面倒なので特に何も言わず、寧ろサポートするように回りを警戒する。

「あ、おはよー。しばらく休んでたけど平気？」

「おはよ。大丈夫。すっかり元気」

「そっか。じゃあ、また教室でね」

ひらりと手を振り、挨拶をしてきたクラスメイトが、走っていく。その背に、茶毛のひよろりと細い尻尾が見えた。

続けざまに何人かに挨拶をされ、抜かされるが、何人かは何かしらが生えていた。

それに、見れば特別生えてこそいない人間と同じ形だが、耳だけがつんと尖った笹の葉に近い形の人もいる。あれはもしかしてエルフと呼ばれる類いのお方なのだろうか。その近くに飛んでいるパンダのような不思議生物も気になる。害が無いならお近づきになりたい。

こうしてみると、以外と人間って少ないことが分かる。いや、もしかしたらエルフ（仮）の方は人間である可能性はあるが。それでも、人間とそうでないもの半々位だ。ついこの間までの当たり前が、覆る。

魔法使いはファンタジーではなく、優しい保健教諭は悪魔だったし、天使な生徒会役員は本当に天使だった。隣にいる大空だって……。

「なあ、大空」

「ん？ なーに？」

「なんで嘴、生えてねーの？」

「スバルのこと、なんだと思ってるんだあ！」

大空は人間だったか。それでも、もしかしたら俺が親しくしてた人たちも人間ではない可能性もある。

「無視すんなあ！」

ガツクンガツクン揺すられる。残念ながら助けてくれる生徒会役員は此処にはいない。

「しかも、目が良くなる病気なんてやっぱり無いし！」

「あ、それ調べてたのか」

そりゃ嘘なんだから、あるはず無い。

「カラコンカラコン。カラコンカラコン」

「途中から下駄の音になってるじゃねーか」

パツと手が離れる。襟首を直す隣で、大空はスマホをポケットに戻した。

「でも、カラコンって校則違反なんじゃないの？」

「どうなんだろ。調べたこと無いや」

実際カラコンでないし、どうにかしろと言われればカラコンをつけて誤魔化すしかない。

「まあ、あんなだけ接近した天音先輩が何事も言っでなかつたし、大丈夫なんじゃないかな」

「……確かに」

もつとも、天音先輩は前もつて俺の事情を知っていた様子だから、瞳の色が違うことについても知っていた可能性が高いが。事情を知らない大空からすれば、気づいて見逃したように見えるのだろう。

じゃあ、大丈夫なのかなあと大空が呟く。多分と返ししながら、見えてきた学校を前に、気を引き締め、校門を抜けた。

昇降口で靴を変える。

大空とはクラスが違うから、廊下で別れ、教室に入りながら挨拶する。すると、何人か挨拶が返ってきた。

ついで、体調を案じる言葉や数日の休みを茶化す言葉がかけられる。休みの間は寝たきりのまま一切目覚めなかつたので、日にちが経つてゐる感覚がなく、それをそのまま、相手によつて言い方を変えながら返して、席についた。

教室を見渡す。クラスの七割程度は既に出席していて、人間か否かの割合は半々程度。

今、入ってきた一人は、人間っぽい。特に生えていないし、耳も普通だ。

「精神衛生的に大丈夫そうかな」

クラス全員異種族となれば、流石に平静を装うのは厳しいかもしれないが、半分ならなんとかなる。安心しながら、時折かけられる声に答える。

結局、残りのクラスメイトはほぼ人間のようで、一人だけエルフラしき者がいる程度であった。

始業のベルと合わせるように入ってきた教師も人間。いつものどこか気の抜けたあいさつに始まり、朝のSHRが始まった。

週末に野球部の試合がある話。文化祭の話。提出物の話等、連絡事項が何点か告げられる。

野球部に知り合いもいるし応援に行くか、所属している部活で出し物をするのか。考えることと確認することを反芻しているうちにねHRは終わった。

一時間目の教材を取り出す。科目は数学。昨日の晩に多少の予習はしたが、三日分のずれが果たしてどれほどか。勘で勉強したから正直不安だ。

特にフラグだったということも無く、六時間目までの授業を乗り切り、放課後である。

授業の不明点と休み中の連絡やプリントを受け取り、職員室を後にする。ちよこ先の

言っていた通り、三日間は公休扱いとなっていて、出席扱いだった事に安堵しながら部屋に向かうも、施錠されていた。

「いないのか」

普段であれば活動日のはずだが。まあ、部長の気まぐれで活動したりしなかったりだから、こういうこともままある。時間を確認してみても、本来なら活動している時間。それなら、やはり今日の活動は無しとあたりをつけ、宿題をするために図書館に向かうことに決めた。

見かける生徒は部活をしている生徒程度の閑散とした校舎。普段授業を受けている校舎と違い、こちら側の校舎は特別教室の多い校舎だから生徒の姿も一層少ない。

だからだろう。その姿はより目を引いた。

段ボールがこちらへ向けて歩いてきていた。その下に、学校指定の制服を身に着けた下半身が見える。

随分と大仕事だ。荷台があればいいが、さすがに常備されて居ようはずもない。

手伝うために近づく。向こうはこちらに気が付いていないだろうから慎重に。

近づくと、声が聞こえた。

「んじよ、んじよ」

知った声だ。知らぬ生徒に声をかけるより、よほど気持ちが悪くなる。

俺の姿が見える場所まで移動しようとしたところで、ぴたりと段ボール。もとい、るしあが足を止めた。

「先輩？」

「……」

思わず俺も足を止める。まだ見えていないはずなのだが。

「違いますか？」

「ああ、いや。あつてる。手伝うよ、るしあ」

「ごめんなさいなのです。上二つを持ってもらえますか？」

「分かった」

時折超常的に物事を見透かして見せるるしあだから、まあ、いつもの事だろうと思い、近づいた。

向かい側から、るしあの持っていた三つの段ボールの内、上二つを持ちあげる。

まあまあ重い。三つめも同程度の重さならそれなりの重労働だ。

よく一人で持っていたなと思いつながらるしあを見て、息をのむ。

「ふう……。ありがとうございます」

「あ、ああ」

髪色がピンクだった。

髪型もお団子ショートヘアでない。腰まで伸びるロングヘアで、普段お団子のある位置で髪を結っているのは変わらないが、お団子ではない。

一体、俺が休んでいる間に何があったのか。ぐれてしまったのだろうか。なかなかファンキーな気がするが。校則的にどうなのだろう。

「先輩？　どうかしたのですか？　早く行きますよ」

「えっと」

歩き出したるしあを追う

るしあの様子は以前と変わらない。何か嫌なことがあつて髪色を変えた、というわけではなさそうだ。

そもそも数日で伸びすぎである。お団子で纏めていたであろう分を加味しても、明らかに長すぎる。

ということとは、恐らく。

「かつら？」

ウィッグというんだったか。文化祭か何かで使うやつをつけているだけだろう。なるほど、これなら説明もつく。

ほかの可能性が無いわけではないが、それにしても普通だ。髪色、髪型が違うだけ。それなら、やはりかつらという方が近い気がする。

「よつと」

少し先で、目的の部屋についたるしあが、戸を開けていた。

中に入り、間もなく出てきて、俺を手招く。

後を追って中に入り、るしあが持つていた段ボールの上に、自分の段ボールを置いて、振り返った。

先に廊下に出ていたるしあが、後ろから夕日に照らされ立っている姿が、目に入る。

「るしあ」

「はい？」

「ピンクのロングヘア、似合ってるな。可愛い」

素直な言葉が、口から出た。

ピンクの髪色には馴染みはないが、それでもこじんまりとしたるしあの背格好と相まって、人形のような可愛さがあった。

俺も髪の毛染めてみようかなと思いつながら、るしあを見て反応を待つ

こんなことを言えば、るしあが調子に乗るだろうか。気持ち悪がられたら、ちよつと傷つきそうだ。

だが、るしあの反応はどれもなかった。

顔から表情が抜け落ちる。虚無顔というのか。

その顔で俺を見ていたるしあは、再び教室に入ってきて、おもむろに扉を閉めた。

照明が点灯していないこの部屋は、光源となりそうな窓も扉の反対側のため、かなり暗い。

おどろおどろしい雰囲気の中、がちやりと錠がかけられる音だけが、やけに響いた。

「おい、るし——」

カツと開かれたるしあの双眸が煌々と輝く。ぞくりと、背筋が震えた。

からりと一つ。るしあの足元から音が響いた。視線を落とす。

からりと二つ。俺の目が、何かをとらえた。

からりと三つ。とらえたそれはしやれこうべ。

からりと四つ。伽藍洞の眼窩が、俺をとらえた。

からりと五つ。

からりと六つ。

からり、からり。からりからりからり——。

「ひえ」

るしあの足元。恐らくは影なのであろうその場所から、骸骨が一体二体と次々出てく

る。

肉の無い体をからりからりと言わせながら、しっかりとその両足で立ち上がり、るしあを守るように立ちはだかる。

「——のこ」

「ん？」

「信じてたのこ」

何をと、俺が聞くより早く。

「やっっちゃって」

るしあの言葉を合図に、骸骨達は動き出した。

死霊術

骸骨共が襲い来る。

肉など一片も無い癖に、しつかりとした足取りで勢いよく。

凡そ理解の範疇外の光景。

戸惑うも、向けられる感情が正の物ではないことくらいは分かる。

故に、振るわれた骸骨の腕を、俺は屈んでかわした。

そのままテーブルの下に潜り込み、中央あたりへ避難する。

だが直後、横合いから別の骸骨の手が伸びてきて、反対側に逃げた。

ゴロゴロと転がり移動。やがて、壁際にあつた柵にぶつかり、仰向けに止まる。

見上げた先で骸骨の眼窩と目が合つて、慌てて起き上がった。その場を離れ窓際まで退避する。

ちらり、窓の外を見る。俺の記憶違いはなく、ここは三階。

人間は四階以上から飛び降りないと死なないというから、ここからだつたら飛び降りても大丈夫だろうか。とはいえ最後の手段にしたいところである。

視線を戻し、室内。

るしあは、自分のもとへ二体の骸骨を待機させていた。

俺にじり寄ってくるのは三体。

中央のテーブルの左右と、上からと。テーブルの下を使って逃げたから、確認していないけど、もしかしたら隠れているかもしれない。そうなると四体だ。

この部屋は準備室のようなもので、通常の教室の半分程度の広さしかないから、それだけの数でもいよいよ抜け道が怪しい。

「——きい」

「んっ？」

「嘘つきい」

るしあの口が動く。

「この男はずっと騙してた。本当は分かかってたんだ。分かかって黙ってた。偽った。何で？ 騙し討ちするつもりだ。殺すつもりだ。酷い。信じてたのに。許せない。何もしていない。本当に？ 殺しちやおう。ダメ。殺そう。殺して、剥いで、全部奪おう。同じにしよう。そうすれば——」

カラカラカラカラカラ——

るしあの言葉を遮るように、骸骨達が大口を開け、震えだした。

それはまるで笑い声にも近い、嘲る様な侮蔑する様な、そんな音。

それらをかき消すように、ガラスの割れる音が響いた。骸骨達の震えが止まった。

るしあも黙ったまま。漸く俺のターンが回ってきた。

「……るしあ、ごめん」

開口一番、告げるべき言葉を告げる。るしあは黙ったままだ。

「髪の色、可愛いなって思っただけだったんだけど、まずかったか？」

「……」

「見られたくなかったってことなら、それに関しては本当にごめん。最近見えるようになったんだ」

極力、声が震えないよう心がけながら、一音ずつ、絞り出す。もし、見られたくなかったというなら、ちよこ先の言葉をきちんと理解していなかった俺が、完全に悪い。

「でも」

これだけは言わなければならない。

「さすがに嘘つきとか殺すって言われるのは」

「……？」

首を傾げるるしあを前に、一つ深呼吸を挟んで。

「ちよつと傷ついた」

その言葉が切っ掛けだった。

いの一歩にテーブルの上にはいた骸骨が襲い来るのを掌打で撃退。左右からのばされた骸骨の手は避けて、最短ルートを取るべく、テーブルに乗る。二歩で渡り、積まれた段ボールは手をつき越える。

テーブルの上からるしあがいる方へそのまま降りる。

『わん！』

そのまま後ろにあるテーブルに手をつき、足を上げた。

直後、テーブル下に潜んでいた骸骨が飛び出してきたので、飛び出してきた頭蓋骨を思い切り踏んで止め、改めて床に降りる。

るしあはすっかり静かだ。

ただ、驚いた表情をうかべている。

近づいたため、一歩踏み出す。

傍に控えていた二体が動いた。

捕らえるつもりなのか、二体が手をのばす。

そのうちの一体の腕をつかみ、思い切り振って、もう一体にぶつけた。

存外軽く、それだけで二体はもつれるように隣の棚にぶつかり、倒れる。

最後の防衛を突破して、もう一歩。二歩。

手を伸ばせばるしあに届く位置だ。迷わず手を伸ばす。るしあが、ギユツツと目を閉じた。

関係ないのでそのまま手を伸ばし——るしあの後ろにある扉の錠を開けた。がちやりと、るしあが閉じた時と同じ音が響く。

そのまま戸を開け、日の光を部屋の中に取り込んだ。

「俺の事は、ちよこ先が詳しいから、今から保健室行こう。そこで聞いてくれ。俺が説明するより、分かりやすいだろ」

声をかける。

るしあは恐る恐るといった様子で目を開け、俺を見上げた。

笑って返す。大分怖がらせてしまったみたいだから、嫌われてしまっただろうか。

不安になりながらるしあの返事を待つ。

「は、はいなのです」

こくこくと、るしあが首を縦に振る。

大丈夫、だと思いたい。るしあの脇を抜けて先んじて廊下に出て、振り返る。

室内で、るしあの影の中に骸骨達が沈んでいくのが見えた。

しばし待てば、骸骨達はすっかりいなくなり、残ったのは割れたガラス。骸骨をぶつ

けて壊れた棚。

西日に照らされた部屋の中で、それだけが目に留まる。るしあも同じ物を見ているらしい。

「あの」

「鍵は俺が返しに行くよ。ついでに説明してくる」

「でも、るしあのせいですし」

「割ったのも暴れたのも俺だ。それに説明できないだろ」

「う……」

指摘され、るしあの言葉が詰まる。

「先に行つて、ちよこ先から聞いといて。終わつたら、帰つちやつてもいいからさ」

「……分かつたのです。先に行つてます」

るしあから、鍵を預かる。誰のお願いで荷物を運んでいたのか俺に言うと、るしあはぺこりと一礼して、パタパタと走り去つた。

きちんと保健室の方へ行つたことを確認して、ポケットに入れていた右手を引き抜いた。

「いてて」

窓を割つた時に切つたらしく、血が滴る。ポケットティッシュを取り出し、充てて。ようやく一息。

「なんか怒涛の時間だったな」

こういうことがあるのかと、身に染みだ。割とすぐに正気に戻ってくれたから何とかなったが、正気に戻らなかつたら、多分もつと酷い怪我をしていたらうし。

しかし、それにしても。

「お前はだーれ？」

『わん！』

肩に乗る半透明のワンコが、声をかけられて嬉しそうに鳴いた。

本日二度目の職員室で、目当ての教師に鍵を返し、準備室の事を伝える。

荷物を運ぶるしあと会い、手伝って、物珍しさから室内を見学している時に、こけて柵に激突。ふらつきながら移動して、窓も割った。ギャグマンガ張りの不運の連鎖である。嘘なのだが。

幸い教師からの覚えが悪くなかったようで、現場検証をして、窓ガラスにいったん段ボールをはりつけての目張りを手伝い、それ以外のお咎めは特になし。

ガラス代くらい払うつもりだったのだが、わざとでないならいいと言ってもらえた。日頃の行いの大切さが身に染みる。

部屋の前で別れ、俺も保健室に向かう。

途中鞆を回収し、階段を下り、廊下を抜けて、保健室前に近づいたところで、肩のワ
ンコが一鳴き。

間もなく、扉が開いて、るしあが顔を見せた。

「こういうからくりなのか」

「先輩、大丈夫なのです？」

「ああ。お咎めも特になかったよ」

ともに保健室に入る。

中にいたちよこ先に会釈すると、ちよいちよいと手招きされた。近づくと、手を差し
出されたので、左手を置く。

「そつちじゃないわよ。右手、怪我してるでしょ」

「……」

ポケットから手を抜いて、改めてポンと。

巻いていたハンカチが外され、ティッシュを取られ。露わになった傷口を、ちよこ先
がしげしげと観察する。

「……ちよつと深そうね。縫わなきゃいけないほどではないと思うけど、一応病院に
行った方がいいかもしれないわ」

「えー」

「なら、魔法薬使う?」

「やめておきます」

利き手が目のように魔界よりの手になった途端、怪物のようになったらとんでもない事だ。

……まあ、憧れないといえは嘘なのだけど。流石にリスキーである。

「この時間でも診療してくれる病院もあるし、送ってあげる。保健証は持ってる?」

「一人暮らしなので」

「よろしい」

一先ずの消毒をされ、ガーゼと包帯を手早く右手につけられる。

やっぱり保健教諭なのだなど、その手際に感心しながら、視界の隅に立ち呆けるるしあを捉えた。

「あの、るしあの事なんですけど」

俺の言葉に、るしがびくりと肩を震わせる。

「ちゃんと説明しておいたわ。ごめんなさい、今日は忙しくて、あなたの事を伝え損ねちゃってたの」

「いえ、任せてしまいましたし……正直身に染みたので、いい機会だったのだと思います」

「あなたのそういう所、ちよつと不安なのよね」

「どういう意味だろうか。」

『くーん』

ペロりと、舐められる感触。肩に乗っているワンコも、どこか不安げな顔をしている気がした。

「……あの、先輩」

るしあが口を開く。

「本当に、ごめんなさいなのです。吃驚して、焦っちゃって、先輩に怪我させちゃいました」

「いや、怪我に関しては自分でやったんだから、気にしないでいいって」

「そういうわけにもいかないのです。そもそも、私が冷静に話を聞けたり、あの子達の制御をきちんとしていれば、怪我する状況にもならなかったのです」

「俺が迂闊だったただけだよ。本当に気にしないで」

「でも」

「はいはい」

ぽんぽんと、手拍子が二回。

「話は車の中でね。るしあも来るわよね？」

「もちろんなのです」

「なら、とりあえず行きましよう。あまり時間を置いちやうと、ガーゼから血があふれちやうかもしれないしね」

車汚れるのは嫌よと言ったちよこ先の言葉は、本気とも冗談とも取れた。

夜を往く

車内。

後部座席に、るしあと並び、座っている。

保健室を最後に、るしあはだんまり。何か言った方がいいのかもしれないが、俺も思いつかない。

「しりよう術って知ってる？」

口火を切ったのは、ちよこ先だった。

「しりよう……なんかこう、整頓術みたいな」

「資料じゃなくて、死霊よ。死ぬに霊って書く死霊」

「成程」

そつちは存じ上げない。いや、仮に資料術だったとしても、存じ上げないのだが。るしあが、口元を押えて肩を震わせているから、まあボケた甲斐はあった。

「簡単に言うと、死者に干渉できる魔法ね。死者の霊とお話ししたり、死体を動かしたり。そんなことが出来るの。その魔法を使う者を、総括して死霊術士って言うわ」

「成程」

何を急に、と思つたが、流石に行間を読む事くらいはできる。

「るしあは、死霊術士なんですか」

だから骸骨をわんさか出したり、俺の方に乗っている、恐らくは霊なのだろうワンコの鳴き声も聞こえるのだろう。

「るしあだけつて訳じゃないわ。魔界で濡羽の一族つて言つたら死霊術の名門だもの。

一族全員死霊術士よ」

「……なんか、賑やかそうなお家ですね」

「賑やか？」

「家にご先祖様が大勢いそうじゃないですか。年中お盆みたいな」

「あー」

事あるごとにご先祖様がしやしり出てきそうである。曾曾曾曾祖父とか常駐して居そう。

同じような想像をしたのか、どうなのかしら、とちよこ先も呟いていた。

「えつと……、そんなことないのです」

俺とちよこ先の期待を裏切るように、るしあが声を上げた。

「死を絶対と考えている死霊術士は、基本的に死後直ぐに消滅するように、生前から自分に術をかけていますから。家にご先祖様が常にいるつて事も、こつちの世界のお盆とか

も無縁です」

「……すみません」

俺が産まれた時には、既に母方の祖父しか居なかったから、他の祖父母とも話してみたいな程度だったのだが、茶化したみたいになってしまった。

「いえ、新鮮なのです」

だがるしあはくすくすと笑う。

「死霊術って、あまりいいイメージを持たれないので」

「……」

何も言わない俺に、るしあは曖昧に笑って返した。

確かに、るしあがどんな子なのかを知っているからこそ、彼女が骸骨を操って襲ってきて、どこか安心していた節はある。

仮にるしあの事を何も知らないときに、今日のような事があつたとしたら、多分、三階から飛び降りていたと思う。

「操る死体は、その人の生前に契約した人の死体ですし、死霊だって、ちよつと教えてもらったり、お願いを聞いてもらったりする程度なんですけど」

俺に気が付くのはワンコの鳴き声が聞こえていたからで、部活の活動について教えてくれたときは、近くにいた霊に聞いたのだろう。種明かしすれば、その程度。

でも、まあ正直。

「たまに虚空と話してるの見て、怖いなあと思ったことはあるけど」

「あれはわざとなのです。先輩はそれでも何も、私との付き合い方を変えなかったの。
ついでに」

るしあが笑う。

そして、笑みが引いた後は、悲しげな表情に変わった。

「この世界に来て、私と周りのズレがまだ分かって居なかった頃に、同じようなことをして、本気で引かれて、嫌われた事があった。私の一族の中には同じくこの世界で、死霊術を使っているところを見られ、化け物めと焼き討ちされた人がいるということも聞いたことがあるのです」

表情と裏腹に、口調は平坦。それが当たり前だからと、言わんばかりに。

「もつとうまくやろうって思ってたのに、初めて死霊と話すのを見た時、先輩は驚いて引いたくせに、次に会った時は普通に話をしてくれて。何回もそんな感じで」

だから、と。そう言いながら、るしあは俺の方を見た。

まっすぐ俺を見て、そして頭を下げる。

「油断していました。ごめんなさい。急に髪の毛の事を言われて、パニックになってしまつて。死霊達の制御もままならず」

「そっか」

恐らく、あの時のるしあの言葉は、あの骸骨達の言葉――。

「先輩が裏切ったなら、殺して死体にしちやえばもう裏切らないよねって私の中に過った考えが、死霊達に伝播してあんな事になったと思います」

「……そっか」

じゃない可能性がある。飛び降りるのが正解だったかもしれない。

「二度と先輩に近づかないと誓うのです。学校であつても無視してください。すぐには難しいですけど、遠くないうちに転校します」

「それはだめだ」

「ですよね……はい？」

顔を上げたるしあと、目が合う。

「転校される方が気になる。自分への罰とか、そういう風に考えるつもりなら、るしあは今まで通りにしてろ。俺もそうするから」

「でも」

「でもない。実際俺も迂闊だった」

「ちよこ先生から聞きました。しようがないと思います。それに、本当は今日、ちよこ先生から呼ばれてたんです。でも、後回しにしちゃって。呼ばれたときにすぐに行く」

て、ちゃんと話を聞いていれば、パニックになることだって」

「心構えが足りてなかった。その内起こりえた事が今日起きただけだよ」

「起こらなかったはずの事なのです」

「俺の身には起こることだった。相手がるしあだったってだけ。」

それとも、るしあはどうしても転校したいのか？」

ずるいかなと思いつつも、そう問う。

「ここで転校したいと言われると、どうしようもないが。」

「それは」

それだけ言って、るしあが唇を強く結び、黙るだけだった。その様子を見て、安心した。

「ならこうしよう。お互いに一つずつ、お願い事を言って、それでチャラ。どう？」

「……最近スバル先輩としての貸しって事なのですか？」

「ああ。お互いに貸し一。それでどう？」

「……分かったのです。貸し一で」

「ありがとう、るしあ」

『わん！』

仲直りの気配を感じたのか、嬉しそうにワンコが鳴いた。

ああ、そういえば。

「ところで、るしあ」

「はい？」

「このワンコ、一体何なんだ？」

「タロちゃんの事、見えるんですか？」

タロというらしい。なんとなく、聞き覚えのある名前だ。

「なんか知らんが見える。聞こえもする」

「……えつと。その子自身は、先輩の守護霊なんですけど……」

守護霊なのか。不安が募る。

「見える理由……」

るしあは腕組。思考。暫しの間を開け。

多分、と口を開く。

「私の魔力に触れたからだと思うのです」

「簡潔に頼む」

「うーんと、魔力に関しては私も専門ではないので……えつと」

「影響を受けたって事じゃないかしら」

困り果てるるしあに、ちょこ先が助け舟を出した。

「影響？」

「魔力って、本来なら均一な物なの。簡単に言えば、誰かに出来る魔法は魔力を待つ他の誰かに出来る。るしあがシオンのように転送することも出来るし、シオンが死霊術を使うことも理論上は出来るわ」

「そうなんですか？」

ちらりとるしあを見れば、ふるふると首を振って返される。

「私は転送魔法、使えませんか？」

「知ってるわ。それにシオンも死霊術は使えない。そういう風に育ったもの」
「どういう？」

「成長の過程で可能性をそぎ落としてったの。そうしてそぎ落とした分、育てたい部分を育てやすくした。まあ、剪定みたいなもの」

「あー」

頭の中で理屈が通ってくる。詰まる話。

「俺は生まれたての赤ちゃんって事なんですか」

「そういうこと。魔力を手に入れたて、つまり何もそぎ落としていない現状で、るしあの死霊術の魔力に触れたから、その方面で影響が出たんじゃないかしら」

私も専門じゃないから、勘だけど、ちよこ先は最後に予防線を張る。間違えていて

てるクソガキで十分である。

なので、話を戻すことにした。

「しかしとなると、俺はこの先、ずっと幽霊が見えたままって事なんですかね？」

「それは……ああ、るしあの影響で見えるようになったなら、るしあに魔法を教えてもらえばいいんじゃない？」

「魔法を？」

「死霊術。といつても、見えるようにするのと見えないようにするの程度だと思うけど」

確かに、見えるようになったのだから、見えなくなるようににもなりそうだが。

実際、魔法だ魔力だといわれても、きっちり理解しているわけじゃない俺に、そんなことが出来るだろうか。

るしあの様子を窺えば、あごに手を当て、考え込んでいる様子。

「——多分行けるのです」

「……マジイ？」

驚きすぎてちよこ先みたいになってしまった。

「マジなのです。死霊術士が最初に教わる魔法が、死霊を見えるようにする魔法なので。既に見えているなら、早いのです」

「成程」

今は電源がオンになりっぱなしだから、オフにするやり方を教えるだけということなら、確かに難易度も低いのだろうか。とりあえず見えなくなるに越したことはない。むしろあの向こう側にある窓の向こうに血まみれの女がしがみついているのが見えるし。

大丈夫なのだろうか。さつきから、女の髪が伸びて、車体を覆わんとしているように見えるが。

俺の目線に気が付いたのか、るしあが後ろを向いた。窓越しに、女と目が合う。るしあはおもむろにパワーウインドウを下げた。バサバサ風と、それにあおられた女の髪が車内に侵入する中、るしあは女の前髪をつかみ、自分の方へ引き寄せる。

「消えて」

ただ一言。

それだけで、女の姿が霧散する。車を覆っていた髪も消え、まるで何事もなかったかのよう。

「すーい」

「これくらい余裕なのです」

ふふんと、るしあが胸を張る。俺にはあんなドスの効いたお願いは出来ないので、や

はり見えないに越したことはなさそうだ。

「じゃあ、お願いします、るしあ先生」

「先生……。はい、任せくださいなのです、先輩！」

嬉しそうに笑うるしあに、漸く肩の荷が下りた気がした。

悪戯猫のいる店

そろそろ周囲が薄暗くなってきた。時間的には夕暮れと呼ぶにはやや早い時間だと思いが、高い木に囲まれた周囲には民家がなく、街灯もまばらで充分暗い。丑三つ時にも歩けば、ちよつとした肝試しでも出来そうな雰囲気がある。まあ、常時幽霊が見えてる俺にとって、日常生活からしてすでに肝試しではあるのだが。

それでも、やはりこういうシチュエーションを前にすると、幾許か恐怖心は煽られる。怖いなあと精神的恐怖にさいなまれ始めたあたりで、店が見えた。通り沿いに、ポツンと一件。

古びた外装は、凡そ繁盛しているようには見え、扉にかけられた『商い中』の札を見なければ、既に閉店しているものと錯覚しそう。

とはいえ、札に書かれている以上は、営業していると筈である。恐る恐る、引き戸を引いた。

「すみませーん」

店内は薄暗い。留守だろうか。

でも、札には商い中とあり、鍵も開いた。なら、店の奥だろうか。丁度店の奥にある

カウンターの、更にその奥に通路が見える。

「すみませーん！」

先程よりも大きい声を出しながら店に入り、反応を待つ。

——音が無い。人がいるか怪しい。

やはり留守だったのかと、戸を開け帰ろうとした時、電気が灯った。

「ごめんねー。お待たせー」

声を掛けられ、驚いて振り返る。

おそらくは奥に続いているのであろう、通路から、同い年と思しき女子が顔を見せていた。

薄紫の髪、紫の瞳。どこに売っているのか、おにぎりの描かれただぼだぼの黒いパーカーと左右で長さの違うジャージのズボンには紫のラインが引かれている。

とはいえ一番に目を引くのは、首に巻かれた首輪——ではなく、頭の猫耳と体の脇から覗く尻尾だろうか。どちらも髪色と同じく薄紫だ。

成程。猫なら忍び足も得意だろう。音が聞こえなかった理由はこれで解決である。

「〔注文はー?〕」

店内に降りた猫娘が、カウンター越しにそう尋ねてくる。

「初めての人だよ。うちのおにぎりは皆美味しいから、全部おすすめだよ」

「おにぎり?」

見れば、カウンターのの上には包装されたおにぎりが幾つか置かれていた。

具材の種類も作り置きの数もそんなに多くない。チェーン店には見えないし、個人経営なのだろう。

周囲の状況や店の雰囲気を見る限り、これくらいが丁度いいのかもしれない。

「えっと、おにぎりを買いに来たわけじゃないんだが」

「そうなの?」

「ああ。ちよつと聞きたいことが」

「そうなんだ。なら、三百かなあ」

おにぎり二つ分の値段である。やや高くないだろうか。

「……鮭と明太子」

「毎度ありー。食べてく?」

猫娘が指をさした先に視線を向ければ、イトインスペースと思しきベンチと小さな

テーブル。

「……食べてく」

「おっけー。座って待ってて」

「それでね。この前なんか——」

ベンチで待つこと暫し。おにぎり二つと、サービスらしいお茶を持ってきた猫娘こと猫又おかゆと雑談しながら、俺はおにぎりに舌鼓を打っていた。

全部おすすめというだけあり、確かにおいしい。塩加減も硬さも絶妙だった。

「それでね——」

しかし、これは雑談というのだろうか。

食べ始めて15分程が経とうかという頃。その間、俺はおにぎりを食べているだけで、おかゆが一方的に喋り続けているだけであつた。何というか、本当に良く喋る。フブキ部長とか大空も割と喋る方だから、特に苦は無いが、あの二人ですら出会つて三十分も経っていない相手に、ここまで喋り続けるのは無理なではなからうか。

一応相槌は返しているが、その相槌すらいらぬのではと思ひながら、おにぎりを食べきつた。お茶も飲み切り、湯呑を置く。かたりと、湯呑とベンチが当たる音で、おかゆがハツツとした。

「食べ終わったの？ 随分早いね」

「いや、まあまあ時間かかつてるけど」

「そう？」

首を傾げたおかゆが時計を見上げて、ほんとだと呟く。

「お代わり煎れてくるねー」

「いや、大丈夫……なんだよなあ」

呼び止めるより早く移動したおかゆがカウンター近くのスペースでお茶を注ぐのが見える。

もう少し位いいかと、ぼんやり店内を見渡す。

しかし、これと言つて特筆して面白そうなものはない。普通のおにぎり屋さんであった。何でこんな場所でおにぎり屋さんをしているのかと思つていると、「お待たせー」と緩い声とともにおかゆが戻つてきた。

視線を向ければ、お代わりを煎れに行つた時には持つていなかつたお盆を持つていて、そこに湯呑は当然として、更にお代わりが入つていられるだろう急須も載せている。帰すつもりが無いのだろうか。

「君、聞き上手だね。話し込んだじゃったよ」

「いや、そんなことないと思うけど」

「いやいや。流石の僕でも、初対面の相手にずっと喋り続けないうつて」

「そうか？」

そんなことない気がするが。

「そうだよ。謙遜しないで」

「……」

今のは、おかゆだったら多分、相手が俺じゃなくても喋ってたという意味だったのだが。

「はい、お代わりどうぞ」

「……お代わりどうも」

湯呑を受け取り、すする。今更だが、お茶も美味しい。

「それで？」

「え？」

「聞きたいことがあったんじゃないの？」

「……そうだった」

トークに飲まれて、すっかり忘れていた。

「道を聞きたくて。ここから一番近い駅とかバス停ってどこにある？」

「駅？ えっと、それならお店の前の道を——」

あーいつて、こーいつて、そーいつて。

「——つて感じ。分かった？」

「大体」

とりあえず、大通りに出れそうなルートは分かった。

「迷子だったんだね。新規のお客様って珍しいから、これで謎が解けたよー」

「いや。迷子じゃない」

「……でも、道が分からないんだよね？」

「道が分からないことと迷子はイコールじゃないから」

「うーん……確かに、そうかも。じゃあ、何で道が分からなくなったの？」

「……」

最近食費が辛かった。

元々一人分の生活費しかない状況で、俺とシオンの二人分の食費を賄っていたのだから、仕方がないといえば仕方がない。アルバイトをしても、限界はある。

ちよこ先はお金を入れさせると言っていたが、本当にそうなるかは分からないので、シオンが里帰りしている今、余裕のあるうちにどうかしようと思いでいたところで、数駅離れた場所にある業務用スーパーの存在を思い出した。

とはいえ、移動手段を徒歩しか持っていない身としては、下調べ無しにいきなり買いに向かうには抵抗があった。だから、学校帰りに下調べをしに来たのである。

駅からの道のりや品揃えや価格帯。周辺店舗との価格差など。

そこで終われば良かったのだが、降りるのが初めての駅だったから、その後も好きに色々を見て回ってしまい。

「駅の場所が分からなくなった」

「それ、やっぱり迷子でしょ。しかも、迷い方が幼児」

「……」

そういうえば、転勤の多い両親についてあちこち引越していた頃から、必ず迷子になつていた記憶がある。

なんなら迷子の末に県境を跨ぎ、おまわりさんに保護され、間違えてひとつ前の住所を言つて、親御さんと連絡が付かないと大問題に発展しかけたこともあつた気がする。

「成長、してない、のか」

「幼心を忘れてないのはいい事だよー」

「全肯定するじゃん」

なんか悪くない気がしてきた。

「でも、そういう経緯でここに来たなら、もう来てくれないかなー」

「いや。美味かつたしまた……」

来れるだろうか。正直道が分からない。いや、さすがに帰り道が分かれば、逆から迎えばいいのか。今まで迷子になつても家に帰れなかつた事は無いから、多分大丈夫。

根拠のない自信を胸に秘めていると、店内に音が響く。

音源の方を見れば、そこには壁掛け時計があつて、時刻は五時を指していた。

「そろそろ帰るよ。」馳走様

湯呑に入っていた最後の一口を飲み切って、立ち上がる。

おかゆからの返事は無い。見れば静かに俯いて——いや、項垂れているのだろうか。

「また来るな」

「……」

返事がない。

気は引けるが、移動時間を込みで考えると、明日も学校のある身としては少々辛い。

また来ればいいと考えて、「じゃあ、また」と声をかけ、出入り口へと向かい、戸に手をかけた。

入った時と同じく、横に引くが——びくともしない。

鍵を確認するが、かかっている。そもそも俺はかけていないし、他の誰かもかけるタイミングは無かったはず。

何故か思っているその後ろ。じやりつつと砂を踏むような音に、振り返る。

おかゆがいた。幽鬼のごとく、ぬらりと立つ彼女が顔を上げ、俺を見下ろす。

「帰さないよ。君はね、ずっとここで私の相手をするんだよ」

「おかゆ?」

「大丈夫。安心して。何も、怖い事なんてないから」

既に今の状況が限りなく怖い。

骨に襲われるのも相当だったが、さつきまで普通に話していた相手がいきなり豹変するの、なかなかホラーだ。

一步、おかゆがにじり寄る。同程度の歩幅で、一步下がった。

再び一步。こちらも一步。

だが、扉の前にいた俺は早々に下がれなくなり、扉に背をぶつけた。後ろ向きのまま戸を開けようと試みるが、やはり開かない。

「無駄だつてばー。諦めて、僕とお話ししよーよー」

「……」

振り返る。今のおかゆに背を向けるリスクはあったが、物は試し。

「……何するの?」

「ドアを蹴り破る」

「……うええ!!」

助走無し。思いついた中で一番威力が高そうな後ろ回し蹴りを叩き込むべく、左足を踏み込み、それを軸にして回転――。

「ストゥップ!」

おかゆに抱き着かれる。

「ごめんごめん！ ちょっとふざけただけだから！」

「蹴り破ればわかる」

「何が?! 持ち上げ気味に開けるんだよ。コツがいるだけなのー!」

「……」

言われた通り、扉を少し持ち上げ気味に引いた。

開く。すると、嘘のように。

「……油差したら?」

「解決しないんだよねー。建付けが悪いのかなー?」

抱き着いた姿勢のまま、おかゆが首を傾げる。

見下ろせば、ぴこぴこ猫耳が動いていて。何と無しに、おかゆの頭に手を載せた。

「お?」

耳の付け根辺りを、人差し指でこしょこしょしたり、頭を毛並みに沿って撫でたり。

「おおー。上手だねー。気持ちーよー」

「そう? ならよかった」

「……もしかして、見えてる?」

「耳と尻尾だけ」

「へー。珍しいね」

サンプルが少ないから何とも言えないが、珍しいの一言で済ませるのも、かなり珍しい寄りではないのだろうか。

「ビックリさせちゃったし、暫く撫でさせてあげるよ」

「そりやどうも」

嫌がられてはいないようだった。

猫なのだし、顎の下とかも撫でたら喜ぶのだろうか。ただ、外見は猫耳と尻尾があるとはいえ同年代の女子であるから、流石に顔を触ることには抵抗がある。

「よしよし」

「ごろごろ」

お互いに棒読みの茶番を挟みつつ暫し撫でて。やがて満足し手を放すと、おかゆもしがみつくの辞めた。

「いやー、おばあちゃんに匹敵する撫でスキルだね。動物の子は割と惱殺出来るんじゃないかな」

「おかゆみたいに素直に撫でさせてくれる子はあまりいないと思うが」

「そうかなー?」

それに、実際獣耳と尻尾が見えたからって撫でようとは思わない。同校の生徒を撫でるのは、中々レベルが高い。

「しかし、この撫でスキルを鑑みると、ますます帰したくないな」

おかゆがそんなことを言った。

「おばあちゃんのお撫での方が安心させる撫で方なら、君のお撫で方はなんか楽しくなる撫で方なんだよねー。遊んで欲しくなる感じ」

「……」

少し懐かしむような、そんな言葉。それを聞いて、つい踏み込んでしまう。

「おかゆはさ」

「何？」

「此処に一人で暮らしてるのか？」

古びた外装。凡そ営業しているか分からないこの店。

もしかしたら、おばあちゃんと呼ぶ今亡き飼い主を悼み、楽しい思い出のあるこの場所を一人守り続けているのではないか。そんなことを思ってしまった。

「違うよ？ おばあちゃんと一緒に暮らしてる。寝てるだけ」

「……」

その言葉は、もしかして、飼い主の死を受け入れられない――

「あらっ？」

店の奥から、声。

「いらつしやい。初めてのお客さんだね」

「あ、おばあちゃん」

「……」

店の奥から、老婆。おかゆはその人をおばあちゃんと呼んで、近づいた。

おばあちゃんと呼ばれたその人には、耳も尻尾も無い。人間のように見えた。

「おかゆちゃん。店番、ありがとうね」

「いいよー」

「……あー」

成程、そういうことか。

「帰るわ」

「そう？　また来てねー」

「……ああ」

少し意地の悪い笑顔を浮かべているおかゆを見ると、再来店はほとぼりが冷めた頃に、なりそうだ。

「……おかかと昆布のおにぎりを、持ち帰りで」

「はーい、まいどー」

帰ってから食事を作る気力を失った俺は、夕飯代わりの追加のおにぎりを購入して、

店を後にする。

「……大空辺りを連れてくるか」

同じ傷を負わせてやろうと思った。

クラブ名はすこん部

『彗星のごとく現れたスターの原石！ 星街すいせいです！ すいちゃんはー……今日も可愛いー！』

「かわいいー」

ぎろりとにらまれ、口を閉じる。

夜のリビング。

拵えた夕食をもふもふと食べながら、音楽番組を見ていた。

丁度今週のオリコンチャートの特集をしていて、そのコーナーへのビデオメッセージという形で青髪の彼女、星街すいせいことすいちゃんが出ていた。

新進気鋭。デビューシングルの『c o m e t』が爆発的な人気を博し、続くセカンドシングル『天球、彗星は夜を跨いで』も大成功。

今週チャートでトップを飾ったのはサードシングルの『NEXT COLOR PL ANET』である。

「相変わらず凄いなあ」

「ですね。あまり有名人には明るくない私でも、名前くらいは知ってるのです」

体面に座りるしあが、俺と同じ夕飯を食べながら、同じくテレビを眺めつつそう言った。

彼女が居る理由は、霊を見えなくする為の制御を教えて貰っているから、である。

一方で。

「右に同じく」

るしあの隣に座り、此方はなぜかご相伴にあずかっているちよこ先が、そんなことを言う。

この人は夕飯時を狙ってきている可能性があり、今日の練習が終わった辺りで我が家に現れた。

「大丈夫ですか？ 今時すいちゃん知らないと、非国民扱いされますよ？」

「マジイ？」

「冗談です」

半分。

「まあ、るしあもちよこ先生も魔界出身ですから、純粋な国民でないという意味では非国民なのですけど」

「……確かに」

ていうか、この二人の戸籍とか、どうなっているのだろうか。聞いてみたいが、踏み

込んではいけない部分の気もする。

折を見て聞いてみようと思いつながら、今回は大人しく口を閉ざし、話題を戻す。

「気になるならCD貸しましょうか？」

「再生機材が無いわね」

「るしあも持つていないのです」

「PCでも再生できますけど」

「無い」

「動画サイトが上がってるんで、スマホで聞いてください」

どうしようもないので諦める。俺もCDはPCでしか聞かないから、まさか機材ごと貸すわけにもいかない。

「先輩は、この星街さんって人がデビューした時から、ファンなのですか？」

「えつと……」

デビュー間もない頃のすいちちゃんを、フブキ先輩からゴリゴリにプッシュされ、それから追いかけていた。

とはいえ、フブキ先輩のようにファンクラブに入るようなことはしておらず、CDが出たら買って、登場番組を見る程度のものだが。

だから、追いかけている、という意味ではデビュー後ちよつとしてから、というのが

正しいけれども。

「ファンって事ならデビュー前からかなあ。昔から歌上手かったし」

「昔から？」

「昔馴染みなんだ。まあ、俺が引越して、それきりなんだけど。だからデビューしたとかは全然知らなくて……怖い怖い怖い」

るしあが形容しがたい表情になっていた。

赤い目が光る。髪がピンクに染まり出す。がたがたとテーブルや食器が揺れる。からりからりと、聞いた音が響いてきた。

「ごめん。何かよく分からないけどごめん」

「るしあ。どうどう」

ちよこ先が横でなだめる。

徐々に発光が弱まり、髪色が戻り、揺れが収まり、音が消えていく。

少しして、完全に収まった。

「何なの一体」

「いえ。今日はちよつと魔力が暴走気味で」

「そうなの？」

「はいなのです。髪が染まるのも、抑えきれない魔力があふれているからなのです」

「成程」

普段の姿の方が、本来の姿らしい。……なら、その姿で居る今は暴走していないということでは？

「抑えきれなくなるっていうなら、定期的に吐き出しちゃえばいいんじゃないのか？」

俺は考えることをやめた。

「それはそうですけど、人間界で死霊術を使う機会なんて全然無いし」

「うちの庭ですればいい。塀はあるから、外から見られることも無いし。教えるにも都合いいだろ」

「でも、流石に」

「いいんじゃないかしら」

「え？」

意外にも、ちよこ先が助け舟を出した。

「この家、敷地も含めて、外から見ると分には、普通にしか見えない視野障害の魔法がかかってるから。庭で骸骨だしてようが何してようが、特に問題ないわよ」

「え、そうなんですか？」

「うん。シオンが言ってたし」

「へえ」

なんか知らんが、勝手に改造されていたらしい。

借家ではないから、多少何されようが問題ないのだが、一応相談してほしかった。というか、何のためにそんな改造をしたのだろうか。

「……そういうことなら、時々お邪魔してもいいですか？」

「いいよ。人目気にしなくていいから楽だし」

「それじゃあ、次回からはここで練習しましょう」

えへへと、嬉しそうにするしあが笑う。

まさか徐々になるしあの私物が増えていくとはつゆ知らず。

了解とだけ、俺は返した。

翌日。部室前。

昨日、オリコンの発表ですいちちゃんが一位を取っていたから、テンションが上がっているであろうフブキ部長が語りたがっている読みで部室の前に来たのだが、当たっていたらしい。

『でね！ すいちちゃんの何がいいって、そりゃ何と言っても——』

熱弁をふるうフブキ先輩の声が廊下まで聞こえていた。

一応ノック。一度ラッキースケベを遣らかしたから、気を付けている。

『あ、はーい。どちら様?』

「おれでーす」

『どーぞー』

がらりと戸を開けた。

上座のお誕生日近くにはフブキ部長が立っていた。向かつて左の列にはもふもふの中に赤いメツシユが入った黒髪で、もう一人のこの部の先輩である大神ミオことミオ先輩が座っている。テーブルの上には宿題でもしていたのか、ノートと教科書が広げられていた。

「お疲れ様です。なんか久しぶりですね」

「そうだね。ちよつと忙しくて」

ようやく終わったよー、と嬉しそうに笑うフブキ先輩。その背後にモフモフの尻尾がフリフリと嬉しそうに触れているのが見えた。頭には髪の毛と同じ色の三角耳。時々やーと鳴くから猫なのかと思っていたが、どうやら狐らしい。

一方のミオ先輩も三角耳。動物には詳しくないので、その耳が何の耳なのかは分からない。尻尾を見ればわかりそうだが、俺の位置からはテーブルの影になって見えなかった。

「ん? どうしたの? 私の顔に何かついてる?」

「いえ」

正直、よもやこの二人もかと思つたせいで、足が止まってしまった。

入口に立ちっぱなしの俺に不思議そうに声をかけたフブキ先輩に首を振つて答えず、定位置に荷物を置き、腰を下ろす。

視線をフブキ先輩の方に戻せば、近くに置かれたホワイトボードにでかかど『すいちちゃんのここがすごい!』と書かれていた。

その下にすいちちゃんの写真他、何人かの写真が貼られ、丸で囲まれ矢印を伸ばしあつている。相関図のようだった。

「すいちちゃん、昨日の歌番組出てましたね」

「出てた出てた! もう、本当、可愛くて歌声には力強さと透明感がきれいに両立されてゲームが上手で、何より可愛い! 好き!」

「そうですね」

あの子、昔嬉々として俺の事を三輪車で追いかけてまわして高笑いしてましたよと言つたら、どんな顔するだろう。

いや、割とサイコパスな一面をメディアで露出しているから、案外受け入れられるだろうか。

「はー。そらちゃんとかAzukiちゃんとかとコラボしないかなあ」

「それは単純に興味ありますね」

昨今の歌姫と名高い二人。ときのそらさんとAzukiさん。二人とも、歌番組以外のメディア露出は極端に少ないのに、すいちゃんのデビューまでは二強にも等しい状況だった。

この二人とコラボとか、流石に異次元が過ぎる。想像できない。

フブキ先輩は想像できているのか、でへへと口元から涎が出ていた。

「フブキ先輩は本当にアイドル好きですね」

「そりやもう、キラキラだもん」

「キラキラですか。やっぱり、好きなことに熱中してるのついていいですよね」

「そうなの！ 相応の苦労はもちろんしてると思うけど、それでも皆楽しそうで」

「ゲーム中のフブキ先輩と一緒にですね」

「……スーッ」

フブキ部長が目を逸らし、パタパタ顔を仰ぎ始めた。尻尾が足に絡まってくねくねとしている。

どうしたんだろうか。

「フブキもそろそろ慣れたら？」

「いやあ……難しいかなあ、なんて」

あきれ顔のミオ先輩。暑い暑いと、フブキ先輩は頬を扇ぐ。

こうなると、フブキ先輩は暫く話が出来ないので、ミオ先輩の方へ向き直る。

「先輩は宿題中ですか？」

「これは予習。何かゲームでもする？」

「いえ。流石に邪魔は出来ないのです。自分も宿題がありますから」

「そっか」

そう言つてミオ先輩が手元のノートを見る。心なし、ケモミミがシユンとしてしまつたように見えるのは、実は遊びたかつたのだろうか。

今からでも遊びに誘つた方がいいだろうか。少し悩み、まあ、外れなら外れでいいかと声をかける事にする。

「ミオ先輩。やっぱり遊びませんか？」

「ん？ 宿題はいいの？」

「家でも出来るので。折角誘つて貰いましたし」

「……しようがないなあ」

ピコピコ耳が動いて、尻尾も振られる。少し覗けた尻尾は、フブキ先輩と同じくもこもこだが、幾何短い。犬……いや、尻尾が短い狐もいるし。でも耳の感じはフブキ先輩と違うな。

「どうかした?」

「あ、いや」

聞いてみた方が早い。ただ、昨日の事があるから抵抗もある。

ちよこ先は説明済みだろうか。フブキ先輩の態度も、ミオ先輩の態度もいつも通りだ。目の事を知っているなら、少しは気にしそうな気もする。そうになると、やっぱり知らないのだろうか。

「はい、コントローラー」

「あ、どうも」

「フブキもやるでしょ?」

「やるー」

コントローラーをそれぞれ受け取り、かちかちとテトリスが始まる。

正直言うと、二人のゲームの腕は兎に角高い。俺基準なら、頭一つ二つ抜きんでている。

こんなに達人なら、e s p r t s 部にでも入ればいいのと思うが、ゲームは趣味らしく、自分のスキル上げなら兎も角そういった公式大会みたいなのは、あまり興味が無いようだ。

せめて退屈させない程度の勝負をしたいのだが、如何せん意欲に実力が伴わない。練

習していないわけでは無いのだけど。

「あつ」

考えている傍から積みミスして、そのまま死んだ。

かちかちと先輩達の接戦が続く。

というか。

「うーん」

ゲームにあたり席を移動して、フブキ先輩が俺の隣に座っていた。なので、俺は少し席を引いて座っているのだが、ゲームが白熱するにつれ、フブキ先輩が前かがみになり、尻尾がわずかに前によった結果。尻尾がわっさわっさして目線が遮られる事がある。今の積みミスも、視界を一瞬奪われたことによる所が大きい。ただでさえ下手なのに。

少し横にずれて、フブキ先輩の尻尾の範囲から外れた。目線が通るようになる。

そんなことをしている間に、先輩達の戦いにも決着がつき、フブキ先輩の勝利に終わった。

「よーし」

「くそそう」

フブキ先輩が嬉しがり、ミオ先輩が悔しがる。どちらも楽しそうな様子だ。

俺ももうちよつとゲーム上手ければなあと思いつながら、「二回戦行きましょう」と声を

かける。

「そうだねって……あれ？　なんでそんなに離れてるの？」

「そうだよ。見づらいでしょ、そこ」

「まあ、そうなんですけど」

確かに、ゲームのモニターの位置を考えると、角度は悪い。ただ、フブキ先輩の尻尾は存外長く、これ以上近づくとまた目隠しされそうだ。

「えっと」

どうなのだろう。ダメだろうか。平気だろうか。

いきなりガブーとされることはないだろうけど。部活追い出されるのはちよつと嫌である。

「どうしたの？　今日、変だよ？」

再び、フブキ先輩。

ミオ先輩もだが、心配そうな表情を浮かべている。

ごまかして席をもとの場所に戻すのは簡単だが、今の状況だとすぐにぼろが出そうだった。

逡巡し、ちよこ先を信じる事に決める。

「フブキ先輩の尻尾で画面が見えない時がありました……」

口にした。

「……………へ？」

「……………ごめんなさい」

何の謝罪かは不明だ。つい口をついたただけ。

「……………ええつと、見えるの？ 色とか」

「基本髪色と一緒にですけど、先だけ黒いですね」

「……………」

スツつとフブキ先輩は立ち上がった。

とこここ移動して、自分の鞆を手にして。

がらりと窓を開けて。

飛び降りた。

「ええええええええええ!!」

慌てて窓に近づき、下を見れば、危なげなく着地したフブキ先輩が、そのまま走り去るのが見える。

「ちよ、ちよつとー!」

慌てて追いかけようと振り返る。

そこに、がると牙を剥き、両の手を熊のように構えるミオ先輩。心なし、爪が鋭く

伸びているように見える。

「いつから見えてたの」

「……えつと、ちよこ先から聞いてらっしやらない?」

「なんでそこでちよこ先生が出てくるのかな」

「……」

あれー、と内心で首を傾げながら。

とりあえずちよこ先に説明して貰おうと、スマホを取り出す為にポケットに手を入れたところで、その腕を掴まれる。

「うえ!!」

いつの間に近づかれたのか、ミオ先輩に肉薄される。

右手で首をつかまれ、開きっぱなしの窓枠へ。

上半身は窓の外。思わず開いていた手で窓枠をつかむ。首筋から痛みが走るが、それほどどころじゃない。

「ミオ先輩! 落ちる! 落ちるから!」

「ならうちの質問に答えなさい。さもないと——」

ミオ先輩の声を遮るように、からりと音が鳴る。

「っ!!」

ミオ先輩が勢い良く退いた。

直後、俺の足元からまっすぐと伸びる白骨の腕。

ミオ先輩に掴みかかったのだろうが避けられたが、俺の体はしつかりつかんで、室内へと引き戻される。

「なんで、俺の影から出てきたの?」

俺を庇うように立つそれは、この間るしあが召喚した骸骨の一体であった。

「……数か月前から匂いの変で、最近は殊更強かったけど成程。妖の類に憑かれてたんだね」

「へ?」

テーブルの上に四足で立つミオ先輩がそう言った。

ざわりと、空気が変わる。るしあのととは違う雰囲気。

ミオ先輩の後ろ髪が、逆立つ。尻尾は立って、こちらを剥いていた。

……間違いなく威嚇されているのだろう。ただ、その矛先は俺じゃなく骸骨に向いていて。

それだけならいいのだけど――。

『ワンワン!』

扉の外から、タロの声。フブキ先輩が逃げ出したあたりから、姿を消していたのだが、

多分彼女を呼びに行つたんだと思う。

がらりと勢いよく戸が開いて。

るしあが姿を現した。

ミオ先輩が、後ろを振り返る。

「……誰？」

「何をしているのですか」

面識のないらしいミオ先輩がそう告げるも、るしあはその言葉を無視し、部室内に入ってくる。

昨日と同じく、後ろ手に扉を閉めて。がちやりと扉の鍵を閉めた。

るしあの視線が、俺の方を向く。

「先輩、その血は？」

「え？ あ」

たらりと体を滑る感覚に、漸く気が付いた。

触つてみれば、首筋から、血が出ている。痛いなど思つた先程、ミオ先輩の爪が刺さつていたのだろう。

流石に首元の怪我は怖い。大袈裟かもしれないが、ハンカチを使つて抑え。それを見たるしあの雰囲気、あの日と同じになった。

魔力を抑えるのを辞めたのだろう。髪がピンクに染まる。シヨートはロングへ。

からりからり——ではなく。かかかかかと威嚇する様な断続的な音が室内に響き、過剰とも思える数の骸骨達が、そこらの影から這いずり出てくる。色々な所から出せるなら、そりや俺の影からも出せるかと、そんなずれた考えをする中、ミオ先輩のもとからは「グルル」と唸り声。

まさに一触即発。下手に物音をたてようものなら、それが合図になりかねず、動けない。

途端右手に痛みが走った。見れば強く拳が握られていて、慌てて力を抜く。無意識に窓を割るつもりだったのだろうか。我ながらテンパっていると思う。

ただ、慌てているのは自分だけのようで、るしあはミオ先輩を、ミオ先輩は俺ではなくるしあを、それぞれ諸悪の根源と考えたらしく、そちらに意識を向けている。

俺がこの場から逃げれば、るしあがミオ先輩と事を構える必要は無いだろうか。

ならここから飛び下りる選択肢も視野だ。ここは二階だから、打ち所が悪くても死にはしないと思う。

意識がこつちに向いていないのなら、その間にスマホでちよこ先に連絡をして、来てもらうのも手ではあるが。

……いや、ダメか。ミオ先輩はちよこ先が悪魔である事を知らないように見える。

持っている人

部室の隅で、俺の影から出てきた骸骨の後ろに身を隠しつつ、窓の外を眺めながら俺は大空と通話していた。

「どうした。何か用か？」

『いきなり怒鳴られたことに対しての弁解は？』

「タイミングが悪かった大空が悪い」

『解せない』

実際、タイミングは最悪だった。明らかに着信音が開戦の合図である。

『いや、今日部活休みだったから、暇ならちよつと付き合つて貰おうかなつて』

「とうとう？」

『駅近にある喫茶店で、男女ペアで行くと食べられるパフェが食べたくて』

「それ、カップル専用っていうんだと思うが。部活休みなら大空の所の部員に頼めばいいじゃん」

『本気で言ってる？』

「……ああ、すまん。何でもない」

部外の人間を本気で追いかけるような奴らだ。部内で裏切者が出たとなったら、それこそ今の部室内の状態と同じになるだろう。

『ていうか、なんかうるさいけど、どこにいるの?』

「部室」

言いながら、視線を部室内へ戻す。

部室の中を、所狭しとミオ先輩が跳びまわっていた。

テーブル、椅子、棚、床、壁、果ては天井まで。手足が付けば、そこが足場と言わんばかりの立体起動。

加えて四つん這いという低姿勢は、ミオ先輩の持つ全身のバネを全て使える姿勢らしく、全方位足場も相まって、鋭い角度から恐るべき速度で繰り出される突撃は、るしあの操る骸骨を次々バラバラにしていた。

とはいえ、るしあも負けていない。始まりこそ、押され気味だったように見えたが、一人壊されれば一人、二人壊されれば二人と、壊された以上の骸骨を召喚し、迎撃していた。

更に、バラバラになっていた骸骨にも動きがある。ミオ先輩によつてバラバラにされた骨が、るしあの方へと集まり、形を成していた。

元の形に戻るわけでは無い。骨達が集まり作られるそれは、上半身のみの巨大な骸

骨。

「えつと……ああそうそう。がしやどくろだ」

通話を維持したままスマホで調べ出てきた妖怪の名は、まさにそれである。

『部室で何やってるの?』

「……スマホブラ?」

女子二人だしシスターズだろうか。

『いや、草』

「草じゃないが」

本当に、笑えない状況である。

この状況で頼れそうな相手は一人だ。来たら二対一になるかとも思ったが、そうも言ってられない。

「大空。今どこにいる?」

『まだ学校だけど……』

「ちよこ先に緊急事態って伝えてくれ。伝えてくれたら、今日は無理だが後で食べたがつてるパフェを奢るわ」

『良く分かんないけど……ちよこ先にそう言えばいいのね』

「すまん。なる早で頼んだ」

それだけ言つて、通話を切る。

部室の様子は、最終局面に近い。

ミオ先輩からは、なんかオーラのようなものがあふれてるし、るしあの元に集まつていた骨達は、完全に一体の巨大な骸骨とかしていた。ミオ先輩の速度を真正面から打ち取るために、攻撃面積を広げたかつたのだろうが、室内で出すものではない。

「あの一、二人とも、落ち着いて貰えないでしょうかー」

物は試しと声をかけてみる。返事はない。やつぱり窓を割るしかないだろうか。

ちよこ先が間に合つてくれればいいのだが、まあ無理だろう。

深呼吸一回。覚悟を決めて。

骸骨の陰を出て走つた。

僅かに遅れ、ミオ先輩、がしやどくろも合わせて動く。

ミオ先輩が踏み込み、がしやどくろが拳を振つて。

一抹の不安を抱えながらも、二人の間に身を躍らせる。

「そっまでえええええ！」

ミオ先輩の驚いた表情が見える。右腕が振られる。ただ少し距離があつた。

なんでそんな早くにと、疑問に思う俺の背中に、何かが当たる。

いや、曖昧な表現はいらない。流石に分かる。

当たったのは、がしやどくろの拳だ。

成程と思った。ミオ先輩は右手でがしやどくろの拳を防ぐなり破壊するなりして、左手でがしやどくろかるしあをどうにかしようとしたのだろう。

以上、現実逃避おわ——。

衝撃。昨日窓ガラスで切った時とは、比べ物にならないそれ。

鮮血が舞うのが見える。痛みが来るのは、もう間もなくだろう。

……ああ、来た。当たり前だが痛い。あと熱い。

目が変わる時の頭痛とは違う、純粹な痛み。

悲鳴は上げない。一度漏れたら、喋れなくなりそうだから、気合で耐える。

耐える。我慢。大丈夫。

傷口を抑えたいのを我慢して、ミオ先輩の手を取った。ぬるりとした、血の感触が煩

わしい。

「ミオ先輩」

「ひっ」

ミオ先輩に引かれる。

「見えるようになったのは最近で、ミオ先輩の事もフブキ先輩の事も、知らなかったです」

「え？」

「るしあは俺の事を、心配してくれただけなので、喧嘩は止めてください」
それから、振り返る。るしあの顔に、焦り、恐れ。

「るしあも。大丈夫だから。喧嘩辞めてくれ」

「先輩！」

「あとは、ちよこ先におまか——」

白い天井であった。

清潔感のあるそれは、しかし見慣れた保健室のそれとは違う。

「……………」

「病院」

声を掛けられ、視線を向ける。

目の前に、ちよこ先の顔。

「……………ちよつこーん」

「案外余裕？」

「いえ、あまり」

数秒目を閉じたら多分寝る。瞬きすらつらい。

「二人は？」

「大丈夫。特に怪我もしてない。今日は時間も遅いし、いつ起きるかも分からないし、貴方の負担にもなりそうだから、とりあえず帰らせたいわ」

「さいですか」

怪我が無いなら、良かった。負担に関しては、ちよこ先に感謝。正直喋るのもつらい。

「もう少し眠りなさい。回復には、もつと時間がかかるわよ」

「……はい」

目を閉じる。やはりというか、意識を維持することは出来ず、ずぶずぶと沈んでいく。

「——なさい」

ちよこ先の声に答えようとするも、口が動かなかつた。

「……」

次に起きた時には、また数日経ってこそいたが、すっかり元気だった。

ひつかり傷はまだ塞がっていないのだが、縫われているから無理な動きをしなければ良く、殴られた背中も気にしなくていいとの事。

そう言われると逆に気になるのだが、その日の内に気づけば退院である。この病院大丈夫だろうか、ちよつと心配。

ぼんやり空を見上げ、腕時計で時間を確認すれば、ちょうど昼前だ。食事をしてから退院すれば良かった。

食べて帰るか、そのまま帰るか。

考えているうちにあることを思い出した。今日は野球部の試合がある。

「ここからだ、そんなに遠くないか」

一先ず敷地から出て、周囲を見渡せば、目当てであったシエアサイクルを見つけた。アプリをつけて、シエアサイクルの予約をして、そのまま借りる。

誰が持ってきたのか、俺の着替えが入れられていた鞆を自転車の籠に入れ、かつてシオンと会った公園に併設された野球場に向かって走り出した。

電動自転車だからか、ペダルが軽い。坂道も楽々だ。

病院から野球場へは三十分程の距離。

先日の朝礼で先生が言っていた試合時間にはかなり余裕がある。

一度帰って、荷物を置いて来ようか。シャワーはわがままを言って病院で浴びてきたから、とりあえず大丈夫だけど、数日分の着替えの入った荷物は地味に大きい。

試合まで時間もあるし、一度帰ろうかと、考え始めたところで。

「へい、タクシーー！」

大声で呼ばれた。

断じてタクシーではないのだが、手を振っている主は、まっすぐ俺を見て、俺に向けて手を振っている。

知り合いでなければ無視するのだが、知り合いだった。しかも、この時間にここにいるのはかなり危うい人物である。

「おはようございませす、夏色先輩」

「おはよっ！ 久しぶりだね！」

夏色まつり先輩。茶色のサイドポニーを跳ねさせ、満点の笑みを浮かべるこの人は、チアリーディング部在籍である。

「今日は野球応援の日では？」

「うん」

「大丈夫なんですか？」

「出番までは余裕あるけど、ミーティング考えると結構ギリギリかな」

「……乗って下さい」

「ありがとう！」

荷物を抱えた先輩が、荷台にすわる。大丈夫か確認して、自転車をこぎ始める。

流石電動自転車。荷台の人が乗って重くなっても、ペダルが漕げなくなるような事はなかった。

「助かったよ。通りかかってくれて良かった」

「いえ、偶然です。夏色先輩の運が良かったんですよ」

「そう？ まあ、まつりは持つてる女だからね」

夏色先輩の言葉に、「そうですね」と同意する。基本的に天真爛漫。だが下ネタが多く、息をするようにセクハラをする時はあるが、それでも人に愛されるタイプ。元氣印のスパルとは違ったタイプの陽キャだ。

とはいえ、実際この人とは滅茶苦茶接点があるわけじゃない。

初回の対面は、チア部のクラスメイトの落とし物に気が付き持っていた時、対応してくれたのが夏色先輩だったというだけで、その時はこれといった事はなく。少なくとも今。こうして呼び止めて足替わりをお願いしても大丈夫な間柄になったのは、俺と夏色先輩の共通の友人による所が大きい。

夏色先輩の親友。そして、俺の部活の先輩にして部長。

白上フブキ先輩、その人である。

「因みにさ。フブキと何かあった？」

夏色先輩が口火を切った。

「……まあ、ちよつと」

この話をするために待ち伏せしていた、というわけでは無いだろう。

少なくとも、俺が入院しておらず、自宅から野球場に向かうのであれば、通らない道だ。

たまたま入院していて、たまたま野球部の試合の事を思い出して、たまたまシェアサイクルを借りたから、この時間あの場所で夏色先輩と会ったのである。

そういう意味では、確かに夏色先輩は持っている女であった。

「なんで、ご存じなのでしょう?」

「フブキが最近挙動不審なの。角曲がる時とか、一々クリアリングしてるし、最近用事で全然出来なかったから楽しみーって言ってた部活だって、一回やったきりお休みしてるし。だから君と何かあったのかなって」

なかなか鋭いが。

「部活で何かあったなら、ミオ先輩という可能性も」

「ミオちゃんとも何かあったっぽいな。ちよつとぎくしゃくしてたし。でも、君と話しているのは見かけなかったから。まあ他の誰かの可能性もあるけど、それなら部活しない理由は無いでしょ」

「成程」

よく見ている方である。

「何かあったの? 喧嘩でもしたのかなって思ってたけど、君もフブキも、そもそも喧嘩

しないし、揉めたら自分から謝るタイプだから、こんなに長続きする筈ないし。フブキの方が露骨に避けようとしているのが気になるんだよね。セクハラしたの？ パンツの色でも聞いた？」

「ははは。先輩じゃないんだから」

「あはは。こいつめ」

後ろからぐいぐい頬を引っ張られる。やめて、ハンドルから手を離せないから。

「それで、実際どうなの？」

「……フブキ先輩の秘密を偶然知ってしまった。それで避けられているのかなと」

「フブキの秘密？ 何？」

「流石に教えられないですけども」

秘密なのだから。

「すぐにも謝った方が良かったんですけど、逃げられてしまいました。それにフブキ先輩と一悶着あった次の日から、自分は学校を休んでいたので話す機会が無かったんです。休んでいた間は寝たきりでしたし」

「そうなんだ。風邪？ 大丈夫？」

「はい。ちよつと怪我したっただけですから」

「そっか。……え、寝たきりになってたならちよつとじゃないんじや。自転車乗ってて

平気なの?」

「それこそ、今更じゃないですか」

「確かにそうだけど」

降りた方がいいかなという声が聞こえたので、大丈夫ですよと改めて伝える。数日寝たきりだったのに、存外体の調子はいいのだ。

「フブキ先輩がそんな感じなら、尚更謝らないとですね」

「んー、でも、難しいかも」

「難しいですか?」

「あの子が本気で逃げたら追いつけないでしょ? 話をするなら逃げ道を封じるくらいしないと」

「あー。足速いでももんね、フブキ先輩」

ずっと疑問だったが、多分狐だからである。

この目になって、何度か体育の時間や運動系の部活の様子を見たが、活躍している生徒の多くにケモミミと尻尾があった。ミオ先輩の言っていた『数か月前から俺の匂いが変だった』というのが、シオンの匂いをかき分けていたからという意味なら、あのケモミミも尻尾も飾りなどではなく、正真正銘動物かそれに近いものが人間の姿になっているのだろうと推測していた。

「このまま、家に突撃しちやえば？ どうせゲームやつてるでしょ。野球部の応援に行くより建設的じゃない？」

「フブキ先輩の家ですか？ 場所は知ってますけど……つて、チア部がそんなこと言ったら不味いでしようが」

「やることやりなつて話」

「……」

何気なしにいう夏色先輩のその言葉は、今の俺としてはまさしく真理で。

だが、しかし。

「やはり迷惑では無いでしょうか」

及び腰になるのは、部室から逃げる時のフブキ先輩の表情が、脳裏をよぎるから。

恵まれたことに、今までの人生であんな表情を向けられたことが無い。

だから、踏み込んでいいのか、悩んでしまう。

「例えば、休み明け。もう少し時間を空けて、フブキ先輩が落ち着いてからとかの方が。もしかしたら、この休みの間に、フブキ先輩も一人でしつかり考えて落ち着くかもしれないませんか」

「本気で言ってる？」

「……少し」

「まったく……」

ぺしりと頭を叩かれる。そこそこ力を入れていたのか、ジンジンと痛んだ。

「さっさと行きなさい。これは親友の勘だけど」

「はい」

「フブキは、仲直りしたがつてると想うよ」

「行きます」

「よろしい」

自転車を止める。ここを曲がれば、元々の目的地であつた公園がもう目の前。まっすぐ行けば、新たな目的地であるフブキ先輩の家がある駅の方へと続く。

公園の入り口の辺りに、チア部の部員が見えると、夏色先輩が自転車を降りた。くるりと、サイドポニーを揺らしながら、夏色先輩が振り返る。

「じゃあ、頑張つてね」

「はい。ありがとうございます、夏色先輩。行つてきます」

「いつてらっしゃい」

ひらひらと手を振り、歩き出す夏色先輩。

少し悩み、声をかける。

「——あの」

「ん？」

「お願い聞いて貰えますか？ アドバイス頂いたのに、恐縮なんですけど」

「別にいいよ。何？」

「クラスメイトが今日、野球の試合に出ると思うんで、夏色先輩から激励していただければなど。先輩のファンなので」

「おっけー。任せて」

「ありがとうございます」

応援に行かず、自分の都合を優先する不義理は、これで果たしたと言えるだろうか。

「じゃあ、改めて行つてきます」

「行つてらっしゃい、後輩君。頑張れ」

「はい」

頷き返し、自転車を走らせる。

直接フブキ部長の家に向かうことも考えたが、少し悩み、家に寄る。

夏色先輩に会う前に考えていた通り、荷物を置き、軽くシャワーを浴びて。

ついでお昼も食べようかなと考えたところで、インターホン。

「はい」

リビングに移動して、モニターを覗く。

見えた姿に息をのんで、逡巡。深呼吸ののち、覚悟を決め、マイクのボタンを押した。
「どうぞ、上がって下さい。フブキ部長、ミオ先輩」

幽世

玄関を開け、先輩方を出迎える。

二人とも、制服ではなく私服。それぞれのイメージカラー通りの、白と黒。

「お久しぶりです」

「そうだね。怪我の具合は？」

尋ねてきたのは、ミオ先輩だった。フブキ部長は無言のまま。微かに俯き、こちらを見ない。

「大丈夫です」

「そっか……。話したいことがあるんだけど、上がってもいいかな？」

「もちろん。俺も話したいことがあるので。上がって下さい」

道を開け、招き入れる。静かに、二人が中に入る。

二人ともいつも通り、というわけでは無く、雰囲気が違う。ただ、落ち込んでいる、という感じではない。

ミオ先輩もフブキ部長も。フブキ部長はより顕著に。どういいうわけか、その雰囲気は別人に近い。

「フブキ部長とミオ先輩に違いありませんよね？」

「うん。そうだけど？」

「ですよね」

ピクリとも動かないが、獣耳と尻尾も見えていて、それらも偽物には見えない。

「……とりあえず、客間へどうぞ」

フブキ部長が遊びに来た時なんかは、リビングや自室なのだが、なんとなくリビングでのんびり、という気にはなれず、二人を客間としている和室へ通し、自分はお茶を煎れに一度キッチンへ。

一通りの作業をして客間に戻ると、フブキ部長とミオ先輩は、それぞれ正座して待っていた。

フブキ部長がテーブルの近く。ミオ先輩はその隣ではなく、少し後ろに。

「ミオ先輩、もつとテーブル寄らないんですか？」

「うん。うちはここで大丈夫」

「そうですか」

まあ、大丈夫と言うなら、大丈夫なのだろう。

二人分の緑茶をそれぞれ湯呑に注いで、二人の方へ置き。

フブキ部長の対面へ、腰を下ろし、口を開くのを待つ。

時間にして数分か、それ以上か。口火を切ったのは、フブキ部長であった。

「まずは、先日の件。我が従者の不祥事について。白上家次期当主。白上フブキが、正式に謝罪させていただきます」

頭が二つ、下げられる。そんなかしこまった謝罪をされたことがなく、慌てるレベルだ。

「あ、特に気にしてもいいいんですから、頭上げてください。自業自得なので」

それにしても口調が硬い。こんこんきーつね、とか言いそうにない。

それに、白上家次期当主って言われてもピンとこない。白上家って偉いのだろうか。聞いたことないけど。

俺が声をかけると、二人が顔を上げた。

「詳しい事情は、癒月ちよこから。随分と、災難に苛まれている様子。治療に向け、魔界で活動している者もいるとか。生憎、そちらの方では力をお貸しできませんが、迫る災難の盾として、こちらの大神をお貸しいたします。それをもって、謝罪を締めていただければ」

それにしても、この人は。

「実力の程は、存じ上げているかと。厄災を砕かせ、それが叶わずとも盾には出来ましよう。この者も、貴方への贖罪をしたいと望んでいた故。かまいませんね、大神」

「勿論です、フブキ様」

いつまで。

「これをもって。白上家の謝罪とさせて——「あの——なんですか？」

フブキ部長を出さないつもりなのか。

「俺、フブキ部長に謝りたいんです。謝って、仲直りしたいんです」

「……謝罪は不要かと」

「フブキ部長は逃げました。逃げたって事は、見られなくなかったって事ですよね。なら、見てしまった以上、謝らない訳にはいきません」

「なら、その言葉を謝罪として受け取「だからフブキ部長を出してください」」

その言葉に、目の前に座るフブキさんが、閉口した。

「白上家次期当主のフブキさんじゃなくて、すこん部の部長のフブキ先輩と話がしたいんです」

「同じ白上フブキですよ」

「少なくとも貴方の中では違うように感じますが」

「っ」

フブキさんが唇を噛み締める。また、傷つけているだろうか……いや、実際傷つけているのだろうか。

とはいえ、夏色先輩の言っていた通り、逃げるフブキ部長を捕まえるには、逃げ道を封じるしかない。

フブキさんは、泣きそうな顔。怒っている様子ではない。怒られたって、辞めるつもりもないが。

「フブキ部長。お願いします。ちゃんと、俺と話をしてください」

「……そんなこと」

「お願いします」

「……」

再び無言。何を言うか考えている様子。

少し口を開き、閉じる。開いて、閉じる。言葉にできない言葉を、何とか言葉にしようとしているようだ。

何か言うまで、待つかとも思ったが。雰囲気はすっかり、フブキ部長のそれで。

「フブキ部長」

声をかけると、口が閉じる。きゅつと、唇も締まった。

「すみません。嫌な想いをさせてしまいました」

顔を、ミオ先輩に向ける。

「ミオ先輩も、すみません。今回の件は、自分の軽はずみな行動の結果です。ミオ先輩は

何も悪くありません」

少し下がりが、両手を床につけ、頭を下げる。

「本当に、すみませんでした」

「……顔を上げて」

頭上から、声。その声につられ、顔を上げる。

フブキ部長と、目が合った。その顔は、なんかすごい真っ赤。

「ごめん、ごめんね」

「いや、謝るべきは自分で——「そうじゃなくて」」

俺の言葉を遮り、いつものフブキ部長は顔を押しえながら。

「逃げてごめん」

そう言った。

「……いや、嫌な想いをさせましたし」

「だから、そうじゃないの。そうじゃなくて」

「……？」

そうじゃないとは。

「……あの時逃げたのは、恥ずかしかったからってだけなの」

「……はい？」

「靈狐の私が人間に正体を見破られるとか……唯々恥ずかしくて」

「……フブキ部長、実はれーこつて名前なんですか？」

「そうじゃなくてえ」

「はいはい、落ち着いて」

ミオ先輩から、助け舟。こちらも、気づけばいつも通りの雰囲気。

「ミオー」とフブキ部長が、ミオ先輩の方を向く。

「なんか、皆してずれてる感じだから、整理するね。まずフブキなんだけど……」

「れーこつて何です？」

「靈狐ね。幽霊の靈に狐。最近だと意味は色々あるけど、今は人間に信仰されている狐と思ってくれたらいいかな。もつとざっくりいうなら、神様の一種って思ってもいいと思う」

「神様……」

視線を向ければ、どや顔で胸を張るフブキ部長。

「些か俗に染まり過ぎでは」

「言い方！」

「それは否定しないんだけど」

「ミオ!!」

いや、ドルオタゲーマーで神様って言われてもちよつと。

「信仰されてるとはいえ、狐だからね。化けてなんぼ、化かしてなんぼの存在だから、人間に正体が見破られて恥ずかしくて逃げちやつたみたい」

「……はい」

「別に、耳と尻尾が見える程度ですけど」

「それはそれで化けきれない姿が見られてるみたいで恥ずかしいの!」

狐って難しい。……もしかして、自分が逃げた事が大事になりそうだったから、偉ぶって誤魔化そうとしてたとかないよな?

「やっぱり嫌な思いをさせてしまったみたいですし、きちんと謝罪を」

「……それに関しては許してるから、大丈夫。私は全然気にしないのでいいから。学校辞めたりとか、部活辞めるとか、しなくていいよ」

「……? そんなつもりは無かったですけど」

「あれ!!」

というか、正直起きたばかりで何も考えていなかったというのが正しい。

とにかくフブキ部長に謝って仲直りがしたいと、それだけだった。

「て、てつきり逃げたことに責任を感じて、学校辞めるとか、そこまでいなくても部活辞めるくらいは言い出すかなって思ってた」

「大丈夫です。部活も学校も辞める気はありません。フブキ部長の話聞きたいし、ミオ先輩と一緒にゲームしたいです」

「……そっか。良かった」

えへへとフブキ先輩。

その様子に、安堵したように吐息をこぼしたミオ先輩の姿が見えた。

「次に私なんだけど……怪我の件は、本当にごめんね」

「大丈夫です。ミオ先輩とるしあはどうですか？」

「あの後すぐにちよこ先生が来たから。るしあちゃんが暴れそうになったのを取り押さえ、君に処置して、そのまま病院に」

そういうえば、まだるしあとちよこ先に連絡してない。スマホは鳴ってないから大丈夫だと思いが、後で連絡したほうがいいだろう。

「君については、翌日にフブキと一緒にちよこ先生から聞いたよ。なんか大変みたいだね。そうとは知らずに、私は……」

「そういうえば、あの時何か言っていましたよね。あやかし？ がどうか。それに、ちよこ先とかるしあの事も知らないみたいでしたし」

また落ち込みそうなミオ先輩をごまかすべく、話を振る。

気にもなっていた。正直、俺の視点だと人間か違うかのざっくりした分類しかない。

シオンやちよこ先、るしあは魔界出身というぐらいしか知らない。

「ちよこ先生とるしあちゃんの事はびっくりしたよ。ちよつと匂いが違う程度にしか思ってたから」

「匂いですか」

「うん。それで、君は普通の人間の匂いだったのに、数ヶ月前から別の匂いがするようになって気になってたんだけど。あの時、急にフブキの正体が見えるって言いだしから憑りつかれているって確信して。ああやって憑りついた人間に害が及べば、自分の身を守ろうとして妖や化生の類は外に出てくるから、出てきた所を狩ろうと……。爪伸ばしたの久しぶりで力加減間違えて首に怪我させたのは本当にごめん。それはうちのミスです」

「あ、はい」

別の匂いというのは多分シオンの事だろう。

「じゃあ、やつぱりミオ先輩もフブキ部長も魔界出身というわけではないんですね」

「そうだよ、どちらかといえ、この世界に近いかな。幽世っていうんだけど、知ってる？」

「かくりよ……とろみを、つけます」

「片栗粉だねえ」

違うらしい。

「幽世つていうのは、この世界。君が今いる現世の裏側。日が昇らず、常に夜の世界。人間のいない、私達みたいなのが住む場所。まあ異世界つて意味では、魔界と変わらないのかもしれないけど、魔界と違つて独立世界つて訳じゃない」

「……三行でお願いできませんか」

「無理かなあ」

そう言いながら、ミオ先輩はお財布から、小銭を二枚、とりだした。

「この小銭が世界だとしたら、今いる世界と魔界の関係は、左右それぞれの手に持った小銭の関係。でも、幽世と現世の関係は、右手に持った小銭の表側と裏側の関係つていう考えで、そう間違えてはいないと思うよ」

何となく分かるような、分からないような。

戸惑いに気が付いたのだろう。ミオ先輩がクスリと笑う。

「必ずいるけど、本来なら絶対交わらない筈の隣人、かな。それが私やフブキと君の関係。少なくとも君のその目が無ければ、私達の事を君は人間だと思つたままだつたし、幽世の事を知ること無かつたでしょ？」

「……そうですね。確かに」

これを、より親しくなれたととるか、知る必要のないことを知つたととるかは、悩み

どころである。

無為にこの二人の——いや、るしあやちよこ先なども含め、いろんな人の秘密を暴いたというところは、正直気がかりだ。

「まあでも、最初にばれたのが、私達っていうのは、不幸中の幸いだったね」

「そうですか？」

「妖の中には、自分を認識する相手に悪さをするのもいるから。見えるって分かったら大変だよ」

「……世界が変わっても、それは変わらないんですね」

「ごめん」

目をそらされる。もしかしてるしあとの一件を聞いていたのだろうか。

「…………と、とにかく!」

ちよつと気まずい雰囲気になりそうなのを察したのか、フブキ部長。

「私達が話を通しておくから、安心して。幽世の子達から襲われたりすることは無いようにするし、さつきも言ったけど、暫くはミオもつけるから」

「そういえば、最初にそんなこと言ってましたけど、フブキ部長のお家って偉いんですか？ ミオ先輩の事を従者って呼んだりもしてたし」

尋ねた俺に、したり顔をしたフブキ部長が腕を組んだ答える。

「ふっふっふー。なんととっても、我が白上家。幽世でも十指に入る名家なんだよ！」
「な、なんだってー」

「反応が薄い！」

しょうがない。なんとなく察しがついてしまっていたから。思ったより偉くてびっくりしたけど。

「因みに、私達大神家は、白上家に仕えている家系なんだよ。もつとも私とフブキは、小さいころから一緒にいたし同い年だったから、公式の場なら兎も角、普段はこんな感じなんだけどね」

幼馴染ということらしい。三輪車で追いかけてまわしあったりしたのだろうか。

……ちよつと笑える。

「でも、ミオ先輩は好きですけど、常時そばにいられるのはちよつと落ち着かない気がしますね」

「……確かに。私もミオの事は好きだけど、常に控えられてたら、ちよつと気になっちゃう。プライベートは大事だよ、やっぱり」

「ですよね」

「フブキの言い草は、従者の仕事をするなど殆ど同義だから後で話し合うとして。確かに後輩君に常時ついてるのは、学校とか用事もあるし、少し難しいか。うーん、じゃあ」

ミオ先輩が立ち上がる。そのまま俺の方へと近づいてきて、俺の頭——ではなく、タロの頭に触れた。

何か黄色い粉のようなものが、タロの体に吸い込まれていく。

「何を？ ていうか、見えてるんですか？」

「うん。初めて会った時から、ずっとこの子を肩に乗せてたよね。今はうちの霊力を君の守護霊に分けてるの。少しは悪いものも追っ払えるし、この子の遠吠えは私の耳に届くから、何かあれば直ぐに分かる」

「……レリーよく？」

「幽霊の霊と力ね。魔力みたいなもの程度の認識で大丈夫」

「魔力とは別なんですけどね……」

「多分君が私やフブキを獣耳＋尻尾っていう中途半端な姿で見えているのはそれが理由じゃないかな。私達の偽装は霊力によるものだから、魔術の目だと中途半端にしか解けて見えてないんだと思う」

「じゃあ、ちよこ先とかるしあも獣耳＋尻尾が見えてるんですか？」

「るしあちゃんはダメっぽいけど、ちよこ先生は見ようとしたら見えたって言ってたね」
光が止まる。ぷるぷると体を震わせたタロが移動して、俺の膝の上を陣取って眠りについた。

守護霊なら寝るなや。

「これで大丈夫。体に霊力が馴染んだら起きるよ」

「ありがとうございます」

「うちにはこれくらいしか出来ないからね。でも、いい？ 本当に危なそうなら、まず逃げる事。あの時みたいに、割り込むとか絶対にしちやだめだからね」

「……………きをつけます」

「無言の時間が長い！ しかも棒読み！ 本当に死んじゃうからね!」

「はい」

流石に俺も、危険地帯に好き好んで入るつもりはない。

「大丈夫です。ここまでの傾向から、軽はずみな事を言った結果、怪我をすると学んできません。つまり変なこと言わなければいいんですよ。楽勝じゃないですか」

「人、それをフラグと呼ぶ」

「フブキ部長、うるさいですよ」

言つてて俺もフラグなのではと思つたけど言わなかつたのに。

まあ、学校の生徒でなければ、ここまで深く関わることもないし、大丈夫だろう。

「…………ミオ先輩、やっぱり常時ついてもらえませんかね」

「今の間に何があつたし」

またフラグを立てただけである。

やっぱり、早々に逃げ足を鍛えないとだめかなと再確認していると、膝の上にいたタロが顔を上げた。

ぴくぴく鼻を揺らしたかと思えば、ぴよんと膝を飛び降り、どこかへ向かって走っていく。

「どうしたのかな？」

「玄関の方に行つたし、誰か来たんじゃないですかね。るしあとか」

追いかけるべく、立ち上がる。玄関に向かつて歩けば、それより早く、インターホンが鳴った。カメラを見て思った通りの人物であることを確認し、玄関へ向かう。

『タロちゃん！ つてことは、先輩もいるんですよね！ 先輩！ 開けてください、先輩！』

バンバンバンバンバン。

勢いよく扉が叩かれる。

溜息を一つついてから、錠を外した。

途端に勢いよく扉が引かれ、チーンで止まる。

隙間から手が侵入してきて、煌々と輝く目が覗く。

「開けてください、先輩」

「……」

「どうして開けてくれないんですか。なんで、ねえ、どうして！ 私は先輩を心配してるだけなのに！ どうしてこんな意地悪するんですか！ 早く開けてくださいよ。ねえねえねえ！ 分かった、やつぱりあの人達に何か脅されてるんだ。そうだよ、そうに違いない。そうじゃないなら先輩がこんな意地悪するわけないもん。ねえ、先輩。そうですよね？ だからこうやって意地悪するんですよね？ 大丈夫です、安心してください。私に任せてください。あの時は不覚を取りましたけど、今度はもつとうまくできません。だからここ開けてください。先輩は私が守ります」

「今開けるから離れてくれ」

「……」

隙間を覗く目が無くなり、手も引かれた。

一度戸を閉め、チェーンを外し、開ける。

「こんるし、るしあ」

「こんるしなのです」

「楽しかった？」

「はい、すつきりしました」

「そりや良かった。何回言ったか分からないけど、二度とやるなよ？」

「はいなのです」

るしあを招き入れ、周囲を見る。人影は無し。惨劇一步手前のような状況だったと思うが、ギャラリーも連れも居ない様子。

「ちよこ先は？」

「後で来るそうです。ちよつとお医者さんとお話しがあるとか」

「ふーん」

「……ところで先輩。誰が来てるんですか？」

足元。玄関に置かれた靴を見下ろしながら、るしあ。

「フブキ部長とミオ先輩」

上げられた名前に、「スウー」とるしあ。

「お邪魔でしたか？」

「いや、大体話し終わってたし、大丈夫」

「……聞こえてましたかね」

「多分な」

タ口を抱いているるしあの前を歩き、リビングへ。

扉を開けると、客間から出てきている二人。

臨戦態勢のミオ先輩と、その後ろに隠れるフブキ部長。

「……いつもの事なんで、大丈夫です。落ち着いてください」
もう二度とやらせないようにしようと心に誓いながら、開口一番にそう言った。

生徒会と桐生会

『みなさーん、こんどらーん！』

「桐生だ！ 探せ！」

「今日こそ止めろ！」

学園内指定非正規放送部『桐生会』の不定期放送が、校舎に響く。

放送内容は多岐にわたるが、殆どは学園関係者のスキヤンダルの事が多く、後ろ暗い事があるらしい一部の教員からの圧で、今日も生徒会は放送を止めるべく奔走するらしい。

大変そうだなあとという他人事のような感想を抱いている心中を億尾にも見せず、俺はタブタブと操作していたスマホをポケットに戻し、纏め途中だった資料を手を取った。若干ずれたのを整え直し、ホチキスでバチリ。

綴じた資料を脇に置き、新たな束を手に取り纏め、綴じ、脇に置く。

「……スパイでゴリラな天音先輩は、桐生先輩の居場所はご存じでない？」

「スパゴリゆうな！ ボクだってココの事を何でも知ってるわけじゃないんだからね！」

対面の席に座ってばちばち電卓を叩いていたスパゴリ先輩改め天音先輩が噛みついてくる。

「でも、捜索隊に入っていないって事は、疑われてるって事では」

「……え、やっぱりそうかな？ ボクがココに生徒会の動向をリークしてるって思われてるかな？」

途端に不安そうになる天音先輩。何かとても申し訳なくなってしまう。

「落ち着けかなたちちゃん。そんなこと無いぞ」

天音先輩を落ち着けるように、右側から声が一つ。

どこか幼さの残る顔つきだが、銀髪を掻き分けるように額から角を生やし、傍らに炎が飛んでたり、背中に刀を背負っていたりと、中々にインパクトのある俺のクラスメイト兼我がが学園の生徒会長。百鬼あやめのものである。

魔界出身のようで、俺の事はちよこ先から聞いているらしく、改めてよろしくなどと、挨拶をされたのは三十分程前の話だ。

ちなみに見た目を裏切ることなく、その正体は鬼。豆まきしたら、どれくらい怒られるのか少し気になる。

「お前様も、あまり先輩を困らせるんじゃないぞ」

「生徒会長直々に同級生を困らせている件については」

帰ろうとしたところをつかまって、ここまで連行されている。

「余、生徒会長だから。一番偉いからセーフ」

「……成程」

「納得するんだ」

生徒会長の覚えが良くして損をすることは無い。今までにも何度か手伝っているし。

それに、大空からあやめの手伝いしてあげてーと連絡を受けていた。

最近の大空は、俺に頼み事をする事に躊躇いがなくなってきた。良い事だ。

「纏め終わったら何すればいい?」

「そこにある山の仕分け」

百鬼の指さした先に、山積みになされた紙。先程バチバチ止めていた資料の数倍置かれている。

「……帰る」

「残念だったな、鬼火からは、逃れられない」

ふわふわ百鬼の周りを飛んでいた炎が、いつの間にか俺の周りを、円を描きながら飛んでいた。

円の中から抜けようと、右手を伸ばす。ばしばしばしと、炎がぶつかって物理攻撃をしてきた。

「熱い痛い熱い！」

「大丈夫!？」

「ほーら、余の言つた通り」

「ちよつと会長！ 手、怪我してるんですからね！」

「……え？ なんて怪我している方の手を伸ばしたんだ？」

なんでもなにも。何も考えていなかっただけである。

抜糸したとはいえ、まだテーピングはされている傷。今の炎で怪我が悪化したりして
いないだろうか。

確認する為、サポーターを外し、包帯を解いた。特に問題はないらしい。

安心しながら顔を上げると、視線をそらしている百鬼がいた。天音先輩も同じく。

「……テープだけですよ？」

「早くしまうんだ」

「うんうん」

「……そういえば、体の傷も」

「「出さなくていい！」」

治ってるからなんともないのだが。

怒られたので、素直に包帯を巻きなおし、サポーターをつける。

「しまいましたよ」

「……本当か？　かなたちちゃん、ちよつと見て」

「いやいや。ここは会長の方から」

「いやいや」

「いやいやいや」

謎の譲り合いを尻目に、俺は作業を再開する。

山の正体は嘆願書。とにかく生徒数が多いから、嘆願も多い。嘆願者も個人から部活、クラス単位までと様々だ。ここら辺、俺が見てもいいのだろうか。手伝いをしてい
るだけの部外者だが。

まあ、やれと言われた以上はやるので、検討と書かれた箱と却下と書かれた箱をそれぞれ
ぞれ手元に持ってくる。

とりあえず一枚目。

『総合格闘技部のサンドバック修理用のガムテープが滅茶苦茶予算使うから増やして
ほしいツス！』という嘆願書を、検討と書かれた箱に入れる。

二枚目。

『すこん部の部室崩壊の影響でゲームハードが幾つか壊れたので、修理費が欲しいで
す』という嘆願書には凄く申し訳なくなりながら、総合格闘技部の嘆願書の上に置く。

三枚目

『料理部で蠅』とまで読んだ嘆願書は捨てるかどうか悩んで、興味本位ですこん部の嘆願書の上に置いた。

四枚目。同好会の備品購入費だが、購入物の用途的に活動では不要そうなので却下。

五枚目。校舎にエレベーターを付けては、却下。パワポとか用意して、本気の説得に期待。

六枚目——却下。

七枚目——検討。

まあ、ここで分けたところで、後で百鬼は検討の方も却下の方もどっちも見られるらしいので、あまり意味はない作業ではあるのだが、曰く、検討度が違うらしい。

「おお、そうだ」

ふと、百鬼。譲り合いは終えていて、最初に座っていた椅子に戻って自分の作業中に、思い出したように言う。

「作業しながらでいいから、ちよつといいか？」

「ん？」

お言葉に甘えて、嘆願書に目を落としたまま返す。

「ココちゃんは、今日どこで配信してるんだ？」

「桐生先輩なら、体育用具室だろ。搬入手つ——だつて無いけど」

「はい用具室行つて〜」

「お前じゃねえか！」

百鬼がスマホでどこかに連絡を取る中、天音先輩が台パンしながら立ち上がった。

「スパイつてボクの事言つたのに、そっちがスパイじゃん！」

「いや、俺は搬入を手伝つて、生徒会の搜索始まつたよとしか連絡してないから」

「してんじゃねーか！」

『あ、待て！ 我々には報道の自由が！』

BGMと化していた桐生先輩の放送が、完全に終わる。我々と言つたが、誰が数に入っているのだろうか。

「ご苦労様。じゃあ、桐生先輩は生徒会室まで連行してくるんだぞ」

「じゃあ、俺はここで帰るわ」

「鬼火からは——」

「座ってます」

待っている間暇なので、嘆願書を手に取る。

『校長室を桐生会の部室にしたい』

当然だが、却下である。

少し前。

大空からの連絡を受け、生徒会室に向かう道すがら。

「おーい！」

呼びかけられて振り返った。

オレンジにも近い明るい茶髪と外国人の様な高身長が特徴的の先輩。以前は見えなかった側頭部から斜めに伸びる長い角と、爬虫類の様な鱗に覆われた紫の尻尾も持っている彼女は、桐生ココ先輩である。天音先輩のマブダチと評判だ。

「舎弟、ちよつと手伝ってもらえますかー？」

「押忍」

舎弟呼びされ始めたのは何時からだったか。昔は普通に呼ばれていた筈なのだが。舎弟として頼まれ事を断るわけにいかず、傍らに置かれている放送機材を、目算で半分ずつ持ち上げる。

「今日はどちらへ？」

「体育倉庫」

「了解です」

放送機材はそれなりに重く、特別鍛えているわけでもない俺には重労働。荷台にでも載せて運べればいいのだが、生徒会が管理している備品は、貸出の際に生徒会役員が立ち会うため、借りる訳にはいかない。

悠々と運ぶ桐生先輩の脇で、俺は男の子の意地で運ぶ。明日は筋肉痛確定だ。辛い。

ひーこら言いながら階段を下り、渡り廊下を通って、体育館。

奥のアリーナまで入らず、その脇を抜けて、体育倉庫に入る。

雑多に物が置かれたその中を歩き、事前に運び込んでいたらしい、電源設備の近くへ、荷物を下ろした。

「配線とか——」

振り返りながらの言葉。言い切るより早く、眼前に尻尾が突きつけられていることに気がつき、反射的に言葉を止めてしまう。

ぐるりとそのまま、桐生先輩の尻尾が俺の首に巻きついた。

「正体が見えるって噂で聞きましたけど……ホントみたいですねー」

しゅるりと尻尾の輪が縮む。半分から上がひんやりと冷たい感触。下は温い肌の様

な感触。どうやら上半分にだけ、鱗があるようだった。

「えっと、桐生先輩」

「喋るな」

「ひう」

首が閉まつて変な声が出た。

「……成程。その目のせい、みたいですねー」

ぐいっと、上に持ち上げられ、桐生先輩と目が合う。

首で持ち上げられるってこういう感覚なんだなど、足の指で立ちながら思った。もう少し持ち上げられると、完全に浮いてしまう。それは流石にやばそうだ。もう

「……まあ、いいか」

しゅるりと尻尾が外れる。途端重力に引つ張られるように膝が折れた。

床に膝を付けながら、せき込む。

「おっと、大丈夫ですかー？ Sorry」

背中を手で摩られる。

暫く摩られ、息が整ってきた。

「流石に命の危険を感じました」

「まあ、もしかしたら、そうしてたかもしれませんね」

ポキッと軽く言われ、息をのむ。偽りは無いのだろう。

「……もう桐生先輩に近づかない方がいいでしょうか」

「No problem。大丈夫。今まで通りでいいですよ。問題ないですよ」

「はあ」

大丈夫らしい。

「ただ……」

「ただ？」

「その目で何もしないこと。それが条件です」

「……??」

その言葉の意味、というより真意はすぐに理解出来なかった。少なくとも。

「見ようとしているわけではないので、特に何かをしようとは思っていませんけど」

「ならいいです」

いいらしい。

「……ちなみに聞いても大丈夫ですか？」

「なんですか？」

「桐生先輩って何者なのでしょうか」

頑丈な鱗を持ち、毛のない尻尾からイメージできるのは、爬虫類系なのだが。

自分の頭のなかに、ピント来る生物がない。

「んー」

俺の質問に、桐生先輩が悩む。

答えにくいなら別にと、言おうとするより早く、桐生先輩が上着を脱いだ。

何事かと思うより早く、もう一段変化。

その背中に、巨大な羽が生える。鳥や天音先輩の持つふわふわとしたそれではなく、尻尾と同質の鱗と薄い皮膜を持つ羽だ。

「これでわかりそうですかー？」

「……えっと」

巨大な羽と尻尾を持ち、頑丈な鱗で覆われていて、角も生えている。

生憎そんな生物は存じ上げない——のだが。

頭の片隅で、ある可能性に思い至っていた。

「……ドラゴン？」

巨大な羽と尻尾を持ち、頑丈な鱗で覆われていて、角も生えている。

角に関しては正直あつたりなかつたりの気もするが、羽と尻尾と鱗を全て兼ね備えていそうな実在の生物は正直思いつかない。

俺の言葉に、桐生先輩はにこりとだけ笑い

「手伝いご苦労、舎弟。帰っていいですよ」

とだけ言われた。

帰れてれば良かったなあなんて。

あの後律義に生徒会室に足を向けなければ、百鬼に捕まる事もなかっただろうし。

「くそー、裏切ったなあおめー」

びったんびったん、不満を表すように床へ尻尾を叩きつける桐生先輩の脇で、そんなことを思う。

「口が滑っただけです。ていうか、構成員じゃないから、怒られる謂れないです」

「私が怒られるんだから、舎弟も怒られなきゃダメだろ」

「じゃあ、天音先輩も座らなきゃダメじゃないですか」

「ちよつと」

「確かに。かなたんも座りなさい」

「ボクも舎弟のくくりなの!?!」

突っ込む天音先輩だったが、何故か大人しく桐生先輩の隣に座る。仲良く三人、これで正座だ。

「……余だつて怒りたくない。ココちゃんの放送好きだし」

「なら、いいじゃないですかー」

「やり方に問題がある。放送室ジャックしたり、勝手に機材持ち込んだり。しかも、お前様はそれを手伝うし、かなたちちゃんはきちんと監督しない」

「それが楽しい」

「舍弟だから逆らえなくて」

「それって、ボクの仕事なんですか？」

「とにかく」

とにかく。

「今回の罰は構内奉仕で許してあげるけど、次に見つけた時は、もっと重い罰にしないと
いけないから、注意するように」

「とうとうと？」

「……放送機材を、斬る」

「へえ」

ざわり、桐生先輩の雰囲気が変わる。大事な放送機材を斬ると言われて怒ったらしい。

それに応えるように、百鬼先輩の気配も変わった。

「いくら生徒会長でも、それは横暴なんじゃないですかねー」

「前科がねー。もうそろそろ底い続けるのも限度があるんだよ」

「なら、今度は見つからないようにしますねー」

「余的に辞めるか、きちんと許可を取ってくればいいだけなんだけど」

「ざわざわしてきた。心なしか、空間が歪んでいる気がする。目もぐるぐるしているし、なんか頭が痛くなってきた。」

最近若干感じられるようになった体内の魔力っぽい何かの反応が、ミオ先輩とるしあがやりあつてた時と明らかに違う。危機意識が働き、逃げようと後ろに下がろうとしたところで、何かにぶつかる。

振り返れば、いつの間にか天音先輩が俺の事を盾にしていた。

「何やってんすか?」

「いやいや。ドラゴンと鬼の喧嘩とか無理だし。死んじゃうよ」

「だったら天使的には人間の俺を庇うべきでは?」

「先輩なんだから、先輩の盾になりなさい」

「パワハラが過ぎる」

逃げ出そうとするも。

「動けないです、離してくださいこのゴリラ」

「ちよつと! 女の子に何てこと言うの!」

がっちり制服を掴まれて、固定されている。微動だに出来ない。制服を脱ぎ捨てて逃げるしかなさそうな感じだ。

「こんなところにいられません。俺は帰らせてもらいます」

「それ、真っ先に死ぬ奴じゃん！」

「天音先輩が離してくれたら、多分フラグのまままで終わるんですけど」

もう上着脱ぐかとボタンに手をかける。途端、脱げないように天音先輩がおぶさり、妨害してきた。

大事の傍で小事。ドラゴンと鬼がメンチを切りあっているそのわきで、ワーワー言い合っている人間と天使。……もしかして、帰っても気づかれないのではないか。

視線を天音先輩に向ける。同じく二人に視線を向けていた天音先輩が俺に気がつき、視線を向けてきた。

視線が交わる。束の間のアイコンタクト。どちらともなく、頷いた。

決めたら早い。天音先輩をおんぶしたまま立ち上がり、俺と天音先輩の荷物を回収。そのまま生徒会室を抜け出す。これら一連の行動を、音をたてずに行い、廊下に出て扉を閉めたところで、漸く一息。

「死ぬかと思いました」

「ほんとだね」

そんなことを言いながら振り返る。

振り返った先に、生徒会の役員達。百鬼の説教に伴い、追い出された者達だ。真面目に待機していたらしい。生徒会の未来は明るい。

一方、後輩におんぶされて生徒会から出てくるという姿を見られ、若干未来の暗い天音先輩。僅かにわなわな震えながら、どうしたらいいのか分からないのか、俺にしがみつくと腕に力が籠る。

「えつと、天音先輩」

「私達、どうしたらいいでしょう」

待機指示をされた役員達が困ったような声を出すものだから、とりあえず、と俺。

次の瞬間にはどっしやんがっしやん言い出しそうな生徒会室をバックに、代理で告げた。

「今日は、解散」

お仕事は、また明日。

ちなみに、天音先輩に後から聞いた話だが。

あの後、二人は一発だけ打ち合ったらしく、その衝撃で生徒会室はボロボロ。

大掃除が大変だったらしい。

閑話のような1日

担当したのは、入院していたときと同じ医師。その医師の手でしゆるしゆると、手際よく糸が抜かれる。

時間にしてものの数分。終わった後の傷にテープが貼られ、今日の処置はこれです了。

その後、経過観察中の胸から腹にかけての傷も見せる。

こここの怪我の具合は、手の怪我とかなり違う。

縫った痕跡も無く、塞がったその傷は僅かに跡を残すのみ。走った痛みも、舞った血の量も右手以上だったはずなのに、何も無かったかのよう。傷跡がなければ、夢だつたと思つてしまひそうだ。

「しまつていいよ。……大丈夫かい？」

「あ、すみません。ぼんやりしてました」

服を下ろす。カルテを覗き見れば、特に問題はないらしい。

「経過は良好だよ。安心して」

「はーん」

問題ないらしい。その言葉が、かつての意味怖話と同じでないことを願うばかりだ。

「……聞いてもいいですか？」

「ああ。なんだい？」

「先生は悪魔なんですか？」

「そうだよ」

そう言つて、白衣を纏つた瘦身の、頭に羊のような黒い巻き角を持った先生は頷く。

「流石に体の作りの違う魔界出身者を人間の医者に診せるわけにはいかないからね。ああ、きちんと人間の医師免許も取っているからご心配無く」

「ちよこ先……じゃないか、えつと癒月先生の関係者なんですか？」

「関係者、といえばそうなのかな。あの人は、この辺りの地区の魔界出身者の総括。纏め役だからね」

「……幼女ですよ、あの人？」

舌足らずで、お菓子を食べては怒られたりしてる印象が強い。そんな人に纏め役ができるのだろうか。

「あはは。それは余程今が気に入ってるんだよ。昔は凄かった。魔界全土で大暴れしてたからね」

「へえ」

なんかぴんと来ない。

今度聞いてみようかと思いつながら、俺は荷物を手に取った。

「次の検診はいつがいいかな？」

「少し遅くてもいいなら、平日がいいんですけど」

「それなら……」

提示された日付に問題はなく、その日で予定を取る。

ぼちぼちスマホを操作して予定表を更新。念の為、リマインダーも設定してから、ポケットにしまう。

「一応定期検診はその日だけど、その前に何かあったら、癒月先生に相談してね」

「分かりました」

傷は塞がってるのに、一体何が起ころうというのか。

「じゃあ、お大事に」

「ありがとうございます」

一礼して、診察室を出る。

そのまま、待合室に行き、今日の分の支払いを済ませてから病院を出て。

午前中の予定は終了。改めてスマホを取りだし、タップと連絡。

「終わった。予定通りで大丈夫」

『了解！　じゃあ、駅前で待ち合わせね！』

今日は週末。大空と約束していたパフエの日である。

病院前からバスで移動し、駅前。

大空より早く駅前に着いた俺は、駅前広場にある時計で時間を確認した後、スマホを操作しながら時間を潰す。

パフエを食べるだけなら喫茶店集合でも良かったのだが、大空が親から今期限の映画のペアチケットを貰ったとかで、それも見ることになっていた。

駅から徒歩数分の場所にその映画館があるので、それが駅前集合の理由である。

が、現地集合にしなかったことをちよつと後悔していた。

「随分人が多いな」

場所は駅前。今日は週末。世間一般では休日だから人の出が多いことに不思議はないのだが、それにしたって多い。

しかも同じTシャツを着ている者が半分以上。ここから暫く行つたところに大き目のホールがあるから、そこで何かイベントでもやっているのだろうか。

興味本位で調べてみようかと検索しだした所で、肩を叩かれる。

振り返ると、頬に指が刺さった。

「……なんすか、フブキ部長」

「いや、知った子がぼんやりしてるなーって」

手が離れる。ちゃんと振り返れば、右手を狐の形にしたフブキ部長が立っていた。

「おはこんだよー」

「おはこんです」

よく見なくても分かるほどの浮かれよう。どうしたのかなと思ひ観察すれば、フブキ部長の着ているTシャツも、駅前にいる人達が着ている物と同じ事に気が付いた。

斧とか星とか四角が連なっている物とか。ぱっと見統一感のないそれらを始めとした八つのマークが入ったそれ。連想ゲームにしては随分簡単だ。ていうか、答え書いてある。

「今日はすいちゃんのライブでもあるんですか？」

「……ええ!!? 知らないの!?!」

「俺がその手の情報を仕入れてないの、知ってるじゃないですか」

CD買って、出演番組を見る程度である。

驚かれた事に驚いていると、フブキ部長が、どや顔で腕を組み胸を張った。

「今日は、すいちゃんの記念すべきファーストライブなんだよ!」

「へー」

「軽いー」

「なんでよ！ と、フブキ部長に怒られる。

いや、素直に驚いているのだけど。フブキ部長に聞く前に想像が出来てしまったから、いまいち感動が薄い。

「全く。しようがないから私が——」

「何かほかの人は続々向かってますけど、行かなくて良いんですか？」

「——物販！ じゃあ、またね！」

「あ、はい。また」

どや顔狐なフブキ部長が、意気揚々と語りだそうとするので、茶々入れがてらに言った一言が酷く刺さった。思った以上である。

脱兎のごとく走り去るフブキ部長に、手を振り別れる。

「しかし、今日ライブだったのか」

幼少期の記憶は抜けてないからフブキ部長程の応援はしていないが、それでもファンではあるから少し惜しい気はする。

まあ、ディスクが出たらフブキ部長が買うだろうし、それを借りればいいか。長話を聞くことになるだろうけど、楽しそうなフブキ部長が見れるのならいい。

でもやはり、生で聞けないのは少し勿体ないなど、そんなことを思っていると。

「あの一」

声を掛けられる。

振り返った先に、桃色の髪をサイドで束ねた女性。

「……………姉街さん？」

「その呼び方！ やっぱり君かー！」

ばんばんと両肩を叩かれる。

「久しぶりー！ 元気にしてた？」

「はい。姉街さんも、お元気そうで」

とても元気な姉街さん。勿論本名ではなくあだ名で、本名……は、なんだったつけ。姉街つて教えて貰ってから、ずっとそう呼んでたから、聞いたことないかも……うん、無いな。

姉というだけあって、実際お姉ちゃんのこの方。誰の姉かと言えば。

「今日はおしかして、すいちゃんのライブに来てくれたの？」

すいちゃんこと星街すいせいのお姉さん。私のお姉ちゃんだから姉街だと、名付け親のすいちゃんに教わった。すいちゃんのお姉さんなら、星街なんじやという、当時の俺のツッコミは無視されたことも思い出した。

「残念ながら、今しがた知ったばかりでして」

「えー、そうなの？ すいちゃん喜ぶと思ったのに」

「すみません」

「んー、そうだ。家族の人とかが入れる関係者席みたいな所なら、もしかしたら入れるかもよ？ すいちゃんに聞いてあげようか？」

言いながらスマホを取り出すものだから、大慌てで首を振る。

「いやいやいや。ダメですって。それに今日は、約束があるので行けません。ていうか、そもそも関係者でもないです」

「幼馴染は関係者レベル高いよ」

「そんなことないですから」

なおも食い下がろうとする気配を出す姉街さんを前に、どうしたものかと悩む俺の視界に、待ち人の姿が見える。

「あ、待ち人来たので、これで。すいちゃ……じゃなくて。星街さんに宜しく伝えてください」

「私も星街さんだけだなー」

「……すいせいさんに宜しくお伝えください」

「すいちゃんでもいいのに」

なんとなく本人に知られるのが気恥ずかしいだけである。もう手遅れだと思うが。

一礼し、立ち去ろうとして。

「そうだ」

と言った、姉街さんにつかまる。

「せっかくだし、連絡先交換しない？ 今日、すいちやんのライブって知らないのここに居るって事は、この辺に住んでるんでしょ？ 私、この辺に引越す予定だから、知り合い居ると心強いな」

「……分かりました。そういうことなら」

メッセージアプリを起動して。タップ操作して連絡先を交換。登録名だけ、姉街さんに変えておく。

「じゃあ、またね」

「はい。失礼します」

スマホをしまい、改めて一礼。姉街さんの元を離れ、大空の方へ向かう。

「大空」

「あ、漸く見つけた。おはよー」

「おはよ。やけにお疲れだな」

「人が多くて、なかなかこっちに来れなくて」

「ああ、大空の家ってホールの方なのか」

こくりと、大空が頷く。それはなんとというか、ご愁傷様である。

「なんで今日はこんなに混んでるんスカね？」

「ライブがあるらしい。すいちゃんの」

「へー。そうなんだ」

軽い。フブキ部長に怒られるやつである。

「どうする？ もう映画館に行くか？ どつかで一服してく？」

「いや、この調子だと、喫茶店とかも混んでそうだし、直接行こうよ」

「……確かに。それもそうか」

ホールとは逆方向に移動して、映画館へ入る。

外の人の出が嘘のように、映画館の中はがらんどうとしていた。

大空がカウンターでチケットを引き換えればやることは終了。見る映画の開始まで、

三十分程。

パンフレット等が売っているショップを冷やかしたり、取れる気のしないUFOキヤッチャーの中身を眺めたりしながら、時間を潰す。

「これ、面白そう」

「どれの()と？」

「これ」

「……そう?」

見るからにB級臭漂うその映画は、どうやら大空のお気に召さなかつたらしい。

難しそうな顔をして首を傾げ、なんとか面白さを見出だそうとしている大空が、ちよつと面白い。

「大空は、映画館つてよく来るのか?」

「そんなに来ないかな。誘われたら来るくらい。そつちは?」

「俺も同じ。誘われたら来るくらい」

「別に映画は嫌いじゃないけど、わざわざ映画館に行つて観ようつてあんまり思わないよね」

「俺はある一定時期は毎週のように呼び出されるから、普段から行くつて思えない」
「どういふこと?」

主にフブキ部長の特典集めの為の人員である。アニメ映画つて何種類も特典あるのすごいし、それを集めきろうとするオタク魂もすごいと思うし感心する。

まあ正直同じ映画何往復もさせられるのは辛いし、それが嫌で外で待つていようとする空席を作るつもりかと怒られるのは納得いかないが。ミオ先輩のように心を無にして、呼吸を楽しめるようになれば、もう少し楽なのかもしれない。

「ボチボチ人も入ってきたし、飲み物なんか買つとく？ 俺、ポップコーン食べたい」

「あ、じゃあ一番大きいの買つてシェアしよ？」

「そうだな。パフェもあるし」

公開予定のポスターの前から移動。売店でLサイズのポップコーンとそれぞれの飲み物を買つて、近くの机まで移動する。

「キャラメル味のポップコーンって、なんか特別感あるよね」

「分かる。行楽地にしか無いイメージ」

容器のサイズこそLサイズのポップコーンではあるが、片一方が塩味でもう片方がキャラメルのーフ&ーフ。甘いとしよっぱいで無限に食べられる最強の組み合わせである。

「そういえばさ」

「なに？」

「観る映画ってどんな映画？」

「今更？」

決して興味が無かった訳ではなく、本当にただ単純に忘れていただけである。

「ホラーだよ」

だって苦手ジャンル回避のためには、直接聞くのが一番なのだから。

「ごめん。ホラーが苦手か聞いておけば良かったね」

「いや、うん。すまん」

観賞後。ベンチに座り項垂れる俺。

その隣には大空が座っていて、背中を擦ってくれていた。

「無理しなくても良かったのに」

「大丈夫かなって思いました」

「どっからきたの、その自信」

無論、日常からである。

常日頃幽霊が見えてるし、骸骨が動き回るのだから割りと日常。この前なんてドラゴンに襲われた俺に怖いものなんて無いと思ってた。

たぶん、前もってホラーだと知っていたとしても、大丈夫だと思っただろうし、実際怖かったのかと言われると、そうではなくて。

「あれだ。ストーリーは良くて楽しめたし、怖かったかかって言われると怖くはない。ただ」

「ただ？」

「大きな音で驚かせに来るのは駄目だろ」

「ああ、確かに。ホラーシーンは吃驚系だったよね」

正直目の前に行きなり幽霊が出てこようが、音がしなければ驚かない。慣れてるから。

ただ爆音を伴って出てくるのは違う。俺の知ってる幽霊は自己主張はしても、もっと静か。からりからり程度で勘弁してほしい。

「大きな音、苦手なの？」

「来るって分かってればマシなんだが。クラツカーレベルも苦手」

爆発満載のアクション映画は観ないし、ヘビメタは論外。

「パフエ行くの辞めとく？」

「……いや、平気。落ち着いた」

顔をあげ、心配そうな顔をしている大空に笑って返す。実際落ち着いて、楽になった。

「パフエ、俺も楽しみにしてるんだ。行こう、大空」

「うーん……無理しちやダメっすよ？」

「分かってるよ。俺が大空相手に遠慮するわけ無いだろ？」

「そこはちよつと話し合う必要があるそう」

何を話し合う必要があるというのか。

大空は俺の反応を見て、無理をしていなさそうだと判断したようで、朗らかな笑みを

浮かべ、立ち上がる。

「パンフレットとか買う？」

「私はいいかな。君は？」

「いや、買わない」

その他グッズ等も特に買うものではなく、そのまま映画館を出る。

目的の喫茶店は駅を挟んでホール側。一先ず駅に向かい、それからホール側を目指し歩き出す。

混み具合は、映画の始まる前以上になっていた。物販とやらでも大勢来ていたと思うのだが、あれで全員でないらしい。

「凄い人の出だな」

「そうだね」

目当ての喫茶店へは流れに乗る形になる。

昼のことを思い出したらしく、辟易した顔をする大空。逆走では無いので我慢して欲しいが、正直俺としても抵抗を覚える。

とはいえ、進まなければ目的地に着かない。とつても嫌だが、ここは我慢。

「行こう、大空。俺が壁になれば、多少楽だろ」

「……ごめんね。ありがとう」

申し訳なさを感じたらしいが、しかし背に腹は代えられぬと、大空が俺の背後に回る。はぐれないようにか、裾を掴まれる感覚を得ながら、先んじて歩き出す。

裾をつかむ感覚は変わらず。どうせ掴むならもっとしつかり掴めばいいのと思いつつながら、人波に乗る。

しかし本当に人が多い。あのホールってこんなに収容出来たんだと、そんな感想を抱く。

「大空、平気か？」

「大丈夫。ありがと」

大空から返事。もみくちゃにされ、やつとこさといった感じ。裾をつかむのも限界だろうか。はぐれると、合流が大変だろう。

少し悩み、背中に手を回す。そのまま大空の手首を掴んだ。

「うえ」

「そんな声出すなよ、傷つくから」

「ご、ごめん。ちよつとびつくりしちゃって」

とはいえ振りほどかれる事はない。その事に安心しながら、手首を掴んだまま先に進もうとしたところで、ビルとビルとの間の路地に、変なもの。ふよふよ飛んで、ビルの中に消えていく。

「……」

進んでいき、問題の路地。

足を止める。周りに迷惑そうな目で見られるのは、この際仕方がない。

路地の間を見れば、少し奥まった所にさつき見かけた変なものが鎮座している。

「……大空」

「なに？」

「この路地の奥に何か見える？」

「え？ うーん、特に何も無いけど」

「そっか」

自立行動出来る人形とかなら良かったが、大空に見えていないのなら違うのだろう。

声に反応したのか、変なものが振り返りだす。それを見て、急ぎ歩き出す。

「すまん、勘違いだったみたいだ」

「？」

最後、ちらりと見た姿は、毛並みが汚れ、目尻に何か光るものが見えた気がした。

「……」

まあ、十中八九この世界関係ではないだろう。

魔界か、幽世か、それ以外か。

間違ひなく言えるのは、関わると誰かしらに怒られる奴。
とはいえ。

「はあ」

こつそりついた溜め息は喧騒に消える。

喫茶店へ向かう角を曲がる。嘘のように過ごしやすい環境になった。

大空の手を離す。

「ようやく抜けたね」

「ああ。……あ」

「どうしたの？」

ポケットを漁る。我ながらわざとらしい。

「ごめん、電話」

そういつて、いかにも電話に出るそぶりをしながら、離れる。

幸運にも、素直な大空はそれを信じてくれたようで、ついてくる気配はない。

「もしもし、何？」

かかってくるきていないので、当然何も音は聞こえない。

無言の通話を、暫しこなす。

「うん、うん。随分急じゃん。珍しい。うん、分かった」

元々繋がっていない通話を切る。

ポケットにスマホをしまいながら、大空の元へ。

「ごめん、親からだった。どうも帰ってきてるみたいで、一緒にご飯食べようって」「確か転勤中なんだっけ？」

「うん。正直、顔を見るのが何時ぶりかも怪しい」

最後に親の顔を見たのは何時だっただろう。電話はたまにかかってくるが、ここ数年顔を合わせていない気がする。今の家を買った時以来だろうか。

「そっか。じゃあ、しょうがないね」

「すまん、大空。必ず埋め合わせするから」

「じゃあ、今度奢ってもらうの、楽しみにしてるね」

「勿論」

「……じゃあ、また学校でね」

「ああ。またな」

少し不服そうな表情をしながらも、大空が歩き出す。

その背を見送り、見えなくなつてから、元来た道に戻る。

魔界関係ならちよこ先、幽世関係ならフブキ部長……じゃなくてミオ先輩に直ぐ様連絡しようと思ひながら、ポケットにいれたスマホを握りしめつつ、路地の前。深呼吸ひ

とつ挟んで路地へ入る。

変なのは、まだいる。よく見れば、見覚えがある気もするが、思い出せない。

近づいていくと気がついたらしく、変なのが顔をあげ、振り返った。

目が合う。もう逃げられない。

流石に完全に腰を下ろすことは気が引けたが、ヤンキーのような座りかただと威圧感があるかと思いい、片膝をつく。

「こんばんわ。大丈夫？ 迷子？ ……いや、その前に言葉通じる？」

かくして、片手に収まりそうなほどに小さな、パンダのような謎の生物との邂逅は果たされたのである。

害が無いことを、願うばかりだ。

異世界との遭遇（4度目）

名を、きんつば。自称妖精。パンダのような外見だが、本来の姿は別にあるらしい。思ったより声が低くてびびくりした。

曰く、ふれあという人と一緒に探し物をしていたが、人波に流され、あれよあれよと言う間にはぐれたらしい。

どこではぐれたのかも不明。連絡方法もなく、目的地として定めた場所もなければ、いざというときの待ち合わせ場所も特に決めていないそう。

だったら家に送ろうかと思ったが、この辺の土地勘がなく、家の場所もあやふやらしい。

普通、迷子の時は動き回らない方がいいらしいが、どこではぐれたかも分からないのに探しに来れるのか不安だ。

とはいえ交番は多分論外だし、魔界とか幽世という単語も知らないようだから、頼れる先達に任せることも出来ない。……いや、ミオ先輩ならもしかしたら臭いとかで探せるかもしれないけど。そんな犬みたいなことさせられない。

「タロは出来る?..」

「ワン」

出来ないらしい。残念である。

路地の出口。歩道との境界辺りで、両肩にタロときんつばを載せたまま、どうするか悩む。

やはり此方からも探した方がいいだろうか。だがそれですれ違ってしまおうと、ふれあさんに申し訳ない。

とはいえ、ふれあさんも土地勘が無い可能性を鑑みれば、とりあえずきんつばの覚えのある場所を探して移動すれば見付けられる可能性はあるし、土地勘のある場所まで出ればきんつばの住んでいる場所も分かるだろうから、そこまで連れていくという手もある。

留まるべきか進むべきか。

悩んだ末、留まる方を選んだ。下手に動いて、何かに巻き込まれたら大変である。

「きんつば。ふれあさんのこと、一緒に待てる？」

俺の言葉に、きんつばが頷く。それを確認して、俺は通りへ踏み出した。

ライブの時間も迫っているのか、すっかり人通りの減った歩道を進みながら、きんつばから聞いたフレアさんの特徴を探す。

金髪のロングヘアで、編み込みがある。褐色の肌。尖った耳。黒のセーラーワンピース

ス。

本当はポニーテールで民族衣装の様な服装らしいのだが、この世界だと流石に目立ってしまふからと、その服装に着替えているらしい。目立ってくれた方が、探しやすいのだが。

やはりというか、きんつばもふれあさんも、異世界出身らしい。しかも、魔界とか幽世というこの世界の言葉で説明しやすい名前があるわけでもない、小説に出てくるようなファンタジー世界。

人間だけでなく、エルフやドワーフ、獣人のような、俗に亜人と称される者がいる、剣と魔法の世界。フレアさんはハーフェルフだそうだ。

そんな異世界から何を探しに来たのかと尋ねたが、それは教えられない決まりらしい。それに現地民に正体ばれするのも不味いようで、その時点でふれあさんとは顔を合わせないことに決めた。

魔法があるなら、それで解決出来ないのかと聞くが、きんつばもふれあさんもそんな魔法は覚えていないらしい。それについては今後の課題にして貰うとして、とりあえずふれあさんである。

場所を移して駅前。この辺りの中心地。全ての道はローマに通じているかもしれないが、この辺の道は例外的にこの駅へ通じている為、ふれあさんが探すのなら一番可能

性が高いと踏んだのだが……見当たらない。はぐれてからの程度の時間が経っているか分からないから、まだ来ていないのかももう来た後なのかの判別も難しい。

「反対の口か？」

この駅には北口と南口がある。今居るのは北口で、もしかしたら南口の方に、ふれあさんはいるかもしれない。

とはいえ、向こう側の出口に移動するには少々大回りが必要で、その間にふれあさんが北口に來たらいよいよ会えない可能性も出てくる。

「……なあ、タロ。一寸南口に行つて、ふれあさんがいるか見てきてくれない？」

暫し悩み、タロに行かせることにする。守護霊をパシらせるのは我ながらどうかとも思うが、背に腹は変えられない。俺の言葉に、タロは「ワン」と一鳴きすると、びよんと俺の肩を降り、駅の中に入っていく。

そのまま改札を無断で走り抜け、階段に向かうのか右折して、その姿を見失った。

タロが居なくなるやいなや、俺の近くには浮遊霊が近づいてくる。俺に興味を示すささない問わず、続々と。ちよっかい出されない限りは無視が安定なので、半透明の彼らの体の向こう側にふれあさんの姿を探す。

「きんつば、居たか？」

声をかけるが答えは否。やはり早々見つからない。

駅前広場の時計を見上げれば、大空と別れて三十分が回った辺り。昼間の人混みが嘘のように駅前広場は広々している。

「……そういえば」

もう一つ、人の集まりそうな場所に心当たりがある。今日限定だが。

「お前さんが流されたって考えるなら、そっちの方が可能性高いか？」

きんつばの小柄な体を見れば、流され切ったと考えるのも不思議ではない。そして、流され切れば、多分ホールの方に着いていたはずだ。

ホールの方に行ってみようと、決心する。暫くそっちを見て、居なければまた駅前に戻ってくればいい。

まずはタロと合流しようと南口を目指そうとした所で、元気な一鳴きとともに、タロが帰還。肩に乗る。

「お帰り。どうだった？」

「ワン！」

居なかつたらしい。残念である。然らば、やはりホールを目指していいだろう。

タロが戻り、諸々退いて視線の通りやすくなつた周囲を最後にぐるりと見渡し、やはり目的の人物が居ない事を確認。

「きんつば。ホールの方に行こうと思うけどいい？」

尋ねれば、頷きが返ってくる。それを確認して、俺はホールの方へ歩き始めた。

ホールまでは、徒歩で一時間弱程度とそれなりの距離がある。

それだけ歩くと流石に駅前という概念からは外れるのか、やや閑散として、民家なども少なく土地がそれなりに空いている。

それを好都合とばかりに建てられたのが、本日絶賛ライブ中のホールである。以前吹奏楽部の大会の応援で一度来たことがあるが、それきり。見れば、周囲にはあの時無かったチエーン店のご飯処がぽつぽつあるし、ホール付近には出店もある。ちよつとは発展しているらしい。

ホールへ近づくと、建物越しでも音楽と歓声が聞こえてくる。音楽に合わせて口ずさみながら周囲を見渡すが、目的の人は居ない。ホールの裏手の可能性はあるかもしれないが、流石にメインゲートではないそちらの方にいるとは考えづらいし、下手に行つて不審者と思われるのは困る。

しかし。それにしてもだ。

「お腹すいたな」

朝昼共に食べたし、ポップコーンをLサイズの半分食べたけど。おやつを食べるからと全体的に軽めに食べたから、感覚的に一食抜いた気分。

俺の言葉に反応したのか、きんつばからも腹の音。少し恥ずかしそうにしている。「何か食べるか。きんつばって、俺と同じ物、食べられる？」

肯定の返事。大丈夫らしい。

きんつばの食事シーンがどうなるか不安だが、出店で買ったのを外で食べる分には、ライブ中で閑散としたホール前なら人の目は少ないし大丈夫だろう。座る場所さえ考えれば、人の目は一切気にしなくて良さそう。……いや、ふれあさんも探しているだろうから、人の目は気にしないとだめか。とはいえ、きんつばがそのままだと、料理が虚空に消えるようにしか見えなと思う。

悩む俺の心中を察してか、大丈夫ときんつば。曰く、物を見えなくさせる魔法があるらしく、それで料理を隠してしまえばいいとのこと。普段から、外で食事の時はそうしているらしい。

試しにスマホを渡し魔法を使ってもらうが、俺の目には消えたように見えない。まあ、肩口で飛ぶスマホくらいなら手品とかでごまかせるかなと思いい、そのまま試しに出店の一つに近づいた。

「へい、らっしやいー！」

威勢のいい声が届く。焼きそば等の鉄板焼きのお店。肩口に飛ぶスマホは見えないのか、反応は無い。

一旦離れ、数店そんな感じに冷やかすが、全てのお店で反応は見られなかった。「大丈夫そうだな」

ドヤ顔をしているのだろうきんつば。ならば合流用の魔法だなと返す。

「何が食べたい？ 色々あるけど」

流石に夏祭りの屋台群程ではないが、きんつばの焼きそばを始め、たこ焼きとかケバブとか、思いつきそうな物はそれなりにある。

暫し悩んだきんつばは、ソースの匂いにつられたのか焼きそばを選んだ。俺は久しぶりに食べたくなってケバブ。威勢のいい店主と愛想のよい店主からそれぞれの品を受け取り、適当なベンチへ腰を下ろした。

一度周囲を確認。誰も見ていないことを確認してから、焼きそばの封を切り、ベンチへ置く。

その傍にきんつばは降りる。そういえば、食事の道具が割りばししかないが大丈夫だろうかと思つた矢先、きんつばは割りばしを手に焼きそばを食べ始めた。どう使っているのか最早器用という次元を超えて摩訶不思議。その手でどうやって割りばしを使っているのか。

観察してみるが、皆目見当もつかない。持っているだけなら兎も角、きちんと挟んで、きちんと持ち上げているし、クロス箸等のマナー違反も見受けられない。寧ろ、人の食

事をまじまじと見ている俺の方が、マナー違反を咎められそうだ。

後で教えて貰おうと決めつつ、ケバブを食べる。久しぶりに食べたが美味しい。野菜は瑞々しいし、肉もソースも好みの味付け。

もしやもしや食べながら周りを見るが、探し人の姿は無い。

探し人の姿は無いのだが、こちらを見る姿があった。

シヨートの銀髪。白のセーターとチエツクのスカート。一番目を引くであろう、豊かな胸。ちよこ先といい勝負だ。斜め掛けのポーチが犯罪的であざとい。

つい数分前にこちらに気が付いたその人は、なぜか俺の方を見て驚きを浮かべた。驚かれる要素は無いと思うのだが。恰好は病院と映画のために下ろしたちよつと小洒落た物だし、後はケバブを食べているだけ。良く分からず観察していると、驚いた表情がどんどん焦りの表情に変わっていくのが見える。何かあったのだろうか。とりあえず、俺に一目ぼれして見惚れているという線は、残念ながら無いらしい。

何気なくきんつばの方へ視線を向ける。もぐもぐ食べ続けていた焼きそばは既に佳境。もう数口を残すのみになっている。あの小さな体の何処に入ったのか。

視線を戻す。表情は終わったと言わんばかりの絶望顔。何故俺がきんつばを見てそんな顔をするのだろうかと思つたあたりで、漸く答えが出る。

「きんつば。迎えが来たみたいだぞ」

きんつばを見ながらそう言うのと、焼きそばを食べ終えたきんつばが顔を上げた。顎で指してやると、きんつばがそちらに視線を向け、パアツつと顔が明るくなった……気がする。飛び出し、一直線に彼女の元へ。

それを見送る——なんて悠長な事はせず、ケバブの残りを口に詰め込み、即焼きそばのパックを回収し、逃亡する。

「あの一！」

後ろから声。無視する。ふれあさんの関係者である事は間違いないだろう。

任務は果たした。後は家に帰り、ほとぼりが冷めるまで籠城したい。

進行方向先に、人影。曲がり角から出てきた。きんつばの言っていた特徴と酷似するその姿に、慌ててどこかの角に入ろうとするも、そんな角が無い。かくなる上は、幼少期の鬼ごっこで鍛えられた俺の身のこなしを見せるほかない。

「ノエルー！ きんつば居たー？！」

「あ、フレアー！ その人捕まえてー！」

「え？」

ふれあさんの視線が、俺の背後から俺の方へ戻る。

接触間近。なるべく顔を見られないようにしながら脇を走り抜けようとし。

「ほいっつと」

「ぐえ」

襟首をつかまれる。そういえば、鬼ごっこで逃げ切れた試しは無かった。相手三輪車だつたけど。

「うーん……？ ノエちゃんに何かやったの？」

「いいえ何も。近づいてすらいないです」

こうなると流石に逃げられるとは思えない。きちんとシャツの襟を掴んでいるから、脱いで逃げるわけにもいかない。

「あの」

「何？」

「自分ほんと。ほんと何も見なかったことにするんで、許して貰えませんか？」

「……あ、そういうこと？ 成程ね」

あ、タロ。待ちなさい。呼んじやいけません。まだ分からないから。

遠吠えを上げようとするタロの口元を抑える。触れないので気分だが伝わっては居るらしく、ふれあさんを威嚇するも、吠えようとはしない。

「じゃあ、ちよつと付き合つて？」

「……はい」

ぱたぱた走ってきたのえるさんと思しき方が合流し、移動が始まる。校舎裏くらいで

勘弁して貰えないだろうか。

幻想談義

……どうしてこうなった。

「じゃんじゃん……食べられちゃうと困るから程ほどにして欲しいけど、好きなもの頼んでいいよ？　ここは私のおごりだから」

「はあ……。じゃあ、これで」

トッピング等も特にならない、一番オーソドックスな商品を指さす。

「普通の奴でいいの？　流石にもっと高くてもいいけど。後、飲み物何がいい？」

「いえ。さつき食べたので。飲み物はウーロン茶で」

「了解。デザートとか食べたくなったら言ってみてね。ノエルは決まった？」

「うん」

「……」

牛丼屋である。某有名チェーンのありふれた店。

フレアさんとノエルさんに連れてこられた先は、其処であった。

何のつもりなのかと警戒するうち、あれよあれよという間にテーブルに着き、オーダーが決まる。関係無いが、牛丼屋でテーブル席って初めて座った気がする。

ボタンを押しして間もなく、店員さんが来て。その店員さんへフレアさんがオーダー。それぞれの食べ物と、飲み物が三人分。

「フレア。ちよつといい?」

「いいけど。ちよつと待ってて」

「はぐ」

ノエルさんが席を立ち、フレアさんが着いていく。この隙に帰ってしまおうと席を立ちとうとするが、きんつばと目が合い、大人しく席へ戻る。

「どうしてこんなことに」

タダ飯と喜ぶには、如何せん状況が理解できない。きんつばは現地民に正体ばれする事は不味いと言っていた。それなら、自分と接点を持つのは、あの二人にとっても良い事ではない筈。

俺の記憶を消すとか、そういった処理をする為の足止めとも考えられるが、ホール前の時点で人気は殆ど無かったのだから、そこで済ませればいい話だ。わざわざ人目のある牛丼屋に連れてくる必要は無いし、俺はその時点で既に捕まっていたのだから。

わざわざ連れてきて、ご馳走をする理由が何なのか。単純に考えれば、何か話があるとかだろうけど。会ったばかりの俺に、話も何も無いだろう。口止めとか?

「誰に話したって、俺の頭がおかしくなったと思われるだけだよなあ」

ぼそりと独り言を呟いた直後、見計らったように店員さんが来る。

「お待たせしました」

人数分の飲み物を置いていく。

頼んだのはそれぞれ別の飲み物であったから、迷うことなく、俺はウーロン茶を手元に引き寄せる。

匂いを嗅ぎ、行儀は悪いがぺろりと一舐め。普通のウーロン茶の味。臭いも含め、なんの異常も感じない。

タイミングが良かったのは、偶然だったようだ。

安心すると、緊張していたこともあり喉の渴きを覚え、一気に飲み干してしまう。

……飲み足りない。据え置きのコップを手元に寄せ、水を入れる。飲みたそうにしていたから、もう一つコップを用意して、きんつばの分の水も注いだ。

双方無言でごくごく水を飲んでいると、注文の品が運ばれてくる。早い安い旨いは伊達じゃない。

食べていいだろうか。冷めてもあれだし。早い牛丼と違い、ガールズトークは遅いものとの相場も決まっている。

とはいえ、奢ってくれるらしい主が居ないのに食べ始めるのも、どうだろうか。一緒に来ているのが知り合いなら食べ始めるのだが、初対面である。

悩む俺に、差し出される割り箸。きんつばからだった。食べていいということだろうか。いまいち煮え切らない俺に、きんつばは更に俺が頼んだ牛丼を寄せ、ピツつと右手を差し出してくる。最後の動作の意図は少々掴み切れないが、恐らく食べていいということなのだろう。

両手を合わせ、いただきます。ちらりときんつばの様子を窺えば、こくこくと首を縦に振っていた。正解らしい。

割り箸を割り、牛丼を持ち上げる。それにしても、牛丼を食べるのは何時ぶりだろうか。外食自体殆どしないし、自炊していると安い豚肉とか鶏肉ばかりで、牛肉を食べるなんて半額セールスの時くらい。そして牛肉を買っても牛丼作るかとは、正直ならない。

とりあえず一口。たまに食べると美味しい。手を止めず、もぐもぐ食べ進む。

「おまたせ。ごめんね、遅くなって」

無心に食べていると、フレアさんに声をかけられる。

「いえ。先にいただいています」

「良かった。遅くなったから待たせたらどうしようかと思ってた」

戻ってきたフレアさんが、最初に座っていた席と同じ場所に腰を下ろす。

その後ろからノエルさん。同じく、先程と同じフレアさんの隣へ。

何の話をしていただろうと、俺が考えている最中、トンと、フレアさんが右の人差

し指でテーブルを叩いた。

その先に、光が灯る。その光を維持したまま、フレアさんがテーブルの上に円を描いた。

何なのかと見守る俺をよそに、フレアさんは光によって浮かび上がるその円の内側に沿うようにミミズがのたうち回ったような文字らしきものを書いていき。

次いで、その内側にも同じく円が描く。二重丸の円と円の間に文字が書かれている形となった。

最後に、内円の内側に、大きな文字を一つ、内円ぎりぎりのサイズで書いたフレアさんは、トンと、数分前と同じように指先でテーブルを叩いた。

先程と違うのは、その叩いた位置が丁度、フレアさんが描いた何かの中心でもあったということ。

ノックを合図に、描かれた何かが縮まり、弾け、光の鱗粉に変わった。

鱗粉は座っているテーブル席の周囲に降り注ぎ、やがて俺の目では見えなくなる。無くなったのか、視認出来なくなったのか。区別はつかない。

「……今のは？」

「ちよつとした人払い」

「人払い？」

「私達の事が気にならなくなる魔法。どんな姿かとか、どんな話をしているかとか。そういうことが一切気にならなくなる」

逃げるべくと動き出そうとした直後、足を絡めとられる。見れば、俺の足をフレアさんが足で挟んで止めていた。その隙に、ノエルさんが俺の隣に移動してきた。逆サイドは窓、背後は壁。何でこう、俺は色々と迂闊なのか。何かしだした時点で逃げるべきだったし、それ以前にやはり二人が席を立った時点で逃げるべきだった。何をのんきに牛丼に舌鼓を打っているのか。

もしかしたらきんつばが助けてくれたりしないかなとテーブルの上を見るが、きんつばは変わらず牛丼を食べている。恩を仇で返そうというのか。

骸骨を呼ぶか。ミオ先輩に窓抜き窓ドンされた時、何で骸骨が出てきたのかるしあに確認したら、俺の流血を切欠に、勝手に影から出てくるように忍ばせていたらしい。試しにその場で指先をちよつと切ってみたら、本当に出てきた。るしあから辞めたと聞いていないから、多分今も出てくるはずである。

「落ち着いて。何にもしないから。話したいだけ」

「……話をするのに、人払いは必要なのでは」

「そういうわけにもいかないでしょ？ お互いにさ」

「……」

まあ、確かに。店内には獣耳やら角やらが生えた人がちらほら居る。

今でこそ何ともないが、フレアさんの人払いが発動した直後、その中の何人かが一瞬こちらを気にしたのも見逃さなかった。もし人払い無しに異世界だ魔法だと話せば、あの人がどんな反応を見せるのか、正直想像出来ない。

「誰かの家とか、他に人が居ない状況の方がいいけど、私達の住んでいる場所には君を招けないし、君も私達の事を家に上げたくないでしょ？」

「まあ、確かに」

いざという時、最後に頼れるのは我が家だ。そこを教えられるほど、まだこの人達は信用出来ない。

「本当はこんな無理矢理なものもどうかなくと思っただし、さつきノエルにも言われたんだけど。私はちやんときんつばのお礼がしたかったんだ」

俺の足から、フレアさんの足が離れる。

そして、フレアさんは深々と頭を下げた。

「本当にありがとうね。きんつばを保護してくれて」

「……いえ。偶然見かけただけなので」

俺の言葉に、顔を上げたフレアさんは静かに首を振る。

「ホールの前での態度もそうだし、今もそう。これでも結構長生きしてるから、見てれば

分かるよ。君は多分、今までに大変な目にあつてて、きんつばを保護したら、またそういう目にあう可能性がある事も分かつてた。

それでも見ず知らずのこの子を心配してくれたのが嬉しいんだよ。きんつばは、私が小さな頃からずっと一緒にいる家族みたいなものだからね」

「……そうですか」

嘘をついているようには見えない。きんつばはフレアさんの言葉に感動したのか、うるうると目に涙を浮かべている。

指先でちよいちよいときんつばの涙を拭つてやり、引き抜いた紙ナプキンを顔にかざす。チンと、鼻をかむ音。そのまま拭つてやり、ナプキンを丸めながら、言葉を返す。

「責められこそすれ、感謝される謂れは無いです。俺が余計な事をしたせいで、合流出来なくなる可能性があった。合流出来たのは、きんつばの運が良かったただけですよ」

「……成程」

俺の言葉に、フレアさん。

「なら、この話はおしまい。次の話ね」

「まだ何か？」

「あと二つだけ付き合つて」

指が二本立つ。まあ、それくらいならと、素直に従う。

「一つは口止め。理由は知ってる？」

「きんつばから、正体がばれたら不味い、とは」

「あながち間違えてはいないけど、ちよつと違うかな。三つ目の話にも関係してくるんだけどね」

「ちよつとフレア」

隣から、ノエルさんの声。どこか咎めるような色を含んだその声色に、少々嫌な予感を覚える。

「やっぱり辞めておいた方がいいんじゃないかな？」

「大丈夫。何か言われたら、私が勝手に言ったって事にしておけばいいんだから」

「一応フレアも今は騎士団に在籍してる身なんだから、上からの指示には従わないと」

「でも、私もノエルも正規の騎士じゃないんだし、現地での裁量権も貰ってるよね。ていうか、この話もさつきしたでしょ？」

「……それはそうだけど」

その話し合いの中に、俺の意見が含まれていないのだが。

理性が帰った方が良さそうを通り越し、帰らないといけないにシフトし始めている。しかし、未だ隣にはノエルさんが座っていて、それも叶わない。

耳をふさいで、声を上げて物理的に聞こえなくしてやろうか。……ただ、本能的な興

味もあり、勿体なく思えてしまうのも確かだ。

「それに、もしかしたらこの子は私達以上に見えてる。なら、危ない者が居るって事は、ちゃんと知っておいた方がいいと思う」

心なしか同じような事を言われた記憶が沢山ある。

無知蒙昧な最弱一般人が急にルールから外れ、しかも君子じゃないから危うきに近づいてしまう事が多々あるせいで、色々な人に迷惑が掛かって非常に申し訳ない。そろそろ目玉を抉り出すくらいいしないとダメだろうか。でも、それだとシオンに申し訳が立たないから悩み処である。

「フレア……。分かったよ」

「ありがとう、ノエル」

ノエルさんが折れて、話が付いたらしい。

「さて、ごめんね。話がそれちゃって」

「いえ」

フレアさんが俺の方へと向き直る。

「私達の話からなんだけど。異世界についての知識はある？」

「求められる知識次第って感じですけど……」

魔界についても幽世についても、説明に必要な程度の話で、詳しい話を聞いたことは

無い。

「きんつばからどれくらい聞いた？」

「色々な種族のいる剣と魔法の世界程度に」

成程、とフレアさん。

「まあ、その程度の認識でいいかな。正直私もノエルも詳しい事は聞いてないし。来る前に聞いたこの世界の説明だって、まるで幻想のような世界って位で、殆ど分かってなかったみたいだし」

「幻想？」

「君にとつての剣や魔法と、私やノエルにとつての全面窓ガラスに覆われた大きな建物や馬も魔力も無しに動く鉄の箱は同じって事」

「ああ、成程」

立場が変われば常識と非常識は入れ替わる。狭い世の中でも起こりうるそれが、世界を跨いで起こらない筈もない。

「私達の世界にこの世界への道——というか、穴っていう方が正しいかな。それが出来たのが、三年前。以降、騎士団、無頼漢、巫人、奴隷。色々な人がこつちに送り込まれる」

「……え、待つてください。無頼漢って言いませんでした？」

無頼漢。ならずもの。ごろつき。要は悪人寄り。

「国から正式に依頼されての身だし、見張りもちゃんというから」

「それで納得するのは送る側だけですが。ていうか、そのことってこつちの世界の人はどれくらい知ってるんですか？」

フレアさんが視線を逸らす。ノエルさんの方へ視線を向けたら、こちらも露骨に視線を逸らされた。もしかして、戦争でも企んでいるのだろうか。いざとなったら、魔界とか幽世とかに匿って欲しい。

ともかく、とフレアさんが咳払いののちに告げる。露骨な誤魔化しであった。

「こつちに来ている人達の目的は二つ。一つはこの世界の調査。人、物、技術。色々調べは、持ち帰ってる。まあ、難航してるみたいだけど」

「俺の感覚だと、魔法があるなら別にいいじゃんって感じですけど」

まあ、俺の中の魔法のイメージは大体シオンがグータラしている時に片手間で使っていた物が殆ど。そのイメージの中だけでも、電化製品に出来てシオンに出来なかった事は殆ど思いつかない。電子レンジとかケトルの代わりにシオンをお願いしたこともある。まあ、そうして出来上がったレトルト食品やカップ麺は、シオンに半分持つてかれるので、殆ど頼まなかったが。

魔法には出来ず、科学にしか出来る事とか、あるのだろうか。想像できない。

「私も正直、こっちの世界で便利だなーとか凄いなーって思うことはあるけど、少し考えれば向こうでも同じ事出来るかと思っちゃうし、この前、報告会聞いてたけど、茶々入れしなくなっちゃった」

同じ事を、フレアさんも思っているらしい。

「まあ、隣の芝生は青く見えるっていうし、もう少ししたら落ち着くと思うんだけどね」
言い得て妙。死霊術とか一部特殊な魔法を除けば、大体が科学出来るとは言え、確かに魔法に憧れが無いかと言われれば否だ。

「ていうか、そんなことよりもっと大事な事があるハズなのに、誰も気にしていない」
「大事な事?」

「目的の二つ目だね。こっちの世界に紛れた者の対処。本来はそっちがメインの目的だったの」

「対処……」

物騒なワードが出てきた。

「元々、その世界の穴っていうのは意図せず偶発的に開いたものだけど、切欠はあった」
「切欠?」

「——ドラゴン」

「……」

知り合いにいる。何なら舎弟だ。俺が。

「そのドラゴンは、最早名前すら忘れ去られるほどに古くから居た神龍だった。畏れ多くもある国がその神龍に手を出し、怒りを買った。ドラゴンズブレス。高エネルギーの集合体である神龍の一撃は、国を滅ぼし、世界に穴をあけ。そして、神龍はその穴へと姿を消した」

「……」

いやー、手を出してきたんでちよつと本気で息したら、穴開いちやつたんですよねー。なんか、そんな話を会長ドラゴンからかつて聞いたような気がする。その頃は見えていなかった頃なので、てつきり天使と喧嘩してやり返したのか程度に考えていたのだが、もしかするのだろうか。

「えっと、穴に消えたんなら、別にそつとしておけばいいのではないでしょうか?」

「それが叶うならそうしたいけど、怒りを買った以上は、最低限動向は注視しておかないと。もしかしたら、未だ怒りを覚えていて、私達の世界で暴れる為に力を溜めているのかもしれないし、この世界でも暴れないとも限らない」

「……そうですね」

全くもつてその通りだ。返す言葉も無い。

とはいえ、なんとなく事情を察し始めている俺の視点だと、今の所、大丈夫な気がし

た。結構、今の生活を気に入って居そうだし、マブダチの天使が居る。彼女が居る限りは、そんなことしないだろう。

「それに」

とフレアさん。

「さつきはああ言っただけで、実は無頼漢が数人、見張りの元から逃げ出してる」

「ダメじゃねーか！」

ドラゴンよりよほど危険な気がする。

「油断した。まさか逃げるとは思ってた」

「……まるで逃がしたのがフレアさんみたいな言い方してますけど」

「……」

再び視線を逸らされる。嘘だろお前。

「……その人はね」

そう言ったのは、隣に座っていたノエルさん。視線を向ければ、空の井の傍で頭を抱えている。

その姿はまるで、牛丼を食べきってしまった事にショックを受けているようにも見えるが、覗けた表情から流石に違うことを察した。

「実は私の小さい頃からの知り合いなの。元々は国で海軍に属してて、それこそ怪傑と

か鬼才とか英雄とか褒めたたえられてただけど……ある日急に海賊になるって言って海軍辞めたんだよね」

「……」

笑うところだろうか。

「ただ、海軍が薄給でお金が無かったから、海賊になるって言いながら船を持ってないし、略奪とかしてたわけでもない。お金を貯める為に安く住める山小屋に住んでるだけの人だったんだけど」

「それで海賊名乗ってたなら、大した面の皮ですね」

「そもそも海賊になるつもりなら、そのまま海軍の船を奪ってしまえば良かったのではないだろうか。」

「この依頼を無事にこなしたら、船を渡すって事で話は通ってたし、立場は無頼漢ではあるけど言っちゃえば身内みたいな感じだったんだけど……ある日急に他の無頼漢——というか、その人の部下を連れて脱走しちゃって」

身内と思って油断してたら、裏をかかれたという事らしい。

しかし、話を聞く限りでは脱走するメリツトもなさそうだし、そもそも脱走しそうにないが、何故逃げたのだろうか。

「……でもまあ、それも大丈夫そうな気はしますね」

ドラゴンはずわがな、件の海……いや、山………あー………賊も正直危険を感じない。

多分、こつちに来ている調査隊の人達も、今の俺と同じような考えに至ったのだと思う。

「それで、自分にどうしろと？」

長く説明を聞いて事情は分かったが、ちよつと目がいい程度の最弱一般人には随分荷が重そうな話だった。賊相手ですら、人質になる未来しか見えない。

俺の言葉に、話が早いと、フレアさん。

「できれば探し人を手伝つてほしい。君ならもしかしたら、正体を欺く魔法を使っているかもしれない海賊も、ドラゴンが人間に化けていても、見えるかもしれないから」

「お断りします」

割と予想通りだったフレアさんの言葉を、一蹴する。フレアさんが命令口調だったとしても、同じように断った。

「俺はたまたま見えるようになったただけなので、意図的にこの目を使う事は考えていません」

「見えるようになったことに、何か意味があるのかもしれないよ？ 世界を救う、みたいな」

「そういう英雄的要素はお話の中だけで充分でしょう。俺の目は偶然と優しさの産物でしかありませんから。それに、約束もあるので」

「……そっか」

「すみません」

その約束をしたのはドラゴンなので、多分こういうことでいいのだと思う。自分の平穩な生活を壊すな、という事だろう。

フレアさんも、言葉通り強要するつもりは無い様だった。あまりにすんなり話を通るものだから、返って裏があるのではないかと疑ってしまう。

「あとで別の条件を出すのは無しですからね」

「しないしない。これはきんつばを助けてくれたお礼に、君に役立つ話を教えたかっただけだから。まあ、出来たら手伝ってほしかったけどね」

「……ありがとうございます。すみません」

「どういたしまして。気にしないで」

フレアさんが、タクトのように指を振る。

すると、見えなくなっていた光の鱗粉が数秒垣間見え、消える。

「これで人払いもおしまい。私もお腹すいちゃった。君も何か食べる？　口止め料って事にしておくけど」

「……いえ、帰ります。明日は学校ですから」

窓の外はホールから駅へと続く道。

ライブは既に終わっているようで、続々駅に向かう人の波が出来ていた。

辟易するが、時間が遅くなればもつと混む可能性もあるし、そもそも帰るのが遅くなってしまうから、帰るなら今だろう。

「そっか。それじゃあ、また」

「はい。失礼します」

「よいしょっと」

ノエルさんが、隣の席を立つ。礼を言つて、席を立った。

「さようなら、フレアさん、ノエルさん。きんつばも、じゃーな」

一礼。きんつばには手を振ると、きんつばも振り返してくれた。

その様子を見て満足して、店を出る。

わらわらと歩く人の波にちよつとビビっていると、見知ったシルエットを見つけた。

「フブキ部長」

「ん？ おー、後輩君。また会ったね」

「そうですね。お疲れ様です」

「お疲れー。こんな所でどうしたの？」

「その牛丼チェーンで夕食です。荷物持ちましょうか？」

「ありがと。じゃあ、こっちお願い」

渡されたのは、駅前で見かけた時もつけていたシヨルダーバッグ。

明らかにライブ会場で購入したと思しき紙袋の方が大きいのだが、そちらは大事な戦利品だからだろう。自分の尻尾ごと、大事そうに抱えていた。

「楽しかったですか？」

「勿論！　なんと新曲発表もあつたんだよ！」

それは、なんと。

「楽しみにしておきます」

「うんうん。いい曲だったから、楽しみにしておくといいよ」

満足げなフブキ部長。新曲出たなら、やっぱり行きたかったなと、ちよつとだけ後悔。

「発表時期とか」

「内緒」

「ぐぬぬ」

悪戯っ子のように笑うフブキ部長の前に、歯噛みする。いや、待ってれば発表はされるだろうけど。やっぱり早く聞きたい。帰ったらネットで情報集めてみようかなとそんなことを考えながら、それ以外に何があつたか聞こうとするよりも早く、フブキ部

長の眉が徐々にひそめられていく事に気が付いた。

「フブキ部長？ 何かありましたか？」

ライブで、嫌な事があったとか？ しかし、それにしては、最初はテンションが高く、ライブが楽しかったと全身が訴えていたと思う。

「……ダメ。やっぱり気になる」

そう言ったフブキ部長の顔が俺の方へ寄せられ、肩口の匂いをくくんかかれる。周りの視線がちよつと痛くなる。

「フブキ部長？」

「なんか昼にあった時には無かった人間じゃない別の匂いがするけど。何かまた別の事に巻き込まれてない？」

その言葉に合点がいく。先程フブキ部長が匂いを嗅いでいた場所は、きんつばが座っていた場所であつた。

「断つたんで」

それに連絡先の交換とかもしていないし、接点は殆ど残っていない筈。

「本当に？」

「はい」

フブキ部長に頷いて返す。フブキ部長は顔をしかめたままだ。信じて貰えていない

かもしれない。

「念押しするけど、何かあった時、ミオに頼ることだけは躊躇わないって約束して。ミオの方が君より強いし、何なら、君の事抱えて、走って逃げることでだって造作も無いんだから」

「……いや、俺だってミオ先輩の事を抱えて走れますし」

「なんでそこで張り合ったの？」

そんなことを聞くフブキ部長は、悲しそうな顔をしていた。

「茶化さないで。心配なの。お願いだから、ちゃんと守ってね」

「……はい。分かりました」

「絶対だからね」

「はい」

ライブ終わりのフブキ部長にこんな顔をさせたくなかった。

胸いっぱいの不甲斐なささと申し訳なさに、怒りと悲しみが湧く。

「ごめんなさい、フブキ部長」

「うん。謝らなくていいよ。それより、どんなことがあったのか、教えて？」

「……あー」

口止めはされたが、口止め料は……貰ってないからいいか。流石に何でも話せない

が、フブキ部長を納得させるくらいは、話した方がいいだろう。とはいえ、さつきもそうだったが、ちらほらと獣耳や角のある人が居る。何処に耳や目があるか分からない。ここで話すのは不味いと思えた。

「説明は明日の部室でもいいですか？　ちゃんと話すので」

俺の言葉に、フブキ部長は暫し顎に手を当て考え込んでから、分かったと返して来る。次いで。

「分なら、明日の予定だった私のライブ感想に今から付き合つて貰おうかな」と言った。

「勿論です」

頷いて返す。

「徹夜で」

「もち——はい？」

頷いて返し——切れなかった。

フブキ部長の悲しそうな表情が晴れる。

それはいい事なのだが、物騒な単語が聞こえた気がした。気のせいであることを望んだが、叶うことはなく。

「じゃあ、コンビニに寄つて夜食買ってこ。お腹空いちやっだし、夜は長いからね」

「あ、しかも泊まりなんすね」

明日学校ですよという当たり前すぎるツツコミは当然流され、
帰宅の途中にコンビニで夜食を買ったフブキ部長に俺は家へと連れ込まれる。

今から寝ようとしていたらしいミオ先輩も電話で呼び出され、

俺とミオ先輩は若干舟を漕ぎながらも、窓の外が白み、小鳥のさえずりが聞こえ始めるまで、フブキ部長のライブ感想会に付き合っただった。

羝羊触藩

メモを見る。そこにはチラシを元に、昼休みを使って作成された買い物コースと購入品目が書かれている。

昔は紙で届くのが一般的だったチラシも、今ではネットで確認出来るようになったのだから、楽なものだ。昼休みに教室で、スマホを見ながら決めた。たまたま大空に見られ、「主婦かよ」と若干引かれたのは、記憶に新しい。

俺だって、少量の買い物ならこんな事しないが、今日は個人で換算するなら一月分くらいを纏め買いつける必要があるから、流石に作らざるを得ないのである。まあ、この通りに買った事なんて殆ど無いが、やはり基準があると無いとでは効率も変わる。

普段ならもうちよつとこまめに買うのだが、今月は色々あつて細かい買い物のタイミングが取れず、現在冷蔵庫の中は、昨日振舞つたるしあとちよこ先の分の夕飯を最後に、すつからかん。

作り置きしていた総菜はあつたが、それも今日の朝食と昼食で食べきつたから、冷蔵庫の中には昆布出汁と味噌しか残っていない。買い物をしなければ今日の夕飯は具無し味噌汁と白米。

「まあ、一食位ならそれでも……」

行儀が悪い自覚はあるが、それでも味噌汁を白米にかけて食べるのは結構好きだ。お茶漬け感覚で食べ進めてしまうから、ついお代わりしてしまう。だが、流石にそれが三食連続は辛い。普通におかずが食べたいし、ちよつと想像したが、具無し味噌汁はやはり嫌である。ワカメくらいは欲しい。

それに——そろそろ目が変わってから一か月。そろそろ、俺の目をどうにかするべく、魔界へ調べ物に帰っていたシオンが戻ってくるはずである。

そんなシオンが戻ってきた時に、俺が具無し味噌汁と白米を食べていたとしたら……。

考えずともわかる。一生弄られる。馬鹿にされる。飯抜きにしてやれば数日口を噤むだろうが、その後はまた思い出したように同じ事を始めるだろう。慣れているとはいえダメーシが無いわけでは無いので、俺の精神安定の為に、普通の夕食は必須——。

「どうぞー、新装開店でーす」

思考を遮るように、言葉とともに差し出されたチラシを、思わず受け取る。

受け取った俺に一瞥もくれず、チラシ配りのお兄さんは別の人へとチラシを配る。

なかなかの手に感心しながら、俺は手元のチラシへ視線を落とした。

焼肉店のチラシだ。ファミリー層向けではなく一人焼肉のお店のようで、一人一つ、

小型グリルがあるらしい。

目玉商品は、ジンギスカン。羊肉である。どうやら、このチラシを持ってお店に行く
と、割り引いてくれるらしい。

「……何故？」

北海道にいた頃に食べた程度の記憶しかないが、ジンギスカンって変な形の鍋で焼く
ものではなかっただろうか。それとも、最近は網焼きが流行っているのだろうか。

正直、ちよつと癖のある味がその頃の俺の口に合わなくて、あまりいいイメージが無
い。

書かれている値段目安を見る限り行けなくもないが、そんな事より買い物である。チ
ラシを畳んでポケットにしまい、メモに書いた最初に行く店の方へ歩き出そうとし、不
思議な歌声が耳に届いた。聞いたことのない言葉で、意味が分からない。歌声と分かっ
たのは、声に合わせて弦楽器の様な音が聞こえてきたからだ。

視線をそちらへ向ける。

広場の一角。両手の指で数えられそうな程だが、それでも足を止めて聞き入っている
らしい人だかりの向こう側に、音源。淡い金髪の両脇に巻き角。医師の角はぐるぐると
もつと巻かれているのに対し、彼女の角は一卷にも満たない。顔立ちは幼さの残る物。
白とピンクを基調とした服にはもこもことした衣装がふんだんに盛り込まれていて、一

見すると羊のコスプレをして演奏し、歌っているように見える。驚くべきことに、あの角が見えているのは俺だけではないらしく、「あの角かわいー」みたいな話し声が聞こえた。

ただ、あの角が本物であることに気が付いているのは俺だけだろう。一か月の慧眼をもってすれば、真偽を見極めるなど容易い。容易い事はいいのだが……、なんであの子は正体を隠す努力をしていないのか。フブキ部長やミオ先輩と違い、本来の姿が別にあるという感じではない。真正正銘、あれが彼女本来の姿なのだろう。それなら、経験則として角は魔法とかそう言った何かで隠そうとしているはずだ。

変だなーと思いつつながら、奏者へ近づく。とりあえず、正体を隠そうとしていないのなら、見えていることがばれて大変なことになることは無さそうだ。

近づき、それなりのポジションを陣取る。他の観客も入れ代わり立ち代わりで一度は足を止め、演奏を聴き、暫くして離れていく。その際、彼女の足元に置かれた箱の中におひねりを入れる者も少なくない。中にはお札を入れている者もいた。

ちらりと覗けば、今日の俺の買物予算以上の額は余裕で入っている様子。うらやましい。

聞きほれていると、ぴぴーとホイッスル。

「はいはい。みんな離れて。解散しなさい」

振り返れば、お巡りさんが一名、笛を吹きながらこちらに近づいていた。

「ほら、君も」

「あ、いや」

ちらりと彼女の様子を窺えば、何事だろうと、不思議そうに首を傾げていた。良く分かかって居ないらしい。

観客は気づけば散り散りになっていて、残っているのは俺だけ。声をかけても移動しない俺を、面白がっている野次馬程度に考えたのか、溜息をついたお巡りさんは俺の脇を抜けて、少女の方へ行く。

「君、何やってるの。ちゃんと許可取った？」

お巡りさんの言葉に、彼女は？ マークを飛ばしている。路上ライブに許可が必要なのは、駅前広場に置かれた注意喚起の立て札に書かれてはいるが、彼女がそれを読む事は、この様子を見る限り無理だったろう。

「ちよつと、聞いてる？ 名前は？ どこに住んでるの？」

答えない彼女を無視していると捉えたのか、お巡りさんの口調が僅かにきつさを帯び始める。

意味が分からずとも、言葉の調子から怒られている事を悟ったのか、少女は僅かにたじろいだ。

その動作を、お巡りさんはやましい事があると捉えたいらしい。実際、無断ライブの時点でやましい。

「……まったく、ちよつと交番まで——「あの一！」」

時間がかかると思ったのか、少女を交番まで連れて行こうとするお巡りさんを止めるべく、声を上げる。

訝しげな視線をこちらへ向けのお巡りさんに、笑って返す。

「彼女、自分の家にホームステイしてるんです」

「ホームステイ？」

「はい。それで、今日は街の案内をするのに、放課後駅前に集合にしてたんですけど、自分が来た時にはもう演奏してまして」

「何ですぐ止めなかったの」

「少しくらいいいかなって」

「君ねえ」

——それからしばらく、怒られた。いつそ交番に御呼ばれた方が良かったのだが、お構いなしに駅前で説教である。同じ学校の制服もちらほら見えた。明日学校で取り調べとかされないだろうか、不安である。

とはいえ、怒られた内容は俺の態度の方で、彼女については事情と初犯であるという

こともあつて、今回は何事も無く終わった。彼女には俺からきちんと注意しておくようにと言ひ渡されたし、何かあつたら素直に謝つて撤収すればいいというアドバイスマで貰つてしまった。

立ち去るお巡りさんにペコペコ頭を下げて見送り、少女の方へ振り返る。逃げることは無く、少女はその場に居た。

お巡りさん以上の問題が、彼女である。

「えつと……言葉通じる？」

「……」

きよとんと首を傾げる彼女。そして。

「*****」

「わっかんねえ」

何語だろう。判断出来ない。

幾つかの異世界に接触し続けていたけど、何だかんだ言葉が通じていたから、こういうのは初めてだ。

俺の反応に、彼女も言葉が通じていない事は分かつたのだろう。困つた様子で首を傾げ、俯き、何かに気が付いたのか屈む。つられて視線を下げると、屈んだ彼女は、箱の中に入っていた十円玉を一枚取り上げた。

本当になんだ。今度は俺が戸惑う。受け取らない俺に、少女は再び屈み暫し悩んだ後、渋々といった様子で五円玉を取り出して、先の十円玉と合わせて俺に差し出してきた。合わせて十五円。意味の分からなさも五割増しだ。何で彼女は、持ってけ泥棒と言わんばかりの雰囲気醸し出しているのだろう。

「……別に要らないけど」

「*****」

俺の言葉に、彼女は絶望したような顔をして屈み、追加の五円玉を持ち上げた。二十円である。

流石に意味が分かった。これはお礼で、最初は十円。受け取らないから額が足りないのかもと思い、追加。そしてさっきの俺の言葉は、たまたま似た音があったのだろう、値を吊り上げる言葉に聞こえたらしく、更に五円で計二十円。

五円が四枚で『よいご縁』という語呂合わせがあるのはお賽銭だったか。そういう意味なら良かったが、うぎぎと歯ぎしりしそうな顔をしている彼女を見ていれば、そうでもないことは一目瞭然だ。要らないと伝えてやりたいが、そのまま伝えると値を吊り上げる事になりかねない。他の言葉を使おうにも、それが地雷か分からないから難しい。

言葉が通じるといふ事へのありがたさを再認識しながら、どうしたものかと二十円と少女を見る。

少女の顔は、「え、まだ足りないの?」と言わんとする表情になっていた。多分、お金の価値も分かって居ないのだろう。この世界に来て間もないのかもしれない。

兎に角、要らないということ伝えたい。幸い、動作は似ている。分からないときは首を傾げているし、表情から感情を読めるということは、感情と表情の関係性も限りなく同じ。そうふんで、困り顔——をしているつもりで、両の掌を相手に向け左右に振りつつ、首を振る。困るから要らないという気持ちを動作に全力で込める。

結果としてその想いは届いたらしく、不思議そうな顔をしながらも頷いて、彼女は二十円を箱へと戻した。ボディランゲージ凄じい。義務教育に取り入れた方がいいのではないだろうか。

さて、次は自己紹介なわけだが……終わった。ボディランゲージとは無縁の生活を送ってきた自分には、自己紹介をジェスチャーでやり切る自信は無い。

やはり神頼みするしかなさそうだった。合掌して、天を仰ぎ。
意外なことに、その望みは秒で叶えられた。

「がっ!!」

側頭部に衝撃。倒れそうになるのを、踏鞴を踏みながらも気合で耐える。

側頭部にはもこもことした感触。掴んで引きはがして顔の前に持つてくれば。

「……またはぐれたの?」

ふるふると首を振る。パンダの装いの精霊。
きんつばであった。

観光と遁走

当たり障りのない名乗るだけの俺の自己紹介。面白みのないそれへの彼女の返しは。「こんばんどこどこー！　世界を旅する脱畜吟遊詩人羊！　角巻のためです！　わためつて呼んでね！」

だった。俺も何か新しい挨拶を開発した方がいいだろうか。こんこんきつねとかこるしみみたいなやつ。

「とりあえず人なのか羊なのかだけはつきりしてくれん？」

「羊です！」

「羊か」

「羊の獣人です！」

「大体分かった」

以上、言葉が通じるようになった直後のファーストコンタクトである。

お巡りさんに謝った時から、時間は少し経っている。俺は肩の上にきんつばを載せ、稼いだお金を肩から下げたポーチへ入れたためと少し歩き、場所を駅前広場外れのベンチへと移していた。公衆トイレから少し離れたそこは、日当たりが余り良くないから

か人が余り寄らず、内緒話にはうってつけだ。

会話問題については、きんつば大先生のスペシャルな魔法でどうにかなった。相手の話した言葉を自分が分かる言葉に変換する翻訳の魔法である。先日いきんつばやフレアさん、ノエルさんとの会話が成り立っていたのはこの魔法のおかげらしい。今も俺とわためはいつも通り喋っているのだが、先程までと違い、相手の喋っている事が分かる。

まあ、意味は分からないが。脱畜って何だろう。脱サラみたいな感じだろうか。

因みに、きんつばは迷子ではないらしい。フレアさんとノエルさんの買い物が高いからふらふらしてたら、帰り道が分からなくなっただけとの事。残念ながらおかげによつてアツプデートされた俺理論だと、それは迷子なのだが、きんつばの迷子理論ではそうではないようなので、それを尊重する。

ただ一緒に探してやる必要はありそうなのでそれだけ約束し、今は一先ずわためである。

「わためはこの世界に来たばかりなのか？」

「この世界？ てつきり、ここはアルメラント帝国の首都だと思っただけで」

「……………」

どこだろうか。世界の国名なんて母国とその他メジャーな国名を数個覚えている程度の俺には、全然ぴんと来ない。少なくとも、俺が今いる国の名前ではない事だけは確

かなのだが。

困っている俺の髪がちよいちよいと引かれる。きんつばであった。

「どうした？」

尋ねられたきんつばが語るには。

「滅んだ？」

フレアさん達が探しているというドラゴン。そのプレスによって吹き飛んで大穴に変わった場所。そこが、わための言うアルメラント帝国の首都らしい。

「ええ!! 滅んじやったの!!」

驚くわため。どうやら知らなかったらしい。

「何か用事でもあったのか? 知り合いがいたとか?」

「……観光したかった」

「お、おう」

何ともないらしいので、何よりである。

「……じゃあ、此処何処?」

「……えつと」

かくかくしかじか。

「成程……大体わかった」

「なら良かった」

イントネーション的に、理解度としては分からんことが分かった、といった所だろう。最初の俺と同じである。

「帰りたいなら、このパンダの連れに言えば帰れると思うけど」

俺の肩の上で胸を張るきんつばを指さす。わための視線がきんつばの方を向き、それから首を横に振った。

「異世界に来る機会なんて無いから、観光したい。ここにきてから少しだけ見て回ったけど、楽しそうだし」

「そっだよな」

目に見えてうきうきしている。俺だって、仮に異世界に行つて危険が無いなら、色々見て回りたい。自らを旅人と名乗ったのだから、わためも同じ口なのだろう。一番ネツクだった言葉問題は解決して——はて。

「なあ、きんつば。お前さん、初めて会った時に俺に翻訳の魔法を使ったんだよな？」

俺の言葉に、きんつばは首を縦に振る。

「ならなんで、わための言葉、最初は分からなかったんだ？」

その問いへの答えは単純で、魔法の効果が永続ではなく、時間経過で無くなるから、との事。自分で自分にかけるのなら自動的に更新されるらしいが、人によってかけられた

ものは、時間が経てば薄れて消える。きんつばの翻訳魔法は、この世界換算だと大体三日程度で消えるらしい。これでも長いのだと、最後に自慢された。

「なら定期的にかけて貰わないといけないのか……わため、きんつば持つてく？」
「持つてく」

「!?」

がつしりしがみつかれ、ブンブン首を振られる。冗談だから安心してくれ。

「あとは、もし観光するならお金の価値とか常識とか、色々覚えないと」

少なくとも謝礼を出すのに五円とか十円とかだと、人によつては怒りだしかねない。金勘定くらいは覚えないとだめだろう。

俺の言葉に、ううとわためが顔をしかめる。

「……めんどくさいい」

「いや、そんなこと言われても。てか、向こうで旅していた頃もそうだったんじゃないのか?」

「私が旅してた辺りはお金共通だったし、お金が使えない農村とか硬貨の違う場所でも、物々交換とか演奏とかでどうにかなつた。常識については……空気読みて感じかな」

「おー」

「なんかすごく旅してると感じてるって感じがするエピソードだ。空気読みはちよつとあれだが。旅好きなの?」

「旅って程の物でもないが。色々見て回るのは好きだよ」

「なら、君がわためと一緒に来てくれればいいんだよ。そうしたら、お金も常識も解決するし」

「残念。この辺は地元だし、俺には学校があるから無理」

「……つまり、宿代が浮くって事だね。それに教えて貰えるし」

「違うよ。なあ、違うって。違うから。ちーがーうー」

必死に声をかけているのだが、都合の悪い事は聞こえないようになっていているらしい。先の見通しが付いたとばかりに、わためは嬉しそうにベンチを離れ、辺りをきよろきよろしながら広場を歩き出す。

このまま逃げ出してやろうかと思つた矢先、わためが振り返り、「あれ何?」と何かを指さす。そちらを見る。赤い箱が置かれていた。

「自動販売機」

「販売? 何か売ってるの?」

「お金を入れてボタンを押すと、飲み物が出てくる」

「へー!」

ばたばたと走り寄って、ポーチを漁りだすわため。
ガサゴソ漁り、何かを取り出し、そこで止まる。

「……どうしたらいいの?」

「そのチャレンジ精神は認める」

近づき、自分の財布を取り出す。

「何が飲みたい?」

「普段飲めなさそうなやつがいいな」

「そっちにどんな飲み物があるかなんて知らんのだが……。甘いけど痛い奴でいい?」

「何それ面白そう! 飲みたい!」

「無理そうなら変わるから、言ってくれ」

というわけで、赤いパッケージがひときわ目の引く、炭酸飲料を購入する。

出てきたペットボトルをそのまま渡すか悩んだが、大惨事になることが容易に想像づいたので、キャップを外して渡す。

「冷たい……でも、これなんの容器? 薄くて透明で凄く軽い。高そう。でも安っぽいな」

渡されたペットボトルを、しげしげとわためが眺める。正直俺としては至極当然な当たり前の品であるから、その反応が新鮮で、本当に別の場所から来たのだなとそんな感

想を抱く。

飲み口に口をつけ、わためは恐る恐る中身を少し、口にする。舌先を少し濡らす程度では、甘さを感じる位だろう。

実際わためもそうだったようで、少し首を傾げながら、もう一口。さつきよりも少し多めに——なんて慎重な真似をせず、一気に傾けて炭酸飲料を啜る。

「あ」

直後、目を白黒させたわためが、ペットボトルから口を離れた。少しむせたのか、けほけほとせき込む。

「大丈夫か？」

「……な、なんか口の中でばちばちした」

「そりや、そういう飲み物だからな。一気飲みするもんじゃない」

「そうだね」

こくりと、今度は丁度いい量を飲む。

「結構好きかも」

「そりや良かった。はい、キャップ。今はいいやつてなったら閉めてな」

「はい。これも軽いや。それに凄く細かい。職人芸だね」

「大量生産品だけでも」

「それにこの販売機も凄い。中にいる人大変じゃない？」

「中には誰もいないが」

本当に新鮮。それにいつも驚く側だから、驚かれる側である事の違和感が少し出てきた。

自分の分は無難にお茶を買う。少し飲んでからきんつばが飲みたそうにしていたので、そのままペットボトルを渡す。

そのままきんつばが満足いくまで暫し待ち。帰ってきたペットボトルのキャップを閉めて、鞆にしまう。隣ではわたためも俺と同じようにキャップを閉めていた。ぎゅうぎゅうとしっかりと閉めて、肩から下げたポーチへしまう。

「待って」

「何？」

「何でそのポーチに入るの？ サイズ違うくない？」

「え？ うーん……そういうものだから？ ほかにも着替えとか入ってるよ」

「……へえ」

旅してるにしては随分小荷物だなと思っていたが。異世界ってすごい。あれがあれは面白い物問題解決しそうだ。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

「ふーん……あ！ あれなに?！」

指さした先はバスターミナル。停車しているバスに興味を持ったらしい。

「すごい。車輪がついてるって事は動くんだよね? でも馬が引いてる感じじゃないし、魔法で動いてるの?」

「ガソリンじゃないかな」

「ガソリンって?」

「燃料」

詳しい技術は知らないから、答えようがない。

見ている前で、数名が乗り込み。やがてバスが走り出す。

「乗合馬車みたいな感じなのかな? 私も乗れる?」

「お金払えば乗れるけど」

「乗る?」

「乗らない」

「えー」

ちえーと言いながらも、一先ずの興味は薄れたようで、きよろきよろと辺りを見渡し始める。

そろそろフレアさんとノエルさんを探しに行きたいのだが、わための好奇心は留まるところを知らない。気持ちは分かるし無理強いたくもないのだが、わために付き合っていたら多分このまま完全に日が暮れ、フレアさんとノエルさんを探せず、買い物に行けぬまま帰宅するしかなくなる。

「……わため」

「なーに？」

「すまない。用事があるから此処で失礼するわ」

「付いていくよ？ 家の場所、分からないし」

「あ、はい」

本当に泊まるつもりらしい。まあ、移動をするという目的は果たせそうなので、それはいいのだが。

泊めるとなると、騙し騙しだったエンゲル係数問題が今度こそ勃発しそう。

「あ、ちゃんと家賃は入れるから安心してね」

「マジかよ。幾らでも滞在してくれ」

というわけで、移動開始である。

今回はきんつばも完全に道が分からないという事は無く、移動開始して暫くすれば、

見覚えのある場所に出た。

距離的に大したことは無く、俺だけなら二十分程だろうかという距離ではあったが。

「あの赤い箱何？ 自動販売機の親戚？」

「ポスト。手紙を届けてくれる」

「地面凄いね。一枚岩だ。さっきの場所は同じ形の石が何枚も敷き詰められてたし」

「地面はコンクリート。何枚もって言ったけど、マイル位ならあるだろ？」

「割れちゃうから地面に敷いたりしないよ。帝国首都みたいな格式高い街とかなら別だ
と思うけど。ここはこの国の首都なの？」

「いや、一地方都市だな」

「あんなでっかい建物あるの？ しかも全面ガラスだよね」

「そうだな。でも、あそこは別に位が高い人が居るとかではないが。働いてる人の詰め
処」

「じゃあ、王様はどれだけ凄い建物に住んでるの？」

「そこまでは知らないけど、そもそも王制ではないな」

あれ何、これ何の質問からとんとん次の質問に派生していくものだから、中々先に進
まない。

こいつちがフレアさんやノエルさんを見つける前に、向こうがこちらを見つけれそう。

わための事はなんて説明しようか。野羊？

興奮冷めぬときよろきよろと歩くわための脇で、顎に手を当て悩む。

そんな折、ちよいちよいと髪を引かれた。視線をきんつばの方へとむける。

周囲には歩道を行く人達。わためが誰よりも視線を引いているから問題は無さそうだったが、それでも人目があるので声はかけづらい。分かって居るからか特に反応を見せることなく、きんつばは何かを示した。

顔を上げる。きんつばの示した先にあつたのは、カーブミラー。俺やわための姿は見えるが、きんつばの姿は鏡に映っていない。それが見せたかったのかと思つたがそういうわけは無いらしい。

「……いつから？」

少し離れた処に、男が三人。両脇の二人は普通だが、中央の大男の人相は、余り良くない。見かけだけで判断するなら、悪人寄りの風貌だ。

俺の言葉にきんつばが答える。駅前を離れてすぐらしい。全然気づかなかつた。

「知り合い？」

答えて曰く、三人の内二人は知らないが、中央の一人は逃げ出した無頼漢。ノエルさんの身内ではなく、部下の一人との事。

付けられているのは、果たして何故だろうか。身内の方は自称海賊らしいが、特にそ

れらしい真似はしないと聞いた。てつきり部下もそうなのかと思っていたが、違うのだろうか。……そもそも付けられている、という考えが違う可能性もある。

「わため」

「なにー?」

「ここ入ろう」

俺が指さしたのは、六階建てのテナントビル。昨今の不景気に負けず、全ての階が何かしらの店舗で埋まっている。

「入る!」

わーいと、駆け込むわためを追って、俺もビルへと入った。

一階にはアンテナショップの様な小さなテナントが幾つか。その中にある、携帯会社のショップに展示されたスマホに目を丸くしているわため。

「人が入ってる……訳じゃないよね。じゃあ、絵が動いてる? でもすつごく綺麗。遠見の魔法でもこんなに精彩に見えないよ」

「後で幾らでも見せてやるから、今は進んでくれ」

動きたくなさそうなために申し訳なくなりながらも、強引に手を引いて進む。

数分と立たず、逆側の出入り口。そのまま建物を出て、曲がりながら建物の中を見れば、男達もビルの中に居て——目が合った。

流石に偶然じゃない。結論付け、わための手を取り、走り出す。

「何々」

驚くわため。だが、数歩踏鞴を踏んだのみで、その後はしつかりと走り出す。

背後の状況は、きんつばが教えてくれる。男三人、未だに追いかけてくるらしい。

きんつばの実況はしつかりとわためにも届いているようで、「わ、私また何かしたかなー？」と、緊張感の抜ける声でそう言っている。つまり、わためには心当たりがないらしい。そして、それは俺も変わらない。よもや総合格闘技や e—s p r t s 部が異世界進出しているはずもないだろう。

「撒ければ楽なんだが厳しいか」

「もつと速く走れるよ?」

「俺がこれ以上はきつい」

逃げ足を鍛えると決めたあの日の誓いは、未だに果たされていない。

直線ではいずれ追いつかれるだろうし、裏路地などを使い細かく曲がつて撒くしかないか。

「きんつばはここまで来ればもう大丈夫? 大丈夫なら帰りな」

巻き込むわけにはいかないときんつばにそう告げるが、しがみついたままきんつばは首を横に振り。寧ろ、任せろと言わんばかりに自分の胸元を叩いた。そして、何故か人

で言うこめかみに相当しそうな辺りに手を当てて、うなうなと何事かをしだした。

きんつばと出会ってから意味が分からないことは多かつたが、悪かつた事は無いので信じるとして。

「……タロ、頼む」

『ワン！』

一鳴き。その体を金色に輝かせたタロが、遠吠え。

数秒置いて、着信。スマホを取り出し中身を流し見て、返信する余裕は無いので仕舞い。指示に従う為に右折。

一瞬背後を窺えば、男三人は変わらず追いかけてきている。真ん中の大男は携帯でどこかと連絡を取っている様子だった。仲間を呼んでいるのだろうか。

走りながら周辺を見渡し、脳内地図から現在地を算出。それから都合の良さそうな場所を思い出す。

「こつち」

行先はホールの方だ。ホールがあり、そこに乗つかる形で徐々に発展をしているとはいえ、まだまだ人は少ない。

今日のホールの予定は覚えていないが、ホールに隣接する形で自然歩道もあるし、移動を続ければ多分人気のない場所は見つかるだろう。こういう時に人気のない場所に

行くのは愚の骨頂ではあるが、呼んだ助っ人の指示で、人目が無い方がいいとの事だった。それに従う。

ああ、しかし。

「大丈夫？」

「……きつい」

スタミナはどうに切れ、根性で走っている状態だ。これ、逃げ切る前に捕まらないだろうか。

「いざとなったら、俺の事はおいて逃げてくれ」

「分かった。任せて」

「もうちよつと躊躇え」

別にいいけど。

「待て、貴様等！」

「む？」

「ん？」

背後から、声。走りながら、後ろの様子を窺えば、叫んでいるのは大男だった。待てと言われて待つなら警察はいらないというのは、さて、誰の言葉だったろう。

「何で追いかけてくるんですかー！」

わためが、そう返した。いい考えだ。誤解だったら、此処で解決出来れば、追いかけてこも終わりである。

「いいから、逃げるのを辞め、此方に来い！ 獣人！」

「ひいー！」

怒声が返ってきた。

「怖い人！ 怖い人だよ、絶対！ きつと奴隷商とかそういう人たちの仲間なんだよ！」

「奴隷商？ 捕まえて売るつもりって事？」

「そう！」

「ふむ」

流石にこの世界に奴隷商という商売があるとは思えないが。異世界人のわためが言うなら、異世界には全員が認知する形で奴隷商という商売が成り立っているのだろう。

その関係者が向こうの目の届きにくい異世界で商品集め、というのは考えようによってはありえなくもなさそうではあるが。ちよつとピンとこない。合法ならそんな必要ないし、非合法なら、そもそも此方の世界に来れないし、持ち帰るのも一苦勞で、労に見合うとは思えない。

ただ、一先ず会話は成立しない事は分かったので、逃げることに専念し、角を曲がる。直線上に、ホールが見えてきた。根性も正直限界で、騙し騙し。

息を整える余裕は無い。気合を入れ地面を蹴ろうとし。そんな俺の脇を、わためが抜ける。

掴んでいた手は離れていて、代わりに手首をつかまれる。

「ファイト！ 頑張つて！」

グツつと引かれ、強引に走らされる。もつれそうになる足を、転ばない為に何度も前に動かした。

「いざとなつたら置いてけつて」

「まだいざとなつてない！ ていうか、本当に置いていくわけないでしょ！」

「お、おう」

正直置いていかれると思つてたと言つたら、流石に怒るだろうか。

苦笑いで誤魔化しながら、一步踏み出す。その足に、不思議と力がこもった。

続けて一步。その足も同様だ。

気づけば、体に僅かな余裕が出てきた。

何故かと思えば、肩の上にいるきんつばが、俺を応援するように、両の手を構えている。こめかみをぐにぐにする作業は終えたらしい。もしかして、体が軽くなつたのはきんつばの魔法によるものだろうか。

後ろからは変わらぬ怒声。あんな大声を出しながら、良く走れると感心してしまう。

道路を渡り、ホールの敷地に入った。行事のポスターを張る掲示板に、今日の日付で書道のセミナーのポスターが張られている。まだ何かしているらしい。

「わため。左折してくれ」

「分かった！」

木々の間を通る自然歩道に入り、変わらず走る。背後を窺えば、男達も同じく歩道へ侵入するところであった。

時間帯のせいだろう。普段は散歩する人でもいそうなものだが、今は人氣が無い。街灯もまばらなこの場所に、この時間に訪れようとはなかなか思わないのだろう。

まさに打ってつけのシチュエーション。後はある程度の広さがあればいいのだが。通り抜けを前提としたこの場所に、そういったスペースは望みにくい。

いい場所無いかと思いつながら走る俺と先導するわために、きんつばが止まれと声をかけた。

そう言われたものだから、思わず止まってしまふ。

一度止まると、再度限界を覚えてしまい、膝に手をついてしまふ。肩で息をする俺に、わためが「大丈夫？」と声をかけ。「ようやく観念しやがったか」という男の声が、耳に届いた。

顔を上げる。男三人が、ゆっくりとこちらに近づいてきている。よく見れば、左右の

男は俺と同じく限界が近そうだ。しかし大男は余裕綽々と言った様子。異世界人って、誰も彼も体力お化けだったりするのだろうか。

わためを庇う様に立ちながら、観察する。やはり、両脇の二人は悪人という感じじゃない。比較的俺よりの、一般人風。肩で風を切って歩くタイプでもなさそうだ。戦力にはなりそうにない。

ただ、中央の男は違う。大柄の体は決して太つていないわけでは無く、その体が筋肉に覆われているのは目に見えて明らか。風貌も堅気には見えないし、雰囲気も一度見たミオ先輩の物に似ている。るしあと戦っている時の物だ。

「……改めて聞きますけど、何で追いかけられたのでしょうか。俺も彼女も覚えが無いのですが」

「黙れ怪しい奴め。大人しく、その獣人をこちらへ渡せ」

「怪しさなら、貴方達の方が怪しいんですけど!」

「……」

「ひょ」

俺の後ろからわためが口出しして、一睨みの元に黙らされる。いい子だから、ちょっと静かにしてほしい。

「俺は、彼女が迷子らしいので、知り合いの元に連れて行こうと思っていただけですけ

ど」

「知り合い？」

「不知火フレアさんと白銀ノエルさん」

「……」

反応を見せる。きんつばの言っていた通り、かつて彼女達と一緒にいたらしい、無頼漢のようだ。

「どこでその名を調べた」

「いえ。単純に知り合いというか。俺の肩にフレアさんと一緒にいた妖精も乗ってるでしよ？」

「何の話だ」

「……」

視線を向けると、きんつば先生の解説が入る。

元より、妖精自身が姿を見せようと思った相手以外には基本的に妖精が見えることは無いらしく、無頼漢達に姿を見せた事は無いらしい。極稀に最初から妖精が見える者がいるようで、そういう目を妖精眼と称しているらしいが、それはともかく。

「え？ わためもじゃあ最初からきんつば見えてたわけじゃないの？」

「そうだよ？ 翻訳の魔法をかけて貰った時から見えるようになった」

「……俺、最初から見えてたけど？」

きんつば曰く、妖精眼を持っていると思つたらしい。それに、迷子で心細かったから、との事。可愛いから許す。

「ますます怪しい。原住民のように見えるが、それにしては私の世界の事を認知しすぎている」

ぬるりと、大男が動く。一步踏み出せば、革ジャンに黒のズボンというこの世界に溶け込んだ装いが一転、紋章が入った赤い服に変わりだす。

錨の様な意匠。服の隙間には金属で編まれた物が覗き、一際目の引く両の腕には、元々太い彼の腕をもう一回り太くするほどの大きさの伴つた、頑強さが見て取れるガンレット。殴られたら、死ぬかもしれない。

「貴様、何者だ」

「……」

通りすがりの善良な一般人でしかない。大男の雰囲気呑まれたらしい両脇の男達のように腰を抜かしていないのは、慣れる機会があつたからだ。それに後ろにいるわためになりに強く服を握られているせいで、身動きがとりづらいからというもある。

「と、とりあえず、一度フレアさんとかノエルさんと合流しませんか？ そうしたら多分色々解決するかと思うのですが」

「……分かった」

「あ、本当ですか？」

助かっただろうか。

「答える気が無いのなら仕方がないな」

前言撤回。そんなことなかった。

首を鳴らした大男が一步踏み出す。それだけで、地面が揺れたような気がする。服を握るわための手にさらなる力がこもった。

「本当に一度でいいんで自分の事を信じてくれませんか？ 怪しい事は重々承知するしかないんですけど本当にただの一般人でしてわための今後についての相談もかねて本当に今からフレアさんとノエルさんに会うつもりなんですけどって聞いてないですね分かりました！」

一步目より二歩目、二歩目より三歩目。徐々に踏み出す速度が上がり、加速する。頑張つて説得しようとか口を回したが、聞き入れてもらえない。

わためには後ろから更に強く服を引かれる。怖い事は分かるが、それをされると逃げるといふ選択肢がなくなり、いよいよ壁になるしかなくなる。

あと数歩。大男が拳を振りかぶる。痛いで済めばいいが、潰れたトマトのようになってしまう可能性も重々あるし、少なくとも間違いない怪我はするだろう。

他の人が怪我する位なら、俺がそうなった方が精神的には楽だけど、やはり誰もそうはならない方がいいので――。

「お願いですから、怪我しないで下さいね」

「ぬう!」

黒に染まりだした夕闇の空から、黄玉の瞳を輝かせた黒狼が強襲する。

壹閃。爪による一撃に気づいた大男が、ガントレットで防ぐ。

貳閃。追撃の爪すら防いで見せた。

参閃。空中にて態勢を変えた黒狼の蹴撃を大男は体で受け、飛ばされる。

それが仕切り直そうと考えたからなのか、踏ん張れずにどうしようもなかったからなのかは、分からないが。

兎に角、俺達と大男の間に距離は開き。

黒狼は悠々と、そこに着地した。

「フブキに言われた通り、素直に助けを求めたのはいいけど、また、知らない子……しかも、人間じゃない子を連れてるのはどういう事なのかな?」

「まあ、色々あります。すみません、ミオ先輩」

「……契約内容を見直す必要がありそうだね」

「いや、まあ……全く」

本当にその通りだと思う。俺がやらかす度にミオ先輩に出て来て貰うのは流石にどうなのか。

ただ今回については、俺の非は三割くらいだと思うし、正直どうしようもなかったの
で許してほしい所である。

ミオ先輩が、両手を地面につけた。るしあと戦っている時にも見た、四足による突撃
姿勢。スカートでそんな姿勢を取られると、後ろにいる俺からは見てはいけないものが
見えそうなので、視線を逸らす。視線を向けた先でわためがミオ先輩の方をガン見して
いたので、その目も隠す。

「一応確認するけど、知り合いでは無いんだよね？」

「はい」

「なら、前みたいに割り込んでこないでね」

「……善処します」

「大丈夫だから、安心しなさい」

直後、衝撃波に襲われる。転がらぬように耐え、それから視線を向ければ。

大男とミオ先輩の戦いが始まっていた。

大男と戦う

文字通り、火花を散らす爪とガントレット。

ぶつかり合う度に舞うそれに、焦燥を感じる。

攻めているのは、ミオ先輩だった。

いつもの黒を基調とした服に身を包むミオ先輩は周辺の闇に溶け込んでいて、一見して分かりづらい。本人もその自覚があるからだろう。攻めて着地。動き、大男の視線を外れ、別の角度からの強襲という戦術を取っている。

そしてそれらの攻撃を、大男は両腕に着いたガントレットで防いでいた。ミオ先輩の動きが見えているのか、強襲に合わせて突き出される爪は、ガントレットの表面を僅かに傷つけるのみで、それ以上の成果を見せない。

何度目かの突撃も弾かれ、そこで距離を開けたミオ先輩は、両手を地につけた四足のまま、ぐるると唸り声をあげる。

「ねえ、あの人、大丈夫かな？」

後ろから、わための声。俺は答えられなかった。

大丈夫かどうかで言えば多分大丈夫だろうという考えはあった。

かつて一度見た、オーラの様な物を纏ったミオ先輩。るしあとの闘いの最中に見せたあの状態になっていない。あの時はるしあの出した巨大骸骨の前に、怯む事無く突撃を選んでいたので、多分あの状態になれば負けることは無いと思う。

ただ、未だにそれを見せないのが、何故なのかは分からない。

出すのに条件があるのか、出し渋っているのか。ただ、素人目に見る限りだと、ミオ先輩と大男の実力は恐らく互角だ。つまり、時間が経つごとにミオ先輩が怪我をする可能性は上がっていく。

いつそ逃げ出してしまった方がいいのかもしれない。そうすれば、ミオ先輩も戦う必要は無くなる。

しかし、そうした場合、引つかかるのは大男が連絡を取っていたという事実。どこの誰に連絡を取っていたのかは知らないが、俺とわためを捕まえるのに仲間と連絡を取っていたと考える方が自然だ。

つまり、この周辺に大男の仲間がいて、此処で逃げだしたが最後、その仲間と鉢合わせ、という可能性もある。

もつとも、逃げ出さないなら出さないで、その仲間が此処に合流して、ミオ先輩が二対一に追い込まれる可能性もあるわけだが。

あつちもこつちも立たず、まさに八方塞がり。信じろと言われた以上信じるが、それ

でも心配しない事は出来ない。

飛び出していきそうになる足を懸命に堪えながら、ミオ先輩の戦いを見る。

戦いは局面を変えることなく、ミオ先輩が攻め、大男が守る形。

だが、先程までと違い、大男が反撃を見せ始めていた。爪を弾いた後、振るわれる剛腕。ミオ先輩のヒット&アウェイ戦術だと、確かに連撃でもなければ片腕で防御し片腕で攻撃は出来そうだ。

当たればどうなるのか想像し難いその攻撃を、ミオ先輩は躲す。今までの、攻撃から移動のルーティーンの中に回避の工程が入ったせいで、ミオ先輩の攻撃のテンポが落ちる。

その開いたテンポのせいで、男は攻撃後でも比較的余裕をもって体勢を整えていた。

「ミオ先輩」

「大丈夫」

何度目かの攻防の末、ミオ先輩は今までで一番退き、俺の近くまで戻ってきた。

声を張らなくても、届く距離。軽く肩で息をするミオ先輩は、蹲踞そんきょの姿勢を取りなが

ら、しかし両手だけはいつでも加速出来るように地面につけたまま、俺の声に答える。

「全く、異世界人って言うのは皆ああなの？ 半端に強いせいで、手加減しづらいんだけ

ど」

言いながら、俺を見上げてくるミオ先輩。目が合う。何が言いたいのだろうか。

暫しの間を開け、ふるふると首を横に振ったミオ先輩は、再度突撃しようと思いを上げる。

合わせるように、大男は先んじて初めての攻勢を見せた。両拳を腰まで引いて突進してくる。

一方で唐突な指示を受け、俺は膝をついてミオ先輩の腕をつかんだ。丁度突撃しようとしていたのか、力のこもっていた腕を掴まれて、ミオ先輩は驚きの表情を浮かべる。

「ちよつ。何するの!」

「ごめんなさい、そうじゃ——」

言葉を遮るように、俺とミオ先輩の上を何かが飛んでいく。

「——矢印!!」

声を上げたのは、ミオ先輩であった。

飛来したそれを、足を止めた大男は両の腕で防ぐ。オーソドックスな、羽と矢じりのついた木製のそれが二本、僅かにガントレットへ突き刺さっていた。

驚きの表情を浮かべているのは、大男も変わらない。バックステップを踏み距離を開けた男からは、「まさか」とそんな言葉が届いた。

直後、新たな影が、俺とミオ先輩の上を飛び越えていった。

着地時の姿は、依然見たものと同じ白のセーターとチエックのスカート。

だが、そこから更に一步踏み出し始めた途端、姿が変わりだし、二歩目を踏み出した時にはその恰好は完全に変わっていた。

両の手足と左肩、左胸を覆う甲冑。服の下にチエーンメイルを付けている様子は無く、白を基調とした服にはどこかの国の意匠。成程、騎士だと聞いていたが、確かにそう見えた。

そんな彼女、ノエルさんは、大男へ向かいながら左側に下がったメイスを引き抜く。重そうなのだが、その重さに引きずられる様子は全く見せず、危なげなく引き抜いたそれを腰だめにかまえ、一息後に更に加速。瞬く間に大男をそのメイス圏内に入れたノエルさんは、迷うことなくそのメイスを振った。

反応を見せた大男が、ガントレットをもつてそのメイスを防いで見せるが、ミシリカメキか、そんな嫌な音が、男の腕から聞こえてきた。

再三ミオ先輩の爪を防いだガントレットが、メイスの一撃をもって歪んでいるのが、遠目にもわかる。そのまま、鏑競り合いの様な状況に移行したが、大男はその顔に焦燥を浮かべている。体付きだけなら、明らかに大男の方がパワーがありそうなのに、押しているのはノエルさんだった。

「お待ちせ」

背後から声を掛けられ、振り返る。見上げれば、此方も装いを変えたフレアさん。以前きんつばが民族衣装の様な服を着ていると言っていたが、これを指していたのだろうと分かる。

手には弓、腰には矢筒。先程の矢はフレアさんの放ったものらしい。

「ごめんね。もうちよつと早く着いてたんだけど、何か衝撃を受けちゃって」
ちらりと、その視線がミオ先輩に向く。

「一応、あの人は元々海軍で鬼の副長って恐れられてた人なんだけど」

「鬼ですか？」

「そうだよ。並居る相手をばったばったと。国の中でも、相手取れるのはノエルとか船長くらいだったかな。で、船長と一緒に退役して、海賊始めた筈」

「船長……。じゃあ、あの人がって逃げ出した無頼漢の一人って事ですか？」

「そうだね。とはいえ、何の理由も無く人を襲うような人じゃないけど」
言いながら、次は視線をわための方へ。

「その子のせいかな？ 名前は？」

「つ、角巻わためです！」

「どうして此処に？ 遠征組のリストには入ってなかったと思うけど」

「えつと——」

フレアさんによる、わためへの事情聴取が始まる。脇では戦闘中という状況なのだが、フレアさんは冷静だ。

旅の途中におにぎりが穴にーと、おむすびころりんのような世界観を見せ始めたわための説明を聞いている最中、ちよいちよいと服の裾を引かれる。

「どうしたんですか、ミオ先輩」

「いや、君も大概冷静だね」

ぺたりと獣耳を閉じながらも警戒しているらしく、尻尾は立てたままのミオ先輩に、嫌み気味にそう言われる。

「どちら様？　ていうか何語？」

「この間部室でお話した異世界の方々です」

「……あー、そういうえば聞いたね。何で話せるの？」

「魔法です」

フブキ部長との約束はきちんと果たしていて、異世界との遭遇と幻想談義については、フブキ先輩にもミオ先輩にも説明済みだ。ちよこ先とるしあ、桐生先輩にも説明するかを悩みはしたが、話さない事のデメリットの方が大きいので、説明済みである。

お陰でちよこ先とるしあにちよつと怒られるくらいで済み、桐生先輩には「いい心がけですねー」とお褒めの言葉すら頂いた。意図せず世界の危機を救った気分になったの

は、何故だろうか。

「その時は、あの子の話は聞いてないけど」

「わためは今日知り合いました」

「今日知り合つて即日厄介事に巻き込まれるんだね、君は」

「あはは」

「笑いごとじゃないんだけど」

ちらりと、ミオ先輩の視線が動く。合わせてそちらを向けば、大男と戦うノエルさん。おっとりした顔は、多少鋭さを増してはいるがいまち迫力には欠けている。だが、振られるメイスがガントレットと当たるたびに発する音は、カキンとかガキンのような金属同士の当たる金属音ではなく、ドゴオという音が近い殴打音。音が大きくて高い程ダメージは大した事が無いというのは良く聞かすが、その逆の状況。受け止める男の腕が心配になってしまう。

「大丈夫ですか、ミオ先輩？」

「煩い」

「まあ、確かに」

自分でも多少煩わしく感じる位だから、自分よりも多くの音が聞こえるであろうミオ先輩は自分以上なのは間違いないだろう。

「それに、何か変な気配があるんだよね」

「変？」

「うまく説明できないんだけど」

くんくんと何か匂いを嗅ぎ出すミオ先輩。

同じようにしてみるが、流石に何も分からない。

「——ねえ」

フレアさんから声がかけられる。

視線を動かせば、話は終わったようで、フレアさんとわため、それに移動したきんつばがこちらに視線を向けていた。

「この子の事、保護してくれてありがとう。また、きんつばもお世話になったみたいだし」

「いえ。わためとは偶然会っただけだし、きんつばには助けられましたから。フレアさんとノエルさんが此処に来たのって、きんつばに呼ばれたからですよね？」

「あ、分かる？ はぐれた時の合流用の魔法を色々練習中なんだよね。今回は念話の魔法。まあ、話すのに滅茶苦茶集中する必要があつて、話している間に移動出来ないのがネックなんだけど」

「成程」

きんつばが難しい顔をしていたのは、それが理由らしい。

「多分、あの人に襲われたというか、追いかけられたのはわためちゃんを連れてたからだと思う。保護しようとしたんじゃないかな、正義感の強い人だったし」

「……なら、海賊にならないんじゃない？」

「そこはほら。船長に弱みを握られてたらしいから？」

脅されたのだろうか。それなら可哀そうな人なのかもしれない。

「許せませんね」

「君が勘違いをしている事は何となく分かったよ」

何をだろうか。

「まあ、話して分からない人じゃないから、ノエルが取り押さえたら私から説明をフレアさんの言葉の途中で、首筋に痛みが走る。

何事かと思うよりも早く、足の感覚が無くなり、視界が黒くなり始め。持ち上げられるような感覚をもって、俺の意識は途切れ——。

潜伏先にて

最近意識失う事、多いな。

寝起き一番の感想は、それであつた。

ふわふわと夢見心地な意識を、頭を振ったり瞬きをしたりと数分程色々試し、覚醒させる。

周囲を見渡す。電気が点いておらず、隣室から差し込む光程度しかない薄暗い室内。壁は木製の建物のように。とはいへ、ログハウスというには、聊か風情に欠け、掘つ立て小屋という方が正しそうな印象を覚える。部屋に窓は無く、壁に立てかけるように置いてある道具類を見るに、物置なのだろうか。何かしら使える物はあるようだが、両手両足ともに椅子に固定されていた。見渡した感じ、通学用の鞆も無いし、ポケットに入っていた筈のスマホの気配も感じない。

一先ず目先の問題を解決するべく、拘束から抜けなかなと踏ん張つては見るが、きちんとした拘束のようで、びくともしない。こうして拘束をされるのは幼少期以来だ。懐かしさを覚える。あの時はタオルだったので、もがけば拘束を解けたのだが、今回は自力での脱出は難しいようだった。

一旦諦め、次の問題へ。

「…………タロ?」

肩が定位置の守護霊の姿が無い。名前を呼んでも、応答無し。半透明な人達が少なくない数、俺の周りに群がっているから、多分近くにも居ない。守護霊が居ない状態がどの程度不味いのかは分からないが、少なくともミオ先輩とのホットラインは無くなっているらしい。

骸骨はどうだろう。まだ、血を流したら、俺の影から出てくるのか。百聞は一見にしかないので試してみたいのだが、身動きが取れない今、血を流すには舌を噛み切るしかない。ただ、それを行うだけの度胸は無いので、意図的に自分の血を流すのは難しい。

一端諦め、情報を得るべく耳をすませば、扉の向こう。光の漏れている方から、人の声が聞こえる。

何処か責めるような口調の女性の声の一つに男性の声が複数。聞こえてくる物は俺の理解出来る言語だが、声の主が誘拐犯と仮定するなら、意識を失う前の流れから考えてもフレアさんやノエルさんの同郷の人と考える方が自然な気がする。必然、喋っている言葉は俺の知っている物とは違う筈なので、それでも俺が理解出来るという事は、少なくともきんつばのかけてくれた魔法の効果が活きている。きんつばが謙虚にも効果期間を短く告げたという事が無ければ、三日以上は経っていないと思う。

……それにしても、今日はあるしあとちよこ先が来ない日で良かった。もし来る日なら、多分ミオ先輩経由で俺の誘拐問題がああ二人にも知れ渡ってしまう。それに、ちよこ先から親へ連絡が行こうものなら……どうなるだろう。案外何もなければいいかもしれない。流石に一瞬帰ってくると思うが、数時間後には呼び出されて職場に戻りそう。

ならばれてもいいのだろうか、そんな発想に至り始めた頃。扉の方から漏れていた光が遮られる。

寝たふりをしようか一瞬悩み、辞める。いつまで寝ているんだと、叩き起こされる可能性を鑑みた。

間もなく、戸が開いた。逆光の中に、女性らしきシルエツトが一名。

「えつと……この辺でしたっけ」

ぱちりと音。直後、俺のいた部屋の明かりも点いた。

急な明るさの変化に視界が眩むも無く、しっかりと電気を点けた主の姿を捉えた。

大きな目のリボンで赤い髪を二つに結っていた。左目には眼帯。纏っている服や眼帯には大男にあったのと同じ、錨の意匠が散りばめられている。

「起きました？　大丈夫ですか？」

「誘拐したのはそっちなんですか？」

「うっ。それを言われると弱いので、辞めてください」

コツコツとヒールを鳴らしながら女性が近づいてきた。そのまま腕が動くのなら触れる距離まで近づき、足を止め。徐に眼帯を外すと、上体を曲げて俺の顔を覗いてくる。左右色の違う、オッドアイの瞳。隠されていた左目が、まっすぐ俺を貫く。

「ふむ、ふむ」

「あの」

何だろつか、落ち着かない。見澄まされるだけではなく、見透かされるような感覚。居心地の悪さがあつた。

暫くの間、視線が交わる。顔を上げると、女性は左目にいそいそと眼帯をつけている所であつた。

「……ノエルさんの知り合いの元海軍の山賊の方ですよね」

「おっと。我が名は宝鐘海賊団船長、宝鐘マリン。船を持っていないだけで、心は立派な海賊なんですから間違えないで下さい。いつか自分の船で宝探しに行くんですから。ついでに私の事を呼ぶときは、船長と呼んでくださいね」

「それは部下になつたみたいなんで嫌ですけど。それより、自分、なんか誤解されて此処に連れてこられたんです。解放して貰えませんか？」

「至極もつともな要求ですね」

うんうんと、納得するように頷く。

「まあ、縄は解いてあげます」

そう言つて、女性が俺の背後に回つた。後ろ手に縛られていた手が、少しして解放される。

手を前に持つてきて、確認。擦れた痕はあつたが、特に不調は無い。

手の次は、足。背後に回つていた女性が俺の足元へ移動して、両足の縄も解かれる。

女性が離れてから、足を確認。ズボンの上から縛られていたようで、足には痕が残つていなかった。

思った以上にあつさりど解放されて、素直に喜べない。

「帰つていいつて事ですか？」

「いえ。それはダメです。というか、無理です」

何が何だか。

それなら縄も解かなければ良かったのにとと思う俺に、女性がポケットから取り出した懐中時計を見せてきた。

「もう夜も遅いので、出歩くのは辞めた方がいいですよ」

「……いや、多少暗くても」

「(ハハ)、山の中ですし」

「……」

やっぱり山賊なんじゃないだろうか。

外を確認すると、すっかり日は暮れていた。まあ、わためと会ったのが放課後の夕暮れ時だった事を考えれば、当然と言えば当然かもしれない。

夜空を見上げれば、曇っているようで月も星も出ていない。それでも、見えなくはないから歩こうと思えば歩けそうではあったが、軽く見渡した感じ、道らしい道が見当たらない。

「一応確認なんですけど、普段どうやってこの山小屋から出かけて、戻って来てるんですか？」

「普通に山を登ってますけど？」

「道が無さそうなんですが」

「それがどうかしました？」

「……いえ」

これが若さか。いや、元海軍だし元々山暮らしのようだから、歩きなれているだけだろう。

歩きなれていない俺では、何なら日が出ている時でも危ない気がする。一先ず、家に帰るのは諦めて、山小屋の中に引き返した。

「そうだ。ご家族に連絡も取った方がいいですよね」

「そうですね。なら俺のスマホ返してもらえますか？」

「……すみません。君の荷物は、君を誘拐した時に何処かへ落したよう。必ず弁償させるので、一先ず私の携帯で連絡して貰えますか？」

「……」

手渡されたスマホを見る。一先ず通話アプリを起動するが、テンキーを前に止まる。

事態を間違いない把握しているであろうミオ先輩やフブキ先輩とは、メッセンジャーアプリのアカウントなら交換したが、携帯を交換した記憶が無い。というか、学校の友人知人と携帯を交換した記憶が一切無い。

他に使えるような物だとSNS位だが、持っているアカウントは鍵垢で、フォローしている人の中でリアルの知り合いは居ないから、連絡には使えそうにない。

今度、携帯を教えて貰おうと心に決めつつ、役に立たなかったスマホを返そうと宝鐘さんの方へ視線を向ける。その視線を向けた部屋の一角に置いて、自分が目を覚まし、物置を出た時と変わらず、正座をさせられたままの大男と知らない痩身の男。大男の頭には漫画の様な大きな瘤。あれはノエルさんの仕業だろうか、宝鐘さんの細腕だと厳しそうだし。

「キミ達。いつまでそうして無言を貫くつもりですか。何がどうあれ、こっちが間違え

て迷惑をかけたんですから、謝らなきゃダメでしょう」

「……しかし、船長。自分は間違えた行いをしたわけでは」

「貴方の正義感は私も良く知る所ですけど、今はただの海賊。無頼漢でしかありません。故に善行は美德ですが義務ではありません。

残念ですが、貴方の今日の行いはただの自己満足です。思い込みの末に、無辜の民への拳を振るつた。報告にあつた獣人の様な誰かの割り込みが無ければ、この少年は亡くなつていたかもしれませぬ。貴方の拳にはそれだけの力があります。それを踏まえたいので、なお謝る理由にはならないと？」

大男が、無言で拳を握る。

素人目にもわかる、鍛えられた拳。俺より何周りも大きいそれが、更にガントレットに覆われていたのだ。

結果更に大きさを増したそれを前に、あの時自分が覚えた感覚を思い出す。

「あの、船長。その辺で。こいつも悪気があつたわけでは」

瘦身の男がそう口をはさむ。宝鐘さんの矛先が、そちらに向いた。

「黙りなさい。当たり前です。悪気があつての行いなら、そもそもとつくにフレアとノエルに突き出しています。それと、無関係な振りをしています。貴方も貴方です。一般人相手に薬を使うやつがありますか」

「て、敵か味方が分からない以上、躊躇う必要は……」

「副隊長の傷はノエルからつけられたものでしょう。貴方が合流した時にノエルは居なかったですか？」

「……いえ。既に戦闘中でした」

「なら、ノエルに守られている彼が、少なくともノエルやフレアの関係者というのは想像がついたと思いますが」

「……すみません」

「拉致の理由は？ ノエルやフレアへの対策以外でお願いします」

「……」

凶星だったのか、押し黙る。

対策、という言葉の辺り、あの二人への人質として拉致されたという事なのだろうか。

「……すみません。海軍のころから、貴方が私の事を気にして、裏で動いていた事は知っています。私達があの二人から逃げおおせたのすら、貴方の力があつた事。分かつて居て、黙認していました。やはりきちんと、止めるべきでしたね」

ちらりと、宝鐘さんの視線が、俺を向く。つられて、男達の視線も俺へと向いた。

暫し、沈黙の時間が流れる。

「……貴方達。正座はもういいので、今日はもう寝なさい。いいですね」

「はい」

宝鐘さんの言葉を切欠にして、男達が立ち上がる。

大男が先んじて歩き出し、俺を一瞥。近場で足を止め、「すまなかつた」と呟き、歩き去る。

「坊主」

「はい」

そして瘦身の男。足を止め、俺を見る。

「具合は？ 吐き気とか、しびれはあるか？」

「えっと……いえ、とくには」

寝起き直後は気だるさもあつたが、今は平気だ。

「そうか……。悪かつたな」

そう言つて、彼も歩きだし。

やがて二人とも扉を出た所で宝鐘さんに一礼して、戸を閉める。

「……やれやれ。手のかかる子達ですな」

そんなことを言うと、宝鐘さんに名前を呼ばれる。

振り返ると、宝鐘さんが間近によつていて。

「ごめんなさい。悪い子達では無いんですが……大丈夫ですか？」

と、そんなことを尋ねられた。

宝鐘さんのその言葉に、一瞬戸惑う。

「はい。別に、大丈夫です。特に怪我をした、というわけでもありません」

逃げきれたし、救援も間に合った。

「誤解も解けたようですし、明日の朝、家に帰して貰えば、それでいいです」

家に帰って、心配をかけているであろう人達に謝ろう。ミオ先輩やフブキ先輩、もしばれているのなら、るしあやちよこ先にも謝る必要があるだろう。フレアさんやノエルさん、きんつばにも謝った方がいいだろうか。わためとは……まあ、今後について話をする。今更だけど、本当に住むつもりなのだろうか。

そうして、いつもの日常に戻れば――。

「いけません」

両頬に手が当てられる。オッドアイの瞳が、まっすぐ俺を捉える。

「我慢をする必要は無いんですよ」

「はい？ 何の話ですか？」

「怖かったんでしよう、本当は」

「そんなこと無いです」

平気だ。大丈夫、問題ない。いつも通りだ。

「真っ青ですよ、顔」

「……」

その顔は、嘘をついているようには見えない。

宝鐘さんの手が頬を離れ、俺の手を掴む。宝鐘さんの手が震える——いや。震えているのは俺の手だった。俺の手が震えているから、宝鐘さんの手も震えている。

「あれ？ いや、本当に大丈夫なんです。自慢じゃないですけど、此処一月位、色々ありましたから」

命の危険はあつたりなかつたりだが。それでも、かなり濃い一月を過ごしてきたことは、間違いない。

「だから、全然大丈夫なんです」

「いいえ」

そんな俺の言葉を、態度を、宝鐘さんが一蹴する。

「私にも海軍としての生活の中で多くの危険や命のやり取りが何度もありました。ですが、一度たりとも平気だった事はありません。怖いのを押し殺して、何事もないかのようには振舞っていただけです」

「俺は、宝鐘さんとは違うから」

「ええ。私と違い、今までこの平和な国で、安全に過ごしてきた。だからこそ、たった一

か月の生活で、命の危機に慣れる訳がないんですから」

俺の手を掴んでいた手が離れ、頭に乗る。そのまま、なでなでと撫でられる感触。

「我慢する必要は、ありません。怖かったと泣いても、私に何するんだと責めるのも、貴方の自由です」

人に頭を撫でられるのって何年ぶりだろうか。心地よさにポーつとしてくる。最近見えすぎる位に見えていた視界が、一月前のように狭くなつた気がした。

「ちゃんと聞きますから、安心してください……って、どの口が言ってるんだって話なんですけど。少なくとも、今は安心して、力を抜いていいんですよ」

宝鐘さんの言葉に、素直に首を縦に振る。

それを見た宝鐘さんが、満足げに頷いた。

「よろしい。さて、じゃあお茶でも煎れましょうか。座って待つててくださいね」

手を離れた宝鐘さんが、部屋の一角に置かれた水場の方へと向かう。

名残惜しさを覚えながら、近くの椅子に腰を下ろした。体がズシリと、重くなつたような気がする。思つた以上に、疲れていたようだった。

お湯を沸かす音が聞こえる。時間がかかるだろうし、少しくらい眠つてもいいだろうか。

ぼんやりそんなことを思っていると、視線を感じた。視線を動かした先の窓の外に人

影を見る。ぼっちりと、目が合った。

人影は、あたふたとしたのち、苦笑いを浮かべる。そんな人影に手を振ってやれば、おぼろげと振り返される。らしくないその姿に苦笑いを浮かべながら、俺は立ち上がった。

「宝鐘さん」

「はい、なんですかー？」

「迎えが来たので、帰りますね」

「そうですか……はい？」

荷物は無いらしいので、手ぶらで戸を開け、外に出る。

扉の前で、あの日と変わらぬ三角帽子に、やや視線の向け先に困る装いの魔女が立っていた。

「よっ」

片手をあげ、挨拶をしてくる魔女へ、同じように片手をあげて返す。

「久しぶり。元気にしてた？」

「元気元気。そっちは？」

「ぼちぼち」

「そっか」

そう短く返してきた彼女が、えーつとと、二の句を考え始める。話したいことは、まあ無いわけでもないから。

「積もる話もあるし……頼んでいい？ シオン」

「……うん。おっけー」

シオンがぱちんと、指を一つ鳴らすと、足元には人が二人分は入れそうな大きさの魔法陣が出てくる。

振り返ると、驚きの表情を浮かべる宝鐘さんの姿がある。

「すみません、お世話になりました」

会釈をする。その直後には、風景が切り替わった。見慣れた我が家の、庭先である。

体がふらつき、踏鞴を踏む。

「ちよつとふらふらする」

「転送酔いだから、暫くすれば治るよ」

「そっか」

具合が良くなるまでと思い、縁側に腰を下ろす。一瞬、さつさと家に入ろうと言われるかと思つたが、意外にもシオンも腰を下ろした。

一度座ると、先程までの睡魔がぶり返してきた。体調不良も相まって、直ぐその睡魔に侵されていく。

「……シオン」

「ん？」

「肩借りるわ」

「あ、ちよ」

丁度いい高さにあるシオンの肩に頭を預けた。

「つたく、もー」

シオンからの怒りの声。ただ、無理に引きはがされることはなく。安心して俺は、目を閉じた。

帰宅

「おしまーい」

側頭部への衝撃で、目を覚ました。

何事かと周囲を探ると、立ち上がったシオンと目が合い、事態を理解する。

「もうちよつと、優しく起こしてくれ」

「だって寒いし」

「年中快適って言ったの覚えてるからな」

「そうだ、消さなきや」

「待って」

右手に光が集まりだしたのを見て止めに入り。やがてどちらからともなく笑い出す。

ひとしきり笑い、満足して。そうだ、とシオン。

「ねえ、私お腹空いたんだけど」

「そういうえば、俺も何も食べてないな」

そして、何か忘れていている気がする。実はシオンに何か消されたのだろうか。

何だろうかと思いつながら、ポケットを漁る。鍵が無い。

「そうだよ。俺、荷物無いじゃん」

「鍵、無くしたの？　しょうがないな」

わざとらしく間延びした声を出したシオンが、ドアノブへと手をかけた。僅かな発光。直後、ガチャリと音が鳴る。

シオンがノブを回し、扉を引けば、抵抗なく戸が開いた。

「……いやダメだろ」

「ここ以外で使うわけないでしょ」

「いや、そういう問題じゃ」

俺が二の句を継ぎきる前に、話は終わりだとばかりにシオンが家へと入り。

ばたん。ガチャリ。

「……」

インターホンを鳴らす。少しして、『はい』と合成音声。

「開けてくれ」

『えー？　でも、開けちゃダメなんですよ？』

「そういうつもりで言ったわけでは」

『私、傷ついたな』

このクソガキと出かかった言葉を飲み込む。

「……ごめん」

『んー？ 聞こえない』

「ごめん、なさい」

『……まあいいかな。それで？』

「開けて、ください」

『いいでしょう』

三度目の、ガチャリという音。開けられたドアを、閉じられる前に抑え、家の中に入る。

「そもそも私が居なかったら、家に入れなかったんだからね」

「それはそうだけど……他の場所で使うなよ」

「それくらい、分かってますー」

分かってることくらい分かってるけど、言わずにいられないことも分かってほしいものである。

俺が家に入り、鍵をかけている間に、シオンはぱたぱたと洗面所へ向かっていった。広さ的に二人並んで手洗いたいなことは出来ないの、俺は先に自室に行き、制服からジャージへと着替える。

制服類をハンガーにかけ、シャツなどの洗い物を手に、洗面所へ向かおうとして。

「ねえ、ええ、ええ、ええ、ええ、ええー！」

びつくりして、叫び声に足を止めた。

再起動に数秒。とりあえず声の主は分かって居るので、そのまま洗面所へ行き、洗濯機へ洗濯物を入れ、手を洗い、うがいをしてから、叫び声の大本に向かう。

「どうしたー？」

「普通に手を洗ってから来てる！」

シヨックを受けた反応を見せるシオン。緊急性が無いことは分かって居るから、仕方がない。

「とりあえず、冷蔵庫閉めて」

「あ、うん」

開けたままであった、冷蔵庫の戸が閉められる。

それを確認してから、時計を見上げる。かなり遅い時間だ。日付も跨いでる。

とりあえずミオ先輩には無事の報告をしたのだが、スマホは無くされたようなので、連絡手段が無い。報告しようと思うと直接向かわなくてはならない。

だが、流石にこの時間だと迷惑だろうか。少し悩む。

「ねえ、ちよつとー！」

「うん？」

声を掛けられ、意識を戻す。ぷりぷりと、怒った顔のシオン。

「冷蔵庫、空なただけど！ お腹空いた！」

「……ああ。昨日食べきってな。味噌と白米はあるから、米は炊いて、後は具無し味噌汁でも作ってくれ」

「惨め」

「直球過ぎない？」

「というか、買い物する予定だったのに、出来なかつたんだから、仕方がない。」

「ねー、コンビニ行こ？」

「コンビニカー」

正直、空腹具合はかなり高いので、全然ありではあるのだが。財布を無くしたので、所持金が乏しい。

もしキヤッシュカードの再発行が必要で、未成年の俺ではできず、お金も下せないとなつた時の事を考えると、なるべく使いたく無い所だ。

「というか、スマホを止めたりとかした方がいいだろうか。誰かに拾われて勝手に使われたりするのにも困る。連絡手段ないけど。」

「ほら、早く。置いてつちやうよ」

「えー」

三角帽を被ったシオンが、リビングの出入り口で手招きしている。

置いていかれるのは嫌なので、食器棚にしまつてある別の財布を取り出した。使い過ぎぬよう、二千円だけ抜き取りポケットにしまう。

「はーやーくー」

「ああ」

歩き出し直後に、シオンがリビングの電気を消した。カーテンも閉め切っているから、真つ暗だ。

そんな室内を特に気にせず歩き、シオンに追いつき、額に手刀。

「危ないだろうが」

「あ、うん」

てつきり叩かれたことを怒るかと思いきや、シオンは額を摩ると、帽子の鏝を掴み、深くかぶり直す。

「早く行こ」

「ああ」

妙な反応に戸惑いながら、歩き出すシオンの後を追う。靴を履き、玄関を抜けて。

「……あ、すまん、シオン。鍵忘れた。取ってくる」

「別にいいでしょ」

俺が聞き返すよりも早く、シオンが再び魔法を使い、鍵をかけた。

それから、わざとらしく顔を上げ、俺を見る。いつもの顔。にやりと、意地の悪そうな笑顔だ。

「閉めない方が良かった？」

「いや、まあ、いいか」

久しく使っていない合鍵の場所が曖昧だ。探すのに手間取って、あまり遅くなるのも望むところではない。

合鍵係はシオンに任せる事にして、並びコンビニに向かって歩き出す。

「そうだ、シオン。俺、別に寄りたい場所があるから、シオンはコンビニで買い物終わったら、先に戻っててくれ」

「こんな時間に？ どこ行くの？」

「知り合いの所。大丈夫でしたって報告しないと」

「……それって、さつき変な場所に居た事と関係ある？」

予想外の言葉に、思わずシオンの方を見れば、此方を見上げる彼女と目が合った。

口が滑ったと思いつながら、何とか誤魔化す言葉を探す。しかし、気にしないでくれと言うには、どうにもシオンの様子がおかしい。手刀の当たり所が悪かったのだろうか。

最近体の調子はすこぶるいいが、特に筋力が上がったとかそういう事は無いのだけ

ど。

「ていうか、なんであそこに居たんだ？ シオン」

「魔界から家に戻ったら留守だったから、千里眼で探して追いかけたの。そしたら、何か山小屋でおばさんといちゃついていた」

「そんなつもりは毛頭無いが、お願いだからその事は誰にも言わないでくれ」

正直かなり肩の力が抜けたことについては、否定しないし出来ないのだが。
ていうか、千里眼って何の事だろう。怖いんだけど。

「それで？ 何でこんな時間にあんな場所に居たの？」

「あー……親戚の、家？」

「そんなわけないでしょ。あの人の左目に変な魔力の気配があつた。この世界にも魔界にもない変な魔力。知り合いだったらあれだけど、正直近づかない方がいいと思う」

「……ソウダネ」

「知ってたでしょ、その反応！」

がっしり胸倉を掴まれて、がくんがくんと前後に振られる。ぱつと見とは裏腹のパワーに、抵抗できない。

いや、左目の魔力云々については、本当に知らなかったのだけでも。

「たんまたんま」

「一体何があったの!! あのお婆さんだけじゃない。確認したら影も何かに繋がってるし、魔力が目の周辺だけじゃなくて体の方からも感じるし総量が増えてる。また魔法薬使ったみたいにな」

「うぐ」

「……一か月の出来事が一気に頭をよぎる。

「教えて。何があったの」

「……色々」

存外目ざとい。いや、天才故なのだろうか。再会してそう経ってないのに、そこまで分かる物なのか。

「一か月分の話になるから、後でゆっくり話すよ。コンビニ着くまでに終わらないだろうし」

「絶対だからね」

「分かってるって」

流石にここまで言われて、話さないつもりはない。正直、色々な事をシオンにどう話そうか悩んでいたから、何なら渡りに船だ。どんな反応をされるかは、想像つかないが。怒られるという事は無いだろう。笑われるだろうか。当事者的には喉元過ぎれば熱さを忘れている状態だから、すっかり笑い話になりつつある。

そんなことを考えていたから、足を止めたシオンへの反応が遅れた。

数歩進んだあたりで、足を止めて振り返る。街灯と街灯の間にある暗がりの中、シオンが俺をまっすぐ見ているのが見える。

「シオン？ どうした？」

「……一っだけ先に聞かせて」

「今つて事？」

「うん」

そう言ったシオンが、一度目を閉じ、深呼吸する。

なんとなく、聞きたいことは分かかって居た。分かかって居たが、シオンの言葉を待つ。

やがて、気持ちを落ち着けたらしい、シオンが、静かに目を開き、口を開いた。

「私の事、怒ってる？」

それは、果たして想像通りの物であった。その言葉に、彼女の成果を察する。

「見つからなかった？ 俺の目を元に戻す方法」

「——ッ。どうしてっ」

「ちよこ先が、シオンは調べ物に魔界に帰ってるって言ってたから、てつきり俺の目の事を調べに行つたのかなって思ってたんだけど」

「そつちじゃなくて！ どうして何も見つからなかったって分かったの？」

正解だったらしい。

「元氣なかつたし。それに、もし見つけたならドヤ顔で自慢してくると思って」

失礼かもしれないが。まあ、こればかりは日頃の行いである。

「だから、ダメだったんだらうなって」

「……」

歯噛みしたシオンが俯く。その拳が、強く握られるのが、見て取れる。

天才のプライドが傷つけられたからか、無力な自分を呪っているのか、その両方か、それ以外か。

「……前に、ちよこ先生から、聞いた」

「うん」

「私の事、怒ってないって。寧ろ、心配かけて申し訳ないって」

「そうだね」

確かに言った。

「でも、今は違うんじゃないの。少なくとも、普通に生活してれば、そんな風にならないでしょ」

「……まあね」

少なくとも、今までの、この目になる前のような生活していれば、影から骸骨が出る

ことも無ければ、ざっくり切られることも多分無く、今日拉致されることも無かっただ
ろう。

「余計な事しやがって。お前のせいだ。そんな事、本当は思ってるんじゃない
の？」

質問口調ではあるが、何処か確信した様子の口ぶり。

「ねえ、答えて」

まっすぐに向けられるその目に、溜息を漏らし。

「安心してくれ。ちゃんと、怒ってるから」
そう返した。

おかえり

予想通りだったのか、逆に意外過ぎて声が出なかったのか。俺の言葉に、シオンは多少呆けた様子を見せたが、大きな反応を見せなかった。

そんなシオンに、笑みを向ける。

「怒ってないって、言われると思った？」

「あ、いや……」

その反応を見るに、多少はそんな考え——期待はあったらしい。

呆けた様子を見せたシオンは、キュツツと唇を噛み締める。

「……そう、だよ。それなのに、私は……」

シオンが項垂れる。帽子の鍔に隠れ、表情が見えなくなった。

「魔界で、沢山調べてきた。沢山本を読んで、研究者から話も聞いて」

「ああ」

「ただ、何も分からなかった。そもそも公式に魔法薬を只の人間に使ったっていうデータが無かった。研究者は口をそろえて、アンタを魔界に連れてこいの一点張り」

「行ったら治るのか？」

「……魔界で初めての事象だから。前例が無いから、色々調べたいんじゃない？」

モルモットという事だろうか。流石にそれは御免被りたい。

「ごめんなさい」

トレードマークの三角帽が滑り落ちるほどに深く、シオンが頭を下げる。

「私のせいで、アンタの人生、滅茶苦茶にしちゃった」

「……」

近づきながら、考える。

シオンの言う、自分のせいでというのは、何処の事を指しているのだろう。

俺に、目薬を使った事か。

それとも、別の事を指しているのか。

シオンの前に落ちた三角帽を拾いながら、尋ねる事にした。

「なあ、シオン」

「……はい」

「それって、俺に目薬を使った事と別の事のどっちを後悔してるんだ？」

「え？」

帽子の埃を落としていると、顔を上げたシオンと目が合った。

酷い顔していると思いつつ、埃を払った帽子を、自分で被る。

「似合う?」

「全然」

「……」

そつと帽子を外し、シオンに被せる。

「それで、どっち? 一応言うけど、俺の家に上がり込んだ事って言ったら、怒るからな」

「っ!!」

シオンが息をのむ。その反応が、答えだった。言い分を聞くべく、シオンの次の言葉を待つ。

やがて、徐にシオンの口が動いた。

「正直、私はアンタと会わなければ良かったとか。家に居候なんてしなければ良かったって、そう思ってる。そうすれば、アンタがこの世界の理外に触れることも無かつたし」

「……そうか」

自然にため息が漏れた。

「元々、滅茶苦茶怒ってる訳じゃなかった。けど、怒っていない訳でもなかった。真ん中位」

「うん」

「でも、今の一言で怒ってる側になつたぞ」

「ええ!!」

言つたらうに。上がりこんだ事つて言つたら怒るつて。

シオンは、俺から予想以上の怒気を感じたらしい少し慌てでした。

「で、でも、実際にそれでしょ?」

「……」

否定は出来ない。思つていない訳では無い。

「この目になって、調子はいいいんだ。眼鏡とかコンタクトとかしなくて良くなつたし、夜目が効くようになって、暗闇の中でも問題なく活動出来るし。暗くても明るくても直ぐに調整されて、目が眩むつて事も無い」

「そうだったね」

さっきのリビングの光景を思い出したのだろう。僅かに顔が曇る。

「見えなかつたものが見えるようになって、そのおかげでこの前は迷子の精霊を助けられた。いい事も、もちろんあった」

俺の二の句を、シオンが待つ。その姿を見て、俺は躊躇うことなく告げた。

「大変な目にもあつたし、なにより秘密を暴いて嫌な思いをさせた人がいた」

るしあやフブキ部長の秘密。シオンの言つた理外。俺が本来触れる筈の無かつたそ

れに触れて、るしあは怖がらせ、フブキ部長には恥ずかしい思いをさせてしまった。

「見えるって事を理解していなかった俺の不注意が大きな原因だけど、そもそもシオンが俺に目薬を使わなければって思わなかったと言え、嘘になる」

「……うん」

シオンは沈んだ表情を浮かべる。聞いてきたのは彼女だから、我慢して聞いて貰う。

「でも、このことは別に怒ってないんだ。シオンは俺の事を心配してくれた結果だって、分かっているから。シオンが目薬を使ってしまった事を後悔しているっていうなら、気にしないでだけで済ませるつもりだったんだけど」

「で、でも」とシオンが食い下がる。

「それを言ったら、最初から私に会わなければ良かっただけじゃん。そうじゃなくても、家上がり込んで一緒に暮らしたりしなければ良かった。そうしたら——「違う」——え？」

「お前が気にしてる所は、俺は気にしてない。魔界の目薬を人間に使うって事について考えなかった事について思う所はあるけど、お前と一緒に暮らさなければ良かったなんて、思ったことはない」

「えっと……」

分からないという顔をする、シオンへ告げる。

「会った事を後悔されると、俺はお前に、一緒に暮らしてた時間を否定されたみたいで嫌なんだよ」

この言葉に、シオンは目を丸くした。

「数カ月程度だけど、俺はシオンと一緒に暮らしてて楽しかった。家に帰ったらおかえりって言うってくれる事は嬉しかった。料理は気まぐれで食べたいものを作る程度だったのに、ちゃんとメニュー考えたり、作った料理に感想を言っただけで貰える事は新鮮だった。楽しかったんだよ、シオンと一緒に暮らすの」

「——っ」

「だから、会わなきゃよかったなんて言っただけでほしくなかったし、魔界に戻るなら一言挨拶して欲しかった」

「あ」

その言葉で、漸く俺の言葉の真意を悟ったらしい。

「シオン。俺は別に、この目にされた事を怒ってない。余計な事しやがってとかお前のせいでって思ってるんじゃないかって言っただけで、そんな事は無い。ただ俺は、挨拶無しにいきなり居なくなつた事は、理屈抜きに怒ってる」

「……ね、寝てたし」

「手紙とか、ちよこ先に言伝を頼む事も出来たよな？」

「……」

すうつと視線が逸らしたシオンが、モジモジと体をくねらせた。

何かを言おうとして、失敗してを繰り返して、モゴモゴと口を動かす。

照れているのだろうか。ちよつと意外。だとすると、この言葉は追い打ちになるだろうか。

でも、欲しかった言葉はシオンからは出てきそうにないので、自分から言うしかない。そうだった。

「シオン」

「何? ……ねえ。ちよつと?」

言葉を口にしようとする、正にその時。視界を何かに覆われた。

茶色のもふもふ。ただ、モフみを感じることもなく、しかも半透明。

「タロ?」

『わん!』

顔から降りるモフモフを、思わず受け止める。

腕の中に居たのはやはりタロ。そういえば、山小屋で目が覚めた時から居なかった。

その動きに疑問を覚えたのか、シオンは首を傾げる。

「ん? うーん……なに、その犬の霊?」

「俺の守護霊……え？ 見えるの？」

以前のちよこ先の説明的に、シオンは死霊術を使えない筈だったが。

「まあね。私天才だから」

「へえー」

「もつと驚きなさいよ……いや、何でアンタ見えてるの？」

「天才だから」

「いやいやいや」

軽い反応を見せた俺と違い、シオンは素直に驚いているらしい。反応が面白いので、一先ずそのままにしておく事にして。

タロが居るならもしかしてと周囲を見渡せば、思った通り、黒い人影。

振り返ると、さつきまで俺が立っていた街頭に照らされたその場所に、その人影は降り立った。

「ご心配、お掛けしました。ミオ先輩」

「……とりあえず、無事そうだね」

そう言いながら、ミオ先輩が近づいてくる。

顔を両手で持たれ左右に揺らされる。まじまじと観察され、匂いも嗅がれた。

「変な匂いはアイツらの匂いとして、血の匂いはしないね。良かった」

「すみません、報告したかったんですけど」

「分かってる。スマホ無かったもんね。君の荷物は私が拾って預かってるから、安心して」

「ありがとうございます」

弁償してもらう必要は無くなった。一安心である。

「でも、本当に良かった。匂いで追えないし、タロちゃんも一緒に居なかったから」
「運に恵まれました」

後ろに立つシオンの方に視線を向けると、ミオ先輩の視線もそちらへ向いた。

「その子は——ああ。君の家に居候してた子か。魔法使いなんだっけ？」

「そうですね」

「……え？ 今どこから出て来たの？ 何で私が居候してた事を知ってるの？ 魔法使

いって事も知ってるし……消さなきゃ」

「どうどう」

思考が追いついたらしいシオンの右手に光を集まりだしたのを見て、落ち着かせる。

ミオ先輩は勘が働いたらしく、シオンが何かし出した辺りで既に距離を取っていた。
流石であった。

「なんか物騒な気配なんだけど」

「ちよつと記憶消そうとしてるだけ何で」

「ちよつとで済ませていいレベルじゃないんじゃないかなあ!!」

「左手が無いだけマシですよ」

「……どういう意味? いや、いや。知りたくない」

再び危険な匂いを感じ取ったらしく、ブンブンと首を横に振るミオ先輩。賢明であった。

話を蒸し返す理由も無いので、聞きたい内容へとシフトする。

「因みに、フレアさんとかは?」

「ああ。異世界の人達とは別行動中。後でフブキの家で合流する予定なんだけど……来てそう? 疲れてない?」

「大丈夫です。元々お邪魔する予定でした」

「そっか。フブキも心配してたし、安心させてあげてね」

「分かりました」

頷いて返すと、ミオ先輩も満足げに笑顔を浮かべた。

「でも先にコンビニ寄ってもいいですか? お腹空いちやっただけ」

「家に帰れば、多少の食べ物はあるよ?」

「彼女の分もあるのよ」

シオンを示せば、ミオ先輩は納得した様子を見せた。

「じゃあ、私は先に戻って、フブキを安心させてくるよ。なるべく早く来てあげてね」
「はい」

頷き返す俺を確認すると、ミオ先輩はぴよんと跳んで、宵闇に消えていく。

その背を見送ってから、シオンへと視線を移した。

「行くか？」

「良かったの？ 一緒に行かなくて」

「だって大事な話の途中だったろ」

「……そうだね」

とはいえ、話自体は殆ど終わっているから。

「俺からはもう一言だけしかないんだ」

「何？」

「おかえり、シオン」

「うっ」

まだ言っていないかったその言葉を届ける。

シオンは、少しだけ怒りをみせ、何か文句を言おうとしたのか、パクパクと声にならない声を出して。

やがて観念したように、溜息を伴った諦めの表情をちらつかせ。

「ただいまっ！」

最後はいつものクソガキ笑顔を浮かべた彼女は、気のせいではなければ嬉しそうだった。

第2節（更新停止中）

REPLACE

例えば誰かに、ホロ学園の有名人を三人上げて？ と聞いたとする。

上がる確率が高いのは、集会などで壇上に上がる生徒会長の百鬼や、放送ジャックの常習犯である桐生会筆頭の桐生先輩。

次点で、生徒会の天音先輩や保健教諭のちよこ先、陽キヤ筆頭の天空やチア部の夏色先輩辺り。

ただ、今上げたメンバーが争うのは三人の枠の内二枠のみで、残り一枠はほぼ固定。

彼女は、周辺にある学校中在校生数二位の学校に対し、トリプルスコアをつける生徒数を誇るホロ学園において、9割を超える生徒に名前だけは聞いた事があると言わしめた生徒……いや、生徒かどうかとも怪しい人物。

その名を、はあちやまと言う。

下校途中、病院での診察帰りに、見知った背中を見つけた。

「赤井」

「あら、先輩。こんるーじゅ」

「こんるーじゅ」

制服を身に纏った彼女は、クォーターらしい碧眼に腰程まで伸びる金髪。金髪を彩るのは、彼女のイメージにあった赤いハートの髪飾りやりボン。名前を赤井はあと。るしあの同級生である。

「珍しい所で会ったわね」

「ちよつと病院にな。赤井は部活帰り？」

「違うわ。材料が無くなっちゃったから買い出し」

「買い出し？」

赤井の部活は、調理部だ。

そこで使われている食材は、調理部の顧問がメニューを決め、それに合わせて部費の中から購入しているはずである。ソースは顧問。生徒会経由で調理部の使い走りをさせられた時、直接聞いた。

だから、いまいち赤井の発言がぴんと来なかった。

「調理部で使うなら、纏めて買ってるんじゃないのか？」

「……ああ。そうじゃなくて、これは私の個人的な買い物」

「あ、成程」

勘違いしていたらしい。制服だから、つい学校関係の買い物だと思ってしまった。

そういうえば、赤井も一人暮らしだった筈だから、日用品や食材の買い物は普通にあり得る。

「そうだ、先輩、明日暇？ 暇だったら、放課後に付き合ってくれない？」

「明日？」

思い返すが、特に予定はない。やる事と言えば、同居人に食事を作るぐらいのものだ。

同居人の顔と冷蔵庫の中身を思い出し、問題無いかと結論付ける。朝食のついでに作っておけばいいだけだし、そうでなくても作り置きは何品かあるから温めれば食べられる。そもそもやらなくていいだけで、別に同居人も料理が出来ないわけではない。

「いいぞ、別に」

「ありがとう」

笑顔を向ける赤井へ、笑って返した。

翌日の放課後。赤井に呼び出された先は、調理部の部室や図書館などではなく、教室であった。

特定のクラスが使うわけでは無く、段階別授業や選択授業、補習とかで使われるような教室。使われる予定がなければ、放課後に誰かが近寄ることも無い、半空き教室の様

な場所だ。

この時点で、何となく展開は予想出来たのだが、呼ばれた以上は行くしかない。

ショートホールドルーム

S H Rを終え、掃除の為に机を運び終えた後、帰路に着いたり部活へ向かうクラスメイト達と別れ、呼び出された教室へ向かう。

一つ階を降り、渡り廊下を渡って。二つ階を登り、右方向へ曲がった先の一番奥の教室。

念の為数度のノックをするが、返事はない。まだ来ていないのだろうか。S H Rが長引いているのかもしれない。

中で待とうと、教室に入った。軽く教室内を見渡すが、やはり呼び出した張本人はいない。

振り返り、戸を閉め、教室内へと向き直る。バツつと飛び出してきた赤い影と目が合った。

「はあっちゃやまっちゃま〜」

「……はあっちゃやまっちゃま〜」

両手を上げ挨拶してくる彼女に、片手で返す。

きれいな金髪は何処に出しても恥ずかしくないツインテールに結ばれ、ツインテールの中にはハートのアクセサリが散りばめられている。碧眼の片方は、眼帯によつて隠

されていた。

これで下が制服ならアンバランスさに風邪をひきそうなものだが、下の服もゴリゴリのゴスロリでその心配も無い。此処が学校の教室であるというシチュエーション以外は、何の問題も無かった。

「久しぶりね、先輩」

「そうだな。数週間ぶりか。久しぶり、はあちやま」

はあちやまである。

時折学園に出没し、不祥事を起こしたり起こさなかつたりしている、謎の人物。桐生会との関係も疑われているが、真相は闇の中。

顔は赤井と瓜二つなのだが、はあちやまを赤井と呼ぶと「赤井……？」と目を剥いて威嚇、赤井にはあちやまの事を聞くと「はあちやま……？」と目を剥いて威嚇と全く同じ反応を見せてくるが、多分無関係。赤井に呼び出された先でのバツテイニングが多いが、そうでないときもあるのです、これも多分気のせいだろう。

「所ではあちやま。俺、赤井に呼び出されたんだけど、知らん？」

「はあとちやんならないわ」

「マジかよ」

まだSHR中なんだろうか。それか誰かに何か頼まれたのか。スマホを見るが、特に

赤井からの連絡はない。

「私は先輩が来るって言うから待ってたの。感謝してよね」
「そうなのか」

とはいえ、呼び出した本人が居ないのなら、仕方がない。

「赤井が来るまで少し待つか。はあちやまはどうする?」

「そうね」

俺の言葉に、はあちやまが腕を組んだ。分かりやすく、悩む動作を挟み、

「久しぶりに会ったんだから、もっとお話ししましょう? そうだ、勉強とか教えてよ」

と、そう言った。

「勉強?」

「こつちこつち」

ぐいぐいと手を引かれ、そのまま席に座らされた。

準備しておきましたとばかりに、二つ繋げられた机。その上にはノートと問題集が広げられている。

俺を座らせたはあちやまが、対面の席へ腰を下ろした。

「さあ!」

「いや、さあって言われても」

広げられた問題集に目を落とす。

去年解いた記憶のある問題だ。解けと言われれば解ける。だが、説明しろと言われると難しい。解答と解説では、必要な技術も習熟のレベルも違うのだ。学年順位が真ん中から数えた方が早い俺を舐めないでいただきたい。

戸惑う俺を見て、はあちやまがにやにやと笑う。

「先輩、まさか解けないんですかあ？」

「解けないだけだが」

「やっぱり解けないんじゃない」

「違う。解けないんじゃないって説けないの」

「解けないんですよ？」

「説けないんだよ」

「……？」

はあちやまが疑問符を浮かべたので、説くことにした。

「その問題の答えも示せるし、必要な途中式だって書けるけど、それを分かりやすく説明出来るほど理解してるわけじゃないから、教えるのは難しい」

「あー……そっちね。うん、まあ最初っから分かってたんだけど。分かってて乗ってあげてたの。分かる？」

「分かったから自分でやりな」

「……教科書見ながらやるから、それでも詰まったら教えてよね」

「それくらいなら多分出来ると思う」

そう答えると、満足げに笑うはあちやまが、鞆の中から教科書を取り出した。開きながら机に置き、問題集とノートと合わせて交互に見ながら、問題を解き始める。それを見て、俺も勉強しようと思っただけで鞆からノートと教科書を取り出した。

お話ししましょうから始まったはずだが、特に会話らしい会話も無く。黙々と、こなす事暫し。

「飽きたー」

はあちやまが音を上げた。

「飽きた?」

「うん」

「お菓子食べる?」

鞆の中から消費期限ぎりぎりであくなくなつた最中の詰め合わせを取り出して机に置く。それはそのままはあちやまに持っていていかれ、開封される。

「お菓子あるなら、早く出してよね」

「ええ……ごめん」

食べられたのは俺の方なのだが。

ぱくぱくと食べ進めるはあちやま。飲み物でも出してやろうかと、鞆から魔法瓶を取り出し、中身をカップへそそぐと、緑茶の香りがあふれた。魔法瓶とはいえ冷める前提だったから、最初から水出しである。

カップを差し出せばそれもひよいと持っていかれた。少々すすり満足げに一息ついて、再び最中。

よう食べるなど思いながら、最中を一つ手に取った。包装を取り、一口。疲れた頭と体に、甘みが広がる。

もう一息、頑張れそうだ。

びびびという電子音に、ハツつとした。

音源を探ると、俺のスマホ。取り出して時間を確認すると、思ったよりも時間が経っている。そのままタップと操作すると、メッセンジャーアプリにシオンから怒りのメッセージが入っていた。

先食べていいよとだけ返して、マナーモードにして鞆にしまう。

視線を上げれば、食べきられた最中の箱と包装紙が先ず目に入り、そこから更に上げていけば、自分の腕を枕に眠るはあちやまの姿。お腹いっぱいになって満足したのだろ

うか。

日も暮れかけで、教室内はすっかり暗い。目が良くなったから問題なく見えるせいで、明暗による時間間隔が無くなったのは、ちよつと問題かもしれない。

席を立ち、凝り固まった体をほぐしながら歩く。机の間を抜け、壁のスイッチを押した。

抵抗なくスイッチは押され、教室に電気が灯る。明るくなったことが分かったのか、はあちやまがもそもそと動き出した。

「はあちやま。いい時間だし、帰ろう」

声をかける。声につられるように、更に身じろぎし。やがてゆつくりと体が起き上がった。

目をこすり、ぼんやり周囲を見渡して。はあちやまの顔が俺の方を向いた。

「……おはよ、先輩」

「おはよう」

本日二度目の挨拶である。俺と同じく伸びをした後、はあちやまが壁時計を確認する。

「もう夜じゃん」

「確かに」

實際完全下校時刻間際だ。学校に残っているのは熱心な部活動の部員位なものだろう。

誰かに見つかると面倒なので、そそくさと広げていた教科書やノートを鞆へしまっているのはあちやまに倣い、俺も教科書やノートを鞆へしまいながら、尋ねた。

「今日はどうする?」

「先輩は先に帰って。私はやる事があるから」

「そうか。分かった」

学校ではあちやまと会った時は、基本的に一緒に帰るといふ事は無い。大体俺が先に帰らされる。

いつもの事なので、俺は教室を出ようと扉へ手をかけた。

「次はちゃんとお話ししましょう?」

「ああ。なんならまた家に来てくれてもいいぞ」

「考えとくわね」

振り返り、ひらひらと手を振るはあちやまへ手を振り返してから、俺は廊下へ出ると扉を閉めた。

鞆を肩にかけ、昇降口へ向かうべく、階段を下り、渡り廊下を超える。

時間にして五分かかることなく、昇降口へ着いた。靴を履き替えようと、自分の下駄

箱を目指そうとすると、横から声。

「先輩」

顔を向ける。

昨日と同じ髪型に、学校指定の制服を着た、赤井が居た。

「お疲れ、赤井」

「お疲れ様。私が呼んだのに、行けなくてごめんね？」

「別に。勉強してたから。今帰りか？ なら一緒に帰ろう」

「ええ、いいわよ。私と帰れることを光榮に思つてよね」

「ああ」

一旦別れ、自身の下駄箱へ向かう赤井を見送る。

「……相変わらず」

その先の言葉は、口にせず飲み込んで。俺も靴を履き替える為の下駄箱を目指す。その最中、ふと、窓から外を見た。

窓の外は中庭で、その向こうにさつきまでいた校舎が見える。

視線を上げていき、さつきまでいた教室の窓を見た。

電気はすでに消えているが、確かにその向こうには人影が――。

「先輩！ 何してんのよー！」

、声を掛けられ、そちらを向く。

既に靴を履き替えた赤井が、戸口からこちらを見ていた。

「すまん、今行く」

返しながら、もう一度さつきと同じ窓へと目を向け、赤井の方へと視線を戻した。

魔法を語る

きらきらと目を輝かせたタロが、俺の前に座っている。その尻尾は、はち切れんばかりに振られていた。

遊んでくれるの？ と嬉しそうに全身で語るタロを目に焼き付けてから、一度閉じて集中。

暫くして開く。

「……タロ、おいで」

『わん！』

呼べば嬉しそうに、飛び掛かってくるタロ。

見えているから問題なく、その小さな体を受け止める。

「ダメそうですね」

「そうだな」

横でその一連の流れを見守って居たるしあが、そう声をかけてきた。

ひよいと、俺の手からタロを持ち上げて、さっきまでタロが座っていた場所に戻す。

きよとんと首を傾げるタロを前に、再び目を閉じ、集中。開いて、名を呼ぶ。飛び掛

かってくるのを、受け止める。

ずっとこんな調子であった。

「ごめんなさいなのです、先輩」

「いや、俺の方こそ、物覚えが悪くてすまん」

「いえ。そもそも私がつとうまく教えられたら良かったのに」

「それなら、そもそも俺が迷惑かけてるわけだし」

「それを言ったら——」

こんな感じで、あーでもないこーでもない、お互いに自分が悪いと言い合う。

こんなやり取りが行われているのは、我が家のリビングであった。

るしあとの一件の後、週に四回くらいのペースで行われている、霊を見えなくする訓練。既に両手の指では数えきれない程度には練習しているのだが、なかなか成果が見られない。

最初こそ、初めてだから仕方がないとか、頑張りましょう等の言葉をかけてくれたるしあであったが、最近では自分の教え方が悪いのではと思いだしてしまつたらしく、事あるごとにこんなやり取りが発生するようになってしまった。

空気が気ままずくなり、食事をせすに帰ることも最近では多々ある。

申し訳なくて何とかしようとして自主練してはいるのだが、やっぱり効果が無い。

ずーんと沈むるしあを見て、何とかしなきゃと思っていると、リビングの戸が開いた。視線を向ければ、レジ袋を携えたシオンが、そこに居る。

「おかえり、シオン」

「ただいま。お客さん？」

「そういえば、話はしたけど会うの初めてか。こちら、潤羽るしあさん。俺の後輩」

「潤羽るしあ……ああ。死霊術士の。初めまして、紫咲シオンって言います」

「は、初めましてなのです。潤羽るしあなのです……本物だ」

シオンを見て、驚くるしあ。そういえば、魔界学園出身ならシオンを知らない人はいないと考えていた気がする。反応を見るに、あの言葉は冗談では無かったらしい。

「何してるの？」

「目の制御。幽霊とか常時見えてるのも問題だから、見えないように出来ないかって事で、教えて貰ってる」

「ふーん」

レジ袋をテーブルへ置いたシオンが、此方を向いたまま椅子へと座る。テーブルに肩ひじをつけ、頬杖をついてこちらを見る姿は、中々威圧感があった。

どの立場なのだろうか。ちらりと見れば、るしあも緊張しているように見える。

気にしなくていいと思うのだが、シオンの名前が出た時に驚いていた姿を思い出し、

難しいかと思ひ直した。

それなら、やはりここは一発俺が決めなければダメだろうか、気合を入れて目を閉じ、開ける。

「……たろー」

『わんわん!』

飛び掛かってきたその体を受け止める。

元の位置に戻し、再度。——失敗

戻し、もう一度。——失敗

もう一度。——失敗。

受け止めたままでもいたら、ペロペロ顔を舐められた。優しさが胸に染みる。

「本当にごめん」

「いえ。私こそごめんなさいなのです」

一人澆刺はつらつとしてゐるタロを除き、どんよりと暗い雰囲気はつらつが漂う。

お通夜とまでは流石に行かないが、中々重い。どうしようもなくなりそうな空気が漂い出した中、「ねえ」とシオン。

「何してるの?」

「……」

この状況では最上級に空気の読めない発言に、場の空気が凍る。からりからりと聞こえてきた音は、果たして現^{うつ}か幻か。とりあえずシオンが次の言葉を発する前に、俺は口を開いた。

「制御の練習だが」

「そうなの？ でも、アンタ目を開閉させてるだけじゃない」

「……」

否定出来なかった。滅茶苦茶集中して、瞬きをしているだけの自覚はあった。正直、いまいちピンと来ていない。

立ち上がったシオンがこちらに近づいてきた。俺の前にかがみ、じつと俺を見る。

「ふむ」

立ち上がる。

「治せないなら、一先ず制御だけでも出来るようにするって言うのは、いい考えね」

「え？ ……ありがとうございませすなのです」

「なんか煮え切らないんだけど」

「そんなこと無いのです」

ドヤと胸を張るるしあ。言い出したのはちよこ先だったはずだが、言わぬが花だろ
う。

「でも、教え方が違う」

「教え方？　でも、るしあはお父さんからこうやって教わりましたけど」

「貴方って潤羽家でしょ？　死霊術のサラブレッドなんだから、貴方のやり方でコイツが出来るようになるわけないじゃない」

「……」

言われてみればド正論なのだが、言い方のせいか、こいつに言われると無性に腹が立つのは何故だろう。

るしあも言い返してやりたそうな顔をしているのだが、如何せん思いつかないらしく、口元をむにやむにやさせている。

「目の制御って言うけど、それって要は魔力の制御。魔法を使ってるのと一緒なんだから。アンタ、魔法使えって言われてるのよ？」

「……」

成程、確かにそれは出来る気がしない。

俺から離れると、シオンはソファアールへ腰を下ろした。俺とるしあは、何となく床に正座したまま。上下関係が出来て居た。

「一応、前提から話しておく、アンタに魔法は使えるわ」

「そうなの？」

「目の維持が出来ているのがその証拠。幾ら魔界の目になったとはいえ、ちよこ先生が普段使ってる擬態を無視して角とか尻尾の生えた姿を見ようと思つたら、その目を働かせるための魔力は必要。でも魔法薬っていうのは、魔法の発動こそ出来るけど、一月なんて長期間の維持は出来ない。もって一時間とかそこらかしら。それなのに、ちよこ先生の姿が見えてるってことは、あなたには少なくとも目を働かせる魔力を持つてる。正確には、必要十分な魔力を作る事が出来るって事」

「成程」

魔界の目になれば、てつきり何もしなくても見えるもんだと思つていたのだが、そうでもないらしい。そういえば、ちよこ先生がミオ先輩やフブキ先輩の獣耳とかを、見ようとすれば見れると言つていたから、もしかしたらそれも、より魔力を込めればとか、そういうニュアンスだったかもしれない。

「ただ、アンタの場合は魔力の制御が出来ていないから、必要以上に目に力が入って色々見えてる状態。加えて潤羽さんの死霊術に引つ張られたから、そっち系の魔法効果も出てる状態ね」

「だから、魔力を制御して、見えないようにしようと思つたんですけど」

「そのためには最低限、正常な状態を知らないと無理でしょ」

「あ」

るしあの言葉を、シオンが一蹴する。

「とはいえ、どうしようかしら。言っちゃうと走り方を教えるとか、そんな類なのよね。速く走るコツを教えるとかはあつても、走り方そのものを教えるって無いでしょ」

「確かに」

歩く時よりも早く足を出すだけだ。もちろん細かい動作は色々あるだろうが。基本認識はそんな程度である。

早く足を出すやり方なんて、早く足を出す以外に思いつかない。

「うーん……」

シオンが顎に手を当てた。るしあも腕を組み頭をひねる。

俺はお力に慣れそうにもないので、夕飯の支度でも始めようかなと席を立った。

今日の夕飯はハンバーグである。俺とシオンとるしあ。後は誰が来てもいいようにもう二つ分の計五人前のたねは、るしあとの練習開始前に寝かせておいたから、後は焼くだけである。

サクツとサラダをこしらえ、付け合わせの野菜はソテー。スープは顆粒コンソメにお世話になる。後は白米。

「ご飯出来たよー」

「はーん」

「マイペースすぎるのです……」

声をかけると、リビングから2人が、ダイニングテーブルへと場所を移した。

盛り付けた食器類をカウンターに置くと、ふわりと浮いて、テーブルへと移動している。

「魔法の無駄遣いなのでは？」

「そう？ 使えるなら使つてなんぼじゃない？」

「いえ。さすがに配膳の為だけに、死霊を呼び出すのもどうかと」

「融通効かないわね」

「死霊術師たるもの、死霊への敬意は忘れてはいけません」

えへんと胸を張るるしあに、ふーんと、興味が無さそうな反応を見せる。実際無いの
だろう。こいつがたまに、歩いてすぐのコンビニにも転送魔法を使っている事を知つて
いる。シオンは、魔法に対して特別な感情は抱いていない。

「そういうば、聞いてなかったけど、シオンの家もるしあの家みたいにな有名な家なのか
？」

「あ。私も聞いたこと無いのです。紫咲家つてどの辺ですか？」

「別に、私の実家は名家でも何でもないわよ。普通の家。そう、この天才が産まれてしま
ったこと以外、何の変哲もない一般家庭よ」

「いただきまーす」なのです」

「アンタ達が聞いたんでしょ！」

全くとぼやきながらも、きちんと挨拶をしてから食べだす辺りに、育ちの良さを感じる。

「でも、なら魔法の勉強とかって大変だったんじゃないのか？」

「いや。楽しかったし、そこは別に平気だったんだけど。やりたい事をやれないのが辛かったわね」

「やりたい事？」

「魔力保持量って個人差があるから、魔力消費の大きい魔法なんかは、人によって使えなかったりするのよ。だから、保持量を増やすのは素直に大変だったわ。別に少ないわけじゃなかったけど、いぎそのタイミングで使える魔力が足りないから魔法が使えないとかあったら嫌だったし」

「……え？ 足りなくなったら増やそうとしたんじゃないかって、足りなくなったら嫌だから増やそうとしたんですか？」

「うん」

それは何というか。

「意識高過ぎなのです」

同感である。

「因みに魔力ってどうやって増やすの？」

「筋トレと一緒に追い込むのが一番……」

「……ん？ どうした？」

「いや、そつか。この方法ならありか。使える魔法もあるし。うん、いけるかも」

話の途中だったのだが、シオンが何やら考え込み始めた。

「考えるのはいいけど、食べちゃいなよ」

俺の言葉に反応して、シオンが食事を再開する。思い付きを早く試したいのか、心なしか食事の速度が上がった。

「何か思いついたみたいですね」

「そうだな」

「何か、心当たりはある？」

「いえ。正直全然」

間違いなく俺関係なので、悪いことにならないかは少し不安だが、そこはシオンを信じる他無い。

とりあえず、シオンが食べ終えたときに食べ終えていないの文句を言われそうだったので、同じく食事のペースを上げた。

何事もなかった

5年以上はかけていた筈なのだが、1ヶ月丸々つけていないと、やはり違和感を覚えるものらしい。

鏡の前で若干座りの悪いそれを少々弄り、納得のいく位置に持ってくる。

髪型をちよつと弄り、問題無い事を確認。

「……よし」

問題が無い事を確認してから、洗面所を出た。廊下を通り、リビングへ。

「あ、おはよー」

「おはよ」

椅子に座ってテレビを見ているシオンと挨拶を交わす。

「出掛けるの？」

「ああ。シオンは、今日の予定は？」

「なーし。何か用事が出来たら、その時は連絡する」

「分かった。俺は何事も無ければ普通に帰ってくる予定」

「物騒」

そう言われても。

「俺はもう出かけるから、洗い物だけ頼んでもいいか？」

「おっけー」

言うや否や、キッチンから、カチャカチャと洗い物の音。

数枚浮いた皿の周囲を、スポンジが勝手に動いて洗っている光景が、見ずとも想像出来た。

「所でシオン」

「ん？」

「変じゃない？」

「そんな事を聞いてくるのが変」

「辞めろよ」

「傷付くだろうが。俺だって、お洒落ってやつに多少気は使って無い事も無いんだから。」

シオンの視線が、俺の方を向いた。頭頂部からつま先まで何度か往復する。

「普通じゃない？　　というか、いつも通り」

ジャケットに、シャツに、ジーパン。ぱつと見小綺麗で、考えなくて済むから楽。

「まあ、しいて言うなら、眼鏡に違和感はあるけど。出掛ける時はかけて無かったよね？」

コンタクトじゃないの？」

「捨ててしまった」

マンスリーコンタクトを元々使っていたのだが、魔界の目になった折、テンシヨンのままに捨ててしまった。

だから久しぶりの眼鏡で、しかも出掛ける時につけるといいう事で、ちよつと不安だった。シオンの反応を見るに、大丈夫らしい。

「それにしても、見た目気にするなんて珍しいじゃん。デート？」

「……？ 違うが」

「あ、うん。ごめん」

何故か謝られた。

「じゃあ、行つてくる。出掛ける時は鍵かけてな」

「はい」

時計を見れば、約束の時間が近い。

財布とスマホをポケットに入れ、急ぎ家を出た。

駅前へ着くと、待ち人が手を振っていた。

振り返して、駆け寄る。約束の時間には間に合ったが、少し待たせてしまったらしい。

手の届く範囲まで寄ると、頭を触られる。何か入ってくるような、違和感を味わう事、暫し。手が離れた。

顔全体の内側に違和感。何だこれと思っていると、待ち人が不思議そうに首を傾げた。

「どうかしたの？」

「あ、いえ」

ふるふると首を振ると、少しマシになった。改めて、待ち人に会釈する。

「お待ちせしました、フレアさん」

「大丈夫。今来たところだから」

「そうですか。なら良かったです」

待たせてしまったかと思つたが、そうでもないらしい。

「今日は眼鏡なんだね。似合ってる」

「そうですか？　ありがとうございます」

お世辞だろうが、褒められたら嬉しいものだ。

つい意識して眼鏡の位置を直しながら、そういえば衝撃が来ないことに気が付く。

「きんつばとかノエルさんとは一緒じゃないんですか？」

「今日は買ひ物だつて。予約してたものが届いたみたい。きんつばは、ノエル一人だと

翻訳が使えないから、ついていったの」

「成程。じゃあ、わためは？」

「あそこ」

フレアさんが指さした先に、わため。そして、6名程が足を止めている。耳をすませば、微かに歌声も聞こえてきた。

「ストリートで、ああやって足を止めている人が居るのって、初めて見た気がします」

「そうだね。向こうだと、結構吟遊詩人の興行って結構見てる人いたんだけど」

「そうなんですか？」

「娯楽も少なかったし」

そういうと、フレアさんはちよつと寂しそうな顔をする。

「どうかしました？」

「……わための歌ってる曲が故郷の曲だから、ちよつとホームシックなだけ」

「ホームシックですか？」

「まあねー。2年以上こっちに居るし、久しぶりに帰りたいんだけど、なかなか難しく
て」

「2年……長いですね」

「ハーフェルフの寿命からすれば、あつという間の筈なんだけど」

そう言いながら笑うフレアさんを見て。

「関係無いですよ」

と、そんな言葉が口をついた。

「関係無い？」

「フレアさんがどれだけ長生き出来るのかは知りませんが、帰りたいた場所があつてもそこに帰れないなら、寂しいって思つて当然です」

俺の言葉を聞き、フレアさんがクスリと笑う。

「そうだね。うん。私は寂しい！ きんつばもノエちゃんもいるけど、やっぱり故郷が恋しいし、あんまり美味しくないけど向こうのごはんも食べたい！」

「きんつばとかノエルさんに慰めて貰つてください」

「……あの言葉の後にしては冷たくない？」

「自分がフレアさんを慰められるビジョンが見えなかったので」

もしかしたら地元の料理を作つてあげるとか、そんな感じの慰め方はあるのかもしれないが。異世界の料理だとそもそも原材料からして違うだろうから、やっぱりお力にはなれそうにない。

「これは、わための事を頼むのは辞めておいた方がいいかなー」

「……最後に決めるのはわためなのでは？」

「残念。この世界での彼女の身柄は私が預かっています」

「そうですか……。わためにはまた縁があればと伝えてください」

「諦めるのが早くない？」

片手をあげて別れの挨拶をすれば、待ちなさいとその腕を掴まれる。

流石に冗談だから安心してほしい。

「た、助けてー！」

「ん？」

呼ばれた気がして、フレアさんとともに視線を声の方へとむけた。

バタバタと走ってきたわためがそのまま俺の脇を抜け、俺とフレアさんの後ろへ隠れ

る。

何事かと思えば。

「お疲れ様です」

「そういうの良いから」

あの時のお巡りさんであった。

シツシツと、追い払うように手を振られる。そして、巡回へと戻っていった。

あの時と違い、注意する前に逃げだしたから、見逃してくれるらしい。

「ふー……まあ楽勝だったね！」

額の汗をぬぐう動作をするわためが、そんなことを言った。

「じゃあ移動しましょうか」

「そうだね」

「……聞いてー!」

移動先は牛井屋という事は無く、いたって普通のファミレスだった。

メニューを眺めるわための横で、フレアさんに渡された、わためをホームステイさせるうえで契約書を見る。

紙面に書かれている文字は、フレアさんの出身である異世界において、某ドラゴンに滅ぼされた国の周辺諸国で使われている公用語らしいのだが、まあ読めない。契約書としたいのだろうか。

しかし、読めなくても意味は分かった。翻訳の魔法の力は、読む文字にも対応しているらしい。

「でも意外です。現地人相手のこういう契約書ってちゃんとあるんですね」

「基本的には秘密にしているけど、一応現場判断で現地人との取引は認められてるからね。その時に使うこういう書面は用意してあるんだよ」

「……なら、ちゃんとこっちの言葉で書いた方がいいと思いますけど」

「あー……翻訳魔法があるからリテラシーは高いんだけどね。同じ理由で異言語習得への姿勢が低くて」

「ああ」

それに、この契約書を渡す想定をしている相手は、異世界側の情報を持っているだろうし、やり取りする上で翻訳魔法をかけられているはず。そう考えたら、態々こつちの言語で書くというのは確かに面倒くさい。

「気になるなら、頑張って書くけど」

「いえ。信じます」

フレアさんが俺を騙す理由も特に無い。とはいえ、今読まないと、次にいつ読めるかは分からないから、しっかりと読み始める。

ちらりと視線を上げて確認するも、フレアさんは、特に何か言うつもりは無いようで、読み終わるまで待つようだ。

そんな中、自分の事なのに蚊帳の外になっているわためが、声を上げた。

「ねえ、ふーたん。何か頼んでいい?」

「いいよ。好きに頼みな」

「じゃあ、メニューの端から」

「その頼み方はやめて、食べられるだけにしよう? ドリンクバーも頼んでいいから」

「ドリンクバーって何？」

「色々な飲み物が沢山飲めるよ」

読み進める。わたため滞在にあたっての費用は、持ってくれるようだ。報告義務のようなものがあるらしく、時々責任者に会って、色々と話さないといけないらしい。フレアさんやノエルさんでいいのだろうか。

「ねえ、ふーたん。このフライドポテトってお芋？」

「そうだよ」

「じゃあ、これとね。後はえつと」

「ゆっくり決めな」

守秘義務も発生するらしい。読んだ感じ、第三者には絶対秘密の様だ。とはいえ世界の為なので、流石に桐生先輩には話を通しておこうと思う。

……それ以外は、当たり障りの無さそうな内容だ。一先ず目を通していく。

「……決めた。じゃあ、これにするね」

「うん、分かった」

「後、ドリンクバー！」

「はいはい」

「……」

書類を置く。

「ねえ、ふーたん。俺、一番高いステーキセットがいい。後デザート」

「急にどうした」

「私も食べたい！」

なんか聞こえてきた親子みたいなやり取りに混ざりたくなっただけである。

「それじゃあ、わため。何かあったら連絡してね」

「うん。ありがとう、ふーたん」

立ち去るフレアさんに、わためと二人で手を振り、別れる。

今更だが、どこら辺に住んでるんだろう。聞いたことが無い。

見えなくなるまで見送ってから、わための方を向く。

「しかし、良かったのか？ フレアさんと相当仲良さそうだったが」

「折角だし、地元の人と一緒にの方が、色々見れそうじゃない？」

「まあ、言いたいことは分かるけど」

わためがいいならいいかと、考えを改める。

「買い物して帰るか。食事したばかりだけど、夕飯は何がいい？」

「食べたこと無いやつ」

「わための食事情は知らんのだけど……芋系でいい？」

「うん。いいよ」

じゃあまあ、コロツケとかでいいだろうか。

わためを促して、歩き出しながら、一応シオンには先に連絡しておこうと、メッセー
ジアプリでメッセージを送る。

『同居人が増えます』

送信……あ、やべ。

急いで送信を取り消そうとしたが、それより早く既読が付いた。

即レスされる。

『どういうことなのです？』

『……紹介するので、今晚どうですか？』

洗礼

「というわけで、今日から此処に住むわためです」

「角巻のためです！ よろしくお願いします」

「……？」

るしあへの誤送信から暫くして。

帰宅した俺は、リビングにて、シオンにわためを紹介する。俺に挨拶した時のどどどーって奴は使わないのだろうか。

暫く不思議そうに首を傾げていたシオンは、「ねえ」と口を開く。

「その子、異世界出身何だっけ？」

「ああ」

「アンタは通じてるみたいだけど、その子が使ってる言葉って、この世界の言葉？」

「違うぞ。俺は、翻訳魔法をかけて貰ってるから意味は分かるけど」

「あー、成程」

シオンがソファァーから浮き上がる。

ギョツつとするわためをよそに、ふわふわとそのまま近づいてきたシオンが、俺の頭

に触れてきた。

シオンの手が発光し、フレアさんに翻訳魔法をかけられた時と同じ、何かが入ってくるような感覚。僅かな気持ち悪さに頭を振れば、動くなとばかりに両手で捕まれる。

「……オツケー」

「もういい？」

「大丈夫」

暫くして、手が離れた。

元々座っていた場所に戻ったシオンが、トントンと数度自分のこめかみを叩いた。

「もう一回喋って」

「え？ えっと、角巻のためです」

「うーん……」

トントン。

「もう一回」

「また？ 角巻のためって言います」

「ちよつと違うか」

トントン。

「もう一回」

「もー！　こんばんどこどどー！　世界を旅する脱畜吟遊詩人羊！　角巻わためです！
わためって呼んでね！」

「……あ、どうも。紫咲シオンっています。よろしく、わため」

話は終わりだとばかりに、シオンがソファーへ戻っていく。こちらに視線を向けたわためが、シオンを指さしてプルプル震えている。落ち着け。

「何してたんだけ？」

「私にかけてる翻訳魔法の調整してたの。その子の言語、魔界の記録に無かったから」
「……へー」

良く分からない。

翻訳魔法にもバリエーションがあるのだろうか。まあ、世界が違うなら、種類はあり
そうだけど。

詳しく聞こうと思ったところで、ぴんぽーんとチャイムが鳴った。

壁に着いたモニターを見れば、どくろの着いた緑のお団子が覗いている。
「ちよつと待ってて」

『了解なのです』

マイクのボタンを押しながら声をかければ、るしあからの返事。

ちよつと待っててと、わために告げて、席を立ち、玄関へ向かう。

スリッパを用意し、かけていた鍵を開け、戸を開ければ、黒のワンピースに身を包んだるしあが待つていた。

「お邪魔するのです」

「あ、はい。いらつしやい」

どうぞと促すと、靴を脱いだるしあが、ずんずんと廊下を進む。

それでもきちんと靴を整えていくのを忘れぬ所は、礼儀正しいなと感心しながら、軽く玄関マツトを直す。サンダルを脱いで揃えた時には、るしあの姿を既に見えず、リビングに居るようだった。

後を追い、廊下を進む。

リビングに入り、見渡せば、窓際に追いやられ、ガクガクと震えるわためと、それを見下ろするしあが居た。

るしあの髪色はピンクに、長さはロングに変わっている。からからという音もそこかしこの影から聞こえる。多分、魔力が暴走しているんだと思う。

「で？」

「ひい」

「貴女、名前は？ どこ出身？ 何で先輩の家に住もうとしてるの？ ていうか、その服何？」

「わ、私の名前はわためつて言います。辺境の産まれで、此処にはこの世界に滞在中の宿にさせて貰う話を貰ったからです。服装は、羊の獣人の普段着的な奴で」

「は？ 意味分からないんだけど」

「あわわわわ」

ビビってる割にきちんとした説明だったのだが、るしあに一蹴される。

「ちゃんと喋ってくれないと分かんないんだけど」

「え、えーとえーと。私、わため。辺境、産まれ。この家、宿。服、普通」

「は？」

「た、助けてー！」

ばたばたと逃げ出したわためが、俺の後ろに回る。

逃げてばつかだなどと思いつながら、しかし少し目に余ったので、るしあに言う。

「るしあ。流石に意地悪が過ぎるんじゃないか？」

「何言ってるのです。ちゃんと喋ってないの、その子ですよ」

「わため、ちゃんと喋ってるもん！」

「ちゃんと喋ってるそうだが」

「ちゃんと喋ってるなら、なんでるしあに通じないんですか!! さつきから、変な事ばつ

かり言つて！」

「……うん？」

どうにもるしあが嘘をついているようにも見えなかった。

とはいえ、翻訳魔法がかけられているはずの、わための言葉が伝わらないというのは考えづらい。

何故か悩み、先程のシオンの言葉を思い出し、彼女の方を見た。

「……シオン」

「何？」

口元を抑えて肩を震わせていた同居人に尋ねる。笑ってやがるコイツ。

「何とかしてくれ」

「はいはい」

立ち上がり、シオンがるしあの方へ移動する。

ほんと、先程と同様に、シオンはるしあの頭に触れた。

「抵抗しないでね」

「な、なんなのです、急に」

直後、シオンの手が発光し、るしあの顔に驚きが浮かぶ。

「抵抗しない」

「うう」

俺のように頭を振ることはしなかったが、微妙な顔を浮かべるしあ。少し経ちシオンの手が離れる。

「おっけー。わため、ちよつと話してみて」

「……………よろしくお願ひします」

「……………聞こえるのです」

伝わったらしい。多分、先程言っていた、翻訳魔法の調整とやらをしたのだろうか。これでとりあえず会話に困ることは無さそうである。良かった良かったと思つていと、からりと小さな音。

「…………」

視線を向ける。玄関の方へ続く扉が、ゆっくりと開いていた。

自然に動いている様子ではない。誰かが故意に、ゆっくりと扉を開けている様子。見れば、ドアノブには細く、白い何かがあった。

徐々に開かれていく扉。比例するように、俺の服を掴むわための力が増していく。やがて、眼窩が此方を覗いた。ひえと声を俺が上げるより早く。

「ひいひいひいひい」

わための悲鳴。逃げ出そうとしたらしく、俺から手が離れた。

直後、からからからと、合唱がわための方から響く。

「た、助けてー!!」

二度目の悲鳴。見れば、骸骨達に抱え上げられているわためが、じたばたと暴れている。

「先輩」

「……」

すべての元凶であろう後輩の声が、リビングに響いた。

「客間、お借りしますね」

「……お、お手柔らかに」

「分かっているのです」

本当だろうか。

歩き出し、リビングを出ていくるしあ。その後を、わためを抱えた骸骨達が追っついていく。

「ああああ——」

ばたんと、扉が閉まり、声が聞こえなくなる。

さて、夕飯の準備しようかなと、現実逃避しながら、キッチンへ向かおうとして、がしりと服を掴まれた。

振り返ると、シオンが俺の服を掴んでいた。

「ど、どこ行くの？」

「どこって、料理だが」

「そう。一緒にいてあげてもいいけど」

「……」

ビビっているらしい。まあ、目の前で骸骨があれよあれよと人一人持ち去るのは、確かにホラーだ。

「じゃあ、頼む」

「ま、任せて！」

グツッと意気込むシオンと一緒に、キッチンに入る。

直ぐ使うからと出して置いたジャガイモの封を切り、洗い。半分ほどをピーラーと共にそのままシオンへ。

「皮むき頼む」

「えー」

「そこにいるならやってくれ」

「しようがないなー」

受け取ったシオンが、じゃがいもを持ち上げた。しかし、ピーラーを手取ることは無く、代わりに淡い風が吹く。すると、じゃがいもの皮が、剥け始めた。

なるべく繋がった状態にしようとしていたようだが、うまくいかないようで、ぶつぶつと切れては、その切れ端が三角コーナーに捨てられる。凸凹したじやがいの皮を一纏めに剥くのは至難の業だと思う。

集中したいかと思ひ、声を掛けないようにしようと思つたのだが、それより先に、シオンの方から声がかかった。

「ねえ、今日はどうだった?」

質問の意図が一瞬掴めなかった。

「どうとは?」

「だから、目よ。目」

「ああ」

そうだったと思ひだす。

「何か違和感はある?」

「今の所は、特に無いかな」

「そっか。まあ、アンタにとつてはそれが普通なんだけどね」

「そりやそうだが。やっぱ、見えないって言うのも、変な感じだ。今日会つたフレアさんだって、長い耳じゃなくて普通の耳だったし」

「元の状態に戻さなくても、私がアンタから魔力を奪い続けるって言う手もあるわね」

「手間じゃん」

「……確かに」

ようやく一つ、剥き終えたシオンが、それをボールへ戻し、新しいじゃがいもを手にとった。

しよりしよりと、じゃがいもの皮が剥けていく。よく見れば、じゃがいもの皮が薄い。可食部がごっそり皮に付いているという事は無く、しっかりと剥いていた。

魔法を使えるから、というだけでは説明が出来ない器用さ。手元に視線を落とし、俺ももう少し薄く出来ないかと挑戦しながら、口を開く。

「そういえば、シオン。さっき俺に触った時に何してたんだ？ 何かが入ってくるみたいで気持ち悪かったんだけど」

「入ってくる？ ……ああ、魔力の流れじゃない？ あの時は、アンタにかけられた翻訳魔法から、わための言語を解析したかったから、その為に流し込んだ私の魔力を感じたんだと思う。試してみましようか」

そういつたシオンが、俺の腕をつかんだ。

少し間があけ、何かが入り込んでくる違和感。成程、流れ込む感じと言えば、その通りだった。とはいえ。

「なんか、掴んでる所じゃなくて、左肩辺りに違和感を覚えるんだが」

「そう。じゃあ気のせいじゃないわね。腕をつかんだ場所じゃなくて、左肩を経由して、魔力を流したし」

満足そうに頷き、シオンは掴んでいた手を離れた。

「魔力をきちんと感じられるなら、正常な状態を覚える事は、問題なさそう。あ、でも、ちゃんと調子が悪くなったら早めに言う事。今のアンタは、全力疾走直後の状態をずっと続けているのと変わらないんだから。昨日だって、魔力を抜かれた直後は、だるかったでしょ?」

「ああ、うん」

思い出す。

昨日の晩から始まった、シオン考案の魔力の制御訓練。その第一段階。壮絶な怠さを抜けたその先。

結果として、現在、俺の目は何の事は無い、ただの目になっていた。

昨日の夜、今日の夜

客間とされている和室の中に、骸骨達の手によりわためは連れ込まれた。

電気が点いていないせいで、暗い。

明るい所に居たせいで、目が慣れるのに、暫く時間がかかる。

漸く目が慣れると、そこは不思議な部屋だった。

紙の壁、草で編まれた床。さっきまでいた、木の床とは趣が違う。

この部屋を借りたいなんて、そんな現実逃避を暫しして。恐る恐る、わためは振り返る。

「あの、るしあさん」

尋ねるがるしあからの答えは無く。

代わりとばかりに、からりからりと、そこから中から音がする。

先程の件で、音の原因が分かっているわためは、「ひい」とひきつった声を上げながら、周囲を見渡す。

そこかしこから現れる、骸骨。また、骸骨。

死霊術なんて言葉を知らないわためにとっては、その光景は悪夢でしかない。

「……さて、わためちゃん」

声を掛けられ、わための肩が跳ねた。

視線を、るしあへ移せば。闇の中でも分かるほどに、赤い瞳が煌々と輝いていた。

「色々、聞かせて貰えるかなあ?」

先日の晩。わためとフレアさんと会う前日。

るしあを交えた3人での夕飯を終えた後、ダイニングからリビングへと場所を移していた。

場所を移すと言っても、壁等で仕切られているわけでもないから気分の問題でしかないのだが。

それでも、気分を改める、という意味では効果があつて、ソファーに座るシオンの前で正座をする俺とるしあは、すっかり生徒の気分だった。

おほんと、シオンが仰々しく咳ばらいをする。

「まあ、やろうとしてることは単純なの。アンタから、一時的に魔力を全て奪うわ」

「セリフの悪役感が凄い」

「魔界でそんな事を言ったら、暴動が起きますよ」

「黙りなさい」

怒られたので口を噤む。

「現状、アンタの問題点は目に魔力が行き過ぎている事。そのせいで、見えなくていい物が見えてるし、るしあちゃんの影響で死霊術まで発動してる」

「そうだな」

暇じゃよと言わんばかりに、顔にしがみつくタロを見ながら答える。

「ちよつと、退いてましようね」と、るしあに連れていかれるタロ。んつんと、シオンは再度、咳払い。

「じゃあ、なんでアンタが目に魔力を与えすぎているか。原因は幾つかあるでしょうけど、1番はやっぱり制御出来ないから。そのせいで、必要以上の魔力が、現状唯一魔力を使う器官である目に多く集められている……って、所だと思う」

「成程？」

分からん。とりあえず、目に沢山魔力が吸われてる事だけ分かった。

「でも、聞いている限り、結局制御しなきゃいけないって事なんだろう？ それについては、さつきシオンが言ってたじゃないか。走り方を教えるみたいなの、こう、教える類の物じゃないみたいなの事」

だからシオンは悩み始め、だから夕飯を作り始めたというのに。こくこくと、同意するようになるしあが首を縦に振る。

「正確には、正常な状態を教える事が、そういう事って意味で言ったの。言っとくけど、魔力の制御を教えるだけなら、出来るわ」

「……え？ そうなの？」

「ただ、それは最低限、アンタが魔力を感じられる状態。要は、最低限走るって言う事が何かを知って、実行出来る状態でないといけないの。魔力の制御って言うのは、魔法の効果を上げたり、魔力の消費を抑えたりって、 α の技術を教えるって事だから」

「ああ」

シオンの言いたいことが分かってきた。

「つまり、シオンが思いついたのは、俺が魔力の正常な状態を学ぶ方法って事なんだな」

「そういうこと。そのために、アンタの魔力を奪うわ」

「ちよつとそこが繋がらないんだけど」

　　というかワードチョイスが物騒なのはわざとなのだろうか。

「さつき言った通り、アンタは一応魔法を使うための必要十分な魔力を体内で作れる状態にはある」

「言ってたな」

「それでも実感出来ないのは、多分魔力を生み出せるようになる間、ちよこ先生の魔法で眠り続けていたから。起きたら変わり切ってて、それに体が慣れていたから、違和感を

覚えなかったんだと思う」

「……ああ。そういえば」

目が変わって数日間、眠り続けていたことを思い出す。

「要は、その時間を追体験するの」

「追体験……。シオンの魔法で俺から魔力を抜き取るから、その後、魔力が作られるのを体で感じろって言う意味か」

「そうそう。それが問題無く済んだら、改めて制御について教えれば、魔法が使えるまでいかずとも、オンオフとかハイローくらいの制御は出来るようになる……はず」

「ふむ」

理解は出来た。しかし、そうなること。

「目はどうなる？ 見えなくなるのか？」

「そうなるわね。今の状態は魔力によるものだから、魔力が無くなれば、見えなくなるわ」

「見えなくなるの？」

「盲目って意味じゃないわ。目薬を差す前みたいに、コンタクトをつける必要が出てきて、後は幽霊とか角とかが見えなくなるって事」

「あー」

それはちょっと複雑かもしれないけど。まあ、一時的ならいいかと、切り替える。

「他に質問は無い？ 無いなら、さっさと初め——」

「……るしあは反対なのです」

「——ふーん」

動き出そうとするシオンを遮るように、るしあが声を上げた。シオンの視線が、るしあに向く。

「どうして？」

「だって、危険なのです。魔力を全て奪うなんて、そんな事」

「そうなのか？」

「魔界の事例の中には、身の丈に合わない大魔法を使った結果、魔力を著しく欠乏し、生死の境を彷徨ったり、酷い時だと亡くなる事もあるのです」

「……え、マジ？」

「本当」

「お、おう」

シオンにも聞けば、それがどうしたと言わんばかりに肯定される。

実際、そうなのかもしれない。少なくともシオンは、自身の魔力量を鍛える為に、自身を追い込んでいたらしい。その追い込み方が、果たして彼女が俺に施そうとしている

事と同じか分からないが、全く的外れという事も無いだろう。少なくとも、魔力量増強の手段の話から、今の方法を思いついた時点で、全く無関係という事も無いだろうから。シオンは溜息を一つこぼし、るしあに向き直る。睨むような表情のるしあに、シオンは平然としていた。

「魔界出身なら、確かに生体活動の一部に魔力を用いているから、著しく魔力を失えば生命活動に支障をきたすことはあるけど。こいつは人間の世界出身で、魔力を使っているのは目だけなんだから、大丈夫よ」

「先輩が魔法薬を使ったのは目だけじゃなくて、ミオ先輩の攻撃の怪我を治すのにも使いました。もしかしたらその時から、生体活動に魔力を使っていないとも限らないのです」

「あ、やっぱりそうなんだ」

なんとなく察していたけど詳しく聞いていなかったことが、さらっと暴露された。

やっぱり使われてたのか。まあ、明らかに傷の治り早かったし、ちよこ先にも病院で謝られたしな。

びくりとするしあが肩を震わせる。やってしまったという表情を浮かべる彼女の正面に居るシオンが、俺ヘジト目を向けてきた。

「……そういえば、聞いてなかったわね」

「俺も確証が無かったから。説明も受けてないし」

「……………他に何か隠してるなら、早めに言っておきなさい」

「……………多分無い」

正直自信は無かった。

「——とにかく！　そういう事なので、先輩から魔力を全部抜き取るとか、反対なので。もつといいやり方がある筈です」

「大丈夫。さつきも言ったけど、魔力を使っているのは目だけ」

「だから、それは」

「分かるから、言ってる」

有無の言わせぬ口調のシオンに、るしあは言葉を詰まらせた。

一方で、俺には疑問符が浮かぶ。

「シオン、気づいてたの？　魔法薬の事？」

「山小屋でアンタの事を見つけた時にはね」

「すげー」

「当然よ」

本当かどうかは分からないけど。胸を張るシオンへ、ぱちぱちと拍手を送る。

「で？　他の質問が無いなら始めるけど」

「……無いのです」

「そ」

視線を逸らしたるしあ。シオンは俺へと手を翳す。

「るしあ」

「……はいなのです」

「ありがたいな。俺じゃ、気が付かなかったし、知らなかったから、助かったよ。お陰で安心出来た」

「……でも、意味無かったのです」

「そんなこと無い」

少なくとも、手を翳すシオンに恐怖を覚えないのは、シオンへの信頼は勿論あるが、るしあが質問してくれたからだ。

……ていうか。

「そもそもお前の説明不足が原因だぞ」

「大丈夫って分かってるのに説明するの面倒じゃない」

「気持ちには分からないでもないけど」

そのせいであるしあど若干揉めたという事実は、しっかりと反省して貰いたい所である。

「……じゃあまあ、頼む」

「おっけー」

シオンの手が光り、直後、何かを吸い出される感覚に襲われる。ぐらりと揺れた体を、るしあに支えられた。

「ちよっ。シオンさん、本当に大丈夫なんですか?！」

「大丈夫大丈夫」

軽すぎて不安になってきた。吸い出される感覚はまだ続く。

時間にしてどれほどか。やがてシオンの手の発光が収まり、ぐつたりと体の力が抜けた。

倒れそうな体をるしあに支えられる。礼を言わねばと顔を上げて、るしあの顔を見ようとするが。

「……先輩。何でるしあ、睨まれてるんですか」

「すまん、見えない」

「あ」

しよぼしよぼする目をこすり。

ようやく力が入れられるようになった体に鞭を打ち、起こす。

「思ったよりきつい」

「想定より体に魔力が馴染んでたのね。ごめん」

「軽い」

ピントの合わない目に少々イライラしながら、眉間を揉む。

「……：そういえば、どれくらいこの生活を送らせる予定なんだ？」

「うーん。経過次第」

「あ、はい」

油が跳ねても、目に入る心配が無いのは眼鏡の利点だなと思いつつ、コロツケを揚げ切る。

千切りキャベツに立てかけるように並べ、後はご飯やお味噌汁を装う。

なんか、いつもの夕飯みたいだなと、わための歓迎用に拵えた筈の夕飯を暫し眺めてから、今更どうしようもないので、ダイニングテーブルへと配膳する。

「さて……：わためとるしあの話し合い、終わってるかな」

「ジンギスカンになってたりして」

「うーん……」

流石にそれは無いだろうけど、過度のトラウマが植え付けられている可能性は否めない。そもそも骸骨に抱えて連れて行かれる時点で、まあまあトラウマものだ。

大丈夫であることを信じ、わためとるしあを呼ぶ為に客間へ向かう。

歩いて数分。客間の前。

「……」

空気が重いというか、禍々しいというか。

正直開けたく無いなあと思いつながら、俺は扉をノックした。

「るしあ。わため。飯出来たぞ」

「……」

返事が無い。ただの……辞めておこう。

深呼吸して、ドアノブに手をかける。頭の中でカウント。

3……………2……………1……………1……………2……………。

「おらあー！」

一生カウントダウンが終わらない気配を感じ、気合一発、一気に開ける。

開け放った襖。その奥に広がる地獄絵図。

壁際に、自分の首であろう頭蓋骨を打楽器にしている骸骨がずらりと並び。

中央のテーブルの周りでは、骸骨達が正座をし、何やら崇めていて。

テーブルの上にも骸骨が数体。そして。

「お、下ろしてー！」

「ふはは！ さあ吐け！ 吐くのですー！」

その骸骨達に胴上げされているわためと、一緒に胴上げしようとしているらしいのだが、届いていないしあが居た。

「……テーブルに、乗るな！」

閑話のような放課後

「おはよう、大空」

「おはあああああああああああ!!」

「……」

「ちよつと距離置くなよー!」

朝の開幕一番に発狂されたら、誰でもこうすると思うのだが。周りの生徒も、何事かと、こつちちを見ているし。

目が合った知り合いに挨拶を返ししながら、大空が落ち着くのを待つ。少しして。

「……おはよー」

「おはよう」

落ち着いたらしい大空が、改めて挨拶を交わす。

「いやー、吃驚したー」

「俺の台詞なんだが。何だ、そんなに驚くことあったか?」

「本気で言ってる? そんな眼鏡かけてるのに」

そう言う大空は、多分俺の事を呆れた視線で見ていると思う。

「ていうか、何処に売ってるの。その瓶底みたいな眼鏡」

「駅近スーパーに隣接してるジョークショップ」

「やっぱ偽物じゃねーか」

返しながら、俺はかけていた眼鏡をはずした。外した眼鏡は胸ポケットに刺し、視力矯正効果がきちんとある眼鏡を掛けなおす。

眼鏡を掛けたら、大空の顔がよく見えた。きよとんとした顔をして、俺を見ている。

「あれ？　眼鏡は本当に掛けるんだ。ていうか、よく見たら瞳の色、黒くなってるし。カラコン外したの？」

「切らしちゃって。暫く眼鏡」

「成程」

かちやりと眼鏡のブリッジを指で押し上げると、うーんと、大空は首を傾げた。

「どうした？」

「何か違和感ある」

「そう？」

今掛けているのは、普通の四角いレンズの眼鏡なのだが。

「四角いレンズに太い黒フレームって、何かかつちりし過ぎてる感じ。君、そんな感じ

じゃないでしょ」

「失礼な。家の留守を任せる身として、きっちりとは家は守ってるぞ」

「本当に？」

「……」

まあ、居候二人位居るし、その場の勢いとかで行動することは多々あるけど。

「君は多分細かいフレームに丸いレンズの方がいいと思う。そっちの方が、優しい印象だし」

「ふむ……」

自分では良く分からないが、大空がそう言うのならそうなのだろう。

二代目である今の眼鏡を買って数年。買った頃よりも視力は悪化していて、度数が合わず、見えづらさを覚える事もあったし、いつそ眼鏡を買い替えてもいいかもしれない。

いつまで常時眼鏡を掛けるのかは分からないが、魔力が無くなると見えなくなるのならば、眼鏡やコンタクトは持ち歩いた方が良さそう。時々しかつけないなら、多少荷物になるが定期的に買うコンタクトより、買ったら基本終わりの眼鏡の方がいいかもしれない。安い買い物ではないが、何度も買い替える物でもないし。

「因みに、今掛けてる眼鏡はどうやって選んだの？」

「二人で眼鏡屋行って、特価品の中から決めた」

「何で、そんな風に決めちゃったかなあ」

「何でも良かった」

「ああうん。そうっすよね」

呆れ顔になる大空。そんな顔をされても困る。この眼鏡を買った頃はまだ両親と一緒に方々へ移動していた時期で、引越先で人間関係を築くという事が殆ど無かったから、見てくれを気にしなかったのである。

見てくれを気にして、コンタクトにしたのは今の生活になったからだ。眼鏡を掛けた自分の顔に、違和感を覚えたから、コンタクトにした。

「なんなら、私が選んであげようか？」

「選ぶって眼鏡を？」

「話の流れ的に眼鏡じゃなかったらやばすぎるだろ」

まあ、確かに。

「選んでくれるなら、折角だし頼んでいいか？」

「勿論。スバルにお任せッス」

とんと、胸を叩く大空。

「いつにする？」

「今日の放課後とかどうだ？」

「……いや、流石に早すぎじゃない？ まあ、私は開いてるけど」

「今の俺じゃないぞ」

「へ？」

視線を移せば、銀髪赤眼の生徒会長、百鬼。今の目だと、額に映えている筈の角は見えない。

「よっ。二人共。おはなきりー」

「おはよっす」

「はよー」

「なんだ、逢引の約束？」

「……七対三」

「いや、肉の話じゃないが」

「そうなのか？」

じゃあ、あいびきってどういう意味だろう。大空に視線を向けたが、大空も良く分かっているようだった。

「逢引って言うのは、デートって事」

「デート？ 百鬼と大空が？」

「いやいや。何で余とスバルなんだよ」

「でも約束してたじゃんか」

俺越しだったが。今日の放課後に。

「……確かに。しようがない、スバル。余と逢引にいくぞー」

「いくぞー、じゃないですから」

おーと腕を突き上げた百鬼の更に後ろから声。その声に、百鬼の動きがぴしやりと止まる。

百鬼の向こう側を覗き込めば、此方も手裏剣と羽の装着が無い、天音先輩の姿があった。

「おはよ。二人共」

「おはよーございませす」

「ごめんね、邪魔しちゃって。今日の放課後は近隣の学校との生徒会の会議があるから、生徒会長はデートに行く暇は無いから、安心してね」

「はあ」

「ほーら。朝から打ち合わせあるんですから行きますよ」

「い、嫌だ！　せめて一緒に登校位させてくれ！」

「はいはい。今度にしてくださーい」

文字通り、鬼の目に涙を浮かべながら、いやいやと駄々をこねる生徒会長を、天音先

輩は引きずっていく。

流石のパワー。未練がましくこちらに手を伸ばす百鬼を見て、スバルと共に視線を下げる。

やがて、百鬼の声が聞こえなくなった。視線を上げれば、何事も無かったかのような、いつもの朝の風景である。

「生徒会長つて大変なんだな」

「そうだね……でも、合同の話し合いってなんだろう？」

「確かに。何かあったっけ？」

学校合同で行うような、催し物がある話は、聞いたことが無い。何かあるんだろうか。

今度、手伝いの時にでも聞いてみようか、そんな事を思っていると。

「それで」と大空。

「どうなの？ 今日放課後でいい？」

「ああ。大丈夫」

なんか、デートだと茶化された事を思い出し、こそばゆさを覚える。

「じゃあ、放課後、頼む」

「……うん、分かった」

恥ずかしさで大空の方は見えないが。

多分、似たような顔をしていると思う。

時間は経ち、放課後。

「あ。おーい」

先にHRが終わったらしい大空が、昇降口で待っていた。

手を振って、駆け寄る。

「すまん、お待たせ」

「大丈夫ツスよ。それで、どうする?」

聞かれて、俺は顎に手を当てる。

「実は俺、この街の眼鏡屋って全然知らないんだよな。大空は?」

この街に来てから一度も眼鏡屋に用事が無かったから、全く場所を知らない。

「知らなかったかもしれないんだけど……スバルもなんだよね」

「だろーな」

眼鏡どころかコンタクトも付けていない超健康な目をしている大空が、そこに用事があるとは思えない。

「適当に駅前を探す? 何となく見かけたことがある気がするし」

「そうするか」

連れ立ち歩き出す。

その最中、ふと視線を感じて振り返る。

感じた方向は生徒会室があつて、そこにいる人物と、多分、目が合った。

「怖っ」

「ん？ 何が？」

「いや。百鬼が凄い目でこつち見てたから」

「そうなの？」

大空が振り返る。俺と同じく生徒会室の方を見て。目を細め。

すこしして、「あつ」と声を上げた。

「ホントだ。おーい！」

手を振りだす大空。百鬼の方を見れば、ややぎくしゃくとした動きで、此方に手を振っているのが、何となく分かる。

暫く手を振りあつていると、百鬼の背後に影。その正体が誰だか分かるよりも早く、百鬼は引きずられていった。

「あやめ……おつなきりー」

「おつなきりー」

エールを込めて別れの挨拶を済ませ、俺と大空は駅前に向かつて歩き出した。

幸い、駅から程遠くない場所に目的の眼鏡屋はあり、そこに入る。

全国チェーンで、対象年齢が若めの店だ。安いフレームなら、レンズ込みでも1万円を切るのがいい。

とりあえずあまりお高いのは好まないの、その辺から選び始める。

「どんなのがいい？」

「どんなのかー……丈夫な奴？」

「まずそこ？」

長く使うのなら、大事な事だと思っただが。

「大空。頼むから選んでくれ」

「……まあ、スバルが選ぶって言ったけどさー」

うーんと呟きながら、適当なフレームを持ち上げ、差し出してくる。

掛けている眼鏡を外し、それを装着。自分では良く分からないので、大空の方を見る。

「似合う？」

「……なんか違う」

ダメらしい。外して、元あった場所に戻す。

その間に、大空は新しいフレームを手に取り、差し出してきた。

掛ける。

「どうでしょう」

「……なんか違うんだよな」

これもダメらしい。外して戻す。

まあ、眼鏡を掛けた俺自体、大空にとっては馴染みが無いから、眼鏡を掛けていると
いうだけで違和感を覚えるのかも知れない。

頼んだのは俺なので、いくらでも協力する覚悟である。

「はいこれ」

「うむ」

太いフレームの四角レンズ。

「真面目過ぎてイメージと違う」

「俺の事を不真面目みたいに言うの辞めようか」

「これは？」

「ふむ」

フォックスというらしく、キツネの目のように外側が吊り上がっているフレーム。

「似合うと思う？」

「いいからいいから」

「……はい」

「えつと次は」

「おい」

近くの鏡で顔を確認する。正直、今付けている物より似合っていないくて、これを掛ける位なら何も見えない状態で過ごそうとすら思う。

俺の眼鏡を選ぶ選択肢から、フォックスが消えた。

「これ」

「はい」

フォックスじゃなかったので掛ける。

丸いレンズで、今付けている物よりもレンズサイズが大きい。

「悪くないっすね」

「そう?」

「レンズ大きすぎではと思ってしまったが。まあ、掛けている分には気にならないけど。」

「一先ず大空の琴線には触れたらしい。決定したのかなと思えば、回収された眼鏡は元の位置に戻される。」

「とりあえずキープって事で。次これ」

「おー」

差し出された眼鏡を素直に受け取り、掛ける。

「次これね」

「りよーかい」

まあ、とりあえず大空は楽しそうで、何よりだった。

「……ん？ あれって、もしかして」

閑話のような埋め合わせ

「決まった？」

「んー……」

眼鏡屋にて。来店後、2時間経過。店員さんの視線が少し痛いのは何故だろう。眼鏡を選んで貰っているだけなのだが。

すっかり眼鏡付け替え人形が板についてきた俺は、大空の指示でまた別の眼鏡を掛けていた。

予算範囲内のコーナーは既に一通り装着し、少し前に予算オーバーのお高めゾーンに移動。

流石にここはちよつとは話していたのだが、サンプルは多い方がいいからと言う大空に負けて、此処でも一通り装着していた。

「やっぱ、こつち……でもな」

この店で俺がかけていない眼鏡は、レディースのモデルだけでは俺が思い始めた頃に、漸く大空の中での選択肢は、3つ程に絞られたらしい。

その内の1つは、来店直後に掛けた丸いレンズだ。結構気に入っているらしく、似た

ような形の他のタイプを幾つか試着したが、これが勝ち残った。大空のお気に入りに入りつばい。

2つ目はレンズが細めの四角レンズ。1つ目の眼鏡は、掛けた時に柔らかい印象を与えるのだが、こっちは掛けた時の印象がキリリと鋭くなるタイプ。更に言うなら無難で、いつでも掛けられる。

3つ目は2つ目と同系統で、フレームのデザインが少し違う。お値段がちよつと予算オーバーなのだが、2つ目よりもデザインは好きだから、俺としては2つ目よりは3つ目かなといった感じ。ただお値段。安くなったりしないだろうか。

「もう一回、これ掛けてみて」

「ん」

渡されたのは、1つ目。かちやりと着ければ、ぐぬぬと大空。

「やっぱりこれかなあ。でも、いつでも掛けられるかって言われると、ちよつと違うかなあ」

こっちもかけてと、3つ目を渡される。

「……こっちの方が、やっぱり普通かな。でも、締まりすぎな気がする」

「お前は俺をどう思ってるんだ」

「なんかこう……ふわふわ」

「…………？」

良く分からない感想だった。

「俺程質実剛健眉目秀丽有智高才なのいないと思うんだが」

「有智高才出てくるの凄いの、それだけ聞くと凄くアホだよな」

「……」

「だから四角い眼鏡が似合うんだけど、違うんだよ」

英明果敢なこの俺の頭脳をもってしても反論の言葉が思いつかなかったので、素直に黙る。

「でも良く使えるのは四角い方だし」

うーんと、悩む大空。こんなに熱心に悩んでくれるなんて……フブキ部長と同じ眼鏡フェチなんだろうか。

話し合いそうだなあと思いながら、俺は眼鏡を手に取る。大空一押しらしい、丸いレンズの奴。

「これにするよ」

「え？ でも」

「基本的にコンタクトだから、毎日掛けてるわけでもないし。だったら、大空が俺に似合ってるって思ってるやつの方がいい」

それとも、やっぱり似合わない？ と聞いてやれば、一番似合うと、お墨付きをもらった。

店員を呼び、少しやり取りをして、持っているのと同じフレームを見つけて貰うと、視力検査のためについていく。

「……そう言う所なんだよな」

「何が？」

「聞こえない振りしろ」

何を言っているんだろうか。分からぬまま、視力検査の機器の前に座る。ちなみに、この機械、オートレフラクトメータというらしい。

視力検査をした結果、両目視力共に0.1だったのは、まあ、お察しといったところ。乱視が無いだけだったかもしれない。

レンズはちゃんとあったので、加工にかかる30分程を潰すために、スバルとともに店を出て、駅の周りで時間が潰せそうな場所を探す。

「どうする？ どこか適当なお店にでも入る？」

「……せっかくだから、この前の埋め合わせをさせてくれ」

「埋め合わせって……あ」

というわけで、以前ドタキャンしてしまったパフェの約束を果たすべく、一緒に喫茶店へ向かう。

目当ての喫茶店は、駅の北口方面で、少し行った裏路地にある、隠れた店舗のような場所らしい。

家と学園、たまにスーパーや商店街を歩き来するだけの俺の生活とは、無縁の場所であつた。スバル自身も来るのは初めてで、件のパフェはクラスメイトから聞いたらしい。量が多く、味もいい。一見の価値あり。そんな具合だつたらしい。

「まだ、行って無くて良かった」

「一緒に行く男友達の当ても無かつたし」

「大空なら他にも誘つたら着いて来そうな男友達居そうだけど」

「そうかな？」

うーん、と大空が頭をひねる。

俺のクラスだと、大空スバルは割と憧れの対象だつたりするのだが。俺のクラスだけなのだろうか。

歩きながら、暫く悩んだのち。

「いるかもしれないけど」

と大空。

「男子で最初に誘おうと思ったのは君だよ」

「……そう」

顔を扇ぎながら、なんとなく周囲を見渡してしまふ。幸い、e s p r t s 部も総合格闘技部も姿は無かった。

「此処曲がつて……あつた。あそこ」

大空が指さした先に、確かに喫茶店がある。少し日当たりが悪そうな立地。オープンテラスのようなものは無い様で、下半分がレンガっぽく、上半分は白のオーソドックスな店舗。通りに面した窓越しに中を覗けば、マスターらしき男性がカウンターの向こうに見えた。その背後に、酒瓶。アルコールの提供もしているらしい。バーつて奴だろう。時間带的に丁度営業が入れ替わりそうなタイミングだが、大丈夫だろうか。

心配している俺をよそに、物怖じする様子の無い大空がずんずん進み、扉を開けた。小走り気味に走り追いつき、大空の後ろから店へと入る。

「いらつしやい」

マスターらしき男性から声がかかる。特に何も言う様子が無い所を見るに、とりあえず問題ないようだ。

大空が通りに面した窓のあるテーブルにつき、その対面へと腰を下ろしながら、軽く店内を見渡す。

全体的にモノトーンのシックな店内。天井にはペンダントライトとシーリングファンが等間隔に並び、各テーブル席の間がかなりしつかりと開いていて、席の数が少ない。日も暮れかけの薄暗さも合わさって、アダルティな雰囲気。これは、なんとというか。「パフエって雰囲気じゃないな」

「そうだね」

ポツリと呟いた俺の言葉に、同じように店内を見渡していた大空が反応する。なんか、珈琲を飲みながら一日の終わりを楽しみたいな過ごし方を求められそうだ。

パフエ頼むのどうするかという雰囲気になりつつある俺と大空の元へ、お冷が二つ。運んできたのは、カウンターにいた男性ではなく、その人と同じエプロンを身に着けた女性であった。

「いらつしやいませ。注文は決まってる？　もしかして、専用パフエ食べに来たとか？」
「専用パフエ？」

寡黙な印象を与える男性と違い、このウェイトレスらしいの女性は、結構おしゃべりが好きなのか、それとも若干雰囲気のにまれていた俺と大空に気を利かせてくれたのか、フレンドリーな口調でそんなことを尋ねてきた。

これ幸いと話に乗ると、ウェイトレスさんはテーブルに置かれていたメニューを取り取り、ぱらぱらとめくっていき。数秒と待たずに目当てのページを見つけたらしく、そ

のページを開いてこちらに見せてきた。

そこに載っていた写真は、まあ予想通りの品。

「カップル専用パフェ——なんていうけど、本当はパーティー向けの巨大パフェを一回り位小さくさせただけなんだけど」

「男女ペアでないと頼めない……って感じじゃなさそうですね」

特にそんな注意文句は書かれていない。

「今厳しいから。お一人様でも同性のお友達同士でも、頼まれたら提供するわよ?」

「……騙された」

頭を抱えた大空がぼそりと恨み節を呟くの聞いた。

「じゃあ、そのパフェを一つと……何飲む?」

「……カフェオレ」

「カフェオレと珈琲を一つずつ」

「はい」

ウェイトレスさんが立ち去る。鬼が出るか蛇が出るか。願わくば、普通に美味しいパフェが出ることを願うのみである。

「まあ、なんだ。食べたかったんだろ? ならいいじゃないか」

「そうだけだよ」

お冷の入ったグラスを呷り。勢いのまま——という事は無く、大空はゆつくりとテールブルヘグラスを置く。

唇を尖らせる大空に苦笑しながら、空のグラスに新しい水を注ぐ。

「やっぱ悔しいじゃん」

「なら、その友達に異性とパフェを食べに行つたつて本当の事を言つてやつたらいいんじゃないか？ そうしたらマウントもとれるだろ」

俺の言葉に一瞬ほかんとした大空。それから何事かを考え始め、にやりと笑う。

「確かに」

シユバシユバシユバと、大空が悪そうな笑い声をあげる。異性と交遊の有無があるのかは、やはりヒエラルキーに関わってくるのだろうか。クラスメイトの男子にも、少し前に女子と遊んだとかでマウントを取られた記憶がある。その時にはもうシオンと暮らしていたから、俺と一緒に住んでるとマウントを取り返そうかと少し考えた所を大空に声を掛けられ、別れた所でフブキ先輩、最後はるしあに声を掛けられたので、有耶無耶になつてしまった。

ただ、るしあの仕事が終わつた時には、「すみません、生意気言いました」と謝られたので、良く分からないが勝利したのだと思う。

「それに俺としては、大空に誘つて貰わなければこの店を知る機会も無かつたんだから。

その騙してくれた大空の友達に感謝だ」

「……お、おう」

「どうした？」

「いや、何でもないツス」

ぱたぱた顔を扇ぐ大空。はて、その反応は何処かで見た気がする。

どこだっけなと思いつながらお冷を飲んでいると、「お待ちせしましたー」と先程のウエイトレスさんの声。

見上げれば、トレイを片手に顔をひきつらせたウエイトレスさんが居る。なんか、表情が崩れそうになるのを懸命にこらえている感じの顔だ。

「どうしました？」

「いえ。何でもないのでよ？」

「何でも無い顔には見えないですけど」

大空も心配そうな顔をしている。

ウエイトレスさんは、おほほと誤魔化すような笑い声をあげると、テーブルに俺と大空が注文した珈琲とカフェオレを置く。

「パフェはもう少し待っててね」

それだけ言い残し、下がるウエイトレスさん。

「どうしたのかな？」

「さあ？」

何か大変な事が起こったのなら、もう少し変な顔をしそうなものだが。

どこか呆れた様子の、マスターさんの顔が気になる。

何なんだろうかと思いつながら、珈琲を啜る。美味しかった。これならパフェも期待出来るだろうか。

大空も同じ感想を得たようで、カップから目線を上げ、大空と目が合った時。

大空は楽しそうに笑った。

「パフェ、楽しみツスね」

「ああ」

閑話のような逢魔時

「お待たせしましたー。ごゆっくりどうぞー」

「……」

テーブルの上に、パフェが鎮座していた。それを見て、パフェ楽しみだなとか思っていた、数分前の自分をしばきたくなる。

対面に座る大空も似たようなことを思っているのか、ゲンドウポーズをして、座った眼で届いたパフェを見ていた。

総重量……何キロくらいなんだろうか。高さは俺や大空の顔よりも長い。チャレンジメニューの類なのではと思わざるを得ない様相。倒してしまったら大惨事間違いなしだ。

「……大空」

「……何？」

「どれくらい喰えそう？」

「3……4分の1かな」

「そっか」

まあ、俺も同じくらいだろう。小食というわけでは無いが、大食いというわけでもない。

頑張つて、頑張つて半分だろうか。それでも……普通のパフェの総量より多そうなのがする。

ぱつと見の印象だが、このパフェ、5人前位ありそうだし。

「これでパーティー向けのパフェを一回り小さくしたつて言つてたつすね」
「何人パーティーを想定してるんだろう」

10人くらい？ それとも、俺が知らないだけで普通の人はもっと沢山食べるのだろうか。

「……とりあえず、食べるか」

「そうだね」

取り皿とか頼んだ方がいいだろうかと思つたが、立ち上がった大空がそのまま食べ始めたので、俺も同じように立ち上がり、食べ始める。行儀が良くないのだが、そうしないと届かない。

コーンフレークやスポンジ、果物やクリームが交互に層になっている、サイズ以外は普通のパフェ。一番上に盛られたクリームを一匙。食べれば、口当たりが柔らかく、自家製であることが分かった。

サイズがサイズだから、もっと大味なのかと思ったが、そんなこと無いらしい。クリームに刺さっている果物等と合わせながら、ちまちまと、食べ進める。時折珈琲を飲んでリセットし、更に進める。

「普通においしいね」

「ああ。食べに来た甲斐があるな」

「これなら意外と食べられるかも」

「……それ、フラグなのは」

状況は、クリーム層をいったん抜けて、果物の層が見えてきた辺り。

果物はしっかりと処理されている様子。多分この喫茶店は他の甘味類も美味しいんだろうなと思える味。上に残っているクリームも合わせながら、食べ進めていく。

ただ、如何せん量が多い。この果物の層を抜けても、まだスポンジとフレークとクリームの層がある。

最悪流し込めるだろうか。少し考えて否定する。クリームなら兎も角、固形物を流し込めるはずがない。

少しずつでも食べ進めながら、大空の方を見る。

「大丈夫？」

「……ダメかもしれない」

「そっか」

大空はスプーンこそ動いているが、さっきまでと比べて明らかに速度が遅い。

オレンジ一切れ、食べるのがやつとの様な動きだ。

せめて2段あるスポンジの上側半分だけでも食べてほしいのだが。とはいえ、無理をさせるのも申し訳ない。

食べ進めるうちに、スポンジゾーンに到着した俺は、一先ず少し食べて、どんなもんか共有しようと思い、スポンジをスプーンで取って。そこで気づく。

「大空」

「何?」

「このスポンジ……ケーキだ」

「……え?」

スポンジとスポンジの間にクリームと薄くスライスされたイチゴがあった。外側からだと一見して分からないようにコーティングされていたらしい。

とりあえず食べる。スポンジは上のクリームや果物に潰されることなく、ふわふわを保っていて。中に入っているクリームやイチゴに負ける事無く、しつかりとしたものだった。正直箸休めにさせてほしいから、是非スポンジだけにして貰いたかったものである。

「……はい、大空」

スポンジ……というかケーキを一掬いして、大空へと差し出す。
逡巡したものの、大空はぱくりと、それを頬張る。

「……………美味しい」

「ならよかった」

ただ、その言葉を最後に、スバルはスプーンをテーブルに置いた。

「ちよつと休ませて」

「……なら大空。代わりに眼鏡取りに行ってくれないか？」

「眼鏡？ ……そういえば、そうだったね。動けばまた食べられるかな」

そう言うのと大空はお腹のあたりをさすり、動けるかどうかを確認する。

「……………大丈夫そう。行ってくる」

「頼んだー」

引換券を渡すと、大空が席を立ち、店を出て行った。

パフェを手元に引き寄せる。

味わって食べたいのはやまやまなのだが、そんな余裕はないので、無心で食べ進める。
せめて大空が戻ってくるまでに、二段目のスポンジ改めケーキゾーンまでは進めておきたい。

大空側にまだ残っていた果物類と、ケーキを絡めながら食べていく。しかし、なぜケーキにしてしまったのか。重さが増すだろうに。やっぱりチャレンジメニューなのかもしれない。

パフェを数口食べて、珈琲でリセットの流れを崩さないように食べていく。食べるのを辞めたら食べられなくなりそうだから、口は止めない。

だが、そうしていると先に珈琲が無くなった。水でもいいのだが、珈琲の苦みは惜しい。

「すみません」

「はい」

諸悪の根源ウエイトレスさんがこちらに来る。

「珈琲のお替り。アイスで」

「畏まりました。それでなんですけど」

「はい？」

「女の子はどちらに？ お店、出て行つたみたいですけど」

「眼鏡を取りに行つてもらいました。動けばまた食べられるだろうし」

「あー、成程」

諸悪の根源ウエイトレスさんは歯切れの悪い反応を見せる。何なんだろうか。とりあえず、食べて

いないと食べられなくなりそうだから、食べさせてほしいのだけだ。

「てつきり喧嘩でもしちゃったのかなって。そういう事なら良かった」

良くは無いだろという言葉を辛うじて飲み込み、「珈琲お願いします」と再度言っ
て、食事に戻る。

ケーキのゾーンは6割がた食べ進め、下のフレークのゾーン。幸いここは、がつつりとチョコプレートが塗してあるような甘過ぎる場所ではなく、コーンフレークと言われればと思いつきそうな、ほんのりとした甘さ。

感触もさくさくとしたそれで、ここまでの物とは違う。箸休めには丁度いい。

上に残っていたクリームやケーキを、先んじて黙々と食べ切り、漸く一息。コーンフレークをもそもそと食べる。このコーンフレークは恐らく市販の物なのだろうが、これが一番おいしいと思うあたり、大分参っている気がする。

フレークの下はクリームで、果物も入っている。そこまで食べきれば、後のケーキとフレークは大空が多分、食べ切ってくれる。

「お待たせしましたー」

「どーも」

珈琲を一口。覚悟を決めて、クリームに取り掛かる。

クリームはおいしい。果物の酸味もいい感じ。ただ多い。当分甘いものはいらぬ。

……糖分だけに、当分いらぬ。

「……しまった」

絶不調になった気がする。

珈琲を啜り、気持ち切り替える。中々飲み込みづらくなってきた果物を、強引に飲み込んだり、珈琲で流し込んだりしながら、格闘。

しかしかなりずっしり来ているし、何より眠い。もぐもぐと口を動かしながら、途切れそうな意識を繋ぐ。

この眠気は何だろうか。満腹のせいか、血糖値が上がったせいか。欠伸が漏れる。このままだと寝落ちしそうだ。

「お待たせー」

はよ、と、思った矢先、扉を開けて、待ち人が来る。その手に、眼鏡屋の紙袋……がない。

「ごめんね。試着して貰わないと、ダメだつて言われちゃった。しかも戻ってくる時に、部員に捕まっちゃって、遅くなっちゃったし。大丈夫？」

「へーき、へーき」

「それで、どうする？ 取りに行く？」

「あー……後でいいよ」

「そっか」

言いながら席へと座ると、スプーンを手に取った。

「後は任せるっすよ」

スプーンを手に取り、スバルが意気込んだ。

「ちよつと休む。すまんが頼む、スバル」

「うん! ……うん? ねえ、今」

額にテーブルの感触を味わいながら、意識を手放す。すやあ。

「起きて。おーきーてー」

「——ん?」

揺さぶられ、意識が戻る。

体を上げると、いの一に、大空が目に入った。

「あ、起きた」

「……おはよう」

「おはよ」

大空の声を聴きながら、目をこすりながら、状況を思い出す。パフェを食べている最中に寝落ちしただけだが。

「どれくらい寝てた？」

「10分くらいかな」

「結構寝てたな」

ちらりと視線を落とせば、もうほとんど残っていないパフェ。二口程度で、俺と大空で一口ずつ食べれば良さそうだった。

大空が、ひよいとスプーンでパフェを掬った。はい、と、パフェを差し出され、同じく掬う。

「せーの」

大空の音頭に合わせ、同時に食べる。もぐもぐ、ごくんと飲み込んで。

「終わったー」

大空がスプーンをパフェの入っていた器へ入れた。同じくスプーンを器に入れて、すっきり冷めた珈琲を啜る。

「辛かった」

「まあ、途中運動したり寝たりしてるから、食事の仕方としてどうなのとは思うけどな」

「美味しく食べ切る為には、仕方が無いでしょ。残すよりいいと思うし」

「そうだな」

時計を見れば、普段なら帰宅して、夕飯の準備をしている時間。

今から帰ってご飯を作るのは正直億劫だ。どっかでお惣菜か何か、買っていつてしまおうか。

悩みながら、カップをテーブルに戻す。

「動ける？」

「大丈夫」

「じゃ、帰るか。眼鏡も受け取りにいかないといけないし」

「うん」

立ち上がり、レジへ。会計は俺持ち。

「ありがとうございました。また来てね」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした！　また来るツス！」

ウエイトレスさんに挨拶をして、大空と店を出る。

「いやあ……美味かったな」

「美味しかったツスね。今度は普通のサイズがいいけど」

「本当に」

美味しく食べられる量が一番だ。まああの喫茶店が、俗にいうデカ盛り店っていうやつで、全メニュー量が多い可能性は否めないけど。

日も暮れかけ。薄暗くなった路地を、歩いて抜け、そのまま眼鏡屋へ向かう。

「……………ところでさ」

「ん？ 何、大空？」

「……………ん？」

「ん？」

「こちらを向いた大空と目が合う。何か驚いた顔をしていた。どうしたのか。

「あれ？ 大空って呼んだ？」

「え？ 大空の事、大空以外で呼んだか？」

「呼んだ！ さっき、スバルって！」

記憶に無いが。さっき寝ぼけてたから、その時だろうか。

「寝ぼけてたから、文字数で選んだのかも」

「どういう事！！」

「どうもこうも。短い方を選んだ。」

「ごめん、ごめん。気に障ったなら謝る」

「……………いや、別に怒ってた訳じゃないけど。今、ふつつつと怒りは沸いてる」

「なんだや。」

大空は、唇を尖らせ、不満そうな様子を露にする。

「……別にいいけどさ。何か、距離感じる」

「……まあ、確かに」

元々、対して接点が無いから名字で呼んでいたが、それなりに一緒に遊んだりしていることを考えると、大空呼びは、確かに距離があるように思う。それに、眼鏡を選んでくれたお礼も兼ねれば、気恥ずかしさとか抵抗も少ない。

「……分かった」

「何が？」

「呼び方。返——」

大空を突き飛ばす。

何かが見えたわけでも、聞こえたわけでもなく。

ただ、頭の中にタロの鳴き声が響いた気がして、反射的に大空を自分の傍から離さなければと思っただけ。

だから、その後に首や体に何かが巻き付くような感覚は想定外で、踏ん張る隙も無く、体が引つ張られた。

「いったー……ちよつと、何を——あれ？ どこ行つたの？」

e x . 後輩の少年

「フブキー、ご飯だよー」

「はーい」

ゲームをしていた手を止めて、フブキはミオのいるキッチンへと向かう。

立場的にはフブキが主であり、ミオが従者の筈なのだが、そんな様子は見えない。

「今日のご飯は何かなー」

ともすれば、母娘のそれが近いかもしれない。うきうきで近づいてくるフブキの気配を感じ、ミオはクスリと笑う。

パツつと、フブキがキッチンを覗き込んだ。

「来たよー、ミオー。此処にあるの、持っていけばいい？」

「うん。お願い」

「任せられた！」

トレイに乗せられた料理を、フブキが運び始める。

その尻尾が、ゆらゆらと揺れていて、気持ちが高ぶっているのが分かった。

こういつも楽しみにして貰えると、作り手冥利に尽きる。明日も、彼女が満足する料

理を作ろうと思える。

それが、従者故の感情なのか、友人故の感情なのかは関係無い。大神ミオとして、白上フブキに満足して貰える料理を作ってあげたいだけ。

今晚は、もう一品。今作っている料理が、今日の夕飯の献立のメイン。そんなメイン料理完成まではもう一手間。味の調整だけがある。少々搦い、食べる。少し悩んで、塩を一振り。

再度食べ、出来に満足し、ミオは一つ頷く。自信の出来だ。これなら、フブキも満足し、絶賛してくれると確信が持てる。

「……」

しかし同時に、正直者の後輩もまた、この料理を称賛してくれるだろうと思い、一抹の寂しさも覚えた。

「今頃、後輩君もご飯食べてる所かな？」

時折、食事に来て、フブキと二人、美味しい美味しいと言ってくれていた彼は、数ヶ月前の匂いの変った日から、食事に来ることは無くなった。

当初こそ何かに取り憑かれたのだと思い、見張っていたが。なんてことない、ただ同居人が増えたから、料理を作らざるを得なくなったと、それだけのオチ。

とはいえ、その時は大怪我を負わせたりと色々あったから、今は一先ず、彼の問題が

解決するまでの護衛をしているミオだが……まさか、あんなに危なっかしいとは思って
いなかった。

部活の様子などを見るに普通だと思っていたが、魔界出身の癒月ちよこや潤羽るし
あ、魔界ではない別の異世界出身という不知火フレア等からも話を聞き、ミオは、世渡
り上手に見える彼が、その実、地雷を踏み抜くのがとても上手い事を悟った。しかも、彼
自身が踏もうとして踏んでいる訳では無いから、救いが無い。

それが昔からそうだったのか、それとも最近になってからなのかを、ミオは知らない。
知らないから、彼が気をつけてどうにかなる問題なのか、分からないのが不安な所で
ある。

今後、もっと危険な地雷を踏んでしまうのではないかと、思わずにいられない。

「ミオー。まだー?」

「今行くー」

盛り付け終えた料理を手に、フブキの待つダイニングへ、ミオは向かう。

既に席についているニコニコ顔のフブキの対面へ腰を下ろし、2人揃って、両手を合
わせ、頂きますと挨拶——しようとした、その瞬間。

「——ッ!」

遠吠えを聞き、勢いよく、ミオは立ち上がった。

対して、フブキは目を静かに開けると、自身のポケットへと手を伸ばす。

「行きなさい」

「はー」

フブキの言葉に食い気味に反応したミオが、床を蹴った。

ダイニングからリビングへ、瞬く間に駆け抜け、窓を開け放つと、ベランダへ出る。置かれていた靴を手に取りながら、勢いを殺すことなく、ベランダの柵から飛び出した。

空中に躍り出て、10階分の高さを自由落下しながら、ミオは持っていた靴を履きつつ、気配を探り、違和感に気が付く。

後輩の守護霊である子犬のタロに分け与えた、ミオ自身の霊力。ちよつとした魔除けや、危険を知らせる為に分けた物だが、目印の役割も持っていて、ミオは後輩の居場所をそれにより探る事が出来る。

しかし、ミオにはそれを感じる事が出来なかった。守護霊であるタロが、そう簡単に成仏しない事を知っているからこそ、ミオはタロに霊力を分けたのである。そして、その与えられた霊力によって、タロの存在はより強固になり、尚更消え辛くなった筈である。

何かがおかしい。

そう思いながら、靴を履き終えたミオは、落下の最中、三階ベランダの柵へと足をつけ、踏み切り、移動方向を切り替える。近場のビルへ降り立ち、屋上を駆け抜け、次のビルへと飛び移る。

人の身では凡そ出し得ないであろう速度を出しながら駆けるミオのスマホへ、着信。相手がフブキである事を確認し、通話に出る。

「はい」

『連絡をしましたが、繋がりません。電源が切れてるだけならいいのですが』

「しかし、彼の守護霊に与えた私の霊力も感じられません」

『分かっています。事態は緊迫しているかもしれないかもしれません。貴女は遠吠えのあった場所へ向かい、状況を確認し、報告しなさい。それをもって、私は一先ず癒月ちよこへ協力を要請するか、検討します』

「分かりました」

通話が切れる。ポケットへとスマホをしまいながら、屋上の手摺を踏み切る。

方角は駅の方。この時間に、家に居ないのは少し意外。買い物でもしていたのだろうか。また、この前のように困った誰かを助けようとして、面倒ごとに巻き込まれたとかならない。一言二言、小言は言うけれど、それだけだったら、構わない。

だが、しかし

進行方向、遠吠えの位置から届く、異臭。微かな匂いであるにも拘らず、その匂いを前に、ミオは、自分の足が重くなるのを感じた。

「……」

屋上へ降り立ち、一度足を止める。匂いを嗅がないよう、口から吸い、吐いて。気持ちを落ち着ける。

匂いは確かにあったが、それは微か。残滓程度である。

恐らく、その匂いの主はもう居ない。だから、このまま走って行っても大丈夫なのだと、自分に言い聞かせる。

それに、主であるフブキの指示がある以上、行かない選択肢は無い。

「……よし」

最後に、もう一度深呼吸をしてから、ミオは勢いよく屋上を走り、跳んだ。

その一歩で、ミオの体は、ビルを何棟か飛び越えて、目的地である、路地へと降り立った。

直後届いた異臭に、思わず口元を抑えながら、ミオはゆつくりと立ち上がる。異臭に交じり、後輩の匂いもあった。此処に居た事は、間違いないらしい。

何か、手掛かりが無いかと思いつながら、周囲を見渡して。ショートカットの少女と目が合った。

ぼかんとした様子で、自分の方を見てくる彼女に、ミオは見覚えがあった。

最近、後輩と一緒にいる所を、良く見かける子。大空と呼んでいた事も、覚えていた。

「……」

「大空さん」

「は、はいっ」

ミオが声を掛けると、大空スバルが声を上げた。

「人を探してるの。私の後輩なんだけど」

ミオが名前を告げると、「あっ」っとスバル。

「わ、私も探してるッス！ 私の事、急に突き飛ばしたと思つたら、消えちゃって！」

「そう」

周囲を見渡し、異臭が最も濃い場所を探す。

「彼が最後に立ってたの、此処？」

「えつと……確かにその辺ッスね」

こくこくと、首を縦に振るスバル。成程と思いつながら、ミオは振り返る。

ビルとビルの間。鼠が漸く通れそうかという程の幅しかないその場所。凡そ、人間は通れそうも無い。

そんな場所に異臭は最も強く残っていて、異臭と後輩の匂いが完全に途切れているの

もそこだった。

ミオは意を決し、近づく。そのまま隙間を覗き込むが、何も見えない。真っ暗だ。

スマホのライト機能で照らせばもう少し見えるだろうか、ミオはスマホを出すべくポケットの方を見て、足元に落ちている物に気が付いた。膝をつき、拾い上げる。

「眼鏡？」

「あ、それ」

ミオの拾った物に、大空が反応を見せる。

「彼のメガネだよ」

「彼の？ でも、眼鏡かけてないでしょ？」

「何か、コンタクトが切れたとかで、掛けてたツス」

「……」

ミオが眼鏡を見下ろす。ミオには魔法の事は良く分からないが、ただ魔界出身者達に共通する不思議な匂いを、眼鏡から感じる事は無かった。

試しに掛ければ、逆に澄んでいた視界が逆に歪み、気持ち悪さから思わず外す。益々、視力矯正の為の、ただの眼鏡としか思えない。

しかし、それはつまり、今の彼には魔力による視力の補正が無いという事では無いだろうか。それなら、今の彼は何も見えていない筈である。

スマホを取り出す。着信履歴から折り返せば、ワンコールで、フブキに繋がる。

『どう?』

「良くないかもしれません。完全に巻き込まれた可能性があります」

『……どういう事?』

「視力矯正用の眼鏡を掛けているようです。つまり、今の彼は」

『え? 眼鏡掛けてるの? どんなの? 教えて?』

「……フブキ様」

『…………ん。つまり』

咳払いの後、声色が戻る。漏れそうになった溜息を、ミオは飲み込む。

『今の彼は只人という事ですね』

「はい」

『魔に関わる匂いは?』

「ありません。代わりに、嗅いだことのない、嫌な匂いが」

『匂い? どんな?』

「これは……何でしょう。形容する言葉がありません。この世にならざる匂い、としか」

正直、気が狂ってしまいそうで、良く嗅ぐ勇氣は出ない。だが、僅かに漂う程度の匂いですら、ミオが今までに嗅いだどんなものとも合致しない事だけは、間違いないと断

言出来了。

『一先ず癒月ちよこに連絡を取ります。彼女や、希代の魔術師らしい紫咲シオンが居れば、分かることもあるかも知れません』

「分かりました。私はもう少し此処で——」

調べます、と言い切るより早く。

風上からの風の匂いが、ミオの鼻腔に届く。眼前の隙間から漂う異臭。それをもっと濃くした匂い。

視線を向ける。合わせ、重心を落とし、爪を構えた。グルルという唸り声が、スマホ越しにフブキへ届く。

『ミオ。どうしました。何があつたんですか』

通話口越しに、フブキの焦る声が聞こえる。

「……フブキ様。連絡は不要かと」

『何故ですか?』

「見分かりました。今、目の前に居ます」

『……は?』

異臭と共に、間違えようのない、後輩の匂いもある。血の匂いは無く、怪我は無い事も分かる。

肩には、守護霊のタロ。がたがたと、何かに怯えているように見えるが、その体に、自身の霊力が宿っている事も、ミオは感じていた。

そんな明らかに様子のおかしいタロを連れ、その手に眼鏡屋の紙袋を持つ彼は、あははと、困ったように笑った。

「ご、ごめんなさい?」

「君、一体」

何をと、聞くより早く。

「ちよつとお!」

とスバルが割り込んだ。

「何やってたの! いきなり人の事突き飛ばすわ、居なくなるわ!」

「て、手品?」

「納得出来るかあ!」

噛みつかんばかりの勢いに、後輩が怯んだのが見えた。

「ごめん、大空!」

「スバルって呼べえ!」

「ごめん、スバル!」

ぎゃんぎゃんと、正当な怒りをぶつけるスバルを宥める彼が、自分へアイコンタクト

を送ってきている事に、ミオは気が付いた。次いで、スバルの死角になる場所で、スマホを持っている事に気が付き、後で連絡すると言っているのだと分かる。

今は仕方が無いかと、ミオは頷き返して、周囲を見渡し人目が無い事を確認すると、地面を蹴った。

近くのビルの屋上へそのまま降り立ちながら、繋いだままだったスマホを耳に当てる。

「フブキ様」

『聞こえてた。人騒がせ……で、済ませていいと思う？』

「それにしても気になる点が多いです。何かに巻き込まれた、というのは間違いないかと。一時的とはいえ、護衛を仰せつかっている身としては、何があったのかは知っていただきたいですね。後で連絡をしようと言っていましたから、一先ずはそれを待つていれればいいかと」

『……そうするしかないですね。分かりました。ミオ、戻りなさい』

「分かりました」

電話を切り、一度振り返って屋上から路地を見下ろせば、スバルと少年が帰路についていた。

その歩く姿を見ても、一先ず問題は無い様で。気を抜くことは難しいが、それでも急

場はしのいだらしいことが分かって、ミオは重い息を吐く。

「帰ろ。お腹空いたし」

料理は冷めてしまっただろう。

フブキ、温めておいてくれないかなと思いつながら、ミオは屋上を蹴った。

依頼

体を拘束していた何かを外れた。

一瞬の浮遊感の後、着地する。たたらを踏んだが、転ぶことは無く、何とか耐えた。

「……………」

周辺を見渡すが、眼鏡を落としてしまったから、良く見えない。

ぼやけた視界で判別する限り、ここは神社だろうか。

俺が来た側には社のような建物、逆側には鳥居のような物。周辺は木々で覆われ、地面には砂利と思しき物が敷かれ、その真ん中を石畳の道が通っている。

そして、社の前に誰かいる。目を細め凝視するまでもなく、一目でわかる、奇妙な少女。

写真で見るとような、人物をくつきりとさせ、背景をぼかす構図。それが現実で発生していた。背景がボケているのは視力のせいとして。人の姿がきちんと見えるのはどういふ事だろう。

まず目を引くのは、先端が黄色に染まった黒髪と、頭に生えている二つの角のようなもの。あれのせいで、メンダコに関わる何かしか見えない。

その割に、骨盤のあたりに羽のような衣装がある。纏っている髪と同じような配色の服と違い、白い羽。メンダコつて羽生えてただろうか。

近づくのは憚られ、俺は着地した境内の中ほどに立ったまま、声を張り上げる。

「自分を、此処に連れてきたのは君でいいのか？」

「うん」

俺と違い声を張り上げた様子はないのに、それでもしつかりと少女の声が聞こえた。

あつさりと認めた少女は、それから、ぺこりと頭を下げてる。

「初めまして、一伊那尔栖です」

「あ、どうも。ご丁寧に」

頭を下げ返しつつ、名乗った後。

「えっと、それで……一さん？」

「イナでいいよ」

「そう？　じゃあ、イナ。君が俺を此処に連れ込んだ、って事でいいんだよな？」

「そう言った」

確かに、そう言われた。聞き間違いなどは無かつたらしい。

「何で、態々そんな事を？」

「お願いがあるの」

「お願い?」

聞き返すと、イナはこくりと首を縦に振る。

そして、その手に持った本を、俺に掲げてみせた。

帯にて曰く、『このネクロノミコンがやばい大賞! 1st』らしい。パチモン臭が凄
い。

「偽物つかまされたの?」

「違う」

尋ねてみたが、首を横に振られた。流石に違うようだ。

騙されていなくて安心したような、残念なような。名状しがたい感情が胸の中に浮か
ぶ。

だって大賞の名前になっているネクロノミコン。サブカル文化は嗜む程度の自分で
も聞いたことがあるこれは、魔導書と呼ばれる類の物で。自分の覚えている限り、余り
いい物では無かったはずだ。

「それが、どうかしたのか?」

正直、それには関わりたくないなあと思いつつながら、イナに聞く。

「探してほしいの」

「探し物?」

「そう。ページを探して欲しい」

「ページ？」

聞き返す俺に、イナが告げる。

「目を閉じて」

「……」

やや抵抗を覚えながらも、言われた通りに目を閉じた。

暗闇の中で待っていると、右手に感触を得る。

その感触が、自分を此処に連れ込んだそれと同じ物であることに気が付いた。

右手が軽く引かれる。自分を此処に連れ込んだ時の強引さを思い出し、思わず抵抗する。

すると、その時とは打って変わり、手を引く動きが止まった。

「ごめんなさい。大丈夫？」

「……ああ。すまん」

イナの声に答える。

少しして、恐る恐るといった様子で、再び手が引かれる。

今度は抵抗することなく大人しく、されるがままになった。

引かれた手が持ち上げられる。持ち上げられたその手が、何かに触れた。

僅かにざらざらとした質感。少し悩み、恐らく紙だろうかと、当たりを付ける。

この状況で触らされそうな紙といえば、あのネクロノミコン位しか思いつかない。触っても大丈夫なのだろうかと思つて居る間も、右手は引かれた。

紙の表面をなぞるように動かされ、最終的にページとページの間の、僅かに窪んだ場所へと手が置かれる。

一体何がと思ひながら指を動かし、その感触に気が付いた。

ページとページの間という、本来なら何も無い筈のその場所に、何かが挟まっている。厚さは紙と同じくらい。断面は規則性が無く、凸凹している。取れるかと思いつまんで持ち上げたが、びくともしない。

先程のイナの言葉と合わせれば、凡そ察しがついた。

「ページが破れてるのか。それを探せと?」

「うん」

右手に巻き付いていた何かが外れる。

「目を開けていいよ」

イナの言葉を聞き、目を開ける。

イナの立ち位置も、最初と変わっていない。恐らく触らされたのであろう本も、やはりイナの手元にある。

近づかれた気配もなかったのだが、一体彼女はどうかやって俺の手を取って、本に触らせたのだろうか。

「浮かんだ疑問を、首振り消して、「それで」と別の言葉を口にする。

「何で俺なんだ？」「面識あるわけでも……無いよな？」

「無いよ」

「良かった」

「安心……で、いいのだろうか。」

「それで、なんでだ？」

「……」

俺の言葉にイナが黙り、悩む様子を見せる。

「気づいていないかもしれないけど、貴方の傍にページはある」

「……え？」

「だから見つけて、取ってきて、渡して欲しい」

「——って感じでして」

帰宅後、シオンに小言を貰ってから、俺は着替えなどを済ませ、ミオ先輩へと電話した。

電話の向こうにはミオ先輩とフブキ部長。こつちにはアドバイザーとして、シオンに居て貰い、一先ず行方不明になっていた間の事を伝えたのだ。

電話の向こうから、『成程ね』とフブキ部長の声。

『ネクロノミコンかー。正直ちよつとワクワクするよね。クトウルフ神話じゃお約束みたいなところあるし』

「大賞の帯が付いた、パチモン臭がすごい物でしたけど」

『ネクロノミコン自体、写本とか翻訳本みたいな不完全本は沢山あるから、やろうと思えば大賞ができそうだけどね』

「物騒すぎやしませんか」

しかもその中で大賞を取ったというのなら、あの本、かなり危ない物なのは。

『それに破れたページを態々探させるっていうのも、ますます怪しいし。大丈夫？ 巻き付いたの触手だったりしない？』

「アイデアロール失敗してるんで分からないです」

『SANチェックを回避して偉い』

だから発狂せずに済んだのかもしれない。

『はいはい。話はそれくらいにね』

ちよつとテンション高めめのフブキ部長を遮るように、ミオ先輩の声。

『ていうか、君も抵抗なく受け取りすぎじゃない?』

「まあ、今更ですし」

俺自身が魔力とやらを手に入れたり、周りには魔法使いだなんだと色々な人達がいるから、今更魔導書が実在しましたと言われても驚きは少ない。

それが分かっているらしく、『確かに』とミオ先輩。

『それで、手掛かりとかも無いの?』

「はい。詳しい事は何も無いです。後で部屋は改めるつもりですけど、正直望み薄ですね」

『そっか』

うーんと、電話口にミオ先輩の悩む声がある。

『でも、もし君の傍にそのページがあるなら、ミオなら気づきそうだけどね』

「ん? 何ですか? フブキ部長」

『だって、なんか凄い匂いがするって言ってたし』

そう言ったフブキ部長は、『ね、ミオ?』とミオ先輩へ同意を求める。

そんなフブキ部長へ、ミオ先輩は『確かに』と答えた。

『そのページから、あれと同じ匂いがするなら、分かると思う』

「あれ?」

『多分、君を拉致した何かと同じ匂い』

「そんなにですか？ 正直、話しているときは気にならなかったですけど」

『正直二度と嗅ぎたくないかな』

そこまでするのかと思いつながら、俺はシオンに視線を向けた。

一応座っているが、素知らぬ様子のシオンは、俺に視線を向けられ、湯飲みを肘掛においた。

「言っておくけど、ネクロノミコンって言われても知らないから」

「知らない？ 一応魔導書ってやつなんだけど」

「少なくともネクロノミコンって名前は魔界では聞いたことないわね」

そう言うと、シオンは湯飲みの中身を飲み干した。

テーブルに置かれた湯飲みへ、俺は急須から新たに緑茶を注ぎ入れる中、『そうなの？』とフブキ部長が食い付く。

『ページを開こうとすると嘔みついてきたり、飛んでつちやう本とか無いの？』

「そんな読みづらい本、あるわけないでしょ」

『そんなあ』

浪漫的な物が裏切られたのか、電話の向こうでフブキ部長が項垂れたのが分かる。

『よしよし』と、ミオ先輩がフブキ部長を慰める声が聞こえた。

それを聞きながら、ねえとシオンが俺に声をかける。

「その、ネクロノミコンっていうのは、そういう嘯みついてくる本な訳？」

「いや、嘯みつくかどうかは知らないけど、特殊な本って意味では、間違いないかと」

「ふーん……なら、魔界で言うところの魔法書が近いのかしら」

「魔法薬的な？ 本自体が魔法を発動する何かみたいだな」

「アンタが想像してるのは魔法紙の方が正しいわね。少量の魔力を流し込んだり、決められた折り方をする、直ぐに魔法が発動するように魔法陣が刻まれた用紙。秘匿性の高い書類から、ちょっととした便箋まで、使用用途は色々。この紙を束ねたものを魔法書っていう事が無いわけでもないけど。本来の意味は違う」

シオンがタクトのように指を動かすと、ハンガーポールからシオンの三角帽子が飛んできた。

飛んできたそれを手に取り、帽子の中に手を入れれば、そこからハードカバーの本が出てくる。

「おー」

思わず拍手すると、『え、何！ どうしたの！』とフブキ部長が再び食い付く。

「シオンが魔法使いほかったので」

「魔法使いだから」

『ずるい！ 私も見たい！』

『はいはい。フブキはちよつと静かにしてようねー』

もがもとフブキ部長のあがきが聞こえてきたが、暫くして聞こえなくなる。

『ごめんごめん。続けていいよ』

「あ、はい」

敬語で返したシオンが、咳ばらいを一つ挟む。

「本来の意味での魔法書は、魔法使いそのものを指す」

「というと？」

「魔法使いの研鑽の歴史。その内容を書き記した書物。それこそが魔法書。早い話が研究レポートみたいなもん。ただ、この魔法書にもいろいろあつてね」

言いながら、シオンが取り出した本を掲げる。

「記入した内容、書き記す紙面やインクによっては、その魔法書自体が魔法の効果を高める増幅装置のようになつたり、あるいは魔法書そのものが力を持ち、魔法を行使するケースも確認されてる。実際、私の魔法書は、増幅装置として働いていて、短距離転送くらいなら、魔法書の魔力でも出来るわ」

「そういう割に、持つてるところ見たことないが」

「無いと魔法使えないわけじゃないし、普段は邪魔だから、帽子にしまつてのの」

さつき魔法使いそのものとか言わなかっただろうか。

「大事な力を持つ魔法書は確かにあるってこと。そのネクロノミコンっていうのが魔法書なのかどうかは知らないけど、同じくらいの力があると仮定するなら、ページ一枚でも、もしかしたら魔法が働いている可能性がある」

「……つまり？」

「アンタみたいな一般人がページを拾って魔法を使ってるかもしれないし、そもそもそのページそのものが、魔法で姿形を変えて全く別物になってる可能性もあるわね」

「……」

『……』

それって、やばいのではないだろうか。電話の向こうから、ミオ先輩が息をのむ音も聞こえた。

心中冷や汗の止まらない俺を余所に、ずずとお茶を啜ったシオンは、俺に向かって湯飲みを差し出した。

「お代わり」

「あ、はい」

差し出された湯飲みに、急須から新たに注ぐ中。

「……安心なさい」

とシオン。

「アンタの近くにあるっていうなら、関わるなって言っても無理でしょうし、私も気にか
けといてあげる。それと、ちよこ先生にも伝えておきなさい。もし魔法書が原因だつた
ら、魔界出身の私達の方が、対処もしやすいですよ」

「すまん、助かる。ありがとう、シオン。フブキ部長とミオ先輩は……えっと、どうしま
しょう?」

『流石に今の話を聞いて、関係無いですっていうのはちよつとねえ。フブキがいいって
いうなら、私は構わないよ』

『勿論。私も大丈夫。興味もあるし』

「ありがとうございます」

礼を言いながら、俺の頭の中には、ある可能性がよぎっていた。

ページは俺の近くにあつて。もしかしたら姿形を変えているかもしれない。

それは、つまり。

俺の知っている誰かが、そうである可能性もあるのではないだろうか。

依頼2

イナとの邂逅の翌日。授業を受け終えた放課後。

SHRが終わってから暫くして、俺は保健室の扉をノックした。

『どーぞー』

中からちよこ先の声。息も絶え絶えに、俺は挨拶とともに、扉を開ける。

「し、失礼……します……」

開けた先に、ちよこ先とるしあの姿を確認して、中に入った。

戸を閉め、常備されているパイプ椅子を取り出して2人の近くに座り、漸く一息ついた。

「お疲れ様なのです、先輩。逃げきれて良かったのです。はい、どうぞ」

「ああ……本当に。ありがとう、るしあ」

タロか、他の霊か。

兎に角誰かに聞いていたようで、るしあはスポーツドリンクを差し出してくれた。

これも保健室に常備してあるやつだったので、遠慮なく貰い、啣る。

「――ぶは。畜生、あいつらめ」

「e—sports部と総合格闘技部？」

「はい……あれ？ ちよこ先、何で知ってるんですか？」

「噂になってるからねえ」

「噂？」

何のことだろうか。あいつらと関わる事なんて、スバルと関わらなければ無いと思うのだが。

良く分からず首を傾げる俺に、「先輩」とるしあ。

「その眼鏡、大空先輩に選んで貰ったって聞いたんですけど、本当ですか？」

「え？ ああ。そうだけど。センスに自信無いし、選んであげるって言われたから」

「あら。本当だったの、その噂？ やるじゃない」

「本当に。スバル、いいセンスしてます」

感心した様子を見せるちよこ先の言葉に同意する。

昨日俺の新眼鏡を見たシオンとわたためも、似合ってるって言ってくれたし。本当、自分で選ばなくて良かった。

ただ、俺の言葉に、ちよこ先が不思議と苦笑する。そういう意味じゃないんだけど、言わんばかりだ。

と、どうか。

「昨日、スバルと眼鏡を買いに行ったことが噂になってるんですか？」

漸く先程まで行われていたあいつらとの追いかけてこの原因に思い至り、ちよこ先に尋ねた。

ちよこ先が、首を縦に振って答える。

一方の俺は理由が分からず、首を傾げた。

そもそも出かける約束は朝の通学路でしたし、帰りも一緒に学校を出ているから、目撃者は多数いるだろうし、スバル自身、陽キヤ筆頭の結構な有名人であることは知っているから、まあ話題に上がるといえるのは分からないでもないが、それでもそんな風に大々的な噂になるとは思えない。

噂の内容ではなく、出所の問題だろうか。悩む俺に、ちなみにとちよこ先。

「噂の発端はあやめがスバルと貴方が逢引に行ったのに、私は仕事なんてヤダって言って、昨日の放課後に天音さんと追いかけてこしてたからね」

「おい」

何やってんだ、あの生徒会長。

「その結果、ホ口学園はあやスバ以外認めない派、三角関係の痴情の纏れ派、というかあの男誰だっけ派、その他大勢の3つに分かれ、混沌を極めていたわね」

「4つでしたか」

「割合的には10:1:0.1:88.9」

「ほとんど興味無いの草だが」

そして思ったよりもあやスバが多い。

「まあ、冗談なんだけど」

「ですよね」

「混沌を極めてた辺りは」

「あ、追いかけてここは本当なんですよ」

天音先輩、お疲れ様でした。今度またお手伝いに行きますね。

「目立ちたくないなら、暫くは大人しくしていた方がいいわね」

「はい」

しかし、目立ちたいと思った事は無いから、大人しくしろと言われてもどうしたらいいのかわからない。

そしてるしあの瞳からハイライトが消えている理由も分からない。スバルとの噂が本当だと答えた辺りから怪しくなり、スバルを名前で呼んだ所からハイライトが消えた。

「……そろそろ、昨日の話に入ってもいいですか？」

気づかなかった事にして、話題を変える。

元々要件はそれであつた。昨日の晩、フブキ部長やミオ先輩との通話が終わった後、ちよこ先とるしあには簡単に話をして、詳しい説明と話を聞く為に放課後、時間を取ってもらつた。

本当は授業終わつてすぐのつもりが、想わぬ邪魔が入つたからすでに遅くなつていて、完全下校時刻がもう間近。終わるだろうか。

「私は構わないけど」

そう言いながら、ちよこ先の視線はるしあへ向く。

俺もるしあへ視線を向けた。ハイライトは戻つていない。

何か言わなければならぬのかもしれないが、内容が思いつかない。

「…………るしあも、いいかな?」

結局、無難な声かけをすると、るしあは溜息を漏らした。

「…………私も大丈夫なのです」

「ありがとう、るしあ」

聞く姿勢を取つてくれたるしあに礼を言う。

「ちよこ先も、ありがとうございます。時間を取つてくれて」

「魔界出身として、魔導書つて言うのも気になつてから、気にしないで」

「あ、それはるしあもなのです。しかも、調べたらネクロノミコンつて死霊秘法つて言う

じゃないですか。もう、るしあの為の本と言っても過言ではないのでは？」

言われてみると、死霊術士にネクロノミコンの組み合わせって凄く似合う気はする。

実際は死霊術について書かれているというわけでは無かった筈だから、完全に字面だけなのだけど。

「私が見つけたら貰えないですか？」

「それはイナと相談してくれ」

あくまで探し物を頼まれただけの俺に、見つけたそれをどうするか決める権利はない。

「それで、昨日の件なんですけど」

思いだしながら、1つずつ。

引き込まれた時の状況、引き込まれた先の景色。

イナの外見、様子、話した内容。

主観は可能な限り交えず、見て、聞いて、触れた物を可能な限り詳しく語る。

時間にして20分程度。完全下校時間間際。

話を終えると、腕を組んだちよこ先が唸る。

「聞く限り、人間では無さそうだけど……」

「実際にそうなんじゃないのです？ この世界の神社の様な光景だったなら、魔界には

無い景色ですから、魔界に連れ込まれたとは考えづらいのです。幽世か、この世界の一部を切り取って作った異世界か。まあ、不知火さんとか白銀さんの出身世界って可能性もありますけど。このどれだったとしても、ただの人間には出来そうにはないのです」「そうね。でも、それとその子の正体については、繋げづらいわ。その子は人間で、偶然その本を手に入れて、超常の力を手に入れたって可能性もあるわけだし」

「……確かにそうですね」

2人の視線が俺に注がれる。

そんな立派な力を手に入れたつもりは無いのだが、言わんとせんことは分かるので、そうですわねと同意した。

「でも、仮にその子がただの人間で、何の力も持っていないとした場合、その本の力はちよつと想像がつかないのです」

「ええ。人を異世界に転送させるのなんて単独ではそうそう出来ないだろうし」

シオンはびよんぴよん飛んでませんかと言いきそうになったが、前にも聞いたので辞める。本当に優秀らしい。

「それだけの事を出来る本の頁1枚だけでもどれだけの事が出来るか」

「……それって、頁が人間の体を持って生きてるって事もあり得ます?」

俺の問いに、逸れていた2人の視線が再び俺に向けられた。

驚きからか、目が見開かれる。

「……何か心当たりでもあるの?」

「いえ、それは無いんですけど。ただ、俺の近くにあるって言われて、昨日の晩に家探ししたんですけど、見つからなくて」

勿論、他の形を取っている可能性があるとも言われたから、パツつと見ただけでは分からない可能性はあるが。少なくとも、俺の近くにあると言われた時に、その可能性を思いついていた事。

昨日の晩の時点では引つかかる程度だったのだが、今ちよこ先とるしあの話聞いていたら、不安が増して、つい口に出してしまった。

俺の言葉に、ちよこ先が更に難しい顔をする。その表情から、何となく答えを察してしまう。

「無いとは言わないわ。魔法書が本の形から別の形へ姿を変えている事例は、魔界でもいくつも確認されてるし。まあ、頁1枚だけでそこまでの事が出来るって言うのは聞いたことが無いけど、魔法書の一部を切り取って使い魔のように使う魔法使いだって」

「で、でも、ちよこ先生! それはあくまで魔界の魔法書の話であって、そもそも今回の魔導書が魔法書だって保証は無いのです!」

「——あ。そ、そうよね。あくまで魔法書の話。魔導書の頁が同じ事出来るとは限らな

いいし、案外貴方の机の中とかにくしゃくしゃになって入ってるんじゃない？」

「そうなのですよ、先輩。るしあも手伝いますから、もう一度しっかり家の中とか荷物とか、探してみるのです。案外ぼろっと出てくるかもしれないですよ？ 善は急げなのです。早速今から——」

キーンコーンコーンコーン。

『完全下校時刻になりました。残っている生徒は、速やかに下校してください』
「あ」

チャイムが鳴り、完全下校を知らせる放送が続く。

俺の様子を窺うるしあとちよこ先に、気持ちでは笑って返す。

「時間ですね。すみません、ちよこ先生。俺が聞いたのに」

「……ううん。私もちよつと無神経だったわ」

「いえ。良かったです。可能性はきちんと把握しておかないと、覚悟も出来ませんし。るしあもありがとう。帰ろうか」

「……はいなのです」

るしあが立ち上がった。

俺は、るしあと自分の座っていたパイプ椅子を元の位置に戻す。

片付け終えた時には、るしあも帰る支度を終えていた。

「ちよこ先生、さようならなのです」

「さよならちよこ先。今日はありがとうございました」

「ええ。気をつけて帰ってね、2人共」

るしあと2人、頭を下げて、保健室を後にした。

日が沈みかけの薄暗い廊下を、昇降口まで並んで歩き、靴を履き替え、外に出た。

正門を抜け、るしあの家の方を目指して歩く。

いつもと違い会話なく歩きながら、ふとるしあを盗み見れば、気まずそうにしている。

その顔に申し訳なくなつて、ごめんなど口にする。

「聞いて落ち込むなら、最初から聞くなつて話だよな」

「……先輩」

「ん？」

「何で、その女の子からの依頼を受けたのですか？」

不意の問いに、言葉が詰まる。

るしあが構わず、言葉が続けた。

「そのイナちゃんからの依頼、別に受けなくてもよかつたと思うのです。受けなくても、案外許してくれたかもしれないですし、そうでなくても、待つてたらシオンさんや誰かが、助けに来たかもしれないのです」

「……まあな」

昨日のイナの様子を思い出すに、強制する様子は無かったと思う。頁の傍に居て、使えそうな人手。手伝ってくれたら御の字程度のニュアンスだった。

断つたとしても、案外すんなりと返してくれたかもしれないし、直ぐにミオ先輩が動いてくれていたから、もしかしたら対して時間を置かずに誰か来てくれた可能性は否めない。

「なら、なんで受けたのです?」

「そりゃ、俺の傍にあるって言われたし。危険物の可能性も高かったから」

「でも、危うきに近寄るなって散々言われてるのです」

「……」

それは否定できないが。

それでも、俺の近くに危険物があると考えたら、探さないといけないと思つたのだ。だって。

「一緒に住んでるシオンさんとかわたためちゃんとか、お友達とか、危ない目に合うかもしれないですしね」

「……結果的に巻き込んで、お願いしちゃってるけどな。見通しが甘かった」

正直、紙切れ一枚探す程度の心づもりだった。

「見通しの甘さは今後気を付けて貰うとして。そういう優しい先輩だから、多分真つ先に誰かの可能性に気が付いて、それでシヨックを受けたのだと思うのです。だから、気にしないでいいんですよ。今先輩が落ち込んでいるのは、全然悪い事では無いのです」

「……そっか。悪いな、るしあ」

「何がです？」

にやりと。少し意地の悪い笑みを浮かべるるしあにつられ、笑顔がこぼれた。

「ありがとう、るしあ。助かるよ」

「お任せなのです」

どんと、るしあが胸を叩く。

……。

「ん？」

「るしあ、今日ご飯食べに来ない？ 今から夕飯作るし、好きな物作るよ」

「その前に今何を考えたのか、教えて貰うのです」

「るしあは頼りになるなーって考えました。本当です。信じてください。からから辞めてください。ごめんなさい」

依頼3

イナに頼まれた頁探しを始めて3日目。保健室でちよこ先とるしあに説明した翌日。

俺の傍にあるという抽象的な言葉しか手掛かりが無く、そもそもどんな形なのか分からないから探しようが無いのではと思い始めた頁探しは、既に難航していた。

一先ず紙面に絞って自宅に関して頼まれた昨日一昨日で粗方探したが見つからず、俺の所属しているクラスで使っている教室も、それは同じ。

机の中でくしゃくしゃになっていくという事が無かったし、置きっぱなしの資料集が数冊程度しか入っていないロッカーの中に、それらしいものは無い。

流石に他の生徒の机の中を探るわけにはいかず口頭のみでの確認だったが、それらしい情報は無かった。

教卓、掃除用具入れ、掲示板、本棚。教室内の公共の場所を全て探しても、見つからない。

そもそも俺の傍ってどこまでの事を指すんだろう。

俺の活動圏内という意味なら、町全体なのだが。流石に町全体を指して俺の傍というのは……人間の尺度だとちよつと受け入れられない。

とりあえず俺の行動範囲を1人で探して、それでも見つからなければ色々な人に頼み込んでの大海戦術にするつもりではいるが……。

「何を探せばいいか、分からないもんなー」

せめてどんな形になっているのかだけでも分かると助かる。

だが、唯一それを知っているのかなイナとは、どう連絡を取ればいいのかわからない。

また何かをぐるぐる巻かれて、引き込まれないとだめなのだろうか。抵抗する気は無いから、今度はもつと心に優しいやり方を取ってほしい。

そんなことを思っているうちに、俺が教室に次に良くいる場所に着いた。

いつものように、ノックを数回。

『はーい』

「おれでーす」

『どーぞー』

軽くやり取り。扉を開ける。

ミオ先輩は不在のようで、座っているのはフブキ部長だけだった。

「お疲れ様です」

「お疲れー。さあ、その顔を私に見せなさい」

開口一番に、謎の要求をされる。

一先ず中に入り、荷物を置いた。フブキ部長を見れば、爛々と目を輝かせている。何故。

「どうしたんですか？ 俺の顔なんて、見慣れてるでしょうに」

「眼鏡が見たい」

「……どうぞ？」

「外さないの！」

「ええ……」

見たいって言ったじゃん。

大人しく掛けなおすと、満足げなフブキ部長が、まじまじと俺を観察する。

「ふむふむ。成程成程」

「どうでしょうか」

「うーん……満点！」

「ありがとうございます」

後でスバルに報告しておこう。困惑するさまが目には浮かぶ。

「いやあ、スバルちゃん、センスいいね」

「そうですね。助かりました」

「……それで、次はいつ、眼鏡買いに行くの？」

「当分行く予定はありませんが」

物持ちはいい方だし、俺の視力はこれ以上悪くならないんじゃないかという所まで悪くなってるから、乱視が悪化したとかそんな事でもない限り、当分買い替えることはない。

「いやいや。予備とか必要じゃない?」

「そもそも、今掛けているのは、魔法の練習の為ですから、もう数日したら、また眼鏡かけなくなると思いますし」

「……私も好き勝手眼鏡掛けさせて遊びたい!」

「別にいいですけど」

「よし、言質取った! 何時にする?」

「頁探しが終わってからですかね」

「それ何時?!」

何時だろう。

「でも、やる事がある状態で遊びに行っても、集中出来ませんし」

「……まあ、そうだね」

とはいえ、残念がっているようで、フブキ先輩は溜息を洩らすと、自分の席へと戻った。

俺も、定位置の席へ腰を下ろす。

「それで？ 何か進展はあった？」

「いえ。正直何も」

「そつか。まあ、どの範囲で何を探せばいいのかわからない状態だもんね。というか、ちゃんと聞いておきなよ。そういうのは」

「返す言葉も無いです」

完全に俺のミスだ。

ペこりと頭を下げる俺の前で、「でも」とフブキ部長。顎に手を当て、考える仕草。

「やっぱり不思議だよ。電話でも言ったけど、君の傍に頁があるなら、ミオが気づいて
そうなものだけ」

「ああ。何か匂いがあるのか？」

この前の電話口に、そんなことを言っていたことを思い出す。

「うん。この世ならざる匂いって言った。嗅いだことが無いとも」

「んー……でも、無くなって暫く経ってるなら、匂いが無くても不思議は無いのでは？」

それに、その路地裏に残っていた匂いの源と、頁の匂いが同一とも限りませんし」

「……そうだけどさ。なんか気になるんだよ。同一じゃなかったとしても、それでも長く傍にあったのなら匂いは移るよね」

「そうですね」

「最近落としたと仮定するなら、ミオが追えないくらいに消えているのは不自然。逆に、匂いが完全に消えているとしたら、それだけ時間が経つてること。なら、それまで無視していたものを、何で今更探すんだろう」

「……そう言われると」

勿論、落とした場所の匂いが強烈で、別の匂いに染まってしまったとか、落としたことに今まで気が付いていなかったとか、否定意見が思いつかない訳ではないが、自分は思いつかなかった可能性だ。それだけで、吟味する価値は十二分にある。

考えを纏めるために、席を立ち、ホワイトボードの傍に移動した。

フブキ部長が視線を向ける前で、一先ずマーカーを手にホワイトボードへ書き込んでいく。

「……もし、ミオ先輩の言う匂いが頁についているのなら、気が付かないのはおかしい」「うん。それは間違いないと思う。離れた所からでも分かるくらい、嫌な臭いだって言ってたし。頁一枚なら、そこまで際立った匂いは無いかもしれないけど、この辺にあるのなら、ミオの鼻なら見つけられると思う」

「なら、やっぱり頁自体には匂いが無く、今匂いが分からないのは完全に香り香が消えてしまったからだと仮定して。なんで匂いが完全に消えるまで探さなかったのか、ですか

……正直、俺ならそのうち見つかるかなと思つて探さない事もありますが」

「だったら態々探させないでしょ」

「ですね」

じゃあ、何だろう。

2人でうーむと頭を捻る。

「……見失つたとか」

何か思いついたらしく、フブキ部長が何やら口にした。

「どういう意味ですか？」

「ほら。例えば私が君にシャーペンとか貸したとするでしょ？」

「はい」

「それを返して貰うのを忘れてて、ある日そのことに気が付いたとしても、君に貸したことを覚えてるなら、探そうとは思わないじゃない？」

「そうですね」

探す作業は、つまるところどこにあるのか分からないから行われる行為だ。

どこにあるのか分かっていれば、探そうとは思わない。

「でも、それで君にシャーペンを返して貰おうと思つた時、君の手元にシャーペンが無ければ、探さなきゃと思うでしょ？」

「……成程」

あると思つていた場所に無いのなら、探さないとはいけないと思つて当然だ。

「でも、場所が分かつていたなら、前もつて回収してしまえば良かったのでは」

「うーん……イナちゃんも現世には基本的に関わらないようにしているからとか、本来だったら頁だけだと何も起きない筈だから気にしてなかったとか、理由はちよつとわからないけど。とりあえず、頁が現世の何処かにあるのかは把握していたけど、回収はしなかつた。でも、急にその場所に見当たらなくなつてしまつて、だから慌てて探さなきゃと思つて、君に頼んだ」

「……」

「君に頼つた理由は、イナちゃんが言つた通りじゃないかな」

「俺の傍にあるから?」

「イナちゃんしか感じられない何かを君から感じたんだと思うよ」

理屈は通る。それに。

「……昨日、ちよこ先とるしあと話してる時に聞いたんですけど」

「うん」

「魔法書が体を持つて生きている可能性とかも、あるそうです。まあ、イナの持つていた本が厳密に魔法書かは分からないので、そこまで出来るのかは分かりませんが。勝手に

移動を開始したから、見失ったという可能性も、そう考えればあり得ますよね」

「……そうだね。私やミオだって、こうして化けられてる訳だし、魔法で同じ事が出来ないわけないか」

そう言つて、フブキ先輩は微笑んだ。

「成程。自分の親しい人が、その頁なんじやないかって考えたから、電話してた時、ちよつと様子おかしかつたんだね」

「そうでした?」

「終わり際に少しだけど。でも思ったより平気そう」

「昨日、るしあに慰められたので、落ち込んでられません」

「そつか。まあ、君が受けたんだから、手伝つてはあげるけど、しつかりね」

「はい」

頷き返せば、「よろしい」とフブキ部長。

それから、「あ」と何か思い出したように声を上げる。

「そういえば、ミオと会わなかつた?」

「ミオ先輩ですか? いえ。会ってませんけど」

「そつか。いや、用事があつて少し遅れるつて言つてただけど、遅いなつて」

「そうですね」

時計を見れば、SHRが終わってから1時間半程経っている。

少しの用事だったら、もうとっくに終わっていななものだった。

「何かあったのかなー」

フブキ部長が自身のスマホを取り出した。暫し操作し、諦めた様子でポケットへと仕舞う。

連絡は来ていなかった事は、容易に見て取れた。

「俺、探してきましょうか？」

「んー……いや、私も行くよ。部活は終わり。ミオと合流して、そのまま帰ろ？」

「いいんですか？」

「いいよいいよ。おしゃべりしたいだけだし。そうだ。折角だから今日はうちにご飯食べにくる？ シオンちゃんも誘って」

「……いいですけど、もう1人同居人居るんですけど、その子も連れてって良いですか？」

「おっと、何も聞いてないけど？ 一昨日の電話の時にはいなかったよね？」

「寝てました」

旅人時代の生活のせいなのか、わための体内時計は正確だ。日の出と共に起き、日の入りと共に寝る、クマのような生活をしている。

「一昨日は帰るのが酷く遅かったから、帰った時にはわためは寝てしまっていた。……因みにその子はどんな子？」

「獣人ですね、羊の」

「フブキ部長が腕を組み、頭を捻る。」

「……それは、人なの？ 羊なの？」

「見た目は人ですね」

「その疑問は俺も未だに良く分からないままで。」

「まあ、楽しみにしとくよ。じゃあ、早くミオの事を見つけて帰ろっか」

「はい」

「自分とフブキ部長の鞆を手にとって、俺はフブキ部長と共に部室を出た。」

「がちやりと、フブキ部長が部室のカギを掛けるのを確認してから、俺はフブキ部長と共にミオ先輩を探すべく歩き出そうとして。」

「おーいー！」

「ミオ先輩の声が廊下に響き、そちらに視線をやった。」

「こちらに向けて歩いてくるミオ先輩。その隣に、何故か百鬼の姿がある。」

「よっ、お前さん方ー」

「よーす」

「やつほー、あやめちゃん」

軽い挨拶をするフブキ部長に、はたと首を傾げる。

「フブキ部長、百鬼と知り合いなんですか？」

「そうだよ。幼馴染みたいな感じ」

その言葉に、疑問を覚える。

百鬼は俺の目の事をちよこ先に聞いていたから魔界出身だと思っていたのだが、違
のだろうか。

更に聞こうとするが、それより早くミオ先輩と百鬼が俺とフブキ先輩に合流した。

「2人とも、この後時間ある？ あやめが生徒会の仕事手伝って欲しいみたいで」

「そうなんだ。私は別にいいけど」

「俺も手伝います」

頷き返せば、百鬼の表情が明るさを増す。

「3人ともありがとう！ 生徒会長の名に懸けて、このお礼は必ず！」

「あー……うん」

「分かったー」

「期待しないで待ってる」

「何か反応軽くないか!!」

依頼 4

「たっだいまー!」

意気揚々と、百鬼が生徒会室の扉を開けると、生徒会室の中には、天音先輩が死んだ顔でテーブルに向っていた。

声に気が付き、天音先輩が顔をあげる。

「あつ! 会長! もう、何やって——」

「お邪魔します!」

「失礼します」

「お疲れ様です」

「どうだ。助っ人連れてきたぞ」

文句を言おうとしたらしい天音先輩の言葉を遮る形で、俺はフブキ部長とミオ先輩とともに天音先輩へ挨拶。

そんな俺達の前に立つ百鬼は、恐らくはどや顔を浮かべているのだろう。胸を張っていた。

「……この件、一般生徒に手伝わせていいんですか?」

「ん？ まあ、大丈夫だろう。1人は今更だし、この2人は私の友達だからな。信用していいぞ」

「はあ」

ちよつと不安になるやり取りをする百鬼と天音先輩。

最後は天音先輩が折れ、「分かりました」と呟く。

「……とりあえず仕事に戻ってください。生徒会長が居ないと処理できない書類もあるんですから」

「……かなたちちゃん。ちよつとは褒めてくれてもいいんだ余？」

「終わったら褒めてあげます。3人には私から仕事振っておくので」

「……」

露骨にがつくりと肩を落としながら、百鬼は自分の席へとつき、仕事を始めた。

それを見た天音先輩が立ち上がり、入口に立ちつばなしだった俺達の方へと近づいた。

「ごめんなさい、白上さん、大神さん。無理には言わないので、少し手伝って下さると助かります」

「大丈夫。そのつもりで来たんだし」

「そうそう。気にしないで」

「ありがとうございます」

そう言いながら天音先輩は頭を下げた。

数秒して、先輩の頭が上がり、視線は俺の方へ向く。

「君もありがとうね」

「いえ。先日は大変だったと聞いたので」

「あー……うん」

視線を向ければ、百鬼は書類で顔を隠している。自覚があるようで何よりだった。

「でも、今回の事、ココに言ったら駄目だからね。まだオフレコなんだから」

「そんなスパイみたいなことしませんって」

「……」

「すみませんでした」

素直に謝る。

「とりあえず入って、好きな椅子に座ってください。今日は他の生徒会のメンバーは来ないので」

「来ないんですか？」

「外回り中なの。もう時間が無くて」

生徒会の仕事で外回りというのがぴんと来ず、何だろうかと首を傾げる。とりあえず

俺はいつもの位置へと座り、フブキ部長とミオ先輩も思い思いの席へと座った。

俺達の前へ、天音先輩が書類の山を置く。心なしか、俺が1番多い気がするのは気のせいだろうか。

「実は、来月の学園祭なんですけど、近隣の学校と合同でやることになってまして……そのための調整でてんでこ舞いなんです」

「すごい！ 楽しみだねー！」

「そうだねー」

「学園祭……展示……徹夜……う、頭が」

「ゾめん」

昨年の学園祭の部活展示の準備を思い出し、頭を抑える俺。

そんな俺からフブキ部長とミオ先輩は目を逸らした。

ホロ学園の学園祭は、全生徒強制参加なのは勿論の事、各部活も大会間際等の理由が無ければ、何かしらの活動をしなければいけないルールがある。

その為、フブキ部長率いる我々すこん部も取り合えず何か適当に展示作ろうかーという話になったのだが、準備期間直前にフブキ部長とミオ先輩が学校に来なくなり、連絡もつかなくなった事件が発生した。

とはいえ、準備しないわけにいかず、一応展示テーマだけは決まっていたので、数日

間ほぼ徹夜で調べ、まとめ、書き上げ、部室の飾りつけをしたのである。

結局次に2人が登校したのは文化祭明け。何故来なかつたのかと聞いたら、当時は実家に呼び出されたからと言われたことは、今でも覚えてる。

「今年は大丈夫ですか？」

「いざとなつたら、ミオは置いていくから」

「いや、流石にそういう訳にはいかないでしょ」

「大丈夫大丈夫。彼の事はきちんと報告してるから、それ関係つていえば、とりあえずミオを連れてかなくても怒られないから」

そういう問題なんだろうか。

「まあ、あの会合自体、緊急招集だったから、大丈夫だと思うけど」

「はい、フラグ立ったー。ミオのせいー」

「ミオ先輩……ひどいです」

「うちのせいなの?！」

「……んん」

咳払いが、会話を遮る。

ジト目の天音先輩がこちらを見ていた。

「もういいかな?」

「すみませんでした」

「全く。とりあえず、君は白上さんとその書類を纏めてください。大神さんは僕を手伝ってくださいますか？」

「はい」

同音の返事をして、3人そろって仕事に入った。

「じゃあ、お疲れー」

「お疲れ様でしたー」

黙々と仕事をする事、数時間。

一先ずのノルマは済んだ為、今日は解散となった。

後片付けにもう少しだけ残ると言う天音先輩と百鬼を置いて、3人で帰路につく。

「いやー、やつぱり慣れない仕事は大変だね」

「そうだねー」

「その割に平気そうですけど」

今日の仕事の量は、幾らか手伝い、慣れていた俺でも大変だったのだが。

フブキ部長にもミオ先輩にも、まだ余裕が見て取れる。

「まあ、家の仕事手伝ってるからね」

「家の仕事に書類整理があるんですか？」

「そうだよー」

家の仕事で書類整理と言われても、ちよつとピンとこなかつた。

「白上家は大名みたいなものだから、陳情とか揉め事の対応とか色々してるんだよ」

「へー……滅茶苦茶偉いのは？」

「だから、そう言ってるでしょ」

視線をフブキ部長へ向ければ、どや顔を浮かべて胸を張っていた。

「……これからは様付けで呼びますね」

「えー、いいよー。今まで通りでー」

「何をおっしゃられていられるのですか白上様」

「今の一瞬で凄く距離空いたね!!」

嘘だろお前という表情を浮かべるフブキ部長。

いやいや。そんな顔されても困る。

「当方、凡俗の徒であれば、白上家の次期頭首ともあろうお方と、こうして口をきかせていただくことすらおこがましいです」

「すごい卑下したね！ 一周回ってわざとらしいんだけどー」

「そうだよ。もっとあがめて。この方こそ天の下を知ろしめす白上フブキ様なんだから

ね」

「ミオ!!」

「……」

「膝をつこうとしないで!」

屋内だったら悩まなかつたんだけど、流石に屋外だから躊躇ってしまった。

「この話おしまい! 今から様付け禁止! はい、スタート!」

「なんだよ、フブキ。もう終わりかよー」

「距離の詰め方下手か! でもちよつと新鮮で面白いから暫くそれでもいいよ!」

「あつ、もういいです」

「何なのさ!」

「フブキ。どうどう」

「ミオー!」

わつつと、フブキ部長がミオ先輩へ抱き着いた。

ミオ先輩もおちよくりの一端を担っていた気がするのだが。さっきのなだめ方も、動物相手みたいな所があつたし。

「でも忙しいなら、今年も家の事を優先して大丈夫ですよ。ミオ先輩も、フブキ部長をお手伝いしてください。学園祭の準備は1人でもできますから」

「んー、そうかもしれないけど、折角の学園祭なんだし今年はやんと準備からやりたいな。それに、君だつてそれどころじゃないかもしれないし」

「それはまあ、そうですね」

出来れば準備期間までには真探しを終わらせたい所である。

「……分かりました。学園祭の準備が始まるまでには必ず見つけます」

「うむ、よく言った！　じゃあ、私も当日近くに呼び出されないように、今のうちから少しづつ作業しておこうかな」

「なら、うちは2人の手伝い、しっかり頑張るね」

「よーし、すこん部ファイターオー！」

「「おー」」

見落とし

すこん部の団結から一夜明け。

俺は眞探しの為にイナに捕まった場所へ来ていた。

周囲からの好奇の視線に耐えながら、ビルの隙間を確認する。

やはり、連れ込まれたビルの隙間は何も見えず、試しに声を掛けるが反応も無い。

「やっぱりダメか」

何となく分かっていたから、諦めも直ぐにつき、俺は移動することを選ぶ。

引つかかるものが無いかと、周囲を見渡しながら、歩は駅の方へ向ける。駅前にある、市内地図を見て、心当たりを探る算段だった。加え、この街の駅は街の中央部にあり、俺の行動範囲だから、可能性も高い。

裏路地を抜け、駅の方へ。

市内地図は南口の方にあるから、歩道橋を渡る。

「ん？」

歩道橋を渡り切り、地図の方を向いたときに、その女性を見つけた。

ピンクのブラウスに茶のロングスカートを履いている。腰の程まで伸びた髪は、自分

と違いすっかりと手入れされているようで、一糸の乱れも見せていない。

ふと、そんな女性の手が動き、髪の毛を耳へと掛けた。顔が覗くと整った目鼻立ちが僅かに歪み、難しい顔をしていた。

スマホと地図を、視線が行ったり来たりしている。状況は何となく把握できた。

「あの」

近づいて声を掛けると、女性が自分の方へ振り向く。

きちんと正面から見れば、フブキ部長やミオ先輩といった、美人の多く、美形慣れしている環境にいる俺でも素直に美人だと感心してしまう顔立ち。

芸能人だろうか、一瞬そんな考えが頭をよぎる。

「大丈夫ですか？ 迷っているようでしたけど」

「あ……」

尋ねると、女性は少し悩む表情を見せる。

困らせてしまったか、ナンパと思われたか。

どちらも本意ではないから、断られれば、直ぐに離れるつもりでした。

女性は暫し悩んだ後、口を開く。

「あの、道を聞きたいんですけど、いいですか？」

「勿論。何処に行きたいんですか？」

「神社なんですけど」

「神社？」

意外な言葉に聞き返すと、はい、と女性は頷いた。

どうやら聞き間違いではないらしい。

しかし、態々別の街から見に来るような神社が、この街にはあっただろうか。

名物巫女が居る神社はあるから、彼女を見に来たとかだろうか。

熱心な信者でもなく、神社に行くことなんて初詣を除けば、散歩中に気分で程度の自分が知らないだけかもしれない。

「住所とか、分かります？」

「あ、はい。此処なんですけど」

スマホの画面を見せられる。住所と地図が載っていた。

自分の脳内マップと照らし合わせれば、場所の見当は直ぐにつき、同時に名物巫女がいる神社ではない事も分かった。

「ここなら分かります。案内しますよ」

「本当ですか？ ありがとうございます」

頭を下げてくる女性。

「じゃあ、行きましようか」

歩き出して、10分程。

双方、無言。

特に並んで歩いているわけでもないから、仕方がないかもしれない。時折、ついてきているか後ろを確認する。今回も、ちゃんと居た。

「……あの」

声を掛ければ、女性からの返事が返って来た。

「疲れてないですか？」

「大丈夫です。私、こう見えて結構体力あるんですよ」

むん、と腕を曲げるが、その細腕に変化は見られない。

まあ、大丈夫と言うならいいかと思いつつながら、周囲を見て道を確認し、十字路を左折する。

「でも、知らなかったです」

「何がですか？」

「態々別の街から見に来るほど、立派な神社があったなんて」

ふと思いついた疑問を口にする。

「あ、いえ。今日はオフだから、友達のおうちに遊びに来たんです。それで、折角だから

神社巡りもしようかなと思つて。好きなんです、神社巡り」

その言葉に、成程などは思いながらも、それでも態々見ようと思う程の場所なのか、と思つてしまう。

「……ちよつと疑つてます?」

「え?」

「顔に書いてありますよ」

「……」

ポーカーフェイスと言える程ではなくとも、そう直ぐにばれるほど分かりやすい表情豊かな自覚は無かつたのだが。

驚きが見れたのだろう。くすくすと、女性が笑う。

「これでも色々な人に会つてるから、目を見れば分かりますよ」

「……すごい」

その目が養えたら、俺のトラブル體質も、もう少し改善するだろうか。

「それに貴方が思う程、小さな神社というわけでもないですよ」

ほらと、スマホの画面を見せられる。

見た感じは、確かに綺麗な神社だった。記事の日付を見れば、1年前前。

ネットに上がっている写真を転用したのでなければ、神社の外観は変わらないだろ

う。

ただ、やはり覚えは無い。住所的に、そう極端に生活圈から外れているというわけでもないから、引越越し当初に色々と見て回った時に見て居そうなものだが。

「おっと」

足を止める。横を見れば、鳥居と長い階段。

「ここですね」

「凄く長い階段ですね」

「……確かに」

こんなに目立つのに、なんで知らなかったのだろうか。

「……あの、一緒に行ってもいいですか？」

「はい、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

同行の許可を得て、女性と一緒に階段を登りだす。

石造りの階段は、整っている訳では無く、凸凹として登りづらい。

大丈夫かなと確認すると、存外すっかりした足取りだった。自分のように、一歩一歩踏みしめている様子も無い。

「……なんか運動とかしてるんですか？」

「え？」

「いや、しっかり歩けているので」

「……」

俺の言葉に、女性はすぐに答える事は無く、じつと見上げられる。一体何だろう。

「あの？」

「あ、いえ。ちよつと体を動かすことが多いだけですよ」

「そうですか？」

ちよつとで済ませられるような気はしないのだが。

「私からも聞いてもいいですか？」

「何ですか？」

「君ってアイドルとか興味ない人？」

随分急な質問に、「面食らう。」

何を試されているのだろうかと考えたが答えは出ず、とりあえず素直に答える事にした。

「えつと……まあ、そんなにながつつり追いかけてる訳じゃないですけど、有名な人位は知ってるし、音源買ってるくらいです」

「ちなみに誰が好きなの？」

「えーと、すいちゃん、ときのそらさん、Azkiさんですかね。というか、この3人しか知らないし、追いかけていないですけど」

そう答えると、女性は何か考える様子を見せた。
ぶつぶつと、何か呟くのが聞こえる。

——知らないわけじゃないのか？

どういう意味だろうか。

尋ねようとするが、それより早く、「あ」と女性。

「着いたみたい」

そう言われ、見上げれば、階段の終わりが見えていた。

漸くかと思う俺の脇を、女性が抜いていく。

どこにそんな体力がと思いながら、急いで俺も加速した。

足取り軽く、跳ねるように進む女性を追う。追いつけない。

体力だけでなく、体幹も尋常では無かった。

「とうちゃー……くっ」

一足先に、女性が階段を昇り切った。歓声が、尻すぼみに消える。

どうしたのか。

追いついた俺は尋ねようとして、目の前の光景にその答えを知った。

神社があると思われた敷地が、空だった。

社も手水舎も社務所も狛犬も無い。砂利も敷かれていないし、参道が伸びても居ない。

「……………」

もぬけの殻。すつからかん。そんな言葉が頭をよぎる。

場所を間違えたのだろうかと思い、スマホを取り出し、地図アプリを通して住所を確認するが、先程女性に言われた場所と相違ない。

一応女性に確認し、見ていたWebサイトを呼んだが、やはり間違えてはいなかった。取り壊した、のだろうか。それなら、建物が無い理由については、確かに合点が行く。ただ、それなら鳥居も取り除かれそうだし、此処までまっさらにする工事をしていたのであれば、流石に気が付くと思うし、そもそも砂利石まで撤去するだろうか。

何かを作る予定だったらそのための資材等が置かれているはずだし、そうでないにしても、立ち入り禁止の札の1つでもありそうだが、それも無い。

「……………」

足を踏み入れ、辺りを見渡す。周囲を見て回るが、やっぱり禁止の札も工事予定の看板も無かった。

「ねえ、君」

「はい」

敷地の中央の辺りで周りを見渡していると、声を掛けられた。

鳥居の方へ、振り返る。女性は到着時の場所に立つたままだ。

「何か知ってる？」

「いいえ、何も。ごめんなさい」

「ううん。私も確認したけど、此処が来たかった場所で間違えてないから……壊されちゃったのかな？」

「そんな感じでもないですけど」

何かあった痕跡は一切ない。元々何もなかった、と言われても信じられる程。

立つ鳥跡を濁さず。そんな様相を成している。

「じゃあ、この写真、何処か別の神社の写真を持ってきたのかな」

「でつち上げ記事って可能性はありますけど」

「でも画像検索したけど、ここの神社を紹介した記事が幾つかあるんだよ」

「そうなんですか？」

「うん」

見せて貰えば、確かに類似した記事が幾つか。コピーではないらしく、社を撮影する写真の角度にもバリエーションがあったし、公開されている写真の1枚が、階段を登り

切った場所から街を見下ろす形の写真で、その写真と今見える景色は酷似している。確かにここから撮った写真で間違いなさそうだった。

その記事を書いた人が、集団幻覚を見たのか。それとも、今見せられているのか。今更ながらに、見えない現状を呪う。魔法の目があれば、何か見えるかもしれないに。

一旦家に帰って、シオンに話すか。それとも事実確認をした方がいいか。

とりあえず今は、どうしようもない事だけは確かだった。

「……とりあえず、帰りますか？」

「そうだね。ちよつと早いけど、このまま友達の家に行つちやおうかな」

「場所は？」

「……お願ひしてもいい？」

「分かりました」

並んで、階段を下る。

教えられた住所は、この場所から近い場所にあるマンションだった。歩いて5分くらいの目と鼻の先である。

「そのお友達、最近引越してきたんですか？」

「そうみたい。仕事忙しくて、漸く終わったって言ってたよ。まあ、もしかしたら片付け

が済んでないから、私に手伝わせる算段かも」

「……仕事仲間なんですか？」

「え？」

「さつき、オフって言っていましたから、貴女も働いているのかなと」

まだだ。

何故かじつと見つめられる。変な事を言つたつもりは無いのだけど。

触れてほしくなかったとかだろうか。

「……あ、着きましたよ」

僅かに居心地の悪さを感じながら建物を指さす。

「近かったね」

「そうですね」

多分、先に知っていれば、神社跡地で、あそこですよと、指をさすだけで済んだと思う。

「それでは、自分はここで」

頭を下げ、立ち去ろうとすれば。「ちよつと待って」と呼び止められる。

「何かお礼したいんですけど」

「いいですよ。別に」

勝手にやったことだ。再び立ち去ろうとすれば、再度呼び止められる。

「本当に気が付いてないの？」

「はい？ 何がですか？」

「……」

財布でも落としたらどうかとポケットを探るが、そんな感じは無かった。

俺のその様に、少し複雑そうな表情を見せた女性は、俺との距離を詰めると、耳元へと顔を寄せてきた。

「——こんにちわ、ときのそらです」

「!？」

聞こえてきた声に、驚き離れる。

耳に残る感触。鈴の音のようなその声は、凡そ声真似などでは説明できぬ程に鮮やかで。

「……え？ 嘘」

「良かった。これでも気が付いて貰えなかったら、どうしようかと思った」

啞然とする俺の前で女性、ときのそらがほつと胸を撫で下ろして見せる。

言葉が出てこない。確かに瞳の色は違うが、見れば見るほど、間違いなくときのそらさんだった。

「どつきり?」

1番に思い至った可能性を口にする。それか、反応を観察する系の番組とか。そう思い、辺りを見渡してみるが、それらしい姿は無い。

俺の反応に、何を考えたのか見当がつからなく、「違うよ」とそらさん。

「何かの番組とかじゃなくて、プライベート。此処は間違いなく友達の家だし、神社巡りも本当だよ」

「成程……」

納得していいのかは疑問だ。

トップアイドルに急に声をかけて、道案内とはいえ連れまわした癖に、正体に気が付いていなかったという事。

自分の鈍さに愕然としながら、疑問を口にする。

「良く信じてくれましたね」

「言つたでしょ? 目を見れば、分かります」

「そ、そうですか」

再三思うが、その目が養えたら、俺のトラブル體質も、もう少し改善するだろうか。……無理だな。

「でも、こんなに気が付いて貰えないとは思わなかったよ。私ももっと頑張らないと」

ぐつつと手に力を籠めるそらさんに、ただただ首を横に振る。

「いや……俺が鈍いだけなんで」

分かりやすいもので、相手が天下のときのそらという事実を理解が追い付いてくると、緊張から言葉がたどたどしくなってきた。

良く、普通に話せてたな俺。

深呼吸を1つ。吸って、吐いた。

こちらの状態に気づいているのか、そらさんは唐突な深呼吸を前にしても、特にいぶかしむ様子はない。

「落ち着いた?」

「……なんとか」

動悸は相変わらずだが、話せない事は無い。

「良かった」

そらさんが微笑むと、その神々しさに圧すら覚えた。生物としてのランクの違いに驚きたくなる。

流石に困らせるだけだと分かるので、腹に力を入れて耐えていると、「それで」とそらさん。

「お礼なんだけど……何がいい? 何でもするよ?」

「……」

何でもの一言で、脳内に駆け巡った考えを振り払う。

「大丈夫です。気にしないでください」

「そういう訳にはいかないよ。何か用事があったのに、私を優先してくれたみたいだし」
確かに真探し中ではあつたけど。その様子を見せた記憶はない。

「……じゃあ、サインを貰えますか。2枚」

結局、アイドルに求めるには、一番無難そうなお願いをする。

俺の言葉に、そらさんが頷いた。

「うん、分かった。名前はとうする?」

「自分と、後はフブキ部長宛てにお願いします。えっと、字はですね」

メモ帳を1枚破り、自分とフブキ部長の名前を書いて渡す。

「ちよつと待つてね。直ぐに書いてくるから」

それを受け取つたそらさんが、マンシヨンの中へと消えていった。

エレベーターに入って姿が見えなくなると、途端に力が抜けて、植え込みへと腰が落ちる。

「すつごい……なんか疲れた」

冷静になつたら、少しずつ慣れてきた。

本人を前にしたら、また緊張はしそうだが、さつきほどではないと思う。ただ、脳みそが茹っているようで、まともに頭は回らない。

茹った頭を冷やすため、近くの自販機で飲み物を買ひ、額に当てながら待つこと暫し。

「お待たせー」

そらさんが降りてきた。

はいこれと、2枚の色紙を渡される。凄い、本物だ。

「家宝にします」

額縁買わなきゃ。

「大袈裟だよー」

笑いながら言うが、それだけの代物である。細心の注意を払いながら、カバンに収める。

はい、と、手を差し出された。恐る恐る、その手を両手で握り返す。

「今日は本当にありがとう。おかげですごく助かったよ」

「いえ。そらさんの力に成れたなら良かったです」

本当に。ただそれだけ。

名残惜しさを覚えながら、そらさんの手を放す。

「それじゃあ、自分はこれで」

「うん。じゃあ、またね」

「……はい、また」

無いとは思うが、あつたらしいなと思いつつ、俺はマンションを後にする。

カバンに入れた、色紙が2枚。フブキ部長にはいつ渡そうか。

「まあ、今度でいいか」

今日はまっすぐ帰ろうと、家に向け足を延ばそうとし、方向転換する。

その前に額縁を、買わなければならない。

確認

夕食後のリビングで、俺は日中、そらさんと共に行った神社跡地について、調べていた。

見せて貰ったサイトに、画像検索から出て来た他のサイト等へ一通り目を通し、記事の内容、コメント欄、投稿日を逐一確認していく。

「やっぱ、1年前くらいか」

コメント欄は特に重要な要素は無く。

記事の内容については、個人の感想を除けば凡そ同じ内容が書かれていた。

そして、投稿日については、新しい記事は1年と数ヶ月前の日付が殆ど。中には1つだけ、半年程前の記事があったが、記事の中に訪れた日についての記載があり、その日付もやはり、1年数ヶ月前の日付と合致している。

何の因果か、丁度俺がこの家に引っ越してきた辺りである。

「この辺で何かあったのか？」

一瞬流行る時期があったのかと思いきも調べたが、そういう訳でも無いらしい。数カ月に1本程度の頻度だが、色々なブログで何年にも渡って記事は投稿されている。記

事を読んだ限りでは、古き良き社と、そこに居た巫女さんの美貌も相まって、人気は低くなかったようだ。

「んー」

もやもやとした気持ち悪さを感じながら、ネットで調べるのに限界を感じた俺は、スマホを操作した。

とりあえず他の人にも確認してみようと、トークアプリからスバルの名前を探し、トーク画面を表示させる。

【今、電話しても大丈夫？】

【大丈夫！】

メッセージを送れば、秒で返信が帰ってきた。

待機してたのかと思わずにいられない速度に感心しながら、電話を掛ける。

ワンコールで、繋がった。

「もしもし？」

『ちわーっす』

「ちわー」

電話越しに、スバルの声。

「ごめん、急に電話して。今大丈夫？」

『平気。どうしたの?』

「ちよつと聞きたいことがあって。スバルって、ずっと、この町に住んでるんだっけ?」
『そうだよ。産まれも育ちもここッス』

どうした急にと、そんな副音声が入っていきそうな声色で返ってくる。

本当にそう思う。変なこと聞いてご免と、心中で謝りながら言葉を続けた。

「じゃあ、山の上の神社知ってる?」

『神社?』

住所を告げれば、『うーん』と、電話口に唸り声上がる。頭を捻ってくれているらしい。

その反応の見たただけで、俺の中では目標の半分は達成できたようなものだった。

『あったような……無かったような……。その住所なら、行ったこと無い筈は無いけど、ただ覚えも無くて』

「そっか。やつば、そんな感じか」

『どうして急に?』

「いや。俺もそんな感じでき。それで何かもやもやして気持ち悪かったから、スバルにも同じ思いをさせようかと」

『おいー!』

「冗談冗談」

残り半分の目標も達成して、満足した俺は、とりあえず別の人にも確認しようかと思
い電話を切ろうとするが、それより早く、スバルが口を開いた。

『……ダメだ。気になるからかーちゃんに聞いてくる。ちよつと待ってて』

消音にしたらしく、スバルの方からの声が途切れる。

マイクをスピーカーにして掛かってきたらすぐ気が付くようにしつつ、俺も同じく消
音にして、スマホを脇に置いた。

丁度いいので、この間に別の話も進める事にする。

「シオン」

声を掛ければ、ダイニングチェアに腰掛け、本を読んでいたシオンが、こちらに視線
を動かした。

「何？」

「目の訓練さ、一時的に中断してもいい？」

「魔力を吸い取るなって事？」

「そういう事」

「……直探しに、魔界の目は必要ないでしょ」

「そんな事無さそうだし」

猜疑心に満ちた目を、シオンに向けられる。

とはいえ、察してはいたのだろう。「はいはい」と、少し呆れた様子を見せたシオンは、そのまま読書へ戻った。

「すまん、シオン」

「魔力を取ってたのは、魔力が無い状態を思い出す為だったんだから、魔力が戻った後は、しっかりと魔力がある事を意識してなさい。そうしたら、訓練まで中断する必要ないから」

「はい」

返事をするのに合わせ、『おーい』とスマホから声。

消音とスピーカーモードを辞め、耳に当てる。

「ごめん、ちよつと席外してた」

『そっか。さっきの話、かーちゃんにも聞いてみたけど、同じような感じだった。本当にあったの?』

「多分。ありがとうな、スバル」

『うーん……分かった。じゃあまた。明後日ね』

「ああ」

通話を終え、トーク一覧から別の連絡先を探す。

スバルやスバルの親も同じような状態らしい。だったら、他の人もそうなのだろうか。

一先ず自分と同じ条件の、この町に住んでいて異世界出身ではない者を探し、見つめる。

とはいえ、顔を合わせて話す事はしても、トークアプリで話したことが無い。最初に連絡先を交換した時に、よろしくーみたいな感じで、スタンプを送りあった位。

「……まあ、いいか」

背に腹は代えられないので、連絡する。

【赤井。今大丈夫？】

こちらは即レスではなく、少し間があつてから。

【大丈夫よ。何かしら？】

と返ってきた。

【電話していい？ 聞きたいことがあるんだけど】

そう送ると、【ごめんなさい】と返ってくる。

【ベッドの中でこっそり打ってるから、喋れなくて】

そういうえば、家の規則が厳しいと、以前赤井に聞いたことを思い出した。

部活等の理由が無ければ、門限は6時。

勉強のノルマが課せられており、それが終われば基本就寝時間。

夜の9時を過ぎれば、スマホの使用は禁止。

その他、細々としたルールがある。

そんな感じの事を、言っていた。

【すまん。迷惑かけた】

【いいわよ。それで、聞きたい事って何?】

逡巡し、素直に聞いてみる事にした。

【山の上の神社って知ってる?】

そう送り、神社について書かれていたブログのリンクを合わせて送る。

ブログ記事の確認をしているのか、返信には間があり。

【ごめんなさい、分からないわ】

との返信が来たのは5分程経った時だった。

【そっか。ありがとう、赤井】

【急にどうしたの?】

【いや。ちよつと思いだせなくて。若年性健忘症なのか確認する為に、色々な人に聞いてる】

【何それ】

くすくすと、そんな笑い声が聞こえた気がした。

【まあ、それだけ。ごめん、寝てたよな】

【大丈夫。でも、次はもう少し早い時間がいいわね】

【分かった。気を付ける。改めて、ありがとう、赤井。おやすみ】

【おやすみ、先輩】

トークを辞め、別の人間を暫し探し。

スマホをポケットに収めた。

「シオン。驚くべき事実が付いたんだけどさ」

「なに?」

「スマホの連絡先でこの世界出身なの4人しか入ってなかった」

スバルと、赤井と、後両親。比較的顔は広めの筈のだが。

「やっぱりアンタ、友達いないんじゃないの?」

「……連絡先交換してないだけだし」

多分。ちよつと自信が無くなった。

「……寝ます」

「そう。おやすみ」

「おやすみ」

ソファから立ち上がり、寝支度を整えるのに洗面所へ向かう。

……いや、友達はいるし。別世界出身だっただけだし。

翌朝。

誰にするでもない、友達少なくない自慢を延々と脳内でやっていたら、すっかり寝るのが遅くなって、寝坊した。

起きてから掃除したり食事を作ったりとしていたら、気付けば時計は昼の2時を指している。

まあ、余り早くに行っても迷惑だろうから、多分問題無い。

「……でも、予約とかがってした方がいいのか？」

こういう取材みたいなことは、正直やったことが無いから分からない。

とりあえず、行くだけ行ってみて、ダメだったら出直す事に決めた。

念の為、服装は学生の正装ともいえる制服にして、髪型も登校時と同じにして。

鏡の前で、最後の身支度を確認。

髪型良し、制服良し、瞳の色もバツチリ紫。眼鏡が無い事に、若干心細さを覚える。

「なんか久々だな」

以前は気付かなかったが、体の内に何かがある感覚に気が付いた。目元が一番多く、

時点でタロが乗っている右肩が多く思える。

これが魔力……なのだろうか。良く分からないけど、フレアさんに翻訳魔法を掛けられたり、シオンに翻訳魔法の解析をされた時に感じた奴に似ている気はする。

肩に乗るタロが、嬉しそうに尻尾を振っているのが見え、構ってやろうと左手を伸ばしたら、体の内に感じる何かが、左手でも感じるようになり、タロへ触れる事が出来たから、恐らく間違いないと思う。

とりあえず、意識するようにだけは心がける事にして、俺は身支度を整え終わると、リビングを覗き込んだ。

「じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃーい」

此方を見ずにひらひらと手を振るシオンに、同じく手を振り返して、俺は家を出た。

久しぶりと言うにはやや期間が短い、それでも懐かしさを覚える賑やかな世界。

獣耳や角や尻尾や羽。半透明の体は幽霊か。H a l l o w e e n N i g h t も真つ青な人外率。

正直慣れたものだから、一々視線を向けるようなことはない。若干感じる寝足りなさに、欠伸を噛み殺しながら、歩を進める。

目的地は、この街のもう一つの神社。今となつては、唯一と言った方が正しいかもし

れない、名物巫女のいるさくら神社だ。

さくら神社

さくら神社だから立派な桜があるのか、それとも立派な桜があるからさくら神社と名付けられたのか。さくら神社はそんな事が言われる程に見事な桜がある事でも有名で、俺がそれを、シオンと見に行つたのが数ヶ月前。シオンが俺の家に転がり込んだ3週間後。まだシオンが敬語だった時代と思うと、いつそ懐かしさすら覚える程だが、それはともかく。

数ヶ月ぶりに来たさくら神社は、満開の桜が葉桜に変わっているという事を除けば、特段変化は無かった。ただ、神社という神域だからなのか、幽霊の類は特に見られず、視界が広い。脳内のいざとなつたら逃げ込めそうな場所リストに、さくら神社を追加しながら、俺は鳥居の前で、足を止め、一礼してから鳥居を抜けた。

参道を歩きながら、途中手水舎で手と口を洗いつつ、神社の関係者らしき人を探そうか。時間帯的には何をしている時間だろう。昼休憩は終わっているとして……おやつだろうか。普通に学校で授業を受けている平日とかなら、小腹が空く時間帯ではある。

正直神事を除いて、神社の仕事に何かがあるのか分からない。一先ず、パツと見ただけでは掃除をしている人は居ない。可能性が高そうな所で、お守り等の販売業務だろうか

と当たりを付けた所で、社務所を見つけた。

店先にお守り等も並んでいて、これ幸いと近づいてみたが、そこにも誰も居ない。お守りを眺めたり、おみくじを引いたりして待つてみたものの、5分程待つても誰も来なかつたから、一時的に席を外しているという感じでは無いらしい。

呼び鈴のような物も無いから呼んだら来るシステムという訳でも無さそうで、一応声をかけてはみたが音沙汰無し。単純に不在の様だ。

これは困った。流石に社務所になら居るだろうと思つたのだが。

どうしようかと悩みながら、社務所を離れ、改めて社へと歩を進めた。

清々しい、澄んだ空気。

さくら神社の社は存外大きく、噂では名物巫女の住居も兼ねているらしい。社つて神様の居る場所ではないだろうか。巫女も住んでいい物なのか。疑問は尽きない。

ただ、そういわれてもおかしくない程に社は大きく立派だ。見るのは3度目だが、今回もちやんと拝もうと想える程にありがたみを感じる。

お賽銭を入れて、二礼二拍手一礼。昨日検索中に知つたが、参拝とはお願い事をする物ではなく、神様への感謝と決意表明をする場のようなので、頁探しの決意表明と、さくら神社の神様が縁に関わる神様かは存じないが、良縁の感謝をし。最後に一礼して、参拝を終え、俺は賽銭箱の前から離れた。

少し離れた処にあるベンチに腰を落ち着けて、これからどうしたものかと俺は腕を組む。

周囲を見るが人影は無し。もういつそ、山の上の神社にそのまま乗り込んでいくことも検討した方がいいだろうか。

この神社でやりたいことは、必ずしもやらなければならぬ事ではない。

第一目標は真探しであり、そのために情報が足りていないのが現状。闇雲に足で探し回るには、当ても少ないから、その当てになるのではないかと思ひ、山の上の神社に目をつけた。

不思議な少女と神社のような場所で出会い、ネットで調べた限り、取り壊された等の情報が無い神社が、あつたはずの場所から無くなるという不自然が重なった結果だ。

今ならもしかしたら見通せるかもしれないが、それでもいきなり本陣に乗り込むのは得策ではないから、情報を仕入れたい。その為に来た。

つまるところ、リスク覚悟なら別にここで時間を潰す必要もない。

結局風潰しになる可能性を加味すれば、意味のない場所にはさっさと見切りをつけたい。そう考えると今日、明日中には山の上の神社について一区切りをつけたいのが本音。

「……………」

このまま乗り込む寄りに思考が傾いていることを自覚して、俺は頭を振った。

何かあれば、また助けて貰えるという考えが、頭の片隅にある。手伝ってあげると言われたが、やると決めたのは自分だから、自力で解決したい。

「やっぱり、情報は必要か」

多少目のいいだけの一般人が、跡形もなく神社を消せる何かに会うのであれば、知れる事は知るべきだ。しかし、ネットで調べるのは限界がある以上、やはり話は聞きたい。手間かもしれないが、話の聞けそうな神社関係者を探し、話を聞きたい。役所という手も思いついたが、そっちは多分事前にアポイントメントを取らないといけないだろうし、都合がつくのが何時になるのか分からない。情報は欲しいが、時間が無いのは変わらない。

「うん、そうだな」

やはり神社関係者を探す事に決める。

社務所が開いていたという事は、居ないという事は無い筈だし、待つていればそのうち戻ってくるだろう。

そう考え、もう一度社務所を覗いてみようと思ひ立ち、立ち上がろうとして。

俺を見る何かに気が付いた。

ピンクの体毛の……猫、だろうか。浮いてるけど、見た目はそれに近い。

「……」

タロの様子を確認すれば、特に怪しんでいる様子はない。身を乗り出して、舌を出しながら息を荒げ、俺の後頭部にぶつかる程に勢いよく尻尾を振っている。

あれが良くない者なら流石にこの反応は見せない筈なので、多分大丈夫なのだろう。

謎の生物は、暫し俺を見つめてから、どこかへと移動を開始する。少し移動し、ちらりとこちらに視線を向けてきた。

まっすぐ見つめてくるその様は、まるでついて来いと言っているよう。立ち上がり近づけば、少し移動して、再びこちらを確認してくるから、多分間違いない。

タロを見れば、なんで着いていかないのかと言わんばかりの表情。そんな顔を向けられては、付いていく他無い。

「信じるからな」

『わん！』

元気に返してくるタロに笑って返して、俺は謎の生物を追い歩き出す。

謎の生物は参道へ戻る事はせず、寧ろ離れる方へと進んでいく。社の壁に沿う形で暫し行き、そのまま角を曲がり、社の陰に消えた。

向こうから俺の姿が見えなくなったという事で、逃げるなら此処だと思ふのだが、タロが早く早くと表情で急かしてくる。何がそんなにこいつを駆り立てるのだろうか

思いながら、俺は謎の生物を追い、角を曲がった。

「あ」

その先に居た。

竹箒を抱え、社の縁側、日当たりのいい場所で横になり、寝息を立てている名物巫女。ピンク髪に幼さの残る童顔。名物の一端を担う改造巫女服に身を包む彼女は、記憶に間違いが無ければ、確かさくらみことという名前だった筈である。

……えーと、どうしたらいいだろう。起こしてしまってもいい物だろうか。起こさないと話が出来ないから、起こすしかないのだが。もしかしたら午後休の時間で、今は寝ていても問題無い時間だとすると、それも憚られる。

ちらりと、傍にいた謎の生物に視線をやる。俺の視線を受け、謎の生物は首を傾げた。俺の戸惑いの理由が分からないらしい。用があるのではないかと、言わんばかり。

「……んー」

知らない相手が起きている時に話しかけるのと、寝ている知らない相手を起こすのは、流石に心理的な抵抗が段違いだ。

起こさなきゃ話が進まない事実と、知らない相手を起こす抵抗感を天秤にかけ、悩み——俺は上着を脱ぎ、巫女さんにかける。

「掃除でもして待つてるか」

調べて貰う上での、対価の先払いだ。

「……」

掃除中、ぽかぽかと心地の良い日和にしようとうとして、縁側で寝てしまったのだという事は、さくらみこも直ぐに気づいた。

なにせ、掃除の際に使っていた竹箒は持つているし、縁側に腰掛け眠っていたせいで、腰が曲がっている。伸ばすと、肩から何かが滑り落ちた。確認すると、それはホ口学園の校章の着いたジャケット。制服らしい。

視線を動かせば、自分の召喚した狛猫の式神、金時が子犬の幽霊と遊んでいる。更に離れた場所ではワイシャツにスラックス姿の少年が、何故か草むしりをしている。多分、このジャケットは彼の物だろうと、みこは当たりをつけた。

……どういうことにえ？

なんで金時は子犬の幽霊と遊んでいるのか。可愛いから後で撫でさせてもらおう。なんであの少年は草むしりを行っているのか。面倒くさかったからラッキー。

「……」

彼が草むしりを終えるまで、もう少し寝たふりしようかなとみこが考えだした辺りで、わんと、幽霊とは思えぬ元気な鳴き声が響く。

直後少年の肩がピクリと跳ね、視線をこちらに向けた。聞こえているのかとみこは驚く。

「あ、起きました？」

みこに気が付いた彼が、そう言ってみこに近づく。

一方のみこは、汗と土で、汚れている彼を見て、もしかして結構な時間を眠っていた可能性に思い至り、あわわと焦りだした。

もしかしてこれを対価に何か要求されるのだろうか。エロゲーみたいに。

そんな考えが脳裏を過り、みこは胸元を隠す。それを見て、少年はみこから少し離れた処で足を止めた。

「すみません、怪しいものでは……」

「……どういうつもり？」

「……とりあえず警戒するの辞めて貰えませんか？」

苦笑いに近い笑顔を浮かべる少年を、みこは観察する。

足を止めたのは、自分の警戒を悟ったからだろうと、流石に分かった。

ついでに、もし悪人だったら、寝ている自分にジャケツトをかけ、自分は草むしりなんて回りくどい事はししないとも思う。金時の様子を見ても、警戒している様子はないから、自分が寝ている間、本当に草むしりを延々と続けていた事は何となく察した。

警戒を直ぐに解くのは難しいが、悪人では無さそう、というのがみこの感想であり。だから、一先ず話は聞いてみる事にした。

「……何で草むしりしてたの？」

「えつと……お願いしたいことがありまして。前払いのつもりで」

「……お願いしたい事って？」

「お聞きしたいことが」

「聞きたい事？」

それなら直ぐに終わりそうなものだが。態々草むしりになんて対価を払う理由は何だろう。

「聞きたい事って？」

「山の上の神社について何ですけど」

「山の上？」

聞き返したみこに、少年は詳しい住所を告げる。

そんな所に神社なんてあったかと、みこは心中で首を傾げた。

神社同士は、特別商売敵というわけでもないから、横の繋がりはある。同じ町にあるのなら、知っていてしかるべき。

にも拘らず、みこの頭にピンとくる物は無い。

「そんな場所にあつたっけ？」

「……あります」

「……」

自信なさげであつたが、少年は断言してみせる。

何か窺うような様はあつたが、嘘をついている様子はない。

それに、自分の寝ている間に自分のするべき仕事をさせたという負い目も、みこにはあつた。

「調べて頂けるなら、その間に草むしりしておくんで」

「任せなさい」

追撃の言葉に、二つ返事でみこは頷く。

金時のジト目がいつもよりも少し痛い、エリートは肉体労働より頭脳労働の方があつている……気がするし、調べてくれと言われているのだから仕方が無い事。

立ち上がり、箒をしまう。体を軽く動かし解して、みこは少年に向き直る。

「じゃあ、調べてくるからお願いね」

「はい」

「金時。行くよー」

声を掛ければ、金時は溜息をつく様子を見せた。

その後、遊んでいた子犬の幽霊に、何かを伝えると、みこの元へ。

そのままみこは、社務所の方へと向かう事に決めた。

そこに行けば、会合の際の議事録などが仕舞つてあるから、そこから当たってみるつもりだった。

(……でも、本当に心当たりが無いにえ)

うーむと、みこは首を傾げながら、社務所に向かって歩き出した。

合間

みこは社務所に入ると、草履を脱いだ。

床に踏み出す。ぎしりと、家鳴り。

「……いや、みこは太つてないし。建物がぼろいだけだし」

それでも、一步踏み出すごとに床が鳴れば、多少の不安は、やはり覚える。

なるだけ音の出ないように、抜き足差し足でこそそ歩き、目当ての部屋へ。

その部屋には、会合の議事録やら、古くから伝わる書物やら、ごちゃごちゃと仕舞われている。

真つ先に、探すの面倒だなと思つてしまった。見つからなかったことにしてしまおうかなんて、そんな考えも頭をよぎる。

『何してんだ。早くしろよご主人』

そんなみこへ、金時が声をかけた。

そのままふわふわと部屋の中に入っていく。

溜息をつき、後を追う。

「思ったんだけど、やっぱり神社なんてあるわけくない？」

さつきは起きた直後に驚きが重なり、かつ草むしり代行に飛びついてつい領いた。しかし、落ち着いた今、考えれば考える程、やはり自分の知らない神社があるとは思えず、同意を求めようとみこは金時へ問うた。想像していた答えは、肯定だった。しかし。

『何言つてんだよご主人。あそこに神社はあるだろ?』

「……え?」

『あいつは詳しい事を知りたいから、ご主人に話を聞きに来たんだろーな。ま、聞くなら直接向ここの奴に聞いた方がいいと思うけど』

「待つてよ、金時。今なんて言つた?」

『え? 聞くなら直接——』

「その前! 神社はあるつて言つた?」

『あ、ああ。最近会合に来てないから顔は見えてないけど』

みこは耳を疑つた。金時が嘘や冗談をついているのかとも思つたが、そうは見えない。い。

そもそも、金時はみこの式神であるという時点で、意図してみこに不利益を与えるような事は出来ないし、冗談や悪口に近い軽口を言えても、嘘は言えない。

だからこそ、金時の言葉は、みこにとっては真実に等しい。

「——嘘——」

『おっと』

金時を押しよけるように、部屋に入る。

「金時！ 最後にその神社の人が会合に来たの、いつ！」

『一年半前くらいか？』

そのあたりの議事録を取り出した。

表紙から先、数ページ。開けば、その時に参加していた者の一覧がある。

神社名と、参加者名。みこの名前も、そこに並んでいる。

そして。

「……」

並んでいる参加者の中に、覚えのない神社の名と、参加者名を見つけた。

更に一つ前の議事録を見れば、やはり同じように、覚えのない名が並んでいる。

逆に、二つ先、三つ先の議事録からは、名前が消えていた。

「どういう事」

議事録を投げ出し、歴史書に手を伸ばした。

街の歴史を、繰り上げる。

さくら神社についての記載は、勿論ある。みこの知る、他の神社についても言わずも

がな。

そして、知らぬ神社の記載も、確かにそこにはあつた。

「なんで！」

『どうしたんだよ、ご主人。落ち着けて』

「落ち着けるわけ無いでしょ！ みこ、なんで覚えてないの!?!」

歴史書を投げ捨て、アルバムに手を伸ばす。

以前強引にしまったからか、抵抗があつた。

それを、しまった時以上に強引に、周辺のアルバム毎、引き抜く。

どさどさと、アルバムの落ちる音。みこの耳に、『あーあ』と金時の呆れ声が聞こえたが、それどころではない。

アルバムをめくる。並ぶ写真の中に、会合の際に取った集合写真などが混じつてい

る。
見覚えのない黒髪の親子が、そこにいて。中には自分がその黒髪の子とツーショットを取っている写真までではないか。

しかし覚えていない。いや、百歩譲つて覚えていないことはいいとして、写真まで見ているのに何故か思い出す事すら出来ない。

異常だ。覚えのない神社が、間違いなく今までの時間の中には存在していて。にもか

かわらず、自分の記憶の中にはその片鱗すら一切が無い。

いつそう恐怖を覚える。世界か、自分か。何かがおかしいと思えてならない。

「……彼は」

議事録を一枚。そして、アルバムからは、見つけたツーショットの写真を引き抜く。それを手に、みこは社務所から出た。

この話を持ってきた、少年を探す。自分が覚えていないことを、なぜ彼は覚えているのか。

もしや、彼が原因なのかと、そう考えるも、みこは少年の様子を思い出し、否定した。あの少年も、自信があつたようには見えない。自信が無い中で、それでもあると考え、ていたように見えた。

「いた」

社務所から移動を始めて直ぐに、みこは少年を見つける。

言つた通り、真面目に草むしりをしているようだった。

みこの接近に、少年の肩に乗つた子犬の霊が気付き、鳴き声を上げる。

すると、少年も顔を上げ、みこに気が付いた。

「あ、早かつたですね。まだ10分位しか経つてないと思いますけど」

そう言いながら、少年は時間を確認しようと思つたのかスマホを取り出そうとし、自

分の手が汚れている事に抵抗を覚えたのか辞める。

「それで、どうでしたか？」

「……」

ずいと、2つ、議事録と写真を突き出す。

驚いた様子を見せた少年は、反射的にそれを受取ろうとし、自分の手の汚れに気が付き、再度止める。

結果、妙な位置で手が止まり、少年の姿勢がおかしなことになるが、それはみこの知ったところではない。

「君の言う通り、確かに神社はあった。でも、みこは何にも覚えてない」

「そうですか……その写真は？」

「多分、その神社の子と一緒に撮った奴だと思う」

ただ、思い出せない。

写真を見るに、この黒髪の少女と自分は同じ年位に見える。

他の神社の住職などは、当たり前だがみこよりも年齢がそもそも上で、同年代の子と仲良くなる機会が殆ど無いから、こういった相手は希少。

だからだろう、写真に写る自分は嬉しそうだし、相手の少女も同じように見えた。

「なんで、みこは何も覚えてないし、何も思い出せないの。君は何を知ってるの」

「いえ。何も知りません。情報が欲しくて、お願いしました」

「……そう」

まっすぐ自分を見て、目は逸らさない少年の言葉は、やはり嘘をついているようには見えない。

なら、聞くだけ無駄で、考えるだけ無駄だろう。

そうと分かれば、話は早い。

「……よし、行くよー！」

「はい？ どこにですか？」

「神社！」

「……はい？」

ずんずんと歩き出すみこ。

その背中に、「あの」と少年の声が掛けられる。

「神社って山の上の？」

「他に無いでしょ」

「……だったら、1時間後位にしませんか？」

「え？」

てつきりそのまま乗り込むものだと思っていたみこが、振り返る。

振り返った先にいた少年が、自分の制服を指でつまんでいた。

「いったん帰ります。着替えたいしシャワーも浴びたいです」

「……そうだね」

一先ず、連絡先だけ交換して、この場は分かれた。

家に帰り、制服は洗濯機へ入れた。

スラックスは、クリーニングに出そうかとも思ったが、明日も使うからそのまま纏めて洗い始める。

その間に、シャワーを浴びて、動きやすさ重視の服装——という名のジャージに着替える。

準備を終え、いつでも出かけられる状態にしたうえで、さっさと作れる夕飯を拵えた。作り置き万歳。

夕飯づくりの間に、洗濯も終わり、さっさと洗濯物を干して、乾燥機をつける。

「じゃあ、夕飯作っておいたから、食べる時は温めてな」

「遅くなるの？」

「分かん。大丈夫だとは思うけど。わため帰ってきたら、食べちゃっていいよ」

「あんまりそんな生活していると、わためちゃんに顔を忘れられるわよ」

「顔合わせてないからってこと?」

確かに、部活したり探し物したり遊びに行ったりで、最近帰ってくるのが遅い自覚はある。ただ。

「いや……朝食は一緒に取ってるから。シオンこそ、忘れられるんじゃないか?」

「私、夕飯は一緒に食べてるから」

気持ち半分ずつ。なら、そのうちわための中で、俺とシオンが足されるかもしれない。

同じ事を考えたのか、シオンが少し嫌そうな顔をした。

「アンタと合体とかしたくないから、夕飯時には帰ってきなさい」

「シオンがきちんと朝に起きれば、問題無いけど」

「帰ってきなさい」

「はいはい」

起きるつもりは無いらしい。別にいいけど。

「じゃあ、行ってくる」

「……」

ちよいちよいと、シオンの指が動く。こっちにこいというジェスチャーだ。

何だろうかと近づけば、腕を引かれ、床に座らされた。自然と、椅子に座るシオンを見上げる形になる。

俺を見下ろすシオンが、徐に俺へと手を伸ばし、そのまま頭を掴まれた。アイアンクローと、呼ばれるプロレス技。まさにその状態となる。

一体何をと思う俺の中に、何かが流れ込む感覚。シオンの掴む頭から、次々と。抵抗したら怒られるので、されるがまま。しかし、口は動かす。

「……気持ち悪いっす」

「分かっているとと思うけど、これが魔力ね。ちゃんと意識して、流れを感じて」

「……」

言ってみたが無視された。大人しく、言われた通り魔力に意識を向ける。

流れ込むそれが、まずは目元に滞留する。朝、準備をしているときに最も多く何かがあるのを感じていた場所だ。

そこにあつた何かと、流れ込んでくる何かが混ざって、そこから体を巡るように、徐々に下っていく。

「きちんとした手順を踏まなくても、魔法擬きなら出来る」

「擬きっ？」

「したいことを想像しながら、必要な場所に大量の魔力を集めるの。アンタが自分の守護霊を触るときと一緒。ま、アンタは意識してないでしょうけど」

「……ああ」

その言葉に、今朝方、タロを触ろうとしたら左手に魔力が集まったことを思い出す。「意識的にやりなさい。意識して必要な部分に魔力を動かす。それが出来れば、足に集めて走力をあげることもできるから、一先ず自分の身位は守れるわ」
「……分かった」

シオンの手が離れる。体の隅々に、目元と同じような魔力をしつかりと感じた。「今日は私の魔力で補って置いてあげる」

「別に喧嘩に行くつもりは無いんだが」

「念の為よ。自力で頑張るつもりなら、これくらいのサポートは受けときなさい」
さっさと行けとばかりにシオンの手が動く。

「じゃあ、改めて行ってくるよ」

立ち上がりながら、そっぽを向いたシオンへと声をかける。

「行つてらっしゃい」

シオンは、その姿勢のまま、言葉を返してきた。

僅かに伏せられた瞳へ、笑いかけてから、俺は神社へ向かう為、歩き出した。

e x . 魔法使いの日々

紫咲シオンが人間界に來たのは、偶然の産物であった。

魔界学園に在籍中のシオンは、ただ好きな魔法や学びたい事を遮二無二やっているうちに、ある日、進級や卒業に必要な単位を取り終えている事に気が付いた。

それに気が付いた後も、特に理由はないから通い続けていたのだが、ある日偶然寝坊して、学園に行くのが億劫になり、行かずに家で過ごしてみた所……快適だった。起きたい時間に起きて、好きなだけ学び、気が向いたら食事したり眠ったり。学園に行かなければ、好きなように生きられた。

それに気が付くと、元より一人で学び続けていた為、友と呼べる関係の者はおらず。なんなら高嶺の花と持ち上げられ、常に一人であるシオンには学園自体に思い入れが無かった事もあり、シオンの足は自然と学園から遠のいていた。

しかし、そうした所、途端に煩わしくなったのが学園である。何故シオンに学園に來ないのかという連絡が、幾つも来るようになった。シオンが専攻して学んでいた魔法学の教授等は、個人的な連絡もしてくる始末。

自分のやりたいことに全力で取り組もうと想い、行かないことに決めたと、そう告げ

ているのに。嫌々そんな事は無いと、アピールをしてくる学園や教授。結局、通学の往復に掛かる以上の時間を、生産性のない押し問答に取られるようになってしまった。

そっちがその気ならとシオンも動く。

ある晩、シオンは収納空間として広がる帽子の中に必要そうな物をこれでもかという程に詰めると、転送魔法を起動した。行先は、人間界。魔界と違い魔法が無く、科学の発展した世界と聞く。その世界へ逃げてやろうと考えたのだ。

人間界での暮らしがどんなものかはさっぱり分からないが、人間界にも魔界出身者がいるというのは、知識として知っている。いざとなれば、そこを頼ればいい。

そんな、行き当たりばったりな計画だけを頭に、シオンは人間界へと転移し——、そうして、人間の少年と出会った。

黒髪黒目、中肉中背。特徴らしい特徴を上げるなら、切れ長の目を持つくらいの普通の少年。

魔法の魔の字も持たない普通の少年は、初めて会ったシオンに見惚れ、心配し、恐怖し、交渉し、受け入れるくらい普通……というには、少々メンタルが強過ぎる気もする、ただの人間。

過剰に恐れられるよりは、これくらいの方が丁度いい。いざとなれば魔法もあるからと、シオンは少年の家に住むことに決めた。

住み始めて間もなくは、シオンと少年の関係は、少しぎくしゃくしていた。

当たり前だ。見知らぬ異性と一つ屋根の下で過ごすなんて、双方にとつて初めての経験だ。幸か不幸か、その当時、部活の先輩の影響で美少女ラブコメを読んでいた少年が、手さぐりにシオンとの距離感を図っていた為、何とか生活は成り立っていたが、薄氷の上の、危うい関係であった。

しかしそれも、出会って一月程経った日のある事件を切っ掛けに、少年とシオンは完全に打ち解けた。その事件の結果、シオンは主人公への敬語を辞め、気を使わなくなり、少年はその漫画を自らの人生のバイブルとして全巻購入したのだが、それは兎も角。かくしてシオンは、幾ら研究しても何も言われず、お腹が空いたと言えばご飯が出てくる、理想の環境を手に入れたのである。

平日。起きたい時間に起きれば、少年が作り置いておいた朝食が置いてある。それをもふもふと食べ、食器を洗い、身支度を整える。その後、基本的には魔法の研究を始める。

魔法陣の構成を変えたり、魔法を使う際の魔力の性質を変えてみたりと思いつく限りの事を色々試しながら研究に明け暮れ。

そうしている間に、気が付けば少年の帰ってくる時間で、シオンも自身の空腹を自覚する。

お腹が空いたと少年に訴え、夕食のメニューに一喜一憂。食事が終わったら入浴して、風呂上がりにはアイスを食べて。面白いのか良く分からないテレビを見たり、少年の部屋にある漫画を読んだりして、眠くなったら寝る。

少年が休みの日は手伝わないと怒られる時があったので、そういう時は手伝っていたが、概ね自由な生活を数ヶ月。一緒に暮らしたある日、事件は起こる。

いつも通りの悪ふざけ。今まで何も起こらなかった悪ふざけ。

ただ、その日は、その悪ふざけで実害が発生した。目を抑え、悶える少年に、何を大げさなど高を括っていたシオンも次第に焦り、ついには普段自分の使っていた魔法薬を使ってしまう。

その結果は、翌日、癒月ちよこによって告げられた。

朝、眠りから覚めれば少年が既におらず、問題無かったのかと安堵していたシオンの元へ、ちよこはぐったりとした少年を抱え、現れた。

瞬間的に臨戦態勢を整えたシオンへ、ちよこは自分の身元を明かし、少年を部屋へと運んだ。

ちよこの言葉を半信半疑になりながらも聞き、シオン自身でも、少年の身体を調べ、ちよこの言葉が嘘ではなかった事を確認し。

あまりの事態に、シオンは一先ず色々調べ、頭を抱えた。

前例の無い状況。かつて、人間界にも魔女と呼ばれる者達が存在はしたが。そういった者達は、大抵立振舞いから呼ばれるものが殆どだったし、特別な力を持つ者でも、先天的な突然変異、もしくは悪魔と契約した人間が、契約をパスとして悪魔の力を使っているに過ぎない。

少年のように、後天的に悪魔関係無く特殊な力を得るといふのは、前代未聞のようだ。少なくとも、人間界から確認出来るレベルの資料では、幾ら確認しても進展がない。

シオンはちよこに少年を頼み、自ら魔界に戻る事を決めた。

付きまとう教授陣を押しつけ、学園の図書館に入り浸り、それで足りなければ、国立の大きな図書館で、調べる。名うての研究者の元を尋ね、学ぶ。

一月という、自分で定めた時間をフルに使い、出来る限りの情報を仕入れ、そして、愕然とする。

何も無かった。書物をもってしても、専門家をもってしても、前例無し。前代未聞。専門家の中には、試しにその少年を魔界へ連れて来て貰えないかと、好奇心を抑えきれない目で言ってくる者もいる始末。正直、他人事であったのなら、自分も同じような態度を取っていたかもしれないと思うと怒るに怒れず、シオンは無力さを噛みしめながら、自室へと戻る日々。

自室で一人、ぼんやりと買ってきた食事をしていると、少年との日々を思い出す。

誰に教わったのか地味な料理が多く、練習のつもりか覚えたレシピを何日か続けることもある。そのくせ料理の味は普通で、何ならたまに失敗するくらい。正直味に関しては、特別いい思い出は無いけれど。それでも、楽しい食卓ではあった。

食事の文句を言つて怒られたり、食べたくない物を脇に除けて呆れ顔されたり、何をやっていったのかを一方的に語つて満足したり。色気とは無縁な、そんな食事風景ではあつたけれど。間違いなく、自分が居て、少年がいた食卓は、楽しかった。

——不意に、口から出そうになつた言葉に気が付き、シオンは口元を抑える。

最初の一通以降、ちよこからくる近況報告の連絡を、一切読んでいない自分には、言う資格の無い言葉。最初の近況報告に書かれていた、怒つていない、心配をかけて申し訳ないという彼の言葉。それが、自分への恨み節へ変わっているかもしれないという恐怖が、近況報告を読めずにいる。

自覚があつた。自分は、逃げた。眠る少年が、起きた時に自分を責めるかもしれない。その可能性が怖くて、何も言わず、言伝すら残さず、魔界へ逃げた。

こうして色々調べているのだから、人間界へ戻つた時に、何事もなかったかのように、接する為。元に戻せる方法をきちんと見つけておけば、多分、彼も許してくれる。

そう思つて、調べて、学んで、調べて、学んで……居たはずなのだが。

どうなっているんだろうと思ひながら、シオンは緑茶をすすする。

場所は、シオンにとっては知らない人の家。少年曰く、部活の先輩の家らしい。

上がって暫く、少年はお説教を延々とされていて。それを見ながら、シオンはコンビニで買ってきた自分のお弁当を食べていた。

何も得られぬまま、一月が経ち人間界へ戻ってきた矢先。家にいない少年を探したら、どう見ても拉致されたと思えない場所にいるのを見つけ、保護。帰宅後、少年の言葉を聞いていると大神ミオが現れ、その際の約束を果たすべくコンビニに寄ったその足で此処に来て、この状況。

さつき現れたミオは普通に少年を出迎え、家主である白上フブキは、少年が来るや否や、「もー」と牛のように鳴いて、少年を正座させると、がみがみ説教を始めた。そんな人を、落ち着かせようとしているのは、不知火フレアや、白銀ノエル。リビングの奥にあるソファの上では、角巻わたためが寝息を立てていた。

民族衣装のような服や、シニールコーのような服、良く分からないもこもこした服と国際色豊かなこの状況は一体何なんだろうと思いつながら、シオンは少年を見る。少年は、困ったように笑ってはいるが、助けを求める様子は無い。

此処に来る前に聞いた、大変な事があったという、少年の言葉を思い出す。

詳しいことは、まだ聞いていない。恐らく、ちよこの近況報告を読めば分かるが、流石にこの雰囲気では読みづらい。

早く紹介なり帰宅なりしないかなと思いつながら食事を続けるシオンの前に、みそ汁の入った椀が置かれる。視線を上げれば、微笑むミオが居た。促され、礼を言いながらシオンはみそ汁に口をつける。少年の腕とは比べ物にならない味だったが、味付けに似た要素がある。

成程、料理を教えていたのはこの人だったのかと納得しながら、シオンは少年が解放されるまで、黙々と食事を続けた。

あれから数日。

わためが居候を始めた、今すぐどうにか出来無い少年の魔力を、ある程度は使えるようになった方がいいだろうと、シオンも魔法について教え始めた矢先。

少年が、また、何か変なことに首を突っ込んだ。

今度は、魔導書なる物の破れた頁を探す様に頼まれたらしい。全く、何でこんな一般人にそんな事を頼んだのか、シオンは理解が出来ない。

今のところ、危険な事は無いようだが、それもいつまでもつことか。

出来ない事の方が多く、自分の身を守る事すら危ういのに、シオンは少し呆れながら、出かけようとしている少年を呼ぶ。

特に疑う様子無く近づいて来た少年を座らせて、その頭を掴み、自分の魔力を流し込む。

少年の体内魔力を感じる能力は、シオンでも少し感心してしまう程。もしかしたら、元々は存在しなかった魔力を、体は異物と捉えていて、見張っているのかもしれない。勿論、その見張っている反応を分かりやすくしたのは、私が一度少年の魔力を空にして、監視対象を消したからねとシオンは心中で胸を張りながら、暫し自分の魔力を流し込む作業をして、手を放す。

違和感があるのか、やや難しい顔をしている少年を追い払い、視線を逸らす。

頭上より声がかかる。それに言葉を返すと、間もなく、扉の開閉音が聞こえてきた。

少年の気配が消える。わためもまだ、帰ってきていない。一人になった家の中、静かに溜息を漏らしながら、三角帽を手元へと引き寄せる。

三角帽についての目のついた星。シオンが魔法を込めたそのオブジェは、空間を超越し、遠方を見ることの出来る千里眼。拉致された少年を見つけたのもこれだ。

これを使い少年を見守るか、シオンは少し悩み、最終的に三角帽を元のポールラックへと戻した。

もし今回の件に魔界に関わりがあり、少年を研究対象として狙うものであれば、シオンは容赦無く関わるし、加害者と戦うつもりであるが、今回は違う。それなら、少年の意志を無視して関わるつもりは無かった。

がちやりと、玄関の開閉音。「ただいま」と、少し気の抜ける、見た目相応のふわふ

わした声が、屋内に響く。

ぱたぱたと足音がして、最後にガチャリと、リビングの扉の開閉音。

「ただいま。シオンちゃん」

「おかえり、わため」

すつかり慣れた、短いやり取り。きよろきよろと、わためは部屋を見渡し、あれ、と首を傾げる。

「あの子は？」

「また出かけた。夕飯、作っていったけど、もう食べる？ アイツ、いつ帰ってくるか分からないし」

「うん。食べるー！」

頷くわために、手洗いに行くよう言っ、シオンは席を立った。

キッチンに入り、料理の温もりを確認。少し冷たいかなと思ひ、鍋を再び火にかけ、大皿に盛られた料理は電子レンジへ。

扉を閉める際、おかずを一つ摘み上げた。扉を閉め、温め時間を設定している間に、つまんだそれを口に入れる。

「……普通」

相変わらずなそれを咀嚼し、飲み込む。その間に、電子レンジは温めを終えた。

熱いだろうから、電子レンジは手で開けるも、大皿は魔法で浮かし、そのまま食卓へ飛ばす。

同じく魔法で、鍋や炊飯器からみそ汁や白米をそれぞれの器へ移して、箸と共に飛ばす。

冷蔵庫を開け、盛り付けられていたサラダを見つけ、持ち上げた。

歩いてテーブルに戻ると、既にわためが、席に座って待っていた。

「シオンちゃん、凄いね！ 魔法みたい！」

「魔法だけどね」

いつも感心して見せるわために今日もこそばゆい想いをしながら、シオンは自分の席へと着いた。

「食べよ」

「うん！」

両手を合わせ、頂きますと。短く挨拶をし、食事を始めながら、ふと、普段少年の座る席へと視線を向け、何事もなく帰ってきて欲しいと、シオンは思う。

——フラグという文化は、残念ながら魔界にはなかった。

それから、暫く。

山下の階段を昇りきり、鳥居を抜けたその先。

境内は、霧に包まれていた。

まるで壁でもあるように、漏れ出る事無く球体のようにまとまっているそれが、自然発生した物ではないという事は、目に見えて明らかだ。

先日、ときのそらと共に訪れた時には見えなかっただけか、それとも新たに現れたのか。

分からぬまま、少年は重めの息を一つ吐く。

眼前。霧の内より、触手が一本、伸びている。

手招きするように動くそれを見て、少年は一步踏み出した。

由来

一歩ずつ、踏みしめるように階段を昇る。

息苦しい。空気が重く感じる。

これは、頂上が近いからか。それとも、一時間待たせたさくらみこ氏がお怒りだからだろうか。

……多分後者。

「さくらさん」

「なに」

明らかにお怒りの声が、頭上から降ってくる。そりゃ、一時間も待たせればそうなるかと、そんな感想。

一応、交換した連絡先には、遅れますと一報は入れたのだが、それにしたって待たせ過ぎた。

そして、何故か思っていた以上にさくらさんの意識が高い。ただついて来ただけかと思ったが、合流したさくらさんからは、何が何でも、今日中に解決すると言わんばかりの気配を感じる。

何がそこまで彼女を駆り立てるのだろうか。階段の下で合流してから、口を開こうとしないさくらさんからは、察する事も出来ない。

「すみません、待たせてしまって」

階段を昇り始めてから、何度目かの謝罪。俺の言葉に、さくらさんは「ん」と短く言うだけで、肯定も否定もしない。ただ、下から窺い知る事の出来るさくらさんの表情はえらく真剣で、真つ直ぐ上を見据えている。

視線を、彼女の傍に浮くピンク色の猫のような生物に移した。視線に気づいたのか、その猫もどきは俺の方へ視線を向け、良く分からないとばかりに首を傾げる。どうやら心当たりは無いらしい……いや、何だろうね、この子。

新種の生物か、あるいはきんつばのように精霊の類なのだろうか。聞いてみたいが、それが許されそうな雰囲気でもない。

とりあえず一旦、興味を頭の片隅へと追いやって、さくらさんに習い、視線を上へ。

今の所、周囲の光景に違和感はない。さくら神社と同じく、神社の敷地無いだからか、夜とだというのに幽霊の類も見えていない分、何なら平和。

問題は……階段を昇り切った先。

正直、少し気は重い。九割大丈夫だとは思いますが、残りの一割が余りにも未知。

いまいち気乗りせぬまま、いよいよ階段の終わりが見えてきた。

途端、さくらさんが階段を駆け上がる。慌てて、そのあとに続いた。

一足早く、さくらさんが頂上へ。あまり間を置かず、俺も頂上へ着き、境内を見やる。その光景に、俺は思わず、さくらさんへ声を掛けた。

「……さくらさん」

返事が無い。どうしたのかとそちらを見れば、目を見開き、絶句しているさくらさんが居る。

「さくらさん」

「っー」

強めに声を掛けなおす。途端、びくりとさくらさんの肩が跳ねた。

視線が俺の方を向く。驚愕、恐怖、絶望——浮かぶ感情はそんな所か。

「大丈夫ですか?」

「あ……う、うん。大丈夫。びつくりしただけ。何も無いから」

「……」

何も無いというその言葉は、嘘のように聞こえない。

きつと、さくらさんの眼に映る光景は、俺がときのそらさんと一緒に見たそれと、同じ物だろう。

……正直、少し羨ましい。そんなことを思いながら、視線を正面へ戻す。

以前来た時には見えなかったのか。それとも新たに作られたのか。

そこには一定の速度で回る、巨大な霧の球があった。壁でもあるかのように作られた綺麗な球体は、凡そ自然生成されたようには見え、人為的な物を感じる。

そして霧中より一本、によりと触手が伸びていた。あろうことかその触手は、ぴよこぴよこと上下に。まるで手招きするように動いている。

(……まあ、とりあえず無駄足って事は無いか?)

一応、罨の可能性はあるけれど、態々罨にける理由に見当がつかなかった。

「さくらさん」

「何?」

「俺が見えなくなったら、先に帰ってもいいですからね」

「……にえ?」

一息ついてから、触手に向かい、歩き出す。

近づく俺に反応するように、触手が動いた。少しずつ、俺に向かって伸びてくる。

一歩踏み出すごとに、徐々に縮む距離。心音が煩いのは、柄にもなく緊張しているからか。

そういえば、人型じゃないのって初めてかもしれない。

「……」

やがて、伸びてきた触手は、しつかりと俺の手首を掴んだ。

腕が締まり、吸盤が吸い付く感覚。少し痛い。跡が残ったら目立ちそうだなと現実逃避する。

「じゃあ、さくらさん。行つてきます」

「え、え？ どういう事？」

戸惑うさくらさんを置いて、触手に手を引かれた俺は、霧の中へと入り、そのまま手の引かれるまま霧中を進む。

濃い霧だ。驚く程、何も見えない。今まで、色々な場所に引つ越して、濃霧が有名な場所でも過ごしたこともあったが、それでももう少し、視界は開けていた。

……景色だけなら、火災現場がこんな状態だった気がする。ただあそこは、先が見えないだけじゃない。

息が苦しく、酷く熱く、兎に角怖くて。

『わん！』

「わっ」

いきなり横合いから鳴き声。顔をそちらに傾ければ、柔らかい感触が頬に返ってくる。

タロが其処にいた。表情は見えないが、頬を舐める感触は、何処か不安そうな印象を

受ける。

「大丈夫だよ。ありがと、タロ」

『くーん』

触手に繋がれていない手でタロの頭を撫でてやる。

それにしても、妙な感じだった。思考を巡らせるのではなく、沈んでいく感覚。一体なんだというのか。

僅かにずきりと、痛んだ頭を振って誤魔化し、軽く息を吐き。

そんな事をしている間に、視界が開けた。

しゆるりと、手を引いていた触手は離れ、主の元へと戻っていく。

追いかけるように、それを追い、歩く。石畳、砂利、社務所、手水舎、社。昨日、ブログ記事の写真で見た場所ばかり。今回は、運を味方に出来たらしい。

「会ってくれてありがとう、イナ」

あの日と違い、背後に触手を従えながらも、あの日と同じように、社の前に立つイナへ、声をかける。

「話したそうだったから」

そう返すイナの言葉の抑揚は、以前会った時と変わらず、淡々としている。

表情も合わせ、感情は読めない。ブログ記事に載っていた彼女は、ころころと笑いそ

うな少女だったのだが。

……まあいい。重要な所は、そこじゃない。

「聞きたい事があるんだ」

そう言うと、イナは静かに、首を縦に振った。

「答えられることなら」

イナの様子からは、言葉の本気具合が分からない。絶対に譲らないと言っているようにも見えるし、何なら冗談のようにも聞こえてしまう。

正直、全部答えてほしいものだが。少し悩み、とりあえず話を進めることにした。必要なら駄々をこねてみればいい。

「改めて確認したい。イナ、俺の探すものはなんだ？」

「頁。この本の、一端」

そういうイナが、小脇に抱えていた大判の、相変わらず胡乱な文句の書かれた帯のついた本を翳して見せた。あの時は見せて貰えなかった本の中身が、俺の前にさらされる。

藁半紙のような色の紙面に、見たことも無い文字が綴られている。見開かれた頁の中央。紙の束ねられたその部分に、頁の切れ端のような乱雑な切れ目が覗けた。

「この、破れた部分を、探して欲しい」

その言葉は、あの時と変わらない。探し物は、違わず頁。

……それなら。

「その頁は、今も紙切れのままか？」

「……」

イナが、言葉を詰まらせる。肯定せず、否定もせず。

やがて、「分からない」と、そう返してきた。

「分からない？」

「そもそもこの本は、出自が分からない。数百年前に、祖先が助けた鬼から授かったって言われている」

「鬼？」

頭の中に、生徒会長の姿が思い浮かぶ。

「自分達より一回り大きな体躯に異なる髪の色や瞳の色をしていて、頭に黒い角を生やしていたって伝わっている」

「……黒い角」

それは、俺の少ない別世界経験からして、鬼というより悪魔か羊の獣人よりなのだが。

もし前者であれば、存外魔界関係の物品の可能性が高そうである。考えとしては、るしあやちよこ先と話した事が、正解に近いと考えていいだろうか。……もしそうなら、

何も解決していないけど、安心感が凄い。

これで実は第四の別世界とか言われたら、脳みそパンクしそうだ。

「この本は、祖先の願いを叶えたらいい。それが、どんな願いなのかは、伝わっていないけれど。」

——願いを叶えられた祖先は、結果的にこの本を恐れ、処分しようとして、失敗している。だから、こうして社を建て、嚴重に保管し、一族代々で見張ってきた」

「そんな大事な物の、何で欠損しているんだ？」

「……欠損の理由は不明。経年劣化なのか人為的なのか。言い方は悪いけど、気づいたら無くなっていた、と言うしかない」

「ふむ」

「欠損に気づいた私は、その頁が他の人に渡らないように、本を使って、こうして社を外界と途絶させた」

周囲の霧の事だろう。ここに神社があつたことを誰も覚えていないのも、霧の影響だろうか。

「本を使って大丈夫なものなのか？」

「そう言われているし、そうするしかなかった。こんな事が出来るこの本の、頁一枚でも何が出来るか分からない」

「その触手も?」

「うん。探すのに、手が多い方がいいし。慣れると便利」

「あ、そう」

強か、なのだろうか。

「……あと、一応聞くんだけど、その帯何?」

「……秘密」

僅かにイナが顔を背けた。気のせいか、ほんのりと頬が赤い気がする。なんでだろう。

少し間を置き、咳払いをしたイナが、俺の方へ向き直る。あの咳払いはフブキ部長も良くやる、誤魔化すときのそれだった。

「こうして外界と途絶して、中を探したんだけど、どこにもなかった。……ここに頁が無ければ、誰かが持つて行ったって考えるのが自然。その持つて行った誰かが何かを願って、結果的に頁が別の見た目をしている、という可能性は、ゼロじゃない。確かに、この本が別の形に変わった、という伝承は聞いた事が無い。でもそれは、それをする必要が無く、願う人が居なかっただけ。元に戻す事が出来るかも分からない以上、おいそれと願う事も出来ないから」

「みたいだな」

厄介だ。見れば分かるだろうか。

んー、と考える俺に、「ごめんなさい」とイナ。

「またこの本に何かあるかもしれない事を考えると、霧の維持は必要。その為に、私はここから出られない。だから、誰かに探して貰うしかなかった。それが貴方だったのは、半分偶然。貴方を引きずり込んだあの場所は、もしかしたら頁を捕獲出来るかもしれないと思って、仕掛けておいた罫。それが貴方に反応したから、貴方の近くに頁があると、考えた。でも、貴方の様子を見て、自覚をしていないように見えたから、偶然拾ってしまっただけで、特に願いたい事などはしておらず、紙のままである可能性が高いから、不要な情報は伝えずにああ言った。ここまでの話を伝えて、貴方が願いたい事をしてしまう可能性もあつたし」

信じて貰っていたのか、いなかったのか。反応に困る事を言われる。

「……探すのを辞めて貰ってもいい」

「ん？」

「頁は、私が何とか探すから」

「出来るのか？」

「……」

イナが口を噤む。まあ、それが出来るのなら、最初から自分でやるだろう。

信用出来るのか分からない俺に頼んだ時点で、手詰まり気味だった事は、想像に易い。「イナが良ければ、引き続き手伝わせてくれ。頼まれ事を投げ出したくないし、人手はあつた方がいいだろう？」

「……うん。ありがとう。もし、見つけたら直接この神社に持ってくるか、あの罨の場所に置いてくれたら、反応出来ると思う。あそこの他に——」

幾つか場所を言われ、脳内マップにメモしていく。

その後、イナにそれを伝え、間違えていない事を確認した。

「了解した」

「改めて、お願い。頁を探して、持ってきて」

「ああ」

「……無理はしなくていいから。自分優先でね」

「分かった。気を付ける」

頷き返すと、イナがにこりと笑う。

「本の件については、私から話せるのはこれくらい。何か、聞きたい事は在る？」

「いや、俺も大体聞けた」

引つ掛かりはあるが。思い出せない。

心中で首を傾げる俺に、イナが言う。

「最後に。みこちゃんに伝言をお願いしてもいい？」

「ん？ ……ああ、さくらさんか。いいよ。何？」

「ごめんねって。また一緒に遊ぼうねって、伝えて」

「……ああ」

頷き返すと、イナも嬉しそうに頷いた。

「帰りは、後ろに真っ直ぐ進んだら、元の場所だよ」

「分かった」

振り返る。導くように、光源が一つ。

そちらに向かい、歩き出そうとして。

「何？」

さっきのイナの言葉の中にあつた、一つだけ引つかかった事がある事を思い出し、振り返った。

「貴方を頼んだのは半分偶然って言っていたけど、もう半分は？」

「……あー」

尋ねると、イナは「うーん」と、腕を組みながら唸り声をあげる。

そこから少し。イナの眼が俺を捕らえると、クスリと笑い、一本立てた人差し指を、自分の口元へ持ってきた。

由来2

光を目指して真っ直ぐ歩けば、気付くと霧を抜けていた。

視線の先に階段へと続く鳥居があり、その鳥居越しに、ときのそらさんと見た景色が、広がっている。

その風景の中にさくらさんの姿は無い。

スマホを確認すれば、経過時間は1時間弱と言った所。

「帰ったのか？」

周囲は宵闇が包んでいる。

この中を一人で帰らせたとなると、申し訳なさを覚える。

イナの伝言もあるし、今度改めて謝りに行こうかと、思った矢先。

「おい」

怒気の孕んだ声が、背中にかけられた。特徴的な声質に、誰かは直ぐに分かった。

そろそろと、振り返る。腕を組み、仁王立ちしたさくらさんと、目が合った。

「お前！」

躲そうかと思うも存外早く、あつという間に距離を詰められ、胸倉を掴まれる。

「いきなり居なくなつたと思つたらいきなり出てきて！ 何しているの！ 何を知っているの！ みこをのけ者にしない！」

「……」

話せることは無いので、言い淀む。

「消えた先で何を見て何を聞いたか、白状するにえ！」

「……」

「はーなーせー！」

そんな俺の心の内を知ろう筈もなく、さくらさんは俺をがくがくと揺さぶる。三半規管は弱い方では無いが、こうも揺らされ続けると流石に来るものがある。何度かさくらさんの手をタップして止めるように促すが、止まる気配は無い。仕方がないので、さくらさんが諦めるまで、大人しく揺さぶられる事にする。

時間にして、如何程か。諦めたらしく、さくらさんの手が、俺から離れる。ぜーぜーと肩で息をするさくらさん。体力は無いらしい。俺は俺で、こみ上げてきそうなものを、抑えるので必死だ。

一頻り暴れて落ち着いたのか「で」とさくらさん。

「何が分かつたの？」

「……」

変わらず無言の俺に、さくらさんがムツつとした様子を見せる。何か言いたげに、口が開く。

それを先んじて、言葉を吐いた。

「すみません。お怒りは御尤も。恨み節も、幾らでも聞きます。それでもさくらさんにも、他の誰にも言えません」

「——っ！ それで納得出来ると思うの?!」

「思いません。でも、言いません」

思い出す。さつきまでいた、イナの作った空間。霧に包まれたあの狭い世界の内に、イナ以外の人の気配は無かった。イナは多分、一人であの場所を守っている。

誰に言われたわけでもない。一族代々の責務として。

「頼まれたのは俺です」

そんな、責任感の強いイナが、それでも尚、誰かに頼まざるを得ないと、苦肉の策として俺を頼ってきた。それなら、俺は答えたい。

「俺が、どうにかします」

「出来ると思ってるの?」

その言葉は、只の人間にと、そんなニュアンスが感じ取れた。だから、笑って返す。

「出来ます」

「……」

ジト目。睨んでいると言ってもいい、さくらの目つき。

さくらさんと一緒にいる猫のような不思議生物が、少しそわそわとしながら、成り行きを見守っている。

「さくらさん」

「何？」

「イナがさくらさんに、ごめんね、また一緒に遊ぼうね、って言っていました」

その言葉に、さくらさんがきよんとした顔をする。急に何をと、言いたげだ。

「俺が言えるのはそれだけです」

「……」

イナ、という名前が引つ掛かったのか。それとも、漸く俺が否定以外の言葉を言ったからか。

さくらさんは口を噤み、真っ直ぐ俺を見ながら、何かを考える。その内容がプラスかマイナスかは不明だが、黙って待つ。

「……分かったにえ」

やがてさくらさんは、吐き捨てるようにそう言うと、俺の脇を抜け、階段を下り始めた。

その背を追い、俺も階段を下る。

双方無言。空気が重い。会話無しに下る事に集中していたからか、あつという間に、階段を下りきる。

「じゃあ、私こつちだから」

「……送ります」

「いゝ」

暗い時間であつたし、そう声をかけたのだが、さくらさんにはにべもなく断られた。さつさと歩きだす彼女の向かう方向は、俺の家とは別で、断られた手前、ついていくのもあれかなと思ひ、一先ず、その背が見えなくなるまで見送ることにした。

そんな中、さくらさんの少し後ろをふわふわと飛んでいた不思議生物が、こちらに視線を向けて来る。

目が合った。手でも振ろうかと思っていると、その不思議生物は何を思つたのか、俺の方へと飛んでくる。

『おい、人間』

声を掛けられた。さくらさんの声を、若干低くしたような声だ。

「何でしょう?」

『お前がさつき言っていたイナって、イナニスの事か?』

「……はい」

『そうか』

疑問符を浮かべながら答えを返すと、不思議生物はやや伏し目になった。

俺は一先ず、気になったことを聞いてみる。

「イナの事知っているんですか?」

『覚えているって方が正しいだろ』

「まあ、確かに」

『俺は式神だからな。お前やみこみたいな人間じゃ無かった分、忘れなかったんだろ』

そういえば、人の記憶からは消えているようだったが、ネットの記事やさくら神社にあった文献や写真といったものは、そのまま残っていた。適当ではと思わないでもないが、人間、見た物しか信じない人が多いから、幾ら資料があろうとも、現地に何も無いればでっち上げと思うだろうと考えたのかもしれない。それが慌てていたから、そういう所まで手が回らなかったか。

『……いなにすの事、頼むな』

「え?」

『あいつ、みこの同業者で友達だからさ。力になってやれるのがお前だけなら、助けてやってくれ』

「……分かりました」

頷いて返すと、不思議生物も頷いた。そのまま『じゃあな』と、その場で踵を返し、さくらさんの方へと飛んでいく。

進行方向にいるさくらさんは、丁度角を曲がろうとして、待っているところであった。俺を見、不思議生物の方へと視線を移し、こちらに向かっている事を確認すると、そのまま歩きだし、路地へと消えた。

「俺達も今日は帰るか」

『わんー』

夕口へ声をかけ、俺は歩き出した。

帰路のお供は、先程聞いたイナの言葉。

言葉から考えると、恐らく俺が拾って持ち物に紛れ込ませた、という訳ではない。

持ち去った誰かが、俺の傍にいて。その誰かと一緒にいる時にうつつた気配のようなものを、イナが感じ取った、と考える方が自然か。

そんな残り香的な物であれば、そう何日も経っていたとは考えづらい。長くても二日か三日程度。

そしてその間ずっと学校だったから、多くの相手とすれ違ったり話したりはしているとはいえ、流石に残り香が移る位に一緒にいた相手というと、その数も限られる。

「思い出しながら、その人達当たってみるか」

後は、見て分かる事と素直に渡してくれる事を願うしかない。

幸い魔界関係の代物である可能性が高そうだったから、見たら分かりそうな事は救いだ。

一方で、素直に渡してくれるかどうかは、その人達次第だから、何とも言えない。持っているだけとかならないが、それを使って何かをしているとかだと、素直に渡して貰えない可能性がある。

話し合いで解決出来ればいいが、血で血を洗う略奪戦等に発展したら、目も当てられない。

またやんちゃしないといけないのかなと思うと、自然とため息が零れ、そのまま思い出したのは、出かける前のシオンとの会話だった。

魔法擬きを行うための、魔力の使い方。

一応練習しておこうかなと思ひ、左手を右肩、タロの頭へと持ってくる。

暫しそのままわしゃわしゃと撫でてから、猫にするように首根っこを持って持ち上げ、曲げた右腕の上に置き、撫で、左手で支えながら右腕を動かし、左右の手で持ち上げて、左肩や頭の上に載せる。

毎回、タロの触れるあたりには魔力が集まり、タロの肉球や毛の感触を味わえる。

ただ、これを意識的にやるとなると、難しい。

タロを右肩に戻し、左手に魔力を集めようとするが、上手くいかない。

左手を顔の前で開閉する。この感じは、るしあに魔力の操作を教わっていた時と似ている。どうしたらいいのか、分からない感じ。

集まれー、集まれーと念じながら左手を見ていたから、タロの様子が変わった事への、反応が遅れた。

「タロ?」

タロが俺の肩の上に立っていた。びくびくと鼻を動かしたかと思えば、地面へと飛び降りた。

四肢を踏ん張り僅かに重心を前に傾け、歯を剥き出しにし、威嚇する。

お前、そんな顔が出来たのかとそんな事を思いながら、俺も同じく視線を前に。

バチバチと、不規則に明滅する街灯。その下に人影がある。

影が地面から引き?がされ、立たされているかのよう。ともすれば、本当に影なのかもしれない。

そう思えるほどに、その人影は不気味に立ち、微動だにしていない。

身長は、俺より低く、150か60程度。着ている服は、レインコート……だろうか。

黒色で、足先まですっぽりと隠れるロング丈。前もきっちり締めていて、両手は恐らく

ポケットの内。雨でもないのにフードも被っていて、フードの奥にある筈の顔は覗けない……覗けない？

瞬間的にタ口を掴み上げ、数歩下がった。

何でも見えるとは言わない。それでも、今の俺なら暗中だろうが夜明け直後程度の明るさで見える。それに、人影が居るのは街灯の下。明滅しているとはいえ比較的明るい場所にいるにも拘らず、フードの下が見えないのは、明らかに異常だ。フードや立てられた襟で隠されている部分は別しても、本来人体があれば人肌の覗けそうな場所すら黒い。

「どこちら様？」

ちよつと声が震えた。声量も少ない。

聞こえなかったかなと思ったが、杞憂だったようで、人影のフードが、僅かに持ち上がるのが見えた。

覗けるはずの、顔の範囲が増え——しかし何も見えない。

「これは……どこよりだろうな」

一瞬透明人間かとも思ったが、よく見れば、覗けた其処には黒い靄のようなものが渦巻いている。

善か悪かは知らないが、害か利かで言えば、俺にとっては間違いなく害よりだ。るし

あの髪色を指摘して、骸骨に襲われたかつての準備室。その時の空気と似ている。

あの時と違い、地上3階ではなく地面に足がついているから、逃げようと思えば逃げられるか。

……しかし、それはそうと。

「タロ」

威嚇し続けるタロに尋ねる。

「アイツの匂いって、イナと同じか？」

勢いよく、『わん！』と、肯定の返事。

「そうか。それはラツキーだな」

笑いながら、タロを肩に載せる。

前方。街灯下の影が、ふらふらと揺れだした。

右、左、右、左――。

やがてそれに前後運動が加わり、揺れは回転へと変わる。

「誰も呼ぶなよ」

タロに声をかけたその直後。

一際大きく身を逸らした人影は、音も無く地面を蹴った。

10m程の距離が、瞬く間に縮まる。

人影の右手が動き、突き出されるのが見えた。右足を引き、半身に体を逸らし、躲す。躲された人影はそのまま走り抜けていき、少しして止まった。俺へと伸ばした右手の先に、街灯を反射し鈍く光る何かが見えた。

非現実の中から急に現実感が出てきた。今日、俺も使ったよ、それ。料理でだけど。オタク知識を動員して、勇気の出そうな言葉を探す。やがて、思いついたそれを、口元を引きつらせながら、口にした。

「……楽しくなつて来た」

言いながら、身構える。前に出した左手で、掛かってこいと指を動かせば。答えるように、人影は地面を蹴った。

襲撃

挑発に答えるように地面を蹴った相手は、再度、瞬く間に距離を埋めて見せた。

対し、地面を後ろに向かつて蹴りながら、上体を逸らす。直後、先程まで胸元のあった場所を、鈍色に光る包丁が抜けていった。

感心してしまうくらい躊躇いなし。仮に、下がるか逸らすかのどちらかをしなければ、胸板に深く、一文字が刻まれていただろう事は間違いない。

着地後も、足は止めない。重心をやや後ろに構え、倒れる前に足を踏み出しながら、距離を取ろうとするが、相手の方が早い。

開けた距離はすぐに詰められ、包丁が振られ、突き出される。

躲しながら、フードの中を覗くが、やはりそこに人肌のような物は見えず、霧のような煙のような、不定の何かがフードを持ち上げるのみ。そもそも俺が触れるのかという疑問もさることながら、表情が分からないというのも問題だ。俺を下に見ているのか、がむしやらに向かつてくるのか。それすら分からない。

——やりづらい。

心中で悪態をつく。

数年前、少々やんちゃしていた時期があるから、喧嘩の経験はある。

その最中にナイフを取り出す者は何人か居たから、刃物を相手にしたことも、一応ある。

ただ、そういった者達はナイフを脅しの道具と認識しており、持ち出した側が恐怖に顔を引きつらせる者や、ナイフを武器として認識していないのか、俺がそのナイフで血を流した事に驚き動きを止めてしまったり、ナイフを捨ててしまったりする者が殆どだった。

しかし、やはりというか、何というか。こいつはその大勢に属さない側らしい。

持っている物が武器である事を分かっているし、相対する俺をどうにかする為の物として使っている。……いや、包丁は調理器具であって武器ではないな。

「つと」

とん、と、背中が何かにぶつかる感触。屈みながら視線を上げれば、振られた包丁と扉がぶつかり、文字通り火花を散らしていた。ちよつと引きながら、横に飛びのき、再度距離を取ろうとするが、次の瞬間には追い付かれ、鼯ごっこが続く。

包丁の攻撃はざつくばらんで兎に角愚直。フェイントや駆け引きのような物は一切無く、まるで子どもが駄々をこねるように振り回すのみ。

これがわざとなのか、それしか出来ないのかは表情が読めないから不明だが、とりあ

えず、相手を傷つける事への躊躇は無いようで、包丁の振る速度は速く、下手に受ければ、肉を切られて骨も折られそうだなと、そんな想像が頭から離れず。

そのせいで、相手の振り始めや振り終わり際に合わせての踏み込みが効かない。

——やっぱ怖い。

かつて喧嘩の時に出てきたナイフは、十徳ナイフのような折り畳み式のナイフで、その刃渡りは大体掌に収まる程度の軽いもの。多少踏み込みに失敗して腕で受けても、刃がそう深く喰い込む事は無く、肉を切らせて骨を断つ作戦が取れた。

それに比べ、包丁の重厚感ときたら。俺が使っている安物のステンレス包丁と比べて、何とも鋭そうな刃渡り20cm。生肉に包丁を振り下ろして両断出来た事は一度も無いが、あれなら出来るんじゃないかと思えてならない。

——魔法なんかで切れ味上がっていて、骨ごと輪切りに出来る可能性も無くないし。

幾ら傷が治りやすくなっているとはいえ、切られた腕が蜥蜴の尻尾のようにまた生えてくる事は無いだろうし、胴を輪切りにされたら、その時点で終わり……。

「——いっ」

躲し損ねた。右の二の腕に、痛みが走る。思わず、今日一番の力を発揮して、思いきり後ろに下がった。直後、視線の先で、胴のあった辺りを、包丁が通過する。

——ああ、くそ。バカな想像した！

もしかしたら、今の上半身と下半身がお別れしていたかもしれない。

そう思ってしまったが最後、膝が小刻みに笑い出した。思いきり叩いて止めようとするが、右腕からの痛みにそれを阻まれ。途端、現実が襲ってきた。

バクバクと心臓が煩い。酸素が薄い。幾ら吸っても、吸えている気がしない。カチカチと歯が鳴る。体が震える。視野が狭い。右腕が痛い。何かが腕を伝っている。

『わん！』

気付けするような、タロの一声。次いで、体が後ろに引つ張られる。

襲撃者の包丁は目前。体の中心、心臓当たりに真つ直ぐ狙いを定めての突き出し。回避しようにも体勢が悪い。

その矢先、左足が跳ね上げられ、突き出された包丁を蹴り上げた。

「……はっ」

訳も分からずいると、そのまま、次は右足が跳ね上がり、襲撃者の腹部を捕らえ、蹴り上げる。

一体何がと視線を下げれば、こそこそと骸骨が俺の影へと戻っていく所であった。

「ぐへ」

両足が浮いたせいで、そのまま地面に倒れた。

視界の内にいる襲撃者は暫く滞空したのち、両足できちんと着地していた。攻めてこないのは、包丁を持っていないからか、予想外の反撃をされたからか。どちらにしろ、一息つけるのは違いなく、その間に俺は上体を起こした。背中側からタロが顔を見せる。俺を引き倒したのはこいつらしい。骸骨は、俺が流血したから自動的に出てきたものだろう。

「いってっ」

右腕を確認する。袖の一部が切られ、その周囲に血が滲んでいた。

動かすと痛むが、右腕の動きに問題は無く、多少切り付けられた程度のようなだ。

包丁を蹴り上げた足も問題なく繋がっていて、スニーカーも健在だった。

「大丈夫そうだな」

『わん』

「ん？ ああ、そうだな」

タロに指摘され見てみれば、相手は丁度包丁を拾い上げている所であった。

それを見ながら、俺も立ち上がる。

分かったことは、刃に当たれば即切断される訳ではなく、俺の手足は問題なく相手に当たり、予想外の事が起これば多分驚く。

「だったらまあ、大丈夫か」

顔が読めないのはやりづらけれど、土俵が違うという事は無いらしい。

其れが分かっただけでも、気持ちは落ち着くし、頭を回せる。

静かに息を吐きながら、構える。地面を蹴ったのは、再度相手。

やる事は変わらない。振られた包丁を避けつつ下がる。

それに加え、脳内マップを思い出し、自分の現在地から一番近い、イナに教えられた罠の場所を探す。

——ちよつと遠いな。

候補は一つしかなく、そこは現在地からは普段の徒歩なら10分程度。

避けながら下がりがりながらの今では、凡その到着見込みすら怪しい。

いつそ振り返り、追いかけてこの体を成せれば、それこそ数分で到着するかもしれない。生憎相手の方が早く、振り返った直後、背中をバツサリ切られる未来が見える。

結局、こうやって下がりがりながら、躲しながら、牛歩の速度で進むしかない。

とはいえ、気持ちは幾ばく楽だ。

躲す以外の選択肢。大振りに合わせてあえて踏み込み受け止める、突き出された腕を取って反撃、のような事も、一応視野には入れられる。

それこそ……こうやって踏み込んで突き飛ばす、と言ったことも出来るのだから。

「ふっ」

振り下ろしの大振り。それに合わせて、一步踏み込む。

動き出し前の腕の根元を掴んでとめて、空いた腹部に掌打。

捻りも加えながら出来うる限りの力を籠め、思いきり押し飛ばせば、想像よりもその体が後ろへ飛んだ。

思つた以上の飛距離に、はて、と胸に疑問を抱く。

だが、一先ずその疑問を押し込め、俺は数歩跳び退き、十字路に着いた。

此処を左折し、暫く直進。その後右折してすぐの場所に、罠がある。

突き飛ばされた人影が着地するのを見て、慌てて左の道へ飛び込んだ。

「タロ、来たら教えろー」

『わんー』

なりふり構わず距離を稼ぐ為に走る。相手が来たら、振り返ればいい。

失念していた可能性は……：通行人の存在。

——やばい

向かう先に、こちらへ向けて歩いてくる人の姿を見つけた。

既に道に入ってしまった。何なら進んでしまっている。

戻るか、それとも走り抜けてしまうか。

戻ればそのまま鉢合わせもあるだろうし、襲撃者の狙いは俺の筈だから、多分走り抜

けてしまうのが正解だと考える。

あいつが、第三者に見つかるとは思えない。もし目撃者を憂慮するのであれば、炬端でいきなり襲い掛かって来るような事はしないだろうし、目撃者にかまけている間に俺に逃げられたら本末転倒の筈だ。

だから、そのまま走った。

気付いたのは、通行人とすれ違おうかという頃合い。

通行人は俯きがちにスマホを操作しながら歩いていたし、帽子と眼鏡、マスクもつけていたから、遠目では気付けなかった。近づいて漸く、その正体に気が付く。

それでもそのままスマホを操作してくれていれば良かったのだが、悪い事に、その通行人も足音に気づいたようで、顔を上げてしまう。

目が合う。通行人が、俺を見て目を丸くした。覚えているらしい。何でいるんだ。

まあそれでも。無視してくれればそれでいいのだ。このまま走り抜けてしまおう。

「待てー！」

「何で？」

腕を掴まれた。

「私の事を無視していきこうだなんて、偉くなったもんだな、ああん？」

「ごめんなさいー！」

幼少期の癖から即謝罪が口をつく。

「でも今それどころじゃ——」

『わんわん!』

「ああ、もう!」

通行人を俺の後ろに追いやりながら、振り返る。十字路に影在り。

ググツツと、影が膝を曲げるのが見えた。直後、バネの様に跳ね、俺へと向かってくる。

右腕は掴まれて動かせない。躲すと、そのまま背中側へ追いやった通行人への直撃コース。

「手を放して、目を瞑って、耳もふさいで!」

「え? え?」

一応声をかけたが、戸惑うばかりの通行人。

右手は拘束されたまま。自由なのは左手と両足。

相手を観察する。

狙いは真つすぐ、体の中心辺り。振りかざすような素振りは無し。振り下ろしを受けて、輪切りにされる可能性が無い分、幸運かもしれない。

「ひっ」

後ろから、声。引きつったそれは、通行人の物だった。

判断も覚悟も、その声で決まった。

右足を、微かに引く。左手を前にかぎす。短く、一息。

刃が射程に入った瞬間、その刃を掴む。思いきり握って、止めようと試みる。が、

——やっぱ無理！

止まらない。当然か。

掌に滑り止めがあるわけでもなければ、力は相手の方が上のよう。

掴んでいる間も容赦無く刃は進むものだから、肉が切れ、血が滲み、それが潤滑油になってしまう。

ただ、それでも。握っている効果が無い訳ではなく、突進速度は確かに落ちて。

先程と違い、今度は自分の意志で、足を思いきり振り上げた。

足に感触。ズシリと重い。煙みたいな身体なのに、生意気にも体重があるというのか。

「う………らあー！」

それでもなんとか、気合で足を振り切った。

結果、襲撃者の身体が屋根を飛び越え、視界から消える。

「……はえ？」

明らかにおかしい。さつきから、力が入りすぎている。

何故かと思いつながら、右足を観察してみれば、足に魔力が集まっているのが感じられた。

——……魔法つてすげー。

正確には擬きではあるが。シオンの言っていた事の一部を、此処に来て漸く理解した気持ちになった。

同時に、危機感も覚える。ちゃんと練習しないと、何かの拍子に誰かを怪我させるかもしれない。

こればかりは、流石にシオンにキッチンと教えを乞う事にしようと思つながら。

右腕を折らんばかりに握りしめる、通行人への対処を考えながら、振り返った。

腕を強く握つて来る彼女は、僅かに体を震わせながら体を丸め、俯いている。

判断の甘さを呪いながら、俺は親しんだ呼び名で、彼女を呼ぶ。

「すいちゃん」

星街すいせい。彗星の如く現れたスターの原石にして、俺の昔馴染み。それが通行人の正体であった。

名前を呼んでも、腕を握る力も、震えも収まらない。

もう一度、「すいちゃん」と呼びかける。今度はピクリと反応を見せ、すいちゃんは徐々に、顔を上げた。

怯えの色を浮かべるその目に、心中で齒噛みしながら、笑顔で声をかける。

「大丈夫？ もう、自転車通り過ぎたよ」

「……え？」

か細い声。それから、きよろきよろと、辺りを見渡す。

「自転車？」

「うん」

「だ、だって、包丁持って、凄い勢いでこっちに来てなかった？」

「包丁？ あ、スマホを持っていたから、それじゃないかな。自転車のライト、切れていたみたいだったし」

「すまほ？」

「スマホ」

無理があるだろうか。だが、包丁を持った狂人が襲い来るよりは、スマホを持って自転車に乗った通行人が通った、という方が現実味もあるだろうし、何とかごり押す。

「この辺は暗いし、僕も自転車が来ている事に気が付かなくて、変な態度を取っちゃったから、吃驚したよね。ごめんね、すいちゃん」

「……自転車」

「自転車」

震えが止まる。目から怯えも消えた。徐々に浮かんできたのは、怒り。

「……忘れなさい」

「はい」

腕が解放された。数度開閉し、血の流れを取り戻す。

一方で、すいちゃんは、わざとらしく額の汗を拭う仕草。

「いやー、楽勝だったー」

「……」

何がだろう。俺の腕を、万力の如く締め付ける事だろうか。

楽勝楽勝と、何か勝ち誇っている間に、タロへは周辺を警戒するように頼んでおく。

「それでさ」

「んー？ なーにー？」

「すいちゃん、なんでこんな時間にこんな所にいるの？」

現在地は閑静な住宅街。駅への通り道という事は無く、何なら逆方向。

態々観光に来るような場所でもない。それこそ、帰り道でもない限り、通ることも無

いと思うが。

「あれ？ 姉街と会ったんじゃないの？」

「姉街さん？ 先月に一回会ったけど」

「会った時に、聞かなかった？」

「何を？ すいちゃんのライブがその日にあつたつて事は聞いたけど」

「……お前。そういえば、あの日、大事な用があるとかで、私のライブに来なかつたんだつてなあー！」

「急に怒るじゃん」

「慣れっただけども。」

「つて、そつちじゃなくて。姉街がこつちに引つ越すつて話」

「……ああ、そういえば」

去り際に、この街に引つ越す予定だと、確かに言っていた。

その際、連絡先も交換したが、あれから音沙汰が無かつたし、あの日はあの後、きんつばとフレアさん、ノエルさんと知り合つたり、それからも色々と事件が多かつたりと、色々あつてすっかり忘れていた。

「私も一緒に暮らすから引つ越してきたの。今はコンビニの帰り」

これ、と、片手に持ったビニール袋を掲げるすいちゃん。成程と、頷く。

「それじゃあ、なんか人手が必要とかなら連絡してね。ばいばい」

「待ちなさい」

立ち去ろうとしたら、腕を掴まれた。

「うら若き乙女に夜道を一人で歩かせるつもり？」

「送ります」

「よろしい」

庄に押され、首を縦に振る。タロの様子を伺うが、大丈夫そうだ。撤退したのだろうか。

「早く行くよー」

「はーい」

タロには引き続き警戒して貰いながら、すいちゃんと共に夜道を歩きだす。

……それにしても。

——左手痛い。

ポケットに入れ、ハンカチを握りしめて止血しているが、ズボンにしみだしかねない。すいちゃんと別れるまでは滲まない事を願うしかなかった。

少しだけ、時間は戻り。

蹴り飛ばされた襲撃者は、数件離れた屋根の棟の端に引つかかっていた。

正直驚いていた。ただの人間だと思っていた相手である。

しかし、蓋を開けてみれば、与えた手傷は、擦り傷程度。酷い傷でも左手の物位だ。挙句、突き飛ばされたり、蹴られたりといった反撃も受けている。特に、最後の一番はそれなりに重く、再起動に少し時間がかかってしまった。

だが、それでも。それだけでしかない。

重い反撃を受けようが、それが痛痒になる事は無い。時間を掛ければ動き出せる以上、負傷し弱っていく人間と比べれば、襲撃者の有利は変わらない。

屋根に手をかけると、襲撃者はそのまま棟へと上がり、立ち上がった。

飛ばされた方を見据えた。時間はそう経っていない。直ぐに追いつける。

そう考え、動き出そうとした、その矢先。

とん、と。何処か業とらしい音が背後から届き、襲撃者はそちらへと視線をやる。

月光を背景に、大神ミオが、そこには立っていた。

狭い棟に両足を付け、真っ直ぐ立つその姿は、どこを取っても隙が無い。

「退くなら、見逃す。戻るつもりなら、容赦はしない」

その言葉を、ミオは容易にこなすであろう事は、襲撃者にも想像が付いた。

僅かに悩み、襲撃者は屋根の上から虚空へと躍り出た。間を置かず、その姿がコート
の裾より出てきた影に包まれ、消える。

暫し、ミオは周辺を索敵するが、気配は無い。

それを確認し、ミオはスマホを取り出した。慣れた手つきで操作して、白上フブキへと繋ぐ。

「もしもし?」

『お疲れー。どんな感じ?』

「とりあえず退いたと思う。今晩は大丈夫じゃないかな」

『そっか。でも、一応送って貰える?』

「うん、分かった」

言葉を交わしながら、ミオは屋根から跳びあがった。

滞空ののち、別の屋根に着地。それを繰り返し、後輩の少年が見える場所まで移動する。

少年の守護霊である子犬のタロが、ミオに気が付き顔を上げた。

黙っているようにと、人差し指を口元に充てれば、タロは素直に首を縦に振るのを確認し、ミオは少年と、彼と一緒にいる星街すいせいを、屋根の上から見下ろす。

——驚いた。あのアイドルの子と、幼馴染だったなんてね。

あの子の大ファンであるフブキが知ったらどうなるのだろうかと思いつながら、ミオは少年達を追って、屋根を蹴った。

屋上

洗い辛さに辟易しながら、何とか右手だけで顔を洗い、歯を磨く。

諸々済んだら、着替えて、出かける準備は完了。

——左手が使えないと不便だな。

漏らしそうになった溜息を飲み込みながら、左手を見下ろす。そこには、ぐるぐると親の仇の様に包帯の巻かれた俺の左手があった。

軽く指を動かすだけで、ずきりと、無視出来ない痛みが走る。朝食後、痛み止めは服用したのだが、まだ効いてこない。

見咎められぬ様、気をつけながら左手をポケットへと収め、洗面所を後にした。

リビングへ戻ると、テレビからはペット紹介のコーナーが流れている所であった。それを、わためがソファに座り、熱心に眺めている。

邪魔をすると悪いなどとは思うものの、このコーナーがやっている時間は、家を出る時間だから、聞かないわけにはいかない。

「わため。今日の天気、どうだった？」

「一日中晴れだった」

「そっか。ありがとう」

準備に時間がかかるだろうと踏んで、わために確認を頼んでおいた今日の天気を聞いた俺は、ダイニングテーブルに置かれた昼食の包みを鞆に入れ、ついでに忘れ物の確認をしてから、チャックを閉めた。その鞆を肩にかける。

「それじゃあ、行ってくる」

「いつてらっしゃーい」

わためが俺の方に視線を向け、笑顔でひらひらと手を振って来る。

そんなわために手を振り返しながら、俺はリビングを後にし、そのまま家を出た。

それから少しして、俺は左手の痛みにやや顔をしかめながら、通学路を歩いていった。わいわいと騒がしい道。相変わらず、多種多様な耳や角が見て取れる。

そんな中を、昨日襲ってきたアイツが居ないかと、周囲を警戒しながら進む。

同時に、襲われたらどうしようという不安も、合わせて覚えた。

授業中に来るテロリストが妄想であるのに対し、昨晚の襲撃者は本物である。今、この時も狙っているとも限らない。

思わず、鞆を握る手に力がこもる。そんな俺の肩を叩かれた。

吃驚して勢いよく振り返る。振り返られた側も、吃驚した様子だった。

「……おはよ、スバル」

「……おはよう。え、なに？　吃驚したんだけど」

「……驚かせようと思って」

「いや、無理があるだろ。どう見ても様子がおかしかったじゃん」

陽キャ得意の空気読みか。何でもないよと、短く返す。

「ちよつと考え事していたから、本当に驚いただけ」

「考え事？　それって、一昨日の話？」

「一昨日？」

「ほら。神社を知っているかって、夜に電話してきたじゃないっすか」

「……ああ。そうだったっけ」

「そっか、あれって一昨日か。昨日の晩は寝つきが悪かったから、まだ寝ぼけているの

かもしれない。

「そう思うと、途端に欠伸が込み上げてきて、スバルにばれないようにこつそりと漏ら

す。

「あの後、なんか気になって、とーちゃんとかおじおじとか、友達にも聞いてみたんすけ

ど、誰も知らないって」

「そっか」

おじおじって誰だろう。

「でも、ネットでその住所で検索したら、確かにその神社、あるっぽいんすよね」
んー、と腕を組み、スバルは首を傾げる。

一応、その件については、俺の中では決着はついているのだが、それを言う訳にもいかず。

「まあ、いいじゃないか。あるかどうかも分からない神社を、気にする必要も無いだろう」
そんな事を言つて誤魔化そうとする。

「そっちが先に言い出したんじゃない」

「そうだけどさ。昨日見に行ったら空き地だったから、多分最初から無かったんだよ」

「でも、ネット記事は幾つもあったし、それ全部やらせておかしくない？」

「さてな。ネットには疎くて」

「それに、もしその神社が本当にあつて、それを誰も覚えてないつてなつたら、なんかかわいそうじゃないか」

「っ」

スバルの発言に、言葉が詰まる。

確かに、あの場所に神社はあつて、一伊那尔栖という少女は居る。

その事実を、イナは人々の記憶から消した。その決意は、果たして如何程だったのか。

「……だったら」

「ん、なに？」

「……いや、何でもない」

スバルは覚えておいておけばいいと、そんな事を言おうとして、辞める。

昨晚襲われた理由は分からないが、あの神社を知っているからという可能性が捨てきれない。

神社について、何人かに聞いてしまった事が昨晚の襲撃者に知られ、その元のスバルを襲わないとも限らない。

勿論、ちゃんと調べてくれれば、最後に行きつくのは俺だから、それなら問題は無いのだけど、不安の芽は潰したい。

「ま、さっさと忘れる事だな」

「うーん……」

不服そうなスバルに、俺は笑って返した。

昼休み。久しぶりに屋上に来た。

本来なら屋上のカギは閉ざされているのだが、抜け穴を知っているから、そこから入り込んだ。

屋上に入り、昼食の包みを広げる。中には、用意したおかずを具に、わために握って貫ったおにぎりが幾つか。

いっそ、おにぎらずでも良かったのだが、俺の怪我を見たわためが手伝うと言ってくれたので、素直に甘える事にしたのだ。

もぐもぐと、ウインナーの刺さったおにぎりを食べていく。朝に飲んだ痛み止めはまだ効いていて、左手がずきずきと痛むが、俺の表情筋に影響が出る程ではない。

怪我の程度が分ならず、病院に行くかどうかは悩みどころ。もし行つて、また縫うとなると、治療費もかかるし暫く使えなくなってしまうから、抵抗もある。

まあ、定期的に消毒と止血をしつつ様子を見て、危なそうなら病院に行くかと、そう考えた

「せーんばい」

「ん？」

左手をポケットにしまい、残りのおにぎりを片付けに掛かろうとすると。

「あ、先輩」

「ん？ 赤井か」

抜け穴から顔をのぞかせたのは、赤井だった。

珍しい。ここで会うのは初めてだ。赤井は学年トップの成績を持つ模範生であるし

内申点にも響くから、こうしたルール違反をするイメージは無かった。

そんな赤井が、本来であれば進入禁止の屋上に顔を見せるなんて。

何かあったのだろうか、聞いてみた。

「どうした、赤井？ 何かあったか？」

「ううん、別に。先輩とご飯食べようと思って」

「それだけの為に、俺の事を探してたのか？」

昼休みが始まり、15分ほど経っている。昼休みが1時間あるとはいえ、流石に時間をかけ過ぎではないだろうか。

「なんか、悪かったな」

「私が一緒に食べたくて探してただけだから、気にしないで」

そういうながら、赤井は俺の隣に腰を下ろした。

片手に持っていた小さな包みを解くと、足りるのか心配になりそうなくらいに小さなお弁当箱が出てくる。

その蓋を開けると、彩色豊かなお弁当が、顔を覗かせた。

そのお弁当に、思わず感心する。

「随分手の込んだ弁当だな」

「彩色豊かなその弁当は、一目で手作りだと分かり、俺の作るものとは天地程の差が

あつた。

「自作？」

「違うわ。家政婦さんが作ったの」

「かせいふさん？」

「凄いな名前だ。外国人だろうか。」

「……一応言うけど、家政婦さんって名前じゃないからね？ 家に政に婦人の婦で家政

婦さんだからね？」

「……あー。お手伝いさんの事か」

「そうよ」

納得する。確かに赤井の家なら、家政婦さんの1人や2人、普通に居るだろう。

家の事をして貰えるの、羨ましいなーと思いつつながら、おにぎりをむしやり。

しかし、丁度良かった。俺も赤井に話があつた。

「赤井」

「何かしら？」

「一昨日、電話した件なんだけども」

俺の言葉に、ぴくりと赤井が反応する。その様子に、焦りの色が見えた気がしたので

直後、何事も無かったかのように、話を続けた。

「一昨日の電話って、神社の話？」

「あ、ああ」

尋ねるタイミングを逃した俺は、赤井の言葉に首を縦に振る事しか出来ず。仕方なく、そのまま話を続ける。

「遅い時間にかけて悪かったな。話したことも忘れてくれ」

「えー、何それ。あの後、気になって少し調べたし、悶々として眠れなかったのに」

悪戯に笑う赤井が、わざとらしく欠伸をして見せる。そんな赤井に、俺は苦笑しながら謝罪する。

「悪かったよ。何なら、今度埋め合わせしようか？」

「本当？ 信じるわよ？」

「信じていいよ。ただ、高いものは勘弁してくれ」

「分かっているわ。何して貰おうかしら」

赤井は、スカートのポケットから小さな手帳を取り出すと、今月のページを開き、予定を確認し始めた。

目を逸らす直前、一瞬見えたページにはびつしりと予定が詰まっているように見えた。

相変わらず大変そうだなと思いつながら、俺はおにぎりを齧る。

赤井の家は資産家で、俗にいう上流階級と呼ばれる類の家系だ。一般庶民の俺の家とは、敷地も家のサイズも雲泥の差である。

だからなのか、家のルールは厳しいようで、門限は18時だし、就寝時間は22時からしい。

スマホの使用ルールもあるようで、20時以降の使用は禁止で、ゲーム等の娯楽系のアプリやSNSアプリも原則禁止。ルールを守っているかを確認するのに、不定期にスマホが没収され、検閲されるらしい。紙の手帳を使っているのはその為だ。

家のルールなんて存在しない俺とは、正に対極で、たまに、なんで俺は赤井と仲良くなったのかと疑問に思う時がある。

「——先輩？」

「……ん、ああ。すまん」

声を掛けられ、意識が浮上した。赤井を見れば、広げた手帳を俺の方へと向けている。「大丈夫？」

「平気だ。すまん、ちよつと考え事していた」

「もう。ちゃんと聞いてよね」

「ごめん」

適当な謝罪に、やや不満そうな顔を見せながらも、赤井は手帳の一角を示した。

少し先。2週間後の週末。日曜日だ。

「それで、この日って暇？」

「特に予定はないな」

というか、基本的に予定とは無縁だ。

俺から誘う事は殆ど無いし、俺を誘う事がある人たちは、俺が予定と無縁である事を知っているから、前日とか当日に急に声をかけてくる。今までそれで困ったことが無いから、多分今後そんな感じだ。

「じゃあ、開けといてね」

「分かった」

残っていたおにぎりを口に詰めこみ、咀嚼しながらスマホを取り出す。

カレンダーアプリを起動。言われた日付の所に、良い文言が思いつかなかったから、赤井にちなんで真つ赤なハートマークを入れておいた。見れば、赤井も嬉しそうに、手帳に何か書いている。それを見ながら、おにぎりを飲み込んだ。

「何するかとか、決まっているのか？」

「もうちよつと詰めるわ。時間もその時ね」

「了解」

赤井にお任せである。

スマホの画面を落とし、ポケットへ。おにぎりはもう一つあるから、それを食べようと、取り出す。

「そういえば、先輩のお昼、今日はおにぎりなのね」

「今朝時間無くてな」

「足りるの？ 良ければ、私のお弁当食べる？」

「いいよ。自分で食べな」

正直申し出はありがたかったが、それでも赤井の弁当箱のサイズがサイズなだけに、貰う事は憚られた。

後でパンでも買おうかなと思いつながら、新しいおにぎりを齧ろうとして。

視界の隅で、タロが何か反応するのが見えた。

悪い反応ではない。ぴよんと飛び降りて、そのまま抜け穴の方へ向かう。

どうしたのかと、その背中を視線で追う。

タロはそのまま、抜け穴の前で止まった。間もなく、抜け穴から顔を見せる。

「先輩みつけ」

「見つかってしまった」

別に隠れていたつもりは無いけれど。

「ちよつといい?」

「ああ」

食べようとしたおにぎりを手提げに戻し、立ち上がる。

「じゃあ、赤井。またな」

「……ええ。後で連絡するわね」

「頼んだ」

赤井を残し、屋上を歩き抜け穴へ。そのままそこを通って、るしあに合流する。

「お待たせ。要件は?」

「ちよこ先生がお呼びなのです」

「行きたくないのです」

「行きますよ」

右腕を引かれ、俺は大人しく歩き始めた。

秘密

るしあと共に保健室に入ると、ちよこ先の視線がこちらへ向いた。

「いらっしやい」

声をかけてきたちよこ先に頭を下げると、「そこに座って」と椅子を案内された。大人しく着席。

「手を出して」

「……」

「そつちじゃないから」

前にもやったなと思いながら、差し出した右手を引つ込め、ポケットに入れていた左手を差し出す。

暫しミイラの様になっている俺の左手を眺めてから、ちよこ先は慣れた手つきで包帯を外し始めた。

「痛む？」

「今は痛み止めが効いているので、平気です」

「手当したのは？」

「自分です。昨日の晩に消毒して、止血しました」

「それなら包帯は変えなくてもいいか」

包帯を外され、止血用のガーゼが外される。

刻まれた切り傷は掌を横断していて、生命線と呼ばれる皴を分断している。昨日は余裕が無かったから何とも思わなかったが、改めて見るとやや物騒だなと、そんな事を思った。

「……うん、結構ぱっくりいつているけど、血は止まっているわね。これなら定期的にガーゼと包帯を変えれば大丈夫でしょう」

「はい」

念の為改めて消毒された後、ガーゼと包帯を元通り——といっても、その具合は俺が自分でやった時よりも綺麗で、丁寧だが——に、戻される。

動かしやすくなった手の具合を少し確かめながら、「ありがとうございます」と感謝した。

「生徒の怪我の面倒を見るのも、保健の先生の仕事だからね。思った程酷くなくて良かったわ。貴方の事だから、手に刺して止めましたとか言いかねないと思っていました」

「……成程」

そっちの方が、确实だったかもしれない。血糊で刃が滑ったから、蹴り足が遅ければ

胸に刺さっていたし。

俺の反応に何を考えているのか見当がついたのか、「今の無し」とちよこ先が言う。

「聞かなかったことにしなさい。さもないと忘れろビームね」

「……それって効果があるやつですか？」

失言したフブキ先輩が、たまにやるやつはなんちやつてで、可愛いだけで効果は無いのだけだ。

悪魔ならもしかしてと、そんな興味本位での言葉に、ちよこ先が頬に手を当てながら笑う。

「試してみる？」

「忘れました」

怖かったので、直ぐに記憶を失う。何も聞いてない。覚えていない。

俺の反応に、満足げな様子を見せつつ、それで、とちよこ先が口火を切る。

「その傷、どうしたの？」

「どうした、とは？」

「どうやってついた傷？」

その言葉に、感じていた疑問が氷解する。

そもそも昨日、骸骨が飛び出してきた時に、るしあには何かしら伝わったかなと思っ

てはいたから、納得はあれど、驚きは無く。

「料理中に切っちゃったんです」

そう返した。

「……そう。気を付けてね」

「ちよこ先生!!」

「はい。ありがとうございます。失礼します」

驚きの声を上げるるしあを余所に、俺はちよこ先に頭を下げ、保健室から出る。

慌てた様子でパタパタと駆け足の音が聞こえ、俺の隣で止まる。

「先輩! どうしたんですか、急に」

「急って?」

「その怪我、この前話していた探し物関係の傷ですよ。何で隠すのです。この前はちゃんと話していたじゃないですか」

「……ただの探し物じゃなくなったから」

短くそれだけ、るしあに返す。ムツつとした様子のるしあに、俺は苦笑いで返した。

直後、通りかかりの教室の扉が、何の前触れもなく勢いよく開いた。

何事かと、思うより早く、るしあに押し飛ばされ、そのまま教室の中へと入れられる。

姿勢を保とうとするが、追撃のように襟首を引かれ、そのまま床に倒された。見上げ

た景色には天井しか映つて居ないが、襟首は依然、掴まれたまま。るしあが原因と考えれば、見当はつく。

立ち上がろうとするが、手足も掴まれた。視線を向ければ、影から生えた白骨が、両手で俺の首を掴んでいるのが見える。もがいたら取れるだろうかと、そんなことを考えている間に、扉を閉め施錠もしたるしあが、俺へ近づいてきた。

見てはいけない物が見えそうになり、慌てて目を閉じる。

「よいしょと」

近くになるしあへの心配。声が徐々に大きくなつた辺り、恐らく腰を下ろしたのだろう。

「もう、目を開けてもいいのです」

言われた通り開ければ、天井に加え、こちらを見下ろするしあが居た。まるで膝枕でもされているような光景だが、生憎頭が置かれているのは、硬い床の上である。枕が欲しい。

「もうちよつと慌てたらどうなのですか？」

「信じているからな」

「監禁し甲斐が無いのです」

「見せたら見せたで、泣く癖に」

突っ込めば、るしあが気まずそうに視線を逸らした。僅かに覗ける、頬が赤い。

「でも、理由は分からん。どういうつもりだ？」

「先輩が話してくれないからなのです」

「それはごめん。分かってくれ」

「嫌です」

「ひどい」

検討すらして貰えなかった。

「何を話したのです？」

「え？」

「神社で消えたときなのです。暫く出てこなかったことは、多分イナちゃんと話していたんですよ？ それを聞きたいのです」

成程、道理である。意見を大きく変えたつもりは正直無いのだが、こうして何も喋らないと決めたのは、あの時イナとの会話があったからである。

故に、その話の内容を聞けなかったのであろうしあが、話の内容について聞いてくるのは、おかしいことではない。ではないが。

「なあ、るしあ」

「はい」

「何で、俺が神社で消えたこと知っているんだ？」

「……骸骨を出すために、先輩の影へ繋げていたパスが切れたので」
「……」

僅かに言い淀んだ事は気になったが、一応納得する。誤魔化す様に、るしあが咳ばらいを一つ挟んで。

「兎も角。会ったばかりのあの巫女さんとか、普通の人間の大空先輩みたいに、中途半端に話して、後は忘れろっていうのは嫌なのです。るしあはつよつよねくろまんさーですから危ない事も平気なのです」

「……まあ、るしあが俺より強いっていうのは知って——あれ？」
「何なのです？」

首を傾げるるしあを余所に、俺はるしあの言葉を反芻し。

「お前、何でさくらさんの事まで知っている？ しかも今朝の大空との会話も知っているようだが？」

「……………タロちゃんが教えてくれたのです」

『わんわん!!』

「違うらしいぞ」

「せ、先輩はタロちゃんと私のどっちを信じるのです?!」

「タロ」

「……」

「解放して」

「はい」

手足、そして襟首を引かれる感覚が消えた。上体を起こし、手首をグルグルと回し、問題が無い事を確認してから、るしあの方へ向き直った。

「何時から聞いていた？」

「昨日、神社に戻った時からなのです。影にパスを繋ぎ直す時、ついでに聞こえるようにしました」

「……」

本当か否か。ジト目で見据える俺を見て、るしあは慌てた様子を見せた。

「本当なのです！　今までは先輩の出血を切っ掛けに、先輩の影から自動的に骸骨が召喚出来るだけでした。それを、常時出せるようにしておいただけなのです」

「それで聞こえるのか？」

「召喚に当たって、召喚先の状況が分からないと大変なことになりかねないので。範囲は広く無いですが、確認は出来ます」

「成程」

るしあの語る理屈は分かる。

それに、昨日の晩に骸骨が出た時の様子は、以前ミオ先輩相手に出てきた時と違っていた。

あの時は、出たらそのままだったし、るしあがすぐに来たからかもしれないが、俺を守るように立っただけだったのに対し、昨日の晩は俺の足を持ち上げるだけ持ち上げて、襲撃者はまだ居るのにそのまま消えていった。

るしあが神社での俺の話を聞いていて、どうしたらいいのか分からず、それでも危なっかしくて少しだけ手を出したのだと言われたら、その理由も分かる。

「神社での話、聞いていたなら、分かってくれたんじゃないのか？」

「……あの時は、まだ私は知らない立場ですから、あんまりやり過ぎちやうのもダメかかって思つて。それにどうせ今日、私やちよこ先生には話してくれると思つていましたから」

そう言つて、るしあはうつむいた。

想像と違う展開に焦り、こうして空き教室に押し込めたのだろう。まさかちよこ先が、ああもあつさりりと引くとも、彼女は思つていなかった筈だ。

「さくらさんとの話を聞いていたなら分かるだろ？ 頼まれたのは俺だ。他の誰にも話せない」

「分かりません。それなら、最初から話さなければ良かったのです」

そんな恨み節を言うのと、るしあの唇が、キュツつと締まった。まあ、それを言われると大変弱いのだけど。

恨み節は幾らでも聞くつもりだったので、「ごめん」とだけ短く返す。

「あの襲ってきた人を気にしているなら、平気なのです。さつきも言いましたが、先輩より強いです」

「知っている。でも、あれは理由の一端だ。そもそも、さくらさんと話した時点では、アイツの事を俺は知らなかったし」

「なら、イナちゃんに何か言われたのです？ 何を話したのですか」

「いや、イナからは色々、詳しい話を聞いただけだよ」

鬼か悪魔か知らないが、誰からか渡された魔法の本。

人の記憶から建物を消したり、人に触手を生やしたり。願いを叶えてやった者にすら恐れられるそれについて、イナの現状について、改めて。

特段口止めのようなことはされなかったが、それでも、あまり口外していい内容では無いから、やはり話せない。

「それなら」

「別にるしあだけってわけじゃない。他の誰にも話さないし、力も借りないようにするつもり」

「……でも、それだと、先輩が危ないじゃないですか」

その言葉は否定出来ず、苦笑するしかなかった。

ただ、あの時、すいちゃん和鉢合わせなければ、存外何とかなっていた気も……。

ふと、脳裏に過る可能性。暫し悩み、まさかなと思ひ、その考えを忘れ、るしあの説得に戻る。

「大丈夫だよ。昨日るしあも見ていただろ？」

「危なっかしかったのです。実際死にかけていました」

「あー……次は大丈夫」

「何処からくるのです、その自信」

呆れ眼。俺は笑って返す。

「当てがないわけじゃないんだ。昨日みたいなことが無ければ、多分、次は大丈夫」

「……」

「信じてくれ」

「……分かりました」

「ありがとう、るしあ」

礼を言いながら、立ち上がる。るしあに手を差し出せば、その手を取り、るしあが立ち上がった。

るしあが完全に立ち上がったのを確認して、手を放す。そのまま俺は、教室の扉に向かい、其処を開けた。

「それじゃあ、授業もあるし、戻るか」

「先輩」

「ん？」

呼ばれて、振り返る。

声をかけてきた筈のるしあは、立ち上がった場所のまま、動かない。どうしたのかと思っただが、前髪に顔が隠れ、その表情は何い知れない。

「るしあ？」

「——いえ、何でも無いのです」

顔を上げたるしあは、にこりと笑うと、トンタンと、嬉しそうにステップを踏んで俺に並んだ。

「急にどうした？」

「いい事があったのですよ」

「この短時間に？」

嬉しそうに笑いながら、るしあは俺の脇を抜けていく。

「先輩。戻らないのですか？」

「ん、ああ」

今一瞬に落ちないまま、るしあの後を追い、廊下へ出た。

教室の階が違うから、階段で分かれる事にはなるが、それまでは一緒。

なので、そのまま並び、歩き出す。

「るしあ。良い事って何？」

「先輩が教えてくれないので、るしあも教えません」

「えー」

笑うるしあに、些か恐怖を覚える。

「それじゃあ、先輩。またなのです」

「ああ」

結局、内容の分からぬまま、俺とるしあは階段についた。

るしあが階段を下りだす。それを見守っていると、踊り場に立つたるしあが、俺へと手を振って来た。

同じように振り返すと、るしあはそのまま階段を下り、俺の視界から消える。

「……なんだ、一体？」

『くーん？』

俺の疑問が伝播したように、タロも首を傾げる。

一体何なんだと思いつながら、俺は自分の教室を目指し、歩き始めた。

それぞれの放課後

放課後。

本来であれば、部活に向かっている時間ではあるが、俺は自分の席につき、学級日誌を書いていた。

日付や授業内容など、割と書くことが多く、極めつけは掃除の出来やその日の反省等も書かなければならない為、存外時間が掛かる物。

普段ならもう一人の日直との熾烈な押し付け合いなのだが、今日の相方は黒板の掃除等が終わらせると、「ししろんとの約束がー!」と言って帰ってしまった。まあ、朝の内言われていたし、他の事をやって貰っているから文句は無い。ししろんって誰やと思いながら、その背を見送り、今に至る。

「反省かー」

反省する事なんて無いですと書く勇氣は無く、何とか捻りだそうと頭を抱える。

一応昼休みに屋上に忍び込んだ事は校則的にはアウトだが、屋上を閉鎖はされたくないし、反省しなければとは思っていないので書かない。

……難しい。去年までなら欄一杯に書けたものだが。果たしてこれは成長なのか、劣

化なのか。

「どう思うっ？」

「私を待たせている事を反省してよね」

廊下側から覗けない位置に腰掛け、顎を俺の机の上に乗せて、唇を尖らせた不機嫌そうな顔をするはあちやまがそう言った。

成程、一理ある。別に約束をしていた訳ではなく、日誌を書いている時に急に現れて、誘われただけではあるのだが、それでも待たせているのは事実だ。

——それにしても。

机の上にはもう一つ。正確にはもう一匹、夕口の姿がある。

最初にはあちやまの様に顔だけ乗せていたのだが、たつばが足りず落ち着かなかつたようで、今は普通に机の上に乗っていて、はあちやまを前に伏せていた。視線ははあちやまを捉えて離さない。

——可愛い。

俺の守護霊は世界一可愛いかもしれない。手が止まっていることをいい事に、学級日誌の上を陣取られてしまった事等、些細な問題だ。

撫でまわしたいのだが、はあちやまの前でそれは出来ない。もやもやする気持ちを学級日誌にぶつけたかったのだが、夕口が居るからそれも出来ず、俺が学級日誌を書かないか

らはあちやまの機嫌も良くならない。

……悪循環だった。

「先輩、早く書きなさいよー」

「あ、うん」

タロ、そこどいてと念を送るが、残念ながら届かない。

掴んで持ち上げるか。でも、それで何やってんだこいつみたいな目をはあちやまにされたら、心に来る。

るしあの気持ちを少し理解しながら、どうするか悩んでいると、慰みに回していたペンを掴み損ねた。

落としたペンが机の上で跳ね、そのままはあちやまの前へと転がり、目と鼻の先で止まる。

自分の目の前に止まったペンに、はあちやまの視線が向いた。

戻そうとしているのか、それとも特に理由は無いのか。ペンへ向けてはあちやまが息を吹きかける。

ふー、ふー、と。ただ、ペンは微動だにしない。最初は何となくで行っていたようだが、どんどんムキになり、顔を真っ赤にしながら、口を尖らせている。

そこまで行くと、ペンも僅かに動きを見せるが、それでも動かない。

「……」

はあちやまが動かせるまで待つか。それとも、さっさとペンを回収するか。悩んでいるうちに、手が動き出していった。

そのままポンと、はあちやまの頭の上に手を置く。ちらりと、はあちやまの視線が上を向いた。

「何？」

「いや、別に」

深い意味は無い。いい形の頭が、撫でやすい位置にあったからつい。

暫くそのまま様子を見る。特に、放せと言われる事も無ければ、振りほどかれる様子も無い。

実は満更でもないのだろうかと少し思うも、こういうのは大体勘違いと漫画で習ったので、軽く撫でたら手を放そうと考えた俺の視界に飛び込む影。

「——痛い！！」

がぶりと、一撃。その主はタロであった。はあちやまの頭に置いていた左手の手首を、思いきり噛んでいる。

思わず持ち上げた左手に、タロは未だ食いつきぶら下がったまま。守護霊つて憑いている相手に攻撃出来るのかとか、こんな時まで触れなくていいのにか思いながら、立

ち上がった俺は、手首に噛みつくタロを、右手で引き剥がす。

「なにすんだお前！」

『わん！』

怒る俺へ一吠えし、顔を背けるタロ。カッつとなつてやったと言わんばかり。急な反抗期だろうか。

とりあえず引き剥がしたタロは机の上に下ろし、手首を確認する。ちゃんと痛かったが、特に噛み跡は無い。変な感じだ。

手首を動かしても違和感は無く、あの痛みが気のせいだったのかと思える。

——本当に何だよ。全く。

理由も無く噛みついてくるとは思えないが、その理由が分からない。

溜息を漏らす俺へ、「ねえ」と声がかかる。

「何しているの？」

「……犬に噛まれた人の物まね」

「なんで急に？」

「……はあちやまが暇してるかなって」

「そう。何もしていないのに、急に何してんだって言われて吃驚しちゃった」

「ごめんなさい」

はあちやまからすれば、頭を撫でられたかと思つたら怒られたのだから、まさに青天の霹靂だろう。

視線をはあちやまの方へと落とす。ジト目を向ける彼女へ、誤魔化す様に苦笑いを返した。

「何が食べたい？」

「そうねー……」

とりあえず、物で釣つておこうという俺の考えを組んでくれたらしく、腕組み考えるはあちやま。

この隙に、終わらせてしまおうと、俺は席に着き、学級日誌に改めて向かった時。

がらりと、扉の開く音。

「おーい、日直いるかー」

クラス担任である教師の声につられ、俺はそちらへ顔を向けた。

「はい、居ます」

「おお。今日の学級日誌はどうした？」

「すみません、まだ終わっていません」

「ん？ どうした？」

「今日の反省がありません」

そう答えると、担任からは胡乱な目を向けられる。

「お前、そういうことは言う相手を選んだ方がいいぞ？ 俺は別に構わないが」

「……」

適当な人だなあ、と思っていると、書くべき内容を思いついた。

ペンを手に取り、ササツつと日誌を埋めて、それを手渡す。

「お待たせしました」

「おう」

今日の分を見て、再び胡乱な目をして。暫し俺の方を見た後、担任は俺の肩を叩くと、
「癒月先生に宜しく頼むぞ」と言って教室を出て行った。

意味が分からなかったので、さっさと忘れ、俺ははあちやまの方へ向き直る。

「はて？」

先程まで居た場所に居ない。教室を見渡すが、俺以外の姿は無い。

「はあちやまー？」

声を上げる。……返事は無い。

担任が来たのに合わせて隠れたのは分かる。流石にあんな校則違反は格好をして
いる誰かを前に、幾ら適当な教師として物申さない筈は無い。加え、先生が来たタイミン
グで教室を抜け出さないし教卓裏等に隠れようとしても、俺の机は最も窓際なので、は

あちやまのいた場所からでは教室内のどこに移動しようとしても見咎められる筈だ。それなら――。

「……」

席のすぐ脇。開けられた窓から風が吹き込み、カーテンが揺れている。

カーテンを開け、窓を覗き込む。窓の縁に指をかけ、壁にしがみつくはあちやまが居た。

担任が入って来る一瞬で、窓から抜け出して、隠れたらしい。

「……忍者か」

窓枠と自分の机に足をかけ立ち上がり、屈む。

何処を掴むか悩み、襟首をつかむ。力を入れると、魔力が右腕に集まる感覚。

そのまま立ち上がりながら持ち上げれば、軽々とはあちやまの身体を持ち上げる事が出来た。

プラプラと体が揺れる。こんなデザインのキーホルダー、見たことあるなと思いがながら、そのまま教室の中に運ぶ。

この間、はあちやまは首根っこを掴まれた猫の様に、身を丸めていた。

「大丈夫か？」

「……先輩、意外と力あるのね」

大丈夫——なのだろうか。とりあえず床に下ろし、俺も降りる。窓を閉め、帰り支度を整えた。

「お待たせ。帰ろう」

「……日誌は出来たの？」

服装を整えながら、警戒色を見せながらそう尋ねてくるはあちやまへ、俺は首を縦に振る。

「結局なんて書いたの？」

「『日誌を適当に書く』として書いた」

「……それが既に適当じゃない？」

「……は、反省しているし。担任も認めましたし」

でも二度と書かない。次回からもう少し考えて書くと思う。

「で、どうする？」

「どうって？」

「いや、待たせちゃったし、どこか寄ってかないか？ 奢るぞ」

「本当？」

「ああ。程々の金額なら」

その言葉に、はあちやまの警戒色が抜け、喜色に染まる。

「早く行きましょう！」

「うお」

ぐいと手を引かれる。機嫌が直ったようで、何よりだった。

「……」

歩きながら、スマホを取り出す。通知を確認するが、特に新着メッセージは無い。

——るしあ、どうしたんだろ。

昼休み、急に機嫌の良くなった彼女。正直、放課後にも連絡が来たり、彼女が顔を見せるのではと思っていたのだが、その様子は無い。

何かメッセージを送っておこうかと思うも、送る言葉が思いつかない。

結局、スマホは再びポケットへと戻す。

「じゃあ、先輩。校門で待ち合わせね」

「え？ あ、おう」

廊下に出た所で、はあちやまにそう声を掛けられた。

頷いて返した俺に、はあちやまは満足げに頷き、走り去る。

背を見送り、俺も校門に向けて歩き始めた。

同じ頃。体育館。

普段ならばバスケット部やバレーボール部などが、放課後の部活に精を出している時間帯。しかし現在、その場所は、不自然な程に静まり返り。

「♪」

ステージ上にてバレエの如き動きをするしあの鼻歌だけが、体育館には響いていった。

そんな彼女の周囲を、彼女のイメージカラーと同じ緑色に輝く光の糸で編まれた蝶が舞う。

流れるように鋭く、軽やかに。修練を感じさせる素晴らしい動きに、幻想的な光の蝶の群れ。

観客が居ない事が口惜しく感じる舞台。

そんな舞台が、タ、タンと、最後に2歩。ステップの音と共に終わる。直後。

ガタン、と大きな音を、体育館の扉が鳴らした。

視線を向けるしあ。その目が、昨晚、少年を狙った襲撃者の姿を捉える。

「るしあに何か、御用ですか？」

尋ねるるしあの言葉を無視して、襲撃者は歩を進める。

ゆつくりと確認するような足取りは、徐々に速度を上げ、駆け足へ。

昨晩同様、右手に鈍色に輝く物を携え、一直線にるしあへ向かう。

「……大丈夫。これは、降りかかる火の粉を払いのけるだけなのです」

そう言いながら、るしあは右手を突き出した。

ふわふわと飛んでいた蝶達が従うように前方へと飛んでいき、交わり、一つの円を成す。

その内に、新たに編まれる五芒星を軸にした、奇怪な図形。

「行つて」

その言葉を切つ掛けに。

直後、溢れ出るように骸骨達はその光の図形から飛び出した。

第3節

少年は知らない

「フブキ先輩にゲームで勝ちたいです」

「はい？」

とある昼下がり。半ドンの授業が終わった放課後。

すこん部の部室の中で、俺はミオ先輩へそう切り出した。

俺の言葉に、本から顔を上げたミオ先輩は、不思議そうに首を傾げる。急にどうしたと言わんばかりの態度。

「急にどうしたの？」

口でも言われた。

「いえ。そろそろ一回位勝つてみたいなーと思ひまして。センスも練習量も、フブキ先輩の足下にも及ばないのは自覚しているんですけど」

それでも、オンライン対戦で勝ちこせるようになり、勝利の味という物を覚えてきたからか、負けても楽しいだけではなくてきていた。ぐぬぬと、そんな事を思ってしまった。

そんな俺の言葉に、栞を挟み、本を置いたミオ先輩は、腕を組む。

「まあ、最近実力もついているし、ワンチャンくらいはあると思うけど」

「それでもワンチャンなんですね」

嘆くべきか喜ぶべきか。

「どうやったらそのワンチャンを拾えますかね?」

「フブキがミスをしたり、虚をついたりかな」

「成程」

俺の操作キャラですら、俺より詳しいフブキ先輩である。出来る出来ないを問わなければ、技の引き出しはフブキ先輩の方が多だろうし、それに対する策だって当然知っているだろう。

以前対戦中に、三輻程して覚えた必殺のハメ技も、通用したのは最初の1回だけで、その後は初動を潰されてボコボコだった。

何時の間に覚えたの、とにこにこ顔で驚かれたが、勝ち星にはならずである。あれと同じことが出来ればもしかしたら今度は勝てるかもしれないが、あれ以降、初見技を見せても対応されるようになったから、無理かもしれない。

「かくなる上は対戦中に妨害するとか」

「どんなことするの?」

「……話しかけるとか?」

「今更じゃない?」

「……そうっすね」

何なら向こうから話しかけてくる。

「やっぱりより一層の練習をするしかないですかね」

「勿論、それが一番いいけど……まあ、一回だけなら、絶対にフブキの虚を付ける魔法の言葉ならあるよ?」

「へ?」

思いがけない言葉に、呆けた声が口から漏れる。

そんな魔法のような言葉があるのかと、驚く俺に、ミオ先輩がその魔法の言葉を口にする。

その内容に、俺は「おお」と納得するしかなかった。

「それは確かに。驚きそうですね」

「……反応薄くない?」

「……そ、そんな方法が?!」

「そっちなじゃないんだけどな」

私が間違えているのだろうかという反応を見せるミオ先輩に、はて、と首を傾げる俺。

そんな俺の態度のせいかな、ミオ先輩は溜息を漏らした。

「うーん……とりあえず、いいや。使うかどうかは任せるね」

「早速今日使います」

「……本当に言っているの？」

「はい」

とりあえず勝ちたかった俺は、素直に首を縦に振る。

すると、ミオ先輩はそそくさと荷物を纏め始めた。

「じゃあ、うち、帰るね」

「え？」

「フブキには、うちは急用が出来たって伝えておいて」

纏めた荷物を手に、小走りに部室を後にするミオ先輩。

「お疲れさまでした」

見えなくなった背にとりあえず声をかける。急にどうしたのだろうか。

「お疲れ……あれ？ ミオは？」

「お疲れ様です、フブキ先輩。ミオ先輩は急用が出来たとのことですよ」

「そうなの？」

ミオ先輩が立ち去って10分程経ってから、フブキ先輩は部室へと入ってきた。ゲームをしていた手を止め、フブキ先輩に頭を下げる。

フブキ先輩は、ひらひらと手を振りながら、そのままいつもの席へ腰を下ろすと、鞆を開け、中から漫画を数冊取り出した。

「はいこれ。言っていたやつね」

「ありがとうございます」

そのまま差し出された漫画を受け取る。

最近アニメ化した作品の原作だ。フブキ先輩に勧められ、昨晚動画サイトで見てハマった口である。

面白かったですと感想を送った所、今日原作を貸してくれる事と相成った。

「……」

漫画をジツと見降ろす。

早く読みたい。数冊あるし、1冊くらい、読んでもいいだろうか。

いやでも。今日の目標は1勝である。ミオ先輩に教わった作戦を使うのなら、数戦こなし、フブキ先輩が油断しているタイミングがいい。

俺の葛藤に気が付いたらしく、フブキ先輩が口を開く。

「読んでもいいよ? 私、他の事してるし」

「……いえ。漫画は家でも読めますから。フブキ先輩とゲームは……家でも出来ますね」

オンライン対応は偉大だ。体力的な都合とか、やる事があつたりで毎晩とはいかないが、それでも週の半分位は、フブキ先輩と通話しながらゲームはしている。

「でも、今はゲームがしたいです。お相手、願えますか？」

「そう。なら、いっちょ揉んであげようかな」

「今日は勝ちます。秘策もありますよ」

「そうなの？　じゃあ、楽しみにしてようかな」

あまり期待しないで欲しい所だ。

俺は席を立ち、コントローラーの1つをフブキ先輩へ渡す。

オーソドックスな対戦ゲーム。アイテム無し、段差無し、残機3つ。

カウントダウンの後、対戦が始まる。

開始直後、無言での戦い。カチャカチャとボタンを押す音とスティックを倒す音が響く。

フブキ先輩が来るまでゲームをして手を温めていたにもかかわらず、態勢不利。気づけばコンボを受け、俺の残機が1つ減る。何とか、フブキ先輩の残機を減らすが、返して俺の残機も減らされ。

そのまま俺は残りの残機も削られ、1敗。

「ぐぬぬ」

「ふふーん。あれ？ 秘策はどうするの？」

「これからですよ」

2戦目、3戦目と、同条件での勝負が続き、その度に負けていく。

やっているうちに警戒心が薄れてきたのか、フブキ先輩の口数が増えていく。

「そういえば、最近新しいゲーム買ったんだよ」

「そうなんですか？ どんなゲームなんですか？」

聞いた俺に、フブキ先輩は最近良く聞くゲームタイトルを言った。

配信サイト等でも、良く実況されているのを見かける。

「最近よく聞きますね。配信も少し見ましたけど、凄く難しそうでした。良く死んでい

ましたし」

「難易度高いから、試行錯誤したり何度も死んだりして覚えたりするゲームだからね。

君も結構好きだと思うよ」

「成程……」

フブキ先輩の所感は良く当たるので、俺は好きになるだろう。ちよつとワクワクする。

「今度遊びに行ってもいいですか？」

「いいよ。次の休みとかでいい？」

「はい」

そんな会話をしながら、上手くコンボを決め、フブキ先輩の操作キャラを撃墜する。
「おっと」

無意識だったのだろう。そんな声が、フブキ先輩の口から漏れるのが聞こえ。

お互い最後の残機というシチュエーションを前に、ゲームへ意識が向いたらしく、視界の隅で、フブキ先輩がやや前のめりになるのが見える。

ダメージ的にはやや不利だが、畳みかけるならここか。

ミオ先輩の教わった切り札を、此処で切る事に決めた。

「そういえば、フブキ先輩」

「何？」

「俺、彼女出来たんですよ」

途端、顔の向きを変えられた。

フブキ先輩と目が合う。

「誰？」

興味本位のそれでは無かった。

必死さの伝わる顔。感情が高ぶっているのか、瞳が潤んでいるのが分かる。その表情に、俺は言葉を失う。

——否。俺の言葉に驚いて、フブキ先輩が手を止めた隙に勝つ算段であり。

勝つてから、冗談でしたと、それですませる腹積もりであったから、そもそも失う言葉等無いのだが。

「誰なの？」

よもや、こんな顔を向けられるとは思っていなかった俺は、冗談ですと、それだけの言葉すら、口に出れない。

「私の知っている子？ シオンちゃんとかスバルちゃんとか」

ちよつと考えれば、自分が彼女達とそういう関係になる事等、ありえないと分かりそうなものだが。

予期せぬ俺の言葉に、頭が回っていないらしいフブキ先輩は、百鬼や天音先輩など、共通の知人の名前も挙げていき。

やがて。

「ミオ……とか？」

その名を口にした。

思わず反応したのは、断じてそのような関係だからという訳では無く、俺に入れ知恵

したのがその人だったから。

ただ、俺の反応に気づいたフブキ先輩は目を丸くして、驚いて見せる。

「嘘……」

呆然と一言呟き。その後は、何かを言おうとしているようだが、声になっていない。やがて、目を伏せたフブキ先輩の手から、力が抜ける。

俺の顔を滑るように落ちる手を、俺は落ちきる寸前で、顔と挟むように止め、握った。『GAME SET』と、軽快な声がモニターの方から聞こえてくる。

「すみません、嘘です。だから、泣かないで下さい」

「——うえ？」

「ホント！ 信じられない！」

「ごめんなさい」

帰り道。俺は、自分とフブキ先輩の荷物を手に、フブキ先輩に怒られながら帰路についていた。

俺の少し前をずんずん歩くフブキ先輩は、ぶんすかという擬音が似合いそうな位に冠で、狐耳と尻尾をピンと立たせている。

「勝ちたいのは分かるけど、盤外戦術に頼るのは駄目だよ！」

「はい。もうしません」

「あたりまえだから！ あと、私は泣いて無いからね！」

「はい。勘違いでした」

瞳は潤んでいたが、涙を流していた訳ではない。

何で泣いていると思っただのだろうか。我ながら謎である。

「それで？」と、振り返りながらフブキ先輩。

「入れ知恵した犯人は？」

「いません」

「そう？ まあ、ミオの名前に反応した辺り、察しはつくけど」

「……」

バレてる。

「何でもしますので、どうかここだけのお話にしてください」

「ん？ 今何でもって」

「はい」

「お、おう」

頷く俺に、後ろ向きに歩くフブキ先輩がたじろぐ。

その後、誤魔化す様に咳ばらいを一つ。

「まあ、黒幕に関して是不問にしとくよ。実行犯の君には、その内何かして貰おうかな」
「分かりました」

「……ちなみに、その何でももってどれ位？」

「え？ まあ、命に関わらない限りは特に。流石に全財産寄せとかわれたら困っちゃういますけど」

「いや、流石に言わないけどね」

そう言うのと、フブキ先輩はやや言い淀んだ後。

「し、生涯年収の半分とか？」

やや照れ顔をしながら、冗談混じりにそう言った。

その言葉に、少し悩んでから言葉を返す。

「えーと……俺、バイトは不定期なので、年収と言われても……分かりました。とりあえず、明日貯金の半分を下ろしてきますね。それで、今後のバイト代は折半すればいいですかね」

「ごめん。今のは私が悪かった」

下ろさなくていいからと、フブキ先輩。

僅かばかり赤らんだ顔をぱたと仰ぎながら、フブキ先輩は再び振り返り、俺に背を向けながら話を続ける。

「次、遊びに来た時、ご飯でも作って？ 食べたいものは、考えておくからさ」
「いつもやってますけど」

俺がフブキ先輩の家に遊びに行ったら、いつもしている事だ。ミオ先輩に教えられがてらに作ることもあれば、ミオ先輩に用事があつて出かけている時は、復習がてらに俺が食材を持つて行き、作っている。俺の料理の目標はミオ先輩で、そんなミオ先輩の料理を一番食べているのはフブキ先輩だから、腕試しというのが近いか。

俺の言葉に、フブキ先輩は、暫し無言。再度腕組み、悩み。振り返つて、苦笑い。

「お願い事、考えとくね」
「お願いします」

そんな話をしている内に、十字路へと差し掛かる。

俺の家へは、此処で左折。フブキ先輩は直進なので、分かれ道だ。

「それじゃあ、後でね」

部室でも散々したというのに。

三度の飯よりゲームが好き先輩は、今晚のオンラインプレイの約束を確認してくる。

「はー」

元より断る意思も無く。頷き返せば、満足そうにフブキ先輩は頷き、踵を返し、小走

りに駆けていく。

その背を暫く見て、俺は歩いて帰ろうとした時、スマホが震え、着信を知らせた。

取り出し、中身を見る。メッセンジャーアプリに、通知が一件。フブキ先輩からだつた。

『駆け足』

「……」

スマホから顔を上げ、フブキ先輩が走っていった方を見る。暫く行つた所で足を止め、こちらを振り返っているフブキ先輩が居た。

その場でリズムカルに足踏みしながら、笑顔で俺へ手を振る先輩へ、俺は手を振り返す。

スマホはポケットにしまい、軽く手足の運動を済ませて、言われた通りに走り出した。

居候と幼馴染

「おじやましませーす」

ドアノブを回す音と共に、室内にシオンの声が響いた。

大荷物を浮かせたシオンが、俺の部屋に入ってくる。

「これ置かせて」

「……」

恐らくは呆れ顔を浮かべているであろう俺を余所に、シオンは一方的に自分の要求を告げてきた。

慣れたものなのだが、それでもその言葉に俺は溜息を漏らしてから、苦笑の聞こえてくるヘッドセットのマイクに声を掛けた。

「すみません、フブキ先輩。通話切りますね」

『りようかい』

PCを操作して通話を切る。

ヘッドセットを外しつつ、改めてシオンを見れば、荷物を置いたシオンは中身の分別を始めていた。

「遠慮を学べ。そしてノックをしろ」

「いいでしょ。どうせ私物なんて殆ど無いし、アンタだつて私の部屋に入るときにノックしないじゃない」

分の悪さを感じ、視線を逸らす。ついでに部屋を見渡せば、去年までの伽藍洞の部屋とは打つて変わり、非常に物に溢れていた。

とはいえ、その中で俺の私物と言えば、オタク趣味を知ってから個人的に買った漫画やラノベと、それらを仕舞う本棚、ネットゲームでボイスチャットをするためのヘッドセット位の物。

その他は借りたり、持ち込まれたりした物であり、ミオ先輩から借りたレシピ本や去年のノート、フブキ先輩の漫画やフィギュアやアニメグッズ、そしてシオンが持ち込んでいる読めない本やら用途不明の道具類といった具合。

改めて随分増えたなと感じるも、パツつと見での余裕はまだあつて、シオンの持ち込んだ荷物を置くことは出来そう。嫌がってもどうせ荷物は置かれる運命なので、さつさと諦める。

「クローゼットでいいか？」

「うん。大丈夫」

立ち上がり、クローゼットへ向かう。引き戸を開ければ、割と容量いっぱいクロー

ゼット。相変わらず俺の私物は、洋服類が数点と段ボールが一つ置いてあるくらいで、残りは大量のシオンの私物。

「その白い段ボールを退かせれば良さげね」

「ただでさえ勝手に物を置いていくくせに、数少ない俺の私物すら退かせと申すか」

「申す」

申された。居候の癖にとんだ暴君である。

「どこで売ってんだよ、その面の皮」

「コンビニ」

「嘘だろ」

見たことないけど。魔界のコンビニだろうか。

疑問を抱かされた俺を余所に、シオンは作業を始めた。

といつても、大した作業は無く、俺の私物が入った箱を浮かして退かし、代わりに自分の荷物をその空間へと置くだけ。数秒で終わった。

「ていうか、軽っ。何が入ってるのこの箱」

「……小さい頃の思い出？」

「何で疑問形なのよ」

小学校最後の引越しの際に仕舞い、そのまま封を切らずにクローゼットに仕舞った

記憶がある。

それ以降、今日まで引越しの度に持ってきては、封を切ることなく仕舞っていた。ちよつとしたタイムカプセルだ。恐る恐る封を切り、シオンと共に覗き込む。

「思ったより子どもっぽいわね」

「そりゃ、小学生の頃の代物だからな」

当時好きだった絵本とか、ボタンがたくさんついた筆箱とか、何かで1等賞を取った時のメダルとか。

中学入学に際して、小学校時代と決別しようと思い仕舞った、去年の俺なら即捨てしそうな品々。

それらを眺め、逡巡する。

「……大した量も無いし、折角だから飾るか」

そんな言葉が、口から洩れた。段ボールのサイズに対し、品が少ない。

このまま仕舞っておいても、段ボールが邪魔だ。

「いいんじゃない?」

シオンの言葉を切っ掛けとするように、箱の中身が浮き始めた。

絵本が、筆箱が、メダルが。中に入っていたものが、シオンの指示により室内を飛び、ここが定位置だと言わんばかりに、勝手に収まる。

楽だなー、とその光景を眺めていると。

「あれ？」

シオンが声を上げた。声につられそちらを見ると、シオンが箱に手を入れている。

取り出したのは、黒いケース。指輪とかが収まる程度の、掌大の小さな箱だ。

暫くそれを観察して、ぱかりと蓋を開ける。

「何これ？ ピンバッジ？」

「見せて」

「ん」

手渡された物に、視線を落とす。

確かに、シオンの言う通りピンバッジであった。黒い台座にカラスの意匠の施された物である。

「——ああ。懐かしい。社章だな、これ」

「社章？ あんた、バイトでもしてたの？」

「そんなもん」

ピンバッジを取り出し、記憶を頼りに側面を見れば、所属していた秘密結社の名前を見ることが出来た。

自然と、其処にいた3人の顔を思い出していると。

「——ちよつと」

声を掛けられ、肩が跳ねた。思考が浮上する。視線をシオンの方へ向ければ、彼女は自分の荷物を、空いたスペースへ仕舞い終えていた。

「懐かしむのはいいけど、大丈夫なのそれ」

「何が？」

意味が分からず尋ねると、シオンは難しい顔をする。

どうしてそんな顔をするのか分からぬまま、俺は机の上に置かれた眼鏡ケースから、眼鏡拭きを取り出した。

それで社章を拭いていると、視界の隅で、ケースが浮くのが見える。どういうつもりだろうかと思ひ、シオンを見れば、彼女は難しい顔をして、右へ左へそれを動かし、最後は本棚へと置いた。それだけで、シオンは息を切らせ、額に汗を浮かべた。

「どうした？ 大丈夫か？」

「……それ、仕舞っておいた方がいいわよ」

「え？ 何で？」

「……臭い物に蓋をつけて言うでしょ」

意味が分からなかったが、余りに真剣な表情に負け、俺は素直に首を縦に振った。

置かれたケースに社章を収め、蓋を閉める。

更にシオンはガムテープでもってグルグルに目張りしようとするものだから、流石にそれは止める。

「じゃあ、私、自分の部屋に戻るから。……それ、捨てる気になったら言つて」

「いや、多分ならないけども。おやすみ、シオン。歯、ちゃんと磨けよ」

「子ども扱いすんな。おやすみ！」

怒りを表すように、ちよつと強めに閉められた扉へ手を振つて。俺は視線をPCへと移す。

フブキ先輩はまだゲーム中。時計を見れば、いつも寝るより、やや早い時間。

明日は休みだし、合流して遊び直してもいいのだが、そうすると睡眠時間が消えそう
だ。

ゲームは切り上げ、借りている漫画でも読もうかと思つた矢先、スマホがメッセン
ジャーアプリの着信を告げた。

スマホを手取る。画面を見れば、画面には姉街さんの文字。

一瞬疑問符が浮かぶも、直ぐに連絡先を交換した事を思い出した俺は、通話ボタンを
押し、耳に当てる。

「もっもっ」

『私だ』

声を掛けた直後、姉ではなく妹の声が聞こえてきて、俺は反射的に電話を切った。数秒と経たず、再度同じ人物から着信。通話ボタンを押す。

『どういうつもりだ』

「ごめん、つい」

防衛本能が働いたというか、何というか。

「どうしたの、すいちゃん」

電話越しの幼馴染へ尋ねる。態々姉街さんの電話を使ってかけてきたのだから、何か重要な話があるのかもしれないと、そう思ったが。

『暇だった』

「あ、はい」

そんな事無かった。

『なんだその反応はー。推しと通話出来るんだから、もっとテンションあげろー?』

「きやーほしまちさーん」

『殺す』

「情緒どうなってんだ」

通話状態をスピーカーにして、傍らに置く。フブキ先輩へ、このまま休むことをチャットで伝えると、『わかった。おやすみー』と届く。

おやすみなさいと、短く返し、PCの電源を落とす。

『もしかして忙しい?』

「え? なんぞ?」

『推しと通話してるくせに、タイピングしている音が聞こえたから』

今更だが、彼女の自信は何処からきているのだろうか。推している事は間違いないのだが、こうも言われると少し控えようかと思えてくる。

「大丈夫。学校の先輩にチャットしただけだよ。因みに、その人のおかげで、俺はすいちちゃんがアイドルをやっていることを知りました」

『私の事を知らなかったとか、許されないんだが』

テレビも見ないし、ネットもやらなかったんだから、知らなくても仕方が無いと思うのだが。

「すいちちゃんがアイドルしていたことは知らなかったけど、忘れたことは一度も無いから許して」

『そんなこと言つて、この前会った時、気づいてなかったじゃん』

「暗かったし、居ると思つてなくて」

それに追われてもいた。

『まあ、そういう事にしておいてやろう』

「どーも」

『それで？ 何時になったら、引越しの挨拶に来る？』

「いや、行かないけど」

『は？』

そもそも、引越しの挨拶って引越してきた側がする物だった気がするが。それに前に。

「姉街さんには良くして貰ったけど、流石に一人暮らしの異性の家に行くのは、些かハードルが高いし、世間体も良く無いかなど」

フブキ先輩とかミオ先輩の家に入り浸っていた時期があるから、今更何を言っているんだという感じだが。

それに、先輩達と違い、保育園以降ろくに会っていない姉街さんとは、ほぼ他人と言って差し支えないから、猶更だ。

『良く分からないけど、一人暮らしだからまずいって言いたい訳？』

「うん、まあ、そんな感じ？」

『なら、心配ないわね。——お姉ちゃん、明後日来るってー』

『分かったー』

「待て待て待て！」

電話の向こうで、急に話が進んだ。

慌てて声を掛けると『何?』とすいちゃん。

「何じゃないよね? 直前の会話でおかしい所あったよね?」

『アンタが挨拶に来る気が無いって所以外、おかしい所無かったじゃない。向かわせて下さいお願いしますってひれ伏して、地面に額擦り付ける立場なのに』

「すいちゃんの中の俺がどうなっているのかは、後で話し合うとして」

『奴隷だけど』

「話し合うとして」

話し合いの余地があるかはさておき。

「行かないって言ったよね? それを無視して勝手に納得した挙句、明後日の俺の予定、勝手に決めたよね?」

『アンタが、姉街一人暮らしじゃなければ行くって言ったんじゃない』

「一人暮らしだからまずいと一人暮らしじゃなければ行くは同じ意味じゃないだろ……
というか、姉街さんって一人暮らしじゃないの?」

てつきり、大学とか就職とかで、一人でこの街に引っ越してきたとかだと思ったが、
どうやら違うらしい。

家族みんなで越してきたとかなんだろうか。

『私と二人暮らし』

「それはもつとまづいんじゃない？」

パパラッチとか。それを引いても、異性だけの家に行くというのは……あれ？ 今更
か？

『まあ、そういう訳だから、明後日。忘れんじゃないわよ』

「あ、ちよつと！」

俺の意識が逸れた隙に、すいちゃんがさつきと電話を切ってしまう。

慌てて掛けなおすが、出て貰えない。代わりとばかりに、住所が送られてきた。

確認すればそのマンシヨンは、少し前にそらさんを送り届けた場所だった。

考えてみれば納得というか、何と言うか。そりやそうかといった感じ。

すいちゃんに、「じゃあ、明後日ね。おやすみ」とだけメッセージを送り、俺は携帯を
充電器に刺した。

欠伸を漏らしながら、部屋の電気を落とし、ベッドに潜り込む。

明後日会うなら、明日にでも色々済ませた方がいいかなと、そんな事を思いながら、俺
は目を閉じた。

朝の風景

すいちゃんとの約束から一夜明け。

カーテンの隙間から差し込んだ朝日が、真っ直ぐシオンの顔を照らしている。

眩しきで起きないものかと思うが、その気配は無く。シオンは寝顔という名のあほ面を晒しながら、すやすや夢の中であつた。

そんな様子を見下ろしながら俺はフライパンとお玉を構えた。

「シオン。朝だぞ、起きろー」

かんかんかんと、お玉をフライパンにぶつける。

暫く続けると、シオンは「むー」と少し唸り、俺に背中を向けた。起きる気配はない。

フライパンとお玉も痛むし、俺は早々に金属音スタイルを辞め、フライパンとお玉を机の上に置き、シオンの身体に手を掛けた。

「シオン。シーオーナー」

「……ん〜」

そのまま体を揺ると、シオンは愚図りながら、掛け布団を頭の上まで持ち上げ隠れる。

「起きろって。朝飯出来ているぞー」

「……あと5時間」

「せめて分刻みにしてくれ」

「あと300分……」

「起きているだろお前」

布団の山の中から、ふがふがとシオンの声。

少しして、規則正しい寝息が聞こえてくる。

暫く様子を見たが、そこから変化は無く。俺は起こすのを諦め、フライパンとお玉を手で部屋を出た。

リビングへ戻ると、テーブルでは既に起きているわためが、お行儀良く座って待っている。お願いしておいた通り、朝食もテーブルに並べられていた。

「シオンちゃん、起きた?」

「起きない。食べちゃおう」

「うん」

フライパンとお玉をキッチンへ戻し、俺は定位置の椅子へと腰を下ろす。

俺が座った事を確認し、わためは両手を合わせる。同じく俺も手を合わせ、「いただきます」と挨拶。

俺は箸、わためはフォークを手に、朝食を食べ始める。

「美味しい！」

「ありがと、わため」

褒めて貰えるとやはり嬉しいものだ。嬉しくてつい、自分の分の卵焼きを渡してしま
う。

渡されたそれを、パクパクと嬉しそうに食べるわために癒されていると、「そうい
え
ば」と、わため。

「今日って用事ある？」

「用事？ えっと……いや。特に無いぞ。午前中は家の事をするつもりだけど」

明日予定が入ったから、今日は家の事をこなすつもりだった。

いい加減シオンの使っている布団の洗濯やら、部屋の掃除がしたい。それに、常備菜
の作り置きもしたい。夕飯は言わずもがな、週二か三位のペースで、ちゃんと朝に起き
たシオンが食べるかもしれないから、少し多めに作らないといけない。

「そっか。午後は空いている？」

「買い物行こうかなって思っていた位だし、大丈夫だよ」

その言葉に、わためはパツツと、顔を明るくさせる。

「それなら！ 久しぶりにわための歌、聞きに来て！」

「ああ、是非。楽しみにしている」

俺が頷き返すと、わためが笑う。

「約束だよ？ 破ったら藁千本飲ませるからね？」

「絶妙に重いか軽いか分からない罰来たな」

いや、流石に重いか。

「大丈夫。絶対に行くから、安心してくれ。駅前でいいか？」

「うん。待っているね」

そう言うのと、わためは手早く残りの朝食をかきこみ、「ごちそうさま！」と元気に挨拶すると、食器をキッチンへ持っていく。

「洗い物はしておくよ」

「本当！ ありがとう、じゃあ出かけるね！」

「いつてらっしゃい」

「いつてきまーす！」

歌う前に、探検するのだろう。ぱたぱたと小走りにわためは移動し、間もなく、扉を開けて出ていく音が聞こえた。

間もなく扉の閉まる音。それを聞いてから、俺は朝食を再開した。

最後の卵焼きを口元まで運びながら、今日は楽しみだなと思っていると。

——はて？

思わず箸を止めた。

「そういえば、初めてだな。わために誘われるの」

わためのステージ自体は、いつも使うスーパーが駅近だから、買い物ついでに見に行っていた。

ただ、これは俺が勝手に行っていただけで、わために誘われたのは、まだわためがこちらに慣れていない頃を除けば、初めてだ。

誘われて嬉しくない筈無いが、疑問が浮かばない訳でも無い。

「んー……、まあいいか」

だが、特に悩まず、考えを放棄する。

相手によつては、何を考えているのかと頭を抱えるだろうが、わためである。

有責の際に、「わためは悪くないよねー」と言つて誤魔化そうとする事はあつても、誰かを陥れたりはいしない。

普段は買い物帰り、終わり際少し見る程度だから、偶にはちゃんと見て欲しいとか、そんなところだろうと。

俺は、そう考え食事に戻つた。

それからしばらく、家の事をする。

常備菜を作り、家の掃除。そろそろ洗濯機を回して干さないと、乾かないかもなとぼんやり思い始めた頃、ネグリジエ姿のシオンが、目を擦りながらリビングへ入ってきた。

「おはよ」

「ん〜」

がくんがくんと歩みに合わせ、頭部が揺れる。目も殆ど閉じていて、正直起きているのかも定かではない。

「珈琲飲む？」

「ん〜」

「ん。朝飯は？」

「ん〜」

飲むし、食べるようだ。一先ず先に珈琲を淹れ、椅子に座りうとうとしているシオンの前へ置く。

珈琲の香りが鼻を擽ったのか、シオンは手探りにマグカップを探ると、それを持ち上げ、冷ましてから口を付ける。

大丈夫そうなのを確認してから、俺は朝食を温めなおし、シオンの前に並べた。

「食べ終わったら、洗つといってくれ」

「あーい」

トーストを持ち上げ、もぐもぐと食べだす。

その間に俺はシオンの部屋に行き、軽く掃除機をかけてから、ベッドから毛布やらシーツを回収。

それを脱衣所にある洗濯機へ入れ、電源を入れる。

少し操作し、動き出した事を確認する。

「——ねえ」

「ん」

洗濯をしている間に何をしようかなと思う俺に、シオンの声がかかる。

視線を向ければ、朝食を終えたらしいシオンが、脱衣所に居た。

「今日の予定は？」

「見に来てつてわたために誘われている。シオンも行くか？」

「ん〜……」

俺の言葉に、シオンは唸る。

少しして、「夕飯が外食なら付いてく」とそう言った。

「残念だが、今日の夕飯も俺の手料理だよ」

「ならいいかな。家で実験でもしている。アンタの部屋、借りるわね」

「別にいいけど、俺の部屋で実験するなら、片付けまでしつかりやってくれ」

以前部屋を貸した結果、数日悪臭が部屋から取れず、リビングで寝る事になったことを思い出して、俺はシオンにそう告げた。

「はい」

俺の言葉へ、シオンからは片言の返事。不安は残るが、信じるしかないか。

「何しよう……あのピンバッチの耐久テストでもしようかしら」

ぼそりと、そんな言葉が聞こえてきた。

「人の思い出の品、勝手に実験に使おうとするなよ」

「ならちよつと削って粉末だけでも」

「嫌だよ。何、怖い。昨日の晩、あれだけ警戒していただろ」

仕舞っておいた方がいいとか、捨てる気になったら言つてとか。

そんな事を言っていたはずだ。

「でも、一晩経つたら好奇心が勝っちゃって。減るもんじゃないでしょ？」

「削つたら減るだろ……いや、そういう問題じゃない」

何か良く分からなくなってきた。

「兎に角辞めてくれ。大事な品なんだ」

「忘れていた癖に」

「……仕舞つておいたただけだし。忘れていないし」

いまいち自信は無かった。

「いいから辞めてくれ。頼むから」

「はーい」

届く生返事に、俺は一抹の不安を覚える。

——大したサイズじゃないし、一応、持ち歩くか。

そんな事を思いながら、俺は近くに置いてあるダンスから、バスタオルを一枚取り出し、シオンに投げ渡した。

「洗濯物、干しといてくれ」

「今日はそんな気分じゃない」

「おい——」

シオンの発言に苦言を呈そうとする俺に先んじて、シオンはネグリジエを脱ぎだす。

そんな事をされれば流石に居座つて会話を続ける訳にもいかず、俺は慌てて視線を逸らし、脱衣所を脱出した。

後ろ手に脱衣所の戸を閉め、溜息。

気分じゃないと言った以上、洗濯物を干す事はしないだろう。

流石に洗濯機に洗濯物を入れたままでわための元に向かう気にはならず、俺は大人し

く洗濯終了まで待つ事に決め、俺は自室へ戻った。

置いてけぼり

自室で身支度を整えた。バッジは少し悩んで、まあ久しぶりだからと身に着ける。

落ちないようにしつかり固定。そのほか、持っていく物などを決めてから、俺はリビングに戻り、時間を確認した。

経過時間は30分程度。流石に洗濯は終わっていない。何なら、シオンの入浴も怪しい。

素直に待つかと、俺はソファアに腰を下ろした。

テレビから流れてくるニュースを聞き流しながら、スマホを手に取り、ソシヤゲを起動する。

データのロードを経て、起動。ログボ回収などのルーティンをこなす。難しい操作も無いし、すっかり慣れた。

さくさくとゲームプレイ用のポイントを消費していると、テレビから、聞きなれた声。

『すいちゃんは一……今日もかわいい一……』

「かわいい一」

もはや条件反射で言いながら、顔を上げる。

朝の情報番組。記憶では生放送であるその番組に、すいちゃんが映っていた。その手には見覚えのないジャケットのCD。どうやらその宣伝の為に、出演しているらしい。

昨日の晩、割と遅くまで起きていたのに元気だなと感心したが、よく見ればVTRであり、録画映像のようだった。

はきはきとインタビュアーの言葉に答えるすいちゃん。サイコパス要素抜いたら、本当にただのスーパーアイドルだなと、そんな事を考えていると、スマホが鳴った。

「……」

クエストを中断されたことに、やや絶望感を覚えながら、スマホへ視線を落とす。

ちゃんとテレビを見ているかという、すいちゃんからの圧かと思ったが、そんな事は無く。ディスプレイには見覚えのない電話番号が表示されていた。

覚えのある番号の方が少ないのだが、それは兎も角。暫し悩んで、まあいざとなれば切ればいいかと、画面をタップし電話を繋ぐ。

「……」

「……」

返事が無い。

はて、と思い、もう一度「もしもし」と声をかける。

『――！』
無言だった先程と違い、電話越しに音が聞こえてきた。揉めているような、そんな様子。

そんな音の中に、聞き覚えのあるその声が混じっていた。まさかなーと思うのは、携帯の番号を教えた記憶が無いからである。

まあでも、当時から秘密結社を名乗っていたし、これくらい出来る物なのだろうか。そんな事を思っていると、女の子の音が聞こえてきた。

『もしもし？』

「……はい？」

予想に反し、知らない子の声が聞こえてきた。

遠くから聞こえてくる、『あー！』という声の方は覚えがあるので、恐らく争奪戦に負けたのだろう。

『こちら秘密結社h o o o Xです』

「存じております」

『さかまたはインターンで掃除屋やっています』

「そうなんですか」

電話越しの知らない人は、さかまたさんというらしい。俺がお世話になっていた頃は

3人しかいなかったから、増員したのだろう。

とはいえインターンは確か見習的な意味だった筈だから、お試し期間的な感じか。掃除屋は……何だろう。清掃代行？ 出張サービスでも始めたのだろうか。

『最近お困りのことは無いですか？』

「はい？」

考え事をしていた俺の耳に、さかまたさんの声が届く。

『最近お困りのことは無いですか？』

「えっと」

再度、同じ事を聞かれ、戸惑う俺に、さかまたさんは再三『最近お困りのことは無いですか？』と尋ねてきた。

直ぐに思いつかないから、「……特に無いですけど」と返す。

『分かりました〜』

応答直後、つー、つーっと、電子音。画面を見れば、通話終了の文字。切られたらしい。

「えー……」

何だろうこれ。折り返した方がいいだろうか。

正直掛けた所で、話進まなそうだけど。

……うん。

「別にいつか」

何かあればまたかかって来るだろうと思い、ソシャゲを再起動する。

やはりというか、クエスト失敗になっていたので、再度始める。

「——お待たせー」

再びの連絡は無く。ソシャゲを進めていた俺の耳に、シオンの声が届き、俺は振り返る。

長い髪をタオルで拭きながら、シオンがリビングに入ってくる。

着替えを済ませている俺を見て、シオンは小首を傾げた。

「もう出るの?」

「そのつもり。因みに洗濯物は?」

「干してない」

知っていた。

洗濯物を干し終え、シオンに声をかけてから、とりあえず家を出て駅前まで来たが……やはりというか、わための姿は無い。

時間を確認すれば、14時を回った辺り。流星に早かったか。

ライブ前に街を探検したり、フレアさんと遊んだりしているわためは、警察による駅前巡回の時間次第だが、大体いつも16時頃に演奏を始める。

とはいえ今日は土曜日だしわためから誘ってきたのだからと、早めに来たのだけど、勇み足だったようだ。

「どうしようか」

食材の買い物に行ってもいいが、それを持ってわためのライブを聞くのはしんどいし、家を持って帰ってもう一度駅前に来る、というのは正直手間だ。

……適当に何処かで時間を潰すしかないだろう。此処からだつたら、以前スバルと行った喫茶店が近いだろうか。

そこで暫く時間を潰して、それから改めて駅前に戻ってくればいい。一応立ち去る前に改めて周囲を見渡す。わためが居ない事を確認し、歩き出す。

駅前の広場を抜け、裏路地に入りふらふら。

一度来た事があるとはいえ、あの時はスバルに連れられていたから、場所がちよつと怪しい。裏路地は入り組んでいるから尚更だ。

まあ、時間はあるしのんびり探せばいいかと思う俺の視界に、あまりに場違いなピンクのこもこもが目に入った。

ウェーブの掛かったピンク髪に、きらりと輝く王冠。あどけなさの残す顔はやや歪

み、組まれた腕も相まって困った様子だ。

そんな彼女を包むのは不思議の国からでも迷い出てきたようなフリルのついたピンクのドレス一式。

全身から、非日常感が漂っている。

「うーん、困ったのらー」

腕を組み、顔をしかめ、首を傾げる様子は、困っているように見えなく無いが、その割に焦りのようなものは感じず、どことなく業とらしい。

経験から言つて、ああいう態度の相手に関わつても間違ひなく碌な事にならない。フブキ先輩とか天音先輩とかが似たような事をして居る時は、大体自分のやりたくない事を俺に押し付けてくる時とか、何かしらに俺を巻き込もうという時だ。

今回はほぼ間違ひなく後者だろう。声を掛けたが最後、また色々やらされる挙句、フブキ先輩やミオ先輩に謝つたり、シオンに小言を貰う事になるかもしれない。

——やだなあ。

この後はわためとの約束もあるし、巻き込まれるのは正直ごめんだ。わためと怪しい少女なら、当然わための方が優先順位は高い。

——よし、見なかった事にしよう。

決心し、回れ右。

全力で立ち去ろうとする俺の視界に、フレアさんの姿が映る。

その表情は少女よりもよほど焦燥感に満ちていて。その手に弓矢を携え、今にも射貫かんと弦が引かれている状態。

鏃は俺の方を向いていた。

holoXは多分この人に電話を掛けるべきだと思う。

『——もし。もし？ 人の子よ、聞こえていますか？』

突然脳内に声が響く。フレアさんの物だった。いつかの様に、俺へ念話を飛ばしてきてたらしい。

今、まさに俺のことを処そうとしているとは思えないほど、芝居がかった穏やかな声に最初別人を疑ったが、残念ながら聞き間違いではないらしい。

俺が胡乱な顔をしたのが見えたのだろう。伝わっていると判断したらしく、言葉が続く。

『——人の子よ。今すぐ振り返って、そこにいる少女に話しかけ、助けて差し上げるのです。そうすれば、貴方に幸運が舞い込む事でしょう』

そんな物いらなから、この場を立ち去らせてほしいものである。

ただ左右に体を揺らすと、それに合わせてフレアさんの狙いも動く。逃がす気は無い様だ。

どうにかしてくれないかなと、フレアさんの傍にいるきんつばやノエルさんに視線を向ける。

「……」

無言のまま、そつと逸らされた。泣きそう。

『——人の子よ。耳を澄ませるのです。そうすれば、貴方に助けを求める声が届くことでしょう』

「えーん。えーん。困ったのらー」

フレアさんの言葉の直後、狙ったかのように棒読みの泣き言が後ろから聞こえてきた。

振り返らずとも、？泣きと分かる。

それに、耳を澄まさずとも、助けを求める声は脳内に直接響いていた。

『——人の子よ。本当にお願いだから。数時間相手してくれるだけでいいからさ。ね？わための演奏までちよつと町の案内をして、後はわための演奏一緒に聞いてくれるだけでいいからさ。お願い！』

必死だ。ノエルさんも両手を合わせて拝み倒してくる。

誰なんだあの子。

「……」

溢しそうになった溜息を飲み込み、振り返る。

嘘泣きはもう終えて、後ろに手を組んだ少女が、ニコニコ顔で俺を見ていた。

せめて困っているという体裁は維持していて欲しかった。

恐る恐る、近づく。

「別に取って食べはしないのらよ」

「取って食べる奴は皆そう言うものだと思っていきます」

「ルーナ、怪獣か何かだと思われている?」

怪獣の方が、絶対に近づかないって決め打ち出来る分、まだマシかもしれない。

流石にフレアさんやノエルさんの関係者だろうから、警戒しすぎな気もするのだが

……。

「……? なんなのら?」

「いや」

なんだろう、この感覚。権威、とでもいえばいいのか。

何となく、逆らえないと感じるこの感覚は、そらさんと直接会った時のそれと近く思

えた。

人間としてのレベルが違うというか、なんというか。

「それで、えっと、何をお困りなのでしょうか?」

思わず敬語になった俺に、慣れているのか、少女は特に気にした様子も無く返してくる。

「お散歩したいのなら」

「散歩？」

それは……すればいいのでは。

「でも、疲れたから歩きたくないのなら」

「……」

成程。

『——人の子よ、人の子よ』

やかましい。

「じゃあ、えっと、歩けるようになるまで休みましようか。何か飲み物とか買ってきます

よ」

「肩車」

「……はい？」

「肩車してほしいのなら」

「……」

振り返る。目を逸らされる。

『——人の子よ……』

それはもういい。

視線を戻す。こちらに両手を伸ばす少女。

権威に負けず、ビシツつと一言、断ってやろうと息を吸い。

「どーぞ」

「わーい」

気が付けば背中を向けて膝をついていた。

頭に手が添えられ、両肩に何かが乗る感覚。

「いいのらよー」

「はーい」

少女の膝のあたりを抑えながら、俺は立ち上がった。

見た目相応に軽い。これなら当分肩車していても問題無さそうだ。

『くーん』

定位置の肩に足を乗せられてしまったタロが、俺の胸元にしがみついていた。

顔には困惑が浮かんでいる。多分、俺も似たような顔をしていると思う。

「進むのらー」

「はーい」

ペしペしと頭を叩かれ、俺は歩き出す。

まあ、10分もすれば、解放されるだろうと、俺はそんな風に考えていた。

夕方、駅前にて

「……何しているの？」

「ん？ あ。おはよう、スバル」

「あ、うん。おはよう……ってそんな時間でも無いし、そうじゃなくて」

ピンクのもこもこ改め、姫森ルーナさんとの邂逅から数時間。

わための演奏も始まるしと、駅前に移動してきた俺は、スバルと出会った。

チエツクのワンピースにベレー帽を身に着け、小さなポーチを持った余所行きの格好をしているスバル。

スカート自体は学校の制服で見ているが、以前俺と出かけた時はパンツルックだっただけに、少し新鮮さを覚える。

「……随分めかしこんでいるな」

「家族でご飯に行く途中なんだけど」

ちらりとスバルの視線が動くのが見え、俺もつられてそちらに視線を向ければ、恐らくは両親と思われる2人の姿があった、とりあえず会釈して、スバルへ視線を戻す。

スバルは当に俺へ視線を戻していて、前髪をちよいちよいと弄り、こちらを窺う素振

りを見せていた。

そんなスバルの様子を見て、自然と口が動く。

「似合っている。可愛い」

月並みな誉め言葉ではあったが、幸い満更でも無かつたらしく。スバルは顔を綻ばせながら。

「ありが——」

最後まで言葉にならず、スバルは途端に真顔になった。

はて、と首を傾げる俺の頭が掴まれ、ぐい、と元の位置に戻される。

「くすぐりたいから、首傾げちゃダメなのら」

「すみません」

「それから女の子を褒める時はもつと笑顔で。内面を褒めるといいのらよ」

「成程。勉強になります」

感心する俺の顔が、ぐにぐにと揉まれる。そんな事をされなくても、必要なら笑えるのだが。言っても無駄なので、暫しされるがままになる。

対面に立つスバルの顔は、すっかり怪訝な顔になっていた。

「……それで」

「はい」

「どういふ状況？」

「一言で説明するのは難しいんですけど」

首を傾げると、「だからくすぐったいのら」と怒られ、再び首の位置を戻される。そのまますっかりと固定されてしまい、首を傾げるどころか、動かす事すらままならなくなってしまった。

その様子に、スバルは眉間を揉む。

「……集中出来ないから、出来れば一度下ろしてくれない？」

「えーっと——」

「だめなのらよ」

先程まで首を動かしたらくすぐりたいと怒った癖に、俺の顔をしっかりと太ももで挟み、膝から下は俺の胸の前で組まれる。

耳がふさがれ少し音が聞きづらくなったり、タロが顔まで逃げてきて視界を遮ったが、存外問題無かった。

「こんな感じなんだ」

「高くて楽しいのらー」

鼻歌まで聞こえてきた。

「……親戚かなにか？」

「数時間前に知り合った」

「嘘だろ」

俺自身信じられないが、本当である。

「なんか強制力が凄くて。一般人の俺には断れなかった」

「よきにはからうのらー」

「いや、そんなわけ……そんな気がしてきた」

「だろ？」

不思議そうにスバルが首を傾げる。俺は相変わらず固定されているから首を動かせないのも、内心で首を傾げる。

「まあ、その内迎えが来る筈だから、大丈夫」

「む。なんかルーナを下ろしたがっているみたいなのらけど。ルーナを肩車出来るなんて、大変名誉な事なのらよ」

遺憾の意を示す様に、ぐにぐにと頬を引かれる。力が無いのか、鬱陶しいが全然痛みはない。

罰になっていない事に気が付いたのか、頬から手を離すと、姫森さんは俺の髪の毛をわしゃわしゃとかきむしり始めた。変わらず痛みは無いが、鬱陶しさは増した。

「辞めてください」

「なら、平身低頭して許しを乞うのらよ」

「そんな事をしたら、姫森さんは顔をぶつける事になりますよ」

「何でそいつを乗せたままやるんだよ」

呆れ顔のスバルの言葉に、目から鱗が落ちる気分であった。

俺の中で、姫森さんを下ろすという選択肢が無くなっていた事に、驚きを覚える。

「あ！ ねえ、移動して！」

「え？」

顔を上げれば、こちらを見下ろす姫森さんが見えた。姫森さんは、あっち、あっちとある方向を指さしている。

視線を姫森さんからそちらへ。駅前の広場において、わための歌が始まろうとしている。

「別に、わための歌なら此処でも聞こえ——ぐえ」

「はーやーくーすーるーのーらーよー」

発言を遮るように、太ももで首を絞められた。とんだ独裁である。

何度かタツプし、漸く許して貰えた俺は、漏れそうになった溜息を飲み込み、スバルへ片手を上げた。

「じゃあ、スバル。またな」

「お、おお」

今のくだりを見て、若干引いたらしいスバルが、おずおずと手を上げ返した。

まあ、俺もスバルの立場であれば、同じような反応をするだろうから、特に思う所は無く、大人しくその場を離れる。

人の視線を感じながら移動し、歌うための傍へ。既に囲んでいる人が居るから、邪魔にならないように少し離れた場所に立つ。

歌っているわためが、周囲へ声を届けるように、軽く体を動かした。

顔が俺の方を向き、目が合う。俺を見つけたからか、一瞬嬉しそうに目を輝かせ、俺の上にいる者に気が付き、スツツと視線が逸らされる。その間も、歌声に変化は無いから、大したものだ。

しかし、その表情の変化に観客の一部は気がついたようで、俺の方へ振り返る者もちらほら。

その中には、どうやら俺の事を知っている者もいるようで、最初はなんだこいつかと敵意混じりの反応を見せる者も居たが、ほぼ全員が何やっているんだこいつはという戸惑いの反応に変わる。

悪目立ちへの耐性はあるが、だからといって見られる事への不満が無い訳ではない。ちよつとムツツとする俺の頭上から、鼻歌が聞こえてくる。それに合わせ、バランス

が崩れそうになり、慌てて支える。

見ずとも何となく察した。多分、俺に乗る姫森さんが、曲に合わせてリズムを取っているのだろう。

「姫森さん。体を揺らさないで下さい」

「いやなのらー」

「落としてしまいそうなんです」

「そうしたら、不敬罪で逮捕なのらよ」

重すぎると思いながらも、相応に感じてしまふのは何故か。

姫森さんの身体は止まらず、右へ左へゆらゆら揺れているらしい。姫森さん自身軽いし、揺れると分かっているれば支えられるから、一先ずの問題は無いのだけど。

それでも、そろそろ疲れてきたし、フレアさんでもノエルさんでも、さっさと迎えに来てくれないかと。

そんな事を考えていると、服の裾を引かれた。

「——天音先輩？」

「よっ。お疲れ様」

「お疲れ様です」

片手をあげ、フランクに挨拶してくる天音先輩。流星に制服ではなく、黒いワンピース

スに白のジャケットを着た私服姿だった。

合わせているのか、頭の手裏剣も普段と違い青色である。制服以外を見るのは初めて、新鮮さを感じる。

同じ事を思ったのか、「制服以外って珍しいね」と天音先輩。

「でも、あんまり新鮮味は無いかな？ 制服と同じで黒いし」

「楽なので。天音先輩はお洒落ですね。なんか、私服はめっちゃダサイイメージで居ました」

「どういう事かな!!」

「以前学園主催のバザーで、ダサいって言葉で片付けられない、何とも言い難い服を見て、真剣に購入するか悩んでいらつしやったので」

「あれはいい物でしょうが!」

殆ど着られた様子が無いのにバザーへ出されていた辺りから、察するべきではなからうか。

売りに出していた生徒も、「本当にそれを買うんですか?」という顔をしていたし。

「それにしても珍しいですね。こっちのスーパーを使っているんですか?」

「ううん。普段は別のスーパーだよ。今日はこっちに来る用事があったから、ついでに買って行くこうかなって。まあ、君に会えたから、こっちで買い物した甲斐もあったかな

？」

「あつはっは」

「おかしい。から笑いされる事を言つたつもりは無いんだけどな」

間違えたらしい。「冗談を言うトーンだったから笑つたんだけど。

「それよりさ。その肩に乗せている子つて、親戚の子とか？」

天音先輩の視線が、姫森さんの方へと移つた。

「違います。知り合ひの知り合ひです」

「その関係性の子を、良く肩車出来るね」

「なんか逆らえなかつたもので」

「ふーん」

なんかスバルともこんなやり取りしたなど俺が思っていると、あの時と違い、「よきに

はからえ」という言葉は落ちてこず、代わりに頭を軽く叩かれ。

「下ろすのらよ」

そんな言葉が降つてきた。

「はい？」

「下ろしてー！」

「うわ!! 分かりましたから！」

姫森さんが駄々をこね、暴れ出した。何だ急にと思いながら、急ぎ屈み、姫森さんを地面へ下ろす。

下ろされた姫森さんは、服装を整えると、天音先輩へと向き直った。

緊張が見て取れる。初めて会った時のわざとらしさは無く、本気で緊張していることが窺えた。

「大丈夫ですか？ 姫森さん」

「へ、平気なのらよ」

本当だろうか。少し心配。

天音先輩を見ると、何やらにこにこしながら、姫森さんを見ている。余りに対照的な2人の様子に、仲裁した方がいいかと、口を挟もうとして。

「……あの」

それより早く、姫森さんが口を開いた。その言葉は、天音先輩に向けられている。

知り合い、なんだろうか。それにしても、天音先輩が俺へ、親戚の子なのかと尋ねた理由が良く分からない。

姫森さんの方が一方的に知っている、という形なのだろうか。それにしても、どうも緊張しすぎな気がするが。

「何？」

姫森さんの言葉に、天音先輩が答える。

「お、お友達の方について何ですけど」

「ん？ ああ、聞いているよ。探しているらしいね」

お友達……天音先輩のお友達と言われ、真つ先に浮かぶのはあの人だった。

そういえば、探していたつくと、先月の事を思い出す。

「安心してよ。こつちで楽しく過ごしているから、私達に帰るつもりは無いよ」

「そ、そうなのですね」

「うん、だから放っておいて、欲しいかな？」

「はいなのら」

こくこくと、姫森さんが首を縦に振る。良く分からないが、何やら密約が交わされたらしい。

よろしいと、満足そうに頷く天音先輩。それから、俺へ視線を向け、「もう一つあったや」とそう告げる。

「この子も舎弟だし信者だから、取り入ろうとか考えない方がいいよ。お友達位なら、文句も言われなと思うけどね」

「り、了解なのらー」

「……俺、そんな地雷みたいな存在なんです？」

「そうだよ?」

「そうっすか」

俺に触れたら爆発するぜって感じか。……解せない。

「あの」

声が掛けられる。振り返れば、フレアさんとノエルさん。こちらも少々、おどおどしている様が見受けられる。

「お迎えに上がりました」

「——ですって、姫森さん」

「う、うん。今日はありがとなのらよ」

「いえ。気になさらないで下さい」

フレアさんとノエルさんが困っていたから、一時的に引き取っただけだ。別に姫森さんの為という訳でもない。

「ありがとうね。助かったよ。お礼は今度、必ずするね」

「別にいいんですけど……じゃあ、機会があれば」

「うん。分かった。——それでは、失礼します」

フレアさんの最後の言葉は、俺ではなく天音先輩へ向けられたものだった。

隣にいるノエルさんも、天音先輩へ頭を下げ、二人は姫森さんを連れて去っていく。

その背を見送って、俺は天音先輩へ視線を戻した。

「お知り合いだっただんですか？」

「これでも有名天使だからね。顔は広いんだよ」

「芸能人、みたいな？」

「いきなり俗っぽくなつたね」

まあ、間違つてないけど、と天音先輩は笑いながら言いつつ、わための方へ視線を向けた。

釣られ、わための方へ視線を移す。こちらのやり取りには気が付いていなかった様子のわためは、今尚、熱心に歌唱を続けていた。

わための歌う曲を、俺は知らない。聞いたことの無い、独特な音程のそれは、わため曰く出身世界の物らしい。脱畜後、色々と旅をしている間に、覚えたのだそうだ。

「懐かしいな」

「そうなんですか？」

「私が居た辺りの民謡だからね」

「へえ。じゃあ、天音先輩もちい——幼少期に歌っていたんですか？」

「何で言い直したの？」

深い意味は無いので突っ込まないでいただきたい。

「暫く聞いていくなら、荷物を持ちますよ」

「ううん。今日はもう帰るよ」

「そうですか」

まあ、買い物途中だったのだから、仕方が無いか。

僅かな名残惜しさを覚える俺に、「そうだ」と天音先輩。

ポケットに手を入れ、何やら取り出す。

「これあげる」

「え？ これって」

受け取ったそれを見て、訝しむ俺。そんな俺に、天音先輩が笑って言う。

「ラッキーアイテムだから。常に身に着けておくと吉だよ」

「……これ、常に身に着けていたら、逆に問題なのでは」

「大丈夫大丈夫」

天音先輩がそう言うなら……いや、でもな。

困る俺の退路を塞ぐように、天音先輩は手を上げた。

「じゃあ、またね」

「はい。じゃあ、また」

「女の子、あんまり肩車するものじゃないよ」

「気を付けます」

ひらひらと手を振る天音先輩へ、手を振り返し。

同じく、その背を見送った俺は、わためへと視線を戻す。

今度教えて貰おうかと、そんな事を思いながら、改めてわための歌に耳を傾けた。

SNS

自室のベッドに寝転がりながら、大空スバルは唸っていた。

見上げる先にスマホ。そこに映っているのは、ゲーム画面。

フォークに刺さったソーセージ同士をぶつけあい、先に相手を砕くネット対戦可能なソーシャルゲームである。

そのゲームに、スバルは少し前から嵌っていた。

始まりこそ何となく題材が面白かったから程度だが、操作自体はタップするだけのシンプルな物なのに対し、ソーセージの育成やガチャ要素、相手との駆け引き等、奥深さもあるゲームに気づけば熱中し、空き時間などはそれに講じていたのだが。

暫く遊んでいると、誰かと一緒に遊びたいという欲が出て来る。勿論、ネット対戦可能だから、画面の向こうの誰かと遊ぶことは出来るのだが、出来れば近くにいる知人友人とワイワイやりたい。そう思い、スバルは何人かの友人にお勧めしてみた。しかし、ソシャゲ自体を嗜んでいない人が多く、良い返事がもらえない。

次に、入部している総合格闘技部やe—sports部の面々が思い浮かんだ。彼らなら多分二つ返事でゲームをしてくれるとは思ったが、マネージャーという立場上、彼ら

の練習を妨げるような事はしたくない。

他に誰か。ソシヤゲでなくともゲームをしていて、それでいて暇そうな人。

「……」

スマホを操作し、メッセンジャーアプリから名前を呼び出す。

暇人に一人、心当たりがあつた。基本的に忙しそうなイメーჯは無く、またゲームを嗜んでいるから誘えばやってくれそうだ。

ただ、学園祭がもう目と鼻の先。部活に所属しているし、生徒会の手伝いもしている彼は、もしかしたら忙しく、迷惑をかけるかもしれない。

——P r r

「うわっ——たあ^{!!}」

悩んでいると着信音が響いた。驚いたスバルは手を滑らせ、落下したスマホはスバルの顔を打った。額を抑え、悶える。

『——じよぶかー？ おーい』

スマホから、微かに声が聞こえてくる。落とした拍子に、通話がつながったようだ。

スバルは額を抑えたまま周囲を探り、自分のスマホを見つけた。

「もしもし」

『あ、出た。大丈夫？』

「……だいじょーぶ」

『そう?』

声の主は、今まさに悩みの種となっていた男だった。あつけらかんとしたその声色に、スバルはそこはかかない怒りを覚えながらも、それを飲み込む。

「それより、どうかした?」

『えつと……これ、友達の話なだけだよ』

「その前振りを使っている人、初めて見たわ」

ほぼ確実に自分の事のやつである。

そして、こういう前振りの時は恋愛相談系の悩み事が多い気がする。

もしかして恋バナだろうか、ちよつとだけワクワクしながら、スバルは話を促した。

『その友達の家、今Sって人が住んでいるんだけど』

「住んでいるって……親戚とか?」

『ホームステイみたいなの』

「へえ」

異文化交流にスバルが羨ましさを覚える中、相談者の言葉が続く。

『それで今日、急にSちゃんっていう最近再会した幼馴染が遊びに来て』

「……え? Sって2人いる?」

『うん。SとSちゃん』

分かりづらいなと思いながら、もしかして、とスバル。

「その2人が急に仲良くなっちゃって、寂しいとか?」

『いや。その2人が今、めっちゃメンチを切りあっているんだって。表情がもう、極道とマフィアみたい』

「修羅場じゃねえか!」

想像と真逆の事態に理解が追いつかないスバルを余所に、『どうしよう』と、内容とは裏腹に落ち着いた声が電話越しに響く。

『俺の為に争わないでとか言ってみる? あ、間違えた。言わせてみる?』

「余裕か! 一触即発でしょ!!」

『まだ慌てるような時間じゃないから。手が出てないし』

「そこまで行きかねないなら、もう少し焦れ!」

どう考えても恋バナという感じではない。

どうしようどうしようとしてスバルが慌てる中、電話の向こうからは扉を閉める音と、こぼこぼという音が聞こえてくる。

「……何しているの?」

『キッチンに隠れつつ、喉が渴いたから水を飲んでいる——うまい』

「いや、くつろぎ過ぎだな」

『手は出ないでしょ。もし出たとしたら、それは多分、俺に対してだし』

「……」

——なら、何故こいつは落ち着いているのだろうか。

最早友達の話という前提を気にする様子も無い相談者が、水を飲んでいるらしく喉がなる音が聞こえる。

疑問は尽きなかったが、本人がこの状態なのに、自分が慌てるのもおかしい話。

肩透かしを受けながら、そういう事ならと、スバルは話を変える事に決めた。

「ところで『——あ』」

「え？」

そんな声が、電話口越しに聞こえてきた。

「どうかし——」

『いや待て。落ち着いて考えよう？　なんか知らんけど、家主飯の俺を差し置いて縄張り争いを始めたのはお前らだろ？　その間、暇を持て余した俺が、誰と電話していたって怒られる筋合い無いんですけど？　——買い物？　いや、流石にいがみ合っている2人を家に置いて、外出られないだろ。常識的に——待って！　スマホ持って行かないで

！　口答えしてごめ——』

ぶつりと、通話が途切れた。まもなく、メッセージが届く。

『ごめん。電話切れちゃって。こっちは大丈夫だから、気にしないで』

「いや無理だろ！」

スバルは慌てて、ベッドから飛び起きた。

折りたたまれたスマホになってしまふ事態を何とか回避し、俺はスマホに不調が出ていないか確認してから、ポケットへと仕舞う。

スバルにはどこまで聞こえていたのだろうか。画面を見た時は通話終了状態だったし、一応気にするなど連絡はしたが。

まあ、後で電話しようと思いつながら、俺はSとSちゃんこと、シオンとすいちゃんに視線を向けた。

俺がスバルと話している間に、縄張りを共有することに決めたようで、今はシオンがすいちゃんに魔法の実演をしていた——あれ？

「え？」

「ん？ 何？」

「シオン、何で普通にすいちゃんに魔法を見せているの？ 消さなきゃいけないの？」

「何その物騒なワード」

「今更でしょ？ わためにも会って直ぐに見せているし」

「……それはまあ、そうなんだけど」

わために関しては、生活に必要だったから特例みたいな所はあるし、少なくとも俺やミオ先輩に魔法バレした時は、とりあえず消さなきやから入ったのに、すいちゃんには直ぐに見せるというのは、何と言うか――。

モヤモヤを抱えながら、俺はすいちゃんを見る。

「……向けられたことが無い感情を向けられるの楽しい」

「歪んでない？」

すいちゃんが俺を見て、にやにやと笑っているのが見えて、つい手が出た。

「いふあくない」

頬を引くのだが、相手は昔馴染みであり推し。双方共に痛がるのを見たくない感情が勝り、全然力が入らない。顔が歪んでいるのは見ている分には面白いから、暫し変顔をさせることで復讐とする。

「そんな気になるなら、とりあえず一回消しておいてもいいわよ？」

シオンがそう言った。視線を移せばすいちゃんと同じく、にやにやと笑っている。

それを見て、俺はすいちゃんから手を放し、シオンの頬を摘まんだ。

「いふあいいいふあいいいふあいいい！」

そのまま思い切り引つ張る。ぱちぱちと、シオンに手を叩かれ、最終的にはテレポトで逃げられた。

ダイニングデスク脇に逃げ、頬を抑えながらシオンが睨んでくる。ぱちぱちと、恐らくは転送に対する疎らな拍手が、横から聞こえた。

「魔法使い差別反対！ 魔法使いにも優しく！」

「安心しろ。こんな事をするの、お前位だぞ」

「紫咲シオン差別反対！」

聞き流しながら、勝手にキッチンに入っているすいちちゃんへ声を掛けた。

すいちちゃんは、さっきまで俺が使っていたコップに、出したままだったミネラルウォーターを注ぎ、ひとしきり飲んでから。

「んっ？」

言葉を返してきた。

「いや、マイペースか」

「次からはリングジュースを備蓄しておいてよね」

この銘柄ね、と、スマホの画面を向けられた。

俺は自分のスマホに、映って居たリングジュースの商品名とパッケージを控え――。

「——いやいや。おかしいでしょ。自分で買ってきてよ。すいちゃんが買ってきた物を取っておくのならいいけど、何で備蓄しておかなきゃいけないのさ」

「推しに貢ぐ的な。ライブTシャツとか買うでしょ?」

「俺は音源以外を買わない事になっているから、買いません」

不定期バイトくらいしかしていないのに、漫画とかも買っている俺では、それが限界である。

「……チツ」

「普通に舌打ちするじゃん」

別にいいけど。

「それで、すいちゃん。聞きたいんだけどさ」

「何?」

「今日って、俺がすいちゃんの家に行く予定じゃなかった? それに、何で俺の家を知っているの?」

今朝、家を出ようとした俺の前に、すいちゃんは現れた。

片手をあげて挨拶してきたすいちゃんへ、反射的に同じように挨拶を返した俺。そんな俺の脇を抜け、すいちゃんは勝手に俺の家へと入り……リビングにてネグリジエ姿のシオンと鉢合わせ、気づけば縄張り争いを始めていたのだ。

うーん……思い出しても縄張り争いの下りが良く分からない。何で家主飯を差し置いて、縄張り権を主張出来るのだろう。

「私がこつちに来たのは、急に姉街の友達が遊びに来ちゃったから、逃げてきただけ」
「成程、納得。それで、俺の家を知っていたのは？」

「発信機」

「嘘?!」

「うそ」

悪戯に笑うすいちゃんが、口元へ人差し指を当てた。分かりやすい、内緒のポーズ。教えるつもりは無いのは、真実か、発信機の場合か。是非前者で合つて貰いたい。

念の為、後で発信機は探そうと決めつつ、俺はすいちゃんへの追及を諦める。

丁度その折、部屋の壁時計が鳴った。正午を知らせる音である。

「お昼どうする?」

「ごちになります!」

「別にいいけど。何が食べたい?」

尋ねる俺に、はてと首を傾げるすいちゃん。

「料理できるの?」

「人並に食べられるものを出せる程度だけど。それで、何がいい?」

「じゃあ、辛いやつ」

「オムライス」

すいちゃんとしオンのリクエストを聞き、頭の中で混ぜ。

思いついた。

「オムカレーにするわ」

3 S

「出来たー?」

「出来たよ」

気持ちおしやれに盛り付けたオムカレーとサラダ、水の入ったグラス、スプーンなどの食器類。

それらが、俺の言葉を受けたシオンによって浮かされ、飛んでいく。「おー」と、すいちゃんの感嘆の声を聴きながら、俺はダイニングへ入った。

思い思いの席に座る2人と俺がいつも座る席へ、飛んでいたものが、ゆつくりと降り立った。俺もいつもの席へと座る。

「いただきます」

「召し上がれ」

シオンが口火を切った。スプーンを手に取り、早速オムカレーへと手を付けた。

「いただきます」と俺も続いても、オムカレーをにらんだまま、動きを見せないすいちゃんが気になってしまう。

作り手としては味の感想も気になってしまうので、出来れば早めに食べて、教えて貰

いたく。

急かす様になってしまおうかなと思いつながら、俺はすいちゃんへ声をかける。

「どうしたの?」

「思ったよりおしやれでちゃんとしたご飯が出て来て困惑している」

「そりゃあ、俺だけが食べるわけじゃないし」

流石にちゃんとしないと申し訳ない。

「正直構成要素だけオムカレーとか出てくると思っていた。ケチャップライスの上に炒り卵を乗せてレトルトカレーをかけただけみたいなの」

「あ、ケチャップライスの方が良かった? バターライスにしちゃった」

流石にカレーとケチャップライスは合わないかなと思いつ、バターライスにしたのだけども。失敗だっただろうか。

心配する俺に、「大丈夫」とすいちゃん。

「なんかごめんね」

「気にしないで。いい意味で裏切れたのなら良かった」

「アンタ、ちゃんとオムライス作れるなら、普段からもつと作りなさいよ」

ふと、シオンから野次が飛んだ。

そういうわけても、和食のバリエーションが多いから仕方がない。

何より。

「半熟、作る、大変」

少し盛って成功率7割。今回も、すいちゃんとしオンの分はちゃんと出来たが、俺の分は固焼き卵板だ。それなら、最初から諦めて、完全に炒ってしまいたい。

「駄目」

一蹴された。

ぐぬぬと俺が歯噛みする中、くすくすと笑ったすいちゃんが、「いただきます」と挨拶し、スプーンでもって一口。

「……もう少し辛くてもいいけど」

「それだとシオンが食べられないから」

「子供舌みたいに言わないでよ」

パクパクと食べ進めながらも不満を言うシオンを余所に、今度はすいちゃんはぐぬぬとなっていた。

不味いわけではない様で、俺は安堵しながら自分の分へと口をつける。うん、普通。

特別美味しい訳でもないのに、何処をどうしたら良いのか、説明に困るくらいには整っている味。まあ、俺の分だけで言うなら、卵が固くて若干舌触りが良くない。

——半熟卵の成功率、上げたいなあ。

ただそれも、その練習の為だけに卵を使えないから、おいおいでいい。「カレーのお替りはあるから、食べたければ——」

ぴんぽーん

「ん？」

俺の言葉を遮るように、インターホンの音が響く。

席を立ち、モニターの前へ。見れば、意外な相手が見えた。

俺はモニター下部の、マイクボタンを押す。

「はーい」

『あー！ ちょっと、大丈夫!!』

「とりあえず落ち着け」

慌てているスバルに声を掛ける。声が大きい。

どうした、と聞くのは流石に野暮か。察しはつく。

「心配かけて悪かったな」

『……いいよ。とりあえず、本当に大丈夫そうだし』

「あがつてく？」

『じゃあ、少しだけ』

「今、鍵開ける」

マイクボタンから手を放し、振り返る。

こちらを見る、シオンとすいちゃん。

「……………どうしょ」

勿論どうしようもなく、数分後。

「……………」

「……………」

「……………」

我閉せずに食事続ける者がいれば、睨みを利かせる者、それから逃れる為に俺を盾にする者と、三者三様の動きを見せる3人がいるのは、我が家のリビングであった。

シオン。すいちゃん。スバル。そういえば全員イニシャルSだと現実逃避気味に考えながら食べ進める俺は、俺を盾にすいちゃんの圧から逃れようとしているスバルの耳打ちを聞いていた。

「どういう状況!!」

「俺が知りたい」

「何ですいちゃんが居るの!」

「遊びに来ているからかな」

「黙々とご飯食べている子は!!」

「紫咲シオン。ホームステイしている子」

「……え、何？ すいちゃんとあのシオンちゃんっていう子が、この家の縄張り争いしていたの？」

「うん」

察しが良くて助かる。

「ついでに俺のスマホを奪って折ろうとしていたのもあの2人」

何を言ってるんだこいつという目を向けてくるスバル。昨日会った際にも向けられたから、実に数時間ぶり。

そんな目を向けられても、事実である以上は仕方がないのだが。

寧ろ俺の方が、聞きたい位。なんでこんなバチバチになるんだ。

「……あんた」

すいちゃんが口を開く。

内緒話をしていて俺とスバルの視線が、すいちゃんへ向く。

スプーンは置かれ、手を組んでいた。

「女の子相手なら、誰にでも色目使うようになったのね」

「人聞きが悪い」

「昔は、すいちゃん様すいちゃん様って言って私の後を付いて来ていたのに」

「少なくとも様を付けていた記憶は無いが。それより冷めるぞ」
「……」

すいちゃんはスプーンを再度手に取り、食べ始める。

「後を付いていた記憶はあるんだ」

「まあ、一緒に遊んでいた記憶はあるけど。流星に昔馴染だし」

スバルの言葉に答える。

「ふーん」と、スバル。暫し間を置き、俺の肩越しにすいちゃんへ声をかけた。

「すいちゃん」

「なに？」

「こいつの子どもの頃って、どんな感じだったんすか？」

俺の後ろから出て、俺の隣の椅子に、スバルが腰かけた。

こめかみをぐいぐいと押される。叩き落すが、また押された。なんか扱いが雑ではないだろうか。

スバルの言葉に、すいちゃんはスプーンで一口掬い、口に入れる。

悩んだ様子で、暫し咀嚼。飲み込む。

「子どもの頃か……いうて、私も保育園の時代しか知らないからなあ」

「あれ？ そうなんすか？」

「すいちゃんとの付き合いは保育園を卒園する所までだよ。小学校入るタイミングで初めての引越しだったから」

正直な話、一緒に小学校に行く物だと思っていたから、中々堪えた記憶がある。

俺の言葉に、うーん、と唸ったスバル。

「その割に、随分と親しいね」

「そうか？ 別に普通だと思いが」

「そんな事無いよ。小中と続けて接点があつたなら兎も角、幼稚園の頃だけ親しかつた人なんて殆ど覚えていないし。シオンちゃんは？」

「……え？ あー」

振られると思っていなかったのだろう。

シオンは僅かに戸惑いを見せて。それから悩む素振り。

昔の事を思い出そうとしているのか、それとも話す内容を纏めているのか。

少しの時間が経った頃。

「私、昔から好きな事しかしてこなかったから、特定の誰かと長く過ごした事、無いかな」

「……いめん」

「別に。それが普通だったし」

律儀に謝るスバルに、シオンが塩対応を見せる。シオンだけに。

俺としては、この状況で会話に参加しないで本を読んでいる辺り、だろうなという感想の方が強く、すいちゃんに至っては笑いを堪えている。バレると消されかねないので、是非そのまま耐えて貰うとして。

何とも言い難い空気に包まれたダイニング。恐らく唯一気まずさを抱えているであろうスバルは、何とかこの空気を打開しようと思ったようで、「それで」と話を続けることにしたようだ。

「何でそんなに親しげなの？」

「何でって言われてもなあ」

なんでなんだろう。

こういうとすいちゃんに怒られそうだが、すいちゃんとは距離を置くつもりでいた。なんとなく、今を時めくアイドルである。可能性は低くても、迷惑を掛けたくは無かった。

だから、再会した夜、連絡先を聞かれても、交換する事はしなかったし、なるべくマシオン方面へ近づくこともしなかった。

必要なら縁切り。そこまではいかずとも、きつちりと一線は引くつもりで居たのに。

「すいちゃん、なんで？」

「んー……アンタ、ホロ学の劣等生。友達0人の大惨事。わたし、ホロ学の転校生。私の

存在がマジ大事」

「無駄に韻踏みながら俺の事を罵倒しつつ重大情報流すの辞めろ」

「ノリ悪いー」

ブー、と不機嫌そうに、すいちゃんが唇を尖らせた。

摘まみ上げてやろうかと少し思っても、流石に辞めておく。

「一般素人にいきなりラップ出来る訳無いだろうが。寧ろなんで、すいちゃんが出るんだよ」

「考えといた」

「スバル。すいちゃんって昔からこうだから、俺以外に友達居ないから必死なんだ」

「残念でした。アンタと違って普通に居たから。アンタだって、私と先生以外に声掛けてくる相手居なかったでしょ」

「は？ 居たが？」

「あれは絡まれてただけでしょうが」

「あー……二人とも、友達居なかったんすね」

「違いますけど!!」

過剰に反応したのはすいちゃんだった。俺は慣れっこなのでスルー。

騙したなと俺を睨みつけてくるのを、受け流す。

「とっろで」

受け流した俺に対し、すいちゃんがさらに突っ込もうとするも、それより早く、シオンが割り込む。

「結局、こいつの子ども頃ってどうだったの？」

「……別に、普通だったと思うけど」

シオンの言葉に、すいちゃんが答えた。

コップを手に取り、お茶を一口含み、唇とのどを潤し、喋る準備を済ませる。

「さっきも言ったけど、マジでこいつ、私と先生以外に声掛けてくる相手居なかったから」

だからそんなことは一切無い。

仮にそうなったのだとしたら、多分すいちゃんと遊ぶようになったからだと、果たして理解しているだろうか。

すいちゃんは、昔を思い出しながら、言葉が続ける。

「マイペースっていうの？ 周りに合わせる事をしなかったし、かといって自分が中心になって皆を引っ張るみたいな感じでも無かったから、普通に浮いていたわね」

「あー……」

すいちゃんの言葉を受け、スバルの視線が俺へと向いた。

「なんか、分かる気がする」

「失礼な奴だな」

去年の俺が腫れ物だった事については否定しないが、今はそんな事無いはずだ。

「本当ね」

「他人事みみたいな顔するなシオン。お前もこつち側だ」

フフンと、嘲りを浮かべるシオンへは、現実を叩きつける。

「ところで、そんな感じだったのに、良く仲良くなつたね？」

「……あー」

感心した様子のスバル。シオンも気になったのか、食って掛かって来るのを辞めた。

俺は、スバルの言葉に何と答えるか暫し模索し、丁度いい言葉を思いつき、答えた。

「丈夫だったからな」

「はい？」

俺の言葉に、訳が分からぬと、スバルとシオンと——すいちやんが首を傾げた。

「お前が首を傾げるのはおかしいだろ！」

「てへっ」

カバー保育園のやべーやつ

「すいちゃん、そろそろ帰らなくて平気？」

「え？　もうそんな時間？」

パズルゲーの実力を遺憾無く発揮し、俺とスバルとシオンをぼこぼこにしているすいちゃんが、ゲーム中であるにも関わらず、時計を見上げた。

時刻は夕方の6時。門限としては、丁度いい時間である。時間を確認し、「あー」と声を漏らしたすいちゃんが、ゲーム画面へ視線を戻す。視線を逸らしている隙にと、攻撃していた俺達へ瞬く間にカウンターを決めて沈めると、伸びをしながら立ち上がった。

「よし、帰る。付き合え」

「はいはい」

最初からそのつもりだった。

日も短くなってきて、この時間は既に薄暗い。流星にその中を、1人で帰らせるのは気が引ける。

そしてそれは、もう1人にも言える訳で。

「スバルも送るよ」

「あー、私はいいよ。自転車で来たから。持ってなかったよね？」
「……そうだね」

「すいちゃんの事を送ってあげて。スバルは超特急で帰るツス」
にこりと笑うスバルに、申し訳なさを覚える。

「そうか。なんか悪いな」

「いいって。急に来たのは私なんだし」

「その原因を作ったのは俺だし」

「サイテー」

「他人事みたいに言うな」

元々、すいちゃんとシオンが切っ掛けのはずなのに、すいちゃんは持ち前の面の皮を見せる。

スバルは、俺とすいちゃんのやり取りに困ったように笑って。

「兎に角気にしないで。門限もギリギリだから、自転車を押して帰ると間に合わないし」
「……分かった」

頷く俺に、スバルが頷き返す。

「因みに門限って何時なんだ？」

「6時半！」

そこからは慌ただしく、スバルは急ぎ身支度を整えると、玄関へ向かった。

その背を追い、玄関へ。靴を履くスバルの脇を抜け、玄関の扉を開ける。

「大丈夫か？」

「へーき、へーき！ 急げば10分位だから」

「それにしたって暗くなってきたし。事故とか気をつけるよ」

「了解っス！」

靴を履き終えたスバルが、玄関を抜けた。そのまま、脇に止めてあつた自転車の下へ、腰を下ろす。

きっちり止められていた2つのロックを外すと、スバルは自転車を押して道路へ出た。

サドルへ跨りライトを点けると、俺の方へと手を振ってきて。だから俺も、同じように振り返した。

「じゃあ、また明日ね」

「ああ。またな」

短い挨拶を終えると、スバルは猛然とペダルを漕ぎだし、瞬く間に曲がり角へと消えていった。

速いなあと感心しながら、視線を玄関へ。

そこでは、帰り支度を整えたらしいすいちゃんが、靴を履き終えたままの、腰を下ろした姿勢で、俺の方を見ていた。

何かあったのだろうかと思ひ、近づくと、すいちゃんが手を差し出して来た。

余りになれたその所作に、俺は思わず苦笑いを浮かべた。そんな俺に、すいちゃんがちよつとムツつとした表情を浮かべる。

「なんだお前」

「ごめんて。様になつて思つただけだよ」

「私の事をエスコートなんて、早々出来ないんだから、感謝してよね」

「される側の態度じゃないんだよなあ」

「ん」

「はいはい」

上げられた手を差し出し、催促してくるすいちゃん。そんなすいちゃんの手を取り、俺は引き起こす。

「じゃあ、シオン。行って来る」

「はい」

リビングに通じる扉から、ひらひらと揺れる手が見えた。

「じゃあ、行くうか、すいちゃん」

「それはそれでいいけど」

そう言ったすいちゃん、手を持ち上げる。握られたままの、俺とすいちゃんの手が、視界へ入った。

「あの頃みたいに、手、繋いでいくの？」

「離し忘れたただだよ。それに、あの頃のすいちゃんは、繋ぐより掴むが正しいでしょ」
「記憶に無いわね」

覚えている奴の反応である。笑いながら、「それで」とすいちゃんへ言葉を返す。

「今日は俺の手を掴んでいく？」

「……生意気」

ぺいと、照れ隠しの様に、すいちゃんは強めに俺の手を払う。

少し意外な反応に俺が驚いていると、すいちゃんから手提げのポーチを押し付けられる。

「無駄にでかくなつたんだから、荷物くらい持ちなさい」

「背が伸びたのはすいちゃんだって、同じじゃない。それに、無駄についていう程、大きくなってないでしょ。何なら、もう少し欲しい位だけ」

「それは、私の首が疲れるからダメ」

「えー」

何故俺の身長をすいちゃんが決めるのか。

ふん、と顔をそむけたすいちゃんが、歩き出す。少し苦笑を漏らし、俺はすいちゃんの後を追ひ、隣へ並んだ。

保育園の一角には、使われていない小屋があつた。

大きな窓のある其処は、晴れの日はぼかぼかと日当たりが良く。曇りの日は程良く薄暗く。雨の日はしとしとという雨音が響く。少年にとつて心地良い場所だつた。

そこで微睡みながら、絵本を読んで。やがてぼつくりと、電池の切れるように、眠りに落ちる。それが少年の日課であつた。

誰かと共に居るでも無く、其処に居つく少年。そんな彼が悪目立ちしない筈も無く。彼に目をつける者は居た。

この日も、ぼかぼかとした陽気の中、ふわふわとした頭で絵本を読んでいると、その絵本が取り上げられる。

何も無くなつた手を少年は暫し見下ろし、それから顔を上げる。少年の視界に、意地悪く笑ういじめっ子と、その取り巻きである2人が収まつた。

「何やってんだよ、お前。この時間は外で遊ばないといけないんだぞ」

「そーだそーだ！」

寝落ち寸前の頭では、何を言いたいのか良く分からなかった。一先ず少年は、それらの言葉を無視する事に決め、傍らに置いてあつた別の絵本を手に取つた。

読み始めようとするが、それより早く、取り上げられる。再び、空っぽになつた手を見る。

持つてきた絵本は2冊しかないから、すでに読み物は無い。それなら、まあいいやと、少年はその場に横になつた。目を閉じ、そのままスヤスヤと、夢の中へ意識を移す。

「あー、おい！ お前！」

「またかよ！ 起きろよ！」

「起きろー！」

眠りに落ちる少年へ、語気を強くしたいじめっ子達の声が降り注ぐ。

だが、少年は目を覚まささない。規則正しい寝息が、いじめっ子達の耳朵を叩く。

「このー！」

焦れたいじめっ子が、足を上げた。思い切り、踏みつけてやらんと、その足が振り下ろされる。

眠っている少年は気づかない。足が迫る。

あわやというタイミングで、いじめっ子の横顔を目掛け、小さなシャベルが思い切り振られた。

そのまま振り抜かれ、片足を上げていたいじめっ子は、手下の1人を巻き込み、そのまま倒れる。

唯一巻き込まれなかった取り巻きが振り返り、下手人の姿を見とめ、顔を歪める。

「ほしまちー！」

「は？」

悪びれる様子無く、睨み返すすいせい。そんな中、倒された2人も立ち上がり、すいせいを睨む。

だが、人数不利をもつとせず、強気な態度を崩さない。

一触即発の空気の中。すいせいが視線を少年の方を見る。

「おーい、起きろー」

すいせいが声をかける。すると、もぞもぞと、眠っていたはずの少年が、体を起こした。

暫しぼんやりと周囲を見渡し、いじめっ子とすいせいの姿を見ると、面倒くさそうな顔をして、再びゆっくりと横になった。

「寝るなー！」

「……すいちゃ、眠い」

「後で寝なさい！ ほら、行くわよー！」

「今、寝たい」

「……あ、？」

どすの効いたすいせいの声色に、びっくりといじめっ子達の肩が震わせる中、数秒と経たず、先程までと同じ規則正しい寝息が、聞こえてきた。

「すげえ」

いじめっ子が、驚きと呆れの混ざった声を上げる。そんないじめっ子の脇を、すいせいが抜けた。

少年の脇へ屈むと、その顔を叩く。

「起きろー！ さっさと行くわよー！」

数度顔を叩かれて、少年が幾許の反応を見せた。ぼんやりとした目をすいせいへ向け、何だとはかりに再度目を閉じ、寝返りを打つ。

その姿に、すいせいはゆっくりと立ち上がった。がっしりと、少年の足首を掴むと、いじめっ子達の方を振り返る。

「どきなさい」

改めて、今度ははっきりと向けられた声に、いじめっ子達が道を開けた。

すいせいが歩き出すと、寝たままの少年は、特に抵抗は見せず、そのままずりずりと引きずられる。

自分達より、余程の事をしているじゃないかと、いじめっ子達がジト目を向ける中、引きずられていた少年の顎が、扉のへりに引っかかる。

微かな抵抗に、一瞬動きを止めたすいせい、振り返る。少年を見て状況を察し、そのまま力を込めて引っ張た。

扉のへりで、少年の頭が跳ね上がる。数秒の滞空。落下。

ゴンツつと鈍い音が響く。

びくりと、いじめっ子達だけでなく、その音を聞いた者達の肩が跳ねた。

唯一何も無かったのは、引っ張っていたすいせいと、引っ張られている少年。

流石に痛かったらしく、少年が顔を上げた。それに気づくことなく、すいせいはずりずりと、そのまま少年を持っていく。

引きずられながら、きよろきよろと辺りを見る。それで状況を察したらしく、ふわりと欠伸を漏らし、ぱたりと首を倒した。

運搬は止まらず、すいせいはそのまま少年を運んでいく。向かっている先は、いつもの建物の裏手の様だった。

やがて、すいせいと少年が、建物の影へと消えていく。

それを見て、いじめっ子達は自然と揃い、溜息を漏らした。

「いっえーよ、ほしまち」

「いや、やばさで言ったら、あっちも相当だよ。なんで寝てられるのさ」
「アイツに勝てないと、ほしまちには勝てないよなあ」

無理じゃないかなと思いつつも、「そうだね」と同意する。

「……あの2人、いつもあそこに行くけど、何やっているんだろうね？」

「……」

その言葉に、いじめっ子達は顔を見合わせる。

三人一様に頷き、三人はすいせいと少年の消えた方を目指す。

押し合いへし合い、抜け足差し足忍び足。出来る限りこそこそと、目的地を目指す三人。

「早く歩けよ」

「ちよつ、押さないでよー！」

「静かに！ バレちゃうからー！」

やがて目的地に着いた三人は、こっそりと、その奥を覗き込み。

般若のような表情のすいせいと、目が合う。

「……なに？」

「「ギャー、出たー!!」」

「ハア!!」

すいせいが捕まえるより早く、我先にと、いじめっ子達が逃げ出した。

追いかけてようとすいせいが身を乗り出すが、悲鳴で目覚めたらしい、少年が体を起こす。

しばし、ぼんやりし、それからすいせいの姿を見つけると、へにやりと表情を崩した。

「おはよ、すいちゃ」

「……おはよ。よく眠れたみたいね」

「寝づらかったよ」

ふわり欠伸を漏らす少年。

その姿に、すいせいは溜息を漏らし。

次の瞬間には、表情の険が取れていた。

「ほら、準備しなさい」

「うん」

カバー保育園のやべーやつ2

準備をしろと言われ、少年はそのそと四つん這いになって動き、近くに置かれていた大きな石の上に腰を下ろす。

まだ眠気が残っているのか、眼をしよぼしよぼとさせながらも、ぱちぱちと、軽い拍手をする少年。それを聞いて、すいせいも移動する。

いつの間にか置かれていた、木材を組み合わせて作られた簡単なお立ち台。すいせいはその上に立つと、少年の方を見た。

強気な笑みを浮かべ、すいせいは息を吸い、歌いだす。

最近流行りの、魔法少女アニメの主題歌。アップテンポの可愛い曲だ。

建物の裏手。日の当たらぬ、ヒンヤリとした空間に、熱量の籠ったすいせいの歌声が響く。

その歌声を聞きながら、少年が手拍子。リズムがずれているのだが、少年は気づかず、すいせいは気にしない。

そんな調子で、どこかちぐはぐな1曲目が終わり、2曲目。そして3曲目と歌うすいせい。

全て終わった時、満足したのか、額の汗を拭いながら、「それで」とすいせい。「どうだった？」

「ふっー」

元々歌に興味が無く、お歌の時間ですら、こくりこくりと舟を漕ぎながら、出ているかも怪しい声量で歌う少年である。

当然歌の良しあしなど分からず、すいせいの望む言葉が出る筈も無いのだが、しかし少年の言葉に、すいせいは歯噛みした。

最初こそ褒めない少年を怒ったりしたものだ、今は素直に認めさせたい。終わった後も、今のようなうつらうつらとした半寝の状態のままではなく、しっかり覚醒して目を輝かせ、はち切れんばかりの拍手をさせたいのだ。

——それはそれとして。

「アンタ、いつになつたらちゃんリズム取れるのよ」

「むずかしー」

鼻歌を歌いながら、ぱちぱちと手拍子する少年。滅茶苦茶な鼻歌が果たして何の曲なのか分からないが、少なくとも鼻歌のリズムと手拍子のタイミングはあっていない。

「違うー!」

「わからない」

「ううー」

「わからない」

少年の鼻歌に合わせすいせいが手拍子でリズムを取るが、ピンとこないらしい少年は、変わらなずれたテンポ。

ぱちぱちぱちぱちぱちぱち。

一定リズムのすいせいの手拍子の合間に入る、少年のまばらな手拍子。眠気を我慢しているようで、船を漕ぐ首の方が、まだリズム感があつた。

キーツと地団太踏むすいせい。そんな彼女の前で、うつらうつらとしていた少年は、そのままぼてりと、横に倒れた。

スースーと、間もなく規則正しい寝息。

すかさず少年の傍へ屈み、すいせいはその肩を掴み、引き起こす。

「寝るなー！」

思い切り体をゆする。無抵抗に首が縦に振られるが、その衝撃は少年を起こすに至らない。

すいせいは少年を仰向けに転がすと、その上にまたがった。両手を天高く構え、迷わず右手から振り下ろす。

ぱしんと、良い音が少年の左頬から響いた。

序で、右手を上げながら左手を振り下ろす。右頬から音。そのままばしばしと、すいせいは少年の頬を叩き続ける。

「寝たら死ぬぞー!」

寝ているから殺すの間違いなのではと、思えてならないが。

少なくともそう叫ぶすいせいの言葉には一片の迷いすら感じさせない。

「ちよっ! 何しているのすいせいちゃん!」

すいせいの怒声を聞きつけ、様子を見に来た園長が、すいせいを持ち上げる。

思い切り暴れ、抵抗するすいせい。それをなだめる園長。

ぎゃいぎゃいと、喧しい環境の中、両頬を腫らした少年は、それでもすやすやと、眠

り続けていた。

夜道を、すいちゃんと2人、並んで歩く。

再会して間もない事もあり、共通の話題が見つけれられていなければ、咲かせられるだけの思い出話も、特に無く。

加えて、すいちゃんに関しては、俺に揶揄われた事もあって、少しお怒り気味のところもある。

結局、双方無言のまま。暫く時間は過ぎていた。

——まあ、それも別にいいんだけど。

すいちちゃんを横目で観察する。

表情はつんとしたまま。ただその表情は、昔と変わらないのであれば、それは別に本気で怒っている訳ではなく、適当によいしょしたら解決するそれだった。

「ねえ、すいちちゃん」

「……ん？」

「すいちちゃんって、何でアイドルになったの？ 昔から、歌は上手かったけどさ」

よいしょの切っ掛けになるかと思ひ、すいちちゃんに尋ねる。

「……アイドルになりたかったから」

「まあ、それは知っているけど」

公式サイトか、雑誌の記事か、フブキ先輩の雑学か。

詳しくどれかは覚えていないが、すいちちゃんがそう言っていたのは知っているし。

保育園時代にもそんな事を言っていた。……ただ。

「そんな謙虚な性格だっけ」

ガツッとケツを蹴られて、つんのめる。

転ぶところまでは行かなかったが、それでも、それなりに痛かった。

「何すんだよ」

「いきなり喧嘩売られたから」

「……」

彼女は保育園時代の自分を憶えていないのだろうか。

「すいちゃんなら世界征服位言いそうだなって」

「……」

俺の言葉に、すいちゃんの眉間にしわが寄る。凶星の顔だった。やっぱりすいちゃんだった。

「……良いのよ、まずはアイドルになる事が目標だったし。世界征服はアイドルになってからの目標」

「そうなの?」

「そうなの」

てつきり、デビュー前から、アイドルになって世界征服、が目標だと思っていた。

アイドルになるのなんて、極端な言い方をすれば手段レベルなものと。

ただ、それでも無いらしい。

「……アンタは?」

「ん?」

「多少マシになった?」

「あー……」

その言葉の対象が親の事と悟り、返答に困る。流石に保育園時代はそこまで達観もしていなかったから、すいちゃんに対して愚痴というか弱音を吐いた事もあるし、その件で星街家のお世話になった事もある。

間違いなく、家族の問題について、一番世話になったのはすいちゃんだ。

煮え切らない俺の反応に、すいちゃんは察したようで、溜息を漏らす。

「まあ、女の子連れ込んで住まわせても、何にも言われないうまいだしね」

「あつはつは」

「何その笑い?」

何なら、家にはもう一人住んでいるし、少し前までは毎晩食事をたかりに来る後輩や保健教諭が居たり、大けがして入院したりしていたのだが。

態々言う事でもないので、笑って流す。

「それに、保育園時代のアンタの事を思い出すと、学校生活も浮いてそうだけど。大丈夫? 公私ともにぼっちだったりしない?」

「……まあ、今は家にシオンもいるし、学校でも良き友人、良き先輩に恵まれて、楽しくしているよ」

「今は、ねえ」

すいちゃんがジト目を向けてくる。

へらりと笑って返せば、呆れた様子で、溜息をつかれた。一応心配してくれていたの
だろうか。

正直、それはそれとして。

「すいちゃんはどのようなのさ。家はともかく、学校ではめっちゃ浮いていそうだけど」

「あ？？」

「怖いってば」

それでも、かつての傍若無人振りを憶えている身としては、第二、第三の俺が居たの
ではと思えてならない。

だがすいちゃんは、俺の言葉に呆れた様子を見せると、勝ち誇った表情を浮かべた。

「アンタと違って世渡り上手なのよ」

「とうと？」

「生意気なやつを分からせる事はあったけど、それはそれとして、女子のリーダー格だっ
たんだから」

「ほえー」

上手く化かした物だ。

「失礼な事考えてない？」

「ないない」

ふるふる、首を振り返す。

「流石すいちちゃんだなんて、感心していた所だよ」

「嘘くさい」

ぱつぱり切られて、俺は笑うしかなかった。そんな俺を見て、すいちちゃんの表情が少し陰る。

「……アンタは随分変わったわね」

「そりゃ10年以上経っているし」

唐突なすいちちゃんの言葉。彼女の知っている保育園時代と比べれば、変わるだろう。

言外に、当たり前じゃないかと、そんな気持ちを込めて返せば、「そりゃね」とすいちちゃん。

「全く同じ、とは思っていないけど。それでもまあ……なんだ。結局アンタは、あの頃と大して変わらず、マイペースに1人で生きているんじゃないかなって、そんなふうにしていていたからさ。こんな風に冗談交じりに話せるようになっていたとは思わなかったのよ」

「……まあ、この性格というか、今の感じになったのはホロ学に入ってからだから、すいちちゃんの考えが間違えている訳でもないよ」

天音先輩に拾われ、フブキ先輩やミオ先輩に出会い。そこから、色々な出会いと経験を経て、今に至る。

成長したのかと言われると少し自信は無いが、変わったかと言われれば、間違いない。自分でも、驚く事はたまにある程だ。

「俺的には、すいちゃんはすいちゃんのまま、少し安心した」

「変わっていないって言いたいのか？」

「ぎろりと睨まれる。人の発言をすぐに攻撃的にとらえる癖はどうかならないのか。

「成長はしているけど、本質は俺が好きで憧れたすいちゃんのままだったって意味だよ」

「自信家で努力家。我が道を行くだけでなく、作る人。」

「幼心に、すいちゃんはかっこいいなあと、そんな事を思っていた。

「俺の言葉に、すいちゃんがたじろぐ。」

「そういうストレートな所は変わっていないわね」

「分かりやすくいいでしょ？」

「笑って返せば、何度目かの呆れた様子の溜息。」

「学校でもそんな感じなの？」

「んー……うん。こんな感じ」

「頷き返す。頷く俺に、すいちゃんの顔が面倒くさそうに歪む。」

「そんな表情されるとは思わなかった」

「夜道には気をつけなさいね」

「夜目は効くからへーきへーき」

上段への回し蹴りが飛んできて、屈んで躲す。

「やるわね」

「どーも」

少し距離を取りながら、立ち上がる。

すいちゃんも、追撃するつもりは無いらしく、俺を置いて歩き出した。

小走りに近づき、隣へ並ぶ。

そこからは、すいちゃんが転入するホロ学についての、当たり障りのない会話に変わった。

広さがどうか、学食がどうか、部活がどうか。

警戒しないといけない生徒や先生、面倒くさい事。

思いつく限りのことを話しているうちに、すいちゃんの引越してきたマンションが見えてきた。

「寄ってく？」

「いや。明日学校だし、今日は帰るよ。挨拶はまた今度ね」

「そう」

敷地前。門の前で、立ち止まる。

「それじゃあ、また明日ね」

「うん。またね、すいちゃん」

ひらひらと手を振りあい、すいちゃんと別れる。

すいちゃんはそのまま敷地を進み、マンションの方へ。

その背を見て、思わずすいちゃん、と声をかけた。

「何?」

振り返りながら尋ねてくるすいちゃん。

「明日、一緒に登校しない?」

保育園時代に憧れ、叶わなかった同じ通学路。それを叶えるための誘い文句は、シン

ブルな物だった。

その言葉に、すいちゃんは訝しげな顔をする。

「何言っているの、当たり前でしょ。ちゃんと迎えに来なさい」

「……了解。半ごろに来るね」

「ん」

改めてひらひらと手を振るすいちゃんへ、同じく手を振り返す。

それを見て満足したのか、すいちゃんは笑顔で頷き、今度こそマンションの中に消えていった。

見えなくなるまで見送ってから、俺も帰路につくため歩き出そうとし。

「ん?」

視界の隅に何か見えた気がして、そちらに視線を移す。

広がる住宅街。見渡すが、特に怪しいモノは見当たらない。

『わん?』

「……いや、何でも無い」

不思議そうに首を傾げるタロへそう返し、俺は元来た道を歩き出した。

そんな俺の背中を、カラスが1羽見ている事に、終ぞ気が付くことは無かった。

転校初日、朝

翌日。俺は、時折マンションから出てくる住人の、訝しげな視線に耐えながら、すいちゃんの住んでいるマンション前に立っていた。

いつもより早起きしたせいで、正直まだ眠い。

眠気を誤魔化す為のストレッチの効果も無く、漏れそうになった欠伸を噛み殺してむにやむにやしている、「変わらないわね」と、横から声。

「おはよ、すいちゃ」

「はいはい。おはよ」

この場に及んで、まだワンチャン嘘つぱちで、迎えに来た俺をすいちゃんが馬鹿にする展開もあるのではと思っていたから。

きちんとホロ学の制服を着ているすいちゃんを前に、本当だったんかーとそんな感想を抱く。

「似合う?」

「似合う似合う」

適当な俺の返事に、すいちゃんは自分の通学鞆で俺の胸を強打する事で答えた。

一瞬息が詰まる。直後、鞆が手放されたのを見て、俺は慌ててそれを掴んだ。

「ひれ伏して頭を下げた褒めなさい」

「滅茶苦茶言うじゃん」

早い話土下座しろという事である。凡そ屋外でする要求ではない。

絶対にしないぞという強い意志を見せていると、もとよりそんなに興味は無かったのか、「それより」とすいちゃん。

「なんか早くない？ まだ三十分になってないけど」

ほらと見せてくるスマホ。約束の時間よりは、確かに少し早い。

「お互い様でしょ」

「私はアンタが待っているのが見えたから、早く来てあげただけ」

「そりやどうも」

ちよつと意外とは思っていない。

「それで？ なんでこんなに早いのだよ」

「いや、転校初日なら、職員室行ったりしないといけないだろうから。半じやぎりぎりかかって」

「だからってアンタだけ早く来ても意味ないでしょうが。連絡しなさいよ」

「俺、すいちゃんの連絡先知らんし」

以前すいちゃんから連絡が来た際は姉街さんの連絡先からだっだし、昨日交換するのを忘れた。

今朝方姉街さんへ連絡するか悩んだのだが、流石にメッセンジャーをお願いするのは悪いかと思つたのだ。

「交換してないっけ？」

「してない」

「そっか」

頷くと、すいちゃんはポケットからスマホを取り出した。

「ん」と短く言葉を切つて、突き出してくるそれを見て。俺もポケットからスマホを取り出す。

メッセンジャーアプリを起動し、近づけてふるふる揺らせば、瞬く間にすいちゃんの連絡先が登録された。

「私のメッセージには5分以内に3つの言葉で返事する事」

「お姫様扱い希望なら、もう少し条件緩くしてくれ」

登録者名をすいちゃんへ変更し、ポケットへしまふ。

すいちゃんも暫し操作していたが、その内ポケットへとスマホを戻した。

「それじゃあ、行こうか」

「ええ」

はい、とすいちちゃんに鞆を差し出すが、それを無視してすいちちゃんが歩き出す。虚空へと差し出されたすいちちゃんの鞆を暫し見て、諦め、自分の鞆と一纏めにし、歩き出す。

かつて考え、憧れ、叶わなかったすいちちゃんとの登校が、ついに始まり――。

数分後にはちよつと後悔した。

「めっちゃ見られているねー」

「それはそうでしょ」

「自覚あるなら、顔を隠す努力とかしてよ」

「高校行くのに、サングラスなんてかける訳ないでしょ」

「んー……そりやそうなんけども」

おっしやる通り、ではあるのだが。すいちちゃんはホロ学園生である前に、今をときめくアイドルであった。

そんな彼女が、前情報も無しに学園の制服に身を包み、ましてや男子生徒と歩いているとなれば、流石に目を引く。まだ困惑の方が強いらしく、近寄って来ないのが救いか。

「まあ、毎日見てればそのうち気にしなくなるわよ」

「……それは制服姿の話でいい？」

「さーね」

適当な反応。よもや毎朝迎えに来いというのか。普通に遠回りだから、せめて途中で合流する形がいいのだけでも。

困惑する俺を他所に、すいちちゃんは後ろ手に手を組んで、俺の前を歩いている。顔は見えないが、その姿は思いのほかテンションが高めで、浮かれている様子だ。

「なんか楽しそうだね」

「そうよ。だって新しい学校、新しい生活ってなんかドキドキするじゃない」

「そうかなあ」

転校なんて面倒くさいだけだろうに。それとも、幾度もの転校を経験している俺が擦れているだけなのだろうか。

首を傾げる俺に、歩きながら振り返り、そのまま器用に後ろ向きに歩き出すすいちちゃんが笑いかけてくる。

「そうよ」

「……ナチュラルに俺の心読まないでよ」

芸能界という所は、読心術でも使えないとやっていけないのか。

「分かりやす過ぎるのよ」

勝ち誇るようなその笑いを浮かべるすいちちゃんが、そう言った。その笑顔を、何かし

らの反撃で崩したくなるが、人目がある中では流石に出来ない。

「んー？ 反撃しないの？」

器用に後ろ向きに歩きながら、再び心を読んできたすいちちゃんが、ナチュラルに煽つて来る。

そのきれいに結われた髪型を滅茶苦茶してやろうかという気持ちを抑えつつ、「しな
いから」と短く返した。

「あつそ」

俺の言葉に何故か気を悪くしたのか、少し唇を尖らせるすいちちゃん。

何で機嫌悪くなるのかと思いつつ、すいちちゃんの肩を掴んで、引き寄せた。

思ったよりも軽い体が抵抗無く引かれ、腕の中に納まる。驚き、顔を赤らめるすい
ちちゃん。

そんなすいちちゃんの後ろにあった丁字路を、車が通過していく。

「後ろ向きで歩くのは危ないと思うよ」

「……生意気」

「無視するわけにいかないでしょ」

さつさと解放して、すいちちゃんの脇を抜ける。

直後、タコの鳴き声を聞いて、俺はその場に屈んだ。頭上を、恐らくすいちちゃんの物

と思われる蹴り足が通過していく。

「……アンタ、背中に目でもついているの?」

「その前に不意の回し蹴りについて謝ろうか」

「ファンサよ。私に蹴られたいって人、多いんだから」

「俺は少数派なもので」

そういうのは望んでいない。

膝に着いた埃を払いながら、一応警戒しながら立ち上がる。幸い今回も追撃は無く、俺が立ち上がったのを確認してから、今度はすいちゃんと2人、並んで歩き出す。

「え、何あれ?」

「あの人、すいちゃんだよね? どうしてうちの制服着ているの?」

「転校してきたとかかな?」

「しかもあの2人、距離近くない? なんか変な感じ。付き合っていたりして?」

「まさかー」

「……」

「分らん、意味は分からんが……許せん」

「おのれ、あの男……白上さんだけでなく、星街さんにまで手を出すとは」

「確か大神さんとも仲が良かったぞ」

「俺達の大空さんとも仲がいいんだ……」

「……」

困惑が通り過ぎ、好奇と怨嗟の視線を感じる。

「すいちゃん、走らん？」

こういう時はさっさと逃げるに限る。

そう思っただけ声をかけたのだが、何故かすいちゃんからは物言いたげな目を向けられる。

「……え？　なんで？」

「白上さんとか大神さんって誰？」

「誰って、同じ部活の先輩だけ？」

「大空さんは、昨日会ったスバルちゃんで、家にはシオンちゃんも匿っている……」

「匿っているというか、寄生されているというか」

今日も結局起きてこなかった居候の姿を思い出す。

最近は生活習慣の乱れにも拍車がかかり、夕方まで寝ていた、なんてこともざらだ。

好きな事、やりたい事があるのは良いとは思いますが、正直片付かないからちゃんと起きて

ほしいものである。

「いつの間にか女の子を侍らせるようになったちゃって。幼馴染として恥ずかしい」

「言い方」

「もういないでしょうね？」

「……」

わためやるしあとといった、脳裏をよぎる顔が幾つかあった。侍らせている訳ではないが、確かに仲良くはしている。

俺の思考をしつかりと読んだようで、すいちゃんは苛立たし気に舌打ちを一つ。

「今思い浮かんだ顔も含めて、全員紹介しなさい」

「別にいいけど……なんで？」

「アンタの幼馴染として、交友関係を把握するための面通し」

幼馴染って凄い立場だ。

俺がその立場を理由に、すいちゃんの芸能界での友人関係についての面通しを依頼したら叶うのだろうか。

色々観たり聞いたりするようになって、それなりに芸能人というものにも理解が出て来たから、会ってみたいという願望が無い事もないのだが。

「アンタはダメ」

「あ、はい」

ダメらしい。元々頼む気は無かったが、やっぱりちよつと残念。

そして、すいちゃんはなんでちよつとお怒り気味なのか。幼馴染の交友関係に不満があるのは、なんとなく分かるのだけど。

変なのと思いつながら、すいちゃんと並び、角を曲がる。

学園までは、この通りを抜けた先。当たり前だが、生徒の数が一挙に増える。

すいちゃんの事、気づかれたら面倒そうだなあと思った矢先。

「ねえ、あれつてすいちゃんじゃない？」

生徒の一人が、口火を切った。その言葉が、瞬く間に伝播していき、通りに居た生徒達の視線が、一挙にこちらへ向いた。

「うお」

その光景に、流石にびびる俺。そんな俺に、「何してんの」とすいちゃんの軽口が飛び。

そのまま、何事も無いかの如く、歩き出した。慌てて追いかけて、隣に並ぶ。

「慣れてるね」

「当たり前でしょ。これくらいで怖気づいていたら、もつと大勢の前で歌えないでしょうが」

それはそうなんだけど。改めて目の当たりにすると、やはり感心してしまう。

だからだろう。

「……アイドルなんだねえ、すいちゃん」

無意識にぼつりと漏れたその言葉。

耳ざとくそれを聞きつけたすいちゃんがこちらを向き、クールな笑みを浮かべた。

「漸く気付いた?」

その笑顔に少しだけ気圧され、俺は肩をすくめる。

「おみそれしました」

「よろしい」

満足そうに頷くすいちゃん。そんなすいちゃんを見て、つられて笑う。

そんな俺達の前に、立ちはだかる影。

視線を向ける。

仁王立ちするのは、我らが生徒会長百鬼あやめ。

その後ろに控え、「おはよー」と手を振ってくるのは、天音先輩であった。

「よく来たなあ、すいちゃん! 私の学園に!」

「……」

視線を感じそちらへ移せば、すいちゃんが俺の方を見ていた。

「手前は我らが生徒会長、百鬼あやめ。後ろにいるのは裏番の天音かなた先輩」

「おい」

天音先輩からお怒りの声が聞こえた。

「成程」

「納得されちゃった！」

慌てる天音先輩。流石すいちゃん、察しがいい。

視線を生徒会コンビへ戻す。

「なんで2人が此処に？」

「2人の事を待っていたんだよ。パニックにならないとも限らなかったしね」

「成程、ありがとうございます」

「それが仕事だからね。それはそれとして……」

天音先輩の視線が、俺の腕に向く。

「ラッキーアイテムはつけてこなかったの？」

「流石につけるのは。身につけるとの事でしたので、持ち歩いては居ますけど」

ポケットごしに、先日天音先輩に頂いたものを確認する。

限定的で使いづらい物ではあったが、天音先輩に言われた以上は最低限持ち歩く事は心がけていた。

「んー、まあ、とりあえずそれならいいか。すいちゃん、案内するから、ついてきてね」

「あ、はい。んじや、またね」

「ああ」

天音先輩が歩き出し、手を振ったすいちゃんがその後を追う。

俺もぼちぼち教室に向かうかと、そう思っていると、腕を掴まれた。

視線を向ければ、涙目の百鬼。

「無視、しないで」

「……………めんで」

転校初日、生徒会

急須へ茶葉を入れ、お湯を注ぐ。

ふたを閉めて少し蒸し、時々揺らし、茶葉を開かせて。

急須から湯呑——は無いからマグカップへ注ぐ。このとき、しっかりと茶漉しを挟む事を忘れない。

以上、昔ミオ先輩に教わった、簡単な緑茶の煎れ方である。

——今更だけど、生徒会室にこんなセットあったか？

最後に手伝いに来ていた時には、無かったような気がするし、ここ数週で持ち込まれたのだろうか。

まあ、温かいお茶が無料で飲めるのだから、文句は無い。ぜひ定期的に使用させてほしいまである。

自分の分を一口飲み、いつもの味である事を確認し、もう一つ用意したものは、百鬼へと届ける。

「どーぞ」

「おお。ありがとうな」

百鬼がマグカップを手に取り、数度冷まして、一口。
普段座っている席に腰を落としながら、少し緊張しつつ言葉を待つ。

「——おお。普通においしい」

「そりやどうも」

口では軽く返しつつ、思わずガッツポーズ。

割と何でも飲むが、緑茶だけはマイ急須買ったりにして、少し思い入れもあるから、褒められたらやはり嬉しいものだ。

同じく緑茶を口にして、吐息を漏らした。

「それにしても……なんか浮足立っているな」

「まあ、あのすいちちゃんが転校してきたしな」

生徒会室で2人、特に作業をするでもなく、のんびりとお茶をすする、穏やかな時間。
しかし扉や窓、壁を挟んだ外では、そんな穏やかな時間とは正反対の時間が流れているようだ。

時折聞こえてくる言葉で、最も多くを占めるのは当然すいちちゃんの名前である。

「暫くこんな感じかな」

「かもなー。仕事、滞らないといいけど——あ、ごめん。今の無し」

「はいはい」

転校していた以上、すいちゃんも立派なホロ学生だ。

生徒会長である百鬼としては、すいちゃんにも学園生活を楽しんで貰いたいのだろう。

とはいえこの浮足立ち具合では、何かしらの問題を起こす者も恐らく出てくる。

生徒会的に可能性がある以上は放置出来ず、どうにかする為に、すいちゃんの傍に誰かしら置いて、学園が慣れるまでの時間を稼ぎたい。

しかし、仕事内容が内容である以上、その為の人員を募集したボランティアに頼むという訳にもいかないから、生徒会、もしくはは近い誰かにするしかなく、そこに人を割くと、もともと多忙な生徒会業務への支障が出て、火急の問題が起きた時などの動き出しが遅くなる。

成程、思ったよりもすいちゃんの存在は大きいらしい。

「あつちを立てたらこつちが立たずか。難しいな」

「……」

百鬼の目が俺に向く。無視して顎に手を置く。

良さげな人員を考え、思いつく。

「フブキ先輩なんていいんじゃないか？」

「本気で言っているのか？」

「7割くらい」

3割はドルオタ部分から発生する影響が未知数な事。

「そもそも3年生にこんな事を任せられる訳ないだろ。幾ら内部進学って言っても、勉強しなくていいわけじゃないし」

内部進学は内部進学で、一定の成績を収めていないとその資格が？奪される。

高をくくつていたら、内部進学出来なくなり、地獄の受験勉強が急に始まった、という話も聞かない訳じゃない。

流石にあの2人なら大丈夫だと思うけど、もしもの可能性が無い訳でもない。

「他にはスバルとか」

「スバル？」

「昨日、家に遊びに来て、その時にすいちゃんと言通している」

「え？ なにそれ？ 余、聞いていないんだけど」

「いや、断る必要も無いけど」

「余もスバルと遊びたい！」

「意味深な電話すると、心配して駆けつけてくれるぞ」

「成程。やってみる」

この会話のせいで、後日スバルに怒られるのだが。今は関係ないので省略。

「それで、どう？ スバル」

「いや、無いだろ」

バツサリだった。

「仕切り役としては充分だけど、いぎという時の実力行使を頼めないし」

「実力行使を想定してるのやばいな」

ただ、そういう事なら、総合格闘技部を動員できるスバルはありな気はするけど。

「大会に支障をきたすかもしれないだろ」

「おっしやる通り」

「で？ 他は？」

「思いつかない」

わざとらしく腕を組み、首を傾げて見せる。うぎぎと、苦虫を噛み潰したような顔をする百鬼。

その顔を見て、思わず笑いが零れた。

「冗談だよ。やれって言われんでも勝手にやるつもりだったし」

今をときめくアイドル様のすいちゃんである。

無論自衛手段は心得ているだろう。何事も無いならそれに越した事は無い。

ただまあ、此処はホロ学である。地域内生徒数最多のマンモス校、少々人間じゃない

方もいる訳で。

それこそ、すいちゃんが予期せぬ事が、起こらないとも限らない。

「ただ、俺に頼むなら生徒会云々は無しで頼む。大切な幼馴染だ。頼まれたから守る訳じゃない」

「……でも、それだとお前様も危なくないか？」

「スバルの時の一件もあるしな。覚悟はしているよ」

それこそ、生徒会に頼まれたから、という体で入れば、大なり小なりの嫉妬はともかく、それが行き過ぎる事は無いだろう。それは分かっているつもりだ。

「俺と一緒に居たいから居るって決めたんだ。それにほら、この方がすいちゃんに対してのアクションの矛先が、俺に向くかもしれないだろう？」

その方が、直接対処出来て楽まである。

「だからって。また1年の時のようになるかもしれないし」
「あの時とは違うさ」

友人知人に恵まれた。少なくとも、周り全員敵orその他、という事態にはならない筈だ。

「とりあえず、うまくやるよ。なんかあつたら、相談する」

飲みかけのマグカップを差し出せば、深刻そうにしていた百鬼の顔が、ふにやりと砕

けた。

「……宜しくー」

コンツつと、マグカップのぶつかる、軽い音が生徒会室へ響く。

直後。生徒会室の扉が開いた。

「ただいまー」

「失礼しまーす」

天音先輩とすいちゃんの2人が、姿を見せる。

「おかえりー」

「おかえりなさい」

声をかけると、生徒会室に入ってきたすいちゃんに何故か睨まれた。微かに顔が赤い
辺り、本気で怒っているのかもしれない。

その脇で、天音先輩が口元を隠している。微かに肩が震えている辺り、もしかして
笑っているのだろうか。

「なんですすいちゃん、そんなに怒ってるの？」

「はあ!! 怒っていないですけど!!」

「ええ」

時間を置いた方が良さそうなので、天音先輩へ。

「どうしたんですか？」

「いや、別に」

俺を見、すいちゃんを見。再び、肩を震わせる。

何か面白い事でもあったのだろうか。共有してほしい物である。

「かなた先輩、笑い過ぎなんですけど！」

「いや、ごめ……」

「すいちゃん、そんなに面白いことあったの？ 教えて」

「うっさい！」

「ええ」

一体何なのか。百鬼の方を見れば、百鬼も良く分かっていないようだった。

まあ、教えてくれない以上、知りようが無いので、この話はいったん終わりにするこ
とにして。

こちらは教えてくれるだろうか、もう一方の興味へと話題を移す。

「そういえば、すいちゃんのクラスって何組？」

「3組」

「そっか。じゃあ、同じクラスだ」

嬉しくて、つい顔が緩む。そんな俺と対照的に、すいちゃんの顔は歪む。そして、苛

立たし気に俺の手からマグカップを奪うと、冷めつつあつた緑茶を口にした。

「新しいの煎れるけど？」

「これでいいから」

「そう？ 天音先輩は飲みます？」

「じゃあ、貰おうかな」

「はい」

ケトルには先ほど使わなかつた分が入っているから、ボタンを押して再沸騰させる。

沸かす間に、移動。生徒会室の扉に手をかけ、顔がのぞく程度に開ける。

覚えのない、男子生徒が三名。ネクタイの色で、後輩とわかる。

恐る恐るといった様子で、顔が上がった。目が合う。

「散れ」

「ヒッ」

ひきつった声を出したかと思えば、そのまま三人とも逃げて行つた。

一応周辺を確認し、扉を閉める。咳払いをして喉の調子を整え、眉間を揉む。目が疲れるからあまりやりたくない。

振り返れば、生徒会コンビが、まばらに拍手。

「今のなんだ？」

「後輩直伝の威圧術」

「よく気が付いたね」

「教えて貰ったので」

タロが肩の上で、元気よくワンと鳴く。

守護霊なのにすやすやと眠っていたタロは、すいちゃんと天音先輩が戻ってきた辺りで目を覚ました。

あの生徒達も関しても、何やら騒がしいのをタロが聞きつけて、それを見に行き、教えてくれた形だ。

「――」

「それで、なんですいせいさんはお睨みになられているのでしょうか」

頑張ったで賞くらいなら受賞出来そうなののだが。すいちゃん的にはそんな事も無いらしい。

しかも、さつきまでのはまだ救いのある感じの睨み方だったのに、今では親の仇でも見るかの如き形相だ。

一体俺が何をしたというのか。

そして、天音先輩は口元を隠して、再び肩を揺らし始めている。思い出し笑いをしてる様子。

「あんた、今から私の許可無しに喋ったり呼吸したりするの禁止ね」

「俺の言論の自由と生殺与奪の権が軽すぎる」

もう少し尊重してほしい。

「じゃあ、喋るのは良いわよ」

「すいちゃんは存じていないかもしれないけど、呼吸しないと喋れないからね?」

「言っておくけど、肺呼吸だけじゃなくて、鰓呼吸も禁止だから」

「俺のどこを見て、鰓呼吸が出来ると思ったのかな?!」

「顔」

「シンプル悪口」

何がそんなに許せないのか。本当に分からなくて、脳内を疑問符が飛び回る。

校門で別れる前まではそんな事無かったから、恐らくはそこからここまでの間に何かあったか、何かしてしまったかだと思うけれど。

……心当たりが無さすぎる。

「なあ、すいちゃん。本当にどうしたのさ?」

「別に」

フイツつと、顔を背けられる。天音先輩を見れば、笑いは収まり、少し困った様子の顔。

やはり何か知っているのは違いないが。教えてくれない気もする。

つまるどころすいちゃんに確認するしかなく、再度尋ねようと口を開こうとした時、それを遮るようにチャイムが響いた。始業五分前の合図である。

「すいちゃんは教室？ それとも職員室向かうの？」

「……」

顔をそむけたまま、応答はない。

「すいちゃんは私が連れて行くから、君は早く教室に向かいな」

天音先輩から声がかかる。そう言われてしまうと、俺としては言葉を返せるはずもなく、「わかりました」と、頷き返す。

「百鬼。教室行こうぜ」

「おー。すぐ行くー」

クラスは違うが、同学年。わざわざ別々にいく理由もなく、俺は百鬼に声をかけ、生徒会室を出る。

その際、すいちゃんを見れば、目が合うと、歯を剥き出しにして威嚇してきた。

どうやら俺に怒っていることは間違いない。すいちゃんからは理不尽に怒られたりどつかれたりしているけど、次の瞬間にはカラツツとしているから、こうも長続きしているということは、よほど怒っているらしい。

「……」

「イーッと、同じく歯を剥き出しにして威嚇し返し、さっさと扉を閉める。」

「子どもの喧嘩みたい」

「いいんだよ。すいちゃんなんだから」

「いや、意味が分からんけど」

「そういうもの、というだけである。」

「一体何なのかと、少しばかり腹に据えかねながら、廊下を歩く。」

「そんな俺の様子を見かねたのか、百鬼が口を開いた。」

「どうする?」

「……どうもしない」

「怒られている理由は分からずとも、やる気は変わらず。」

「すいちゃんが学園生活を楽しむ為に頑張るよ」

「……うん。安心した」

「笑う百鬼へ、笑い返し。その後、百鬼と別れ、自分の教室に入る。途端、視線が集まった。」

「普段ならその後すぐに視線もはけるのだが、今日はそんな事も無く、視線は向けられ
たまま。」

理由の察しはつくので、それらを無視して自分の席へ向かう。

「はよー」

「お、おう」

「おはよー」

「お、おはよう」

すれ違い際、接点のあるクラスメイトへ軽く挨拶すれば、戸惑い交じりの返事がきた。そんなに気にかかるかねとぼんやり思いながら、自分の席へ荷物を置き、着席。

今日の授業の教科書とノート、筆記用具類を点検し、机へ。

スマホを取り出し、電源を切り、ポケットへしまい、朝のルーティンを終える。

時間的には、もう間もなく、すいちゃんは、担任を引き連れ現れる……逆か。担任がすいちゃんを引き連れ、現れる。

その時、この教室を包むのは、静寂か阿鼻叫喚か。

耳栓は流石に持ち合わせていないので、両手を耳に当てて誤魔化す。そんな俺の背中を、ちよんちよんと叩く者がいた。

体を捻るのが面倒で、首を背中側に倒して、叩いた主を見る。

天地逆転した後ろの席に座る、青髪鮮やかなクラスの委員長と目が合うと、彼女の肩がびくりと跳ねた。

少し申し訳なく感じて、姿勢を戻し、きちんと振り返る。

「なに?」

「――」

ぱくぱくと彼女の口が動くが、何を言っているのか聞き取りづらい。

「え?」

「――」

何か語尾が荒くなったのは分かるが、やはり聞き取りづらい。

「ふぎけてる?」

首を傾げる俺に、委員長は手を伸ばしてきた。両腕を掴まれ、引き剥がされる。

「ふぎけているのはアンタでしょうが! 耳閉じていたら聞こえないでしょ!」

「……ああ。ごめん」

忘れていた。

「素で謝るな! 天然か!」

「ええ」

どうすればいいのか。

一方で彼女も、結局どうしたらいいのか分からないようで、結局諦め、「それで、聞きたいんだけどさ」と話しを進めてきた。

「今朝、すいちちゃんと一緒に登校していたって本当？」

その言葉に、クラスの集中が一挙に集まるのを感じる。やはり気になっていたらしい。

どうせ後でバレるし、クラス全員にまとめて説明するには丁度いいかと思い、俺は首を縦に振った。

「本当」

ざわりと、クラスの空気が震える。

ただ、以外に誰も口を挟みに来ない。もつと詰め寄られるかとも思ったのだが。

事前にこの話をするのは委員長と決めていたのだろうか。少なくとも、とりあえず今は、委員長からの質問に答えればいいらしい。

「本当だったんだ」

委員長も、暫し驚いた様子を見せる。その後、間もなくして。

「どうして？」

とそう尋ねてくる。色々包含していそうな質問に少し悩む。

「どうやってって意味なら、俺がすいちちゃんの家を知っていたから迎えに行っただけで、どうしてって意味なら、俺がすいちちゃんの幼馴染だからだけだ」

『えー!!』

クラスが一気に騒がしくなった。詰め寄られる。

「本当かよ、妄想とかじゃなくて?!」

「失礼」

「何で教えてくれなかったんだよ!」

「聞かれなかった」

「何時からの幼馴染なの?!」

「保育園」

「昔から可愛かった?!」

「そうだね」

急に詰め寄られて吃驚し、膝の上に逃げてきたタロを机の下で構いながら、マシンガンの様に飛んでくる質問に端的に答える。

これで、俺がすいちゃんと一緒に居ても極端におかしいという環境を作れたのだろうか。

そんな事を思っていると、前触れなく教室の前の戸が開いた。

「おーい、席に着けー」

普段はもつと間延びした感じの声の担任の声が、少しキリツつとしている気がする。格好つけているのだろうか。

バタバタと取り囲んでいたクラスメイト達が自分の席に戻っていく。

「よし。じゃあ、入ってくれ」

担任がそう言うのと、担任が入ってきたのと同じ戸が開き。

『うおおおおお！』

すいちゃんが入ってきた。途端に上がる、歓声。野太い方が多いのは、まあ御察しか。すまし顔で、余所行きの顔をしているすいちゃんが壇上へ。

黒板に自らの名を書き、振り返る。

「星街すいせいです。今日から宜しくお願ひします」

ぺこり、一礼。

もつと——なんならコーレスでも決めてくるかと思つたから、これは少し意外だ。

やっぱ緊張しているのかなあと、そんな事を思う俺。そんな俺をすいちゃんが見つけた。

そろそろと、すいちゃんの右手が上がり、俺を指差す。

「因みに、その人は私の幼馴染じゃないです。無関係です」

「……」

とんでもない事がまされた。

かくして、俺のホ口学史上最も長い1日の、あほらしい決戦の火蓋は切つて落とされ

た
の
だ。

転校初日、午前

重苦しい空気が、教室を包む。凡そ、転校生が来たクラスとは思えない。

先程から廊下では、1限が始まるまでの短い時間に、同級生達が目すいちちゃんを見ようと教室に訪れ、そして教室の空気に負け退散するという光景が繰り返り広げられている。

他の学年が来るようになったら、あの光景はどうなるのだろうか、不謹慎ながらも少しわくわくした。

……以上、現実逃避終わり。覚悟を決めて、隣の席を見る。

腕を組み、席に座るすいちちゃん。転校したての、クラスメイト歴では圧倒的若輩の筈なのに、なぜか大御所のような雰囲気醸しているのは流石だ。

「……あの、すいち」

言葉を遮るように、ぎろりと睨まれる。ちびっ子が見たら漏らしそうな迫力だった。

保育園の時に構ってくれたあの男の子達元気かなあと、また現実逃避したくなるのを、ぐつつと堪える。

すいちちゃん呼びは怒られそうなので、改めて。

「星街さん、いいかな?」

「様でしょ?」

「呼んだことないが!」

多分。再会してからは兎も角、保育園時代はちと自信が無い。

「それで、なに?」

「……」

ここでツツコミを入れると、また話がずれそうだったので、再び耐える。

正直聞きたいことは先程の発言の真意なのだが、話してくれなさそうなので、急場の話に。

「教科書とか大丈夫?」

「アンタに心配される事じゃないんだけど」

「あ、はい」

良く分からんが本当に怒っているらしい。

俺から視線をそらし、そのまま俺とは反対側の席のクラスメイトへと、すいちちゃんの視線が向く。

「ひい」とか細かい悲鳴が聞こえてきた。対アイドルの反応とは思えない。

「教科書見せて」

「あ、あの……えと……」

「聞こえなかった？」

「……」

カツアゲかな？

「星街さん。教科書なら、俺の貸すよ」

「は？」

「俺は隣のクラスから借りてくるからさ」

振り返るすいちゃんは反応するより早く、授業の教科書をすいちゃんの机に置く。

そのまますいちゃんと同じく彼女から視線をそらし、逃げだし、隣のクラスへ。

幸い隣も授業開始前。戸を開ける。

「スバルー」

「ん？ はよー」

「おはよー」

自分のクラスとは打って変わり、隣のクラスにアイドルがいるという事実への落ち着かない健全な様子に癒されながら、スバルへ近づく。

「すまん。教科書貸してくれない」

「いいつスよ。何の教科書？」

「現文、数Ⅱ、物理、世界史、英語」

「ほぼ全部じゃねえか！ 逆に何の教科の教科書持ってきたの!？」

「いや。4限は体育」

「……弁当しか持つてこなかったの？」

「そうかもしれない。」

「3組は1限現文だけ？ ——はいこれ。2限で使うから、終わったたら返してね」

「すまん、恩に着る」

教科書を受け取る。パラパラと中身を検分して、特に何も挟まっていないう事を確認。

自分のクラスへ戻ろうと思ったとき、そういえば、とスバル。

「すいちゃん、転校してきたんでしょ？ どんな感じ？」

「……氷河期」

「転校生来たんだよね!？」

記憶違いで無ければ。

困惑するスバルへ、「じゃあ、戻るわ」と告げ、俺は4組を後にし、自分のクラスへ戻る。
入る前に、こっそりと中を確認する。

すいちゃんもクラスも、変わらない様子。俺が居なければ、というちよつと心に来る

事態は避けられた事に、少しかけ安堵しながら、教室へ入る。

何人かの視線がこつちに。どうにかしてくれと言わんばかりの視線に、笑顔で首を横に振る。

「……」

席に戻ると、すいちちゃんが横目でこちらを見てきた。用があるのかと、視線を向ければ逸らされ、戻すと再び向けられる。

何がしたいのだろう。表には出さずに悩みながら、俺は筆記用具とノートを取り出し、授業の準備を終える。

少して、現文担当の先生が入ってきた。

いつもよりしっかりとスーツを着て、顔つきもやや鋭い。分かりやすく格好をつけている様だ。

そんな先生は、ずんずんと歩みを進め、教卓の前へ。出席簿などを教卓へ置いて、周囲を見渡し、はてと首を傾げた。

「……なんだ。もう少し浮足立っていたりしないのか？」

『……』

空気読めよオ！　と思っただけじゃない筈。

やや察しの悪い所のある先生が不思議そうに再度教室内を見渡し、やがてすいちちゃん

を見つけた。

一瞬表情が明るくなったのは、見間違いで無いだろう。彼もまた星詠みで、推しを前に格好つけたかったのだ。タイミングは最悪だったけど。

すぐに先生はすいちゃんの表情に気が付き、放つ雰囲気当てられ、同じく静かに視線を逸らすに至る。

「あ、あー。じゃあ今日は一昨日の続きからでー」

教科書を開き、そそくさ黒板の方へ振り返ると、チョークを手に取り、書き始めた。

唐突に始まった授業に、クラスメイト達がやや慌て気味に、教科書やらノートやらを開き始める。

俺もそれらにならない、教科書とノートを開きながら視線をすいちゃんの方へ投げれば、教科書のページを前後していた。

「……百頁からだよ」

声を掛ければ、すいちゃんの視線が一瞬俺の方を向き、離れる。

教科書を捲っていた手が止まり、机へ置かれる。

ちらりと視線がこちらを見て、何か言いたげにむにやむにやと口元を動かした後、何事かを口パクで伝えてくる。

生憎読唇術は体得していないので、何と言ったかは分からなかったが、まあ流石に酷

い言葉では無いだろうと信じ、意識を黒板へ戻す。

授業自体はいつもの形式。先生の緊張こそあれ、其処はプロ。滞りなく済ませて見せ、1限が終わる。

特に質問も無かったので、俺はノートをそのまま机に仕舞い、次の授業の教科書を取り出した。

「はい、星街さん。次の数Ⅱの教科書、置いておくね」

さくさく動く。教科書をすいちゃんへと押し付け、俺は現文の教科書を手に離席。スバルの下へ。

授業は丁度良く終わり、担当だったらしい教師と入れ替わりにクラスへ入り、片づけをしているスバルへ近づく。

「スバル、教科書ありがと」

教科書を差し出すと、顔を上げたスバルが「ん」と頷きつつ、教科書を受け取る。

「次は数Ⅱを貸せばいい？」

「すみません。お願いします」

「はいこれ」

「どうも」

受け取り、確認。特に何も、挟まってはいない。

「なんだー、お前様。教科書忘れたのか？」

にやにやとちよつと意地の悪い笑みを浮かべながら、百鬼が横合いより声をかけてくる。

「俺にだって、こういう日くらいある」

「いや、丸一日分の教科書忘れる日とか、普通無いって」

「……」

挟まるスバルの言葉。全くその通りなので、強く出られない。

それを聞き、百鬼も首を傾げる。

「今日、何を持ってきたんだ？ 鞆、すっかり膨らんでいたよね？」

百鬼とは今朝会っているから、俺の鞆の状態も覚えていられるらしい。

「……夢と希望かな」

「それは胸にでも詰めとけ」

仰る通りだった。

「まあ、大方曜日間違えたか、すいちゃんに貸して持っていないから、とかなんだろうけど」

「すいちゃんに貸すなら、一緒に見ればいいのに」

「席が遠いとかじゃない？」

「おお。成程」

「……」

惜しい。

「さて、じゃあ俺も戻るな」

「了解。数ⅡはⅠ限だったから急いで返さなくてもいいよ」

「次の物理の教科書も借りに来るから、その時返す」

ひらり片手を振り、教室に戻ろうと振り返り。

「うわ」

廊下の様子にドン引きした。

ぎゅうぎゅうとすし詰め状態である。廊下に面している窓がみしみし行っていて、不

安が凄い。

「なにあれ？」

「すいちゃん見に来ているんじゃない？」

「まじかよ」

あれだと教室に戻れないのだが。

「んー……」

窓の方へ視線をやる。確か、窓枠下に縁があつた筈。

「いけるか」

「いけないから」

スパコンと、子気味のいい音が俺の頭から響いた。

「アホな事を考えないの」

「か、考えてねーし」

もみくちやにされたくないだけだし。

「とはいえ、このまま戻るとなあ」

視線を手に持つ教科書に向け、それからスバルへ向ける。

「やっぱ返すよ。隣の席の人にも見せて貰う」

「そう？ 別にいいけど」

「大丈夫。ありがとう」

教科書をスバルへ返し、廊下へ向かう。

廊下は混沌に包まれていた。

これで鑑賞方向とか定まっていれば、ここまでの状態にならないのかもしれないが、生憎学校はその類ではない。

右からも左からも来るし、帰ろうとして進もうとしたり引き返そうとする。

結果起こる押し合い圧し合い。下手したら事故でも起こりそうな勢いだ。

——授業合間の小休憩でこれかあ。

時間的余裕のある昼や放課後はどうなってしまうのか。

何か対策でも考えた方がいいのではないか。

ちらりと百鬼の方を見れば、考えは同じらしく、既に生徒会長の顔つきだった。

これなら任せても大丈夫かと、そんな事を思いながら、俺は一念発起し廊下へ出た。

「ぐえ」

圧が凄い。

やっぱり窓から戻ろうかなと振り返ると、スバルと目が合い、顎で廊下を差される。

諦め振り返り、深呼吸して、息を止めて再トライ。

腕を伸ばし強引に滑り込ませ、出来た隙間に体をねじ込む。

「通してください！ クラスに返して！」

頑張つて声を張り上げる。

普段なら徒歩1分もかからないのに、無駄に長く感じる。

上から舌打ちとか、肘鉄を受けながら、強引に先に進む。

「——せい——」

教室の扉に着く。対策の為か、閉じられている扉。

最後に一息。気合を入れて、扉を開け、その中に身を滑り込ませて、急ぎ閉じる。

「あー、疲れた」

制服の汚れを払い、廊下からへつながる窓を見ると、人人人。

動物園のパンダってこんな気持ちなのかなあとぼんやりそんな事を思いながら、自分の席へ戻ろうとして。

「——あ！ お前、今朝すいちゃんと一緒に登校していた奴だろー！」

廊下から、そんな声が聞こえてきた。

思わず足を止めてしまう。

声の主以外にも、目撃者が居たのだろう、廊下のざわめきが増す。

——丁度いいか。

ヘイトを集めるなら此処だろう。

廊下に近づき窓を開ける。

「だったら？ 幼馴染と一緒に通学して、何が悪いんだよ」

「え？ あれ、でも。すいちゃんとは無関係なんだよね？」

「……」

戸惑った、クラスメイトの声が、やたら通った気がした。

叫びそうになった暴言を何とか飲み込む。

そして、俺の前に居た生徒が暫し呆然とし——好きかって言い始めた。

「勘違いオタクじゃん」

「妄想と現実の区別ついてないのかよ」

「朝も、もしかして嫌がるすいちゃんに付きまとつていたとか？」

「やば、ストーカーかよ」

「ねえ、こんなのと同じクラスとか、すいちゃんやばくない？」

「……」

視線がすいちゃんではなく俺に集まる。久しきすら感じる、多数からの本気の敵意。スバルの時とは比では無かった。

ヘイトを集める、という作戦は少なくともうまく行つたが、なんか思っていた形じゃない。

何か言わないと思うも、思わぬ状況に頭も口も回らない。

一方視線は動く。緊張ではなく警戒。窓越しに、真つ先に手を伸ばせるであろう男子生徒の挙動を伺う。

その事実に基づき、落ち着くように自分に声をかけながら、男の手が届かないように少し距離を取る。

じりじりとした時間の中、響く2限のチャイム。

合わせるように、「お前ら！ 教室に戻れ！ 授業始まるぞ！」と数Ⅱ担当の先生の声が響く。

「先生！ すいちゃんの事を助けて！」

「先生！ あいつ、やべえよ！」

「何の話？」

直後、数Ⅱの先生に生徒達が群がり、口々に危険を訴え始める。

頑張れ先生と頭の中でエールを送りながら、俺はすいちゃんに近づこうと振り返り、直後襟首を掴まれた。

「ぐえっ」

「行かせるか、このストーカー！」

「はあ！！ 流石に怒るぞー！」

窓越しの手がどンドン伸びて、俺を押さえつけんとする。

やり返そうにも、そんな事をすれば窓が割れて怪我人が出そうだ。

「分かった！ そっち行くから！ —— いい加減にしろー！」

転校初日、指導室

先生に連れられ、授業中の校舎の中を歩く。

聞こえてくるのは、授業の解説をする声程度。

独り言を言ったら聞こえちゃうかなと思ひ、少し歩くのを遅らせ、距離を開ける。

「——タロ」

『わん?』

「すいちゃんのとこに居てあげて」

『わん』

肩からぴよいと降りたタロが、すたすたとすいちゃんの元来た廊下を戻っていく。

その小さな体を見送り、俺は少し歩く速度を上げて先生に追いついた。

足音に気が付いたのか、先生がちらりと振り返り俺を確認。そのまま直ぐに振り返り、その後は終始無言のまま廊下を歩き、つくのは生徒指導室。

指導されるような事はないんだけどなあと思う俺を後目に、先生は扉を開けた。

「先に入って待ってろ」

「あーい」

言われるがまま、素直に入る。

一方先生は入らず、むしろ引き返して、指導室近くの職員室へと入っていった。他の先生でも呼んでくるのだろうか。初犯……では無いかもかもしれないが、無実の罪なので、三者面談は勘弁して貰いたい。

座っていていいものかもわからず、とりあえず暇つぶしがてら、魔力を操る練習をする。足に集め、ジャンプしたり反復横跳びしたりと、ぴよんぴよん動く。

文字通り体が軽い。重力が減った気分。だが、それに合わせて、目が霞む。いまいち、両方ともはうまく出来ない。

「んー?」

目と足のどちらも意識すればいいのかもしれないが、ピンとこない。

片足立ちのまま、グラグラと体を揺らす。

「やじろべえ?」

そんな俺に急に声が掛かって、吃驚してこけた。

ぶつけた場所をさすりながら顔を上げると、ちよこ先の姿。

どうやら1人の様で、両手には湯気の立つマグカップ。

「ちよっこーん。珈琲、ブラックでいい?」

「え? あ……大丈夫です」

どういふことなのか分かっていない俺を置いて、マグカップを置いたちよこ先は、指導室の戸を閉め、席に着いた。

「君も座って」

「あ、はい」

訳の分からぬまま、席に着くと、マグカップが差し出された。

中身はやはり、珈琲である。

「飲んでいいわよ」

「……いただきます」

最近の生徒指導では珈琲が出る物なのだろうか。

少し冷ましてから、口を含む。普通のインスタントのそれだった。

暫し無言のまま、お互いに珈琲を飲む時間を挟み。

その無言の時間に耐え兼ね、口火を切ったのは、俺だった。

「何でちよこ先が生徒指導を？」

「あの先生、本来授業中だったから、たまたま職員室に居た私が代理でね」

「……でも、生徒指導は指導担当の先生がいるのでは？」

「その先生も授業中」

「成程」

ならしやうがないかと、思う中。「それで」とちよこ先。

「実際の所、どうなの？」

その声色は、少し気まずそうな感じだった。

「なんか、厄介オタクとかストーカーとか勘違い野郎とかぼろくそ言われて、取り押さえられたらしいけど。体は大丈夫？ 怪我とかない？」

「怪我とかは特に。暴言については断固無実です。俺はすいちゃ——星街さんの幼馴染ですし、朝は事前に約束をしたうえで、一緒に登校しています。……まあ、何故か怒らせてしまったらしく、転校の挨拶では無関係と言われてしまいました」

自分で解説して、少しダメージをうける。流石にショックだった。

「成程ねえ」

ちよこ先が珈琲を一口飲んで、唇を湿らせる。

「まあ、私は朝、貴方とすいせい様と一緒に登校している姿を見ているから、貴方の言っている事が間違いとは思っていないわよ」

「そうなんですか？」

「ええ。幼馴染かどうかは兎も角、流石にあの光景見て、無理矢理付きまといたとは思わないわよ」

それはありがたい。信じて貰えるだけでした。

「あの先生も、貴方が妄言を吐いているとは思っていないみたい。ただ、あの場を締めるには、これが一番早かったから勘弁してくれって」

「それはまあ」

あの後、言葉通り大人しく廊下に出た俺は、畳んでやるとばかりに取り囲まれた。

少々懐かしさすら覚えたのだが、それは兎も角として。かなりのパニック状態だったから、あのままだと大なり小なり、怪我人はでただろうし、窓が割れたり等の被害も出た可能性がある。

あの場を収めるには、渦中の俺がきちんと裁かれる方向に進む方が良かった。それは間違いないから、先生の判断に対して何も言うことは無い。

「……」

ただ、先生に付いて行き際に向けられた視線を思い出して、珈琲を啜る。

そんな俺の前で、同じように珈琲を啜ったちよこ先は、表情を一変させ、真面目な顔になる。

「とりあえずは今日は此処に居てって。教室には戻らなくていいそうよ」

「嫌ですけど」

百鬼との約束もある。さっさと戻りたい。

だが、そんな俺の気持ちに反し、「此処に居なさい」と再度強く言われる。

「すいせい様が転校してくるにあたって、教師陣でもどうするかって話し合いはあったの。それで、何らかの形ですいせい様と関わった別の生徒へヘイトが集まるのも予期はされていた。」

ただ、ちよつとした嫌がらせくらいだと思っていて、ここまでの想定してなかったの。今、貴方のことを野放しにしたら、闇討ちまでありそうじゃない?」

「俺は別に構わないですけど」

「そういう訳に行かないでしょ」

ちよこ先があきれた様子を見せる。

「兎に角、大人しく今日は一日此処に居なさい。放課後に改めて教師陣が話し合つて、どうするか決めるから」

「大丈夫です」

「は?」

「俺に何かあつて文句の言う親は居ません。やりすぎなければ、相手も後ろ暗いでしょうから、問題になることもないでしょう。教室戻ります」

「ちよつ!」

生徒指導室より出ようとするが、それより早く早く追いつかれ、羽交い締めにかかる。

背中に驚くくらい柔らかい何かが当てられ、吃驚して固まる。その隙に俺はちよこ先

に引つ張られ、椅子に戻された。

肩を抑え、立ち上がれないようにしながら、先生は俺の前へと回り込んだ。

「貴方、強情過ぎよ」

「が、我を貫く所を弁えて居るだけです」

「ここはちがうでしょ」

そう言い、ちよこ先が溜息。

「ちやんとどう思うか考えてあげて」

「誰がですか」

「すいせい様よ」

「……へ？」

意外なような、そうではないような名前が出てきて、虚を突かれる。

「私は貴方達が幼馴染かそうじゃないかは知らないけど、あの光景見ていけば仲が良い事くらいは分かるわ。そんなすいせい様が、今の貴方にどう思うか、ちやんと考えてあげて」

ちよこ先が俺から手を離れた。立ち上がると思えば立てたが、そんな気分にはなれなかつた。

「私は保健室に戻るから。大人しくしていなさいね。喉乾いたとかがあれば、授業中に

でも、こっさり抜け出して」

「……」

無意識に、首が縦に動く。それを見て、「よろしい」とうなずいたちよこ先が、自分の珈琲を飲み切り、指導室を出て行った。

後に残された俺は、背もたれに身を預け、天井を仰ぐ。

まさかすいちゃんの名前が出てくるとは思わなかった。

俺の方は、同じ学校に通えるのが嬉しくて舞い上がり、盛り上がっていた。

2度と会えないと思っていたからこそ、余計に。なんとたつてすいちゃんは初めての友達だった。

だから、すいちゃんには楽しい学園生活を送ってほしくて。

ただすいちゃんは凄いから、きつと大変だと思つて。

その大変さの少しでも、肩代わり出来れば——いや、違うか。

「全部どうにかしようと思つた」

すいちゃんに向けられる物を、どんな形でもいいから俺に向けようと思つた。

「すいちゃんの気持ちかあ……」

俺と再会した時、一緒の学校に通えると分かった時、一緒に登校した時、ついさつき。すいちゃんがどう思っていたのだろう。

喜んでいた？ 楽しんでいた？ 悲しんでいた？

「難しいなあ」

例えば今朝の登校の時。一緒に道を歩いていたすいちゃんは、何を考えていたのだろうか。

「怒ってはいなかったよね。笑っていたし、ドヤっていたし」

先生からして、仲が良さそうに見えたというのなら、多分楽しんでいた、と思う。肩を並べて、話しながら。たまに蹴りが飛んできたり、不機嫌になったりはしていたけれど、概ね満足気だったと思う。

昨日遊びに来た時も、再会した晩も。すいちゃんの機嫌はジェットコースターのように無秩序に加速度的に変化はしたけど、トータルでいえばプラスだった……はず。

少なくとも、再会してから生徒会室までは怒る事は無く、見せていたそれは保育園時代と同じ、じゃれあいの一環、延長線のそれでしかなかった。

「じゃあ、ついさっきはっ」

生徒会室で会った時は、間違いなく怒っていた。

本格的に怒ったのは入ってからだけど、入る前から機嫌は良くなかった。

単純に考えるなら校門から生徒会室までの間に嫌な事があった、とかだと思う。だが記憶の限り、すいちゃんは八つ当たりのような事はしない。やるのは報復だ。

だから、俺に怒って、あんな事を言うという事は、間違はなく俺が怒らせたのだ。だが、やはり分からん。そもそも会っていないのに怒る理由が分からん。

「……んー？」

直接聞こうか。しかし、会話をして貰えるか怪しい。

後は、事情を知っていきそうなのは天音先輩だけど、真面目なああの人の事だから、スマホを持ち歩いていても、学校にいる間は原則電源は切っているだろう。

とりあえず、次の休憩時間に合わせてすいちやんにメッセージは送るとしても、返信が来るかは怪しい。正直八方手づまりだ。結局自分で考えるしかなさそう。

「しかし、暇だなあ」

自習しようにも教材は無いし、普段なら授業中と思うと、スマホも弄りづらい。寝てようかなと思いい、椅子を持って日当たりのいい窓際へと移動する。

窓からグラウンドが見えた。何処かのクラスが、マラソンをしているのが見える。

「寒い中大変だなあ」

秋も更け、冬の到来を感じるようになってきたから、猶更だ。

そろそろ鍋でも作るかなあとぼんやり思いながら、背もたれに身を預ける。ぎしりと、椅子が軋む音。しっかりと身を支えてくれる。

そのまま目を閉じ、力を抜いて。意思が沈む感覚――。

がらりと、戸が開く音。

「寝て無いですよー！」

慌てて飛び起きる。急な動きに若干の頭痛を覚えながら、入口の方を見た。

見覚えのない、大柄な男子生徒の姿があつた。観察するに、どうも先輩らしい。

「……………」

何なんだろうと思う俺に、先輩は無言で近づいてくる。

思いがけぬ状況に、椅子に座ったまま、成り行きを見守る俺。

先輩はそのまま俺の前に立つと、俺の事を見下ろした。

「あの……………」

「……………」

困惑する俺に対し、徐に振り上げられる拳。

俺の拳より一回りか二回り位大きなそれだ。

「あ……………そういう感じか」

漸く脳が状況に追いつき、そんな事を呟いた直後。

岩をも砕けそうなその拳が、俺めがけて振り下ろされた。

指導室、らうんどわん

反射的に動けたのは、どん臭さ故だ。

拳は確かに重いだろう、硬いだろうが見て取れる。ただまあ、それだけ。

大きく振りかぶって放つテレフォンパンチは、座っていた椅子をぐにやりと歪める事は出来ても、俺を挽肉にする事は叶わなかった。

——あれは当たったら死ぬかなあ。

俺は二度と役割は果たせないであろう、歪んだ椅子へ目をやる。先輩の拳が叩き込まれたそれだけで、パイプ椅子の座面は曲がり、可動部の金具は吹き飛び、脚は本来在りえぬ場所から畳まれている。

これが人間技なら、この人は多分、産まれる世界を間違えている。

「なあ、先輩。一応聞くんだけど辞めとかない？ 今なら見なかった事にするからさ」

「……」

「このタイミングだし、先輩のお気持ちは、誤解とはいえ察するに余りあるんだけど、それはそれとして流石にやりすぎとも思う訳で」

「……」

「いい？ 先輩のパワーで人間殴つたら、普通にミンチだよ？ ハンバーグまっしぐらだよ？ ハンバーグ作るなら普通に合挽で作つた方がおいしいと思うよ？ そうだ、今度御馳走するよ。繋ぎ無しの肉々しい奴。ほら、食べたくなつてこない？」

「――！」

「こないかあ」

床を蹴つて引く。直後、振り下ろされた拳が、今度は床を陥没させた。

あまり床を殴らせ過ぎると、穴とか開きそうだ。これは大変。

部屋を縦断するテーブルの上を転がり、対岸へ。

その場にあつたパイプ椅子をつかみ、思い切り扉へと投げつけた。遮られる事無く椅子と戸がぶつかり、大きな音が鳴る。

これで音は3回。パイプ椅子のひしゃげた音と、床の砕かれた音、今の音。

――さて、どうだろ。

部屋の外の様子を伺いつつ、先輩へ意識を戻す。

俺がパイプ椅子を投げた事に驚いたのか、固まっていた様子だが、それも解消されたようだ。

今は右から回るか左から回るか考えているようで、反復反横跳びのように小刻みに左右へ揺れている。

先輩の腕力なら、テーブルを砕いて直進したり、そもそも掴んで投げつけたりといった事も出来そうだが。

その癖、パイプ椅子をひしやげさせたり、床を陥没させるパワーで人の事は殴れるらしい。その様にちぐはぐな印象を受ける。

——まあ、時間を稼げるなら何でもいいか。

先輩に合わせて左右に動きつつ、部屋の外の様子を探る。

締めて3回、無視するにはやや事件性を感じる音が立て続けになった訳だが。

扉をノックされる事が無ければ、外に人の気配も感じない。

職員室に誰もいないという事も、また両方の音がどちらも職員室に届かなかったという事も考え辛いあれば、そっち系と考える方が自然だろう。

念の為、最終確認がてらに、残ったもう一脚を手に取り、今度は窓へ向けて投げつけた。

再び遮られる事無く窓へと辺り、音が響くも、窓は割れない。

——確定。

閉じ込めたという事は、相手もやる気なのだろう。

一息つき、マグカップを手に取って、残った珈琲を呷る。

そこを隙と見、先輩がテーブルをぐるり半周して、俺へと詰めてきた。

「最後通告です。辞めないとやり返します」

俺の言葉に、先輩は拳の振り下ろしで答えた。

ワンパターンの技。先の2回までと違い、体を逸らし、半身での回避。

「言いましたよ」

床を砕く拳の圧を受けながらも体勢を整え、がら空きの顔面へ、すいちゃん宜しく蹴りを叩きこんだ。

直後、蹴り足に覚える違和感。思わず引きそうになるのを堪えながら振り切り、先輩の体を蹴り倒す。代償に折れていないか不安になる程の傷みが、足を襲った。それほどに在りえない硬さであった。

「——まあ、なんとなく分かっていただけ」

腕力だけでパイプ椅子をひしゃげさせたり、床を陥没させられるとは思えないし。

とはいえ、蹴り足への感触は良好。多少頑丈だったとしても、十二分なダメージは与えられた。

そう思っていたから、何とも機械的に、力んだ様子無く上体を起こした先輩の姿には、流石に度肝を抜かれ、明らかにあらぬ箇所曲がっている鼻には、肝を冷やした。

「……やった俺が言うのもあれだけど、痛くない？」

折れているよな、あの鼻。でも鼻血とか出てない。個人差だろうか。

困惑する俺を前に、首をならして。拳を握った先輩が、床を蹴る。

相変わらずの、テレフォンパンチ。コンビネーションも無く、左右交互に、1発ずつ。当たれば終わりだが、どうという事も無い。特段動きが早い訳でも無いから、動きは十分捉えられ、足技を警戒する余裕もある。もう少しなれば反撃する余地までありそうだ。

先の違和感と合わせて考えるに。

——武道も喧嘩の経験も無い。フィジカルのみ。まあ、それが厄介だけど。

蹴り足に感じた頑強さ。正直あの一撃を入れてなお動いてくるような相手への有効打の持ち合わせは正直怪しい。何発も蹴っていたら、足の方が駄目になりそうだ。

一点突破で人体の弱点である鳩尾とか顎とか狙えばいいのか。しかしそれが通るなら、最初の顔面への一撃でどうにかなっていそうな物である。

「んー……こういう時は基本的に忠実にいくか」

拳に合わせ、懐に侵入。そのままボディブローを放つ。蹴った時同様、拳に感じる痛み。今度は無理せず直ぐに引き、虫を払うような先輩の動作を躲しつつ、距離を置く。力自慢との喧嘩なら、基本力を乗せづらいインファイトに入ってボディで削る。掴まれば終わりだが、そこは気合。

「死中活あり……いざい」

床を蹴る。

カウンターを合わせようとしたらしい、先輩の拳をかいくぐり、ボディーへ2発。硬さは変わらず。

切り替えて、腕による横なぎを再三躲し、追撃。しかし硬い。ただ、制服がクツションになつていよう、拳は暫く持ちそう。短く息を吸い。止めて一気に近づぐ。

腕を交わし、連打。人間なら何かしらの内臓のありそうな部位を見繕つて叩く。

そんな俺が相当鬱陶しいよう腕をでたらめに振り回す先輩。

タロが居ない分、普段より死角が多い事もあり、安全重視で無理せず、数打で一度離れ、観察を心がける。

——ダメージは無いか。

何度目かの連打を挟み、離れる。普段より少し多めに。乱れた呼吸を整えつつ、ひり付く両手を振つて冷ます。

俺を睨む先輩の様子は、イラついているだけの様だ。鬱陶しい相手に対する精神的ダメージなら兎も角、肉体的な物は未だ感じさせず、良くも悪くも動きは変わらない。

とはいえ、流石に違和感がある。幾ら硬いとはいえ、殴られた衝撃が全く無いという事は無いだろうし、あれだけ暴ればそれだけで息も切れそうな物だし、今なおもつて、

一言も発しない先輩。イライラしていれば怒号の一つでもあげたり、そうでなくとも息を荒げそうな物だ。

「……………」

軽く指を動かし、痛みが取れたことを確認。その場で跳ねて、足の具合も確かめる。

1 かーい。2 かーい。3 かーい。

4 回目の着地に合わせ、地面を蹴る。虚を突けたようで、動けぬ先輩の、左前方。斜め前。

体を揺らし、足を振り上げ。狙いは鳩尾の辺りめがけて足を振るい——直撃。右足に痺れ。

仰け反りながらも耐える先輩を前に、足を引いて下がる。

「蹴りは多少通るんだよなあ」

となると、やはり蹴るしか無さそうか。しかし、ダメージが通りそうなのは回し蹴りのような威力の高そうな物だけの様子。

殴る時と違い片足になるから、外したり通らなかつたときの反撃を避けられない可能性があるし、蹴り足を掴まればそれだけで危険と、ハイリスクではあるのだが。

とはいえ、他に選択肢が無いのも事実。此処は腹をくくるしかない。

「まあ、すいちゃん直伝の蹴り技見せるか」

本人には伝授しているつもりは無いだろうけど。

気合を入れ直し構えようと腕を上げた時、先輩の様子の変化に気が付いた。

先程まで、構えらしい構えを取ることなくいた先輩が、両手を体の前へ持つてきて、がっちり固めている。

ボクシングでいう所の、ピーカーブースタイルのフォームに近い。

ボディーは開くが、顎を守り1発KOを防ぐ算段の構え。どつしりと腰を据えての打ち合いがメインとなる。

成程、先輩向きではあるが、知っているなら、何故最初からやらなかったのか。

疑問を抱く俺の前に、先輩の構えは更に変わり、上体をやけに前へと倒す。

このまま、上体を∞の形に動かせば、まさにピーカーブーであり、割とどうしようもなくなくなるのだが。

その様子は無く、先輩の状態は更に倒れ、地面と平行になろうかというところで止まった。

——なんだあれ？

以前テレビで見た、擦り足の稽古をする相撲取りの様相だ。違うのはやはり上体の倒れ具合。

あの姿勢なら、確かに俺としても蹴ったり殴ったり辛い。ただ、それだけ。

ただ、あそこからどうするのだろう。

あの姿勢では動くことはままならない。動くために上体を上げれば本末転倒だし、摺り足で追いかけてくるなら流石に逃げ切れる。

実際、どれほどの時間がかかるかは分からないが、俺が此処にいる事をちよこ先が把握している以上、その内様子を見に来るはずで、そうすれば事態には気づくはず——。

「あれ？」

思わず言葉が漏れた。何か変わった気がする。

先輩をよく観察すれば、成程、その背中に蠢く4つの瘤が現れている。

「いや、おかしいだろ」

眩くと同時。先輩の制服を突き破り伸びる、4本の腕。

先輩の腕の太さには及ばないが、明らかに長く、指導室はカバーしていそうだ。

新たな腕は、まるで具合を確かめるように数度開閉を挟み、最後は強く握られる。

狙いを察し、溜息一つ。中断していた構えを取り直した。

「……らうんどつー、ふぁい！」

直後、4本の腕が俺を目がけて振るわれた。

すいせいは授業を聞きながら、ちらりと視線を脇へと落とす。

空っぽの机。本来いるはずの幼馴染は、騒動の元凶という事で連行されていき。

芸能界でもそうはいないであろう、圧倒的プロポーションの自称保健医が持つて行つたから、鞆も無い。

——違うか。

考えを改める。加害者では無く被害者として保護された、が正しいのだろう。

あのままでは、どうなつていたか分からない。実際、引き金を引いたクラスメイトは、あれから顔色が悪いし、クラスメイトの中でも、心配そうな表情を浮かべる者がちらほら。

ただ、つまりそれは、クラスメイト達にとって、自分の幼馴染が一定以上の関係値を持つているという事でもある。

保育園時代の様に、1人で過ごしていない、という証左。

昨日、彼が危険だと思つたからという理由だけで家まで来た、スバルの存在もまた、そう思える理由であつた。

なら、何故と。胸中でのみ形となつたその言葉は、誰に聞かれることも無く消えていった。

指導室、らうんどつー

ボックスステップをすると、目の前を拳が通過していった。

着地後即、右へ。拳が通過。足は止めない。即動く。

右上左前下上左右前上上左――。

悲鳴を上げる間も無いラツシュ。観察が足りないせいで、どう動けばいいのかの判断がつかず、兎に角動き、兎に角躲す。

――部屋が狭い！

これが通常の教室の広さがあれば、腕の長さにまだ余裕もありそうだが、残念ながら指導室にその広さが必要無い為、すこんぶ部屋と同じハーフサイズしかない。

必然、攻撃の密度は上がり、反撃まで行かずとも、せめて届く位置まで前進しようとするが、攻撃はそのまま壁となっていて、阻まれる。

拳句、お洒落にでも目覚めたのか、さつきまで振り下ろしのテレフォンパンチしか打たなかったくせに、正面のストリートや左右からフック等、撃ち分けもしてきた。……いや、あれは振り回しているだけか？

幸い、まだ目で追える速度であり、こちらの動きを誘導するような事の無い、シンプ

ルに避ければいいだけの状態なのでどうにかなっている。

しかしこれで速度が上がったり、俺の動きを誘導するように頭を使い始められると辛そうだが。

増えた腕を制御しきれていないのか、時々テーブルに手をぶつけて、がたがたという音を響かせている辺り、その心配は少なそうだ。

やーい下手くそ。

「——ッ」

反応が遅れたストレートを前に頭を逸らすも、躲しそびれ、拳は俺の頬を掠っていく。見えているだけで遅い訳では無い速度の拳。掠っただけでも熱混じりの痛みが走り、顔がゆがむのを感じる。

油断すんなど自身に語り、意識を改めた所で、疑問を覚えた。

余計な事を考えたが故の痛みだが、それは余計な事を考える、少し余裕が出たという事でもあった。飛んでくる攻撃の密度は変わらないのに、一体何故か。

上左前右左右上前左——。

相も変わらず飛んでくる拳を躲す。だがやはり僅かに余裕が出来ていた。理由が分からぬまま、観察と思考し、合点がいく。

——テーブルか。

部屋を縦断するテーブル。このテーブルは前面に板がついているタイプのテーブルを2台、正面を合わせて置いてある。

そのせいで、アツパーカット気味の下からの拳が放てないらしく、攻撃パターンは左右と正面、上からへと減っていた。

他と違い、下からの攻撃だけは、腹部へ当たる可能性があるから前に進んで躲すが出来ないせいで、他の攻撃の回避に影響が出ていた。

それが消え、好き勝手回避できるようになったおかげで、余裕が出たらしい。

無論、こちらから攻勢に出る、という事も出来ないが、それについては未だ有効打を思いつかないから問題は無い。

ストレートを躲す。そのまま両ひざを曲げきり、床に這いつくばった。テーブルの影に隠れながら、ざっと見渡す。

削られた床と、先輩の足が見えた。びゅんびゅんと、上からは風切音。仰向けになり見上げれば、拳が空を切っていた。

テーブルの影に隠れるのは見えたはずだが、打ち下ろしの拳が来る気配はない。

——見えていない？

疑問を覚えた直後、攻撃が止んだ。

何事かと思う間もなく、再び放たれたらしき拳が、容赦なく降り注いできた。

慌てて転がり、テーブルの下に潜り込む。俺の居た場所を、拳が叩き続ける。

お肉柔らかくされちやうと思いつながら、テーブルの下から先輩を見る。相変わらず、見えるのは足だけだ。顔を覗かせている様子は無い。

テーブルの下で四つん這いになり、可能な限り音を出さないようにして移動する。拳の降り注ぐ場所は変わらず、追いかけてくる気配はない。

少し待ってみるが、やはり変わらない。

——やっぱり見えている訳ではないのか。

となると何で追いかけてきているんだろう。オーソドックスな所だと、音とかだろうか。

ただ、音で追うには、些か拳を地面に叩きつける音が煩い気がするけど。

一応試す為、俺は上靴を脱いだ。そのまま、思いきり幕板を上履で叩き、テーブルの下から、成り行きを見守る。

音などで反応しているなら、叩いた辺りを攻撃してきそうなものだが。

——変わらん？

叩いた場所も今いる場所も関係なく、相変わらず、俺がもともと居た辺りに拳は注がれていた。

音に反応しないのなら、いったい何にと、思いながら首を動かし、それを見つける。

視線の先。テーブルの外に、蜃気楼のような空間の歪みが、何やら丸っこいシルエットを描いている。

はて、そういえばかつて、似たようなシルエットを見たことがある気がする。

思い出そうとするも、その間にその何かはその場を移動し、目の前へはこぶしが落ちた。

「……………ふむ」

これは、そういうことだろうか。決めつけるには、さすがに判断材料が乏しい。見間違いの可能性もあるし。

……いや、その可能性の方が高いか？ この目になってから、あんなふうに見えたことなんて無いし。

とはいえ、今この室内で、本来なら起こりえないような事が起きて、それが無関係とというのは、些か考え辛い。

それに、先輩の反応がどうにもワンテンポ遅く、一度止まってから補正している様子が、まるで教えて貰ってから修正しているように見えてきた。

——さて、どうやって確かめるか。

スマホを取り出し、電源を入れる。

時計アプリを起動。音量を最大にして、タイマーを10秒に設定。

そのスマホを幕板の下の隙間から、先輩目がけて滑らせた。

数秒と立たず、スマホは先輩の元へ。丁度顔の下とまではいかないが、それでも視界内には入っただろう。

頭の中で数字のカウントをしながら、テーブルの下を移動する。

——3, 2, 1

拳が床を殴る音を貫通して、なお届く、けたたましいアラームが響いた。

そして拳は、今尚、殴る位置を変えない。

テーブルの下を抜け出し、床を蹴る。先輩へ駆け寄る。

先輩はそうしてなお、顔を上げる様子が無い。拳の位置も変わらない。

チャンスは此処しかない。

駆け寄り放つは、サッカーボールキック。

頑丈さを鑑みて、手心は不要と判断。振り上げた足を、思いきり先輩の側頭部へ叩きつけた。

此処までの高い位置を狙う蹴りと違い、低い所を狙う蹴り。

痛みと共に十分な感触を右足に受けながら、俺は勢いのまま右足を振り切る。

結果、直後に響いたのはゴンツツという鈍い音が、壁から。

視線を上げれば、壁に、先程までは無かった黒い跡。その後の下に、丸い何か転がっ

ている。

視線を戻すと、首を失った先輩が、それでも姿勢を保ったままで其処に居る。

「——ッ！」

咆哮を上げそうになる。

しかし、それを遮るように、真横からの衝撃に俺は弾かれた。

弾いたものを見て、その姿に驚き固まったせいで、窓に体をぶつける。割ればそのまま飛び出していきそうな勢いだったが、幸か不幸か窓が割れることは無く、俺の身体は指導室内に取り残され。

次の瞬間、目で捉えたのは、俺に向かって振り下ろされる拳の群れであった。

ぎりぎり、1発目を頭を動かして躲すも、続く2発目を躲せず、下から上へ、顎を撃ち抜かれる。ちかちかと、目の奥に火花が散る。

3発目は腹部、4発目は左のこめかみ辺り。

5発目で漸く反応出来て、右手でもって、それを防ぎ、合わせて左手も上げ、両膝も立てて、防御姿勢を取れた。

腕に衝撃。時折、フック気味の起動を描いた拳が体の側面に当たったり、ガードを抜けたストレートが体を叩いたりもする。

——いいの貰っちゃった。

もつとしつかり守らなくてはと思うも、顎を撃ち抜かれたせいで、体がぐらつくのを感ずる。

一発KOになってもおかしくなかった。

だが、おかげで少し、頭が冷えた。

「はあ……ふうふう……」

深呼吸を1つ。殴られ続けているから、呼吸が細い。続けて2回、3回と息をする。細く早くなった分、どうやらパワーは落ちていているようで、ミンチになる心配はなさそうだった。

だが、連打の雨は酷く、今は動けない。だからこそ耐えて、観察に徹する。

——これ以上、あんたに付き合ってもらえないんだよ、先輩。

すいちちゃんの事を考えるのに、アンタ達は邪魔だ。

ちよいちよいと背中を叩かれ振り返ると、後ろの席のクラスメイトが手紙を差し出してきた。

誰かに渡せばいいのだろうかと思いつながら、それを受け取るスバル。

見たら前に回してと、そう言って、手紙を渡してきたクラスメイトは視線を下げた。

「どうやら回覧板らしい。何だろうと思ひながら、教科書を壁にして、スバルは手紙を広げる。」

「なっ」

「ん？ どうした、大空？」

「あ、いや。何でもないです」

えへへと愛想笑いで誤魔化し、紙に視線を戻す。

『すいちちゃんの幼馴染を語るやばい奴w』

そんな言葉が書かれた紙には、まさにスバルがつい先程まで話していた、友人の似顔絵があつた。

誰が描いたのか、意外と上手い。

——いや、違うし。

手紙には詳しい情報の記載は無い。ただ、嘲りの意思だけが伝わって来る。

真実を確認しようにも、流石に授業中。他の生徒に聞くことも出来ないし、まさかスマホを使って本人に直接尋ねる事だつて叶う筈も無い。

——ていうか、有り得くない？

手紙の内容を思い出し、昨日の事を思い出す。

お互いの口から、昔馴染みとか、同じ保育園の出身的な話は確かに出ていたはずだ。

あの瞬間だけ、スバルをおちよくる為に口裏を合わせた可能性は、まあ無い事も無いが、流石に考えづらいし、それを成り立たせるだけの仲は良さはあるはずだ。

仮にあれで実は何の関係も無い2人とかだったら、双方の正気を疑ってしまう。

——どうなっているんだろう。

なぜこんな話が出たのか。

少なくとも2度教科書を借りに来た時は至って普通だった。

思い当たる節としては、授業開始直前に起こっていたらしい何か。

すいちちゃんを一目見ようとしている生徒がごった返していたから、それで何かあったのかな程度に考えていたのだが、それだけじゃなかったのかもしれない。

——授業終わったら、確認しに行こ。

それまでは、もやもやとした感情を抱く事になるが、それは仕方がない。

八つ当たり気味に、自分の元へ流れてきた回覧板は自分の所で止めてしまう事に決め、なるべく音を立てないようにびりびりに破り、丸め。

後で捨てようと机の上に放り、スバルはシャーペンを握り、授業へと意識を戻した。

指導室、らうんどすりー

如何程の時間が経つただろうか。漸く拳の雨が止む。

罨かもしれない。ガードを解くなど考える俺の頭に反し、身体は腕を下ろした。落ちた、という方が近いか。

——力が入らん。

これはまずいか。力を入れられるようになるには、まだかかりそうだ。

この間に、もう一度殴られれば、流石に耐える自信は無い。

如何せん、気合でどうにかなりそうな物でも無かった。

「やっぱりまだ生きてるっばいな」

そんな声が聞こえてきた。

男——というよりは少年よりだろうか。

「いや。流石にこれ以上はまずいでしょ」

もう一人、別の声。やはりこちらも、少年寄りだ。

「バカ！ こいつが居たらすいちゃん危険いだろ！」

「そうかもしれないけど」

「それに、これだけやられて大丈夫って事は、人間じゃねえって。なら、こいつはきつとすいちゃんとか生徒会の先輩に取り入って、なんか企んでいるんだよ。あの目、見ただろ」

「……」

壮絶な勘違いが生まれているのが聞こえる。なんで生徒会の話が出ているのだろう。勘違いと告げてやりたい所だが、声が出ない。出た所で、聞く耳持つかも怪しいか。どちらにしろ、動けないと話にならないので、雑談してくれている事を良い事に、体の具合を検分する。

全身痛い、骨が折れているかは良く分からない。

呼吸が浅い。深く吸おうとすると、体が痛む。我慢して、一呼吸、二呼吸。

「それは関係ないんじゃない？ 百鬼先輩に憧れてるだけでしょ」

「バツ！ ちげえよ！」

「……あ？」

思わず声が出た。

人の恋路をとやかく言いたくないが、流石に聞き捨てならない。

「おい……こら！ もしかして、すいちゃん以外の理由がッ」

「すいちゃんって呼んでんじゃねえよ」

顔に衝撃。そのせいで言葉が途切れる。

そのまま髪を掴まれ、持ち上げられて。

先の一撃を相まって、良い気つけだ。明るくなった視界が、室内を捉える。

真つ先に目に入るのは、ミオ先輩のような三角耳をこしらえた、小生意気そうな目に逆立てた髪の少年。今まさに、俺の髪の毛を握り持ち上げ、ねめつけてくる男である。

その後ろの方に、先輩の体。すでに立ち上がっていて、失ったはずの頭部には、眼鏡をかけた大人しそうな顔が生えていた。

更に視線を巡らせ、見つける。恐らくはさつき見えなかつた固まつた蜃気楼のような何かの正体。きんつばに近いフォルムだが、垂れ耳のそれはどうやら犬らしい。

「——ッ！」

腹部に鈍い衝撃。ねじ込まれるようなその一撃に思わず吐き出す。

「無視してんじやねえよ」

流石に効いた。先輩と違って、ある程度殴り方も知っているらしい。

むせる俺を見て、先輩が慌てた様子で声を上げた。

「ちよ、ちよつと、ケイ。やっぱりやりすぎだつて」

その言葉に、ケイと呼ばれた少年が先輩の方を振り返る。

「大丈夫だつて。悪いのこいつなんだから」

——悪いのは俺……?」

その言葉に対し生まれた気持ちには、理不尽への怒り——ではなく、納得だった。それほどずとんと、その言葉は胸に落ちた。

この状況は、身から出た錆。成程、確かに。

少年の言葉を思い出す。

あの目、というのは今朝の生徒会室だろう。恐らくはすいちゃん見たさに生徒会室へ来たこいつらを、俺は睨み、追い払った。

それでここまでするものかと、思わないと言えば嘘だが、想い人を前に何かを企んでいるのでは、と考えたこいつの気持ちは、確かに分からなくはない。

それに思い出した。元々機嫌は良くなかったけど、よりすいちゃんが怒りだしたタイミングは、確かこいつらを追い払った直後である。

それが、フアンを邪見にしたからなのかは分からないが。少なくとも、あの時の俺の対応はミスだったらしい。

——まあ、でも。

「だからって、こここまでされたら流石に我慢するつもりは無いけど」

「あ?」

俺の言葉に疑問符を浮かべたケイ君とやらの横面を、思い切りぶん殴る。

いい感じに、腕全体に魔力が乗っているのを感じながら、振り切る。

ぶちぶちという音が、俺の頭から響く中、ケイ君はきりもみしてとび、壁に当たる。

眼鏡の顔と、恐らくは精霊であろう犬の視線が、ケイ君の方へと向く中、俺は床を蹴った。

眼鏡の顔が、俺に気が付いた。慌てた様子で四つん這いになる。先輩の身体の背中に生えている4本の腕が動き、俺へと向かってきた。

今までと違い、狙いは真つすぐ。多少の時間差はあるも、ほぼ4本同時の攻撃は、しっかりと俺を狙っている。

——全部は無理か。

顔を狙う物を避け、前進。

腹部狙いの一撃を僅かに体を逸らす。躲しきれず体に掠るが、無視して前進。

そのせいで肩のあたりを狙う一撃は一切躲せず、右肩に拳が当たる。そのまま弾き飛ばそうとする拳を、無視して前進。ガクツつと鈍い音が右肩から響いた。

足を曲げて屈み、顔を狙った四本目を躲しつつ、左手で右腕を掴んだ。

一息つき、腕が引かれるのに合わせ、床を蹴りながら、右腕を嵌めなおす。

「ヒッ」

引きつった眼鏡の声。

四本腕の全てが先輩の元に戻るのに合わせ、俺も傍に着いた。四つん這いの姿勢のまま、恐る恐る見上げてくる眼鏡を前に、俺は男の眼鏡を奪い取る。

「歯を食いしばれ」

「ゆ、許して」

「ああ。一発で許す。いくぞ、三、二、一」

ギョツツと眼鏡の少年が歯を食いしばったのを確認して、ケイ君同様にその頭部をぶんどる。

ケイ君と違い重く、殴り飛ばすことはかなわず、代わりに床へ叩きつける。

直後、大柄な体が土くれの様に崩れ、相応の背格好の体が残る。

「土の塊だったのか。そりゃ硬いし重いわ」

押し掛かれなくて良かったと思いつつ、奪った眼鏡を返し、最後、視線は妖精の方へ。

「分かっていると思うが、見えてるぞ」

その言葉に、妖精の体がびくりと震えた。

「どうするっ？」

流石に限界に近い。逃げ回られたら、捕まえる前に力尽きそうだ。

故に大人しく出頭して貰えると助かるのだが。

そんな事を思っていると、やけにあっさりとがらりと扉が開いた。入ってきたのは、今朝生徒会室を覗いていた、最後の一人。

「僕が殴られます。僕がお願ひした事なので」

「……潔良し。歯を食いしばれ」

目を閉じ、強く歯を食いしばったのを確認して、俺は最後の一人も殴りつけた。

「——あ——」

右肩を抑える。久々に外れた。しかもその腕で2度も殴ってしまった。

まあ、殴れたという事は動いたという事だから、とりあえず問題は無いだろう。

残る鈍い痛みを感じながら軽く腕を回しつつ室内を見渡して、溜息を漏らす。

——どうしようかなあ。

正直面倒くさい。無視してもいいのだが、俺の現状が悪化しそうだ。

体の具合を確かめ、行けそうだなと判断。室内に入り、3人の後輩たちの襟首をつか

む。

「おい、妖精」

妖精に声を掛けると、びくりと体を震わせた。

無視して言葉が続ける。

「こいつらの事を保健室まで運ぶけど、お前は どうする?」
「……」

ふわり飛んだ妖精が、俺の前に移動する。

何なのかと思っていると、短い手足を広げ、体を大の字にした。
どういふつもりなのか考え、もしかしてと考えに至る。

「ケジメをつけろと?」

「……」

コクコクと首を縦に振る。

……大丈夫か? 潰れたりしないだろうか。

まあ、殴れというのなら。

「歯を食いしばれ」

「……!」

ぎゅーつと食いしばっているように見える。

そんな妖精の横顔に裏拳を叩き込んだ。小さなその体が、ぴゅーつと飛んでいき、ベ
ちやりと壁にぶつかる。

「……」

めっちゃ申し訳なくなる。

後輩たちを引きずりながら近づき、壁にへばりついていいる妖精の様子を確認する。

左手に握ったケイ君を落とし精霊を壁からはがした。

ぐるぐると目を回しているが、一先ず生きてはいるらしい。運ぶために頭に載せ、ケイ君を拾い上げて保健室を目指して歩き始めた。

机の上でしよんぼりしていたタロが、何かに気が付いた様子で顔を上げた。

尻尾を勢いよく振り始めるも、直ぐに何かに気が付き、落ち込む。

「……終わったの？」

『わん！』

「そっか。大丈夫？」

『くーん』

しよんぼりする子犬の守護霊の頭を、ミオは撫でてやる。

とりあえず、無事ではあるらしい。そうでなければ、タロが気付くことも無かった筈だ。

だが無傷という事も無いようで、心配そうにしているタロは、そわそわと机の上を移動している。

「いいよ。行っておいで」

『わう』

「大丈夫。怒られたら、私が怒ってあげるから」

そもそも守護霊に自分以外を守れ、というのがおかしな話だ。

ミオの言葉に腹をくくつたらしく、タロはミオの机の上を降りて、主人の元へ走っていく。

その小さな体を見送り、ミオは視線をフブキの方へと向けた。

向けた先で、フブキと視線が合う。視線が合った状態で、フブキはスカートを叩いて見せた。

その動作が、スカートへしまったスマホを指している事に気が付き、ミオは内容を確認しようとし、授業中の為に躊躇う。

「先生ー」

その間にフブキが動いた。手を上げて、立ち上がる。

「お腹痛いので、保健室行ってもいいですか？」

「……いや、白上さん。元気じゃない？」

「いえ。もうねじ切れちゃいそうです」

いたたと、わざとらしくお腹を押さえるフブキ。

そんなフブキに何処か呆れた表情を浮かべる教師は、しかし溜息をつき、その言葉を

認める。

「……そう。1人で向かえるか？」

「大丈夫です」

「じゃあ、いつてらっしゃい」

「はい」

ぱたぱたと小走りに教室を出て、それを維持したままフブキは廊下を移動する。

誰がどう見ても仮病である。だが、強くは出れない。

それだけ、幽世出身者にとって、白上の名前は無視出来ない。

たとえ教師と生徒という立場にあっても、その正体が幽世出身の狸の妖獣である以

上、白上フブキがカラスは白と言えば、教師にとってカラスは白なのだ。

——すみません。

目が合った大神は、教師へ頭を下げる。同じくぺこりと大神へ会釈を返すと、教師は「再開するぞー」と言つて、授業の続きを始めた。

——それにしても。

黒板を見ながら、ミオは思う。

これで2度、ミオは何も出来なかった。1度目は拉致された後輩を見つけられず、今回はそもそもタロが来なければ事態に気づけなかった。

そもそも契約外で、必要が無かったと言えばそうかもしれないが、今後、もしもの時を考えた時に、このままであることは良しとは出来ない。

——どうしようかな。

転校初日、保健室

最後に目を覚ましたのは、最後に殴った相手であつた。

暫しぼんやりとした後、痛みを認識して、殴られた頬を抑えるまで一緒。

本当に仲がいいんだなあ、そんな事を思う。

少しして、痛みがマシになつたらしく、後輩は周囲を見て、俺を見つける。

「——あ、先輩」

「よう、起きたか」

周囲を探り、ベッド脇に座る俺の姿を目で捉えた彼が、俺に声をかけてくる。

「ここは、保健室ですか？」

「ああ」

「二人は？」

「怒られてるよ」

あそこ、と指を差せば、正座した状態で、眼鏡の後輩はちよこ先、ケイ君とやらはフブキ先輩に怒られている。

俺の自業自得の側面もあるし、告げ口は可哀想かなと思わなくも無かったが、保健室

を利用する以上は経緯を話す必要があるし、フブキ先輩は保健室まで乗り込んできて、どうしようもなかった。一応便宜を図ってもらう事はお願いしておいたので、強制送還のような事は無いと思うけど、暫くお説教は止まらないだろう。

「……因みにどれくらい寝ていたんでしょうか？」

「今は4限の途中だから、まあ2時間弱くらい。運動部とか入って、もつと筋肉つけた方がいい」

「考えておきます」

「ところで、お前さんはあれか？ 異世界出身なのか？」

それなら不知火さん辺りに差し出せばいいかなと思いつながら尋ねると、後輩は驚いた顔を見せる。

「……先輩、どこまで知っていますか？」

「あの眼鏡が魔界、あのケン君とやらが幽世出身なのは知っているし、お前と一緒に居たような精霊の知り合いもいる」

「……何でも知っています？」

「まあな」

詳しく説明する気も無いので、適当に返す。

察しがいいようで、きちんと意思は伝わったらしい後輩は、苦笑いを浮かべた。

「僕は普通にこの世界生まれの此処育ちです。見たらし——精霊とは、たまたま出会って、意気投合しただけですよ」

「成程。なら、差し出し先は居ないわけか」

ストレートに学校かこいつの親にでも告げ口すればいいだろうか。ただ、色々説明がしんどいのはある。

少し悩み、言つて聞かせればいいのかと思いなおし、口を開いた。

「きちんと考えろよ」

「え？」

「お友達の事だ」

視線で、絶賛怒られ中の二人を示す。しつかり正座させられ、くどくどと延々お説教されている二人。

聞こえてくる内容は、魔界でのルールとか現世に生きる者としてとか、そんな内容。

もし一般的な生活をしていたら、今聞いていたのは——今日の4限は体育だから、特に無いか。多分持久走させられていたと思う。

「それは……人間ではない彼らとの付き合いはやめろという事ですか？」

「違う。正体の秘密の方だ。君達がどういった経緯で、お互いの秘密を知ったのかは知らん。ただ知った後、忘れる選択を取らなかつた以上、君には普通に生きていけば起こ

りえなかったことが起こるかもしれないし、それは命に係わる事かもしれない。今日もそうだ。君達は多分、お互いの秘密を知らない、全員ただの人間同士と思っていれば、3人仲良く俺の闇討ちに行こう、なんて考えなかっただろ？」

「……そう、ですね」

「でも来た。秘密を知っていて、3人ならやれると思ったから。結果、俺にぶん殴られて気絶だ。だが、もし俺がもつと過激で、敵は殺すって考えているような奴なら、今頃全員死んでいたぞ」

「……」

自覚があるのだろう。押し黙る後輩。

「何かあった時、君には自衛手段が無い。追いかけられれば追いつかれるし、応戦しようとしても効かない。無力だ」

「うっせえ！ そいつに何かあったら俺が守るっての！」

「……」

横槍を入れてきたのは、ケン君とやら。フブキ先輩の説教を遮り、俺に向けて牙を剥いている。

そんな彼を見て、思わず溜息が漏れた。

「守れていないから、こいつは今、保健室のベッドの上にいるんだろ。お前は大人しく説

教されている」

「いのー」

取っ組みかかろうとしたのか、立ち上がろうとし、その直前にフブキ先輩に取り押さえられる。

「白上の言葉を無視するとは、随分と躰がなつていませんね。一度、分かせておきましようか？」

白上さんモードだった。情けない悲鳴がケン君のもとから聞こえる。物理はミオ先輩任せだと勝手に思っていたが、決してそんな事は無いらしい。

「まあ、ああいうことだな」

「……はい」

驚いたその表情は、恐らくケン君が成す術無く、取り押さえられた事に関する物だろう。

「付き合うな、なんて言わない。俺がやりたくない事を、君に強要出来る筈もない。ただしっかり考えるなり、話し合うなりはした方がいい。少なくともただの人間同士で、仲良しこよしっていう訳じゃないんだから」

「……因みに先輩は僕と同じで、この世界生まれのこの世界育ちなんですか？」

「ん？ ああ、まあそうだが」

何を急にと思う俺。そんな俺へ、後輩が言葉が続ける。

「なら、先輩はどう決めたんですか？ その……周りの付き合い方」

「俺のは参考にならんから聞かない方がいい」

それに、この世界の尺度で言えば、今の俺は人間かどうか怪しいラインである。

参考にするには向かないだろう。

「お願いします。教えてください」

「……」

断ったつもりが、詰め寄られる。答えないと、引き下がらなそうな様子。

ちらりと、ちよこ先やフブキ先輩の様子を確認すると、あちらもこちらの気配を探っ

ているようだった。

言いつらいなあとぼんやり思う。

「説教みたいな事をしておいてあれだが、俺は正直そう難しく考えなかったよ。最低限の自衛が出来るから、っていうのもあるけど。離れる選択肢は無かったし、見えている物を見ないふりするのは苦手だ」

「それで、危ない目にあってもですか？」

「あつたけど、だな」

「……そうですか」

ニュアンスの違いを捉えたのか、後輩が黙り込む。

俺と違って真面目らしく、しっかりと考える事に決めたらしい。

なら、この話は終わりでいいかと考えて。次の話に移る。

「もう一つある」

「なんでしよう?」

「すまなかった」

「……はい?」

頭を下げる。

謝られるとは思っていなかったらしい。

困惑した様子の後輩に、言葉を続ける。

「殴った件じゃない。生徒会室での対応の方だ。誤解させてしまって、すまなかった」

「ああ……いえ。だからって、明らかにやりすぎていましたから。寧ろ、全員一発しか殴らなくて良かったんですか?」

「ああ。誤解させたのはこっただけだから。とはいえ、やりすぎとも思うし、私怨も混ざってたから、その分はやり返させてもらったけど」

「……あの」

「ん?」

「あ、いや、こういう聞き方は悪いと思うんですけど、謝るならどうしてあの対応をしたのですか？」

「どうして？ いや、すいちゃんに楽しい学生生活を送って貰おうと。その為に……あれ？」

何であんな対応取ったのだろう。

行動意図は、すいちゃんに楽しい学生生活を送って貰う為……？

「——違うな」

「え？」

いや、正確には全部嘘ではない。嘘では無いが、全部すいちゃんの為、という訳でも無い。

自分でも気づかなかった根底。自分の心中の、奥の奥。

「うわー！」

わしゃわしゃと、八つ当たり気味に頭を搔く。

くそ恥ずかしい！ 死にたい！

「せ、先輩？」

「……よし」

「情緒やば」

感情を切り離して落ち着き、俺は立ち上がった。

そしてすぐに座りなおした。

「後輩」

「な、なんででしょうか？」

「俺を殴れ」

「急すぎませんか？」

「俺も私怨でお前らに酷い態度を取った」

「私怨？ で、でも、みたらしにお願いした身なので、それでトントンなんじゃ？」

「いや、あそのこの2人はともかく、お前さんにはまだ殴られてもいない。だから頼む」

「この先輩、面倒くさいな」

失礼な事を言われた。分かりましたと、うなづいて。後輩は手を上げる。

「グーは苦手なので、パーでいきますね」

「どんとこい」

歯を食いしばる。そんな俺に、平手が振り下ろされた。

「パーン！」 といい音が鳴る。そのせいで、ダメージはあまりなかった。

「ありがとう。すつきりした」

「僕は少しモヤモヤしてます」

「それでいい。人を殴ってスッキリなんて、しない方がいい」
立ち上がる。時計を確認した。

現在4限途中。学校自体が終わるまでには、あと3時間強、4時間弱位か。

「ちよこ先。俺、病院に行くので早退します！」

「……まあ、一応診て貰った方がいいから、本当に病院へ行くなら、早退も許してあげるけど」

訝しむ表情を浮かべるちよこ先に、俺は胸を叩いて見せる。

「任せてください！」

「……信用出来ないから送るわね」

「お疲れ様でした！」

「こら！ 逃げるな！」

傍らの鞆をひつつかみ、走って保健室を後にする。

仲直り大作戦には、兎に角時間が無い。

スマホを取り出し、電源を入れ、連絡を入れたい相手を選び、発信ボタンをおした。

体内魔力を練る。

別にそのままでも大丈夫だが、体外でより使いやすくする為の事前準備的な物だ。

練った物を放出し、体外にて陣を描く。

普段なら何気なく、一瞬で組むものを、丁寧に一画ずつ。

存外、そう言う事の中にも新しい知見があったりすることを、シオンは知っていた。

——もう少し。

ゆっくり、慎重に描き進めていく。

そうして出来上がった図の中へ、今度は1文字ずつ言葉を書き込む。

これは、魔法の効果を示すものだ。発生現象や範囲、時間など、それをここで示していく。

とりあえず、研究だから少し長めに効果を取ろうかと、そう考えたところで。

P r r r , P r r r

「……」

スマホが鳴った。

無視してやろうかと思いつつも、シオンのスマホに連絡する者は限られる。

仕方なく、組んでいた陣を廃棄して、シオンはスマホにでた。

「もしもし」

『急にすまん。今いいか?』

「良くない」

『そうか。頼みがあるんだが』

「……」

良くないと言ったのだが。家主の少年は、シオンの言葉を無視して話を進める。

『必要な物があるんだ。荷物が大きくなる。付き合ってくれ』

「あんた、学校じゃないの？」

『ふけた』

さぼったらしい。

らしくないなと思いつつも、つまりそれだけ、重要な事なのだろうとシオンは考える。

「分かったわよ。それで？ どこに向かえばいい？」

『ホームセンター』

「……はい？」

転校初日、シオン

「……で？」

「ん？」

「何を買いに来たの？ それに、なんでそんなボロボロなわけ？」

場所を移動し、病院——ではなくホームセンター前。

俺が着くと、シオンは既についていて、自販機脇で飲み物を買って屯していた。

声を掛けながら近づくと、上の通りに声を掛けられたのだ。

「そんなかな？」

「少なくとも、何事も無く帰って来た様子では無いでしょ」

溜息をつき、シオンは周囲を見渡すと、えいやと魔法陣の中に手を突っ込んだ。

数秒で引つ張り出したのは、俺の上着。それを俺へと差し出してくる。

「ん」

「悪い、助かる」

制服のジャケットを脱ぎ、上着に着替える。

ジャケットは、シオンの魔法陣の中へ、ぽいと捨てられた。

「さっさと帰りたいし、買い物するのなら、さっさと終わらせましょ」

「ああ。悪いな。流石に大荷物になりそうで、持ち帰れなさそうだったから」

共にホームセンターへ入る。

買い物カートに籠を入れ、店内マップをチラ見して、大体の場所を把握。其処を目指す。

「で？ 何を買いに来たわけ？」

「DIYの材料とか道具とか……その他色々」

「……は？ DIY？ そんな趣味あった？ いや、そもそもそれなら、学校さぼってま
で買いに来るもんじゃないでしょ」

「急ぎで使いたくて」

「??？」

疑問符を浮かべるシオン。

そんなシオンを引き連れ、ホームセンターの中を進む。

今まで特に大作業とかはしたことが無く、最後にしたそれっぽい作業は、シオンが家に住むことになった時、彼女の部屋に置く為、バラバラに届いた家具の組み立て位。しかしその組み立ても付属のレンチで事足りた。

その後も地味に物が増えたりしているが、増えた物は誰かしらの私物でしかなく、そ

ういった作業とは無縁だった。

出来るもんかなあと、若干不安を憶えつつ、一先ずのこぎり売り場へ。

「……どれがいいと思う？」

「いや、のこぎりの善し悪しなんて、私に分かる訳無いでしょ」

「そりゃそうか」

最後に見たのは小学校の頃だった気がする。その時に見たのは、のこぎりの定番みたいな形だったが、今は細身だったり折り畳めたりと、最近ののこぎりは色々あるらしい。

大人しくスマホを取り出して、タプタプと画面を押して操作し調べる。

「んー、また使うか分からんけど、でかいのは邪魔になるか」

「アンタの部屋、物殆ど無いんだし、別にいいんじゃないの？」

「部屋にのこぎり仕舞っておきたくないなあ」

という訳で、素直に折り畳みの物を選び、籠へ入れる。

移動再開。そのまま大工道具のコーナーを回り、スマホとにらめっこしながら、釘やら金槌やら選ぶ。

籠に入れられていく道具を前に、シオンは訝しんでいる様子。

「本当にDIYの道具を買いに来てるのね」

「だからそう言っただろ？」

「アンタの事だから、自称DIYってだけで、全く関係無い物を買いに来たのかと」
「流石に無いわ」

無い……無いかな？

「後はんーと……」

指折り、購入予定の物を数える。

普段と違って勢いの買い物だから、買い忘れとか買い過ぎとかありそうで地味に怖い。

視界の端で、シオンが興味無さげに棚の商品を手に取り、暫く眺めてから戻すを繰り返していた。

「ねえ、帰ってもいい？」

「だめ。寧ろ帰る時に頼りたいし」

「荷物持ちって事？ 私、お箸より重い物持てなーい」

「持たなくていいけど、運んでは欲しい」

「運ぶって何をよ」

「これ」

最後の売り場につき、購入予定の物を指差す。

それを見て、シオンの表情が今日一番の怪訝な顔をした。

「アンタ、学校サボって、これ買いに来たの？」

「だから、DIYの道具と材料って言っただろ？」

「……配送とか」

「今日使うんだ」

寧ろ今日しか使わないまでである。

という訳で、メインの買い物である木材のコーナーである。

「えつと、この板と……シオン。太さどうしよう？」

「いや、知らないけど。え？ 設計図とか無い訳？」

「思い付きで行動しているしなあ」

「一旦止まりなさい」

上着の襟首を掴まれ引かれる。

ぐえと呻く俺をよそに、箸より重いものは持てないシオンが、片手で俺を引きずりながら、買い物中のカートを押して移動。入れていた物をさくさくと棚に戻していく。

そうして、全ての商品を元の位置に戻し終わると、そのまま売り場から出て、風除室を抜け、ホームセンターからも出る。

その足で、向かうは先程合流に使用した自販機脇のベンチへ運ばれ、其処に座らされた。

シオンがポケットに手を入れ、財布を取り出す。あまりに見覚えのあるその財布に、俺はポケットを探った。無かった。

「スリかよ」

「アンタの分なんだから、アンタの金で買うのは当然でしょ」

財布から取り出した小銭を数枚自販機へ入れて、ボタンを押すシオン。

購入したら水のペットボトルを取り出して、俺へと投げ渡す。

「とりあえず一息つきなさい」

そう言いながら、自分はリンゴジュースを取り出し、封を開ける。

おかしい。あのリンゴジュースの購入に自腹を切った様子が無かったのだが。

納得のいかない気持ちになりながら、俺も封を切つて、水を飲む。

切れた口内に染みだが、喉が渴いていたらしく、3割ほど一気に飲み干した。

「少しは落ち着いた？」

「とつても」

そのせいで、ずきずきという体の痛みも思い出したが。

落ち着いたせいで、アドレナリンの分泌が止まったのだろうか。

痛み出した頬にペットボトルを当てて、リラックスする。

「それで？」

「んー……実は——」

今朝からここまでの話を、シオンへ語る。

変に隠し立てはせず、全て。

聞き終わった後、シオンは溜息を漏らした。

「そんなところじゃないかと思ったけど」

「まじ?」

「すいちゃんと揉めた所は予想通りよ」

「殆ど分かって無いだろ」

何なら始めも始めだ。どうしてこんなドヤ顔出来るのだろう。

「で、朝からの一件は分かったけど、それと何でホームセンターが繋がるのよ」

「えーっと」

考えていた作戦を伝える。結果はペットボトルによる殴打だった。

衝撃はあったが、別に痛くは無い。

「何すんだよ」

「いや、目が覚めるかなって」

「バチバチに起きてるんだが」

「残念なのは頭だったわね」

めっちゃ失礼。

「それ、効果あると思う?」

「んー……どうだろ?」

「何でこんな真つすぐな目を出来るの」

分らないと首を横に振るシオン。

「仲直りの効果っていうよりは、とりあえずここからって感じなんだよね」

「そこから?」

「俺がすいちちゃんと良く過ごしていたのって其処からだっただけだからさ。仲直りはそこか
なってる」

「ふーん?」

俺の言葉に、シオンが首を傾げる。シオンには話したことが無いから、反応は予想通りだった。

「……まあ、考えは何となく分かったけど、実際、間に合う訳? アンタ、この手の事、
やった事あるの?」

「何を隠そう、小学校の図工の時間以外でやった記憶は無い」

「無理でしょ」

無理かな。

「私だって全然だけど、最低限、寸法測ったりする必要はある事は分かるし。それすらしてないでしょ?」

「思い付きだから、設計図すらない」

「他の作戦にしましょう」

全却下だった。

まあ、話をしていて不安になつてきたから、俺もとりあえず別案を考える事に決める。

「というか、そんな難しく考えず、普通に話せばいいんじゃないの?」

「でも近づけ無さそうなんだよなあ」

「……近づけないなら、どうやって誘い込むつもりだったわけ?」

「言い方」

「睨みたいな言い方しないでよろろて。」

「まあ、昔のすいちちゃんみたいに無理矢理とか」

「アンタ達、どんな保育園時代を過ごしていたのよ」

「寝ている俺を叩き起こして連れまわす、健全な関係である。何処で寝ているも何故かバレた。」

「普通に連絡取って、家に呼べばいいじゃない」

「怒ってるから、呼んでも来てくれ無さそう」

「なら乗り込むとか」

「不味くない？」

姉街さんと2人暮らしとはいえ、アイドルの家に男が上がりこむのは、世間体的に良くないと思う。

「やっぱり学校で捕まえる方が現実的じゃないかな」

「でもアンタ、有名人なんですよ？」

「まあね」

「近づく前に妨害されたら意味無いじゃない」

「そこは……こう……良い感じに？」

「無理そうね」

無理……無理かなあ。

「すいちゃんが近づく事を我慢出来ない状況にして、後は抱えて逃げるとか」

「そんな状況作れるわけ？ それに、何処に逃げるのよ」

「んー……」

背もたれに身を預けて、空を仰ぐ。

朝と違い、曇天に覆われた空が見えた。

まるで俺の心の様と、ふざけたことを考えた直後、水滴が俺の額を叩く。

そのまま継続して、2度、3度と叩かれ、やがて雨へと変わる。

「わっぷ」

慌てて身を起こす。シオンの方を見れば、ちやつかり傘を差していた。

さつきまでは持つていなかったから、この一瞬で取り出したのだろう。

「俺の分は!？」

「近くに無かったのよ」

「じゃあ、せめて入れてくれませんか!？」

「仕方ないわねえ」

このクソガキという思いを心中に押し込めて、立ち上がってシオンに近づく。

差し出された傘を受け取り、シオン側に傾けて差す。

「今日降水確率10%位だったんだけどなあ」

「なら、通り雨じゃない? 直ぐに止むでしょ」

「それもそうか」

傘を雨粒が叩く音を聞きながら、空を見上げる。

曇天はそんなに厚くは無い様で、確かに直ぐに止みそうだ。

——雨か。

そういえば、あの日も雨だった気がする。

まあ、雨に加え、暴風が吹き荒れ、雷鳴が迸る、季節外れの台風の様な状況だったけど。

「……そうか。あそこがあつたな」

「え？」

「すいちちゃんを連れ込む場所」

「言い方」

シオンのツツコミを流しつつ、算段をつける。

「——ん。よし、逃げきれば行けるな」

「……」

呆れ顔のシオン。そんな彼女へ笑って返す。

「ありがとな。付き合ってくれて。夕飯は期待してくれ」

学校へとんぼ返ししようと考え。傘をシオンへ返し、走り出そうとする。

「待って」

そんな俺の服を襟を、シオンにがっしり掴まれた。ぐえ、と再び息が詰まる。

「何んだよ？」

「その前に病院に行くわよ」

「……」

何故それをするか俺に、差し出されたスマホ。

ちよこ先からのメッセージが表示され、其処には俺が先程説明した顛末に加え、『病院に連れて行くように』との文字。

「いつの間に？」

「アンタからの連絡来た直ぐ後」

「やだやだやだ！」

「子どもか」

ずりずりと引きずられ、そのまま再度移動を開始。

通り雨だったらしく、いつの間にやら雨はやみ、雲の合間から光が照らしていた。

「……なあ、シオン」

「何？」

「夕飯何が食べたい？」

「……考えとくー」

転校初日、すいせい

「よーし、終わりだー。集まれー」

体育教師のその言葉に、持久走をしていた面々が次々に速度を落とす、やがて徒歩へと変わる。その中の一人に、すいせいも居た。

すいせいは少々切れた息を整えつつ、顔に滲んだ汗を拭いしつつ、自らも体育教師の方へ向き直る。

体育教師の向こうに、ホロ学の校舎が見えた。そのサイズは、転校前にすいせいが通っていた高校よりも大きい。昨晚、幼馴染との帰宅中、マンモス校であるという話は聞いていたが、正直すいせいの想像以上であった。

こんなに人が居れば、色々な人が居てもおかしくないと思える。すいせいの考える限り最もマイペースな彼の価値観を、変えうるだけの影響を与えられる人も、居てしかるべきか。

——いや、そんなことも無いか？

すいせいが幼馴染と最後に会ったのは、そもそも保育園の卒園式前日だ。

その日は土曜日だった。まだ肌寒さが残る中、それでも春の麗らかな陽気を感じさせ

る日和に包まれていたその日。当時まだ少年だった幼馴染は、すいせいの家へ遊びに来た。午前中はすいせいの練習に付き合わされ、お昼を食べた後は少しゲームをしてから、公園へ遊びに行き。そこで、ボール遊びをしていたいじめっ子達と鉢合わせ、始まったのは壮絶な公園争奪戦という名のドツチボール。

『くたばれー!』

『しねー!』

語彙が貧弱故の直接的な罵詈雑言飛び交う酷い戦いは、少年の顔面へボールをぶつけられた事に切れたすいせいによる蹂躪にて終わり。無事公園を勝ち取った2人は、のんびりブランコに揺られてから、帰路へとついた。

夕暮れの照らす、オレンジの道。カラスの鳴き声とすいせいの鼻歌の響く帰り道。2つの長い影が並んでいて、それぞれが途中で枝分かれし、その先が繋がっている。よくある光景、いつもの光景。すいせいも少年も、ずっと続くと思っていた光景が広がる。

『そういえば、すいちゃん』

『なに?』

ただ、その日は珍しく、基本聞き手に回る少年が、すいせいへと口をきいた。

何か感じ取ったのか、すいせいの手に力がこもり、繋いでいた少年の手が強く握られる。

ただ、すいせいは無意識であったし、少年は痛みを訴える事はしないから、そのことに触れられることは無いまま、少年は淡々と言葉を続けた。

『昨日聞いたんだけど、明日引越するんだって。ぼく』

『……引越してなに？』

『さあ？ わからない』

『明日卒園式よ？ それにお祝いだってあるんだから。分かってる？』

『うん。だから、そのあとじゃないかなあ』

『当たり前でしょ。あなたの好きな唐揚げだって、用意するんだから』

『唐揚げ好きー。楽しみー』

早々、意味の分からない引越しという言葉は流れ、2人の話は卒園式後に行うお祝いの話へ移った。生憎、両親との会話が基本的には無い少年は、当然すいせいとの約束を伝えてはおらず。伝えていたとして、叶ったかどうか分からないが。結局、少年が参加することのなかったそのお祝いの席において、折角ならケーキも食べたいとか、一晩中ゲームがしたいとか。そんな小さな願望を話しながら、少年はすいせいを家まで送り届け。

そうしてその日、保育園最後の帰り道は終わりをづけ、先日再会するまでの10年近く、すいせいは幼馴染に会わず、話す機会も無かった。

——10年か。

それだけあれば、人も変わるといふもの。どれだけマイペースでも、多分時間には叶わない。

「よし集まったな。じゃあ、授業終わるぞ。お疲れ様」

『お疲れ様でしたー』

形式ばらない適当な挨拶を済ませ、授業を終えた生徒達が更衣室を目指して歩きだす。

授業開始前同様、その流れに乗って、すいせいも移動する。案外流れに乗って歩けば、目的地には着くよーというのも、昨晩幼馴染から教わった転入時のコツであった。

その時は、この私がボツチになるわけないだろうと高を括っていたのだが。事實は小説よりも奇なりだ。

とはいえ挽回しようという気持ちも特に起きぬまま、更衣室へ。すでに中では、先についていたクラスメイトの着替えが始まっている。すいせいもその中を抜け、荷物を置いたロッカーを開ける。

借り物のジャージと体操服を手早く脱いでロッカーへ投げ込み、制服を着こむ。リボンやスカートの裾などを整え、ジャージと体操服を軽く畳む。これらは保健室からの借り物らしいので、後で保健室へ持って行く必要があった。

保健室の場所を覚えていないから、面倒臭さを感じる。とはいえ返さない訳にはいかないから、せいせいは大人しく体操服とジャージを抱える。返却自体は今日中でいいから、放課後、学校見学がてらに返しに行けばいいかと考える。

廊下へ出た所で、授業終了のチャイムが鳴った。やばいと思い、慌ててせいせいは小走りに教室へと戻る。

「――ふう」

教室に入り、一息。自席へ戻り、体操服とジャージを置き、鞆からお弁当箱を取り出す。

――どうしようかしら。

廊下の方を見て、着々と集まる野次馬を見て、顔を歪めそうになるも、それを耐える。何かルールを定めたのか、今一步足踏みしているのか、教室の中までは入って来てはいるが、出たら出たで掴まりそうだ。

――何で転校初日に教室に軟禁されなきゃいけないのよ。

本来なら校内見学とか、そんなイベントが発生しそうなのに。

まあ、そのイベントを最も発生させそうな者は、早々に居なくなりはしたのだけど。

「……」

自分で考え、心中にて溜息を漏らす。

一先ず外に出る事は諦めて、すいせいは席へと戻った。

このまま食事の時間が無くなるのも嫌なので、大人しく星柄のお弁当箱の包みに手をかける。

「ねえ、星街さん」

「ん？」

声を掛けられ、振り返る。

隣席の1つ後ろ。髪色は自分よりやや明るい青色の髪。すいせいの為に、体操服を借りて来てくれた、このクラスの委員長である。

そんな彼女が、にこにここと笑いながら、すいせいを手招きしていた。

「良かったら一緒に食べない？」

「……別にいいけど」

断る理由は特に無かった。

お弁当箱を手に席を一つずれ、幼馴染の席へ。

椅子の前後を入れ替え、着席。声を掛けてきた委員長へと向かい合う。

「さつきは体操服を借りて来てくれてありがとう。でも、本当にいいの？」

「勿論。断られなくて良かった」

それは、廊下にいるギャラリィ達を指しての言葉であったが、すいせいの言葉に、委

員長は朗らかに笑いながら頷く。

その様はまるで、どこかのお嬢様の様だった。

「私、雪花ラミイって言います。このクラスの委員長なんだ。よろしくね、星街さん」

「よろしく、雪花さん。すいちゃんでもすいせいでも、好きに呼んでね」

「じゃあ、すいちゃんって呼ぼうかな。私もラミイでいいよー」

「なら、間取っていいんちよって呼ぶね」

「何処と何処の間を取ったの!? 私の名前、雪花・いいんちよ・ラミイって思ってる!」

「草」

「草じゃないんですけど!」

実際は特に深い理由なく、他のクラスメイトがそう呼んでいたから、それに倣っただけなのだけだ。

「嫌なら普通に名前と呼ぶけど」

「いやあ、まあ? 好きに呼んでくれて、別にいいんですけどお」

「そう。良かった。なら、これからよろしくね、雪花さん」

「戻るの!」

自由に喋っていいの楽だなあと、変な感動を抱きながら、すいせいはお弁当箱の包みを解いた。

対面に座っているラミイに、特に怒っている様子は無い。ただ、少しだけ唇を尖らせ、不承不承な様子は見て取れた。

折角仲良くなれそうなのに、という表情を隠さぬラミイの可愛らしさに、すいせいは好感を覚える。

「ごめんね、いいんちよ。改めて宜しく」

「——うん。よろしくね、すいちゃん」

満足げに笑い、頷いて。ラミイもすいせいと同じく青と白のお弁当箱の包みに手を掛けた。

優雅な手つきで包みを解き、蓋を開け、それぞれのお弁当が2人の目に晒される。

「すいちゃんのお弁当はなんか凄い！」

「いいんちよのお弁当はなんか凄いね」

おかずは卵焼き等シンプルながらも、中央に置かれた小ぶりなおにぎりには、海苔で顔の描かれているすいせいのお弁当。

対して、ラミイの弁当は別にデコられている訳では無いのだが、おかず一品ずつに不思議な高級感を感じる。

本当にいい所のお嬢様なのではと、そんな事を思うすいせいを前に、ラミイは「別に普通だよー」と笑う。

「じゃあ、食べよつか」

「うん」

いただきます、と、両手を合わせて挨拶をして、それぞれが自分のお弁当へ手を付ける。

「すいちゃん。卵焼きとこれ、交換しない？」

「いいよ。取っちゃって」

「ありがとう。すいちゃんも取っちゃってねー」

ラミイのフオークが、すいせいの弁当から卵焼きを持つて行く。それを頬張り、満足そうに笑顔を浮かべるのを見て、何故か安堵しながら、すいせいもラミイの弁当から、物を取る。

どうやら肉の様だった。サイコロステーキと称せばいいか。角切りにされたそのの、匂いがかぐ。複雑な香り。どう味付けされているのか、想像もつかない。

これ、美味しいだろうなど、そんな確信を得ながら、すいせいも一口でそれを頬張る。「うまつ」

途端溶ける肉。冷めているとは思えない。アイドルとして、バラエティやライブの打ち上げで、いいお肉を食べたりする機会もあるが、文字通り比にならない美味しさ。

こんなお弁当に入れるの勿体無くないかとすら思えるその味に、思わずにやけるの

を我慢出来ず、だらしない顔を見られぬようにと、すいせいは顔を隠す。

ただ、対面に座るラミイには気づかれていたようで、にこにこ笑いながら、自身のお弁当箱をすいせいへと差し出した。

「美味しかったなら、残りも食べる？」

「いや、流石に申し訳ないから」

「いいよー。ラミイは良く食べるし」

「……」

こんなにいい物をよく食べるなんて、やっぱりめっちゃいい所のお嬢様なのだろうか。

とはいえ、そう言う事ならと、お言葉に甘えて、すいせいはもう一切れ、肉を頂く。

先程と同様に一口。もぐもぐと咀嚼すると、溶けて消える。

「……やっぱり、残りも貰っていい？」

「いいよー」

はしたない事を自覚しながらも、すいせいはひよいひよいとお肉を自分の弁当箱の蓋へと移す。

残り2切れ。丁寧に食べねばと、決心を固めた。

どう食べるかの算段を立てるすいせいに、ラミイが言う。

「すいちゃんなら、もつといい物を食べてるかと思つてた」

「いや、比にならないからまじで。ラミイ様はどちらのご家庭のご息女様でいらつしやるの?」

「……アハハ!」

すいせいの言葉に、ラミイが笑い出す。存外ゲラらしく、笑いが止まらない。

何だろうと思ひながら、方針を決めたすいせいは肉を——一口では食はず、半分ほど食べて、味わい。それからご飯と自前のオカズと食べ進める。

「——ん?」

そんな自分を、笑い終えたラミイが見ている事に気が付いた。

「どうしたの?」

「……いや、すいちゃん、とのやり取りとか食べる姿とか、本当に彼そつくりだかつて思つて」

目じりの涙をぬぐいながら答えるラミイ。

その彼が誰を差しているのかは直ぐに察しがついて、少々気まずそうに、すいせいは視線を逸らす。

「そ、そんな事無いでしょ」

「あるよー。自己紹介後に私の事をいいんちよつて呼ぶようになる流れとか、ラミイ

様って呼んだり、お肉を大事そうに食べる所とか。あんな淡々とボケてくるなんて思わなかったから、よく覚えているんだ」

「そ、そう。まあでも。私、彼とは無関係だから」

「彼って言われて、直ぐにピンと来たの？ それに、今朝一緒に登校している所も見たよっ。」

「……」

ススツツと視線を逸らしながら、お肉をパクリ。辞められない止まらない。

「答えられたらでいいんだけどさ。何であんな風に言ったの？」

「……」

「お肉返して貰っちゃおうかなあ」

「うぐぐ」

ラミイの言葉にすいせいは呻き、暫しして、歯ぎしりしながら、残り1つの肉が載った蓋を、ラミイの方へと押す。

其の姿に、ラミイは以前の食事の席を思い出す。彼の時は、同じ事をしてサクツツと話してくれたのだが。まあ、あの時は何故授業中に何時も眠そうなのか、という大した質問では無かったから、というのも理由の一つかもしれない。

かなりギリギリに見えるが、すいせいの意志は固いらしい。

「んー……、まあいいけど」

本当に返して貰うつもりも無い為、蓋をすいせいの方へ押し返してやりながら、ラミイが続ける。

「すいちゃんがそういうって事は、そうなんだろうし。彼が自分の事をすいちゃんの幼馴染だと勘違いしている変人というか、危ない思考回路の人って事だもんね」

ラミイの言葉に、すいせいがピクリと反応した。気づかぬふりをして、続ける。

「委員長としては、やっぱりそんな危ない人と一緒っていうのは問題だと思っし、先生に掛け合ってあげる？」

「いや、別に……」

「遠慮しなくて大丈夫だよ。クラス委員として、すいちゃんに楽しい学校生活を送って欲しいし」

「——ッ」

バンツつと、大きな音が響いた。

クラスやギャラリー達の自然と視線が集まる。

その視線の先、音源にいるのはすいせい。次の行動への緊張が周囲へ広がる中、一息入れたすいせいが、まっすぐラミイを見た。

「ごめん、よろけちゃった」

「いいよ。大丈夫」

お互いに笑顔。それを見て、何だそんな事かと思ひ、周りは興味を失う。

むろん、その異様さに気づいた者も、居なくは無いが。そういつた者でも、この状況で首を突っ込もうとは考えなかつた。

一方、全員の興味が逸れたのを感じ、すいせいは机を叩いた手をひらひら揺らして冷ますと、残りのお肉を、そのまま勢いよく口の中へ放り込んだ。もぐもぐとしっかり噛んで、飲み込む。

その様に、ラミイは呆れ顔を浮かべた。

「なーんで、そんなに怒るなら、あんな風に言つたんですかねー」

流石にあんな態度を取つた以上は隠せるとは思わないが。

それでも最後の抵抗として、すいせいは口をつぐむ。

「委員長としてはすいちゃんだけじゃなく、彼にも楽しい学校生活を送つて欲しいんですけど」

「……それは、私もそう」

「え？」

諦めたのか、我慢しかねたのか。何処か拗ねた様子で、唇を尖らせるすいせい。

そんなすいせいの出した小さな声を、ラミイはしっかりと捉えていた。

「私だって、アイツの学園生活を滅茶苦茶にしたい訳じゃない」

「……」

「そんなつもりは無かったのに」

お弁当の残りを食べきり、すいせいは静かに箸を置く。

落ち込みを見せるその顔に、流石に踏み込み過ぎたかなと、ラミイは反省しながらも。

ただ一点。確認するために、口を開く。

「すいちゃんは、彼とどうしたいの？」

「……私は——」

転校初日、道中

「……とりあえず、大丈夫そうだね」

肩のレントゲン写真やエコー写真を見ながら、見慣れた巻き角のドクターが、そう言った。

「骨折は無し、筋肉と神経も大丈夫そうだ。ただ、脱臼を自力で治すのは感心しないから、応急処置はして、しっかりと外れたままで病院来てね」

「せめて気をつけるようにって言いませんか？」

「君の場合はそもそも怪我するなっていう方が無茶でしょ？」

「……」

人の事を何だと思っているのか。

「紫咲さんも注意してあげてね」

「いや。私、こいつの保護者とかじゃないから」

「寧ろ俺が保護者ですけど」

「……気を付けてあげてね」

「あ、はい」

残念ながら頷くまで進まなそうなので、シオン共々、素直に頷く。

「はい。じゃあお大事にー」

ひらひら手を振るドクターに頭を下げて、シオン共々部屋を出る。

「あの人、結局何の先生なんだろうな」

「さあ？」

来る度にお世話になっているが、相変わらず謎だ。

「さて。とりあえず俺は学校に戻るわ。すまんが払つといて貰えるか？」

「——手を出して」

「ん？」

差し出すと、それを握られる。

何かと思う俺の手が、ぬくもりに包まれた。

シオンの手のそれだけではない。何か流れ込むようなそれは、魔力の流れと同じだった。

「シオン？」

「おまじない。良いから受け取っておきなさい」

「はい」

流れ込んでくるそれを受けると、成程、力が満ちてくるのを感じる。

「ありがとうな」

「まあ、保護者だからね」

「おっと、そうだった。じゃあ、保護者さん。ついでに夕飯作るのと、風呂掃除と洗濯もしておいてくれ」

「私は保護される者で保護者だから」

「それは被保護者っていうんだよ」

ツツコミを入れている間に、シオンの手が離れる。

体は軽く、力が漲っていた。服の下が包帯だらけとは思えない。

今なら後輩の先輩の拳を受けても反撃出来そう。

「助かる。これなら何でも出来そう」

「とはいえ傷が治っている訳じゃないんだからね」

「ああ」

とはいえ、体の内側には一先ず異常は無く、有るのは外側の打撲位。

それが分かっているから、シオンも強くは言っ来ない。無駄だからとも、思われていそうだが。

「それじゃあ、改めて行って来る。支払いだけ頼んだ」

「はいはい」

ひらひらと手を振るシオンと一方的にハイタッチして、俺は病院を出て走り出した。レンタルサイクルを借りること無く、そのまま敷地を飛び出す。

景色を置き去りにすると言うの大袈裟だが、それなりのハイペースで走っているが、速度の維持は出来そうだ。これなら、5限の途中、遅くても6限の頭には学校に着けそうである。色々準備をして、待ち伏せする余裕はありそうだ。

何か小道具でも用意しようかなと、そんな事を考える。

「——ん？」

視界の隅で何かを捉えた。

園内にははしやぐ子どもや、その保護者と思しき人達が居る、小さな公園。

かつて憧れ、あきらめた光景の広がるそんな公園内の片隅に、ぼつんと置かれたベンチ。時の流れを感じさせる古びた木製ベンチには、不思議と誰も近寄らず、ぼつんとエアスポットの様になっていて。

そのベンチにはある小さな存在が、肩を落として座っていた。見つけてしまった以上は無視も出来ず、俺は行先を公園に変える。

本来なら授業中の身。何故という視線に晒されながら、俺は公園内を進み、ベンチへ向かった。

「きんこつび」

声を掛ければ、白と黒の配色の、パンダ（つぼい）の精霊、きんつばが顔を上げた。初めて会った時もこんな感じの出会いだったなあと思っていると、きんつばが俺に飛びついてくる。

この飛びつきも2回目か。不意打ちでなければ、小さな体の突撃くらい、余裕で受け止められる。

「おー、よしよし。なんだ、また迷子か」

こくこくと、俺の胸元に顔を押し付けながら、きんつばが頷く。硬いだけだろうにと思いながら、きんつばの頭をなでる。

周囲を見渡す。パツと見、フレアさんの姿もノエルさんの姿も無い。流星に置いて去る選択肢は無かった。

「きんつば、そういえば、なんか遠くの相手の話をする魔法を覚えて無かった？」

以前の迷子を切っ掛けに、確かそんな魔法を覚えたという話を聞いていたし、実際に使うところも見た。

記憶が正しければ、連絡前も連絡中も、滅茶苦茶集中しなくてはいけないから、移動することが出来ない、という事も覚えている。

そして、公園での様子を見た限り、移動していかなかったようだから、連絡が出来ていないのではないかと思っただが。

そんな俺の疑問にきんつばが答える。さっきまで繋がっていたらしい。俺を見つけてうれしくなって飛びついたら切れたとも。

「なんかごめん」

俺の言葉に、きんつばが首を振る。どうも、普段の行動圏から外れてしまい、きんつば自身、場所を伝えようにも、自分がどの辺りにいるのか分かっていないらしく、この辺りは住宅街だから目立つ物は無いから、連絡がついても迎えは望み薄らしい。

次は地図の魔法とか覚えるか、スマホでも手に入れて貰うとして、とりあえず今どうするかを考える。

置いて帰るのは無し。とはいえ、一緒に待つのはいつになるか分からない。時間の余裕が、俺だって凄くある訳でもない。一旦きんつばと一緒に学校へ連れて行くのは……そっちの方がリスクがあるか。

合流の目印にしつつ、いい感じにきんつばを預けられる相手。悩んでいると、先程お世話になった巻き角のドクターが脳裏をよぎり、わための姿を思い出した。

今日も恐らく駅前にいるだろう。ここからだ、学校へ向かう道から外れてはしまいが、きんつばを預ける相手として、これほど適した相手もない。

「よし、きんつば。今から駅前に行ってわためと合流するって伝えて貰えるか？」

俺の言葉に、きんつばがびしりと敬礼を返し、難しい顔へ変わる。

むむむと力の入った表情に、魔法を発動していることを感じていると、ふわりときんつばの体が落下を始め、俺はそれを受け止める。

きんつばはこのままでいいだろう。一先ず抱えたまま、駅を目指そうと振り返る。

『……』

「……」

公園でさつきまで遊んでいた子ども達に取り囲まれていた。じつとこちらを見上げている。少し離れた所では保護者の方たちが、こちらを見てこそこそと何かを話している。

そりや、この子達にはきんつばは見えないだろうから、他所からしたら、俺は急に公園に入ってきて、空のベンチとお話をしているやばいやつだろうなど、冷静な頭がそう結論付ける。

「おにーさん、誰とおしゃべりしてたの？」

「お友達の精霊さんかな」

「どこにいるの？」

「今腕の中にいるよ」

「うそだー！ 全然いねーじゃん！」

「目に見える物だけが真実じゃないのさ」

『えー……』

ジト目、もしくは腕の中身を透視しようと試みる、熱心な目を向けられる。

お兄さん的には、知らない人とあまりおしやべりするのには感心しないのだが。助けを求め、保護者達の方へ視線を向ける。

保護者勢はイマイチどう対処したものかと悩んでいるらしい。俺の挙動が怪しいのは言うまでもないが、見た目は学生程度の歳。子ども達の方をじつっと見ているとか、隠し撮りをしている様子があるわけでもない。ただただ挙動が怪しいだけ。

人によってはそれだけで充分とばかりに通報したり、そこまでいかずとも難癖染みみた注意をしてきたりするものだけ。

ここにいる人は常識人が多いようで、警戒はすれど、難癖や通報まではいかないらしい。

本当にどうしたらいいのか分からない、目の上の瘤のような存在であることは、間違いないらしいけれど。

「とりあえず、お兄さんは急いでいるから、ここら辺でね」

こういう時は、さっさと立ち去るに限る。

一足に、ベンチを飛び越え、そのまま駆け足。左右を確認して、車通りの無い事を確認し、柵を飛び越える。

着地&ダツシユ。一息に駅前目指して走り出す。

「はえー！ すげー！ かつけー！」

うそだーの男の子のはしやく声が聞こえてくる。

懐かしい。自分もあれくらいのはしやくは、やたら足の速い人に憧れた記憶が……ないな。運動神経とかにはあまり憧れなかった。ついで俺が憧れていたのは、雲を吹き飛ばせる子だった。

——さて。

住宅街を抜け、大通りへ。

平日日中とあつても、大通りともあれば流石にある程度の人通りはある。速度を落とし、人の隙間を縫いながら、先を急ぐ。

「おっ！」

きんつばから声がかかる。フレアさんとの連絡がついたらしい。

待ち合わせの件、了解とのこと。幸い、そうはなれては居ない様で、直ぐに迎えるそ
うだ。

それなら、出会ってすぐにきんつばを渡せそうか。多少遠回りはしたが、これでもまだ余裕はある。

数段飛ばしに、歩道橋の階段を駆け上がる。そのまま転回。一気に走破しようとし

て、正面から歩いてくる相手に気が付いた。

歩道橋の横幅はそう広くない。勢い良く駆けるのは、流石に迷惑かと思ひ、速度を落とす。

しかし、全然疲れない——というと、流石に語弊はあるが、實際余裕はある。

流石、シオンのお呪いはよく効——。

『わん！』

「——！！」

タロの一吠えに、慌てて屈む。直後、頭上を、何か横切つていく。

「ほえ？」

それなりに切迫した状況の中、上から聞こえてくるのはノエルさんの声質に近い、聞き覚えがある気がする、どこか気の抜ける声。

声色から感じるのは戸惑い。急に屈んだ事に対してではなく、躲された事に対しての物だろう。

——なんなんだよ急に！

前に飛び、きんつばを抱えたまま前転。起き上がりながら、振り返る。

歩道橋の上。俺の肩から降りたタロが、勇ましく威嚇している姿がまず見え。中央付近にいる、先程すれ違った少女の姿を最後に捉えた。

黒と赤を基調とし、大量のベルトで固定されている肩だしのコート。その内に豊かな胸に押し上げられたガリーな白いタンクトップ、チエツクのミニスカート、ところどころに穴が開いたり、黄色のテープの貼られたストッキングが覗く。

その上には帽子か頭巾か、イマイチ判別の付けづらい黒地に白の楕円の意匠のある物を被り、銀髪の下顔はこれまた被り物と同じような黒地のアイマスクで隠されていた。おそらくは目元なのだろう場所が白になっていて、きんつぽと逆だなと、そんな考えが頭を過ぎる。

「しかし、物騒な物持っているな」

そんな、どこにでもいる——というややパンク過ぎる印象の受ける少女の右手には、大振りのそれ。ジャグリングのように、放り上げては受け止め、放り上げては受け止めと、あまりに扱いの軽い武骨なそれ。そういつた知識に詳しくない俺でも知っているそれ。記憶違いで無ければ、コンバットナイフと呼ばれる、立派な武器である。

「……教えてくれるなら教えてほしいんだけど、なんたつていきなり切りかかられたんだ？」

「んー……分かりません！」

「はっ。」

ひよいと投げ上げたナイフを、順手でキャッチした少女は、その切っ先を俺へと向け

る。

「さかまたは、貴方を連れてくるように言われただけなので！」

直後、さかまたと名乗った少女が、歩道橋を蹴る。

膝曲げから、一息。瞬く間に距離を詰められ、凶刃にて狙われる。

「言っていることとやっていることが違うなあ?!」

転校初日、 ???

振り下ろされる刃を、下がりに隠しつつ、観察。

一番やばそうなのは、やはりナイフ。刃渡りは15cm程。長く感じるのは、やはり刃物だからだろうか。

加えて、目元が隠れているのが厄介で、視線から狙いを読みづらい。

あれだけしつかりと覆っていれば、向こうからもこちらが見えづらいのではと思えるが、それはそれ。

実際どうか分からない以上は、考えるだけ無駄。早々に思考の外へ追いやる。

振り下ろし、刺突、刺突、振り上げ、横薙ぎ。

ナイフにあった、素早い連携。刃物に振り回されているという印象は受けない。手持ちの物が武器という認識がしつかり在り、きちんと操っている。

——わざと怪我してビビらせる作戦は使えないか。

逃げの一手を取って、撒けるのならそれが楽だが、踏み込みを見る限り、怪しい所。それに、人の多い所まで逃げ果せたとしても、日中の歩道橋とかいう、いつ通行人が

分からぬ所で仕掛けてくる辺り、そこでも容赦無く暴れないとも限らない。

そう考えると、反撃して制圧しきる。もしくは完全に引き離し戦意喪失させるかの2択と言った所。

——どっちも厳しそうだが、やれそうなのは……。

回避しつつ後ろへ跳び、手すりの上に着地。

右手に見える階段を下るか逡巡した後、更にジャンプ。さかまたの上を跳び越えつつ周囲を見渡し、歩道橋上に降りる。

「先に駅の方に行ってもいいぞ。危ないし」

俺の言葉に、きんつばは首を横に振る。そして両手を握り、意気込んで見せた。

離れるつもりは無いらしい。その心意気に感謝しながら、きんつばを左肩へ乗せる。

「タロ」

次いで、タロへ声を掛ける。

歩道橋上で、ぐるると変わらず威嚇していたタロが反転。俺の右肩へ飛び乗った。定位置についても、威嚇は辞めない。相変わらず、頼もしい。

見えていなかった頃も、きつとこうしてくれていたのだろうと、そんな事を想う。

「きんつば、内緒話出来るようにしといてくれ」

言いながら、ナイフを躲す。

生徒指導室とは違う。タロが居て、きんつばも居る。相手の狙いは正確で読み易く、戦いやすい。

躲しながら、踏み込む。

右足を前。右手を握り、顎を狙ったのアップパーカット。

ナイフの振り切り際、視界の外から行ったつもりだったが、しっかりと反応され、後退にて躲される。

——バレた。あのアイマスク、意外と視野広いのか？

そんな事を考えながら、俺は攻勢に打って出た。

ビルの屋上。その一角。

転落防止用に建てられた柵の上に、2人の陰。

片や、紫色のロングコートに身を包んだ、巨大な角を持つ少女。

片や、ワインレッドのロングコートを肩に羽織った女性。長い足をストッキングで覆い、エナメル質のタイトなミニスカートにワイシャツと言う出で立ち。桃色の髪の中に、羽の様な衣装も見えた。

それぞれ、秘密結社h o o r o X総帥『ラプラス・ダークネス』と幹部『鷹嶺ルイ』である。

「えつとー『きんつば、内緒話出来るようにしといてくれ』かな？」

「……なー、幹部」

「ん？ なーに？」

双方共に、呆れ顔を浮かべながら、h o l o X所属の研究者、『博衣こより』手製の、色々見える双眼鏡を手に、事の成り行きを見ていた。

「吾輩、アイツの事、連れて来いって言ったよなあ？」

「正確には、良い感じに連れて来い、だけどね」

「……なら、あれがしんじんのいい感じなのか？」

「まあ、秘密結社つぼくはあるねえ」

嫌がる相手を無理やり組み伏せ、もしくは無力化し、力尽くで連れ去る。

成程、文字に起こすと、確かに秘密結社つぼいかもしれない。そう望んだかは、兎も角として。

「止めようか？」

「んー……いや、いや」

言いながら、ラプラスは双眼鏡のチャンネルを弄る。

双眼鏡越しの景色の色合いが色々と変わっていく中、あるシーンで手を止める。

「お、見えた」

「なにが？」

「ん」

ルイの言葉に、ラプラスは自分のつけていた双眼鏡を渡すことで答える。

それを受け取り、代わりに自分の持っていた双眼鏡をラプラスへ渡したルイは、受け取った物を目元へ当てた。

色合いの歪な世界の中、ナイフを交わす少年の胸元に、先程までは見えなかった小さな影がある。

色味は分かりづらいが、体色の大体を白が占めている事は分かる。

「何あれ？ パンダ？」

「さーなー。まあ、あんな風に抱えているんだし、大事なものなんじゃねーの？」

興味があるのか無いのか。どこか投げやりな印象を受けるラプラスの言葉を聞きながら、ルイは自分でも双眼鏡のツマミをいじる。

その中で、ある物が見える。黒と白、モノトーンの世界の中、少年の体を流れる何か。holoX新人、現在少年と戦う沙花叉クロエの中には見えないそれは、少年の全身を巡っており、特に目元と脚に集中している。

試しにそのまま隣のラプラスを見るが、ラプラスの中にも見えなかった。その他、ぐるりと辺りを見れば、少年同様の者も居れば、違う者もいる。

「どしたー?」

尋ねてくるラプラスへ、双眼鏡を返すルイ。

それを覗いたラプラスが、不思議そうに首を傾げ、それから周囲を見て、ルイを見る。先程のルイと同じような反応を見せた後、双眼鏡を目元から離す。

「なんだあれ?」

「さあ?」

こより作の何でも見える双眼鏡。

その名にほぼ嘘は無く、物理的な距離以外は割と貫通し、観測を可能とする。

それは、こよりの技術の粋を集めた物であり、双眼鏡内部につけられた大量のフィルタの組み合わせと光量や波長などを調整する事により、通常視点から、布地を貫通した中身、果ては今の様に元来特定の手段以外では見えない精霊の存在や魔力の存在を可視化させ、観測できる。見るという一点においては、少年の持つ目の上位互換。

しかし過ぎたる力の弱点、というか欠点があり、それが今のラプラスとルイの状態である。

肉眼では観測出来ない様々な事象、それを見えるようにする事は出来る。出来るのだが、実際何が見えているのかが分からない。事前の知識が無ければ、初めて見た物の名前や意味など、分かる筈も無いのだ。

「……………これは」

「情報過多だねえ」

更につまみを弄れば、肉眼では何故か見えない子犬の姿も見えたりだし、理解疲れした2人は、大人しく摘まみを最初の状態へ戻し。

気まぐれにつまみを弄り、一先ず見えている物を理解出来る所に変えて、そこで操作を辞めた。

「さて、お手並み拝見」

正面から突っ込んだ俺に、ナイフが突き出される。

躲しながら直進。拳を放つも、こちらも回避される。

ステップ二回。間合いを詰めてのコンビネーションも躲され、返しの刺突。

顔を傾け、耳に微かな痛みを憶えながらも、これを躲しつつ、次手はボディ。

開いている左手に、止められる。

——やんな。

互いに一步、態勢を立て直すために引こうとするも、背後は手すり。

下がり切れず、それならと前進を選ぶのも、同時。

振るわれたナイフは、その手元を狙っていないし、返しに振るった右拳は躲される。

互いに引かず、相手の攻撃を躲したり防いだり。

ナイフによる一撃を狙うさかまたと、拳をふるう俺の状況は、良く見積もつて五分と言つたところだつた。

その状況を楽しんでいるのか、さかまたの口元に薄ら笑いが浮かぶ。マジで連れて帰るとは何なのかと思ひながら、振られるナイフを前に怯まず突進。

ナイフを持つ手の方を止めつつ、ボディを狙つて拳を振るうも、これは読まれたようで、止められる。

今までなら仕切りなおす所を、そのままさらにさかまたの左側へ、右足をねじ込み、大外刈りの要領で押し倒してしまおうと試みる。だが、それより早くさかまたの頭が動いたのが見えた。

慌てて動かし、発射は同時。頭突きがかち合う。

衝撃でお互いに数歩、踏鞴を踏む。

——硬い！　なんだよあのアイマスク!?

それともただ石頭なだけか。いや、あれが素なら、石頭では無く鉄頭だ。それくらい硬かつた。

倒れそうになるのを気合で堪えつつ、一度下がる。

鉄頭でも多少の衝撃はあつたようで、さかまたからの追撃は無かつた。

額にぬるりとした感触を味わいながらも、頭を振って平衡感覚を取り戻す。

——ん。

そんな中、きんつばの声が脳内に響いた。内緒話の準備が整ったらしい。

考えるだけで伝わるようなので、口を動かさずに聞きたかった事を尋ねると、出来るとの返事。

ついでに詳しい仕様を聞いておく。

『了解。合図したら頼む』

「タロ」

意図の伝わったらしいタロが、肩から降りた。

視線の先で、さかまたが動く。振り下ろされる刃を前に、後退する。

上着を脱ぎ、右手に携える。その動きの意図がつかめなかつたのか、さかまたはナイフを構えるも、詰めてこない。

——OK。睨み合いは望むところ。

呼吸を整えつつ、いざという時、即動けるように、足へ力を籠める。

じりじりとした睨み合い。それが聞こえてきたのは、ほぼ同時。

『わんー!』

タロの合図。それと同時に、後方から物音。

誰か上がってきたのか。

思わず確認のために振り返れば、誰も居ない。ただ、小石が転がるのだけ捉えた。慌てて振り返る。さかまたはもう間近。

タロの合図に一瞬気を取られた一瞬に、足元の小石を蹴り飛ばしたのか。直接俺を狙わなかったのは、躲されると踏んだからか。

……今となってはどうでもいい。次を待ってもいいが、流石に覚えていない。時間は無い。

——押し通る！

特攻を選択。可能な限り体を逸らし、さかまたの右側を抜けようとする。

既に振り始め、振られたそれを躲しきれはるはずも無く。ナイフは俺の体を裂いた。

理由は分からなかったが、相手が振り返った所を狙い、クロエは攻撃した。

それに対し、回避をしてと呼んでいただけに、突っ込んでこられることを想定しておらず。

結果、振った刃は狙いを逸れ、脇腹の辺りを斬るのみに落ち着いた。

そのまま走り抜けられる。裏を取られるも、相手は手傷を負っている。

即座の反撃は無いだろうと高を括り、振り返るクロエの顔に、何かが覆いかぶさった。

「わっぷぶ!?!」

「視界が奪われる。つけているマスクは、目元などを完璧に隠しながらも視界を一切奪わないこより製のスーパーアイマスクながら、それ以上の効果が無く、物理的に隠されれば見えなくなるもの当然だった。」

「わたたと、大慌てで被さった物を外す。一緒にアイマスクも取れたが気づかぬまま、クロエは周囲を見渡した。」

「あれ?」

「少年の影も形も無い。歩道橋から身を乗り出し、地面の方も探すが、走って逃げているといった様子も無く、歩道は普通に一般人がちらほら歩いているだけ。車道も乗用車やバスが走っているのみだ。」

「んー?」

「小首を傾げながら、やはり見当たらない少年を前に、諦めナイフをしまう。」

「どうしようかと悩む、クロエの耳に、声が届く。」

『あー、しんじん。帰って来ていいぞー』

「ラプラス? 帰っていいの? 連れ帰れて無いけど」

『連れ帰る気あったのかお前』

「ありましたー!」

『……まあいいや。マスク忘れるなよ』

「ほえ？」

何をとついながら、クロエが顔を振れば、あつたはずのマスクの感触が無い。

下を見れば、自分に覆いかぶせられた上着と共に、落ちていた。

慌てて上着共々拾い上げ、マスクの埃を落とし、装着する。視界は変わらないが、装着の感触はあり、一安心。

上着はどうしようかなと思いつつ広げてみる。黒一色の、これと言って装飾の無い物だが、サイズも丁度良く、肌触りは良かった。

「部屋着にでもしようかな」

『マジかよ』

突つ込むラプラスを尻目に、上着を抱えたまま帰路につくクロエ。

そんなクロエの様子を見ながら、通信機をきりつつ「しかし」とラプラスが言う。

「あいつやるなー。昔はこんなちっこかったのに」

こーんなどいながら、親指と人差し指で作った幅を、ルイへと見せるラプラス。

それを見て、「何ならラプと同じくらいじゃなかった？」とルイが返せば、「そんな訳ねーだろ！」とラプラスは怒って返す。

「それで？　なんであんなことさせたの？」

ルイのその言葉に、ラプラスが首を傾げる。

わざとらしいその仕草に、ルイは溜息を漏らした。

「石。何で落とさせたの」

クロエは気づいていなかったが、少年が振り返るきっかけとなった小石は、ラプラスがルイに言つて、ルイの相棒であるがんもに落とさせた物だった。

あれが無ければ、恐らく少年が怪我することは無く、逃げおおせただろう。

何故態々、無駄に怪我をさせるような事をしたのか。そう尋ねるルイへ、「だって」とラプラス。

「あいつ、何か企んでるみたいだったからさ。邪魔してやろうかなって」

「邪魔ってね」

「やっぱ連れ帰つて来て欲しいだろ？」

「……」

それなら、さっさと停止させれば良かった。それをしなかったのは何故なのか。

真意を掴めず、押し黙るルイを置いて、ラプラスは柵から降りる。

「帰ろー幹部」

「……今行くから待つて」

同じく柵から飛び降りる。内では無く、その外側。結果、地上数十メートルからの自

由落下が始まる。

その最中。

「なあ、幹部」

「なに？」

「はかせと一緒に、アイツの周り、ちよつと調べてみてくんね？」

ラプラスの言葉に、ルイが言葉を返そうとするも、それを遮るように、2人を黒い霧の様な物が包む。

それが晴れると、その姿は突如と消えていた。

転校初日、異世界

山場を越えたら、また山場だった。

横たわったまま、下より感じる振動に辟易しながら、傷口を抑える。学校に戻るだけで、何故また怪我せねばならないのか。

救いは二つ。顔にしがみついたタロのお陰で、眩しくない事。それに、きんつばが何かしてくれているからだろう。

「ありがとうな、タロ、きんつば」

逃げ果せた事は2人のお陰だから、言わねばと思い、そう告げる。

すると、涙目になったきんつばにも顔に抱き着かれ、息苦しくなった。傷口が温かいのは変わらないから、何かは継続して行ってくれているらしい。

痛いのがマシになってきて、徐々に余裕を取り戻してきた。血が抜けたからかぼんやりはするが、一先ずの山場は越えたいらしい。

そうなる、気になってくる事は行先だった。

「………というか、このバスって何処行きなんだろう？」

俺が横たわっている場所。それは市内を走るバスの車上だ。

さかまたと戦っていた際、自分の居る道がバスのルートであることを思い出して、バスの上に乗れば逃げられるし、恐らく駅に向かえるという事を思いついた。

ただ、飛び降りるだけだと、さかまたに追いかけられ、バトルの場所が歩道橋からバスの上に移るだけになりそうだったし、バスの運転手等に気づかれたらバスを止められかねないので、そこをどうにかする必要があった。

そこで思い出したのが、きんつば——ひいてはフレアさんやノエルさんと初めて会った時に行った牛丼屋にて行われた内緒話の際に、フレアさんが使った人払いだった。

周りから気にされなくなる魔法と、あの時フレアさんは言っていた。それが本当なら全部うまくいくのでは。そう考えて、きんつばに内緒話出来るようにしてもらい、確認した。

結論は一応出来るとのことだったが、すっかりこちらへ注意を払っている相手がいると、その相手には気づかれるかもしれないと教えられた。そのためにお気に入りの上着を犠牲にして、さかまたの隙を作った。

肌触りいいから着心地良くてお気に入りだったのだ。中3の折、引越し前に買ったやつで、買った店は適当に入った服屋だったから、何という店の何という商品かも覚えていないせいで、買い直しも出来やしない。

だが、上着という尊い犠牲を払った甲斐あり、すっかり逃げ果せたようで、一先ずさ

かまたがバスの上に降りてくる事は無かった。

次の問題は、このバスが駅の方へ向かうのかどうか、である。流石にそれを確認している余裕は無かった。

「まあ……大丈夫だと思うけど」

市内を走るバスは、駅に始まり駅に終わる。タロにバスが来るのを確認して貰った時も、しっかりと駅の方へ向かう道を見ていて貰っていた。

稀に例外はあるが、本当に稀。流石に無いだろう。……無いよね？

不安になって、体を引きずり移動。車上から首を伸ばし、バスを確認する。

バスの柄から、幾つかある例外の内の一つ、そもそも市内を走るバスではないという可能性はなくなった。

次いで行先が表示される電光掲示板を見る。そもそも止まらない巡回という事は無くしっかりとバス停の名前が表示され、その最後は駅の名前になっていた。

首を引っ込め車上に戻り、横たわる。少なくとも、駅に向かわないという事態は避けられた。

後はバスから落とされなければ、とりあえずこのまま駅まで向かえる。

「……」

安堵感と血が足りないのか、横になった一瞬で意識が遠のいた。

このままだと寝落ちしかねないので、体を起こす。ただ、その動きで痛みが走り、思わず蹲る。ミオ先輩に引つ掻かれた時よりはマシだが、痛いものは痛い。それに、あの時はさっさと気絶出来たので、痛みを感じていたのも短時間だったが、今日はそういう訳にもいかない。きんつばのお陰で多少はマシだが、それでもきつい。

気持ちを落ち着けるために、深呼吸を一つ。それだけでも傷口に響くが、一先ずそれから意識を逸らし、数度深呼吸をする。

「――よし、落ち着いた」

見られていない事を良い事にシャツとインナーを脱ぎ、包帯を解く。

きんつばがぎよつととしてるのが見えた。その視線を受けながら、インナーを畳んで傷口に当て、その上から包帯を巻く。

一先ずこれで、止血はいいだろう。駄目ならその時は別の方法を考えればいい。

ワイシャツを着直して、ポケットからスマホを取り出す。時間を確認。

さかまたに捕まっていたのは10分程。場所的に、駅前に着くのは5分程度の筈。

着替えの為に家に寄りたことまで考えると、時間的に少し怪しいか。6限目には着くと思うが、手続の時間は取れそうにない。

今日、使用申請出ていたかどうかは流石に知らないから、行き当たりばったりになりそうだ。

——……まあ、いつも通りか。

スマホをポケットへ戻し、両手をつけて、空を見上げる。雨は上がっているが、雲には覆われたまま。鈍色の空であった。

見続ける気分にはならず、静かに目を閉じる。空気を切る感覚が、心地よかった。思わずふわりと、欠伸が漏れる。体の力が抜ける。頭の中が空っぽ。このままゆつくりと眠りに落ちるのが好きだ。昔から変わらない。それこそ幼稚園の頃からずっと。

『わん！』

心地の良い微睡みを引き裂くように、タロの鳴き声が響いた。

後ろから前へ上体を傾け、ゆつくり目を開ける。

もうそろ、駅であった。乗ったバスがロータリーへ入る。徐行し、やがてバス停に停まった。

扉が開き、乗客が吐き出され始める。

左右と上下を確認。大丈夫な事を確認して、俺はバスから飛び降りた。

「……………」

バスに飛び降りた時と同じような刺激を受けて、思わず悶絶する。

深呼吸を挟んで、落ち着きを取り戻して、ゆつくりと立ち上がった。

車道から歩道へ移る。そのまま歩き、人目の少ないベンチまで移動した。

腰を下ろしたところで、周囲を確認。誰も見ていない事を確認して、きんつばに魔法を解いてもらう。

「ありがとう。フレアさんは居る?」

俺の言葉にきんつばが頷き、指さした。その先にフレアさんとノエルさん、わための3人が談笑しているのが見える。

「なら、ここ。今度は迷子になるなよ」

きんつばに声をかけて、立ち上がり、背を向けて歩き出す。

一先ず家に帰って、着替えると止血をする必要があるだろう。流石に今の姿は事件性しかない。

シオンはもう帰っているだろうか。あいつのことだから、払う物払ったら、ぴよーんと飛んで帰っているかもしれない。

そうなると鉢合わせて、また病院か。流石に困る。

「どうしようかなー」

「えい」

刺激。激痛。

「~~~~~!!!?!?!」

「あ、本当だつたんだ」

「ふーたん、何やってるの?!」

「いや、見た目普通だったから。きんつばに誑かされたのかなって」

「そんな必要無いでしょ!」

閑話休題。

「いやー、本当にごめん。大丈夫?」

「正直殺意は沸きました」

「ごめんってー!」

きんつばと別れた後、すぐに追いつかれた俺。

実際に怪我をしている事と、血塗れの服を見たわためがテンパった事もあり、俺はノエルさんに担ぎ上げられ、駅前から移動。自宅へと戻ってきていた。

ノエルさんのパワーは知っているつもりだが、実際俵の様に持たれて移動させられると、感心なのか恐怖なのか、良く分からない感情を覚えてしまう。

幸いきんつばにより、再度魔法は展開されていた為、目立つことは無かったから、それだけは良しとする。

「シオン?」

帰宅し、声を掛けるも反応無し。シオンの事だから、転移魔法でさっさと帰ってきているかと思っただが。

俺はフレアさんとノエルさん、きんつばをリビングまで通す。

「本当に病院に行かなくていいの？」

「大丈夫です。きんつばも何かしてくれていますし、とりあえず止血さえしとけば」

「救急箱持ってきたよー」

わためがばたばたと走って戻って来る。

「じゃあ、私が巻いてあげようかな。服脱いで」

フレアさんが立ち上がり、わためから救急箱を受け取る。

まあ、自分でするよりはして貰った方がしつかり巻けるかと思い、素直にお願いする事に決めた。「お願いします」と告げ、俺はシャツを脱ぐ。

つけていた包帯を外し、止血ガーゼ代わりにしていた肌着を外す。くつついて、はがすのが少し痛い。

だが、肌着を？がした所で、そこから血が流れ出ることは無かった。

どういう原理なのだろうと思いつながら、フレアさんの方へ視線を向ける。フレアさんは、どこから取り出したのか、乳鉢に葉っぱやら木の実やらを入れ、それをゴリゴリと潰していた。

「それは？」

「ポーシヨン」

「……」

子どもが作る思いつくままにするお料理ごっこにしか見えんと、そんな感想を抱く俺の前で、しつかり潰され、ペースト状になった曰くポーションが、ガーゼにたっぷり載せられた。やはりというか、俺に使うらしい。勘違いであつてほしかった。

「あの、やっぱりー」

「ノエル」

ばちんとフレアさんが指を鳴らすと、いつの間に背後に回ったのか、俺はノエルさんに羽交い絞めにされた。

背中当たる2つの大胸筋——に意識を奪われたのは一瞬。

己の大胸筋に弾かれそうな俺の身体を抑える為、ノエルさんはその膂力を持って俺の腕の付け根辺りを掴み、自分の方へ引き寄せていた。

それが結果として、腕のあり得ない方向へと曲げられる結果となる。早い話、両肩が極められるような形になった。

「いだだだだだ！ ノエルさん！ 痛いです！」

「大丈夫！ フレアのポーションは効くから！ 直ぐに良くなるよ！」

「ノエルさんが腕を放してくれたら、解放されるんですけど!?!」

「そしたら君、逃げちゃうでしょ！」

「そういう意味じゃないですけど！」

ぎやいぎやい言い合っている間に、ポジションと思しき何か塗られたガーゼが、俺の傷口に当てられ、テープで固定された。

「よし。ノエル、放していいよ」

「はい」

両肩が解放される。本日2度目の脱臼に襲われかけた右肩を中心に、両肩の無事を確かめる。

そんな俺に、「包帯巻くねー」とフレアさん。前かがみになり、ガーゼを抑えるようにくるくると包帯が巻かれていく。

「それにしても、君、結構傷多いね。意外とこの世界も物騒なのかな？」

「そんな事無いのでは？ 今日傷以外は、一部を除けばやんちゃ時代の傷の手当てをきちんとしていなかったから、跡になっただけの物が多いですし」

「白昼いきなりナイフを持った謎の人物に襲われる世界は、普通に物騒じゃない？」

「……あれ？」

俺が自分の常識を疑っている間にフレアさんの作業は終わった。

しつかりと巻かれた包帯は、自分で巻くよりよほど上手い。体を動かしても、ほどける様子は無かった。

「大丈夫そう?」

「はい。ありがとうございます。大丈夫そうです」

「そっか。なら良かった」

笑みを浮かべるフレアさんへ、笑って返す。

傷口周りがほんのり暖かい。まるで、先程まできんつばに何かされていた時と同じような感じだ。

「ちよつと暖かいのは、きんつばの魔法ですか?」

「そうだね。さつき塗ったポーシヨンは魔法の維持をする触媒なんだよ。それで、きんつばの魔法を維持してる」

「成程」

「ちなみに、きんつばの魔法は傷口を塞ぐことは出来ても、流れた血を戻す所までは出来ないから、そこは輸血なり、何かはしてね」

「はい」

「後、傷口を塞ぐって言っても、魔法による欠損部の補助と自己修復の強化だから、激しい動きは駄目だからね」

「わかりました」

こくこく首を縦に振る。正直触媒の辺りからちよつと難しくて分かっていない節は

ある。

とりあえず、激しい運動は駄目らしい。どのレベルだろう。

うーんと悩んでいる所に、ぱたぱたとわためが再び、戻って来る。

「着替え、持ってきたよー」

「ああ。ありがとう、わため」

わためが持ってきた、予備の制服を受け取る。

着替えようとして、手を止める。流石に、フレアさんとノエルさんの前では着替えられない。

そんな俺の様子に気づいたフレアさんが立ち上がる。

「じゃあ、私たちはお暇させて貰おうかな。きんつばの事、いつもありがとうね」

「いえ。自分も助けられているので」

「あと、くれぐれも無理はしない事」

「はい、気を付けます。ありがとうございます、フレアさん」

「じゃあ、またねー」

「はい。ノエルさんもありがとうございました」

2人を見送り、わためと2人になる。

「わためはどうする？ 俺は学校に戻るけど」

「うーん、改めて駅まで戻るのもなあ……って、学校戻るの？」
「ああ」

着替える前に、少し汚れを落とそうかと洗面所に向かう。

そんな俺の後ろを、わためがついてくる。

「酷い怪我だし、病院に行かないにしても、休んだ方がいいんじゃない？ ふーたんも無理はするなって言ってたし」

「適度な運動は必要だろ？」

「それは怪我が治った後の話じゃないかなあ」

全くその通りだったので、無言で流す。

「まあやる事があるんだ。無理はしないから、安心してくれ——ズボン脱ぐぞ？」
「わー！」

ぴしゃりと、洗面所の扉が閉められる。

俺は悠々とハンドタオルを水で濡らし、体に着いた汚れを拭い落していく。

「兎に角。学校には行かせません。此処は私が死守します」

「頼むよ。帰ってきたら、わための好きな物を作るから」

「だめ！」

難しそうだ。

体を拭き終わった所で、下着と予備の制服を身に着ける。これでぱつと見は朝と変わらない。

洗面所の扉を開けると、わためが両手を広げて立ちふさがっていた。

「ここは通しません!」

「頼むよ、わため」

「だーめ!」

断固、立ちはだかる意思を見せるわため。

仕方がない。此処は一度諦めた振りをして、隙を伺おうと決め。

諦める振りの為、「分かった分かった」と返しながら、俺は自室へ戻る為に歩こうとして。

それより早く、足下に魔法陣が現れる。

「は?」

「へ?」

次の瞬間には、俺はその場を離れ、家の前へと移動していた。

ご丁寧に、足元には靴。

「サンキュー、シオン!」

急ぎ履いて、駆け出した。

始まりの夜

酷い雨の夜だった。別に台風が来ているという訳でもないのに、雨風雷のパレード。

窓は勢い良く叩かれ、がたがたと揺れているにもかかわらず、少年の興味は窓の向こうでも、近くに響くアニメ音声でも無く、自分の隣。

膝を抱えて耳をふさぐ、すいせいの方にあつた。

「だいじょうぶ？」

「へ、平気よ」

そんなすいせいの言葉を咎めるように、稲光が煌めいた。すいせいがびくりと肩を震わせて、縮こまる。

ゴロゴロという雷の音が少し間をおいてから響くのを聞きながら、少年は壁時計を見上げる。

——あと3つくらいか。

現在7時。朝では無く夜である。カバー保育園は夜間保育をしているから、こうして遅くまで園児が残る事もあつた。

少年については入園から今日、時間ギリギリの10時まで此処にいるから、すっかり

慣れた物で。後どれくらいで帰って来るな—という勘定までできる程。

しかし、一方のすいせいはその限りでは無く、両親の仕事が伸びてしまったために起きた、初めての夜間保育。

園のイベントとして、皆でお泊りといった経験は今までにあつたものの。こうして2人で残されるのは、初めての経験だった。

これで、隣にいるのが姉であればまだもう少しの余裕もあつただろうが。生憎隣にいるのはクラスでも変わり者と称される、全く話した事の無い男の子。

素直に甘える事も、話をして気を紛らわせる事も出来ない相手。結論すいせいには、1人で耐える以外の選択肢は無かった。

強く強く耳を塞ぎ、目を閉じ、只時間が過ぎるのを待つ。

「……」

そんなすいせいの姿を、少年は観察していた。

少なくとも、少年にとっては雨も風も雷も当たり前前の物だった。

降るし、吹くし、落ちる。不定期ながらも発生するもので、発生したからと言ってどうする事も無い。

てるてる坊主も、風車も、光と音への恐怖も全て無駄。ただ粛々と、終わるのを待つだけのもの。

だからこそ、すいせいの反応は、何というか少し新鮮だった。

すいせいが何に怖がっているのかは分かる。ただ、怯えてどうにかなる訳はない。雷が終わるまでこうしているつもりだろうか。

大変だなど、そんな感想を抱きながら、テレビへ視線を戻す少年。

直後、テレビの傍にある窓の向こうが、一際輝いた。

バチツ——。

「ん？」

「ひっ!!」

雷鳴轟き、それとほぼ同時に、園から光が消えた。

闇に包まれたことに気が付いたのだろう。か細い悲鳴を上げ、更にすいせいが縮こまる。

少年は片側に置いていたテレビのリモコンを手に取り、主電源のボタンを押すも、反応は無い。

——電気つかなくなる奴かな。

停電という名前は知らなかったが、少年には心当たりがあった。

以前、家で一人留守番していた時に陥った、似た事象。雷によりブレーカーが落ち、電気がつけられなくなった。

暗闇の中、ぶついたりぶつかつたりしながら、壁のスイッチまでたどり着くも、電気は着かず。

その時はブレーカーという物を知らないから、真つ暗の中、時折輝く稲光、響く雨音や雷鳴を聞きながら、一晚を明かした。

翌日、帰ってきた母親がブレーカーを上げる姿を見て、そこでも電気が付くようになるのかと思つた記憶がある。

——とりあえず見に行つてみようかな。

ブレーカーの存在を知つた翌日、園のブレーカーの位置は見つけていた。今いる部屋から、少し離れているが、たどり着けないことは無いだろう。

さつさと電気を点けに行こうと思ひ、少年は立ち上がった。歩き出そうとした所で、ズボンを引かれる感覚に、足を止める。

「ど、どこ行くの？」

震える声は、すいせいの物だった。

「でんき、つけてくる」

「暗くて、危ないじゃない。園長先生、直ぐに来てくれるでしょ」

「でも、まわりもまつくらだから、えんちようせんせいのいえもまつくらじゃない？」

そう言われて、すいせいが窓から外を見れば、確かに辺りに光は無かつた。

民家から漏れる生活感溢れる光も街灯からの光も何もかも。完全に真つ暗である。

「それに、つけなきやくくらいままだし」

「……」

何てことは無いとばかりに答えた少年の言葉。その言葉に、すいせいは言葉に詰まり、やがて立ち上がる。

すいせいは少年の身体を手で探り、やがて少年の手を見つけると、その手を両手でしっかりと握った。

「わ、私も行くー！」

「べつに、まっつていいけど」

「行くのー！」

少年は、握られている手からすいせいの震えを感じていた。

怖いから、1人にするなという意味か。しかしそれだけにしては、声が強い。

訳も分からぬまま、まあいいかと少年は「わかった」と首を縦に振り、歩き出した。

まるで見えているのかと思わずにいられない、恐れ知らずの堂々とした一歩。探りながらという雰囲気はない。

引つ張られたすいせいは、つんのめつたものの転ぶことは無く、少年の足取りに追いつく。

「見えてるの？」

「え？ ぜんぜつ」

ガツつという音が、今度は少年の足下から響く。

「だ、大丈夫!？」

「足ぶつけただけ」

「……もうちよつと気を付けて歩いた方がいいよ？」

「でもみえないし」

「ゆっくり進めばいいんじゃない？」

「……」

すいせいという言葉に少し考えた少年は、言われた通り、ゆっくり歩き始める。

まあこれくらいならと思いつつ、すいせいは少年の後を続ける。

ガンという音が、少年の元より響いたそれからすぐであった。

「大丈夫？」

「ぶつけただけ」

「だけなの？」

そう言うのと、少年は手を伸ばした。ぺたぺたと触る。どうやら壁らしい。

何となくの場所の見当をつけ、手さぐりに壁を探ると、電気のスイッチを見つけた。

ぱちぱちと数度弄るが、電気は着かない。

「電気、点かないの?」

「そうみたい」

やはりブレーカーかと思ひ、少年は再び歩き出す。戸惑うせいだが、その後を追つて、歩き出す。

「ど、どこ行くの?」

「ぶれーかー」

「なにそれ?」

戸惑うせいせいで置いて、少年は扉を開けた。

遠くに非常灯がぼんやりと輝き、緑色の光で通路が照らされている。

通り慣れている筈の通路が、遠くから聞こえる雨音や雷鳴などの環境音と合わさり、異様な雰囲気に含まれている。

少年の手を握るせいせいの手に力が籠る。それを感じ取り、少年が振り返った。

「まってる?」

「行くに決まってるでしょ」

そういう事ならと、少年は歩き出す。がちがちのせいを連れてくるから、自然と足取りはゆつくり。

これなら一人の方が楽だなあと、ついそんな事を思う。

「ねえ」

「ん？ なに？」

すいせいに声を掛けられ、少年は反応する。

「怖くないの？」

「なんで？」

質問の意図が分からず、尋ね返す少年へ、「だって」とすいせい。

「普通に歩いていているから。怖くないのになって」

「んー」

すいせいの言葉に、少年は声を上げる。

悩んでいるのだろうか。非常灯のみの廊下では、少年の姿は見えづらく、すいせいからは判断がつかない。

しかし声を上げた少年は、その間も足は止めることなく、歩みを進めていた。その様子に、すいせいはやはり怖くは無いのだろうと判断を下す。

不意に、少年が足を止めた。

そんな少年の背中にすいせいはぶつかる。

何事かとすいせいが少年を見れば、暗闇に慣れたすいせいの瞳は、壁を見上げる少年

の姿を捉える。

「——あった」

すいせいも少年の視線を追い、壁を見上げた。

上の方。天井近くに、箱のようなものがついている。

あれが目的なのかなと思いつながら首の疲れたすいせいは視線を落とし、今度は床近くで何か見つけた。

少年の手を放し、近づく。棒状のそれはどうやら懐中電灯の様だった。

外せるのかと思いつ、えいやと引つ張れば、思ったより簡単に外れた。

手探りに電源を探し、スライドさせると、問題無く点灯した。そのまま少年へと向ければ、少年は眩しそうに顔をしかめる。

「まぶしごと」

その言葉は少し不機嫌そう。そんな少年をすいせいは笑いながら、「ごめんごめん」と返す。

そのまま懐中電灯の向きを、少年が見ていた方へと移した。

天井近くにあるのはブレーカーボックス。ただ少年の家にある物とは違い、悪戯防止の措置なのか、スイッチは表に露出しておらず、カバーを開けなければならぬようだった。

きよろきよろと辺りを見渡す。足場に出来そうなものも、高い位置を弄れそうな棒も無い。

「だめそう」

「駄目って?」

「でんきつかない」

「えー!」

少年の言葉に、すいせいは少年へ再び懐中電灯を向ける。

「点くって言ったじゃん」

「いってない」

懐中電灯の光に晒されながら、少年は首を横に振る。

「言った」

「いってない」

詰めるすいせいに、少年は顔を背ける。

そんな少年の顔を掴んで、強引に自分の方へと向けるすいせい。

代わりに懐中電灯の光はそっぽを向いたが、それでもお互いの表情は問題無く見えた。

すいせいが見た表情は、変わらず無表情のまま。しかし、すいせいに抑えられている

せいで、タコのような変顔をさせられている。

「…………ふっ」

思わず吹き出す。笑いを耐えながら、少年の顔を揉んで、変顔をさせていく。寄せたり離したり。あげたり下げたり。思いつくままに手を動かす。

「…………ふぁに」

少年の声を切つ掛けに、すいせいの笑いのダムが決壊した。

「あははははー！」

お腹を抱え、笑い出す。

訳が分からないという少年を置き去りに、一頻り笑うすいせい。

そんなすいせいを前にどうする事も出来ず、少年は大人しくすいせいが笑い終えるのを待った。

「——あー、笑った」

「よかったね」

納得いつていないという様子を見せる少年。すいせいは、そんな少年の手を取る。

「電気、点かないならしようがないし、戻りましょ」

懐中電灯で照らしながら、すいせいは少年の手を引き、元の通路を戻る。

ずんずんと、恐れなく進む。そんなすいせいの背を見て、少年は口を開いた。

「怖くないの？」

「吹っ飛んだ」

「ふつとんだの？」

「うん。だから次は吹き飛ばすわ」

「起きなさい」

「……」

声を掛けられた気がして、俺は目を開けた。

血が足りないのか、いまいち意識がしやんとしない。

ぼんやりした頭のまま、のろのろと頭を上げれば、望んだ姿がそこにはあった。

「おはよ、すいちゃ」

「——おはよ」

俺を見下ろすすいちゃんに、声をかければ。

何時ものように、何処かぶつきらぼうな声が返ってくる。

「何でこんな所で待ってんのよ」

「すれ違おうとあれかと思って」

「……そう」

そう言うと、すいちゃんは少し悩んだ様子を見せて。
それから周辺を見渡して。

「走れる？」

「頑張る」

差し出された手を取り、立ち上がった。

「んじゃ、行くわよ」

「おー」

俺はすいちゃんと一緒に走り出した。

転校初日、午後

隣席から抜き取ったを使い、午後の授業を乗り切つて。ホロ学は帰りのSHRの時間であつた。

諸々の説明事項を話半分に聞いたすいせいは、終わりと合わせて立ち上がった。

そんなすいせいへ、「すいちゃん」とラミイの声がかかる。

「何？ いいんちよ？」

「今日はもう帰るの？」

学校内の見学という気分にもなれなかつたすいせいは、こくりと一つ、首を縦に振る。

「そのつもり」

「一人で大丈夫？」

ちらりと、ラミイが視線を向ける。その先は廊下で、今日一番の人だかりがあつた。

ラミイにつられて、すいせいも視線を移す。いつものように向けられる、好奇の視線。

仕事中であればフアンサービスの一つでもするが、今はプライベート。視線を外すのみに留める。

「出れそう？」

「……なんとか」

人込みは仕事帰りの出待ち並み。

仕事であれば、マナージャーや警備員といった誰かが、すいせいの壁となり、道を作ってくれていた。

1人でこの壁に挑むのは、正直初めての経験である。いつそ、窓から出ようかなんて、そんな考えが少し頭をよぎる。

——いやいや。

その考えを振り払う。出来ないとは思わないが、それでも怪我をして、仕事の支障を来たすわけにもいかない。

それなら、やはり突っ切るしかないか。ただ、それも何かしらの事故が発生しかねない。

「しょうがないか」

人混みが掃けるまで、待つことに決め、すいせいは席に着く。今日はこの後用事も無い。気長に耐久戦を仕掛ければ、多少は緩和されるだろう。そうでなくとも悪目立ちして、強制的に解散させられる可能性も十二分にある。

すいせいはスマホを取り出した。真つ先に仕事の連絡を確認するも特に無し。

代わりにとばかりに別のメッセージが、幼馴染より届いていた。すばやく確認し、荷

物を手に立ち上がる。

「すいちゃん？」

戸惑うラミイを置いて、すいせいは進む。

足はまつすぐ、扉の方へ。立ちはだかる人混みの前にて足を止める。一番前にいる男子生徒が、何かを告げようとする前に、すいせいは口を開いた。

「どいて」

その鶴の一声をもって、人混みが割れ、道が出来上がった。

「すー」

どこか気の抜けたラミイの声を背に受けながら、作った道をすいせいは進む。

人混みはすいせいの教室のその隣の教室まで伸びていた。その人混みが、綺麗に左右へ割れている。

道の両端にいる生徒は、近くを歩くすいせいに息をのみ、可能な限り道を広げようとする事態。

結果、何のストレスも無くすいせいは人混みを抜けた。その足で階段を下り、右折。

足早に抜け、靴を履き替え、昇降口より飛び出す。

前方に人混み。正門の辺りだ。ざわつく声には、困惑の中に僅かな怒りを孕んでいる。

やがて、気配を感じたのか一人が振り返り、すいせいを見つけた。

すいせいの姿に何を感じたのか、隣にいた生徒に何やら伝え。その生徒が振り返り、別の生徒へ何かを伝え。

そんな連鎖の末、廊下と同様、すいせいの前には道が出来。しかし、その道に立ちただかる者がいた。

「星街さん、止めた方がいい」

勇気か無謀か。行動したその男子生徒の顔に、すいせいは見覚えがあった。

ファンなのかただのミーハーなのかは知らないが。少なくとも1限の休み時間に、あの群衆の中にいて、幼馴染を取り押さえるにも一役買っていた記憶がある。

そんな彼が止めるのだ。なら、この向こうにいるのが誰で、どんな状態なのか、察しも付くというもの。

「……ごめんなさい」

「え？ 何が？」

「彼、真正正銘、私の幼馴染なの。ちよつと喧嘩しちやつて、だからあんな事を言っただけなの」

「……」

言葉を失う男子生徒。

ぐるりと、すいせいが周囲を見渡せば、見た顔がちらほら。

正面に視線を戻し、男子生徒を見やって。すいせいは深々と、頭を下げた。

「本当にごめんなさい。誤解させるような事を言つて」

「あ、いや」

時間にして数十秒。

静かに頭を上げたすいせいの目に、明らかに狼狽している様子の男子生徒の姿が映る。

返事を待たず、すいせいは歩き出し、脇を抜ける。

男子生徒の向こう側には道が続いていた。まっすぐ進む。

そのうちぼつかりと出来ているエアスポットの中心。正門の右柱にもたれかかつて座っている幼馴染。

その正面に、腰を下ろす。反応は無い。定期的に動く肩からも、寝ているのだなと察した。

何と無しに前髪をめくつてみれば、今朝は無かった絆創膏が覗く。心なしか、制服もくたびれているように見えた。

転びでもしたのかと思ひながら、すいせいは立ち上がる。

「起きなさい」

「……」

暫しの間をあげ。のろのろと頭を上げる。

きよろきよろと首を動かし、顔を上げた幼馴染と、すいせいの目が合うと、幼馴染の少年がふにやりと笑った。

「おはよ、すいちゃ」

「——おはよ」

あんなことがあったから、幼馴染への居心地の悪さから、少しぶつきらぼうな反応を返すすいせい。

ただ、それでも気にした様子を見せない幼馴染へ、さらにすいせいはぶつきらぼうに言葉を向ける

「何でこんな所で待ってるのよ」

「すれ違うとあれかと思って」

「……そう」

すいせいのスマホへ届いたメッセージ。今朝方交換したばかりのアカウントから届いたメッセージは、一言『正門で待ってるね』だけだった。

届いたのは、6限目の中頃の時間。今の時間から遡れば、占めて1時間弱程、寒空の下に待たせていた事になる。

教室までくれば良かったのと思いつつも、そんなことされれば逃げ出すだろう自分が想像出来たすいせいは、余計な事は言わず、周囲を見渡した。

相変わらずのギャラリ。お話しするには、流石に向かない。

とはいえ、あの頃のように引きずっていくわけにはいかないから。

「走れる？」

手を差し出す。

「頑張る」

その手が、取られる。

「んじゃ、行くわよ」

「おー」

幼馴染が立ち上がるのを感じながら、すいせいはその手を引いて走り出した。

——モーゼみたい。

すいちゃんの走行に合わせて割れる人混みを見て、そんな感想を抱く。

意外にも、強引に止めたり、引き離してやろうという輩はおらず、手を引っ張られた俺は、割と不自由なく人混みを走り抜けた。

「ねえ。何処かい場所無い訳？」

先導して走るすいちゃんが、そんな事を尋ねてくる。

「分らないのに前を走っていたの？」

「こちらら、転校してきたばかりなんですけど？」

それはそうだ。

「いい場所あるよ」

「なら案内しなさい！」

「あいあい」

その為に、すいちゃんを抜こうとして。

「私の前は走らない！」

「ええ」

仲良く並んで二人三脚でもしろというのか。

大人しく走る速度を少し落とし、すいちゃんの後ろに改めて着く。

「昇降口に入らず、左にお曲がりくださいませ」

「良かろう」

言われた通り、左に曲がるすいちゃん。この調子がゴールまで続くのか……面倒くさいなこれ。

なにより途中で鍵を受け取る都合もあるし。

「ねえすいちゃん」

「何？」

「やっぱり前を——」「だめ」……はい。あ、そこ右っす」

取り付く島もない。大人しくすいちゃんの後ろをついて走る。

角を右へ。方向的には修練場などの、特殊な施設のある方角。基本的にはそういった

施設は、申請した上で鍵の貸し出しが必要なのだが。

「おーい」

頭上から声。顔を上げれば、天音先輩の姿があった。

「すいちゃんごめん。ちよつとストップ」

「ん？」

俺の言葉にすいちゃんが足を止める。

「怪我は平気？」

「はい。大丈夫です」

「そつか。ならよかった。じゃあ、投げるよー」

「ほっ」つと軽い声とともに、その手に持った何かを放る。

きれいな放物線を描き、放られたものは大体俺の方へ向かって落ちてくる。

ちよつと移動して、キャッチ。手に取ったものを確認する。

「すみません、天音先輩。ありがとうございます」

「普段色々手伝って貰っているし、これくらいはね。返却は任せてもいい?」

「はい。そのつもりだったので」

「了解。じゃあ、お願い」

ひらひらと手を振り、天音先輩が引つ込む。

その背に一礼し、事の顛末を見守っていたらしいすいちゃんへ、視線を移した。

「……随分準備いいわね」

「そもそも呼び出したの俺だし」

受け取った物をすいちゃんに見せる。

「何処の鍵?」

「この先の講堂」

修練場から更にもう少し行った先。学校敷地内のやや外れに位置する場所。

校舎から直接向かう通路が無く、また集会などで生徒を集めるには狭いそこは、時々声楽部や演劇部などが練習で使うばかりで、基本的には使われないから、2人きりには丁度いい。

それに何より、いい感じのステージがある。すいちゃんには、狭いかもしれないが。

「行く」